平成２７年度
国際日本文化研究センター外部評価委員会
外部評価報告書

２０１６（平成２８）年３月

人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

外部評価報告書　目次

はじめに　……　（１）
　　国際日本文化研究センター所長　小松　和彦

外部評価委員会委員名簿　……　（２）

外部評価委員会からの評価と指針　……　（３）
　１．外部評価委員長による要約
　　外部評価委員長　中牧　弘允

　２．各委員からの講評（意見書）　……　（７）
　　小峯　和明　委員　……　（７）
　　白石　さや　委員　……　(12)
　　フレドリック・リチャード・ディキンソン　委員　……　(22)
　　中牧　弘允　委員　……　(35)
　　尹　　相仁　委員　……　(39)
　　ジャン=ノエル・アレキサンドル・ロベール　委員　……　(43)

外部評価委員会実施状況　……　(57)

国際日本文化研究センターの諸活動について
　１．研究協力　……　1
　２．研究活動　……　7
　３．研究資料等の収集と発信　……　68
　４．研究者育成　……　76
　５．外部資金獲得状況　……　93
　６．追加資料（外部評価委員会（第１回）終了後）　……　120

自己点検報告書（平成２２年～２６年度）　……　176

はじめに

国際日本文化研究センター（以下、「日文研」）は、1987（昭和 62）年 5 月に、日本の文化･歴史を国際的な連携・協力の下で研究するとともに、世界の日本研究者への研究支援を行う目的で設立されました。2004（平成 16）年以降は、国立大学の法人化とともに法人化し、大学共同利用機関法人　人間文化研究機構を構成する機関の一つになっております。

海外の日本研究は、日本との政治的あるいは経済的な関係を反映して、成熟期を迎えた国や地域、成長途上にある国や地域、緒についたばかりの国や地域などさまざまな段階にあります。日文研は、そのような事情を汲み取りつつ、それに見合った形の学術交流・研究支援を行うことで、より正確で奥行きのある日本理解が進むように努力するとともに、研究者のネットワークづくりを進め、今日では、国内外の日本研究者にとって他の追随を許さない重要な研究拠点となっています。最近の日本研究は、グローバル化する世界の下で、地域を日本だけに限定してその文化の構造や特質を論じるだけでは十分ではありません。「世界の中での日本」、「アジアの中での日本」といった、より広い観点からの比較や文化の相互交流あるいは歴史的変容などの研究が強く求められるようになってきております。日文研は、こうした新しい状況に対応するために、従来の学問分野の垣根を越えた問題意識を大切にし、国際的・学際的・総合的な視野の下に研究することを推奨し、ユニークな課題や研究領域の開拓に努めており、これまでも大きな成果を挙げています。

日文研の主な活動のうち、共同研究は大学等研究機関の枠を超えた学際的・国際的なテーマを設定し、毎年およそ 15 班が組織されております。近年は特に、海外から熱いまなざしを受けながらも、研究としてはまだ未成熟な大衆文化の研究に力を入れております。

海外の日本研究者への研究協力や研究支援に関しては、毎年 20 名程度の海外研究者を受け入れるとともに、毎年国内外で数回の国際研究集会やワークショップを開催し、研究交流や研究情報の収集・提供等を行っており、これまでに構築したネットワークは約 50 カ国に及んでいます。また、収集蔵書や資料に関しても、蔵書資料は約 60 万点にのぼり、特に外国語で書かれた日本に関する蔵書は、世界でも類を見ないコレクションとして高い評価を受けており、また春画や妖怪画などのユニークなコレクションも広く社会に公開し注目を集めております。

日文研は 2017（平成 29）年 5 月に創立 30 周年を迎えます。これまで第三者評価委員会による事業評価（1995（平成 7）年）やロナルド・ドーア海外研究交流顧問の社会学的手法による評価（2010（平成 22）年）などを行ってきましたが、これを期に、グローバル化する世界に対応した研究機関としての機能強化を図ることを目指し貴重な助言をいただくために、日文研の研究教育事業全体にわたる外部評価を実施しました。外部評価委員会の評価と指針を厳正に受け止め、今後の日文研の運営に生かしていく所存です。

ご多忙にもかかわらず、外部評価の任に当たられた委員各位に深く感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月　　所長　小松　和彦

国際日本文化研究センター外部評価委員会委員名簿

五十音順
敬称略

○小　峯　和　明	立教大学名誉教授
白　石　さ　や	東京大学名誉教授 岡崎女子大学子ども教育学部教授
ﾌﾚﾄﾞﾘｯｸ・ﾘﾁｬｰﾄﾞ・ﾃﾞｨｷﾝｿﾝ	ペンシルベニア大学歴史学部教授
◎中　牧　弘　允	国立民族学博物館名誉教授 吹田市立博物館館長
尹　相　仁	ソウル大学校人文大学アジア言語文明学部教授
ｼﾞｬﾝ=ﾉｴﾙ・ｱﾚｷｻﾝﾄﾞﾙ・ﾛﾍﾞｰﾙ	コレージュ・ド・フランス教授

◎・・・委員長、○・・・副委員長

外部評価委員会からの評価と指針

１．外部評価委員長による要約

外部評価委員長　中牧　弘允

１．総論

日文研は 1987 年の創設以来、個人研究を基礎に据えながら、共同研究と国際研究協力を二本の柱として運営されてきた。しかし、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の構成機関となってからは、そこでの役割を担う必要性にも迫られている。くわえて、総合研究大学院大学の基盤機関のひとつでもあり、国際日本研究専攻の大学院生（博士課程）に対する教育にもたずさわっている。それらを合わせて、日本文化に関する研究と教育を国際的に展開する中核的研究教育拠点としての卓越した活動が期待されており、外部評価委員による意見書も主として以上の観点から分析・記述されている。

日文研にとって外部評価は 1995 年以来である。20 年前に指摘された点はおおむね改善されている。しかし、日文研をとりまく内外の情勢はおおきく変貌し、一方では「日本文化研究」に対する国際的関心の相対的低下がみられ、他方では理系主導の実学偏重の風潮とも相まって、人文社会系の教育・研究に対する見直しが文部科学行政の課題となっている。そうした外部環境の変化がひいては今回の外部評価につながっているとわれわれは認識している。

日文研の 30 年近い歴史がすぐれた研究成果を生み、国際的知名度を確立し、国内外で大きな影響力をもつにいたったことは、衆目の一致するところである。「国際」の名に恥じない多彩な活動も高く評価される。実際、日本研究の国際的センターとして、国内外の研究者を層序化することなく、国際的交流のなかで育まれる研究の自由を謳歌する高等研究所のような役割を果たしてきたことは称賛に値する。にもかかわらず、地球規模で展開するグローバルな学術研究の流れは怒涛の如く日文研にも人間文化研究機構にも総合研究大学院大学にも押し寄せている。

そうしたなかで日文研をあらためて問い直すと、いくつかの改善点も浮上し、また「センター」としてのさらなる課題も視野に入ってくる。外部の眼で見た評価は内部からすると必ずしも的を射ていないおそれもあるが、検討に値するものも含まれているかと思う。とりわけ①研究域・研究軸の見直しと、②スカラー（無限の未知に挑戦する学者）とリサーチャー（海図によって導かれ、正確に航路に沿って、所与の目的港を目指す調査者）の区別にもとづく学問の制度化については、その是非は内部の検討にゆだねられるとしても、もっとも重要な指摘であるとかんがえる。

まず①についてであるが、それは現在 5 つの研究域と 15 の研究軸に分かれ、日本文化の全体像を把握するための視座として設定されている。たしかにそれは日文研創設当初は盤石の体制として機能したが、個別の研究テーマに相互の連関性がほとんどみられないし

グローバル化の進展が内外の研究・教育環境に決定的な影響力をもつなかで、旧来の枠組みを維持・推進することが次第に時代にそぐわないものとなっている。端的には、ユニークな日本イメージあるいは地域研究の対象としての日本は、地域研究を超えた学際的なグローバル研究に道を譲りつつある。「日本とは何か」という問いから、たとえば「日本から見た世界とは何か」という観点へと世界の関心は変化している。それでもなお日本や日本文化の研究が実際、グローバルに重要な意味をもつことを日文研は示す必要がある。また、人事や研究活動の面でも硬直化・形骸化がみられ、研究域・研究軸の検討が課題となっている。

つぎに②についてであるが、スカラーよりもリサーチャーに重きをおく学術研究が学問の近代的制度化であり、「学問の楽園」である日文研はそうした制度化への道を拒んできたと見なされている。創設から 30 年を経ようとする現在、楽園の享受よりも学問の制度化をめざすべきであり、「基礎研究」を重視し、「開かれた制度化」を検討すべきであるというのが、もうひとつの有力な提言の主旨である。それに対し、日文研はこれまでどおりスカラーのほうを重視し、日本研究の高等研究所としてさらなる学問的自由を拡充し、内外の研究者を支援すべきであるという別の評価者の意見もある。いずれにしろ学問の制度化をめざすか、国際的に通用する高等研究所を志向するかが、日文研の選択肢として喫緊の懸案として指摘されている。

以下、項目にしたがって各委員の意見書をまとめることにしたい。

２．各論

①研究協力

研究協力は日文研設立の拠り所のひとつであり、国際研究協力は最優先の課題である。その点での評価や意見が圧倒的に多数を占めた。他方、国内の大学・研究機関や諸学会との協力関係も昨今では日文研に期待される機能として、その意義が高まっている。

a. 国際研究協力

●国際研究集会や海外シンポジウムとの取組みは高く評価される。とはいえ、開拓すべき地域としてアフリカや中東への協力が望まれる。また、国際協力における「コロニアル」なモデルを引きずっており、今後はシンポジウムよりも研究集会を増やすという方向性が示唆されている。

●日文研教員が国際学会や研究集会において積極的に参加するのみならず、重要な役割を果たすことが求められている。国際日本学会とより強固に連携すべきであるとの意見もある。

●日文研教員のなかに「有力な研究者」＝「スター」が少なくなっている。「格」を維持するためには公募だけでなく世界中から優秀な研究者を集める必要がある。とりわけ若手日本研究者の発掘と支援が重要であり、ポストドクトラルフェローのような枠を新設すべきとの意見もある。

●日文研翻訳出版協力プロジェクトに今後も期待したいが、日本語への翻訳にも意を注ぐべきである。

b. 国内研究協力

●国内の大学や研究機関との協定、あるいは国内の諸学会との連携を積極的に進めることが期待される。

②研究活動

●共同研究をはじめとする研究プロジェクトに専任教員、それも教授の占めるポストや役割が強大すぎる。日文研プロジェクトは専任教員のみで、共同研究の研究代表者にも外国人研究者は少ない

●百花繚乱に意義はあるが、日文研の「国際日本学」が何であるかわからない。共同研究相互の連携や連関に意を用いるべきとの意見や、自然科学や生命科学との連携をはかること、また地域文化研究を超えて「大衆文化研究」を顔とすべし、といったさまざまな提案がなされている。

●研究成果の蓄積は膨大であるが、それに見合う国際的知名度が低い。その要因としては、出版や学術活動における国際的な「露出度」の低さや、『日本研究』など所内出版への依存度の高さが指摘されている。その対策については、英語の出版、とりわけ外部の査読付き英文雑誌への投稿に積極的になること、日文研のホームページを活用すること、専任教員による内部出版物への投稿をひかえることなどが例示されている。

●日本文化に対するロマンチックな見方を是正することに日文研の功績があった。

●共同研究はあまり強固に縛りすぎないほうがよい。そのほうが画期的な研究成果につながる（例：共同研究「日本語系統論の現在」）。

●ログインやパスワードなしてデジタル情報にアクセスできることが望ましい。

③研究資料等の蒐集と発信

●図書資料やデータベースは非常に充実している。ただし、図書資料の利用度は横ばいである。

●英語以外の外国語で書かれた文献の多さが特記すべき特徴である。

●「妖怪なら日文研」というような特異性やテーマ性を一層もたせる必要がある

●画像データベースだけでなく影印本（写真本）などの形で公刊することもひとつの方策である。

④研究者育成

●海外の若手研究者や留学生を積極的に受け入れるべきである。外来研究員の制度はますます重要な役割を果たすであろうが、ポスドクフェローシップやサマースクールも検討してほしい。

●競争原理の積極的導入、教員人事構成の逆ピラミッド型の再検討が望まれる。

⑤外部資金獲得状況

●日文研の科学研究費採択率はけっして高いとは言えない。落ち込んでいる時期もあった。今後は基盤Ａや基盤Ｂを増やす方向が望ましい。

●外部資金を獲得して海外での研究を進めるなど、専任教員の国際的「露出度」を高めることが望まれる。

⑥その他

●マネジメントとマーケティングに意をそそぎ、海外研究交流室の強化をはかるなど、国際的な支援体制を充実させることが肝要である。

●コモンルームの活用やブラウンバック・セミナーの開催などをとおして、同僚との関係（collegiality）の強化をはかることを望みたい。

●れっきとした高等研究所をめざし、既存の機関の評価とは異なる基準にもとづく、例外的でかつ傑出した研究センターとしての発展を期待したい。

２．　各委員からの講評（意見書）

国際日本文化研究センター外部評価に係る意見書

小峯　和明　委員

はじめに

近年、文部科学省が国立大学に提示した人文学排除路線は、今や世界的な潮流である理系主導による実学偏重の極みであり、人文学の一翼を担う者にとって容認しがたいばかりか、人間文化研究機構そのものをも破壊しかねない暴挙としか言いようのないものである。委員会でも日文研の将来への危惧が話題になったが、しかし、これを裏返せば、人文学の今日的意義を問い直し、社会に向けて提起する恰好の機会を与えられたとも言いうる。

そのような状況にあって、主に人文学主体の「国際日本学」を基軸とする日文研の役割はきわめて重いものがあり、今後さらにその存在意義を内外に訴え続けていく必要がある。危機意識を梃子にどこまで「国際日本学」の役割や使命を学界や社会に訴え、浸透させることができるかにかかっている。

稿者が 80 年代から 90 年代にかけて勤務していた国文学研究資料館の側からみると、同じ大学共同利用機関といっても設立趣旨や経緯がそれぞれ異なっていたため、かなりの落差があり、地味でこぢんまりした国文研に比して、発足以降の日文研はきら星のごとき錚々たるメンバーによる共同研究とその公刊などの華々しい活動が際立ち、遙かに仰ぎ見るような存在であった。まさに日本学を世界に拓いていく国際性や学際性に満ちあふれており、強固な発信力を持っているように映ったものである。

しかし、今や時代は変わった。バブル崩壊以降の推移は次第に内向きの自閉的な文化志向をもたらし、その一面で内外の国際交流の学会、シンポジウムは一見華やかで益々盛んになっているという逆転現象がある。1995 年の第三者評価委員会報告書をみると、今日の状況との差違がよく分かり、日文研の現状をふまえた将来像をどう描くかという可能性への期待感に裏打ちされている。当時議論されていた外国人専任教員の採用などの人員組織、専任教員のみの企画によらない共同研究の多様なあり方等々、この 20 年間でかなり改善された印象を強く受ける。95 年の報告書を前提にすると、日文研の運営総体としては好い方向に向かっているとみてよいだろう。

①　研究協力

まず研究協力に関しては、海外の研究者の招聘をはじめ、海外での大小にわたる各種シンポジウム、セミナーの開催、研究資料・情報の発信、提供等々、日本研究の主導と支援が活動の主軸となり、日文研の存在意義の最重要の拠り所となっている。発足以降、日文研と関わりを持った海外の研究者は数百名を超えるから、その影響力は絶大であり、各国地域への日本研究の発展、深化（進化）に大きく寄与していることは言うまでもなく、同時に海外の日本研究が日本内部に及ぼした影響も少なからぬことをよりアッピールすべき段階にきて

いるであろう。可能な範囲で、日文研に関わった研究者の業績や成果の追跡調査を試みてはどうであろうか（内外の出版、研究の被引用頻度、研究史上の位置等々）。

とりわけ海外各地で開催されるシンポジウムは貴重な試みであり、日本学の伝統のある東アジアや欧米にとどまらず、研究上の後発地域にまでひろがっていることは高く評価される。稿者も参加したインドを主とする南アジアのシンポジウムなど画期的な試みがいくつもあり、予算他の制約もあるだろうが、今後も単発に終わらない継起的な展開を期待したい。

委員会で話題になった日文研に国内学会の後ろ盾がないとすれば、海外の各地で展開される国際日本学会とより強固に連携し、イニシアチブを取っていく方向性を打ち出していく方策が最も理にかなっているだろう。アメリカのＡＡＳやヨーロッパのＥＡＪＳなどですでにそうした試みがなされているようだが、アジアを例にすれば、中国の全国規模の学会（日本文学会など）との連携がさらに模索されてよい（韓国は日本と同じ個別学会が群立し事情は異なるが）。あるいはハノイとホーチミン市に分断されるベトナムなどでは、これもすでに試みられているように、日文研が主導して学会を組織し、継続していくべきであろうと思う。

それと同時に国内の各種学会とも連携を取りつつ、日文研が共催して学会場を提供することも肝要であろう。日文研と関わりのある国内研究者はかなりの数に上るはずだが、それでも日文研になじみがなく、活動の具体を知らない研究者も少なくない。学会の会場として開放することで、より親近感や活動への認識を増すはずである。

またあまり一般には知られていない活動として、ここで特に重視したい事業が「日文研翻訳出版協力プロジェクト」である。日本語文献の外国語翻訳への出版助成であり、稿者が多少かかわったグエン・ティ・オワイン氏による『今昔物語集』のベトナム語訳などが一例となる。とりわけ近年の海外における日本研究は各段に進展しており、翻訳の役割がきわめて重要視されるにもかかわらず、その意義や価値が対象化されることが少ない。今後もこうした貴重な試みに対する積極的な支援に期待したいが、日本の古典や研究文献の外国語への翻訳と同時に、海外の日本研究の日本語への翻訳にも意を注ぐべきではないかと思う。

翻訳を媒介にしない限り、海外の優れた日本研究が日本国内ではほとんど知られず、結果として日本側が逆に研究の進展から取り残される事態が、稿者の関わりのある分野でもげんに起きている。これには予算の措置や優れた翻訳の専門家の養成など難しい問題があるが、この「日文研翻訳出版協力プロジェクト」の一環に海外の日本研究の日本語訳も併置する方策を講じてもらいたいと思う。国際交流基金にとどまらず、翻訳をめぐる公的事業活動の推進機関として日文研の担う役割への期待は大きいものがある。いわば、海外の日本研究の日本への還元事業といってもよいだろう。今後は海外への発信とともに日本への還元を提起していく双方向からの言挙げが望まれるのである。

② 研究活動

日文研の研究活動といえば、まずは共同研究であることは誰しも認めるところであり、多く週末に展開される研究会の多彩さには驚嘆させられるが、ややもすれば一見華々しい活動とは裏腹に、研究組織のあり方をはじめ、共同研究相互の連携なしにくり広げられ、個別にその成果が公刊され、累積されている印象を受ける。百花繚乱自体に意義があることは確かであるが、それらの成果からもたらされる日文研の「国際日本学」が何であるのか、容易に像を結びにくいことも否定できないであろう。これは大学の文学部系が哲学・史学・文学の三部門を基軸としてきた人文学の再編ないし解体としての「日本学」であることの裏返しでもあろう。「日本学」という括り方そのものの不断の検証がもとめられるように思う。

「要覧」にも提示される五つの研究域と各域に配される各三つの研究軸という枠組みは一見すると、きわめて体系化された総合性を持つように見えるが、最新の 2015 年版によれば、それらに配される個別の研究テーマの相互の連関性がうかがえるものがきわめて少ない。研究課題は数年単位で動いていくものであるから、それぞれ事情はあるであろうが、規定の均整のとれた枠組みにただ当てはめているだけのようにも見えてしまう。特に第２研究域・構造研究の自然・人間・社会という三区分はかつての大学教養部的な枠組みの残存の印象が強く、第１研究域の伝統と基層の差違化の問題をはじめ、第３と第４の文化比較と文化関係の差違化等々、枠組みが形骸化しないように抜本的な見直しがあってもよいように思う。

確かに海外の研究者主体の共同研究の増加はおおいに評価されるが、拡散と集束の相互の運動作用が必要であり、各共同研究の相互の連携や有機的な連関に意を用いるべきではないだろうか。その際、考慮されるべきは、今日の理系主導の学術体制であり、日文研が人文学主体の機関であることを逆手にとって、自然科学や生命科学との連携を模索する試みが望まれるのである。

また、95 年の第三者評価では、基礎研究の重視が強調されていたが、今回はほとんど議論の余裕もなく俎上に上がらなかった。現状と展望はどうであろうか。

今後もとめられるのは、クールジャパンのごとき日本文化単独の発信ではなく、アジアをはじめ欧米他の個々の地域文化との相互関係の究明とその意義の発信であろう。したがって、日本研究に海外の文化研究を積極的に取り込み、混ぜ合わせて推進していく方向性の模索が必要である。新年度からの基幹研究プロジェクトとして大衆文化が掲げられているが、それが日本の大衆文化だけではなく、東アジアや各地域特有の大衆文化とその研究との比較、協働から推進させるべきであると思う。

③ 研究資料等の収集と発信

日文研のデータベースと図書資料の充実ぶりは目を見張るものがあり、日文研の存在意義をアッピールできる目玉の一つであるといえる。特に絵巻や絵本、浮世絵などの一次資料の収集とその画像データのネット公開は、世界に向けた大きな情報発信力となっている。た

とえば、妖怪・怪異のデータベースは特に有名であるが、これをさらに拡充させて雑誌・図書をはじめ各種の媒体、メディアなどとリンクさせて、一大妖怪・怪異コレクションを形作っていく方向性がより強固に打ち出されてよいように思う。極論すれば、「妖怪なら日文研」、という類の定番というか指標があるとよい。ニューヨーク・パブリック・ライブラリーのスペンサーコレクションが世界有数の絵本のコレクションであるごとく、コレクションに特異性やテーマ性をもたせることが肝要である。ただ、「怪異・妖怪伝承」の情報がやや古いままのものである印象を受けるが、更新する担い手の存在が課題となるであろう。データベースという窓が多種多様に提示されることはありがたいが、コレクション自体が中途半端なものでは看板だけで利用価値が半減することになりかねない。

大衆文化のプロジェクトでは、画像・音響図書館の構想もあるようだが、絵巻をはじめ貴重な一次資料類は画像データベースだけではなく、影印本などの形で公刊するのも一つの有効な方策であろうと思う。同一の資料であっても、画像データと書物とではその受ける印象も利用の方法も異なる。媒体は複数あった方がよい。日文研所蔵の貴重書の影印叢刊シリーズのような企画があってもよいように思う。日文研にはこれがある、という強いアッピールが今後さらに必要であろう。

④　研究者育成

研究者の育成は次世代の「国際日本学」を担うべき人的形成のために不可欠であり、今後も継続すべき責務を負っているといえるが、特に海外の若手研究者の積極的な受け入れが望まれる。たとえば、先にも名前を挙げたベトナムのオワイン氏の後を引き継ぐべき古典学の人材が見当たらないのは、将来のベトナム日本学の進展のためにおおいに危惧されることであり、若手の有為の人材の発掘が課題となっている。すでに日文研に関わる世界の研究者の教え子がまた日文研に来る時代になっており、第２世代からさらに第３世代に引き継がれていくためには、言葉は悪いが、座して待つだけではなく、各地から優れた人材の一本釣りのごとき積極的な方策が必要になるだろう。少子化や人文学の退潮などから国内の大学の大学院の多くが留学生頼みになっているように、留学生の受け入れのあり方が今後の発展の鍵を握っている。大学院生の育成がおのずと国際化を招来しつつあるわけで、「国際日本学」は趨勢としてある。比喩的に言えば、今や大相撲が海外の力士抜きに成り立たないように、日本学も将来おのずとそうなっていく面があるのではないだろうか。

⑤　外部資金獲得状況

外部資金としては科学研究費をはじめ、各種財団などの助成金が主な対象となるであろう。自助努力を遂行するしか手立てがないので、この問題に関しては特にコメントがない。しいて言えば、科学研究費の中で個人研究を主体とする基盤Ｃが多い傾向にあるが、共同研究の面からは基盤ＡやＢを増やす方向性が望ましいように思われる。

⑥　その他

最後に、個人的な感想もしくは要望として２点あげておきたい。たまたま 2015 年の年末に早稲田大学で行われた怪異のシンポジウムで小松所長と同席する機会があった。その折りの小松所長の基調講演が「蛇抜け」という山崩れの災害怪異伝承にまつわるもので、各地に伝わる災害に関する怪異伝承のデータベース構築の提起が印象深かった。阪神淡路及び東日本大震災の折りにも、災害にまつわるアーカイブの重要性がひろく認識されたが、とりわけ体験者達によって語り継がれ、受け継がれてきた災害の伝説や口頭伝承が貴重な意義をおびているにもかかわらず、知的資源としてほとんど問題視されず、集積統合されないまま放置され、結果として次々と喪われている現状があり、これらを保存し受け継いで体系化していく試みが充分なされないままになっている。災害伝説伝承資料の総合的研究をふまえたデータベース化が急務ではないだろうか。その担い手としては日文研が最もかなっており、まずは共同研究から立ち上げていく方策が考えられるがいかがであろうか。

もう一点は、日文研と京都との関わりをふまえての「国際京都学」の提言である。近年急増している海外の観光客のごとく、京都は世界から注目される都市の代表であり、歴史文化の多種多様な観点からの検討が期待できる、「国際日本学」の絶好の対象となるのではないだろうか。「伝統文化総合研究プロジェクト」が該当するのであろうが、もとより京都大学をはじめ、京都に所在するあまたの大学や研究機関が何らかのかたちで京都学にかかわっていることは自明であるが、日文研こそが総合的な「国際京都学」の推進母体を担うべき立場にあるのではないだろうか。

以上ないものねだりに終始した感もあるが、それだけ日文研への期待が大きいわけで、益々の発展をこい願うものである。

国際日本文化研究センター外部評価に係る意見書

白石　さや　委員

1　はじめに

21 世紀にはいって、世界の政治・経済・社会のあり方が大きく変化しています。近代的現象のひとつが「human activity is conceived and consummated as culture」である以上、文化の政治学も大きく変化しています。日文研も、1987 年の創設からやがて 30 年がたとうとしており、いわば一世代にわたるその研究活動を振り返り、さらにこれからの未来を見通すために立ち止まり、じっくりと思索を巡らそうという時期に差し掛かっていると言えましょう。その日文研の歴史的に重要な場に陪席することを許されましたのは、身に余る光栄であると感謝しています。

しかし同時に、いかにわれわれ外部評価委員の面々が誠意を尽くし努力しようとも、あくまでも最終的な評価と、それに伴う決断の主体となるのは日文研のメンバーの方々ご自身でなくてはならないことを確認しておきたいと存じます。外部評価委員は、例えこれまで日文研の共同研究員を務め、種々の研究会や、国内外のシンポジウムや、出版活動を共にする経験を持っていたとしても、その評価や提言は、多分、日文研のメンバーとして内部で日々活動しておられる方々から見れば、表面的で、誤解や偏見に満ちたものであろうと承知しております。そのために、評価報告書最終版に向けて、さらに色々と相互間の意見や情報交換も必要であろうと考えています。その過程において、寛容に何かをくみ取っていただけることがあるならば幸せです。

「外部評価報告書の構成」において日文研の側から指示された各論は、別途に最後尾に附帯します。ここではまず、外部評価のための資料として提供いただいた日文研における、またその個々の研究者の方々の、これまでの研究活動業績に関する潤沢な資料データから学び、考えたことの概要を、叙述させていただきたいと存じます。

2　制度化（institutionalization）に抗した自由闊達な研究成果

日文研は、国内外の一流の日本文化研究者が集い共に相互研鑽を積む組織としては、これまで広く「学問の楽園（または研究者の楽園）」の名をほしいままにしてきました。それは研究者の方々がその研究テーマにおいても、方法論においても、他のどこよりも大いなる自由を享受してこられたことを指すと理解しています。そのことは今回提示いただいたその華麗な研究業績の記録が見事に証明していると思われます。芸術、思想、政治、歴史、文学、心理学等々と、そのテーマの多彩さと方向性の斬新さは、ちょうどアラジンが「開けごま！」と宝物庫を開けてしまったときのように、目くるめく絢爛豪華さです。学問を志した 20 歳の時から数えて 45 年の老研究家としては、羨望のため息がこぼれるほどの成果リストであると言えます。それは個々の研究者の研究業績においても、共同研究の

記録においても同様です。日文研とそこに所属する研究者が、自由というものを無駄にすることなく、見事に開花させてきたその軌跡であると言えましょう。

同時に、1995 年の「第三者評価委員会報告書」の中には、特に「個人研究について」の項目において、「新しい発想に富んだ、または斬新なアプローチを試みた論文が多い反面、基礎的研究が占める比率が比較的に低いと見受けられる」という記述であるとか、「問題は、課題とその達成の高度の割には、教授枠の制約の上、研究者の自発的選択なので課題は大小さまざまの観があり、そのため、全体の手掛けられる課題数とそれのカバーできる面、つまり広度のほうが多少もの足りなく感じられなくもない」という外国人研究者の指摘がみられます。これらは何を意味しているのでしょうか？何を指して「基礎的研究が不足」だとするのか、「広度が物足りない」とするのでしょうか？そういう評価があったからといって、日文研の研究者数を制限なく増やすことはできないし、なによりも現有の研究者数やそのカバーしてきた専門領域の広さは、他に類例をみない素晴らしいものです。決して「教授枠の制約」つまり研究者数の過小さが問題の原因になるとは思えません。しかし、この研究業績の多彩さ、潤沢さを経験したはずの外来の研究者の目に、なおかつ（あるいはそうであるからこそ）「足りないもの」が感じ取られている。実は、ここに日文研の現状における一番の課題があると考えます。それは、日本内外における日本文化研究の拠点であるという日文研において、今日の学問にとり最も基本的な特性である「近代的制度化」が不十分である、ないしは「制度化への意志」が不在であるという点が指摘できるのではないでしょうか。この「制度化」とは決して日文研の組織構成を指すものではありません。日本文化研究というその学問の組み立て方にかかわるものです。そしてここにこそ、日文研の次の 30 年間における大きな飛躍のカギも隠されていると思われます。

ａ）　学問の制度化とは

近代社会においては、学問はもはや「未知の大洋に漕ぎ出す」という冒険に満ちたものではなくなり、先行研究によって提示される海図に従い、予定の航路と目的とする港をあらかじめ想定し、ひたすら羅針盤を見つめて正確にその「予定された航路に沿って航行する」作業となっているかのようです。出発する時には目的地はすでに予測されているのです。そうした目的の港と、その港に到達することで獲得されると期待される成果とを明確に書きこんだ航路図を提出することで、初めて研究に必要な予算が配分されます。すなわちかつてのように「無限の未知に挑戦する学者（scholar)」としての研究活動はかなり困難となり、「海図によって導かれ、正確に予定された航路に沿って、所与の目的港を目指す調査者（researcher)」による「調査活動」というものが「学問」のあり方としては一般化しています。そこでもとめられる「学問的厳正さ」とは、予定された航路を踏み外さないという過程の正確さです。

こうして「制度化された学問」において重要なことは、いかに厳密に正確に予定の航路を進むのか、そして先行研究の提示した航路を、さらにその先に少しでも推し進めることができるのかという点になります。それは決して幾人もの先人達が港から港へと延長させてきた航路を一気に完結させようとする営みではありません。先人達の調査研究の成果は、後に続く人々によって、さらに少しずつ先へ先へと推し進められるものであって、究極の本質的な真実という北極点に到達することを目指すものではありません。調査研究は常に継続する（on going）作業であり、したがって、個々の研究者が海図に書き込んだ航路としての業績は、学界に広く報告発表されて、他の研究者に衆知され、未来を担う若い世代の研究者によって継承され、そこからさらに新たな航路と目的港が想定されることが要件となります。

b)　日文研の最初の 30 年間

さて、日文研という「学問の楽園」において、その燦然と輝くこれまでの研究業績データが如実に示すことは、日文研の個々の研究者が（あるいは日文研という研究組織そのものが)、この 30 年間、可能な限り日本文化研究という学問の「近代的制度化」を拒絶してきたのだろうということです。あの豊かな多彩さは、決して制度化された学問の持つ、方向性をもって成長する統合体を形作るものではなく、むしろ野放図に自由自在に伸び広がっている様にみえます。日文研に集った研究者の方たちは、「調査者（researcher)」となって海図にすでに描きこまれた航路を羅針盤に従って正確に進むのではなく、「学者（scholar)」として大洋を海図なしで制覇しようと試みた冒険者達であり、あの研究業績のリストは、その足跡であるように思われます。

制度化された近代的な研究方法に馴染んだ内外からの訪問者達は、この百花繚乱たる自由な研究成果の爆発を前にして、彼らが日文研において入手できるであろうと期待していた「日本文化研究の海図」をどこに求めてよいのかわからずに混迷した結果、日文研では「基礎的研究の不足」がみられ、あるいは「広度が足りない」と記したのでしょう。つまり、日本文化研究者としての自分の船の錨を下ろす港の位置を明示してくれる、さらにはこれから自分が進むべき航路と目的港の見取り図となる海図という、統合され制度化された日本文化研究の全体像を求めて、しかしそれが日文研において与えられなかったために、「ものたりない」と感じたのでしょう。「自由」という白図は、それを経験したことのない、または求めたことのない研究者には、何も手がかりを与えてくれない白紙でしかありません。

こうした日文研の最初の 30 年間は、いわば学問の近代的西洋的制度化を排した、自由で自然発生的な日本文化研究の貴重な誕生と成長の時期であったと認識できるでしょう。日文研は奇跡的にそういう独立自尊の研究者が集う拠点として出発したと思われます。いわば、かつてのアメリカ人が若いアメリカ国民としてのアイデンティティをトムソーヤー

の自由さと反抗心に託したのと同様の、若い日本文化研究の、自由と反抗心とに満ち溢れた、制度化を拒絶する、冒険を恐れない青少年時代であったのではないでしょうか。

c)　開けた制度化に向けて

しかし、日文研はすでに成人期に達してしまいました。次の成熟の 30 年を前にして、現在、二つの選択肢を前にしていると言えるでしょう。その選択肢のどちらを選ぶのか、それは日文研のメンバーの方々の主体的な判断によるものと考えます。外部評価委員としては、あくまでもその選択肢の存在を指摘することしかできません。

その一つは、そうした初期の研究業績が多彩で華麗で自由であるからこそ、いまや日本文化研究の国内外での拠点としてのリーダーシップをもつためには(もとうとするならば)、日本文化研究の「制度化」を先導すべき時期に来たと認識することでしょう。これからは日文研が、国の内外において日本文化研究を進めるための新しい海図を提供する、いや海図だけではなく、航行すべき航路を予測し、目的となる諸港の存在を指し示すことが求められているのではないでしょうか。「学際的」であろうとする前に、実は日本文化研究の学問分野そのもの（discipline）をまず確立し、日本の内外に明示する、今は、それが期待されている時期であるように思います。「学問分野（discipline)」そのものの確立なしに有意義な「学際的」研究が可能でしょうか。

いかに才気あふれた独創的な研究も、後継者によるさらなる未来への展開がなければ、現代という時代を映した孤高の文学で終わるか、または魅力的な独言としていつか時代と共に忘却されてしまうのではないでしょうか。日文研において、ここまで自由に伸び伸びと多様で多彩な方向へ成長してきた日本文化研究が、現代日本においてどこまで到達し、全体としてどういう姿かたちをとっているのか、今こそ、それを国内外の研究者の前に可視化して明示する好機だと思われます。これから先は世界の研究者がどうやってその豊かな成果を共有し継承していけばいいのか、日文研はそれを国内外に示す能力と責任があると考えます。これまでの日文研活動においては、そうした制度化され統合性をもつものとしての学問体系を提示する努力が十分には行われてこなかったから（自由というものは、求めない人には見えない)、外来の研究者は日文研に所属する個々の研究者の研究成果の斬新さに感嘆すると同時に、誰にでも理解でき共有できるものとしての「基礎研究」を求め、あるいは誰にでもアクセス可能な海図を要求し、「足りないもの」を補足提供する親切さを懇願してきたのではないでしょうか。

しかし、日文研における「制度化」は、決して西洋近代的な、狭い専門領域に限りなく分裂し、閉ざされていく、密教的な性質のものになることは避けて欲しいと希望します。それこそが、日文研がその創設当時からその制度化の導く先を洞察し、拒否してきたものだったのではないでしょうか。日文研という約 30 年に渡って国際的・学際的・総合的な研究を自由奔放に、かつ、しっかりと追求してきた伝統を持つ研究センターにおいてこそ可能な、新しい創意工夫に満ちた、開かれており、柔軟に変化することが可能な、そうい

う日文研スタンダードに基礎をもつ「制度化」を追求できるはずです。港に到達する毎に、そこから次の新たな航路と視野が広がる、そういうダイナミックな制度化です。日文研のこれまでの初期の輝きが色あせて古めかしくなるのではない、後継者によって継承されることでさらなる新しい冒険への帆をあげる、そういう「開かれた制度化」のあり方を創造することが、次の 30 年における日文研の責務であり、世界への日本文化と日本文化研究の貴重な貢献ではないでしょうか。その場合にはもはや「日本文化」という研究対象における「日本」は、もはや大文字ではなくなるでしょう。「日本」という言葉と、その言葉が指し示すものとの間の関係は、恣意的で、人為的で、歴史的で、政治的なものであって、決して本質的なものではないことはあきらかです。そこから２１世紀の激変する世界の「文化研究」を先導するという新たな使命が求められていると考えます。

３　制度化のための具体的提言

第一の選択肢である制度化を進めることにした場合に、「学問研究の制度化」において枢要なことは：

（1）学問研究領域としての独立性と正当性を主張するための明確な大義名分が必要です。大義名分が承認されると、予算がついてきます。日文研に今後とも充分な予算が配分されるための大義名分とは何なのか。それはこの「国際」と「日本文化」の看板を死守することなのか、それともその 20 世紀近代的な縛りから解放されることなのか、この間の研究成果をもとに、日文研のひとりひとりが考え、議論すべきことであろうと思います。

（2）研究者の研究成果の発表の場として研究会の開催や、独自の出版機能を有すること。これはそのまま日文研がこれまでの活動の中心として実行してきたことであり、「外部評価委員会参考資料」として見事にまとめられた記録により証明されています。

ここで日文研が「日本文化研究の開かれた制度化」を推し進めるにあたって、新たな課題となるのは、日文研独自の出版物（デジタル化も含めて）への世界的信頼度・認知度を上げるという点になります。これに関しては、フレドリック・リチャード・ディキンソン委員の懇切で丁寧な出版物に関する課題の整理と提言とが提出されております。それはジャーナルこそが当該学問分野の海図であるからです。

そうしたジャーナルは、組織内出版ではなく、広くネット通販でも入手可能な、開かれたものであり、日本文化研究の中核となるジャーナルであることが明確に定義されて、緻密で厳正な査読体制を設けることが基本となります。現代は TV 会議も可能なメール通信の時代ですから、編集委員や査読者は広く国際的にリクルートすること。そして各号には、日文研を代表する研究者のインパクトある最新論文や、国際的なマーケットに向けてのタイムリーな書評を掲載して、国際的な日本文化研究を指導し、現状を常にアップデートする役割を果たさなければなりません。そうした編集活動によって、世界の日本文化研

究者に向けて、今、どういう研究テーマが旬なのか、方法論としてどういう斬新なものが登場してきたのか、常に最新の流れを指し示す、質の高いものとなります。ジャーナルによって日本文化研究の新たな価値と方向を指示すことができるようになれば、世界の日本文化研究者が「生涯にせめて一度は日文研のジャーナルに論文を載せたい」と思い、自己ベストの論文を投稿してくるようになるでしょう。そういったジャーナルを育てるのが、拠点となる研究センターの第一の責任です。そしてこのジャーナルは日本語のみでなく英語版でも出版する。投稿者はどちらの言語を用いてもよく、掲載時に編集委員会で、それぞれに翻訳する（もちろん、執筆者の校正を可能とする)。それは日本文化研究を密教化しないため、また本質論に回帰したりしないための、開かれた制度化の根本です。

（3）後継者の育成。これが「制度化を目指す出発点」であり、「制度化の目的」でもあります。どんなに独創的で目覚ましい研究でも、そのテーマや、データや、理論を継承する後継者がいなければ、単なる「文学作品」で終わってしまいます。制度化された近代的学問であるためには、広く、読み継がれ、引用され、批評され、その研究テーマの航路が海図に描きこまれ、だれかがさらにその先を目指すことが必要です。

そのためには、大学院における博士課程教育プログラムの本格的設立や、研究者としての前途に大きく影響するポスドク段階における調査研究執筆や教育実践を支援する制度も欲しい。

その中で手っ取り早く始めることができるものとしては、合宿制夏季スクールがあげられます。大学院生や社会人から、高校・大学の教職員を対象として、８週間くらいの期間に、国際的に受講生を募って開講することを、真剣に検討してはどうでしょうか。

もっとも普通に考えられるのは日本語クラス(入門、初級、中級)ですが、他にも古文読解でも、歴史地理でも、入門から上級までの科目を単位として取得できるものとする。京都という地の利も利用できるでしょう。同様の夏季プログラムは欧米にも多く、日文研所属の研究者にも経験された方がおいででしょうから、宿泊施設を利用し、夕食は受講生が交代で自炊するなど経費節約の方法も色々と海外のプログラムから学ぶことができるでしょう。こうした夏季スクールのメリットは、受講生同士の間に同一の興味関心を持つ者同士のネットワークができることです。

この合宿に、日文研ならではの、日本語/英語での専門的な日本文化研究関連セミナーを併催することもできでしょう。音楽や舞踊なども忘れずにコースに加えれば、これは受講生の動機付けになるでしょう。日文研メンバー自身が親しく英語での講義や講演をまずホームで日常的に経験することができる場になります。日本文化研究者が西洋的学術伝統を学ぶことは、日本文化の独自性を脅かすことではなく、むしろ日本文化研究を制度化するにあたっての教養としておおいに有効であろうと考えます。

しかしこうした教育活動は、所属する研究者全員への強制的な義務になることは避けるべきであり、ゼミの他に大学院生が個人指導を依頼することができるような柔軟な体制を試行できるのではないでしょうか。

４　第二の選択肢：　高等研究所

第二の選択肢は、あくまでも「制度化の途を拒否」することです。これまでの「未知の大洋に漕ぎ出す」ものとしての自由で冒険に満ちた文化研究の方法と姿勢とを、どうやったら今後も維持継続できるのか、その方向性を日文研が自覚的に追及していくことです。それは胸のワクワクするような、しかし、明確なモデルの存在しない困難な道でもあるでしょう。そのために必要なことは、まずこの「制度化されない学問追及の自由な輝き」を理解し、支援する人々を、日文研の内外に獲得することであり、それにどの程度成功するかが重要なカギとなるでしょう。日文研を訪れる内外の研究者の多くは、すでに制度化された学問に馴染み、なかには日文研の百花繚乱の研究業績を前にして途方にくれる人もいるでしょう。そうした研究者に、自分の自由な一歩を踏み出すことが可能であるという、そのための勇気と愉しみとを経験してもらうこと、そして「自由な研究」とは決して「孤立した独りよがりの研究」ではなく、むしろ自由に思考する研究者同士でこそ、意見や情報の交流の楽しみは倍加するものであることを理解してもらうことです。その愉しみは、自由な研究活動を継続するための方法であり、目的でもあるでしょう。「伝えること」「伝わったこと」の喜びです。

それには、どうも日文研の現状では研究者同士の間の意見や情報交換が日常的に行われるという機会が少ないように思われます。「自由でワクワクするような研究」がいつのまにか「孤立した唯我独尊の研究」になってしまっていないか。自由で独創的であり、かつ進化する研究には、これまで日文研が伝統としてきた「学際的で国際的な活発な交流」が不可欠です。そしてこうした学問追及の自由さの意義を、行政担当者にも受け入れてもらうには、どうすればよいのか、そのための努力が求められます。研究者同士であれ、研究者とそうでない人々との間であれ、日文研が自由堅持の選択肢を選ぶということは、実は、これまでに倍するコミュニケーションや説明説得のための創造的努力が要請されることになるでしょう。その過程で、有力な武器であり、財産であるとして、これまでの日文研の研究実績が生み出してきた価値を可視化して再発信することは、有効な戦略となるでしょう。文化を研究するということは、元来が 50%はコミュニケーションではないでしょうか。

具体的なひとつの可能性としては、ジャン=ノエル・アレキサンドル・ロベール委員のご指摘にある、プリンストン高等研究所で代表されるような、世界のトップクラスの「高等研究所」を目指すことでしょう。世界第３位の経済大国が、世界の文化研究をリードする高等研究所をもつことに遠慮することはないでしょう。もちろん文化研究センターであるという伝統は維持すべきでしょう。ただし、世界の高等研究所であるためには、もはや

「日本文化」という、20 世紀国際社会の中で、人為的に、歴史的に、限定されてしまった研究対象から自らを解き放つ勇気が求められるように思います。これまでの外部評価委員会の議論の中で、「日本文化研究」を「中国文化研究」と併せるとか、「アジア研究」の枠内に広げるという議論がありましたが、そのどれもがすでに賞味期限が切れた選択肢であるように思われます。

多分、こういう領域でのアイデアを出して議論するのは、日文研の方々の得意分野であろうと思います。ここではほんの参考として以下にその事例を挙げます。どれも、基本モデルはプリンストンの高等研究所であると理解しています。

・Institute for Advanced Study in Princeton, New Jersey
・Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences in Stanford, California
・National Humanities Center in North Carolina
・Radcliffe Institute for Advanced Study in Cambridge, Massachusetts
・Netherlands Institute for Advanced Study in Wassenaar, the Netherlands
・Swedish Collegium for Advanced Study in Uppsala, Sweden
・Berlin Institute for Advanced Study in Berlin, Germany
・Israel Institute for Advanced Studies in Jerusalem, Israel
・Nantes Institute for Advanced Study Foundation in Nantes, France

21 世紀に、日文研が意味のある、かつ自由な学問研究センターとして生き残る上では、日文研がその設立当初からかかえていた「国際」および「日本」という 20 世紀的近代的な国際的な縛りを見直すことが重要な戦略になるでしょう。「グローバル化」が待ったなしに進行する 21 世紀における自由闊達な文化研究は、如何にしたら可能なのでしょうか。もちろん国民国家と国際社会が消滅するわけでもありません。むしろ、米国や中国は、デジタル技術を巨大化させることで、「国際社会」と「グローバル社会」の双方を支配するという史上初の超大国化を進めているように見えます。情報とメディアとが今後どのような変化をもたらすのか、だれが予見できるでしょうか。世界での使用言語に関しても、大英帝国時代の英語でもない、米国の国際支配時代の米語でもない、21 世紀のデジタル言語が育ちつつあります。

5　まとめにかえて：日文研における Collegiality(同僚性)の醸成

以上のような二つの選択肢のどちらを選ぶにしろ、選ばないにしろ、なんらかの基本的な改革可能にするには、すでに外国人研究者が幾人も提案しているように、**日文研メンバー同士とビジターとの間にもっと親しい関係が醸成されることが不可欠であると思います。**訪問者としての感想ですが、日文研の建物は人と人とが出会うようには設計されていないのではないでしょうか。そうした物理的な不利さを乗り越えて関係を創造するには意識的な工夫が求められます。Collegiality（同僚性）の醸成です。これも高等研究所の例で示されていたように、日文研メンバー（ビジターも、学生も含めて）の共餐はとても重要

であるでしょう。バージニア・ウルフが、ケンブリッジ大学で教鞭をとったときのエッセイに書いたように「アカデミック・ライフのハイポイントは、同僚たちとの昼食とそこでの会話」であるからです。

具体的な方法としては、これも彼らがすでに提案していることですが、毎週一度、必ず共にする「ブラウンバッグ・セミナー（お弁当付きセミナー)」で相互の研究の現状を知ることが考えられます。これはアメリカの大学などで一般的によく行われているイベントです。この場でビジターの研究を親しく披露してもらうこともできます。日常的にビジターと意見や情報交換をする関係が成立すると、将来的に立場を変えて日文研メンバーがビジターとして訪問する機会も増えるでしょう。と同時に、毎週顔合わせをすることでメンバー同士のコミュニティとしての実態が生じてきます。こうした日文研メンバー同士の親しい関係が醸しだされることなしには、「開かれた制度化」への改革は困難であろうと思われます。また「自由な研究者」は孤立することで容易に「独善的な研究者」になるでしょう。

外国人研究者が指摘する日文研メンバー間の関係の薄さは、何をするにしても、あるいはしないにしても、必要な改革事項であろうと思われます。もしも日本文化研究の制度化の拠点となることを目指すのであれば、同僚が何を研究しているのか、自分の研究テーマや方法論とどう連携させることができるのか、どうやったら統合性が組み上がるか考えて、相互にその場限りではない議論を積み上げていくことが必要不可欠になるでしょう。まず、日文研のメンバー同士およびビジターを含めた Collegiality（同僚性）の確立が望まれます。

各論：

①研究協力

１）日文研の伝統であり、強みであるので、今後も継続が望ましい。

２）ブラウンバック・セミナー（昼食付き研究発表会）を毎週定期的に開催、日文研内およびビジターとの情報意見交換と、同僚としての関係（collegiality）の醸成が重要となる。

３）大学院や、ポスドク制度、夏季スクールなどで、後継者教育に時間を割く。後継者のいない独創的研究は、それが独創的であればあるほど、忘却されやすい。「伝えること」「伝わった喜び」これも学問研究の制度化の基礎となる。もちろん、学術研究においてはあくまでも個人研究が基本であることを確認しておくことは言うまでもない。

②研究活動

研究テーマや方法論の多彩さ斬新さに関しては、従来通りで良いと思うが、日文研として、日本文化研究の制度化を図り、研究の方向性を国内外に明示し、影響力を与え、何が調査研究の対象として価値があるのかを共同で創出していく学術共同体のメンバーである

という認識を醸成し、そのための日常的な意見や情報交換の場と機会をもうけることを考えてほしい。

③研究資料等の収集と発信

世界の日本文化研究に影響を与えるには、まず日文研出版の核となる学術ジャーナルの質を高め、信頼される論文掲載のサイトとするための強力な努力が求められる。

④世界の日本文化研究者育成

１）大学院生（博士課程教育プログラム）・ポスドク制度設置が望ましい。

ただし教育指導は、日文研の研究者全員への強制でなく、柔軟に、個人指導なども繰り込む。

２）夏季サマースクール（日本語と日本文化に関心を持つ世界の大学院生、学生、社会人、高校大学の教職員を対象、２か月位、合宿制）：日本語集中レッスン＆日文研のメンバー及びビジターによる日本語/英語での日本文化講義シリーズ（音楽や舞踊も）

⑤外部資金獲得状況

現状推進。また、内部資金による研究支援は独自の方向性を確立する上で重要。

⑥その他

スクールバスにあたる共同交通手段が望ましい。日常的に顔を合わせる時間と空間は collegiality 情勢のためにも有効である。

国際日本文化研究センター外部評価に係る意見書

フレドリック・リチャード・ディキンソン 委員

1）研究協力

From its founding in 1987, Nichibunken's principal strength has been the international and interdisciplinary bent of its scholarship, produced through a strong focus on team research (共同研究) and research cooperation (研究協力). This cooperation has been facilitated most powerfully by the sponsorship of over 400 foreign Visiting Research Scholars (外国人研究員) since 1987 for extended periods of research at Nichibunken. As the last formal evaluation of the center suggested in 1995, this is one of the most distinctive aspects of Nichibunken's contribution to the study of Japan. While there are hundreds of dedicated centers for Japanese studies throughout the world, Nichibunken is unique in the incredible geographic diversity of its visiting scholars—from 42 countries and six continents. And these numbers are supplemented by a group of foreign Visiting Research Fellows (外来研究員), who conduct research at Nichibunken on outside funding. The Center runs a dizzying array of projects and symposia that integrate these research scholars and fellows in the academic life of the center: team research, the Nichibunken Forum, the Evening Seminar, special lectures (レクチャー), and symposia (シンポジウム).

Since the last formal evaluation of 1995, the international character of Nichibunken's research has increased dramatically through the hiring of six permanent non-Japanese faculty members and the rapid increase in number of Visiting Research Fellows (外来研究員). Four of six of Nichibunken's new foreign faculty members come from Western Europe (Britain, Germany, Belgium) and the U.S., confirming the 1995 criticism of a Nichibunken bias toward the West. But two hires from China mark an important institutional step toward geographic diversity on the faculty. And, although the largest number of Visiting Research Scholars (外国人研究員) continues to hail from the U.S. and Western Europe, as already noted, Nichibunken boasts the most diverse geographic pool of Visiting Research Scholars of any center for Japanese studies in the world today. The number of Research Fellows (外来研究員) has, moreover, increased dramatically in recent years. Between 2010 and 2014, they have jumped 58%, from 24 to 38.

The strong number of foreign faculty members and Visiting Research Scholars and Fellows, plus the ample opportunities for research cooperation across national and disciplinary boundaries, are clearly the principal distinctiveness of Nichibunken. But the center could do more to ensure true collaboration across national borders by granting greater agency to its

Visiting Research Scholars and Fellows. The most substantial arena for research cooperation is the team research project (共同研究). Until recently, however, the number of foreign scholars formally participating in these projects has remained low. The launch two years ago of a new type of project, the international team research project (国際共同研究), where foreign scholars constitute a majority of team members, marks an important step in the right direction. But the persistently low number of foreign scholars in Nichibunken's core research program, the team research (共同研究) and, especially, the low number of foreign scholars who actually lead team research projects, suggest that Nichibunken is less interested in research cooperation across borders than in establishing and managing the agenda of Japanese studies across the globe. Visiting Research Scholars ran only two of fourteen team research projects in 2015, and only two of sixteen in 2014. In 2013, none of the eighteen team research projects were led by Visiting Scholars. What Nichibunken calls "Research Projects" (研究プロジェクト) are run exclusively by members of the center's standing faculty.

A critical component of Nichibunken's contribution to international collaboration is the variety of programs that it sponsors abroad, namely, the Overseas Symposia (海外シンポジウム), Research Exchange Symposia (海外研究交流シンポジウム), and Overseas Meetings on Japanese Studies (日本研究会). Through Overseas Symposia and Research Exchange Symposia, Nichibunken has, over the years, played a pivotal role in cultivating interest in and resources on Japan in areas of the world without well-established traditions of Japanese studies. There is still a need for this type of strong mentorship, particularly in Africa and the Middle East. Despite their growing importance, these areas remain relatively uncharted territory for Nichibunken. The center has hosted only five Visiting Research Scholars from Africa (4 from Egypt, 1 from the Democratic Republic of Congo) and one from the Middle East (Kuwait) over the years.

But Japanese Studies has reached a level of maturity globally that it did not have thirty years ago. Nichibunken's founding impulse to establish and manage the agenda of Japanese studies across the globe should gradually yield to a true spirit of international collaboration. That spirit is exemplified best by Overseas Meetings on Japanese Studies (日本研究会). Nichibunken's Overseas Symposia and Research Exchange Symposia represent what might be described as a "colonial" model of international collaboration. While they do, of course, engage faculty and staff of host institutions abroad, they are typically planned and executed primarily by Nichibunken faculty according to Nichibunken goals and standards. By contrast, Overseas Meetings on Japanese Studies are conducted in a true spirit of collaboration, with faculty and staff of foreign host institutions intimately involved in both planning and

execution. Given the desirability of true collaboration, and the reality that Nichibunken faculty are quite over-extended in their research activities, I would recommend less Overseas Symposia and Research Exchange Symposia, more Overseas Meetings on Japanese Studies in the future.

Most importantly, I think Nichibunken might do well to begin a fundamental rethinking of its core mission to best adapt to the changing landscape of Japanese Studies in the twenty-first century. As clearly outlined in the absorbing tale of Nichibunken's first 25 years in *The Birth of the New Japanese Studies: 25 Years of the International Research Center for Japanese Studies* (『新日本学誕生：国際日本文化研究センターの 25 年』), research at Nichibunken has until recently focused on investigating and presenting to the world the nature of Japan, Japanese culture, and the Japanese (日本とは何か…日本文化とは何か…日本人とは何か…) 前掲書 p. 9. This was a reasonable aim in an era of high growth, when global knowledge of Japan remained low and interest in Japan was high across the globe. But in our newly integrated twenty-first century world, where information can travel freely and global interest in Japan has plummeted, there is little future for an institution devoted principally to fashioning an image of a unique Japan (日本像). The most fundamental challenge for Japanese Studies today is to convince non-Japanese that Japan actually matters. Without the global political, military, or economic power of the past, the story of a distinct Japan cannot, unfortunately, serve this purpose.

Nichibunken scholars can and should, of course, continue the important work of elucidating the intricacies of Japanese history, thought, and culture. But in the larger, international realm of academic culture, we have seen a significant movement away from an area studies to a global studies approach. In the discipline of history, scholarship has increasingly shifted from national history to more trans-regional and world history. Likewise, Japanese Studies in the twenty-first century would benefit from moving beyond simply investigating Japan for its own sake. It can more profitably focus on integrating Japan with the larger experience of the world. Instead of simply asking 「日本とは何か」, scholarship on Japan would enjoy a much larger audience if it proceeded to ask 「日本から見た世界とは何か」. The more the Japanese experience may be related to the evolution of and solutions to problems of the modern world, in other words, the more relevance Japan will have in our twenty-first century world.

To that end, I would second a recurring criticism of Nichibunken's novel classification of knowledge, the so-called 「3 軸 5 領域」scheme. The 1995 evaluation described this scheme

as “largely meaningless” (p. 60), and Ronald Dore in 2010 called it an “exercise in metaphysical taxonomy” (p. 6). Nichibunken’s founders clearly devised the rubric to facilitate discussion across traditional academic disciplines. But while it may have helped facilitate dialogue among the diverse body of faculty members within Nichibunken, as a structure unique to the organization, it does not at all facilitate communication between Nichibunken and the outside world. In fact, it significantly limits the potential of Nichibunken to serve as an international leader in Japanese Studies.

First, the 3/5 scheme accentuates a vision of Japanese and Nichibunken uniqueness that, as already noted, runs counter to global trends. More importantly, by sidestepping traditional disciplines, Nichibunken is missing a perfect opportunity to connect with non-Japanese, non-Japan Studies academics through comfortable, well-established, globally recognized categories. If you were, for example, to replace the 3/5 rubric with five orthodox intellectual disciplines—such as politics, economy, society, history, and culture—you could immediately plug into an international dialogue on global challenges that could easily transcend the narrow parameters of current Japanese Studies scholarship. As to the complaint that a reintroduction of such traditional categories would discourage interdisciplinary investigation, I would argue that the potential to engage with countless established international discussions on world politics, economy, society, history, and culture would vastly outweigh any loss of interdisciplinary dialogue.

More importantly, to appropriate these categories would better accentuate Nichibunken’s intellectual strengths and weaknesses according to international standards. As it currently stands, Nichibunken’s roster of standing faculty includes seven authorities on literature, six modern historians, five specialists of culture, three medieval historians, two specialists of religion and one art historian. Any director of a Japanese Studies program will conclude from this list that Nichibunken is woefully lacking in coverage of the social sciences, particularly, in economics, political science, and sociology. As it turns out, given the growing reluctance of social science departments in the United States to hire area specialists, this weakness is mirrored on American college campuses. If Nichibunken were to commit to expanding social science coverage of Japan, in other words, it would have a new and important opportunity to nurture Japanese Studies globally, even in fairly developed markets for the study of Japan, such as that in the United States.

2）研究活動

As demonstrated by the impressive list of symposia, publications, and awards, members of Nichibunken's standing faculty are engaged in an incredible number, range, and quality of scholarly activities. Unfortunately, Nichibunken still does not enjoy the international reputation befitting this remarkable productivity. The problem is essentially one of exposure—in the arena of publications and scholarly activities.

In terms of publications, two journals, *International Research Symposium Proceedings* (『国際研究集会報告書』) and *Overseas Symposium Proceedings* (『海外シンポジウム報告書』) are in-house publications reserved for Nichibunken faculty members and participants in their symposia and thus follow the model of the in-house publications of Japanese universities (紀要). These journals are not for sale and cannot be accessed through standard scholarly on-line databases, so they have little value outside the walls of Nichibunken. I would recommend they be eliminated and participants in Nichibunken symposia be encouraged to submit their conference papers, instead, to regular peer-reviewed journals. If Nichibunken desires a clear and concrete record of past symposia, it would make more sense to advertise these in a prominent location on the Nichibunken website, and to include such information as 1) co-sponsoring institutions and locations, 2) a list of all participants and affiliations, 3) attendance numbers, 4) and a list of subsequent publications.

More successful than the above two journals has been the record of presentations by Visiting Research Scholars at the monthly Nichibunken Forum (『日文研フォーラム報告書』). This publication is accessible in digital form from Nichibunken's website and regularly enjoys strong monthly access numbers. Nichibunken's biannual Japanese-language journal, *Nihon kenkyu* (『日本研究』), and its annual English-language journal, *Japan Review*, have both developed into impressive peer-review journals and also enjoy consistently good digital access numbers through Nichibunken's website. But Nichibunken faculty members should be discouraged from using *Nihon kenkyu* to make preliminary reports on their research projects (共同研究報告). The content of both journals is also quite eclectic. Both would do well to establish a focused editorial policy to better distinguish themselves from their competitors.

Nichibunken sponsors three book series: the Japanese Studies Series (『日文研叢書』), Monograph Series (*Nichibunken Monograph*), and the Translation project (日文研翻訳出版協力プロジェクト), each of which have produced many impressive volumes over the years. But given the small size of the Nichibunken editorial staff and marketing arm, it would make

most sense for such publications to always be produced in cooperation with a larger, professional publisher (as has been done in the past, with Routledge, Lexington, Brill, etc.). Otherwise, they should be farmed out entirely to a professional or university press.

To the extent that Nichibunken faculty members do not enjoy the international reputation that their publication record would otherwise warrant, it might be due, in part, to on over-reliance on one or more of these in-house publications. It could also be due to a small number of publications in English. Only a handful of Nichibunken standing faculty members publish regularly in English. In the list of reviews of key publications by members of the faculty over the last seven years, there is no record of a review in a non-Japanese journal. And on the list of book awards for faculty members going back twelve years, there is only one conspicuous example of an award from a non-Japanese organization. For the sake of Nichibunken's growing international reputation, members of the faculty should be encouraged to publish whenever possible in non-Nichibunken publications, in English-language, peer-reviewed presses and journals, and to participate regularly in the international conference circuit, even if it means limiting participation in Nichibunken- sponsored symposia.

3）研究資料等の収集と発信

As appropriately noted by Ronald Dore in 2010, Nichibunken has a "splendid" library and data holdings. It is, I would argue, just as critical as the institution's commitment to 共同研究 to the distinct identity of Nichibunken and is a real treasure. The 2015 *Nichibunken Prospectus* (『要覧』) boasts 429,928 Japanese language books, 62,606 foreign language books, and 7,566 indices. And Nichibunken has a strong reputation for a good number of unique databases: on early photos, maps, *shunga*, and *yokai*, for example. Although library usage statistics from 2004 to 2014 indicate either steady or declining general usage, the access statistics for these databases remain consistently strong.

The noticeable difference between frequency of Japanese and foreign access to these databases indicates that Nichibunken's library holdings have a similar problem of international exposure as members of the center's standing faculty. I would encourage every opportunity, therefore, to directly advertise these resources, as Nichibunken has increasingly done in recent years: holding information sessions at every overseas Nichibunken symposium and regularly sponsoring receptions, booths, and/or information sessions at such important international conferences as the annual Association for Asian Studies, European Association of Japanese Studies, and Asian Association of Asian Studies meetings.

4）研究者育成

As already noted, Nichibunken has hosted over 400 foreign Visiting Research Scholars (外国人研究員) since its founding in 1987, many of whom give credit to Nichibunken for helping to boost their careers. An impressive forty percent of Research Scholars affiliated with Nichibunken between 1989 and 2009 responded to a 2010 survey of their experience conducted by Ronald Dore, most in very positive terms. One might also stress again the dramatic leap in numbers of Visiting Research Fellows between 2010 and 2014, from 24 to 38. In some ways, the growth of this group is more impressive than the steady stream of capable Research Scholars at Nichibunken. After all, these Fellows choose to affiliate with Nichibunken even though they receive funding from other organizations. They are a tangible sign of the growing attraction of Nichibunken and its strong faculty and library resources. Given that Fellows also tend to be younger than Visiting Research Scholars, it is even more probable for Nichibunken to have a large impact upon their careers.

5）外部資金獲得状況

In the context of growing resource scarcity, it is even more important for members of the standing faculty to do all they can to boost their international exposure (see recommendations in #2 above) and to be in a position to compete for lucrative outside fellowships. Despite the modest number of faculty members at Nichibunken, a reasonable and fair policy of scholarly leave should be established, and faculty members should be encouraged to apply for such outside fellowships.

国際日本文化研究センター外部評価に係る意見書（邦訳）

フレドリック・リチャード・ディキンソン 委員

1）研究協力

1987 年の創立以来、日文研は共同研究・研究協力に大きな力点を置き、研究の国際性・学際性を第一の強みとしてきた。この研究協力は現在までに 400 名を超える外国人研究員を日文研に招聘し、研究のための長期滞在を支援することで、きわめて強力に進められてきた。1995 年実施の前回の正式な外部評価が指摘するように、日文研が日本研究に対してなした貢献の最も際立つ特色の１つが、研究協力である。これまでに日文研が受け入れた外国人研究員は６大陸 42 か国に及び、この地理上の多様性は、世界に何百もある日本研究を標榜する研究機関の中で傑出している。この数値の上に、外部資金を得て日文研で研究を行う外来研究員が加わる。日文研は、専任教員による諸活動にこれら外国人研究員や外来研究員を統合して、共同研究、日文研フォーラム、イブニング・セミナー、レクチャー、各種シンポジウム等、眩いばかりの各種プロジェクトや研究会を運営している。

前回の外部評価以降、日文研は６名の外国人の専任教員を雇用し、外来研究員数も急速に増加させて、研究の国際的な性格を劇的に高めてきている。６名の外国人専任教員のうち４名が西ヨーロッパ（イギリス、ドイツ、ベルギー）とアメリカの出身者で、1995 年に指摘された西洋偏重の傾向はこの人事面にも残る。しかし中国出身者を２名雇用していることは、専任教員の出身国の多様さへの組織としての取り組みの、重要な一歩を印している。外国人研究員は欧米からが相変わらず一番多いものの、前述のように、出身国の多様さからみると、今日の世界中のどの日本研究機関をも凌駕している。さらに、外来研究員の数は近年大きく増加し、2010 年から 2014 年の間に、24 名から 38 名へと 58%もの増加を見せている。

外国人の専任教員、外国人研究員、外来研究員の増加、国や専門領域の境界をこえての研究協力の豊富な機会は、明らかに日文研の主要な際立つ特色である。しかしながら、外国人研究員と外来研究員に今以上の権限を認めて国境をこえた真の協力を確固たるものにするために、日文研はさらに多くのことができよう。学術研究上、最も実質的な協力の場は、共同研究である。しかしながら最近まで、共同研究プロジェクトに正式に参加する外国人研究者の数は少数に留まっていた。２年前、新しいタイプのプロジェクトである国際共同研究が立ち上げられ、そこでは外国人研究者が過半数を占めることとなり、相応しい方向への重要な第一歩を印した。しかし日文研の中核的研究プロジェクトである共同研究においては、外国人研究者の参加者はずっと少数のままで、外国人研究者が共同研究を主宰するケースも非常に少ない。そういうところを見ると、日文研は、国境をこえた研究協力を推進するよりも、日本研究のグローバルなアジェンダを策定し運営することのほうに関心があるのでは

ないかと思われてくる。2015 年の 14 ある共同研究プロジェクトのうち 2 つにおいてのみ、外国人研究員が研究代表者となっている。18 の共同研究があった 2013 年には、0 であった。日文研が研究プロジェクトと呼ぶものでは、日文研の専任教員のみが研究代表者となっている。

日文研が国をこえた研究協力活動を行うさい、きわめて重要な役割を果たしているのが、海外で日文研が主催するさまざまなプログラム、すなわち海外シンポジウム、海外研究交流シンポジウム、日本研究会、である。日文研はこれまで、海外シンポジウムと海外研究交流シンポジウムを通して、日本研究の歴史がまだ十分には確立してはいない地域において、日本への関心および研究基盤を開拓する上で決定的とも言える役割を果たしてきた。今日なお、積極的な指導を必要とする地域が、特にアフリカや中東に存在している。世界の中での当該地域の重要度はますます大きくなりつつが、この地域は日文研の方針では相変わらず比較的注目されないままである。これまでにアフリカからは５名（エジプトから４人、コンゴから１人）、中東（クウェート）からは１名の外国人研究員しか、日文研は受け入れていない。

しかし世界の日本研究は、30 年前にはなかった成熟のレベルに達している。世界における日本研究のアジェンダを策定し運営していこうという日文研創設時の強い抱負は、少しずつ真の国際協力の精神へと道を譲っていくべきである。そうした国際協力の精神は、現在日本研究会においてもっともよく体現されている。海外シンポジウムと海外研究交流シンポジウムには、まだどことなく「コロニアリズム」的な国際協力モデルの名残が感じられる。たしかに、そういうシンポジウムには、海外の開催機関の研究者やスタッフも関わっている一方、日文研の研究者が、日文研の目的と基準に準拠して計画し実施するのが典型的な進め方である。これと対照的に、日本研究会は、研究会の開催機関所属の研究者とスタッフが計画と実施に密接に係わっており、真の協力精神のもとで開催されている。こうした真の国際的な協力が望まれること、そして日文研の研究者が研究活動で手を広げすぎている現実、を考えると、今後は海外シンポジウムと海外研究交流シンポジウムを減らし、日本研究会を増やす方向で検討し直されることを推奨したい。

最も重要なことは、日文研は、21 世紀の日本研究を取りまく環境の変化に最良の対応ができるよう、自分たちの中核的ミッションを根本的に考え直す時期に来ていることだと思う。『新日本学誕生 : 国際日本文化研究センターの 25 年』に収められた興味深い叙述にその概略が明瞭に描かれているように、最近に至るまで日文研の研究活動は、「日本とは何か」「日本文化とは何か」「日本人とは何か」（p. 9）を探知し世界に提示することに焦点を当てていた。これは、世界の日本に対する知識が乏しいが関心は高いという、日本の高度成長期においては時宜に適う目標であった。しかし情報が自由に飛び交い、日本に対する関心が急

速に低下するという、新たに統合し直されつつある 21 世紀の世界では、「他に類のない独自な日本」というイメージ形成に固執する研究機関には、未来はほとんどない。今日の日本研究に突きつけられている最も根本的な課題は、日本が重要な意味を持っていることを世界の人々に納得させることである。過去に日本が世界で占めていた政治的、軍事的、経済的な力が失われた現下、「独自な日本」を追究してみても、残念ながら、かかる課題に役立ちはしない。

もちろん日文研の研究者は、日本の歴史、思想、文化の分かりにくい部分を解明するという重要な作業を継続するのがよいし、また続けるのが望ましい。しかし学術文化のより大きな、国をこえた領域では、地域研究からグローバルスタディーズへの重要な転換が起こってきている。たとえば歴史学の分野では、一国史研究から地域間の、そして世界の歴史研究へと、次第に研究の重心が移ってきている。同様に、21 世紀の日本研究も、単に日本を世界から切り離して研究することをこえ、日本をより大きな世界の経験の中で統合する方向へ焦点をあてることで、学術上の成果はさらに上がるだろう。単に「日本とは何か」を問うのではなく、「日本から見た世界とは何か」へと問題意識を移すことにより、日本研究は、世界で耳を傾けてくれる人をより多く獲得しよう。日本の経験が、現代世界の進化と諸問題の解決に関連を持てば持つほど、日本が 21 世紀の世界で持つ意味はそれだけ一層大きくなる。

この目的成就のために、私は、日文研独自の知の分類法――いわゆる「3 軸 5 領域」――に向けて繰り返されてきた批判に賛同する。1995 年の外部評価は、「3 軸 5 領域」を「大部分無意味」（同報告書 p. 60）とし、2010 年にロナルド・ドーアは、それを「形而上学的分類の演習」と呼んだ。日文研の創設者たちが伝統的な学問分野の領域間の対話を促進するためにこの分類を案出したのは明らかである。確かに、「3 軸 5 領域」は、日文研という組織独自の構造として、日文研内の多様な専攻をもつ研究者間の対話を促すのに役立ったかもしれないが、日文研と外の世界との間のコミュニケーションを促進することは全くない。それどころか、日文研が日本研究の国際舞台でのリーダーとして働ける可能性を著しく限りあるものにしている。

第一に、「3 軸 5 領域」は、日本と日文研の独自性を強調し、すでに述べたように、グローバルな流れに逆行する。積年の歴史を有する学問諸分野の領域――それは違和感を与えず、既に確立し、世界中で認知されている学問の分類である――を掲げていないため、世界の日本研究者や日本研究以外を専攻する研究者と繋がる好機を、日文研がみすみす逸していることが、より重大な点である。「3 軸 5 領域」を学問の正統 5 領域――たとえば政治、経済、社会、歴史、文化――で置き換えれば、直ちにグローバルな諸課題に関する、国を超えた対話の場に加われるし、現在の狭隘化している日本研究の限界を簡単に超えることができるだろう。かかる伝統的な分類を再び取り入れると学際性の後退をみるという不満が

あろうが、これに対しては、世界の政治、経済、社会、歴史、文化に関する非常に多くの既存の国際的な学術討論の場に参加することのほうが、学際的な対話の消失問題よりもずっと重要である、と主張したい。

さらに重要なことに、この伝統的な分類を採用するならば、国際基準に照らしたさいの日文研の知的な強みと弱みがより浮き彫りになろう。現在の日文研の専任教員には、７名の文学の権威ある研究者、６名の近現代史研究者、５名の文化関係の専門家、３名の中世史研究者、２名の宗教の専門家、１名の美術史家がいる。日本研究機関の長であれば誰でも、このリストを目にしたら、日文研は社会科学、特に経済学、政治学、社会学の研究者を嘆かわしいほどに欠いていると断じよう。アメリカの大学で社会科学系の諸学科が地域研究の専門家を採りたがらない傾向が強まっていることを考えると、日文研のこの弱点はアメリカの大学にもうかがえることが分かる。言い換えるならば、もし日文研が日本研究の社会科学系の専門領域を拡張するよう真剣に取り組めば、世界中で――アメリカのようにかなり発達した日本研究の市場においても――日本研究をグローバルに育成する新たな、そして重要な機会を手にするであろう。

2）研究活動

シンポジウム、出版、受賞の深い感銘を与える一覧表が証するように、日文研の研究者たちは、信じられないほどの数、領域、質の学術活動に従事している。しかし不幸なことには、日文研は、このめざましい生産性に見合うだけの国際的な評価をまだ得ていない。問題の本質は、出版や学術活動を外部にどう見せるか、ということである。

出版については、『国際研究集会報告書』と『海外シンポジウム報告書』は日文研の所内刊行物で、日文研の研究者とシンポジウムの参加者だけが読むことができ、日本の大学の紀要に似た性格を持つ。この 2 種の刊行物は市販されておらず、またアクセス可能な標準的なオンライン学術データベースにも入れられていないため、日文研の壁の外ではほとんど価値を持たない。これは廃止し、日文研のシンポジウムの参加者は、それぞれの発表論文を通常の査読制度のある学術誌に投稿することを勧めたい。もし日文研が、開催したシンポジウムの明確で具体的な記録を欲するのであれば、それを日文研のウェブサイトの目につきやすいところに発表し、そこに１）シンポジウムの共催機関と場所、２）シンポジウム参加者と所属の一覧、３）出席者数、４）シンポジウム後の出版物一覧、といった情報を含めるようにすれば、もっと意味あるものとなろう。

上記の２点の刊行物よりも成功を収めているのが、毎月開催される日文研フォーラムでの外国人研究員の発表報告の記録である『日文研フォーラム報告書』である。この報告書はデジタル化されて日文研のウェブサイトに載せられており、月々の閲覧数も多い。日文研の

年 2 回発行の日本語の『日本研究』と、毎年発行される英語の *Japan Review* はどちらも立派な査読制度を有する学術誌に成長しており、また日文研のウェブサイトからのアクセスも一定してかなりの数に上っている。ただ日文研の研究者は、『日本研究』を共同研究報告の準備のための発表の場として使わないほうがよい。両誌の内容については、多岐にわたりすぎているきらいがあり、もう少し焦点を絞った編集方針を確立すれば、競合誌の中でより抜きん出た存在となろう。

日文研は、『日文研叢書』、日文研モノグラフ・シリーズ、日文研翻訳出版協力プロジェクト、という 3 つのシリーズ出版に予算を割り当てており、これまで多くの力作を生み出してきた。しかし日文研の編集スタッフと市場担当部門の規模の小ささを考えると、過去に Routledge や Lexington や Brill との間で行っていたように、学術出版を扱える大きな専門の出版社と協力して出版するのが最も理にかなった方途であろう。あるいは、専門的な出版社や大学出版局に完全に委託してしまうのがよいだろう。

日文研の研究者たちがその出版業績が保証してくれそうに思える国際的な評価を得ていない 1 つの理由は、日文研の発行する媒体に過度に依存しているからかもしれない。もう 1 つ考えられる理由は、英語での論文刊行数の少なさである。定期的に英語で発表している日文研の研究者はほんの一握りにすぎない。過去 7 年間の主要業績の書評の一覧を見ても、日本語以外の学術誌で書評されたものは 1 件もない。過去 12 年間の日文研研究者の刊行物の受賞歴一覧を見ると、日本以外の組織から受賞したものとして 1 件だけ目に留まる。日文研の国際的な声望を高めていくには、可能な限り、日文研内部の出版物ではなく、査読のある出版社や学術誌に、英語で発表し、またたとえ日文研主催のシンポジウムへの参加が制限されても、国際的な会合に定常的に参加すべきであろう。

3）研究資料等の収集と発信

ロナルド・ドーアが 2010 年にいみじくも述べたように、日文研の蔵書とデータベースは「見事」である。それは、日文研の共同研究への熱心な取り組みと同じくらい日文研の明確なアイデンティティーにとり重要であり、真の知的資産になっている。『要覧』(2015 年版)によると、日本語図書 429,928 冊、外国語図書 62,606 冊、そして目録類 7,566 点、を所蔵する。また日文研は、他に類を見ない多くのデータベース――初期の写真、地図、春画、妖怪等――でも高く評価されている。図書館の利用者数は 2004 年から 2014 年にかけて横ばいないし減少を示しているが、データベースへのアクセス数は一貫して多い。

このデータベースへの日本側と外国側とのアクセス頻度に見られる顕著な差は、日文研の図書館の所蔵物が、日文研の研究者の国際的な舞台での見せ方と同様な問題を抱えていることを示している。日文研がこの知的資産を近年率直に宣伝し始めているように、私もあ

らゆる機会を捉えてそれを勧めたく思う。たとえば、海外でシンポジウムを開催するたびに日文研についての広報を行うこと、そしてアジア研究協会、欧州日本研究協会、アジア研究協会のアジア支部等の重要な国際討論の場において、レセプションを開催すること、ブースや説明会を設けること、などを勧めたい。

4）研究者育成

前述の通り、日文研は 1987 年の創立以来、400 名を超える外国人研究員を受け入れてきた。その多くは、自らのキャリアを構築していくのに大いに手を貸してくれたとして日文研に恩義を感じている。ロナルド・ドーア実施の 2010 年のアンケートに回答を寄せた、1989 年から 2009 年の間に在籍経験をもつ外国人研究員の 40 %もが、日文研での滞在を非常に高く評価している。また、外来研究員の数が 2010 年の 24 名から 2014 年には 38 名へと大幅に伸びていることをも、ここで再度強調しておいてよい。この外来研究員の増加は、いくつかの点で、有能な外国人研究員の数が一定していることよりも強い印象を与える。というのも、外来研究員たちは、資金供与を日文研以外から受けていながら日文研に籍を置いて研究することを選んでいるからである。増加している外来研究員たちは、優れた研究者と優れた資料を所蔵する図書館とを擁する日文研の魅力が増大しつつあることの明らかな徴である。また、外来研究員のほうが外国人研究員よりも概して若いことを考えると、日文研がキャリア形成に大きな与える影響は外来研究員のほうが外国人研究員の場合よりも、一層有り得ることであろう。

5）外部資金獲得状況

予算が次第に削減されていく状況の中で、日文研の研究者は、できるかぎり国際舞台での研究発表等を通して頻繁に外部に姿を見せること（上記２を参照)、研究のための潤沢な外部からの資金を取得できるような地位につくこと、が一層重要である。日文研所属の専任研究者は少数ではあるものの、公正な研究休暇制度が確立されること、そして研究者が外部の特別研究資金に応募するよう強く促されること、がのぞましいであろう。

国際日本文化研究センター外部評価に係る意見書

中牧　弘允　委員

①研究協力

海外との研究協力が日文研創設の有力な決め手となった。その原点をふまえ、日文研の国際研究協力活動は海外研究者を年間約 15 名招聘することを軸に多様かつ多彩に展開されている。その一方、海外における研究集会に日文研が積極的に参加するだけでなく、海外で毎年独自のシンポジウムを最低 1 回主催し、かつ国内外で年数回の国際研究集会も開催している。その回数や内容については予算の範囲内で主体的かつ適切におこなわれていると判断される。

あえて問題点を指摘するとすれば、国際学会や国際研究集会に日文研の教員がどの程度参加しているかである。そうした件数は提供された資料には含まれていないが、今後はとりわけ招待講演に注目したい。というのも、招待講演は研究者コミュニティにおける高い評価と連動しているからである。また、研究者コミュニティにおける役職なども研究協力のひとつの目安となる。

他方、国内との研究協力に関しては、積極的な姿勢はあまりみられない。大学や研究機関との協定がまったく締結されていないことが、そのひとつの証左である。

②研究活動

個人研究は第一世代の「スター」の時代には傑出していたが、第二世代の「はえぬき」の時代にもやや縮小しながら維持され（『新・日本学誕生』参照）、現在も国内の受賞歴や書評などを見る限り突出した研究者を何人も輩出しつづけていることがわかる。それ自体は国内のどの研究教育機関と比べても遜色ないとおもわれるが、個人研究において国際的に卓越した研究者であることをしめす証左はまだ少ない。

共同研究は日文研のひとつの柱であり、毎年 15 件ほど 2～3 年の期間で走っている。参加する研究者も国内外合わせて 400 名～500 名と多数にのぼり、活発に展開されている。研究成果も出版やデータベースのかたちで蓄積されており、刊行年も研究会終了後 1～2 年後が多く、成果物のない共同研究が数えるほどでしかない点も高く評価される。研究期間内に出版される場合もあり、それが合評会や国際研究集会と相まっていることは研究経営の面からも特筆される（例：万国博覧会と人間の歴史）。また、共同研究が前述の国際研究集会（年 2～3 回）と組み合わさっていたり、科学研究費による調査研究を活かしている例も少なからずみられ、運営面でも評価される。

しいて問題点をあげるとすれば、第 1 研究域から第 5 研究域まで行儀よくおさまっていることである（『日文研 2015 年版要覧』15 頁）。しかも教授が研究代表者となっている比率が高い（平成 27 年度：11/14≒79％）。これには歴史的な経緯があり、「スター」時代の教授の人数とほぼ合致する。ちなみに国立民族学博物館（以下、民博）では共同研究は

「一般」と「若手」に分かれており、平成 26 年度の場合、「一般」は 33 件（85%）、「若手」が 6 件（15%）、計 39 件（100%）である。「一般」のうち館内は 13 件（39%）、館外が 20 件（61%）と館外が館内を上回っている。しかも「館内」のうち教授が研究代表者をつとめるのは半数以下の 6 件（43%）にすぎない。換言すれば、共同研究全体のうち民博教授が研究代表者となっているのはたった 15%（6/39）である（以上、『民博 2015 年版要覧』12-13 頁）。日文研教授の 79%と単純に比較はできないものの、日文研が若手や所外の研究代表者にもう少し門戸を開いてもおかしくないことはこの数値からも検討されるべきであろう。

もうひとつの問題点は、機関として推進する研究の欠如である。日文研は「スター」教授とそれを継承する「はえぬき」教授を中心に研究の風土や特性を形成してきた。ようやく 2015 年度から人間文化研究機構のなかで基幹研究プロジェクトが動き出し、その欠を補うという意味で注目される。2016 年度からは「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」が開始され、プロジェクト推進室（仮称）も設置される。これは中期目標・中期計画に盛り込まれ、機関拠点型の基幹研究プロジェクトとして推進されるので、日文研の顔としての役割も当然になっていくこととなる。中心的役割を果たす教員はほとんど第三世代に属し、「はえぬき」世代以降に着任した研究者たちで占められる。大衆文化を軸として新世代の研究者たちによる独創的な成果に期待したい。

また、同プロジェクトのなかで国際的展開とともに国内の大学への貢献もうたわれているので、前項の研究協力で指摘した国内の大学や研究機関への協力がなされるものと期待できる。

③研究資料等の収集と発信

図書資料については、さいわい第 3 図書資料館が増設され、約 60 万冊の収蔵スペースの確保ができた。蔵書の増加にともない利用頻度も増えると想定されるが、過去 10 年間の統計を見るとほとんど横ばい状態である。その要因の洗い出しが必要と考える。

データベースやリポジトリの集積にも並々ならぬ努力がはらわれている。これまでも絵巻物、浮世絵、艶本、怪異・妖怪など大衆文化にかかわる分野にアクセスが多かったが、今後は大衆文化が基幹研究プロジェクトとして推進されるので、意識的・集中的・優先的に利用度の向上をめざしてほしい。

④研究者育成

「スター」の時代は組織が逆ピラミッド型で若干の「はえぬき」以外に後進の育成はほとんど眼中になかったとおもわれるが、「はえぬき」の時代には総合研究大学院大学の院生に加え機関研究員なども多少育成の対象になったかもしれない。しかし、基本的に教授を中心とした日文研体制は変わらず、研究者育成に若干の課題を残している。

とりわけピラミッド型の組織にみられる競争原理が日文研にはとぼしいと考えられる。教授のポストに見合った数だけ共同研究が組織されるというのは、いわばその「遺制」である。切磋琢磨して研究の質を高め国際的な評価を獲得していくとするならば、研究者間に競争原理を導入することが肝要である。教授の数を徐々に減らし、准教授や助教の数を増やしていくことは後継研究者の育成にとっても重要なポイントである。ピラミッド型とまで言わずとも、せめて円筒型をめざすことは検討に値する現実的な対応かもしれない。

研究者育成、つまり個人研究や共同研究における業績評価や昇進人事において競争原理を重視することは、研究活動のさらなる活性化につながると考えられる。第三世代が中心となった現代においては、そのなかから多くの「スター」を輩出させることが重大な課題である。外から「スター」をリクルートすることも場合によっては必要だが、むしろ当該機関のなかから「スター」を積極的に創出していくことが日文研には求められていると思う。

⑤外部資金獲得状況

科研費の採択数は過去 12 年間で平均約 16 件（194/12）である。2006 年から 5 年間、半減に近い落ち込みがあった。理由は判然としないが（世代交代?）、それ以降、回復傾向にある。しかし、2013 年と 2015 年の新規採択件数が 3 というのはさみしい。ちなみに過去 5 年間の採択件数（新規・継続）を民博と比較すると、日文研は平均 19 件（96/5）であるのに対し、民博は 52 件（262/5）である。2015 年の専任教員数は日文研 26 名、民博 55 名である。単純に比較はできないが、数値の示すところは以上である。

⑥その他

a. マネジメントとマーケティング

日文研の研究経営は長いあいだ卓越した「スター」級のリーダーたちによって担われてきた印象が強い。そうした研究者はグローバル時代のすぐれた経営者では必ずしもない。日文研が日本研究の国際的水準を高め学際的・総合的にハブ機能を果たそうとすれば、それに見合う経営能力や経営センスをもつリーダーたちが役割を分担し、時に代表者をつとめる共同研究を控え、時に国際的な学術経営の手法を学んで、名実ともに国際日本研究の地位を高める体制を構築する必要がある。それは「スター」による個人プレーの集合ではなく、「スター」予備軍による戦略的経営統合とでも言うべきものかもしれない。

さいわい中期目標・中期計画に掲げた基幹研究プロジェクト「大衆文化」は「顔の特徴が見える日文研」、「国内外に開かれた日文研」を演出・創出するには格好の試金石となりうる。「大衆文化」を軸に世界の潮流を読み、学術的な市場の開拓をめざすなら、日文研は国際的にも優位な位置を確保しつづけるだろう。とはいえ、地域や国により事情は異なるので、市場の拡充にはマーケティングが欠かせない。

かつての「スター」軍団を失った現在、日文研の二つの柱―共同研究と国際研究協力―を支えるうえで、マネジメントとマーケティングに卓抜なる能力を発揮しうる人的・財的な資源と環境をととのえることが肝心である。

b. 海外研究交流室

上記のマネジメントとマーケティングを整備するうえで、海外研究交流室の果たす役割は大きい。日文研がグローバルな舞台で活動する際もっとも効果的な機会を選別し、限られた資源を投入する最適な方法を実践しなければならないからである。海外研究交流室には国際研究協力の司令塔のような機能が求められている。現状では、課せられた業務を可もなく不可もなく遂行しているという印象を受けた。海外研究交流室のさらなる強化を検討していただきたい。

c. 不要なもの

研究域・研究軸はわかりにくいだけでなく、創設以来ほぼ固定化している。また研究資源の配分が競争に優先するかのような印象をあたえている。創設の「遺制」ともいえるので、廃止ないし再構築の検討が必要と考える。

d. 活用すべきもの

かつてコモンルームでは長老格の中西進教授や芳賀徹教授が陣取り、とりわけ外国人研究者との知的交流を楽しんでいたとうかがった。コモンルームでは意識的で積極的な参加をとおして想像力や創造力が生みだされてきたようである。本腰を入れてグローバルな日本研究をめざすなら、古き良き伝統の活性化を望みたい。

国際日本文化研究センター外部評価に係る意見書

尹　　相仁　委員

私は日文研が歩んできた約 30 年間の歴史をつまびらかに知っているわけではない。1 年間の長期滞在と数回のごく短い滞在の経験から得られた印象と主観的な認識に基づいて言うならば、日文研はなかなか居心地のいいところである。空気が柔らかく、流れがよい。時として、張りつめた感触を覚えることもあるが、これすらある種の爽快さに近い。

こうした自由闊達な雰囲気と内的規律がうまく調和する知的共同体は、そう多くはないだろう。わずか 30 年足らずで成し遂げた成果はまさに驚嘆に値するというしかない。日文研ができた頃は、日本国内で「国際化」が叫ばれていた時代であり、また日本にたいする関心が世界的に広がる時でもあった。時代の要請とともに生まれた日文研は、期待を十分満たしてきたが、ここに来てさらに新たな役割を背負いつつあるかのように見受けられる。

すでに一部の国々でみられるようになった、日本にたいする関心の低下という外部環境の変化のもとで日本文化研究をどのように展開していくべきかは、ただ日文研のみならず世界の日本研究者にとっても、差し迫った課題である。日文研の今後の動きに注目せざるを得ない所以である。

こうした重大な転換期を迎えている日文研に期待したいのは、やはり「国際的に」という方向・方法に徹底することである。日文研が創設の時から内外の注目を集めてきたが、その後の 25 年間、堅実に存在感あるいは可視性を高めてきたかという点では、疑問が残る。今後、国際的にそして隣接学問分野にまで拡散効果が期待できる研究テーマの発掘とともに、研究成果の英語による発信を増やすことが課題であると思われる。

日文研が中期目標・中期計画として掲げる日本の大衆文化プロジェクトには、日本文化研究の世界的な拠点としての地位をゆるぎないものにしたいという強い意志が感じられる。学問社会がとかく疎かにしてきた大衆文化を見直し、それによって日本文化史を再定義・再構築したいという問題設定には、学問の枠組みや在り方をもにらむ「本気さ」がみてとれる。設立以来、自由で柔軟な気質を培ってきた日文研だけに、大衆文化による日本研究の新しいモデルの創出という研究目標は、もっている力量と資源をもっとも効果的に活用できる恰好の「場」となろう。目標として掲げられている「新しい日本像と文化観の創出」においての「新しい」という形容詞が、従来ハイカルチャ中心の日本研究が目指してきた「真の日本 Real Japan」の再構築ではなく脱構築の方向性を打ち出している点も評価する。このプロジェクトの推進とともに、日文研が新たな「ソフト人文学」の最前線となることを期待したい。

１　研究協力

海外との研究協力は、「国際」という言葉を冠した日文研に与えられた最も重要な役目であろう。日本には「国立」を名乗り、人文学の領域で日本研究をする研究機関がいくつもあるが、研究の中身や方向からは往々にして内向き的な印象を受け勝ちである。ところがここ 10 年の間、アジアのいくつかの国々とアメリカやヨーロッパに見るように、日本国外における日本文化研究の勢いに陰りが見え始めているなかで、こうした内向的な自給自足の知識生産メカニズムでは、状況の悪化を加速させるだけであろう。こうした意味からして、日文研が行っている国際的な研究協力活動は、一層その重要性を増しているといえる。

１－１　海外における活動

日文研の教員が海外へ出向いて現地の中心的な大学と共同で開く海外シンポジウムは、双方にとって有意義な活動である。シンポジウムの開催地として日本研究の歴史が比較的に浅いアジアの国が半分以上を占めているが、これを咎めるわけにはいかないだろう。同じ理由から、北アフリカや南米での開催も意義があると思う。さらに、海外の日本研究機関との学術交流の詳細をまとめた『世界の日本研究』シリーズや「海外シンポジウム報告書」などは、日本国外にいる日本研究者には非常に貴重な情報であり、日文研が世界における日本文化研究のネットワークづくりにおいて主たる担い手であることを強く印象づける。

１－２　国内外関係諸機関との連携・協力

コメントなし。

１－３　外国人研究者

日文研は毎年 15 人くらいの日本研究者を受け入れている。招請された研究者たちの多岐にわたる研究テーマは、海外における日本研究の成熟さを示すものであり、日文研が世界の日本文化研究のエネルギーの受け皿の役割を果たしてきたことは高く評価すべきである。

だが、ここ 10 年間の受け入れ状況をみる限り、1980、90 年代の外国人研究員の面々に比べて「有力な研究者」が段々少なくなっているような印象を受ける。言い換えれば、来る/呼ぶべきひとは一通り来てしまったので、人的資源のストックが脆弱になりつつあるためではないかと思う。

一定の期間が過ぎれば一度日文研に来たことがあるひとでも再度応募することができるようになったのは、幸いであろう。しかし、日文研がアメリカやドイツに存在する高等研究所のような「格」を維持するためには、公募のみに頼らず世界中から優秀な研究者を集めようとする、積極的なリクルート活動が必要だろう。

もうひとつ提案したいのは、若手日本研究者の発掘と支援である。たとえば、毎年 15 名の定員枠から 2 名ほどを減らし、その費用で若手の日本文化研究者を 3，4 名ほど招請

する、という方法もあるだろう。ポストドクトラルフェローという受け入れ枠を新設することを強く提言したい。この提案の背景について少し述べさせていただく。

1980、90 年代は世界的に日本研究者の数が増え、大学などへの就職もさほど困難ではなかったが、2000 年代に入ってからは韓国やアメリカなどで日本研究者を取り巻く状況が厳しくなっている。就職に成功する若手研究者は全体のほんの一部に過ぎず、こうした窮境に置かれている若手を勇気づける支援があってこそ、次世代による日本研究の持続も望めるであろう。

2　研究活動

評価資料として提出された研究活動の目録は、20 数名からなるこの研究集団の豊かな個性と優れた能力を示しているものといってよい。研究の内容は日本文化研究領域において中核となる主題から、いままで学問の場であまり取り上げなかった大胆で、かつ斬新なテーマまでを網羅する。共同研究の成果をまとめた出版物や定期的学術雑誌はその多くにおいて学術的に高い価値をものであり、日本国内外の知識社会に寄与するところが大きい。とくに、共同研究の代表者を海外からも募る、という開かれた指向なども、「国際的に」日本文化を研究する機関、という日文研本然の在り方に充実に沿うものであり、高く評価したい。

だが、日文研の研究活動が「国際的に」という方向性や方法に符合するためには、依然として改善すべきところがあるのも事実であろう。たとえば、共同研究やシンポジウムの主題そのものが、一国の枠組みを越えにくい「閉じた」ものがあったり、シンポジウム参加者が日本人だけで占められるなど、人的構成の国際性も研究代表者ごとにばらつきがみえるという点である。

世界における日本文化研究のハブとして日文研に与えられた役割は、新しい研究成果を日本国内のみならず、国外へも発信することにあるだろう。だが、日本語による発信がほとんどを占める現状は望ましくない。現に多くの国々で英語を使用して日本文化研究を行っているうえに、日本語がわからないものの隣接する部門で活動する外国の研究者にまで発信を拡散するためには、英語による発信も増やしていく必要があるのではないか。

3　研究資料などの収集と発信

日文研図書館の充実さについてはすでに定評があり、私自身もコレクションの質の高さや職員の方の専門性を伴った丁寧な対応には常に感心せざるを得ない。

日文研が蔵する貴重資料のデータベース化は、かなりの程度まで進んでおり、一般人や学問社会にとっては非常にありがたいことである。

ただ、二つだけ提言したいのは、紙資料の収集に並行して、すでに広がりつつある図書館のデジタル化という趨勢に合わせて機器の導入やスペースの再配置などの工夫もはじめていただきたいということである。構築されたデータベースの定期的な管理（更新を含

む）が行き届いていない点も指摘したい。例えば、世界の日本研究機関のリストのうち韓国の項目だけをみても、とっくになくなっているか、統合され名称が変更された学科や機関が依然として名を連ねているほか、ここ 4，5 年間新しく設立された学科、機関などのアップデートもされていない。

４　研究者育成

次世代を担う優秀な日本文化研究者を育てることは、日文研の教員たちにとって大事な役目であろう。資料でみる限り、毎年 2〜5 人の学生が博士課程に入り、3〜5 年後に学位を取り卒業している。日本人学生と留学生の割合にもバランスがとれていると思われる。外目からみて、少人数の学生がトップレヴェルの教員たちの指導を受けるという、まさに少数精鋭の教育の理想が実践できる環境と受け止める。

だが、卒業生の論文の主題は一般の大学のそれとあまり変わらなく、日文研でうけた教育の特色やあるいは学風といったものが見えてこない。研究の面で名声を得ている日文研だけに、教育においても他をリードできる成果を期待するのは当然であろう。日文研ならではの特色を打ち出すことは、自然に外に向かっての可視性を高めることにつながるだろう。

５　外部資金獲得状況

トップの研究機関に相応しい実績ではあるが、優秀な実績を上げた人にインセンティブを与えるなど、より競争の原理が作動する環境を作っていただきたい。

６　その他

なし。

国際日本文化研究センター外部評価に係る意見書

ジャン=ノエル・アレキサンドル・ロベール　委員

Preliminary remarks

Before commenting on the activities of the International Research Center for Japanese Studies (hence forth “Center” or “Nichibunken”), I must start by describing briefly my contacts with the Center and the way I consider its activities have influenced the progress in Japanese studies in a part of Europe I know better, to wit France. I feel obliged as well, after having read previous reports by foreign specialists, to react to some of their comments that seem to reflect ideas widely spread in some parts of the Academe but that are in no way to be treated as self-evident truths. To follow them uncritically would be to the detriment of a field of studies that is already threatened by external forces and that does not need to be weakened from the inside. After my comments along the three points specified by the guidelines sent previously, I will conclude by some general comments about the future of the organization of research in the Nichibunken.

Although I had the chance to be invited once or twice to the Nichibunken during the nineties to attend international conferences there, and I had had regular contacts with Professor Yamaori Tetsuo before, I was invited to stay for a whole academic year in 1999-2000, where I was lucky enough to work in close collaboration with the much regretted Professor Yoritomi Motohiro. Besides this year of close contact with the life of the Center, I have regularly received their publications, periodical, monographs, newsletter, and recommended many a colleague or a post-graduate student who applied for an invitation. I may say that I am rather well informed on the current situation of the Center, even if I had not been asked to make this evaluation. The reason for that is simple enough: it is because the Nichibunken is a research institution in Japanese studies that most of the specialists could not do without. Or, to put it a little less emphatically, it is a very important asset in international research in the field of Japanese culture.

To me at least, the year I spent there has been of tremendous importance in the development of my own research, that saw a radical switch in its orientation, and provided me with a new impetus that is still alive. I will come back to this point in my conclusion, as I think that such a change in methodological approach was in no way unique to me, but that it could be observed with other Japanese scholars as well. It is a direct effect of the general conditions of work at the Nichibunken and it is a characteristic that should be better defined in order to be developed into a consciously elaborated frame of research.

But before proceeding to the first point of the requested evaluation, I would like to comment on one more preliminary question. I am fully aware that it is a moot point and that my observations will do nothing to resolve it, but we simply cannot do as if we tacitly acknowledge as verified or well supported by fact what is but mere repetition of pseudo-truths. I would like to address here the often repeated assertion that what is the main *raison d'être* of the Center, that is "Japanese studies" , should not be considered as a valid discipline of study and that this very designation is devoid of any epistemological meaning.

To be sure, it may be relevant here to acknowledge that the Nichibunken itself has devoted too much time and energy in seeking for a definition and a clear-cut, perhaps ideologically motivated, elaboration of a field whose essence is doomed to be forever inaccessible. It might even be that the systematic translation of the Japanese *nihongaku* by 'Japanology', not a quite euphonic word by the way, seems to harp on the nerve of some people, as ought to be the same for 'buddhology', not to speak of 'silkroadology', but that is merely playing with words, with an esthetic motivation to boot. If we take a look at the fortune of the well-established word 'French studies' in the English speaking world, we would find that it is readily accepted everywhere, although I am sure there will always be the odd contrarian prophet to criticize it (and I could myself bring up some arguments against it), but I cannot find better defense for the adequacy and usefulness of the term that what write the publisher of the *Journal of French Studies* at the Oxford University Press: "French Studies *is published on behalf of the Society for French Studies. The journal publishes articles and reviews spanning all areas of the subject, including language and linguistics (historical and contemporary), all periods and aspects of literature in France and the French-speaking world, thought and the history of ideas, cultural studies, film, and critical theory."*[1]

Here again, it is more a matter of language or local world-views than a well-reasoned criticism of a discipline. That fact is most evident if we look for the entry "Russian studies" on Wikipedia: we have the surprise to discover that "Russian studies" were by-products of the Cold War! A ludicrous assertion that can perhaps be true for the US Russian studies (as Japanese studies there sprang from WW II), but is untenable if we take into account the European tradition, where Russian studies were established during the nineteenth century.

The concept of "Japanese studies" is therefore not deprived of meaning and must be

[1] Site of the *Journal of French Studies*, Oxford UP.

understood by analogy with other disciplines. It is naturally and primarily founded on the knowledge of the Japanese language, which is the common denominator for all the specialists of the field. It would be redundant here to recall that even a hard-boiled specialist of contemporary Japan would be unable to utilize his sources without an understanding of the language in its historical continuity. What would a student of Japanese politics, for instance, be able to do with the use of a locution like *shinkoku (kami no kuni)* in the mouth of a contemporary politician without at least an idea of its ancient meaning?

After these preliminary comments, let us move on to the three points of the guideline.

Team Research *(kyôdô kenkyû)*

The sheer concept of team research is problematic even when we have a stable team based on a small number of institutions, but when an institution decides on a theme and then endeavors to bring together researchers from a number of countries in order to work together, the problems soar to the sky. From what I understand, it may be that the complex system of team research elaborated along all those years responds to an obligation from the higher administration of education or research. My personal opinion, perhaps slightly against the grain, is that research should not be too strictly programmed. A perusal of the title list shows a great diversity in the topics which reflects a preoccupation for being all-inclusive and not to invite criticism from one side or the other, although we could easily find some formulations questionable from the point of view of prevalent academic tendencies (for example "comparative history of civilization"). But such a diversity is necessary if we are ready to concede that the term "Japanese studies" has still a meaning in the modern academic atmosphere, which of course is my point of view.

Such a diversity is moreover important in order to gather the attendance of a variety of international and Japanese researchers.

I must here point out that some team research made in the Nichibunken led to the publications that can be really called epoch-making. One of the best examples to my mind is the collection of articles on the origin of the Japanese language *Nihon-go keitô-ron no genzai* (Perspectives on the Origins of the Japanese Language) edited by Osada Toshiki and Alexander Vovin (2003). Although I am not a linguist, I saw by myself the influence of that book on a whole new generation of specialists of Japanese. It would have been more effective yet if there had been one English and one Japanese version instead of mixing together pieces in both languages, but if we consider that most of the readers were likely to

be fluent in the two, it was not so bad a solution after all.

One must command the care demonstrated by the Nichibunken through the evolution of the philosophy of its research teams through the years, showing by the same token the evolution of its own concept of Japanese studies. It is evident that the first years were under the influence of what we may euphemistically call a romantic view of the discipline: the foreign array of researchers as an unruly bunch spreading partial and partisan views about Japan that were damaging for its image and therefore for its foreign diplomacy. The role of the leading Japanese specialists was in consequence conceived as that of correctors: they would have shown to their invited counterparts what was the real Japan and what was to be thought in order not to fall in the pitfall of misunderstanding.

It is a tribute to the intellectual honesty of the successive directors of the Nichibunken that this pristine simplistic view of the relationship between Japanese and international researchers was gradually discarded. It was a rather rapid evolution and led without too much turmoil, at least perceptible from the outside. I was particularly impressed by the effort carried out to trust the direction of research project to international specialists.

Research Cooperation *(kenkyû kyôryoku)*

Through those programs, the Nichibunken has achieved a very important aim: to give self-confidence and autonomy to researchers issued from countries where the history of Asiatic and Japanese studies was still very young. I do not speak of most Western countries, where the self-confidence of the specialists is assuredly not a quality they lack, but for Eastern Europe or Latin America, I am sure that the Nichibunken has been very efficient (Arab speaking countries for instance).

Specialized Publications *(gakujutsu shuppan)*

The Center most promote the publication in languages other than English of chronologically successive monographies in the different fields (ethnology, buddhism), so as to present the young researchers a quick way to get familiar with the history of their own field.

It is emphatically to be wished that the pursuit of the digital projects be made on the basis of totally free accessibility: no login nor password. It is a necessity to put as many primary texts as possible, in manuscripts and old editions.

What kind of future for the Nichibunken?

In conclusion, it would be hard to overestimate the tremendous work achieved by the Nichibunken in its nearly thirty years of activity. Its evolution from a voluntaristic institution whose aim it was to impress its own idealized view of Japan to the world toward a fully academic research institution open both to traditional and innovative research topics deserves approval and admiration.

Its constant efforts since the turn of the century to find other ways of bringing together international and Japanese scholars not in a hierarchic or so to say scientifically dictative relationship but on an equal basis of exchange of competence seem to have been really successful.

My advice would be to basically go on with these innovative ways of doing Japanese research, innovative in the sense that very few and far between are the international learning institutions that would thus endeavor in a systematic way to internationalize or de-hierarchize their research projects. The Nichibunken should therefore continue its efforts along these lines.

But at the same time, not only from the observations I made in the preliminary part, but also from the talks I have had with other guests of the Center, I am confident there is a major innovation to bring to its operation.

As I said, the year I spent at the Nichibunken was decisive for the evolution of my approach to Japanese studies. I am sure that this evolution was brought about not only by my participation to the seminary held by my Nichibunken counterpart professor, but also by my contacts with the participants coming from every kind of scientific institution in Japan and abroad, by my use of the library (by the way, I find very obtuse critics of that library for having too many foreign works on Japan, to the contrary, it is all the more precious that we can find there books in languages other than English that very few would have a chance to see elsewhere) and my frequent conversations with specialists in other fields. While I participated regularly to the seminary, I was not asked to be a full member in it and I was left pretty free to pursue my own research. This atmosphere of complete freedom in an ideally rich environment gave the chance to reflect for a year on my own work and approach to Japanese culture and induced me to define more clearly what really interested me.

To put it in one word, the environment given by the Nichibunken corresponds most exactly, or at that time corresponded, to what we might expect from an ***institute of advanced studies (IAS)***. I can even say it more firmly now that I have been for a number of years chair of the scientific council in one of the four Institute of Advanced Studies in Nantes. So far as I know, Japan lacks such an institution, although some years ago the University of Nagoya established a ten year program that was modelled on the IAS, but it was not pursued. We should be careful here on the choice of the words. The first IAS in the world was at Princeton and was meant to be a place totally free were confirmed scholars were only expected to reflect for some years on their work without obligation of publication and, it goes without saying, without obligation to attend or organize seminars or conform themselves to a definite research project. As far as I know, the places that go in Japan, and for that matter in France as well, under the name of IAS do not follow that fundamental principle. Only one in France does it (the Institut d'Etudes Avancées at Nantes), and the Berlin Wissenschaftcollege as well.

I am sure that the Nichibunken is already provided with all the necessary infrastructure of an IAS. Indeed, I can see now retrospectively that it had already most of the characteristics of such an institution when I was there. To take the example of the IAS I frequented most assiduously, the only obligations of the fellows is to partake together of a meal at least two or three times a week. Public lectures are welcome but not mandatory, nor the organization of a seminary.

If the Nichibunken could crown its scientific structure with the possibility offered to teachers and researchers to come here for a year of reflection about their work and their discipline, thus stimulate and being stimulated by the researchers working on a project, I am certain that the Nichibunken would add a touch a perfection to its structure that would made it a unique institution in the world, an Institute of Advanced Japanese Studies.

Conclusion

My shorter conclusion can be expressed in a few lines: the Nichibunken has had since its foundation a tremendous impact on the development of Japanese studies as an independent academic discipline outside Japan. The number of international specialists of renown who have met significant study sojourns in this institution speaks for itself. There are very few countries whose tradition of Japanese studies has not been influenced in depth by the interaction with the Nichibunken. This is true for individual researchers as well as for collective research programs.

The scientific success of the Nichibunken activities is overwhelmingly due do the academic freedom it has succeeded to confer to its researchers and guest-researchers, thanks to its original structure so different from classic universities and research-centers.

With the Nichibunken, we have a unique research structure which should be best compared with the Institutes of Advanced Studies in the USA and some European countries (Germany, France). In the future, it would be greatly advisable to develop as far as possible the Nichibunken alongside the structure of such Institutes of Advanced Studies. Japan would thus boast a unique institution: an Institute of Advanced Studies devoted to Japanese studies. The Center is already provided with all the necessary characteristics, it should not be so difficult to develop them into a full-fledged institution.

A last word pertaining to the standard evaluation process. Such an original institution as the Nichibunken should absolutely not be subjected to the same evaluation procedures as classic institutions. The impact of the Nichibunken is both deep and diffuse. The best way to appreciate its action is to ask the individual opinion of recognized individual scholars.

I strongly recommend that new means be put to the disposal of the Nichibunken to further and develop the characteristics described above that make it an exceptional research center.

国際日本文化研究センター外部評価に係る意見書（邦訳）

ジャン=ノエル・アレキサンドル・ロベール　委員

はじめに

国際日本文化研究センター（以下「日文研」と表記）の活動についてコメントする前に、私自身のこれまでの日文研との関係と、日文研の活動が、ヨーロッパの中で私が比較的よく知っている地域、すなわちフランスにおける日本研究に対してどのような影響を与えてきたかについて、手短に述べておかねばならない。また、外国人日本研究者による前回の意見書を読んで感じたのだが、その意見書のなかには学界の一部の趨勢になっている考えを反映していると思われるものの、決して自明の真実だと思うべきではない意見がある、という立場から、私の考えを述べておかねばならない、とも思う。そうしたコメントを無批判に受け入れると、すでに外部勢力によって脅かされているとはいえ、内部から弱体化する必要などのない日本研究が、余計な負の要因を抱え込むことになってしまう。以上を前置きとした上で、事前に渡されたガイドラインに提示された３点について私の意見を述べ、最後に結論として、日文研における研究組織の今後のあり方について一般的な所見をいくつか述べることとする。

1990 年代に１度か２度、日文研で開催された国際研究集会に招待される機会を得たり、またそれ以前から山折哲雄教授と定期的に連絡を取り合ったりしていたが、1999 年から 2000 年にかけての１年間、頼富本宏教授――その逝去は大変惜しまれる――と密な共同研究を行う幸運に恵まれた。その１年で日文研での生活を親しく知ることができた上に、その後も日文研から出版物、定期刊行物、モノグラフ、ニューズレターが届けられ、また私のほうも、多くの同僚や学位を得た学生が日文研のいろいろな募集に応募するのを推薦してきた。今回の外部評価に係る意見書を依頼されずとも、私は日文研の現在の状況についてかなりよく知っていると言っていいと思う。その理由はまことに簡明で、日文研は、日本研究者の大部分が、それなしではやっていけない研究機関――少し控えめな言い方をしても、日本文化という学問分野の国際的研究において非常に重要な価値を持つ機関――だからである。

少なくとも私にとっては日文研ですごした１年は、私自身の研究の進展の上できわめて大きな重要性を今日まで持ってきている。それによって私の研究の方向性は根本的に変わり、新たな刺激――その影響は今なお感じられる――を受けた。この点については結論の部分でもう一度触れたい。日文研を体験したことによるそうした方法論上の変化は、別に私に限ったことではなく、他の外国人の日本研究者についても見て取れるからである。日文研の全体的な研究環境の中に、研究者に感化を与えるものが存在している。日文研は、その特質を意識的に練りあげた研究の枠組みへと進化させるため、その特質についてよりよい定義

を行うのがよいのではないか。

求められている評価の第１項目に移る前に、もう１点前置きとして述べておきたい。日文研の存在理由である「日本研究」という研究領域は、しっかりした有効な学問の一体系とは認められず、日本研究という名辞には認識論的な意味が欠如しているという、頻繁に繰返される主張がある。これは議論の多い問題であり、私が何か言ってみても解決することはないと重々承知してはいる。だが、真実まがいのものが繰り返し主張されているにすぎないのに、そういう主張を、証明されている、あるいは事実に裏づけられている、として認めるかのようなことは、私にはとうていできないことを申し上げたいと思う。

日文研が、本質が永遠につかめないことを運命づけられている学問領域の定義と、明確な――おそらくはイデオロギー的な動機に基づいていようが――構築を求めて、多大な時間と労力をかけてきたことは多とするに値しよう。「日本学」を「ジャパノロジー（Japanology）」――英語としてあまり響きがよくない語である――と翻訳するのは、「シルクロード学（silkroadology）」とまでは言わないまでも、「ブッダ学（Buddhology）」という学問名同様に、ある種の人々の神経に障りかねない。しかしそれは、すっきりした造語にしようとしているにすぎない。英語圏で確立している「フランス研究」（French Studies）という呼称は、（何やかやと難癖をつける一言居士も必ずいることだろうし、私自身、やろうと思えばあら探しくらいできるだろうが）世界中のどこでも問題なく受け入れられている。「フランス研究」という用語の適切さと有用性に関しての最もよい論拠は、オックスフォード大学出版局から刊行されている *Journal of French Studies* の出版者の次の言葉であろう――「*Journal of French Studies* は、フランス研究協会（Society for French Studies）を代表する学会誌である。本誌は、フランスの言語、（歴史的、また現代の）言語学、あらゆる時代、あらゆる面のフランス本国の、ないしはフランス語圏での文学、思想、思想史、文化論、映画、批評理論等、あらゆる領域に関する論文、評論を掲載する。」（★注）
（★注：Oxford UP の the Journal of French Studies のサイト）

ここで重要だと考えられているのは、ある地域の言語と、その地域の世界観であって、地域研究に対する理詰めの批判ではない。批判的立場の甚だしい例は、ウィキペディアの「ロシア研究」の項目に見られる。そこには驚くべきことに、ロシア研究は冷戦の副産物だと書いてある。確かにアメリカのロシア研究については（アメリカの日本研究が第二次大戦に出自を持つように）そう言える面があるかもしれないが、ヨーロッパではロシア研究は十九世紀に確立していて、ウィキペディアの記事は的外れというしかなく、とても支持できるものではない。

そうであれば「日本研究」の概念には意味がないというのもおかしな主張であり、たとえ

ば「フランス研究」などの他の学問分野と並べて考えて見る必要がある。日本研究は当然のことながら、まず日本語の知識に基づいており、それがこの分野のすべての研究者の共通項である。たとえ現代日本の実際的な研究者であっても、歴史的な連続性のなかでの日本語についての知識がなければ、資料が十分に読みこなせないのは言うまでもない。たとえば現代日本の政治家の口から「神国」(「神の国」)というような言葉が出てきた時、日本政治の研究者は、少なくともその言葉が古代にはどのような意味であったかを知らなければ、正鵠を射た理解にはとうてい至れまい。

以上を前置きとして、以下、ガイドラインに示された３点について述べることにする。

共同研究

少数の研究機関の研究者によって組織された比較的安定したチームの場合でも、共同研究という概念は、本質的な問題を孕んでいる。まして１つの研究機関がテーマを決め、いくつかの国から共同研究者を募ってチームを組む場合には、問題は計り知れない。私の理解では、これまで久しく苦心して組織されてきた共同研究の複雑なシステムは、上位の教育・研究機関からの要望に応えるものであった。研究というものは――私自身の気質にはややそぐわないのであるが――前もってあまり厳密にプログラムされるべきではないと個人的には考えている。日文研の共同研究の一覧を見ると、実にとりどりのテーマが揃えられており、それは各方面からの批判を招かぬように網羅的に、という配慮によるのであろうが、それでも最近のアカデミズムの主流から見ると、あるもの――たとえば「比較文明史」――には問題のあることが容易に指摘できよう。しかし、現代の学術環境の中で「日本研究」が今なお有意味である――無論、私自身はそう信じているが――と一般に認められるためには、そういう多様性は必要であろう。

さらにそうした多様性は、様々な国の研究者と日本人研究者を引き寄せ、共同研究に参加してもらう上でも重要である。

ここで日文研が主導した共同研究は、真に画期的と言いうるいくつかの出版物に結実したことを言っておかなければならない。私に思い浮かぶその最もよい例の１つは、日本語の起源についての論集である、長田俊樹、アレキサンダー・ボビン編『日本語系統論の現在』(2003)である。私は言語学者ではないが、この本の影響が新しい世代の日本語研究者全体に及んでいるのを見てきた。英語論文と日本語論文が混在している形式よりも、日本語版と英語版の２冊があった方がよかったのであろうが、大部分の読者は両言語に通じていると思われるので、こうした形式でも悪くはなかったのだろう。

研究者チームの思想が長年にわたって進化し、それに伴って日本研究の概念が進化を遂

げる中で、日文研が示してきた時代に適応するための心配りは賞賛に値する。初期のころは、（婉曲に言えば）ロマンティックな日本研究観の影響下にあった。外国人の日本研究者を、日本のイメージを損ない、国際外交上望ましくない、偏向したパルティザン的な意見を撒き散らす手に負えない連中と見なし、日本研究の指導的立場にある日文研は、それらを矯正することが自分たちの役割だと認識して、招聘した外国の日本研究者に真の日本を教え、曲解の陥穽にはまり込まぬように正しい考え方を示そうとした。

こうした日本人研究者と外国の日本研究者の関係についての純血主義的で素朴な見解を徐々に脱却してきたことは、日文研の歴代の所長の知的誠実の証しと言うべきである。進化のスピードは速かったが、少なくとも外から見ている限り大した混乱も起こらなかった。私が特に感銘を受けたのが、研究プロジェクトの方向性の決定権を外国人の日本研究者にも与えるようにしてきた努力（外国人研究者が主宰する共同研究の設置）である。

研究協力

研究協力プログラムを通して日文研は非常に重要な目的を達成してきた。それはアジア研究・日本研究の歴史がまだきわめて浅い国々から来た研究者たちに自信と自律を与えることである。西ヨーロッパの国々では、研究者たちはすでに自信を身につけてきているが、東ヨーロッパ、ラテンアメリカ、アラブ諸国等においては、日文研の協力が大いに役立っている。

学術出版

日文研は、若い研究者が自分の専門分野の歴史に早く馴染むことができるように、さまざまな分野（たとえば民俗学や仏教学）における歴史的に連続したモノグラフを、英語以外の外国語で出版してきた。

私が日文研に強く望むことは、ログインやパスワードを必要としない、基本的に完全にアクセス自由なデジタル・プロジェクトへの取り組みだ。手書き文書や古い版本等の第一次資料も、できる限り多くデジタル化し公開してもらいたい。

日文研の将来

日文研の 30 年に及ばんとする活動によって達成された膨大な成果は、どんなに評価しても評価し足りないほどだ。理想化された日本像を世界に広めるという初期の一種慈善的な機関から、伝統的テーマにも革新的なテーマにも開かれた十分に成熟した学術機関への進化は、是認と賞賛に値する。

20 世紀から 21 世紀への変わり目のあたりから、日文研は、日本人研究者と外国人研究者

の関係を、ヒエラルキー的な、いわば学問的な上意下達の構造から、平等の立場で相互の能力を共有し合う構造へと変える努力を不断に行いながら、協力関係を非常にうまく構築してきたように思われる。

私は日文研が、これまで行ってきたように、日本研究の方法を絶えず革新していくことを推奨したい。これほどまでに組織的な方法で研究プロジェクトの国際化と脱ヒエラルキー化に努力している国際学術機関はきわめて稀であり、日文研はその線に沿って一層の努力を継続すべきである。

しかし同時に、「はじめに」の部分で触れたように――そしてそれは日文研で私が話した他の研究者にも共有されている考えなのだが――日文研にはまだそれに向かって努力しなければならない大きな改革があることは確かである。

すでに述べたように、日文研で過ごした１年は、私の日本研究へのアプローチの進化にとって決定的であった。この進化をもたらしたのは、私の受け入れ教員だった日文研研究者主催の研究会への参加ばかりではない。日本や海外の学術機関から来た*多士済々*の研究者たちとのつき合い、他の専門分野の研究者たちとの回を重ねての会話、そして図書館の利用が大いに与っている。（日文研の図書館については、日本関連の外国の書籍が多すぎるという批判が一部にあるが、それは逆で、他所ではなかなか手に取れないような英語以外の言語の書籍があることは、日文研の図書館の価値をそれだけ高めている。）研究会には定期的に参加したが、毎回の出席を求められるわけではなく、私はかなり自由に自分の研究に打ち込むことができた。この理想的なまでに豊かな環境における完全に自由な雰囲気に身をおくことで、私は１年間、自分の研究と日本文化の方法論に沈潜し、自分の学的興味をより明確化することができたのだった。

一言で言えば、日文研の与えてくれるものは、高等研究所（institute of advanced studies: IAS）が与えてくれるものと似ているし、少なくとも滞在時にはそのように感じた。私は数年間ナントに４つある高等研究所の１つで学術評議会の会長を務めてきたので、そのことをより確信を持って言える。私の知る限りでは、日本には高等研究所のような機関はない。もっとも、何年か前に名古屋大学が高等研究所をモデルとした 10 年間のプログラムを計画したが実行されなかった。ただ何を以て高等研究所とするかについては注意が必要だ。世界最初の高等研究所はプリンストン高等研究所で、そこは研究一筋の学者が、数年間自分の研究にだけ没頭し、出版の義務もなければ、無論セミナーを組織したり、セミナーに出席したりする義務もなく、特定の研究プロジェクトにも縛られない、完全に自由な研究の場であった。私の知る限り、日本の研究機関や、ついでに言えばフランスの研究機関も、そうした基本的な原則を貫いているところはない。強いて言えば、フランスではナントの高等研究所が、

ドイツではベルリン国際高等研究所が、そうした自由を享受している。

私は日文研がそういう意味での高等研究所になるための必要なインフラをすでに有していると確信している。実際今振り返ってみると、私が滞在していたとき日文研はすでに高等研究所の特質のほとんどを備えていたことが分かる。私が最もよく行ったことのある高等研究所の場合、研究員の義務は、週に少なくとも２～３回、他の研究員と食事をともにすることだけである。公開講座を行うことは歓迎されるが、強制ではない。セミナーの開設についても同様である。

もし日文研が、他機関の教員や研究者が１年間、自分の研究や専門分野について、プロジェクト仲間たちと相互に刺激を与え合うことができる自由の場になれば、それが最後の完成の一刷毛として、現在の優れた学術的構造の上に加えられ、日文研は世界でも傑出した日本研究の高等研究所になれるだろう。

結論

最後に結論を簡潔に述べておきたい。日文研は、創設以来、海外における独立した学術分野としての日本研究にきわめて大きな影響を与えてきた。日文研にかなり長期にわたって滞在した著名な国際的日本研究者の多さを見てもそれが分かる。日本研究の伝統が、日文研との交流の中で深い影響を受けなかったような国はほとんどない。このことは多人数の研究プロジェクトについてだけでなく個々の研究者についても言える。

日文研の諸活動の学術的成功は、日文研所属の研究者や招聘した研究者に与えた学問的自由に圧倒的に負っている。それは日文研の元来の構造が、伝統的な大学や研究所とは大きく異なっているからである。

日文研の独特な研究構造は、アメリカやドイツやフランスなどの西欧諸国の高等研究所になぞらえて考えるのが最も妥当である。したがって日文研は今後、できる限り高等研究所の線にそって発展していくのがよいのではなかろうか。そうすれば日本は、日本研究に特化した高等研究所という、他に類を見ない研究機関を誇ることができるだろう。日文研はすでに必要とするすべての特質は備えているので、成熟した高等研究所に発展させることはさほど困難ではない。

最後に、こうした標準的な評価プロセスについて一言述べておきたい。日文研のような独自な研究機関は、昔ながらの伝統的な研究機関と同じ評価手続きに従わされるべきではない。日文研の影響は深くかつ広範であり、その研究活動を評価する最良の方法は、著名な研究者の意見を聞くことである。

改革のための新たな手段を日文研の裁量に任せる形で与え、これまで述べたような特質をさらに推し進め発展させて、日文研をまれに見る優れた研究機関に育てていくこと、これを私は強く勧めたく思う。

平成２７年度　国際日本文化研究センター外部評価委員会

実施状況

2015（平成 27）年 7 月 13 日(月)　 11 時 30 分～14 時 50 分

外部評価委員会（第１回）

（１） 国際日本文化研究センター外部評価委員会の趣旨等について

（２） 委員長、副委員長の選出について

（３） 今後の予定（日程、外部評価報告書の構成等）について

（４） 国際日本文化研究センターの諸活動について

2015（平成 27）年 12 月 10 日(木)　 9 時 30 分～11 時 53 分

外部評価委員会（第２回）

（１） 国際日本文化研究センター外部評価委員会（第１回）議事要旨（案）について

（２） 国際日本文化研究センターの諸活動について

（３） 外部評価報告書の構成等について

（４） 研究業績説明書の評価について

2015（平成 27）年 12 月 18 日(金)　 書面審議

外部評価委員会（第３回）

（１） 第２期中期目標期間評価に係る研究業績説明書（案）について

国際日本文化研究センターの
諸活動について

国際日本文化研究センター

目　次

	ページ	『25年史 —資料編—』 該当ページ
1. 研究協力		
(1)海外における活動	1	200
①活動の意義	1	202
②海外シンポジウム	2	230
③海外研究交流シンポジウム	3	234
④日本研究会	4	233
(2)国内外関係諸機関との連携・協力	5	−
(3)日本研究者の受入れ	6	423
2. 研究活動		
(1)共同研究	7	040
①共同研究一覧	7	044
②共同研究成果	13	−
(2)国際研究集会	16	204
(3)シンポジウム、レクチャー等	17	259
①シンポジウム	17	262
②日文研フォーラム	26	276
③Nichibunken Evening Seminar	32	302
④レクチャー	37	269
(4)研究成果の刊行物	39	336
①各年度の出版状況	39	−
②『日本研究』	52	336
③『日文研叢書』	61	349
④JAPAN REVIEW	62	344
(5)所属研究者(含・名誉教授)の受章や受賞等	67	
3. 研究資料等の収集と発信		
(1)資料の収集状況	68	246
①図書収集状況	68	247, 252
②高額資料の一覧	69	248
(2)データベースの構築と公開	74	253
4. 研究者育成		
(1)大学院教育	76	312
①総合研究大学院大学	76	312
②特別共同利用研究員	84	−
(2)若手研究者の受け入れ	91	−
①若手研究者の割合	91	−
②一覧	92	−
5. 外部資金獲得状況		
(1)科学研究費	93	427
(2)受託研究	112	〃
(3)寄附金	115	〃
(4)企業等との共同研究	118	〃

目　次

ページ

6. 追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

（1） 所属研究者（含・名誉教授）の受章や受賞等 120
（2） 書評一覧 122
（3） 日文研リポジトリ 126
（4） 図書館の利用状況 133
① 入館者数 133
② 貸出冊数 133
③ 文献複写依頼・受付 134
④ 現物貸借依頼・受付 134
⑤ 図書館所蔵資料の展示用貸出 135
⑥ 画像利用申請点数 140
⑦ 資料の収集方針等 141
（5） データベースの国内外からのアクセス数（①・②） 146 150
（6） 翻訳出版協力プロジェクト 154
（7） 大学院教育 155
① 大学院生の進路 155
② 総研大経費の内訳 159
（8） 所長裁量経費について 160
（9） 決算 175

1．研究協力

(1) 海外における活動

①活動の意義

「世界の中の日本」という大きな視野に立って日本研究、日本文化研究と研究協力活動を実施することが日文研の目的であり、課題である以上、海外も当然ながら活動の重要な舞台の一つとなります。そして海外活動においては、日文研の意図を十分に理解してもらい、シンポジウムの共催などを受け入れてくれる提携先が不可欠となり、また、その開拓活動自体が日文研の海外ネットワーク構築に寄与する側面も持ちます。

主な活動内容として、**1）海外シンポジウム**と**2）海外研究交流ネットワーク形成**を挙げることができます。

1）海外シンポジウム

日本国外における日本研究への協力・促進のために、日本研究が比較的進んでいる国や地域で開催されるものです。海外における開催を基本としていますが、テーマ等によっては国内で開催されることもあります。日文研の海外活動として最初に手がけられました。

2）海外研究交流ネットワーク形成

海外シンポジウムほど大規模に行うものではありませんが、同様に日本国外における日本研究への協力・促進のために、海外共催機関や所内にて、随時開催するものです。

その内容は、主に**（ア）海外研究交流シンポジウム**と**（イ）日本研究会**、そして教員等の海外への個人派遣の3つからなります。

（ア）海外研究交流シンポジウム

海外の日本研究者との恒常的な交流の場の提供を目的として開催されます。海外研究交流室が中心となり、活発な日本研究が行われている地域に教員を派遣して研究発表を行うとともに、現地日本研究者との親交を深め、得られた最新情報、要望、指摘などを今後の研究活動に生かすことに重点を置いています。平成18（2006）年度より開始されました。

（イ）日本研究会

海外研究交流室を中心に日文研教員を年数回海外に派遣し、その地域の研究者と協力して現地の研究動向に即したテーマで小規模な研究会を開催し、併せて、研究相談等支援業務を行っています。

日文研の設置目的である国際研究協力活動をより積極的かつ効果的に行うもので、同時に優秀な若手研究者の発掘にもつながり、また、日文研にとっては海外の日本研究の生の情報を得る貴重な機会ともなっています。平成11（1999)年度より開始されました。

(1) 海外における活動

②海外シンポジウム

回	開催年月日	テーマ	共催機関	開催場所
第11回	平成16(2004)年10月28日～31日	アジア太平洋地域におけるグローバリゼイション、ローカリゼイションと日本文化：その研究の過去・現在・未来	シンガポール国立大学	シンガポール(シンガポール)
第12回	平成17(2005)年9月30日～10月4日	アジア太平洋地域におけるグローバリゼイション、ローカリゼイションと日本文化：その研究の過去・現在・未来	香港中文大学	中国(香港)
第13回	平成18(2006)年11月5日～6日	日本研究カイロ会議	カイロ大学	エジプト(カイロ)
第14回	平成19(2007)年10月31日～11月2日	日本文化の解釈：ロシアと日本からの視点	ロシア国立人文学大学及びモスクワ国立大学	ロシア(モスクワ)
第15回	平成20(2008)年10月14日～16日	日本・ブラジル文化交流―言語・歴史・移民	サンパウロ大学	ブラジル(サンパウロ)
第16回	平成21(2009)年11月3日～4日	アジア新時代の南アジアにおける日本像―インド・SAARC諸国における日本研究の現状と必要性	ジャワハルラル・ネルー大学	インド(デリー)
第17回	平成22(2010)年10月5日～7日	日本の文化と社会の潮流	インドネシア大学	インドネシア(ジャカルタ)
第18回	平成23(2011)年5月27日～29日	江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘―	復旦大学	中国(上海)
第19回	平成24(2012)年8月22日～24日	「日本研究」再考―北欧の実践から	コペンハーゲン大学	デンマーク(コペンハーゲン)
第20回	平成25(2013)年11月13日～15日	日越交流における歴史、社会、文化の諸課題	ベトナム社会科学院	ベトナム(ハノイ)
第21回	平成26(2014)年11月11日～13日	新領域・次世代の日本研究	日文研	京都(日本)

(1) 海外における活動

③海外研究交流シンポジウム

回	開催年月日	テーマ	開催場所	代表者
第1回	2006年11月20日～22日	日本専門家招聘セミナー	韓国学中央研究院 ソウル大学校日本研究所 東西大学校日本研究センター	猪木武徳 （日文研教授）
第2回	2007年3月8日	近代日本の社会と文化	アルザス・ヨーロッパ日本学研究所（共催） （フランス）	細川周平 （日文研教授）
第3回	2007年12月12日 ～13日	日文研セッション「日文研における研究状況」 中国側セッション「中国中南部地域における日本研究の現状」	華東師範大学外国語学院 （中国）	細川周平 （日文研教授）
第4回	2008年3月1日 ～2日	近代日本の美と思想	アルザス・ヨーロッパ日本学研究所（共催） （フランス）	細川周平 （日文研教授）
第5回	2008年9月26日 ～27日	ロシア極東文化の中の日本	ロシア国立極東大学 付属東洋大学（共催）	細川周平 （日文研教授）
第6回	2008年6月2日 ～3日	他者になること―東西文化の変容の体験と物語―	日文研 （アルザス・ヨーロッパ日本学研究所共催）	細川周平 （日文研教授）
第7回	2010年3月19日 ～20日	出島文書と徳川時代	日文研	フレデリック・クレインス （日文研准教授）
第8回	2011年5月27日 ～29日	文化の翻訳―北欧における日本文学研究を中心に―	日文研 （ヨーテボリ大学共催）	山田奨治 （日文研准教授）
第9回	2012年2月22日	私の研究アプローチ	ホテル・アルマダ、ペタリンジャヤ（クアラルンプール、マレーシア） （第3回JSA-ASEAN国際会議主催）	山田奨治 （日文研准教授）
第10回	2013年2月28日	中国の日本認識、日本の中国認識	復旦大学（中国）	末木文美士 （日文研教授）
第11回	2014年9月27日	日欧交流500年紀を前に―航路の形成と情報の起点 （第1回EAJS日本会議Preconference 日文研シンポジウム）	日文研	

(1) 海外における活動

④日本研究会

回　数	開催日	開催国	開催場所
第10回	2005(H17)年 2月15日、17日、21日～22日	ポルトガル	リスボン新大学
		スペイン	マドリッドアウトノマ大学 バルセロナアウトノマ大学
第11回	2005(H17)年8月31日、9月3日	オーストリア	ウィーン大学
第12回	2005(H17)年9月4日～7日	ギリシャ	ヘレニズム文化研究センター アテネ大学
第13回	2006(H18)年 9月18日、21日～22日	イタリア	国立ミラノ大学 国立レッチェ大学
第14回	2007(H19)年8月2日、6日	ブラジル	サンパウロ大学日本文化研究所 国際交流基金サンパウロ日本文化センター リオデジャネイロ州立大学
第15回	2008(H20)年11月21日	ベトナム	ハノイ大学
第16回	2009(H21)年5月13日～14日	インドネシア	インドネシア大学
第17回	2010(H22)年10月16日～17日	台湾	台湾中央研究院
第18回	2011(H23)年8月24日～27日	エストニア	タリン大学
第19回	2014(H26)年10月18日	アメリカ合衆国	ペンシルベニア大学

(2) 国内外関係諸機関との連携･協力

① 国内機関との連携･協力

日文研･アイハウス連携フォーラム

平成26年度より、公益財団法人国際文化会館（アイハウス／東京都港区六本木）と連携し、シリーズで多角的に現代日本や日本人理解を深める講演会を開催しています。

回	開催日	テーマ	講演者	参加者
1	2014年9月19日	妖怪と日本人の想像力	小松　和彦 （所長）	114名
2	2014年12月11日	越境する「大衆文学」の力 ーなぜ中国で松本清張が流行るのか	王　成 （外国人研究員）	86名
3	2015年2月12日	江戸時代にみるユーモア、パロディ、タブー ー浮世絵と春画の社会的意義	アンドリュー･ガーストル （外国人研究員）	101名
4	2015年4月21日	ぼくは何故、「まんがの描き方」を海外で教えるのか	大塚　英志 （教授）	82名
5	2015年7月16日 （予定）	伊藤博文を越えて、伊藤博文へ ー「知の政治家」の残したもの	瀧井　一博 （教授）	－

※平成27年度はこのほかに10月と平成28年1月に開催する予定。

② 国外機関との連携･協力

国際日本文化研究センターは広く多数の国内外機関と交流することを目的としており、学術協力上、必要不可欠な場合を除いて、原則として特定の研究機関との個別協定は締結されませんでした。
第3期中期目標･中期計画期間を迎えるにあたっては、国内外の大学等研究機関と時限付きの学術交流協定等を締結し、連携体制を強化することを目指しています。

（参考）現在までに締結した協定

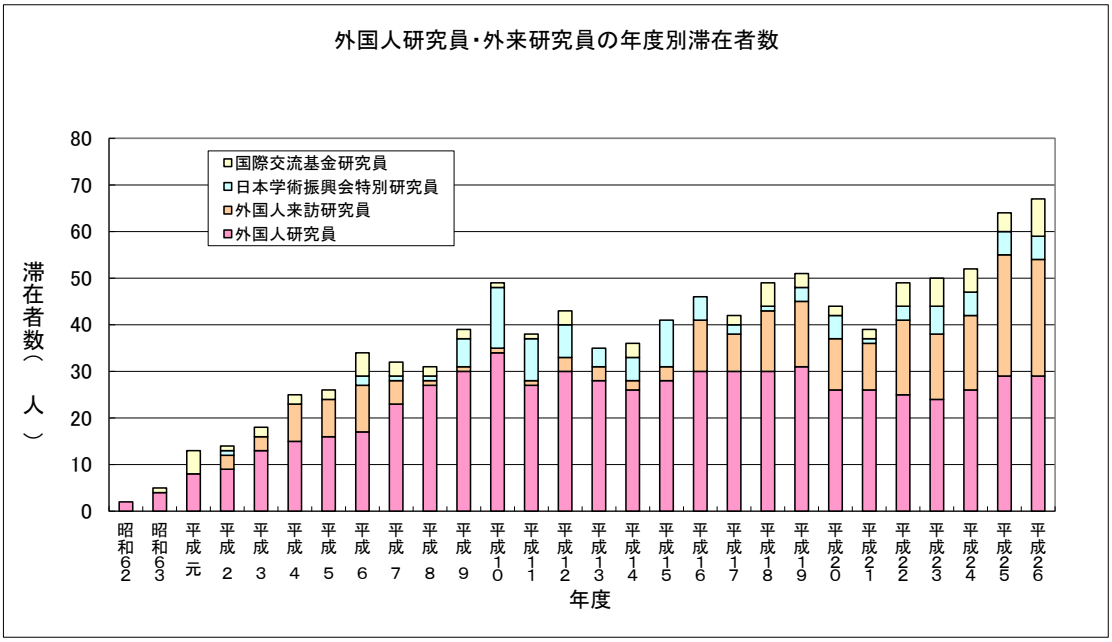
期間		相手機関名	交流協定の概要 （研究分野、協定に基づく活動等）
締結日	終了日		
2002年 12月27日	期限なし	ポツダム地球学研究所 （ドイツ）	ユーラシア大陸の東西の気候変動･環境変動と文明の興亡の比較研究の分野において、双方の学術交流と研究協力を促進する。

(3) 日本研究者の受入れ

①外国人研究員・外来研究員の滞在者数の推移（昭和62～平成26年度）

過去10年（H17～26）平均⇒　50.7　人／年度

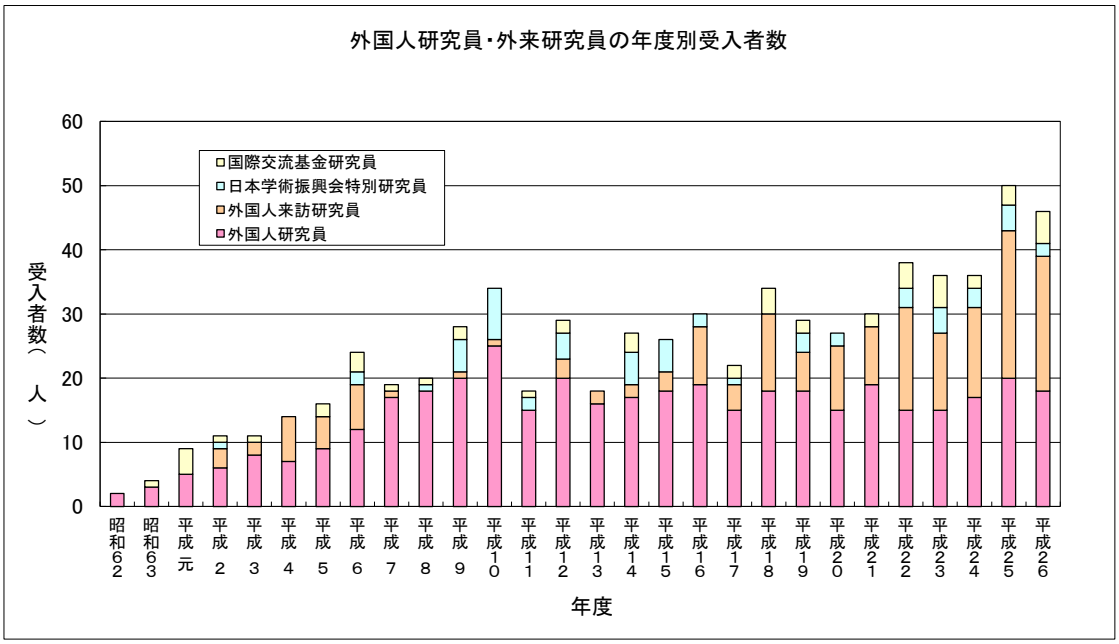
平成16～26年度平均⇒　50.3　人／年度



②外国人研究員・外来研究員の受入者数の推移（昭和62～平成26年度）

過去10年（H17～26）平均⇒　34.8　人／年度

平成16～26年度平均⇒　34.4　人／年度



①共同研究一覧

No	研究テーマ	代表者名	職位	開始年月	終了年月	成果出版	日文研叢書・日本研究	国際研究集会	国際研究集会報告書	国内公募	国外公募
75	近代中国東北部（旧満州）文化に関する総合研究	劉建輝	助教授	2001年4月	2005年3月	〈雑誌〉『環』第10号（特集　満州とは何だったのか）（藤原書店、2002年7月） 〈雑誌〉『アジア遊学』第44号（特集　日中から見る「旧満州」）（勉誠出版、2002年10月） 呂元明／鈴木貞美／劉建輝監修『満洲浪曼』（復刻）第1 ～ 7巻（ゆまに書房、2002年7月） 呂元明／鈴木貞美／劉建輝著『満洲浪曼・別巻―「満洲浪曼」研究―』（ゆまに書房、2003年1月） 呂元明／鈴木貞美／劉建輝監修『藝文』（復刻）第1 ～ 22巻（ゆまに書房、2007年7月～2008年6月） 呂元明／鈴木貞美／劉建輝監修『藝文』（復刻）第1 ～ 7巻〈満洲藝文聯盟版・満洲文藝春秋社版〉（ゆまに書房、2010年9月） 呂元明／鈴木貞美／劉建輝監修『滿洲公論』（復刻）第1 ～ 7巻〈滿洲公論社版〉（ゆまに書房、2011年1月）					
76	歴史的空間情報の解析・解釈法の研究	宇野隆夫	教授	2002年4月	2005年3月	宇野隆夫編著『実践考古学GIS―先端技術で歴史空間を読む―』（NTT出版、2006年12月）		第24回国際研究集会「世界の歴史空間を読む ―GISを用いた文化・文明研究－」(H 17.2.7～2.11)	『世界の歴史空間を読む―GISを用いた文化・文明研究―』（平成18年6月）		
77	日本人の異界観―その構造と意味―	小松和彦	教授	2002年4月	2005年3月	小松和彦編『日本人の異界観―異界の想像力の根源を探る―』（せりか書房、2006年10月）					
78	旅の「情報」と「表現」―交流と孤立から見た日本文化史の再検討―	白幡洋三郎	教授	2002年4月	2005年3月		白幡洋三郎編「旅と日本発見―移動と交通の文化形成力―」（日文研叢書43）（平成21年3月）	第25回国際研究集会「旅と日本『発見』―移動と交通の文化形成力」(H 17.3.7～3.12)			
79	近代化と日本人の身体感覚	北澤一利	客員助教授	2002年4月	2004年3月	栗山茂久／北澤一利編著『近代日本の身体感覚』（青弓社、2004年8月）				✓	
80	1920-1970の五十年間にわたる日本文学・日本文化の連続性・不連続性	エドゥアルド・クロッペンシュタイン	外国人研究員	2002年4月	2003年3月	エドゥアルド・クロッペンシュタイン／鈴木貞美編『日本文化の連続性と非連続性　1920年－1970年』（勉誠出版、2005年11月）					✓
81	コマーシャル映像にみる物質文化と情報文化	山田奨治	助教授	2003年4月	2006年3月	山田奨治編『文化としてのテレビ・コマーシャル』（世界思想社、2007年3月）		第28回国際研究集会「売る文化、売られた文化：テレビコマーシャルによる文化研究を探る」(H 18.3.14～3.18)	『文化としてのテレビ・コマーシャル』（平成19年3月）		

No	研究テーマ	代表者名	職位	開始年月	終了年月	成果出版	日文研叢書・日本研究	国際研究集会	国際研究集会報告書	国内公募	国外公募
82	公家と武家―官僚制と封建制の比較文明史的研究―	笠谷和比古	教授	2003年4月	2006年3月	笠谷和比古編『公家と武家Ⅳ―官僚制と封建制の比較文明史的考察―』（思文閣出版、2008年3月）					
83	京都を中心とした、日本の伝統工芸の過去・現在・将来	稲賀繁美	教授	2003年4月	2007年3月	稲賀繁美編『伝統工藝再考　京のうちそと―過去発掘・現状分析・将来展望―』（思文閣出版、2007年7月） 樋田豊郎／稲賀繁美編『終わりきれない「近代」―八木一夫とオブジェ焼―』（美学出版、2008年4月）		第27回国際研究集会「日本の伝統工藝再考：外からみた工藝の将来とその可能性」H 17.11.8～11.12	『日本の伝統工藝再考―外からみた工藝の将来とその可能性―』（平成19年9月）		
84	性欲の文化史	井上章一	教授	2003年4月	2007年3月	井上章一＆関西性欲研究会編『性の用語集』（講談社、2004年12月） 井上章一編『性欲の文化史　1』（講談社、2008年10月） 井上章一編『性欲の文化史　2』（講談社、2008年11月）					
85	文化としての植物―日本の内と外―	光田和伸	助教授	2003年4月	2006年3月						
86	戦間期日本の社会集団の相互関係とネットワークについて―政・官・軍・メディア・経済界・教育事業家などを中心に―	猪木武徳	教授	2003年4月	2007年3月	猪木武徳編著『戦間期日本の社会集団とネットワーク―デモクラシーと中間団体―』（NTT出版、2008年3月）					
87	出版と学芸ジャンルの編成と再編成―近世から近現代へ―	鈴木貞美	教授	2003年4月	2007年3月		浅岡邦雄／鈴木貞美編『明治期「新式貸本屋」目録の研究』（日文研叢書46）（2010年11月） 〈共同研究報告〉『日本研究』第37集（日文研、2008年3月）	第26回国際研究集会「東アジアにおける近代諸概念の成立」(H17.8.26～8.29)（鈴木班と共催））			
88	「封建・郡県」論を巡った中国と日本における思想連環―漢字文化圏における他国認識と自国改革―	張翔	外国人研究員	2003年8月	2004年7月	張翔／園田英弘編『「封建」・「郡県」再考―東アジア社会体制論の深層―』（思文閣出版、2006年7月）					✓
89	日本文明史の再建―21世紀の環境・経済・文明―	安田喜憲	教授	2004年4月	2007年3月	安田喜憲編著『山岳信仰と日本人』（NTT出版、2006年4月）					
90	日本の近代化過程における技術と身体の思想	木岡伸夫	客員教授	2004年4月	2005年3月	木岡伸夫／鈴木貞美編著『技術と身体―日本「近代化」の思想―』（ミネルヴァ書房、2006年3月）				✓	
91	日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚	松田利彦	助教授	2004年4月	2007年3月	松田利彦／やまだあつし編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』（思文閣出版、2009年3月）		第30回国際研究集会「日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚 Study of Bureaucracy of the Japanese Colonial Empire」（H19.2.13～2.15）	『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』（平成20年1月）		
92	「関西」史と「関西」計画―文化の生成と自然的・社会的基盤―	千田稔	教授	2004年4月	2007年3月	千田稔編『関西を創造する』（和泉書院、2008年3月）					

No	研究テーマ	代表者名	職位	開始年月	終了年月	成果出版	日文研叢書・日本研究	国際研究集会	国際研究集会報告書	国内公募	国外公募
93	近代東アジアにおける二字熟語概念の成立に関する総合的研究	馮天瑜	外国人研究員	2004年4月	2005年7月	冯天瑜/刘建辉/聂长顺編『语义的文化变辈』(武漢：武汉大学出版社 2007年10月)		第26回国際研究集会「東アジアにおける近代諸概念の成立」(H17.8.26～8.29)(鈴木班と共催))	『東アジアにおける近代諸概念の成立』(平成20年10月)		✓
94	日本における「死の場所」と死生観の変遷に関する総合的研究	近藤功行	客員教授	2005年4月	2006年3月	近藤功行／小松和彦編著『死の儀法―在宅死に見る葬の礼節・死生観―』(ミネルヴァ書房、2008年3月)				✓	
95	「文明交流圏」としての「海洋アジア」	川勝平太	教授	2005年4月	2008年3月						
96	王権と都市に関する比較史的研究	今谷明	教授	2005年4月	2008年3月	今谷明編『王権と都市』(思文閣出版、2008年3月)		第33回国際研究集会「王権と都市 Kingship and City Culture」(H20.03.06～03.08)	『王権と都市』(平成20年3月)		
97	日本における住まいの風土性・持続性	オギュスタン・ベルク	外国人研究員	2005年4月	2006年3月		オギュスタン・ベルク編「第41集日本の住まいと風土性」(日文研叢書41)(平成19年8月)				✓
98	前近代東アジア三国の交流と文化的波長	崔博光	外国人研究員	2005年7月	2006年6月			第29回国際研究集会「前近代における東アジア三国の文化交流と表象―朝鮮通信使と燕行使を中心に― Cultural Exchange and Representation of China, Korea and Japan in the Premodern Age」(H18.10.17～8.20)	『前近代における東アジア三国の文化交流と表象』(平成20年10月)		✓
99	幸田露伴の世界	井波律子	教授	2006年4月	2008年3月	井波律子／井上章一共編『幸田露伴の世界』(思文閣出版、2009年1月)					
100	怪異・妖怪文化の伝統と創造―前近代から近現代まで―	小松和彦	教授	2006年4月	2010年3月	小松和彦編『妖怪文化の伝統と創造―絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで―』(せりか書房、2010年9月)					
101	文化の所有と拡散	山田奨治	准教授	2006年4月	2009年3月	山田奨治編『コモンズと文化―文化は誰のものか―』(東京堂出版、2010年3月)					
102	近代東アジアにおける知的空間の形成―日中学術概念史の比較的研究―	孫江	客員助教授	2006年4月	2007年3月	孫江/劉建輝編著『東アジアにおける近代知の空間の形成』(東方書店、2014年3月)		第31回国際研究集会「東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的発展のために」(H19.3.23～3.25)	『東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的発展のために』(平成21年3月)	✓	
103	TOWARDS A NEW JAPAN？―Bridging the Perception Gap Concerning Japan's Contemporary Cultural Identity―	リーン・T・セーヘルス	外国人研究員	2006年6月	2007年5月	Rien T. SEGERS, Editor "A NEW JAPAN FOR THE TWENTY―FIRST CENTURY―An Inside Over view of Current Fundamental Changes and Problems―" (Routledge、2008年3月)					✓
104	古代東アジア交流の総合的研究	王維坤	外国人研究員	2007年4月	2008年3月		王維坤/宇野隆夫編「古代東アジア交流の総合的研究」(日文研叢書42)(平成20年12月)				✓
105	日本文明史の再建―生命文明の時代を求めて―	安田喜憲	教授	2007年4月	2010年3月			第39回国際研究集会「環境と文明：過去・現在・未来」The Environment and Civilization: Past, Present and Future(H22.11.29～30)			

No	研究テーマ	代表者名	職位	開始年月	終了年月	成果出版	日文研叢書・日本研究	国際研究集会	国際研究集会報告書	国内公募	国外公募
106	性欲の社会史	井上章一	教授	2007年4月	2011年3月	井上章一／斎藤光／澁谷知美／三橋順子編『性的なことば』（講談社、2010年1月）					
107	近代日本の公と私、官と民―比較の視点から―	猪木武徳	所長	2007年4月	2011年3月	近代日本の公と私、官と民（NTT出版、2014年）					
108	都市文化とは何か？―ユーラシア大陸における都市文化の比較史的研究―	白幡洋三郎	教授	2007年4月	2011年3月	白幡洋三郎／錦仁／原田信男編著『都市歴史博覧―都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ―』（笠原書院、2011年12月）		第37回国際研究集会「都市文化とは何か－文化論からの日本「発見」－」“Comparative Study of Urban Culture”（H22.2.23～28）	刊行予定		
109	18世紀日本の文化状況と国際環境	笠谷和比古	教授	2007年4月	2010年3月	笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』（思文閣出版、2011年8月）					
110	東アジアにおける知的システムの近代的再編成	鈴木貞美	教授	2007年4月	2010年3月	〈共同研究報告書〉『日本研究』第40集（日文研、2009年11月）、第42集（日文研、2010年9月）、第43集（日文研、2011年3月）		第35回国際研究集会「東アジア近代における概念と知の再編成」The Reformulation of Concepts and Intellectual Systems in Modern East Asia（H20.11.17～20）	『東アジア近代における概念と知の再編成』The Reformulation of Concepts and Intellectual Systems in Modern East Asia（平成22年3月）		
111	アジアにおける家族とジェンダーの変容：近代化とグローバル化の時代に	落合恵美子	客員教授	2007年4月	2009年3月	落合恵美子／赤枝香奈子編『アジア女性と親密性の労働』（京都大学学術出版会、2012年2月）		第36回国際研究集会「いま構築されるアジアのジェンダー：人間再生産のグローバルな再編成 The Asian Gender Under Construction : Global Reconfiguration of Human Reproduction」(H21.1.8～1.10)	『いま構築されるアジアのジェンダー：人間再生産のグローバルな再編成』（平成22年3月）	✓	
112	「満州」学の整理と再編	劉建輝	准教授	2007年4月	2011年3月						
113	民謡研究の新しい方向	細川周平	教授	2007年4月	2011年3月	細川周平編著『民謡からみた世界音楽―うたの地脈を探る―』（ミネルヴァ書房、2012年3月）					
114	戦後政治・外交政策の検証と再定義 ＊本研究会は研究班編成後に代表者が急遽他機関へ異動したため、実際には研究会の開催には至らなかった	池内恵	准教授	2008年4月	2010年3月						
115	仏教からみた前近代と近代	末木文美士	教授	2008年4月	2012年3月	末木文美士編『妙貞問答を読む――ハビアンの仏教批判――』（法蔵館、2014年3月）		第41回国際研究集会「近代と仏教」Modernity and Buddhism(H23.10.12～15)	『近代と仏教』（平成24年3月）		
116	植民地帝国日本における支配と地域社会	松田利彦	准教授	2008年4月	2011年3月	松田利彦/陳竑湲編『地域社会から見る帝国日本と植民地』（思文閣出版、2013年4月）		第40回国際研究集会「植民地帝国日本における支配と地域社会」The rule and the local society in the Japanese colonial empire(H23.7.13～16)	『植民地帝国日本における支配と地域社会』（平成25年3月）		
117	「東洋美学・東洋的思惟」を問う：自己認識の危機と将来への課題	稲賀繁美	教授	2008年4月	2012年3月	稲賀繁美編『東洋意識　夢想と現実のあいだ―1887-1953―』（ミネルヴァ書房、2012年4月）		第38回国際研究集会「東洋美学と東洋的思惟を問う：植民地帝国下の葛藤するアジア像」Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of “Asia” under the Colonial Empires(H22.11.8～11)	『東洋美学と東洋的思惟を問う：植民地帝国下の葛藤するアジア像』（平成23年3月）		

No	研究テーマ	代表者名	職位	開始年月	終了年月	成果出版	日文研叢書・日本研究	国際研究集会	国際研究集会報告書	国内公募	国外公募
118	文明と身体	牛村圭	教授	2009年4月	2012年3月						
119	日本の近代化とプロテスタンティズム	上村敏文	客員准教授	2009年4月	2011年3月	上村敏文/笠谷和比古編『日本の近代化とプロテスタンティズム』（教文館、2013年3月）				✓	
120	日本における翻訳の文化史	ジェフリー・アングルス	外国人研究員	2009年8月	2010年8月						✓
121	怪異・妖怪文化の伝統と創造―研究のさらなる飛躍に向けて―	小松和彦	教授	2010年4月	2013年3月			第45回国際研究集会「怪異・妖怪文化の伝統と創造―ウチとソトの視点から」（H25.11.25～27）	刊行予定		
122	生命文明の時代を創造する	安田喜憲	教授	2010年4月	2012年3月						
123	近代日本における指導者像と指導者論	戸部良一	教授	2010年4月	2013年3月	戸部良一編『近代日本のリーダーシップ――岐路に立つ指導者たち』（千倉書房、2014年3月）					
124	帝国と高等教育―東アジアの文脈―	酒井哲哉	客員教授	2010年4月	2012年3月	酒井哲哉/松田利彦編『帝国日本と植民地大学』（ゆまに書房、2014年2月）		第42回国際研究集会「帝国と高等教育―東アジアの文脈から」Empire and the Higher Education in East Asia(H24.2.10～12)	『帝国と高等教育―東アジアの文脈―』（平成25年3月）	✓	
125	「日本浪曼派」とアジア	呉京煥	外国人研究員	2010年4月	2011年3月						✓
126	東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に―	鈴木貞美	教授	2010年4月	2013年3月			第44回国際研究集会「東アジアにおける知的交流―キイ・コンセプトの再検討」（H24.11.13～17）	『東アジアにおける知的交流―キイ・コンセプトの再検討』（平成25年11月）		
127	日記の総合的研究	倉本一宏	教授	2010年4月	2014年3月	刊行予定					
128	文学の中の宗教と民間伝承の融合：宮沢賢治の世界観の再検討	プラットゥ・アブラハム・ジョージ	外国人研究員	2010年6月	2011年5月	プラットゥ・アブラハム・ジョージ／小松和彦編『宮澤賢治の深層―宗教からの照射―』（法藏館、2012年3月）					✓
129	夢と表象―メディア・歴史・文化―（平成26年度は「夢と表象―その統括と展望」	荒木浩	教授	2011年4月	2015年3月	刊行予定					
130	徳川社会と日本の近代化―17～19世紀における日本の文化状況と国際環境―	笠谷和比古	教授	2011年4月	2014年3月	刊行予定					
131	「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―	伊東貴之	教授	2011年4月	2015年3月	（継続中）					
132	新大陸の日系移民の歴史と文化	細川周平	教授	2011年4月	2015年3月	（継続中）					
133	仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論	フィリップ・ボナン	外国人研究員	2011年6月	2012年5月	Philippe Bonnin/西田雅嗣/稲賀繁美編 "Vocabulaire de la spatialité japonaise"『日本の生活空間』（CNRS Editions、2014年3月）		第43回国際研究集会「日仏の空間語彙：概念と仕掛け」（H24.5.11～12）	『Pour un Vocabulaire de la spatialité japonaise』（平成25年3月）		✓

No	研究テーマ	代表者名	職位	開始年月	終了年月	成果出版	日文研叢書・日本研究	国際研究集会	国際研究集会報告書	国内公募	国外公募
134	デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代	楊暁捷	外国人研究員	2011年7月	2012年6月	楊暁捷/小松和彦/荒木浩編『デジタル人文学のすすめ』(勉誠出版、2013年7月)					✓
135	人文諸学の科学史的研究	井上章一	教授	2012年4月	2015年3月	(継続中)					
136	日本庭園のあの世とこの世－自然、芸術、宗教	白幡洋三郎	教授	2012年4月	2014年3月	白幡洋三郎編『「作庭記」と日本の庭園』(思文閣出版、2014年3月)					
137	現代民俗研究方法論の学際的研究	山泰幸	客員准教授	2012年4月	2013年3月	刊行予定				✓	
138	建築と権力の相関性とダイナミズムの研究	御厨貴	客員教授	2012年4月	2014年3月					✓	
139	昭和40年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析――ザ・タイガースの研究	磯前順一	准教授	2012年4月	2015年3月	(継続中・刊行予定)					
140	21世紀10年代日本文化の軌道修正：過去の検証と将来への提言	稲賀繁美	教授	2013年4月	2016年3月	(継続中)					
141	万国博覧会と人間の歴史――アジアを中心に	佐野真由子	准教授	2013年4月	2016年3月	(継続中)					
142	日本文化形成と戦争の記憶	セオドア・クック	外国人研究員	2012年6月	2013年1月						✓
143	日本的時空観の形成	吉川真司	客員教授	2013年4月	2014年3月					✓	
144	日本仏教の比較思想的研究	末木文美士	教授	2013年4月	2015年3月	(継続中)					
145	植民地帝国日本における知と権力	松田利彦	教授	2013年4月	2017年3月	(継続中)					
146	日本的教育文化の複数地域展開に関する比較研究―ブラジル・フィリピン・ハワイ・アメリカの日系教育史を中心に―	根川幸男	外国人研究員	2013年4月	2014年4月						✓
147	マンガ・アニメで日本研究	山田奨治	教授	2013年4月	2016年3月	(継続中)					
148	昭和戦後期における日本映画史の再構築	谷川建司	客員教授	2014年4月	2015年3月	(継続中)				✓	
149	戦争と鎮魂	牛村圭	教授	2014年4月	2017年3月	(継続中)					
150	画像資料(絵葉書・地図・旅行案内・写真等)による帝国域内文化の再検討	劉建輝	教授	2014年4月	2017年3月	(継続中)					
151	おたく文化と戦時下・戦後	大塚英志	教授	2014年4月	2016年3月	(継続中)					
152	日本の軍事戦略と東アジア社会　―日中戦争期を中心として―	黄自進	外国人研究員	2014年6月	2015年5月	(継続中)					✓
153	日本大衆文化とナショナリズム	朴順愛	外国人研究員	2014年4月	2015年3月	(継続中)					✓

(1) 共同研究

②共同研究成果

発行年	編著	タイトル	出版社
2004年5月	浅野豊美 / 松田利彦編	『植民地帝国日本の法的構造』	東京:信山社
2004年6月	浅野豊美 / 松田利彦編	『植民地帝国日本の法的展開』	東京:信山社
2004年8月	栗山茂久 / 北沢一利編	『近代日本の身体感覚』	東京:青弓社
2004年12月	井上章一&関西性欲研究会編	『性の用語集』	東京:講談社
2005年6月	園田英弘編	『逆欠如の日本生活文化　ー日本にあるものは世界にあるか』	京都:思文閣出版
2005年6月	山折哲雄編	『環境と文明』	東京:NTT出版
2005年9月	井波律子 / 井上章一編著	『表現における越境と混淆』(日文研叢書36)	京都 : 国際日本文化研究センター
2005年9月	笠谷和比古編	『公家と武家の比較文明史』	京都:思文閣出版
2005年10月	山田奨治 / アレキサンダー　ベネット編	『日本の教育に"武道"を―21世紀に心技体を鍛える』	東京 : 明治図書
2005年11月	E・クロッペンシュタイン / 鈴木貞美編	『日本文化の連続性と非連続性』	東京 : 勉誠出版
2006年3月	ジェイ・ルービン / 田代慶一郎 / 西野春雄編	『桂坂謡曲談義―高砂・定家・三井寺・弱法師・鞍馬天狗』(日文研叢書37)	京都:国際日本文化研究センター
2006年2月	安田喜憲編	『龍の文明史』	東京 : 八坂書房
2006年1月	A.J.H. Latham / 川勝平太編	*Intra-Asian Trade and the World Market*	London : Routledge
2006年4月	木岡伸夫 / 鈴木貞美編	『技術と身体』	京都:ミネルヴァ書房
2006年4月	安田喜憲編	『山岳信仰と日本人』	東京 : NTT出版
2006年4月	落合恵美子編	『徳川日本のライフコースー歴史人口学との対話』	京都:ミネルヴァ書房
2006年7月	張翔 / 園田英弘編	『「封建」・「郡県」再考―東アジア社会体制論の深層』	京都 : 思文閣出版
2006年9月	鈴木貞美 / 岩井茂樹編	『わび・さび・幽玄―「日本的なるもの」への道程』	東京 : 水声社
2006年10月	小松和彦編	『日本人の異界観―異界の想像力の根源を探る』	東京 : せりか書房
2006年12月	笠谷和比古編	『公家と武家Ⅲ―王権と儀礼の比較文明史的考察』	京都 : 思文閣出版
2006年12月	宇野隆夫編	『実践考古学GIS―先端技術で歴史空間を読む』	東京 : NTT出版

(1) 共同研究

発行年	編著	タイトル	出版社
2007年4月	山田奨治編	『文化としてのテレビ・コマーシャル』	京都：世界思想社
2007年7月	呂元明 / 鈴木貞美 / 劉建輝監修	『藝文』第1巻復刻	東京：ゆまに書房
2007年8月	稲賀繁美編	『伝統工藝再考　京のうちそと―過去発掘・現状分析・将来展望』	京都：思文閣出版
2007年8月	オギュスタン・ベルク編	『日本の住まいと風土性』(日文研叢書41)	京都：国際日本文化研究センター
2007年10月	冯天瑜 / 刘建辉 / 聂长顺編	『语义的文化变迁』	武漢：武汉大学出版社
2008年2月	竹村民郎 / 鈴木貞美編	『関西モダニズム再考』	京都:思文閣出版
2008年3月	今谷　明編	『王権と都市』	京都:思文閣出版
2008年3月	Rien T. Segers編	*A NEW JAPAN FOR THE TWENTY-FIRST CENTURY -An Inside Overview of Current Fundamental Changes and Problems*	London:Routledge
2008年3月	笠谷和比古編	『公家と武家Ⅳ―官僚制と封建制の比較文明史的考察―』	京都:思文閣出版
2008年4月	千田　稔編	『関西を創造する』	大阪:和泉書院
2008年4月	近藤功行 / 小松和彦編	『死の儀法―在宅死に見る葬の礼節・死生観―』	京都:ミネルヴァ書房
2008年3月	猪木武徳編	『戦間期日本の社会集団とネットワークーデモクラシーと中間団体』	東京:NTT出版
2008年4月	鈴木貞美	『日本研究　第37集』(日本研究37)	京都：国際日本文化研究センター
2008年5月	樋田豊郎 / 稲賀繁美編	『終わりきれない「近代」―八木一夫とオブジェ焼』	東京:美学出版
2008年10月	井上章一編	『性欲の文化史』1・2	東京:講談社
2008年12月	王　維坤 / 宇野隆夫編	『古代東アジア交流の総合的研究』(日文研叢書42)	京都：国際日本文化研究センター
2009年2月	井波律子 / 井上章一共編	『幸田露伴の世界』	京都:思文閣出版
2009年3月	白幡洋三郎編	『旅と日本発見』(日文研叢書43)	京都:国際日本文化研究センター
2009年4月	松田利彦 / やまだあつし編	『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』	京都:思文閣出版
2010年1月	井上章一ほか編	『性的なことば』	東京:講談社
2010年3月	山田奨治編	『コモンズと文化―文化は誰のものか―』	東京:東京堂出版
2010年9月	小松和彦編	『妖怪文化の伝統と創造―絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで』	東京:せりか書房

(1) 共同研究

発行年	編著	タイトル	出版社
2010年11月	浅岡邦雄 / 鈴木貞美編	『明治期「新式貸本屋」目録の研究』(日文研叢書46)	東京:作品社
2011年8月	笠谷和比古編	『一八世紀日本の文化状況と国際環境』	京都:思文閣出版
2011年12月	白幡洋三郎ほか編	『都市歴史博覧　都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ』	東京:笠間書院
2012年2月	落合恵美子 / 赤枝香奈子編	『アジア女性と親密性の労働』	京都:京都大学学術出版会
2012年3月	細川周平編	『民謡からみた世界音楽―うたの地脈を探る―』	京都:ミネルヴァ書房
2012年3月	プラット・アブラハム・ジョージ／小松和彦編	『宮澤賢治の深層―宗教からの照射―』	京都:法蔵館
2012年4月	稲賀繁美編	『東洋意識　夢想と現実のあいだ―1887-1953―』	京都:ミネルヴァ書房
2013年3月	上村敏文 / 笠谷和比古編	『日本の近代化とプロテスタンティズム』	東京:教文館
2013年4月	松田利彦 / 陳姃湲編	『地域社会から見る帝国日本と植民地』	京都:思文閣出版
2013年7月	楊暁捷 / 小松和彦 / 荒木浩編	『デジタル人文学のすすめ』	東京 : 勉誠出版
2014年2月	酒井哲哉 / 松田利彦編	『帝国日本と植民地大学』	東京 : ゆまに書房
2014年3月	Philippe Bonnin / 西田雅嗣 / 稲賀繁美編	*Vocabulaire de la spatialité japonaise* 『日本の生活空間』	Paris: CNRS Editions
2014年3月	戸部良一編	『近代日本のリーダーシップ――岐路に立つ指導者たち』	東京:千倉書房
2014年3月	末木文美士編	『妙貞問答を読む――ハビアンの仏教批判――』	京都:法蔵館
2014年3月	孫江 / 劉建輝編著	『東アジアにおける近代知の空間の形成』	東京:東方書店
2014年3月	白幡洋三郎編	『「作庭記」と日本の庭園』	京都:思文閣出版
2014年10月	猪木 武徳 / マルクス・リュッターマン 編著	『近代日本の公と私、官と民』	東京:NTT出版

(2) 国際研究集会

回	開催年	テーマ	報告書
第24回	平成17(2005)年	世界の歴史空間を読むーGISを用いた文化・文明研究	『世界の歴史空間を読むーGISを用いた文化・文明研究ー』(国際研究集会報告書第24集)平成18(2006)年
第25回	平成17(2005)年	旅と日本「発見」ー移動と交通の文化形成力	『旅と日本発見—移動と交通の文化形成力』(日文研叢書43)平成21(2009)年
第26回	平成17(2005)年	東アジアにおける近代諸概念の成立	『東アジアにおける近代諸概念の成立』(国際研究集会報告書第26集)平成24(2012)年
第27回	平成17(2005)年	日本の伝統工藝再考ー外から見た工藝の将来とその可能性	『日本の伝統工藝再考ー外から見た工藝の将来とその可能性』(国際研究集会報告書第27集)平成19(2007)年
第28回	平成18(2006)年	売る文化、売られた文化:テレビコマーシャルによる文化研究を探る	『文化としてのテレビ・コマーシャル』平成19(2007)年
第29回	平成18(2006)年	前近代における東アジア三国の文化交流と表象	『前近代における東アジア三国の文化交流と表象—朝鮮通信使と燕行使を中心に—』(国際研究集会報告書第29集)平成23(2011)年
第30回	平成19(2007)年	日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚	『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』(国際研究集会報告書第30集) 平成20(2008)年
第31回	平成19(2007)年	東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的発展のために	『東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的発展のために』(国際研究集会報告書第31集)平成25(2013)年
第32回	平成19(2007)年	日本文化研究の過去・現在・未来ー新たな地平を開くためにー	『日本文化研究の過去・現在・未来 —新たな地平を開くために—』(国際研究集会報告書第32集) 平成21(2009)年
第33回	平成20(2008)年	王権と都市	『王権と都市』(第33回国際研究集会論文集)平成20(2008)年／ 『王権と都市』平成20(2008)年
第34回	平成20(2008)年	石川淳と戦後日本	『石川淳と戦後日本』(日文研叢書第45集)平成22(2010)年
第35回	平成20(2008)年	東アジア近代における概念と知の再編成	『東アジア近代における概念と知の再編成』(国際研究集会報告書第35集)平成22(2010)年
第36回	平成21(2009)年	いま構築されるアジアのジェンダー:人間再生産のグローバルな再編成	『いま構築されるアジアのジェンダー:人間再生産のグローバルな再編成』(国際研究集会報告書第36集)平成22(2010)年
第37回	平成22(2010)年	都市文化とは何かー文化論からの日本「発見」ー	
第38回	平成22(2010)年	東洋美学と東洋的思惟を問う:植民地帝国下の葛藤するアジア像	Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of “Asia” under the Colonial Empires『東洋美学と東洋的思惟を問う:植民地帝国下の葛藤するアジア像』(国際研究集会報告書第38集)平成23(2011)年
第39回	平成22(2010)年	環境と文明:過去・現在・未来	
第40回	平成23(2011)年	植民地帝国日本における支配と地域社会	『植民地帝国日本における支配と地域社会』(国際研究集会報告書第40集)平成25(2013)年
第41回	平成23(2011)年	近代と仏教	『近代と仏教』(国際研究集会報告書第41集)平成24(2012)年
第42回	平成24(2012)年	帝国と高等教育—東アジアの文脈から	『帝国と高等教育——東アジアの文脈から』(国際研究集会報告書第42集)平成25(2013)年
第43回	平成24(2012)年	日仏の空間語彙:概念と仕掛け	Pour un Vocabulaire de la spatialité japonaise(国際研究集会報告書第43集)平成25(2013)年
第44回	平成24(2012)年	東アジアにおける知的交流—キイ・コンセプトの再検討	『東アジアにおける知的交流—キイ・コンセプトの再検討—』平成25(2013)年
第45回	平成25(2013)年	怪異・妖怪文化の伝統と創造ー「内」と「外」の視点から	『怪異・妖怪文化の伝統と創造——ウチとソトの視点から』平成27(2015)年

(3) シンポジウム、レクチャー等

①シンポジウム

回	開催年月日	開催テーマ	主宰教員	発表者等
73	2004年9月13日	「写真史研究の広がり― 映像資料と日本文化史研究」	白幡　洋三郎 日文研教授	白幡　洋三郎　日文研教授 中川　邦昭　写真家・写真史家・佛教大学非常勤講師 斎藤　多喜夫　横浜開港資料館主任研究員
74	2004年9月25日	「近代東アジア文化史の再構築」	劉　建輝 日文研助教授	厳　安生　宮城学院女子大学客員教授 崔　博光　東京大学大学院総合文化研究科外国人研究員 上外垣　憲一　帝塚山学院大学教授・副学長
75	2005年3月17日～18日	″Inter Asian Competition for the World Market″	川勝　平太 日文研教授	ジョン　レイサム　ウェールズ大学経済学部教授 池田　哲　京都大学東南アジア研究所招聘外国人学者/アルバータ大学助教授 坂本　和一　立命館大学副総長 安場　保吉　大阪学院大学経済学部教授 川勝　平太　日文研教授
76	2005年5月14日	「ワビ・サビ・幽玄－『日本的なるもの』の誕生」	鈴木　貞美 日文研教授	堀　まどか　総合研究大学院大学院生 衣笠　正晃　法政大学法学部教授 岩井　茂樹　日文研技術補佐員 西村　将洋　同志社大学特別研究員 片平　幸　日文研講師
77	2005年5月14日	「日本音楽における時間性－その美学的概念や音楽語法に関する技術的様相」	細川　周平 日文研助教授	細川　周平　日文研助教授 ルチアーナ　ガリアーノ　ヴェニス大学助教授/日文研外国人研究員 藤田　隆則　京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター助教授 仲　万美子　同志社女子大学教授 椎名　亮輔　同志社女子大学助教授 寺内　直子　神戸大学国際文化学部教授 柿沼　敏江　京都市立芸術大学助教授
78	2005年6月25日	「東アジア文化史再構築の試み」	劉　建輝 日文研助教授	姜　東燁　江原大学校教授/天理大学国際文化学部教授 陳　凌虹　寧波大学講師/石川県立金沢辰巳高等学校外国語指導助手 Mary A. KNIGHTON　東京大学教養学部附属教養教育開発機構助教授
79	2005年11月26日	「往還と沈潜：日中文化相互受容の再考察」	劉　建輝 日文研助教授	厳　紹璗　北京大学教授 厳　安生　北京外国語大学教授 古田島　洋介　明星大学教授 川尻　文彦　帝塚山学院大学助教授 陳　凌虹　寧波大学講師
80	2006年5月24日	「境界線と文化アイデンティティ」	稲賀　繁美	ペッカ　コルホネン　ユワスクラ大学政治学部教授/元日文研外国人研究員 ヘイノ　ニイソネン　ユワスクラ大学政治学部研究員 タパニ　カックリニエミ　ユワスクラ大学政治学部研究員
81	2006年6月5日	「『鎮守の社』は近現代に生まれた景観？－映像資料をもとに」	白幡　洋三郎 日文研教授	小椋　純一　京都精華大学教授
82	2006年7月15日	「外国人カメラマンが撮った幕末日本」	白幡　洋三郎 日文研教授	斎藤　多喜夫　財団法人横浜市ふるさと歴史財団・都市発展記念館課/都市発展記念館係長
83	2007年1月26日～27日	日文研横断シンポ 「戦争・メディア・ジャンル」	鈴木　貞美 日文研教授	鈴木　貞美　日文研教授 川島　真　東京大学助教授 孫　安石　神奈川大学教授 貴志　俊彦　島根県立大学教授 劉　建輝　日文研助教授 坪井　秀人　名古屋大学教授 堀　まどか　総研大文化科学研究科院生 瀬尾　育生　首都大学東京教授 リース　モートン　東京工業大学外国語研究教育センター教授
84	2007年7月17日	イスラーム神学校における教育文化	ジェームズ　バクスター 日文研教授	エッテ　マーディー　ダール・アル・エルム神学校（イラン）校長 桜井　啓子　早稲田大学国際教養学部教授 杉山　隆一　早稲田大学イスラーム地域研究所研究員 澤田　達一　通訳 モハメド　レザ　サルカール　アラニ　アラメ・タバタバイ大学教育学部准教授/日文研外国人研究員

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	開催テーマ	主宰教員	発表者等
85	2008年10月4日	安丸民衆史の射程－主体性・全体性・両義性	磯前　順一 日文研准教授	安丸　良夫　一橋大学名誉教授 戸邉　秀明　日本学術振興会特別研究員 赤澤　史朗　立命館大学教授 島薗　進　東京大学大学院教授 阪本　是丸　國學院大學教授 喜安　朗　日本女子大学名誉教授 臼杵　陽　日本女子大学教授 小松　和彦　日文研教授 磯前　順一　日文研准教授
86	2008年10月22日	東アジア連帯論の系譜と国際理解	劉　建輝 日文研准教授	王　暁秋　北京大学教授 李　御寧　韓国・初代文化大臣、中央日報顧問
87	2008年12月4日～7日	戦間期大阪の音楽と近代	細川　周平 日文研教授	ジェフリー　ヘインズ　オレゴン大学教授 タン　ヤーティン　汤亚汀　上海音楽院教授 ヒュー　デフェランティ　ニューイングランド大学準教授 フィリップ　フレイヴァン　モナシュ大学準教授 井口　淳子　大阪音楽大学教授 今田　健太郎　京都市立芸術大学非常勤講師 井上　章一　日文研教授 寺内　直子　神戸大学教授 ジェラルド　グローマー　山梨大学教授 真鍋　昌賢　大阪大学助教 白石　知雄　大阪音楽大学非常勤講師 シルヴァン　ギニャール　大阪学院大学教授 薦田　治子　武蔵野音楽大学教授 廣井　榮子　大阪教育大学非常勤講師 渡辺　裕　東京大学教授 塩津　洋子　大阪音楽大学准教授 上野　正章　京都市立芸術大学非常勤講師 栗山　新也　大阪市立大学研究生 アリソン　トキタ　日文研外国人研究員
88	2009年5月23日 ～24日	京都学派と「近代の超克」－近代性・帝国・普遍性	鈴木　貞美 日文研教授	Gauri Viswanathan（コロンビア大学教授） Harry Harootunian（ニューヨーク大学教授） Hent de Vries（ジョンズ・ホプキンス大学教授） 金　哲（延世大学教授） 孫　歌（中国社会科学院文学研究所研究員） 酒井　直樹（コーネル大学教授） 藤田　正勝（京都大学教授） James W. Heisig（南山大学教授） 鈴木　貞美　日文研教授 磯前　順一　日文研准教授 稲賀　繁美　日文研教授
89	2009年6月17日	日文研・バークレーの対話	ジェームズ バクスター 日文研教授	アンドリュー　バーシェイ　カリフォルニア大学バークレー校教授 グレッグ　レヴィン　カリフォルニア大学バークレー校準教 アンドリュー　ジョーンズ　カリフォルニア大学バークレー校準教授 ダンカン　ウィリアムス　カリフォルニア大学バークレー校準教授 笠谷 和比古　日文研教授 早川 聞多　日文研教授 細川 周平　日文研教授 末木 文美士　日文研教授

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	開催テーマ	主宰教員	発表者等
90	2009年9月9日～14日	北アジア文化史の再構築	劉　建輝 日文研 准教授	【日文研側参加者】 井村　哲郎　元新潟大学教授 酒井　順一郎　東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校教授 金子 務　大阪府立大学名誉教授 竹村　民郎　元大阪産業大学教授 戦　暁梅　東京工業大学外国語研究教育センター准教授 単　援朝　崇城大学工学部教授 上垣外　憲一　大手前大学総合文化学部教授 稲賀　繁美　日文研教授 鈴木　貞美　日文研教授 劉　建輝　日文研准教授 白幡　洋三郎　日文研教授 小都晶子　日文研機関研究員 山田敬三　(財)孫中山記念会参与・理事 【中国側参加者】 王　確　東北師範大学文学院長・教授） 韓東育　東北師範大学歴史文学院長・教授） 王中忱　清華大学中文系教授 程尼娜　吉林大学歴史系教授 韓賓娜　東北師範大学歴史文化学院教授 高楽才 東北師範大学歴史文化学院教授 周頌倫　東北師範大学歴史文化学院教授 趙克生　東北師範大学歴史文化学院教授 劉暁東　東北師範大学歴史文化学院教授 羅冬陽　東北師範大学歴史文化学院教授 刁書仁 東北師範大学歴史文化学院教授 陳秀武　東北師範大学歴史文化学院教授 李　洋　東北師範大学文学院教授 耿鉄華　通化師範学院高句麗歴史文化研究院院長 李楽営　通化師範学院歴史系教授 勝洪岩　通化師範学院歴史系教授 梁啓政　通化師範学院歴史系講師 段光達　黒龍江大学歴史文化学院院長 劉雨　　東北師範大学文学院教授 魏　影　黒龍江大学歴史学院副教授 沈一民　黒龍江大学歴史学院副教授 周喜峰　黒龍江大学歴史学院教授 李　朋　黒龍江大学歴史学院教授
91	2009年11月25日 ～27日	近代東アジアにおける鍵概念 ―民族、国家、民族主義―	鈴木　貞美 日文研教授	【日文研側参加者】 李　梁　弘前大学人文学部准教授 須藤　遙子　愛知県立芸術大学非常勤講師 王　暁葵　愛知県立大学多文化共生研究所客員共同研究 金子　務　大阪府立大学名誉教授 堀　まどか　元総研大院生 竹村　民郎　元大阪産業大学教授 金　炳辰　京都精華大学非常勤講師 増田　周子　関西大学教授 川尻　文彦　帝塚山学院大学准教授 孫　江　静岡文化芸術大学准教授 梅　定娥　総研大院生 テモテ カーン　日文研助教 林　志弦　日文研外国人研究員 鈴木　貞美　日文研教授 稲賀　繁美　日文研教授 小都　晶子　日文研機関研究員 【中国側参加者】 濱下武志、桑　兵、温　春来、 程　美宝、劉　志偉、呉　義雄、 佟　君、麻　国慶、張　振江、 王　建新、張　亮、丁　蕾、 范　若、胡　文涛、孫　建軍、 鐘　少華

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	開催テーマ	主宰教員	発表者等
92	2009年12月4日～5日	立命館大学アート・リサーチセンター創立10周年記念 ―近世春本・春画とそのコンテクスト―	ロンドン大学SOAS、立命館アートリサーチセンター、文部科学省グローバルCOE日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点、国際日本文化研究センター	赤間　亮　立命館大学教授 浅野　秀剛　大和文華館館長 アンドリュー　ガーストル　ロンドン大学 SOAS教授・立命館大学客員研究員・春画プロジェクトリーダー 石上　阿希　文部科学省グローバルCOEプログラムポストドクトラルフェロー エリス　ティニオス　リーズ大学名誉教授 小林　ふみ子　法政大学准教授 ジェニー　プレストン　ロンドン大学SOAS博士課程 白倉　敬彦　国際浮世絵学会理事、編集者 高木　元　千葉大学教授 中嶋　隆　早稲田大学教授 早川　聞多　日文研教授 樋口　一貴　(財)三井記念美術館学芸員 日野原　健司　太田記念美術館学芸員 ポール　ベリー　関西外国語大学教授 ロジーナ　バックランド　大英博物館ポストドクトラルフェ 矢野　明子　ロンドン大学SOAS ポストドクトラルフェロー・立命館大学客員研究員 山本　ゆかり　国際浮世絵学会編集委員
93	2010年3月5日～6日	近代東アジア歴史研究の現状と既存資料の有効利用	劉　建輝　日文研准教授 国際日本文化研究センター・旧植民地関係資料に関する研究グループ共催 ※人間文化研究総合推進事業、日文研プロジェクト「日中歴史マイクロ資料の整理と利用」、「『満州』学の整理と再編」共同研究会	【日本側参加者】 阿部　安成　滋賀大学教授 江竜　美子　滋賀大学助手 泉沢　久美子　アジア経済研究所次長 岡村　敬二　京都ノートルダム女子大学教授 大沢　武彦　アジア歴史資料センター研究員 田村　憲一　アジア歴史資料センター主任 大月　健　京都大学附属図書館職員 田中　宏巳　元防衛大学校図書館長 谷合　佳代子　エル・ライブラリー館長 研谷　紀夫　東京大学助教 平井　孝典　小樽商科大学研究員 堀　和生　京都大学教授 本庄　比佐子　東洋文庫職員 井村　哲郎　元新潟大学教授 劉　建輝　日文研准教授 黄　自進　日文研外国人研究員 尾形　洋一　日文研技術補佐員 小都　晶子　日文研機関研究員 【招聘者】 王　希亮　黒龍江省社会科学院研究員 高　暁燕　黒龍江省社会科学院研究員 胡　玉海　遼寧大学教授 金　穎　遼寧大学教授
94	2010年7月16日 ～18日	「東アジアにおけるトランスナショナル人文学の可能性」	鈴木　貞美 日文研教授	【日本側参加者】 坪井　秀人　名古屋大学 李　成市　早稲田大学 三谷　博　東京大学 鈴木　貞美　日文研教授 稲賀　繁美　日文研教授 松田　利彦　日文研准教授 他4名 【韓国側参加者】 林　志弦　日文研外国人研究員・漢陽大学校比較歴史文化研究所所長 宮島　博史　東京大学・成均館大学校教授 他8名

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	開催テーマ	主宰教員	発表者等
95	2010年9月11日	「日本の歴史的時空間情報の現在」	山田　奨治 日文研准教授	村山　祐司　筑波大学 川口　洋　帝塚山大学 関野　樹　総合地球環境学研究所 矢野　桂司　立命館大学 小方　登　京都大学 尾方　隆幸　琉球大学 相田　満　国文学研究資料館 出田　和久　奈良女子大学 柴山　守　京都大学 波江　彰彦　大阪大学 山田　奨治　日文研准教授 森　洋久　日文研准教授 中西　和子　日文研プロジェクト研究員
96	2010年9月19日	「『文藝春秋』の欧文付録「Japan To-day」の研究」	鈴木　貞美 日文研教授	有馬　学　九州大学名誉教授 片山　杜秀　慶応大学法学部准教授・日文研客員准教授 佐藤　卓己　京都大学大学院教育学研究科准教授 佐藤　バーバラ　成蹊大学文学部特別任用教授 孫　江　静岡文化芸術大学文化政策学部教授 林　洋子　京都造形大学芸術学部准教授 西村　将洋　西南学院大学国際文化学部准教授 林　正子　岐阜大学地域科学部教授 依岡　隆児　徳島大学ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授 稲賀　繁美　日文研教授 瀧井　一博　日文研准教授 戸部　良一　日文研教授 ローマン　ローゼンバウム　日文研外国人研究員 堀　まどか　日文研機関研究員 石川　肇　日文研プロジェクト研究員
97	2010年9月23日 ～25日	「東アジアにおける知的体系の再構築：日本と中国の視座」	鈴木　貞美 日文研教授 南京大学人文社会科学高等研究院・国際日本文化研究センター　共催 ※人間文化研究連携共同推進事業 2010年度連携研究	【日本側参加者】 孫　江　静岡文化芸術大学教授 松田　宏一郎　立教大学教授 スヴェン・サーラ　上智大学准教授 金子　務　大阪府立大学名誉教授 浦田　義和　佐賀大学教授 田中　益三　法政大学兼任講師 多田　伊織　京都大学非常勤講師 金田　章裕　人間文化研究機構長(挨拶) 猪木　武徳　日文研所長 鈴木　貞美　日文研教授 伊東　貴之　日文研教授 井上　章一　日文研教授 倉本　一宏　日文研教授 劉　建輝　日文研准教授 瀧井　一博　日文研准教授 榎本　渉　日文研准教授 【中国側参加者】 何成洲(司会)、張異賓(挨拶)、朱慶葆、徐小躍、何慈毅、童
98	2010年10月30日	「『石川淳と戦後日本』合評会」	鈴木　貞美 日文研教授	渡辺　喜一郎　北陸高等学校非常勤講師 重松　恵美　佛教大学非常勤講師 杉浦　晋　埼玉大学教授 安西　晋二　國學院大學兼任講師 鳥羽　耕史　徳島大学准教授 吉川　宜時 李　忠奎　慶南大学非常勤講師 帆苅　基生　青山学院大学大学院生 若松　伸哉　愛媛大学准教授 鈴木　貞美　日文研教授

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	開催テーマ	主宰教員	発表者等
101	2011年3月19～20日	1950年代日本映画における「戦後」の構築研究	細川　周平 日文研教授	大澤　浄　龍谷大学非常勤講師 奥村　賢　いわき明星大学教授 木下　千花　静岡文化芸術大学講師 桑原　圭裕　関西学院大学非常勤講師 坂尻　昌平　日本大学・成城大学非常勤講師 佐野　明子　桃山学院大学講師 谷川　建司　早稲田大学客員教授 冨田　美香　立命館大学准教授 中村　秀之　立教大学教授 西村　大志　広島大学准教授 ミツヨ　ワダ　マルシアーノ　日文研研究員 長門　洋平　総研大 細川　周平　日文研教授
102	2011年7月30日 ～31日	1950年代日本映画における戦前・戦中との連続性・非連続性	細川　周平 日文研教授	大澤　浄　龍谷大学非常勤講師 谷川　建司　早稲田大学客員教授 土居　伸彰　早稲田大学研究助手 桑原　圭裕　関西学院大学非常勤講師 紙屋　牧子　早稲田大学招聘研究員 冨田　美香　立命館大学准教授 藤木　秀朗　名古屋大学教授 北浦　寛之　京都造形芸術大学非常勤講師 木村　建哉　成城大学専任講師 長門　洋平　総研大 晏　妮　明治学院大学研究員 鳥羽　耕史　早稲田大学准教授 溝渕　久美子　同朋大学非常勤講師 西村　大志　広島大学准教授 細川　周平　日文研教授 中村　秀之　立教大学教授 木下　千花　静岡文化芸術大学講師
103	2011年9月30日 ～10月1日	万国博覧会とアジア ―上海から上海へ、そしてその先へ―	佐野　真由子 日文研准教授	金　英那　韓国国立中央博物館長 許　馨珠　イリノイ大学博士候補 徐　蘇斌　天津大学中国文化遺産保護国際研究センター副所長・教授 青木　信夫　天津大学中国文化遺産保護国際研究センター所長・教授 鵜飼　敦子　東京大学東洋文化研究所特任研究員 中牧　弘允　国立民族学博物館教授 川口　幸也　国立民族学博物館准教授 林　洋子　京都造形芸術大学准教授 橋爪　紳也　大阪府立大学21世紀科学研究機構教授 岩田　泰　経済産業省博覧会推進室長 江原　規由　国際貿易投資研究所研究主幹 稲賀　繁美　日文研教授 白幡　洋三郎　日文研教授 瀧井　一博　日文研准教授 劉　建輝　日文研准教授 佐野　真由子　日文研准教授 グエン　ティ　タン　タム　日文研外国人研究員 ロー　ダニエル　日文研外国人研究員
104	2011年11月25日	生態、環境、資源から見る近代「満洲」：前近代からの連続・非連続を中心に	劉　建輝 日文研准教授	貴志　俊彦　京都大学地域研究総合情報センター教授 西村　成雄　放送大学教授 塚瀬　進　長野大学環境ツーリズム学部教授 王　中忱　清華大学人文学院・中国教授 衣　保中　吉林大学東北亜研究院・京都大学地域研究総合情報センター客員教授 安冨　歩　東京大学東洋文化研究所教授 永井　リサ　大阪大学大学院経済学研究科特任研究員 劉　建輝　日文研准教授
105	2012年2月3日～4日	植民地朝鮮と宗教―トランスナショナルな帝国史の叙述にむけて―	磯前　順一 日文研准教授	張　錫萬　宗教文化研究所所長 諸　点淑　東西大学講師 南　根祐　東国大学教授 金　成禮　西江大学教授 尹　海東　漢陽大学教授 趙　載国　延世大学教授 青野　正明　桃山学院大学教授 桂島　宣弘　立命館大学教授 裵　貴得 立命館大学 金　泰勲 立命館大学 磯前　順一　日文研准教授 稲賀　繁美　日文研教授 松田　利彦　日文研准教授 金　哲　日文研外国人研究員

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	開催テーマ	主宰教員	発表者等
108	2012年4月7日	『妙貞問答』の訳注・英訳・研究	ジョン・ブリーン 日文研教授	ジェームズ・バスキンド　九州工業大学准教授 西村　玲　東方研究会研究員 リチャード・バウリング　ケンブリッジ大学教授 島津　恵正　翻訳者 シルヴィオ・ヴィータ　イタリア国立東方学研究所 末木　文美士　日文研教授 ジョン・ブリーン　日文研教授
109	2012年7月22日	ポスト世俗主義と公共性	磯前順一 日文研准教授	磯前　順一　日文研准教授 藤本　龍児　帝京大学講師 田辺　明生　京都大学教授 鐘　以江　シンガポール大学ポスドク・フェロー 金　泰勲　立命館大学講師 島薗　進　東京大学教授 【コメンテーター】 Anton Sevilla　総合研究大学院大学
111	2012年12月8日	近代仏教―トランスナショナルな視点から	末木文美士 日文研教授	【発表者】 林　淳　愛知学院大学教授 オリオン・クラウタウ　龍谷大学博士研究員 エリック・シッケタンツ　東京大学特任研究員 新田智通　大谷大学講師 吉永進一　舞鶴工業高等専門学校准教授 島津恵正　フリー翻訳者 堀　雅彦　札幌市立大学非常勤講師 大谷栄一　佛教大学准教授 梁　明霞　華南師範大学講師 金　泰勲　立命館大学講師 西村　玲　中村元東方研究所研究員 田中　悟　神戸大学特命助教 末木文美士　日文研教授 【司会(兼発表者)】 林　淳　愛知学院大学教授 吉永進一　舞鶴工業高等専門学校准教授 大谷栄一　佛教大学准教授 末木文美士　日文研教授
112	2012年12月8日～9日	日蘭関係史をよみとく―蘭学を中心に―	フレデリック・クレイン 日文研准教授	【発表】 勝盛典子　神戸市立博物館学芸員 上野晶子　北九州市立自然史・歴史博物館学芸員 ウラン・レメリンク　ライデン大学研究員 西澤美穂子　東京大学史料編纂所学術支援員 フレデリック・クレインス　日文研准教授 益満まを　日文研機関研究員 【コメンテーター】 レオナルド・ブリュッセイ　ライデン大学名誉教授 松田清　京都外国語大学教授 イザベル・ファンダーレン　長崎大学非常勤講師 松方冬子　東京大学史料編纂所准教授 笠谷和比古　日文研教授 白幡洋三郎　日文研教授 パトリシア・フィスター　日文研教授 鈴木貞美　日文研教授 井上章一　日文研教授 稲賀繁美　日文研教授 榎本渉　日文研准教授 【総合討論】 松方冬子　東京大学史料編纂所准教授 鈴木貞美　日文研教授 井上章一　日文研教授 フレデリック・クレインス　日文研准教授 【司会】 ジョン・ブリーン　日文研教授 稲賀繁美　日文研教授

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	開催テーマ	主宰教員	発表者等
113	2013年3月15日	近代日本と華北 ――文化交流からの再検証	劉建輝 日文研准教授	【発表】 北川昌　塞外文化研究会幹事 劉建輝　日文研准教授 岸陽子　早稲田大学名誉教授 竹内良雄　慶應義塾大学教授 斉藤善行　竹内好を記録する会会員 【総合討論】 安藤潤一郎　東海大学・武蔵大学非常勤講師 澤田伶子　塞外文化研究会幹事 本多裕子　竹内好を記録する会会員 石坂正男　竹内好を記録する会会員 鈴木貞美　日文研教授 井村哲郎　日文研特任教授 小都晶子　日文研特任助教 石川肇　日文研プロジェクト研究員 【開会挨拶】 鈴木貞美　日文研教授 劉建輝　日文研准教授
114	2013年6月16日	近代日本の国家観 ―学際的考察―	瀧井一博 日文研教授	【基調報告】 瀧井一博　日文研教授 【司会者】 戸部良一　日文研教授 【コメンテーター】 福岡万里子　日本学術振興会特別研究員PD 植村和秀　京都産業大学教授 山田央子　青山学院大学教授 國分典子　筑波大学教授 石川健治　東京大学教授 初宿正典　京都産業大学教授 【話題提供】 長尾龍一　東京大学名誉教授
115	2013年7月21日～22日	宗教と公共性 ―神道と宗教復興から	磯前順一 日文研教授	【発表者】 磯前順一　日文研准教授 青野正明（桃山大学院） 片岡耕（宮城県公文書館） 寺戸淳（専修大学） 鈴木岩弓（東北大学） 討論： 【司会】 川村覚文（東京大学） 【発表者】 島薗進（上智大学） 姜海守（啓明大学） 鐘以江（シンガポール大学） 宮本新（ルーテル教会） 手戸聖伸（上智大学） 討論： 【司会】 松平徳仁（神奈川大学）

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	開催テーマ	主宰教員	発表者等
116	2013年7月26日～27日	国際シンポジウム 転換期の伊勢	ジョン・ブリーン 日文研教授	【発表者】 山中章（三重大学） Herman Ooms（カリフォルニア大学名誉教授） 【コメンテーター】 末木文美士（日文研教授） 【発表者】 小倉慈司（国立歴史民俗博物館） マーク・テーウェン（オスロ大学） 【コメンテーター】 薗田稔（京都大学名誉教授） 【発表者】 ウィリアム・ボディフォード（カリフォルニア大学） 伊藤聡（茨城大学） 【コメンテーター】 荒木浩（日文研教授） 【発表者】 ファビオ・ランベリ（カリフォルニア大学） マックス・モアーマン（コロンビア大学） 【コメンテーター】 白山芳太郎（皇学館大学） 【発表者】 西山克（関西学院大学） 斉藤英喜（仏教大学） 【コメンテーター】 井上章一（日文研教授） 【発表者】 劉琳琳（北京大学） 田山令史（仏教大学） 【コメンテーター】 笠谷和比古（日文研教授） 【発表者】 河野訓（皇学館大学） 田浦雅徳（皇学館大学） 【コメンテーター】 M. G. Sheftall（静岡大学） 【発表者】 高木博志（京都大学） ジョン・ブリーン（日文研教授） 【コメンテーター】 原武史（明治学院大学） 【総まとめ】 Allan Grapard（カリフォルニア大学）
117	2013年8月26日	『妙貞問答』の諸問題	末木文美士 日文研教授	【発表者】 西村玲（中村元東方研究所） 藤井淳（駒澤大学） 前川健一（東洋哲学研究所） 米田真理子（神戸学院大学） 新井菜穂子（関西学院大学） 阿部仲麻呂（上智大学） 前川健一 ジョン・ブリーン（日文研） 西村玲 ジョン・ブリーン／島津恵正（翻訳家） 末木文美士
118	2013年11月8日～10日	「大名庭園」の新発見	白幡洋三郎 日文研教授	【発表者】 伊藤 康晴（元鳥取市歴史博物館） 小野 健吉（奈良文化財研究所） 近藤 壮（和歌山市教育委員会文化振興課） 近藤真佐夫（会津若松市教育委員会文化課文化財グループ） 佐藤 豊三（元徳川美術館） 杉本 竜（桑名市博物館） 知念 理（大阪市立美術館） 永井 博（茨城県立歴史館） 永松 義博（南九州大学） 平出 真宣（公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会） 万城 あき（岡山県郷土文化財団） 御厨 義道（香川県立ミュージアム） 山田 貴司（熊本県立美術館）
119	2014年3月5日	関西の映画興行史の基礎調査―『合同通信』を中心に	細川周平 日文研教授	【発表者】 冨田 美香（立命館大学） 北浦 寛之（日文研） 板倉 史明（神戸大学） 長門 洋平（日文研）

(3) シンポジウム、レクチャー等

②日文研フォーラム

回	開催年月日	テーマ	発表者	コメンテーター
168	2004年4月13日	風流の東アジア－美を生きる技法－	閔　周植 嶺南大学校教授/日文研外国人研究員	稲賀　繁美 日文研教授
169	2004年5月11日	参勤交代と日本の文化	コンスタンティン　ノミコス　パポリス メリーランド大学準教授/日文研外国人研究員	白幡　洋三郎 日文研教授
170	2004年6月8日	近代における日本、中国の文人・作家の自殺	王　述坤 東南大学教授/日文研外国人研究員	鈴木　貞美 日文研教授
171	2004年7月13日	知られざる歌麿－「百千鳥狂歌合はせ」の詩的、文法的分析－	ヴィクター　ヴィクトロヴィッチ　リビン サンクトペテルブルグ大学助教授/日文研外国人研究員	早川　聞多 日文研教授
172	2004年9月14日	セールスマンの死－サービス残業・湾岸戦争・過労死－	スコット　ノース 大阪大学大学院 人間科学研究科助教授	園田　英弘 日文研教授
173	2004年10月19日	シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉	色　音 中国社会科学院民族研究所研究員（教授）／日文研外国人研究員	小松　和彦 日文研教授
174	2004年11月9日	明治期の外国人留学生と文明開化	李　漢燮 高麗大学校日語日文学科教授／日文研外国人研究員	劉　建輝 日文研助教授
175	2004年12月14日	近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役的役割	アレクサンダー　マーシャル　ヴィーシー ストーンヒル大学助教授／日文研外来研究員	笠谷　和比古 日文研教授
176	2005年1月11日	国家主義者としての三島由紀夫－戦後の原点－	ロイ　アンソニー　スターズ オタゴ大学シニア・レクチャラー／日文研外国人研究員	鈴木　貞美 日文研教授
177	2005年2月8日	僕はこの暗合を無気味に思ひ…芥川龍之介「歯車」、ストリンドベリ、そして狂気	マッツ　アーネ　カールソン ストックホルム大学助教授／日文研外国人研究員	鈴木　貞美 日文研教授
178	2005年3月8日	アジアにおけるメディア文化の交通－中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって	呉　咏梅 北京日本学研究センター専任講師／日文研外国人研究	山田　奨治 日文研助教授
179	2005年4月12日	中世能楽論における「道」の概念－能役者が歩むべき「道」－	ノエル　ジョン　ピニングトン アリゾナ大学助教授／日文研外国人研究員	光田　和伸 日文研助教授
180	2005年5月10日	韓国現代史と日本について－1973年から1988年まで－	池　明観 日文研外国人研究員	千田　稔 日文研教授
181	2005年6月14日	徳川時代の孔子祭	イアン　ジェームズ　マクマレン オックスフォード大学ペンブロークカレッジ教授／日文研外国人研究員	笠谷　和比古 日文研教授
182	2005年7月12日	韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み	鄭　在貞 ソウル市立大学校教授/日文研外国人研究員	松田　利彦 日文研助教授
183	2005年9月20日	日本の住まいにおける風土性と持続性	オギュスタン　ベルク フランス国立社会科学高等研究院教授/日文研外国人研究員	鈴木　貞美 日文研教授
184	2005年10月11日	韓国から見た日本のお盆	魯　成煥 蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授/日文研外来	小松　和彦 日文研教授
185	2005年11月16日	考古学と文字－古代日本の漢字文化を中心に	セルゲイ　ラプチェフ マクシム・ゴリキー文学学院助教授/日文研外国人研究	宇野　隆夫 日文研教授
186	2005年12月20日	〈日流〉の水脈－なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか	尹　相仁 漢陽大学校国際文化大学　日本言語文化学科教授/日	稲賀　繁美 日文研教授
187	2006年1月10日	女形の身体を描く－肉体表現と流光斎－	アンドリュー　ガーストル ロンドン大学SOAS教授/日文研外国人研究員	早川　聞多 日文研教授
188	2006年2月21日	郊外の隠遁への憧れ－江戸時代の郊外における美学的スペース－	ウィリアム　パック　ブレッカー 南カリフォルニア大学助手/日文研外来研究員	井上　章一 日文研教授
189	2006年3月14日	「国語」という神話－日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐって－	アーデル　アミン　サーレ カイロ大学文学部日本語学科専任講師/日文研外国人研究員	鈴木　貞美 日文研教授
190	2006年4月18日	玄界灘を渡った鬼のイメージ －なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか－	金　容儀 全南大学校人文大学副教授/日文研外国人研究員	小松　和彦 日文研教授
191	2006年5月16日	京都と文化表象－18世紀朝鮮通信使の目から－	崔　博光 成均館大学校教授/日文研外国人研究員	笠谷　和比古 日文研教授
192	2006年6月13日	「満州国」時代における「新京」の日本人作家	劉　春英 東北師範大学助教授/日文研外国人研究員	劉　建輝 日文研助教授
193	2006年7月11日	近代化による農村の変貌とその捉え方について－中日農村を比較して－	周　維宏 北京日本学研究センター教授/日文研外国人研究員	白幡　洋三郎 日文研教授
194	2006年9月19日	オセアニアの島々のイメージ形成をめぐって	ダリア　シュバンバリーテ ビリニュス大学講師/日文研外国人研究員	小松　和彦 日文研教授
195	2006年10月10日	ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」-高等教育の社会科カリキュラムを中心に-	エドウィナ　パーマー カンタベリー大学教授/日文研外国人研究員	千田　稔 日文研教授
196	2006年11月14日	お札が語る日本人の神仏信仰	ヨセフ　キブルツ フランス国立科学研究センター　教授	小松　和彦 日文研教授
197	2006年12月13日	異国船物語－江戸後期に描かれた船－	ロバート　エスキルドセン スミス大学　助教授/ 日文研外国人研究員	ジェームズ　バクス 日文研教授

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	テーマ	発表者	コメンテーター
198	2007年1月16日	日印関係とインドにおける日本研究－宮沢賢治の菜食主義の思想－	プラット アブラハム ジョージ ジャワハルラル・ネルー大学 日本語学科 準教授/日文研外国人研究員	小松 和彦 日文研教授
199	2007年2月13日	日本仏教論－その思想史的展開をめぐって－	スティリアノス パパレクサンドロプロス アテネ大学神学部 準教授/日文研 外国人研究員 (代講)笠谷和比古 日文研教授	笠谷 和比古 日文研教授
200	2007年3月13日	楽しみの茶と嗜みの茶 －中国から見た茶の湯文化－	陸 留弟 華東師範大学外国語学院日本語学部教授/日文研外国人研究員	鈴木 貞美 日文研教授
201	2007年4月18日	国境を越えた日本の学校文化	モハメッド レザ サルカール アラニ アラメ タバタバイ大学教育学部(イラン)助教授/日文研外国人研究員	渡辺 雅子 日文研准教授
202	2007年5月16日	唐代文学における日本のイメージ	張 哲俊 北京師範大学文学院比較文学研究所教授/日文研外国人研究員	劉 建輝 日文研准教授
203	2007年6月13日	「気」の思想・「こころ」の文化－言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方－	チャワーリン サウェッタナン チュラーロンコーン大学専任講師/日文研外国人研究員	山田 奨治 日文研准教授
204	2007年7月25日	淡路島における災害と記憶の文化－荒神信仰を中心に－	シンシア ネリ ザヤス フィリピン国立大学国際研究センター準教授/日文研外国人研究員	テモテ カーン 日文研准教授
205	2007年9月11日	宮本常一の民俗誌を通して見た日本女性と日本文化理解	チャン ティ チュン トアン ベトナム国立ハノイ国家大学助教授/日文研外国人研究員	テモテ カーン 日文研准教授
206	2007年10月10日	朝鮮旅行案内書に見る日本人のロマン	ペイ ヒョンイル カリフォルニア大学サンタバーバラ校 準教授/日文研外国人研究員	山田 奨治 日文研准教授
207	2007年11月14日	遊興の「花」としての理想－妓生と遊女－	金 榮哲 漢陽大学校教授/日文研外国人研究員	白幡 洋三郎 日文研教授
208	2007年12月12日	中国出土の文物から見た中日古代文化交流史－和同開珎と井真成墓誌を中心として－	王 維坤 西北大学国際文化交流学院教授・副院長/日文研外国人研究員	宇野 隆夫 日文研教授
209	2008年1月16日	懺悔・供養・修法 －前近代日本仏教の心を探る－	ブライアン 小野坂 ルパート イリノイ大学東アジア学科准教授/日文研外国人研究員	パトリシア フィスター 日文研教授
210	2008年2月26日	関西のジャズ喫茶文化	マイク モラスキー ミネソタ大学准教授/日文研外国人研究員	細川 周平 日文研教授
211	2008年3月18日	北極から日本へ －スウェーデン探検隊が見た明治日本－	グニラ リンドバーグ=ワダ ストックホルム大学主任教授/日文研外国人研究員	鈴木 貞美 日文研教授
212	2008年4月23日	渋沢栄一と張謇－日中近代企業家に関する一つの比較－	周 見 中国社会科学院世界経済政治研究所教授/日文研外国人研究員	猪木 武徳 日文研所長
213	2008年5月14日	小説を通してみたグローバル時代の在日コリアン	金 貞恵 釜山外国語大学校教授/日文研外国人研究員	松田 利彦 日文研准教授
214	2008年6月11日	ーヨーロッパ人の日本宗教へのアプローチ －エミール ギメと日本の僧侶神主との問答	フレデリック ジラール フランス極東学院 教授/日文研外国人研究員	稲賀 繁美 日文研教授
215	2008年7月9日	萬葉集に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布	アレキサンダー ヴォヴィン ハワイ大学マノア校 東洋言語文学部教授/日文研外国人研究員	光田 和伸 日文研准教授
216	2008年9月11日	韓国における日本研究が語るもの	金 弼東 世明大学校日本語学科副教授/日文研外国人研究員	小松 和彦 日文研教授
217	2008年10月9日	1930年代の『改造』における魯迅の日本越境	王 中忱 清華大学人文社会科学院教授/日文研外国人研究員	劉 建輝 日文研准教授
218	2008年11月12日	日本における禅浄双宗－黄檗宗を中心として	ジェームズ バスキンド 日文研 海外研究交流室プロジェクト研究員	磯前 順一 日文研准教授
219	2008年12月10日	洋楽ジャンルの適応と変遷:童謡、ヒップホップとレゲエの事例研究	ノリコ マナベ ニューヨーク市立大学非常勤講師/日文研外来研究員	細川 周平 日文研教授
220	2009年1月16日	志賀直哉の関西観	郭 南燕 日文研准教授	光田 和伸 日文研准教授
221	2009年2月17日	内藤湖南の中国学界に与えた影響	胡 宝華 南開大学歴史学院准教授/日文研 外国人研究員	井波 律子 日文研教授
222	2009年3月9日	江戸時代における無名の人々の伝記	ヴォルフガング シャモニ ハイデルベルグ大学 教授/日文研 外国人研究員	鈴木 貞美 日文研教授

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	テーマ	発表者	コメンテーター
223	2009年4月14日	メディア・ミックスの系譜－近代文学とベストセラーと視覚文化－	河名　サリ マサチューセッツ大学ボストン校 助教授/日文研外国人研究員	山田　奨治 日文研准教授
224	2009年5月12日	変わりゆく国家と民族のすがた	趙　政男 高麗大学校政治外交学科 教授/日文研外国人研究員	松田　利彦 日文研准教授
225	2009年7月14日	天皇のギフト－明治外交の一齣－	ジョン　ブリーン 日文研准教授	瀧井　一博 日文研准教授
226	2009年9月8日	日本の技術者とフランスの技術者－技術革新の担い手－	野原 博淳 フランス国立科学研究センター上級研究員/日文研外国人研究員	猪木　武徳 日文研所長
227	2009年10月26日	韓国の純情漫画と日本の少女マンガ	秋　菊姫 東京大学交流研究員	山田　奨治 日文研准教授
228	2009年11月16日	世俗化から見た近代仏教 —日本とベトナムとの比較—	ファム　ティ トゥ　ザン ハノイ国家大学・人文社会科学大学東洋学部日本学科専任講師/ 日文研外国人研究員	末木　文美士 日文研教授
229	2009年12月8日	近世日本における開帳と秘仏の文化	許　南麟 ブリティッシュコロンビア大学教授/日文研外国人研究員	小松　和彦 日文研教授
230	2010年1月19日	猿と一緒に踊り、鷹と共に空へ飛ぶーバーチャル空間における文化遺産の再構築－	陳　玲 清華大学准教授/日文研外国人研究員	山田　奨治 日文研准教授
231	2010年2月9日	日本文化の形成及びその特徴	蒋　立峰 中国社会科学院日本研究所教授/日文研外国人研究員	笠谷　和比古 日文研教授
232	2010年3月9日	東アジアにおける雅楽の流れ	趙　維平 上海音楽学院教授/日文研外国人研究員	細川　周平 日文研教授
233	2010年4月13日	見る風景・想像する風景—芭蕉の俳文をたのしむ—	エッケハルト　マイ フランクフルト大学名誉教授/日文研外国人研究員	白幡　洋三郎 日文研教授
234	2010年5月11日	蒋介石の人格形成と日本	黄　自進 (台湾)中央研究員近代史研究所 研究員 教授/日文研外国人研究員	劉　建輝 日文研准教授
235	2010年6月8日	「訳する」というのはどういうことか？ —翻訳概念史の概略—	ジェフリー　アングルス ウェスタン・ミシガン大学准教授/日文研外国人研究員	鈴木　貞美 日文研教授
236	2010年7月13日	初期の和歌と地名 —英詩からの見方—	フィリップ　ハリス オックスフォード大学クイーンズカレッジフェロー/日文研外国人研究員	荒木　浩 日文研教授
237	2010年9月14日	戦争・記憶・想像力—文禄の役(壬辰倭乱)をめぐって—	崔　官 高麗大学校・日本研究センター所長/日文研外国人研究	笠谷　和比古 日文研教授
238	2010年10月12日	海を渡った日本の教育—戦前期ブラジルにおける日本的教育文化の越境と再創—	根川　幸男 ブラジリア大学外国語・翻訳学部准教授/日文研外国人研究員	井上　章一 日文研教授
239	2010年11月9日	日本現代批評と韓国の美	呉　京煥 釜山大学校教授/日文研外国人研究員	劉　建輝 日文研准教授
240	2010年12月14日	小田実の思想と文学—全体小説を短編で書くこと—	ローマン　ローゼンバウム シドニー大学名誉アソシエイト/日文研外国人研究員	鈴木　貞美 日文研教授
241	2011年1月18日	亡命ロシア人が見た近代日本	アイーダ　スレイメノヴァ 極東国立総合大学東洋学部准教授/日文研外国人研究	劉　建輝 日文研准教授
242	2011年2月15日	時空を超える弥次喜多の笑い—小説から浮世絵まで—	康　志賢 全南大学校副教授/日文研外国人研究員	早川　聞多 日文研教授
243	2011年3月9日	萩原朔太郎と近代日本—時代のパイオニア—	徐　載坤 韓国外国語大学校日本語通翻訳学科副教授/日文研外	牛村　圭 日文研教授
244	2011年4月26日	戦後映画における孤児の表象	ミツヨ　ワダ　マルシアーノ カールトン大学准教授/日文研外国人研究員	細川　周平 日文研教授
245	2011年5月17日	関東都督府の満州調査	王　鉄軍 遼寧大学日本研究所副研究員/日文研外国人研究員	松田　利彦 日文研准教授
246	2011年6月14日	朱舜水と日本	韓　東育 東北師範大学歴史文化学院教授(院長)/日文研外国人	劉　建輝 日文研准教授
247	2011年7月12日	竹島から「韓流」まで：日本と韓国の「地政心理」の出会い	ロー　ダニエル 社団法人東アジア平和投資プログラム代表/日文研外国	戸部　良一 日文研教授
248	2011年9月13日	ベトナムにおける日本語教育と日本研究の現状	グエン　ティ タン　タム ハノイ貿易大学上級講師/ベトナム科学技術協会技術開	白幡　洋三郎 日文研教授
249	2011年10月11日	美術とコロニアリズムの掛け合い —国策としての偽満州国第一回美術展覧会について	王　確 東北師範大学文学院教授(院長)/日文研外国人研究員	劉　建輝 日文研准教授
250	2011年11月8日	近代日本の最盛期：明宮嘉仁(のち大正天皇)の生涯を通して	フレデリック　リチャード　ディキンソン ペンシルベニア大学准教授/日文研外国人研究員	戸部　良一 日文研教授
251	2011年12月13日	韓国における＜親日派＞言説に関する一つの考察	金　哲 延世大学校教授/日文研外国人研究員	鈴木　貞美 日文研教授

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	テーマ	発表者	コメンテーター
252	2012年1月17日	ベトナムの習慣と信仰を古典文学に探る	グエン ティ オワイン ベトナム社会科学院准教授/日文研外国人研究員	小松 和彦 日文研副所長
253	2012年2月14日	天寿の域にいたる道 —貝原益軒の『養生訓』を中心に—	劉 克申 上海対外貿易学院日本語学部教授/日文研外国人研究	稲賀 繁美 日文研教授
254	2012年3月13日	帝誄（コロ）と帝誄（イサ）めの物語 —狩野重信筆「帝鑑	楊 暁捷 カルガリー大学教授/日文研外国人研究員	荒木 浩 日文研教授
255	2012年4月10日	東アジア近代史における「記憶と記念」	都 珍淳 昌原大学校人文大学史学科教授/日文研外国人研究員 ゲスト発表者：馬 暁華 大阪教育大学教育学部准教授	松田 利彦 日文研准教授
256	2012年5月15日	近代日中知識人の自他認識—思想交流史からのアプローチ—	徐 興慶 台湾大学日本語文学科・研究所教授/日文研外国人研	劉 建輝 日文研准教授
257	2012年6月12日	日本映画に於ける原型的な表現方法	アンドリヤナ ツヴェトコビッチ 欧州映画アカデミーESRA パリ－スコピエ－ニューヨーク客員教授/日文研外来研究員	細川 周平 日文研教授
258	2012年7月10日	「中国式」日本研究の実像と虚像	刘 岳兵 南開大学日本研究院教授/日文研外国人研究員	笠谷 和比古 日文研教授
259	2012年9月11日	中国文化への誘い—漢字からのアプローチ	金 哲会 北京語言大学出国留学人員培訓部日本語教研室教授/日文研外国人研究員	荒木 浩 日文研教授
260	2012年10月9日	戦国の宗教文化と宣教師—大航海時代における異教の位置づけを考える—	シルヴィオ ヴィータ 京都外国語大学教授	末木 文美士 日文研教授
261	2012年11月6日	「汎ヨーロッパ」から「美の国」へ—クーデンホーフ＝カレルギーと日本—	バルト ガーンズ フィンランド国際関係研究所研究員	佐野 真由子 日文研准教授
262	2012年12月11日	日本の中世文化を考える—上流階層における唐物趣味や禅趣味を中心に—	韋 立新 広東外語外貿大学東方語言文化学院教授/日文研外国人研究員	鈴木 貞美 日文研教授
263	2013年1月15日	スリランカにおける演劇史と日本の伝統演劇からの影響について	クラティラカ クマーラシンハ スリランカ・ケラニア大学教授/日文研外国人研究員	荒木 浩 日文研教授
264	2013年2月12日	中日文化異同論の推移——近代以降の日本と欧米の学界を中心に	張 翔 復旦大学歴史系教授/日文研外国人研究員	伊東 貴之 日文研教授
265	2013年3月12日	日本演劇における「非人間的なるもの」との遭遇——霊・動物・テクノロジー	マーク コーディ ポールトン ヴィクトリア大学教授/日文研外国人来訪研究員	郭 南燕 日文研准教授
266	2013年4月9日	武術伝授に見る東西両世界	カセム ズガリ フランス国立東洋言語文化大学フランス日本協会研究者・日文研外国人研究員	笠谷 和比古 日文研教授 司会：佐野真由子 日文研准教授
267	2013年5月14日	中世日本に於ける密教僧と神祇崇拝 ——伊勢、三輪山等を中心とする両部神道	アンナ アンドレーワ ハイデルベルグ大学 カール・ヤスペルス・センター アカデミックフェロー/日文研外国人研究員	末木 文美士 日文研教授 司会：佐野真由子 日文研准教授
268	2013年6月11日	耳塚の「霊魂」をどう考えるか	魯 成煥 蔚山大学校人文大学 教授/日文研外国人研究員	松田 利彦 日文研教授 司会：佐野真由子 日文研准教授
269	2013年7月9日	ヨーロッパ貴族と日本美 －知られざる17世紀のジャポニスム－	ウィーベ カウテルト ソウル国立大学環境大学院 准教授/日文研外国人研究	白幡 洋三郎 日文研教授 司会：佐野真由子 日文研准教授
270	2013年9月20日	春画を語る・語る春画－春画を西洋の大学で教える諸問題－	ハンス トムセン チューリッヒ大学 教授/日文研外国人研究員	鈴木 堅弘 京都精華大学特別研究員 司会：佐野真由子 日文研准教授

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	テーマ	発表者	コメンテーター
271	2013年10月4日	ブラジルの日本語文学	エドワード トーマス マック ワシントン大学 准教授/日文研国際交流基金フェロー	細川 周平 日文研教授 司会:佐野真由子 日文研准教授
272	2013年11月5日	伝統と観光を考える－日本の来訪神行事を事例として－	マイケル ディラン フォスター インディアナ大学准教授/日文研外国人研究員	山田 奨治 日文研教授 司会:佐野真由子 日文研准教授
273	2013年12月10日	近代能楽史と植民地	徐 禎完 翰林大学校教授/日文研外国人研究員	松田 利彦 日文研教授 司会:佐野真由子 日文研准教授
274	2014年1月21日	他者の風景—19世紀西洋絵入り新聞から見る東アジア	陳 其松 日本学術振興会特別研究員(PD)/日文研外来研究員	劉 建輝 日文研教授 司会:佐野真由子 日文研准教授
275	2014年2月12日	『吾妻鏡(ウチジン)』の謎——清末中国へ渡った明治の性科学	唐 権 華東師範大学 准教授/日文研外国人研究員	井上 章一 日文研副所長 司会:佐野真由子 日文研准教授
276	2014年3月11日	総合テーマ「めぐりめぐる日本文化」 “Kawaii”をめぐる表象 ——その形成と展開 ポピュラー・カルチャーと世代間ギャップ ——ヨーロッパにおける日本研究の将来は如何に 日本ファッションは「前衛」か？ ——Future Beauty展の現場から	 高馬 京子 ミコラスロメリス大学 准教授、 国際日本文化研究センター 外国人研究員 ハラルド フース ハイデルベルク大学 教授 国際日本文化研究センター 外国人研究員 深井 晃子 京都服飾文化研究財団 理事、チーフ・キュレーター	山田 奨治 日文研 教授 司会:佐野真由子 日文研准教授
277	2014年4月8日	森有礼が見た19世紀半ばのロシア帝国——虚像と実像——	マリーナ コヴァルチュク 極東連邦大学(ロシア)助教 、国際日本文化研究センター 外国人研究員	コメンテーター・司会: 佐野 真由子 日文研 准教授
278	2014年5月13日	中日の知をつないだ上海内山書店	秦 剛 北京外国語大学 北京日本学研究センター 副教授、国際日本文化研究センター 外来研究員	劉 建輝 日文研 教授 司会:佐野 真由子 日文研 准教授
279	2014年6月10日	宗教と世俗の間－祇園祭とサルデーニャの祭をめぐって	エリザベッタ ポルク ライプティッヒ大学 地域研究センター 上級研究員兼講師、国際日本文化研究センター 外国人研究員	小杉 源一郎 公益財団法人 白楽天山保存会 理事長、 株式会社 ロマンス小杉 代表取締役社長 細川 周平 日文研 教授 司会:佐野 真由子 日文研 准教授
280	2014年7月8日	昭和前期の政治と宗教	ジェームス マーク シールズ バックネル大学 准教授、 国際日本文化研究センター 外来研究員 ブライアン アンドレー ヴィクトリア オックスフォード大学付属仏教研究所 研究員、 国際日本文化研究センター 外来研究員	末木 文美士 日文研 教授 山田 奨治 日文研 教授 司会:佐野真由子 日文研 准教授
281	2014年9月16日	後藤新平研究——中国の視点から	王 鍵 中国社会科学院 近代史研究所 研究員、 国際日本文化研究センター 外国人研究員	劉 建輝 日文研 教授 司会:佐野 真由子 日文研 准教授
282	2014年10月14日	日本が自ら日本を世界に紹介した最初の本にみる日本の美意識について	エミリア シャロンドン トゥールーズ・ル・ミライユ大学 講師、 国際日本文化研究センター 外国人研究員	稲賀 繁美 日文研 教授 司会:佐野 真由子 日文研 准教授
283	2014年11月27日	日本古典文学における隠喩の考察 ——主に歌ことば、翻訳、隠喩の展開について	スティーナ イェルブリン 国際日本文化研究センター 外来研究員	荒木 浩 日文研 教授 司会:佐野 真由子 日文研 准教授

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	テーマ	発表者	コメンテーター
284	2014年12月12日	大英博物館「春画展」報告	アンドリュー・ガーストル ロンドン大学SOAS 教授、 国際日本文化研究センター 外国人研究員 矢野 明子 ロンドン大学SOASジャパン・リサーチ・センター リサーチ・アソシエイト、 国際日本文化研究センター 外来研究員 石上 阿希 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員	早川 聞多 日文研 教授 司会：佐野 真由子 日文研 准教授
285	2015年1月13日	グローバル時代における日本大衆文化とその変容――大河ドラマ分析を通じて	朴 順愛 湖南大学校 教授、 国際日本文化研究センター 外国人研究員	谷川 建司 早稲田大学政治経済学術院 客員教授、 日文研 客員教授 コメンテーター・司会： 山田 奨治 日文研 教授
286	2014年2月10日	仏教と平和主義―日本仏教の挑戦	ランジャナ ムコパディヤーヤ デリー大学社会科学東アジア研究科 准教授、 国際日本文化研究センター 外国人研究員	末木 文美士 日文研 教授 司会：佐野真由子 日文研 准教授
287	2015年3月10日	私の日本映画研究とソフトパワー外交	アンドリヤナ ツヴェトコビッチ 駐日マケドニア共和国 特命全権大使、 元国際日本文化研究センター 外来研究員	高橋 剣 東映株式会社京都撮影所製作部 次長、 京都ヒストリカ国際映画祭 事務局長 田口 栄治 国際交流基金 理事 亀田 真澄 東京大学文学部 助教 司会： 佐野 真由子 日文研 准教授

(3) シンポジウム、レクチャー等

③Nichibunken Evening Seminar

回	開催年月日	テーマ	発表者
87	2004/4/7	The Changing Notion of Community and Participatory Urban Development in Japan	Bijay Anand MISRA 都市計画建築研究学院(ニューデリー)名誉教授/日文研外国人研究員
88	2004/5/6	Rethinking Edo Culture: Alternate Attendance and Tokugawa Japan	Constantine Nomikos VAPORIS メリーランド大学準教授/日文研外国人研究員
89	2004/6/10	Early Cultural Contacts between Japan and Australia	Hugh CLARKE シドニー大学教授/日文研外国人研究員
90	2004/7/8	Japan and the Nobel Science Prizes: The First Half-Century, 1901-1949	James R. BARTHOLOMEW オハイオ州立大学教授/日文研外来研究員
91	2004/9/2	Hand-sewn Buddhist Robes in Contemporary Japan and the Rhetoric of Authenticity	Diane RIGGS 総合研究大学院大学研究生/カリフォルニア大学ロサンゼルス校博士課程
92	2004/10/7	The Nervous System as Apprehended by Japanese Scholars of Western Medicine in the Edo Period	Frederik CRYNS 日文研助手
93	2004/11/4	The Use of Legendary Material in Medieval Noh Hidensho	Noel John PINNINGTON アリゾナ大学助教授/日文研外国人研究員
94	2004/12/2	Lafcadio Hearn as Japanese Nationalist	Roy Anthony STARRS オタゴ大学シニア・レクチャラー/ 日文研外国人研究員
95	2005/1/13	A Good Rate of Exchange: International Influences on the Iconography of the Yen	Jacques E.C. HYMANS スミスカレッジ助教授
96	2005/2/3	NIshida Kitarô and Zen	Agnieszka Helena KOZYRA ワルシャワ大学助教授/日文研外国人研究員
97	2005/3/3	Strindberg & Akutagawa-Suitable Cases for Treatment?	Mats Arne KARLSSON ストックホルム大学助教授/ 日文研外国人研究員
98	2005/4/7	The Worship of Confucius in Tokugawa Japan	Ian James MCMULLEN オックスフォード大学ペンブロークカレッジ教授/日文研外国人研究員
99	2005/5/11	Environmental Archaeology in Southern Scandinavia: Interdisciplinary Research during the 20th Century	Bjorn E. BERGLUND ルンド大学名誉教授/日文研外国人研究員
100	2005/6/9	Buddhist Affects in Contemporary Music	Luciana GALLIANO ヴェニス大学助教授/日文研外国人研究員
101	2005/7/7	The Care of the Elderly in Japan: Lives of Residents in Kotobuki Home	WU Yongmei 北京日本学研究センター専任講師/ 日文研外国人研究員
102	2005/9/8	Production Processes and Materials in the Textile Cultures of Japan and the Philippines	Norma Absing RESPICIO フィリピン大学教授/日文研外国人研究員
103	2005/10/6	Seeing the Forest for the Trees: Temples, Timber and Truculence in Early Modern Japan	Alexander Marshall VESEY ストーンヒル大学助教授/日文研外来研究員
104	2005/11/10	The Diffusion of the High Modern State: From Manchunkuo to South Korea	HAN Suk Jung 韓国・東亜大学校教授/日文研外国人研究員
105	2005/12/8	Remarks on the Concept of Epistolary Etiquette(shosatsurei) in Premodern Japan	Markus RUETTERMANN 日文研助教授
106	2006/2/9	A Latin American View of Japanese Performing Arts: towards a Web-Encyclopedia of Japanese Performing Arts in Spanish	Mauricio MARTINEZ ロス・アンデス大学・エクステルナド大学　アジア研究科教授/日文研外来研究員
107	2006/3/9	Down and Out in Negishi: Secular Reclusion as Civil Society in Edo	William Puck BRECHER 南カリフォルニア大学助手/日文研外来研究員
108	2006/4/6	Representing the 'Female' Body in Kabuki	Andrew GERSTLE ロンドン大学SOAS教授/日文研外国人研究員
109	2006/5/11	Figurality and the Development of Modern Consciousness	Charles Shiro INOUYE タフツ大学教授/日文研外国人研究員
110	2006/6/8	Women in the History of Chanoyu	Rebecca CORBETT 総合研究大学院大学 院生
111	2006/7/6	Recent Trends in Scholarship on Japan in the United States of America	James C. BAXTER 日文研教授

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	テーマ	発表者
112	2006/9/7	What Language Do You Expect from the Stage in Japan? Kinoshita Junji's Shigosen no matsuri – Requiem on the Great Meridian (with video clips)	Brian POWELL オックスフォード大学キーブルカレッジ名誉フェロー/日文研外国人研究員
113	2006/10/5	Arts and Crafts in Modern Kyoto: Facing the West	稲賀　繁美 日文研教授
114	2006/11/2	Eloquent Bones: On Maruyama Ôkyo's 'Skeleton Sitting in Mediation over the Sea'	Josef A. KYBURZ フランス国立科学研究センター教授/ 日文研外国人研究員
115	2006/12/7	The Last Samurai:The Mythical Suicide of Saigo Takamori	Mark RAVINA エモリー大学準教授/日文研外来研究員
116	2007/2/8	Shin Buddhism and Economic Growth in Premodern Japanese History: Can the Relationship be 'Religiously' Interpreted ?	Galen AMSTUTZ 龍谷大学教授
117	2007/3/1	The Art of the Bluff Among Japanese Migrants: Popular Literary Modernism in the 1920s	大森恭子 ハミルトン大学東アジア言語文学科助教授/ 日文研外来研究員
118	2007/4/5	Celebrating Work in Pictures: A New Subject for Edo Society	Mary Elizabeth BERRY カリフォルニア大学バークレー校教授/ 日文研外来研究員
119	2007/5/10	On geidan: an anthropological approach	井口かをり 日文研海外研究交流室プロジェクト研究員
120	2007/6/7	Shells in Prehistoric Societies from West to East: A Preliminary Approach	Ioulia KARALI GIANNAKOPOULOU アテネ大学考古学科教授/ 日文研外国人研究員
121	2007/7/5	Hinduism and Shintoism: A Comparative Study	Rajendra TOMAR ジャワハルラル・ネルー大学客員教授/ 日文研外国人研究員
122	2007/9/6	石干見 (Ishihimi) – Studies on the Relics of Maritime Civilizations in the Visayas, Piscadores, and the Ryukyus	Cynthia Neri ZAYAS フィリピン国立大学　国際研究センター　準教授/日文研外国人研究員
123	2007/10/4	The Science of Karma: The Congruence of Buddhism and 19th Century Evolutionary Thought in the Writings of Lafcadio Hearn	James BASKIND 日文研 海外研究交流室プロジェクト研究員
124	2007/12/6	Music on the Periphery of Modan Raifu: Traces of Music-making among the Okinawan and Korean Communities of Interwar Osaka	Hugh DE FERRANTI ニューイングランド大学準教授
125	2008/2/7	Visualizing an Ancient Land Near, Yet Far: Imperialist Nostalgia and the Production of Tourist Images in Colonial Korea	PAI Hyung Il カリフォルニア大学サンタバーバラ校准教授/日文研外国人研究員
126	2008/3/6	Archives of Western Social Scientists in Japanese Collections, with Special Reference to the Kansai Area	Gilles Jean-Pierre CAMPAGNOLO フランス国立科学研究センター研究員(准教授)/日文研外国人研究員
127	2008/4/3	An Arctic Passage to the Far East: The Visit of the Swedish Vega Expedition to Japan in 1879	Gunilla LINDBERG-WADA ストックホルム大学主任教授/ 日文研外国人研究員
128	2008/5/8	Rereading those Lines: Rethinking Japanese Buddhism through Examining Bunin (Appointments Works)	Brian O. RUPPERT イリノイ大学東アジア学科・宗教学科准教授/ 日文研外国人研究員
129	2008/6/5	The Ticklish Triangle: Reflections on Nationalisms in Japan, China and Taiwan since the 1990s	汪　宏倫 台湾中央研究院社会学研究所副研究員/ 日文研外国人研究員
130	2008/7/3	Bad Boy of the Gods: Readings from a Translation-in-Progress of Aratama, Ishikawa Jun's Novel of 1964	William TYLER オハイオ州立大学准教授/ 日文研外国人研究員
131	2008/10/2	The Method of Tsugaru Shamans in Osabe Hideo's Literature: Towards a New Relation between Japan and Asia	Nanyan GUO 日文研海外研究交流室　准教授

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	テーマ	発表者
132	2008/11/6	The Heart's Home Town: Traditional Folk Song in Modern Japan	David HUGHES ロンドン大学　東洋アフリカ学学院（SOAS）教授/日文研外国人研究員
133	2008/12/4	The Adaptation of Western Genres in Japanese Popular Music: Evolution of Musical Style and Text Setting in Children's Songs and Hip-Hop	Noriko MANABE ニューヨーク市立大学非常勤講師/ 日文研外来研究員
134	2009/1/15	The Theatre of Species: Race and Animals in Wartime Animation	Thomas LAMARRE カナダ　マクギル大学教授
135	2009/2/5	Shamanism in Context: Itako (Northern Japan) and Mikishi (Democratic Republic of Congo)	Felix KAPUTU ルブンバシ大学　教授/日文研外国人研究員
136	2009/3/12	Past and Present: Stone Bead Making in India	Kuldeep Kumar BHAN マハラジャサヤジラオ大学教授/ 日文研外国人研究員
137	2009/4/2	Cramming the Canon: Contemporary Gakushū Manga and the Possibilities of Edutainment	KAWANA Sari マサチューセッツ大学ボストン校助教授/ 日文研外国人研究員
138	2009/5/14	What is Japanese Performing Arts? The Process of Constructing an Image	Mauricio MARTINEZ 日文研外国人研究員
139	2009/6/4	Sakabe Megumi, A Scenic Philosophy	Michel DALISSIER 中国日本チベット文明研究センター研究員/ 日文研外国人研究員
140	2009/7/2	Soldiers and Society in Japan: Exploring the Issues	Theodore F. COOK ニュージャージー州立ウイリアム・パターソン大学教授/日文研外国人研究員
141	2009/9/3	Multiproxy Evidence of Tropical Holocene Climate Variability and Anthropogenic Interference from a Lake Record in Bali	Xun LI 日本学術振興会研究員/日文研外来研究員
142	2009/10/1	Monsters and Micronesia: Japanese Conceptualizations of the South Seas as a Supernatural Space	Mark OMBRELLO ノートルダム女子大学英語英文学科講師/ハワイ大学歴史学博士候補/ 総合研究大学院大学院生
143	2009/11/5	Architecture & Photography: Longing for the Past and Reconstructing the Future	Murielle HLADIK フランス　サン・テチエンヌ国立建築高等研究院准教授/日文研外国人研究員
144	2009/12/3	Kume Kunitake and Kume Keiichiro: Father and Son, Advocators of Western Science and Art	Yona SIDERER エルサレム・ヘブライ大学上級講師/ 日文研外国人研究員
145	2010/2/4	Ideals of Feminine Beauty: Portrayal in Ukiyo-e and Indian Miniature Painting	Anu JINDAL 日文研外国人研究員
146	2010/3/4	"The "Eyes" of the Police and a Historiographic Problem: The 1925 Taipei Police Exhibition"	蔡　慧玉 中央研究院台湾史研究所副研究員/ 日文研外来研究員
147	2010/4/8	Hideyoshi's Invasion of Korea and the Diplomacy of Survival 1596-98	Namlin HUR ブリティッシュ・コロンビア大学教授/ 日文研外国人研究員
148	2010/5/13	Voices from Nara at the Chinese Court: Poetry and Diplomacy in Eighth-century East Asia	Wiebke DENECKE コロンビア大学・バーナードカレッジ准教授/ 日文研外来研究員
149	2010/6/10	The Function of Place Names in Early Waka: Some Comparisons with English, Welsh and Anglo-Welsh Poetry	Phillip HARRIES オックスフォード大学 クイーンズカレッジ フェロー/日文研外国人研究員
150	2010/7/1	Rethinking Shonen' ai: Uses of History in Edogawa Ranpo' s Writing about the Love of Boys	Jeffrey ANGLES ウェスタン・ミシガン大学准教授/日文研外国人研究員
151	2010/9/2	Buddhist Chaplaincy During the Russo-Japanese War	Micah Louis AUERBACK ミシガン大学講師/日文研外来研究員
152	2010/10/14	Modern Japanese Literature and Russian Poet-immigrants: A Case of Eastern Diaspora	Aida SULEYMENOVA 極東国立総合大学東洋学部准教授/ 日文研外国人研究員

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	テーマ	発表者
153	2010/12/9	Japanese Studies in Bulgaria: The 20th Anniversary of the ‘Japanese Studies’ Major at St. Kliment Ohridski Sofia University	Boyka Elit TSIGOVA 「聖クリメント・オフリドスキ」ソフィア大学教授/日文研外国人研究員
154	2011/2/3	Chinese and Japanese Ghost Drama: A Comparative Study with Special Reference to Japanese Noh Plays and Chinese Zaju (Variety Plays)	趙　暁寰 オタゴ大学准教授/日文研外来研究員
155	2011/3/3	Writing in Between Language and Culture: Some Cases in Contemporary Japanese Literature	Noriko THUNMAN ヨーテボリ大学教授/日文研外来研究員
156	2011/4/7	When Did the Japanese Start Writing Books on Japan in English?　The Strengths and Weaknesses of the First Generation of Native Japan Interpreters	太田　雄三 マッギル大学教授/日文研外来研究員
157	2011/5/12	Self and Society in Ethics of Emptiness: As Seen in a Preliminary Examination of Hisamatsu Shin'ichi and Watsuji Tetsuro	アントン セビリア フィリピン、アテネオ・デ・マニラ大学人文学部哲学科講師
158	2011/6/2	Studying Translations —Then and Now	ヴィジャヤ スリヤカント テネッティ 英語・外国語大学准教授/日文研外来研究員
159	2011/7/7	“To Capture Their Favor”: Gift-giving by the Dutch East India Company	シンシア フィアレー ライデン大学研究員/日文研外国人研究員
160	2011/9/8	Desire and the Civilization: A Political-Economy Inquiry into the Japanese Mind	ロー ダニエル 社団法人東アジア平和投資プログラム代表/日文研外国人研究員
161	2011/10/6	Chinese Portable Movies	パオラ ヴォチ オタゴ大学シニアレクチャラー/日文研外来研究員
162	2011/11/10	Resistance and Despair: A Speculation on ″Pro-Japanese″ Discourse in Korea	金　哲 延世大学校教授/日文研外国人研究員
163	2011/12/8	Chain and the City: Conceptualizing Public Space in Japan	ヘレナ グリンシプン エルサレム ヘブライ大学付属トルーマン平和研究所博士研究員/日文研外国人来訪研究員
164	2012/2/2	Japanese Women through the Prism of Proverbs	ギータ A. キニ ヴィシュヴァ・バーラティ大学准教授/日文研外来研究員
165	2012/3/8	Masterworks of Ukiyo-e in an Australian Collection	ギャリー ジェィムズ ヒッキー クイーンズランド大学英語・メディア研究・美術史学科美術館研究主査/日文研外国人研究員
166	2012/4/5	An Other Other? The Qur’ān, Islam, and Religious Identity in Modern Japan	ハンス マーティン クレーマ ルール大学ボッフム准教授/日文研外国人研究員
167	2012/5/10	Tsukioka Kōgyo and the Popularization of Noh in Modern Japan	リチャード J スメサースト ピッツバーグ大学教授
168	2012/6/7	Taishō as Interwar: Reflections on Japan in the History of the Modern World	フレデリック ディキンソン ペンシルベニア大学准教授/日文研外来研究員
169	2012/7/5	Archetypes in Japanese Films: The Wanderer Archetype from Myth to Street	アンドリヤナ ツヴェトコビッチ 欧州映画アカデミーESRA パリ-スコピエ-ニューヨーク客員教授/日文研外来研究員
170	2012/9/6	Shinto and Shamanism: The Indigenous Religions of Japan and Mongolia	ソヨンボ ボルジギン チョイ・ルブサンジャブ言語文明大学教授/日文研外国人研究員
171	2012/10/4	Noh Drama as a Vehicle for Spreading Shintoism and Buddhism in Medieval Japan	クラティラカ クマーラシンハ スリランカ、ケラニア大学教授/日文研外国人研究員
172	2012/11/8	Aloha Buddha and Bounty Zen: Global, Transnational, and Ethnic Buddhism in a Hawaiian Diaspora Context	ヨーン ボルプ デンマーク、オーフス大学准教授
173	2012/12/6	Common Points between the Classical Martial Art of Japan and the European Art of Fighting	カセム ズガリ フランス国立東洋言語文化大学フランス日本協会研究者/日文研外国人研究員

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	テーマ	発表者
174	2013/2/7	Kyoto's Old Cherries are More Beautiful than the New: How and Why?	ウィーベ カウテルト ソウル国立大学環境大学院准教授/ 日文研外国人研究員
175	2013/3/7	Inspiration and the Languages of Contemporary Music	林　志宣 延世大学校教授/日文研外国人研究員
176	2013/4/11	UNESCO Comes to Kagoshima: Ritual, Depopulation, and the Problem of Intangible Cultural Heritage	マイケル ディラン フォスター インディアナ大学准教授/ 日文研外国人研究員
177	2013/5/9	Uncanny Realism: Mimesis and Metamorphosis in Japanese Theatre and Beyond	マーク コーディ ポールトン ヴィクトリア大学教授/日文研外来研究員
178	2013/6/6	Childbirth and Women's Health in Heian and Kamakura Japan	アンナ アンドレーワ ハイデルベルグ大学 カール・ヤスペルス・センター アカデミックフェロー/ 日文研外国人研究員
179	2013/7/4	Hara Setsuko's Screen Career: The Intersection between Eternal Virgin and Eternal Madonna	マッツ カールソン シドニー大学シニア講師/ 日文研外来研究員
180	2013/9/5	The Birth of Mutual Recognition: European and Japanese Visual Images of Each Other during the Edo Period and the Quest for Generalization	ロテム コーネル イスラエル ハイファ大学教授/ 日文研外来研究員
181	2013/10/3	Transgressive Readers and Writers: On the Japanese-Language Literature of Brazil	エドワード トーマス マック ワシントン大学准教授/日文研外来研究員
182	2013/11/7	Narrative Agency in 13th-14th Century Chan Figure Painting: a Study of Hagiography-Iconography Text-Image Relationships	マルコム マクネル Phd Student, SOAS University of London/ 日文研英国芸術・人文リサーチカウンシル研究員
183	2013/12/5	Animism for Modernity: Lessons from Minamata for the Post-Fukushima World	Shoko YONEYAMA Senior Lecturer, The University of Adelaide
184	2014/2/6	Spring and Asura: Buddhist Progressivism in the Taishō Era	ジェームズ　マーク　シールズ Associate Professor, Bucknell University　JF Research Fellow/日文研外来研究員
185	2014/3/6	Forgotten Treasures of Meiji Japan: The Nuremberg 1885 Exhibition Revisited	シビル ギルモンド ヴュルツブルク大学 リサーチ・アソシエイト/ 日文研 外来研究員
186	2014/4/3	Religion and Community in Kyoto: The Gion Matsuri and Chōnaikai	エリザベッタ ボルク ライプティッヒ大学 地域研究センター 上級研究員兼講師/日文研 外来研究員
187	2014/5/8	Reflections on"Japanese"Culture in Transnational Communication as Seen through Representations of"Kawaii"	高馬　京子 Associate Professor and Head of Asian Centre, Mykolas Romeris University/日文研 外国人研
188	2014/6/5	Mori Arinori's Journey to St. Petersburg in 1866: Images of Western Backwardness and Threatening Modernizati	マリーナ コヴァルチュク Assistant Professor, Far Eastern Federal University, Russia/日文研 外国人研究員
189	2015/7/3	Transcultural Encounters: German Beer and Meiji Japan	ハラルド・フース ハイデルベルク大学教授/ 日文研外国人研究員
190	2015/9/4	SuperNATURAL Japan: Digging Out the Embedded Cultural Realities in Japanese Fairy Tales	ゲルガナ・ペトコヴァ ソフィア大学「聖クリメント・オフリドスキ」准教授/ 日文研外国人研究員
191	2015/10/2	Yashiro's Details and the Problem of Place in Art History	望月　みや ニューヨーク大学アブダビ校美術研究所准教授/日文研外国人研究員
192	2015/11/6	Tree Blossoms and Rock Gardens: On the Duality of the Japanese Sense of Beauty	エミリア・シャロンドン トゥールーズ・ル・ミライユ大学日本語学科講師/ 日文研外国人研究員
193	2015/12/4	Rethinking the Concept of New Religions in Japan: The Case of Agonshū	Alexandre BENOD 日本学術振興会研究員/立命館大学
194	2015/2/5	The Circuits of Production, Distribution, and Consumption as a Possible Narrative within Japanese Art History: Some Preliminary Considerations	アマウリ・ガルシア エル・コレヒオ・デ・メヒコ大学院大学 アジア・アフリカ研究センター 教授/ 国際交流基金研究員
195	2015/3/5	Music as Representation: Thoughts and Remarks on Japanese Fluxus	ルチアナ・ガリアーノ カ・フォスカリ大学客員教授/ 日文研 外国人研究員

(3) シンポジウム、レクチャー等

④レクチャー

回	開催年月日	テーマ	担当教員	発表者
116	2004年 5月20日	メキシコ大学院大学における日本研究の40年	James BAXTER　日文研教授	田中道子 エル・コレヒオ・デ・メヒコ(メキシコ大学院大学)アジア・アフリカ研究センター教授
117	2004年 7月15日	"Exhibiting Meiji Modernity: Japanese Art at the Columbian Exposition, Chicago1893"	細川周平　日文研助教授	ジュディス　M. スノッドグラス(Judith M. SNODGRASS) ウェスタンシドニー大学シニア・レクチャラー
118	2004年 9月15日	サンクトペテルブルグ(ロシア)における日本語学習の三百年のあゆみ	James BAXTER　日文研教授	ヴィクター　ヴィクトロヴィッチ　リビン (Victor Victrovich RYBIN) サンクトペテルブルグ大学助教授
119	2005年 4月 5日	謡曲にみる娘の姿	James BAXTER　日文研教授	サオワラック　スリヤウォンパイサル(Saowalak SURIYAWONGPAISAL) チュラロンコン大学準教授
120	2005年 7月14日	離脱(EXIT)と発言(VOICE)ー日本の社会運動における諸様式について	園田英弘　日文研教授	カール　カッセゴール (Carl Cassegard) スウェーデン　イエテボリ大学文学部上級研究員/京都大学招へい外国人学者
121	2009年 4月8日	How to Publish Your Manuscript	山田奨治　日文研准教授	ウィリアム　ハメル (William M. HAMMELL) ハーバード大学アジアセンター出版部編集委員
122	2009年11月11日	日本宗教研究をめぐって	末木文美士　日文研教授	ジャクリーヌ　ストーン (Jacqueline I. STONE) プリンストン大学教授
123	2009年11月20日	1920～30年代中国におけるビアズリーの受容と上海のデカダンス文学	劉建輝　日文研准教授	周　小儀 (Zhou Xiaoyi) 北京大学外国語学院英語系教授
124	2009年12月11日	現代中国の仏教と仏教研究	末木文美士　日文研教授	張　文良 (Zhang Wenliang) 創価大学国際仏教学高等研究所学振研究員 中国人民大学哲学院准教授
125	2009年12月21日	中央アジア・ソグディアナにおける仏教遺跡と美術	宇野隆夫　日文研教授	アブデゥラエフ　カジム (Abdullaev Kazim) ウズベキスタン共和国　科学アカデミー考古学研究所指導研究員 パルダエフ　ムフトルクル (Pardaev Muhtorkul) ウズベキスタン共和国　科学アカデミー考古学研究所指導研究員
126	2010年4月6日	ヨーロッパにおける国制史の現状	瀧井一博　日文研准教授	発表者: ヴィルヘルム　ブラウネーダー (Wilhelm BRAUNEDER) ウィーン大学教授 コメンテーター: 屋敷二郎　一橋大学大学院法学研究科准教授 瀧井一博　日文研准教授
127	2010年11月19日	禅とテロリズム—血盟団	末木文美士　日文研教授	ブライアン　アンドレ　ビクトリア (Brian Andre VICTORIA) アンティオク大学教授
128	2011年5月20日	禅と西洋形而上学の解体	末木文美士　日文研教授	ハヨ　クロンバッハ (Hayo KROMBACH) ロンドン大学講師・研究員
129	2011年6月24日	念仏のペルソナ	末木文美士　日文研教授	マーク　ブラム (Mark BLUM) ニューヨーク州立大学オールバニー校教授
130	2011年6月25日	再検証『戦後知の可能性』(安丸良夫他編著)	磯前順一　日文研准教授	安丸　良夫 (Yoshio YASUMARU) 一橋大学名誉教授
131	2011年7月27日	日英関係と汎アジア主義の挑戦　1895-1956	瀧井一博　日文研准教授	アントニー・ベスト (Antony Best) ロンドン大学上級講師
132	2011年10月7日	日本帝国における植民地化—朝鮮半島と琉球	磯前順一　日文研准教授	與那覇　潤 愛知大学准教授
133	2012年2月1日	引揚げ—帝国と冷戦のはざまで	山田奨治　日文研教授	朴　裕河 世宗大学日本文学科教授
134	2012年7月18日	薔薇と桜—日本研究の現状と課題	井上章一　日文研教授	大貫　恵美子 ウィスコンシン大学ウィリアムヴァイラス研究専門教授/日文研外国人研究員
135	2012年9月28日	〈間〉の場—相互干渉・相互浸透の場 国際間における現代の比較思想	末木文美士　日文研教授	橋　枠 ウィーン大学専任教授

(3) シンポジウム、レクチャー等

回	開催年月日	テーマ	担当教員	発表者
136	2012年12月3日	1940年前後の朝鮮への日本人観光: 観光促進と同化政策のはざまで	瀧井一博　日文研准教授	ケネス・ルオフ ポートランド州立大学教授
137	2012年12月15日	ウズベキスタンにおける近年の考古学調査	宇野隆夫　日文研副所長	アムリディン・ベルディムロドフ ウズベキスタン考古学研究所所長 ゲナディ・ボゴモロフ ウズベキスタン考古学研究所上級研究員
138	2013年3月14日	19世紀後半の英国における日本仏教認識	末木文美士　日文研教授	ルチア・ドルチェ ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）准教授
139	2013年5月16日	Fascist Spain and the Japanese War Efforts, 1937–1945	細川周平　日文研教授	フロレンティノ ロダオ ガルシア マドリード・コンプルテンセ大学情報学部 社会歴史コミュニケーション科
140	2013年8月8日	The Iconology of 14th–16th Century Japanese Ink Painting with Focus on Sesshu's *Landscape Scroll of the Four Seasons*	パトリシア フィスター　日文研教授	アグネセ ハイジマ ラトビア大学教授 / 日文研外国人研究員
141	2013年11月28日	伊勢神宮遷宮―古代制度のおもかげを見る―	ジョン ブリーン　日文研教授	石野 浩司 皇学館大学神道研究所 客員研究員
142	2013年12月11日	Rethinking the Body and Eroticism in Classical and Medieval Japanese narratives	荒木 浩　日文研教授	ラジャシュリ パンディ ロンドン大学 ゴールドスミス・カレッジ アジア政治学 教授

① 各年度の出版状況

2004（平成16）年度

著書名	著者・編者	刊行年月日	部数	頒布方法（有償・無償）	配布先	共同研究課題名等
日本研究　29集	日文研：4名 共同研究員ほか：6名	H16.12.27	2400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学・公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	教員の個人研究論文を公募により収集し研究紀要として発表（レフリー付）
日本研究　30集	日文研：4名 共同研究員ほか：6名	H17.3.31	2400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学・公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	教員の個人研究論文を公募により収集し研究紀要として発表（レフリー付）
日文研叢書　33号	早川聞多　編著、栗山茂久、P／フィスター訳	H16.9.1	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学・公共図書館等	日本国内：436 海外：401	教員の個人研究並びに共同研究成果としてのオリジナルな研究論文
日文研叢書　34号 ー東寿院阿弥陀如来像像内納入品資料	青木　淳著	H17.3.31	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学・公共図書館等	日本国内：436 海外：401	教員の個人研究並びに共同研究成果としてのオリジナルな研究論文
日文研叢書　35号 ー小学校で椅子に座ること	西村大志　著	H17.3.31	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学・公共図書館等	日本国内：436 海外：401	教員の個人研究並びに共同研究成果としてのオリジナルな研究論文
JAPAN　REVIEW　No17	日文研教員：1名 外国人研究員・共同研究員：4名	H17.3.31	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学・公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	JAPAN REVIEW publishes original articles, research notes and materials, technical reports, and book reviews on Japanese culture and civilization. English translations of outstanding Japanese articles may also appear.
報告書「世界の日本研究」2004	在住外国人シンポジウム報告（第5回）	H16.11.1	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学・公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	日文研が開催した在住外国人シンポジウムを広く内外に公開する
高橋虔旧蔵図書目録	国際日本文化研究センター	H17.3.31	1400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学・公共図書館等	日本国内：592、 海外：519	

2005（平成17）年度

著書名	著者・編者	刊行年月日	部数	頒布方法（有償・無償）	配付先	性格等
日本研究　31集	日文研教員：5名 共同研究員等：4名	H17.10.31	2400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館、公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	教員の個人研究論文を公募により採用（審査）し研究紀要として発表
日本研究　32集	日文研教員：3名 共同研究員等：12名	H18.3.31	2400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	教員の個人研究論文を公募により採用（審査）し研究紀要として発表
日文研叢書　36号 ー表現における越境と混淆	井波律子、井上章一編	H17.9.1	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：436 海外：401	教員の個人研究並びに共同研究成果としてのオリジナルな研究論文、貴重資料集成等
日文研叢書　37号 ー桂坂謡曲談義	ジェイ・ルービン、田代慶一郎、西野春雄　編	H18.3.1	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：436 海外：401	教員の個人研究並びに共同研究成果としてのオリジナルな研究論文、貴重資料集成等
フォーラム177回ー僕はこの暗号を不気味に思ひ	マッツ・アーネ・カールソン	H17.8.1	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：232 海外：161	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
フォーラム178回ーアジアにおけるメデイア文化の交通	呉　咏梅	H18.1.20	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：232 海外：161	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
フォーラム179回ー中性能楽論における「道」の概念	ノエル・ジョン・ピニングトン	H17.9.1	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：232 海外：161	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
フォーラム182回ー韓日につきまとう歴史の陰とその克服のための試み	鄭　在貞	H18.1.20	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：232 海外：161	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
海外日本研究機関一覧2005年版	伊東章子(編)	H18.3.	2200	無償（郵送）外国の日本研究機関、日本の大学図書館、公共図書館等	日本国内：1000 海外：1100	

著書名	著者・編者	刊行年月日	部数	頒布方法（有償・無償）	配布先	共同研究課題名等
間文庫目録	国際日本文化研究センター	H18.3.31	1400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学・公共図書館等	日本国内：592 海外：519	
＜共同研究の商業出版関係＞						
百人一首万華鏡	代表者：白幡洋三郎	H17.1	100	無償	外国のコアコア機関へ寄贈	2003．3（文明ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ）国際シンポ――百人一首の世界――
欠如・逆欠如の観点から見た日本の生活文化	代表者：園田英弘	H17.5	100	無償	外国のコアコア機関へ寄贈	欠如・逆欠如の観点から見た日本の生活文化（2000～2003年度共同研究）
公家と武家の比較文明史	代表者：笠谷和比古	H17.8.25	100	無償	外国のコアコア機関へ寄贈	2003．3国際シンポ：　公家と武家―その比較文明史的研究―
環境と文明	代表者：山折哲雄	H.17.7.1	100	無償	外国のコアコア機関へ寄贈	2005．5公開シンポ（文明研究プロジェクト）
日本の教育に武道を	山田奨治、アレキサンダー・ベネット	H17.11	100	無償	外国のコアコア機関へ寄贈	2003．11国際シンポ：　21世紀の日本武道の行方―過去・現代・未来―
日本文化の連続性と非連続性	鈴木貞美　、E・ｸﾛｯﾍﾟﾝｼｭﾀｲﾝ	H17.11.25	100	無償	外国のコアコア機関へ寄贈	2003年度：日本文化の連続性と非連続性
龍の文明史	代表者：安田喜憲	H18.2.28	100	無償	外国のコアコア機関へ寄贈	1999年度：高精度分解能の気候変動と文明の盛衰―龍と気候の文明史―
山岳信仰と日本人	代表者：安田喜憲	H.18.3	100	無償	外国のコアコア機関へ寄贈	地域連携共同研究：日本文明史の再建―環日本海文化と立山信仰
Intra-Asian Trade and the World Market	代表者：川勝平太	H18.2	80	無償	外国のコアコア機関へ寄贈	
技術と身体	木岡伸夫、鈴木貞美　編	H18.3.30	100	無償	外国のコアコア機関へ寄贈	2004．10国際シンポ（風土と技術の近代）日本の近代化過程における技術の思想

2006（平成18）年度

著書名	著者・編者	刊行年月日	部数	頒布方法（有償・無償）	配付先	性格等
日本研究　　33集	日文研教員：5名 共同研究員等：4名	H18.10.31	2400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館、公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	教員の個人研究論文を公募により採用（審査）し研究紀要として発表
日本研究　　34集	日文研教員：2名 共同研究員等：7名	H19.3.31	2400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	教員の個人研究論文を公募により採用（審査）し研究紀要として発表
日文研叢書　　38号 ――連歌の発想	山田奨治、岩井茂樹編	H18.10.1	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：436 海外：401	教員の個人研究並びに共同研究成果としてのオリジナルな研究論文、貴重資料集成等
日文研叢書　　39号 ――恋歌の歴史	岩井茂樹編	H19.3.31	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：436 海外：401	教員の個人研究並びに共同研究成果としてのオリジナルな研究論文、貴重資料集成等
JAPAN　REVIEW　NO.18	日文研教員：2名 外国人研究員、共同研究員等：5名	H18.4.1	2100	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：714海外：1149	JAPAN REVIEW publishes original articles, research notes and materials, technical reports, and book reviews on Japanese culture and civilization. English translations of outstanding Japanese articles may also appear.
欧文モノグラフ　No8 The Concept of "LITERATURE" in Japan	鈴木貞美編、ﾛｲﾔﾙ・ﾀｲﾗｰ訳	H18.5.31	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：436 海外：401	日文研教員の最良の成果物を英文にして海外に発信
フォーラム190回－玄界灘を渡った鬼のイメージ―	金　容儀	H18.10.31	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：232 海外：161	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
フォーラム193回－近代化による農村の変貌とそ捉え方について―	周　維宏	H18.12.26	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：232 海外：161	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書

著書名	著者・編者	刊行年月日	部数	頒布方法（有償・無償）	配布先	共同研究課題名等
フォーラム195回－ニュージランドの学生が学ぶ日本－	エドウイーナ・パーマー	H18.12.26	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：232 海外：161	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
フォーラム194回－オセアニアの島々ぼイメージ形成をめぐって	ダリア・シュバンバリーテ	H19.2.28	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：232 海外：161	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
国際シンポジウム報告第24 －世界の歴史空間を読む（GISを用いた文化・文明研究）－	宇野　隆夫編	H18.7.31	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	日文研が開催した国際シンポジウムの報告書
国際シンポジウム報告 2002　バンフ	ジェームズ・バクスター編	H18.11.30	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	日文研が開催した国際シンポジウムの報告書
国際シンポジウム報告 2002　プリンストン大	ジェームズ・バクスター編	H18.11.30	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	日文研が開催した国際シンポジウムの報告書
世界の日本研究2005 ―在外コリアンのディアスポラと国際ネットワーク戦略―	松田　利彦編	H18.8.1	2200	無償（郵送）外国の日本研究機関、日本の大学図書館、公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	在日外国人研究者のシンポジウム報告
世界の日本研究2006 ―在住日本研究者が語る日本の美術と音楽―	パトリシア　フィスター編	H19.3.31	2200	無償（郵送）外国の日本研究機関、日本の大学図書館、公共図書館等	日本国内：714 海外：1149	在日外国人研究者のシンポジウム報告

※本年度は共同研究成果を商業出版したものは除いてあります。

2007（平成19）年度

著書名	著者・編者	刊行年月日	部数	頒布方法（有償・無償）	配付先	性格等
日本研究　第35集 （日文研創立20周年記念特集号）	日文研教員：23名	H19.5.21	2600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館、公共図書館等	日本国内：1030 海外：1130	日文研教員等の研究成果を収録する原著論文集で、査読のうえ掲載（第35集は、専任教員から論文を募り、無審査にて掲載）
日本研究　第36集	日文研教員：3名 外国人研究員、共同研究員等：4名	H19.9.28	2400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：1030 海外：1130	日文研教員等の研究成果を収録する原著論文集で、査読のうえ掲載
日本研究　第37集	日文研教員：2名 外国人研究員、共同研究員等：10名	H20.3.31	2400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：1030 海外：1130	日文研教員等の研究成果を収録する原著論文集で、査読のうえ掲載
日文研叢書　第40集 －近世艶本資料集成Ⅳ－	A.ｶﾞｰｽﾄﾙ著、早川聞多編	H19.6.1	1050	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：460 海外：400	日文研教員等の個人研究並びに共同研究成果をオリジナルな研究論文、貴重資料集成等の形で発表
日文研叢書　第41集 －日本の住まいと風土性－	オギュスタン・ベルク編	H19.8.30	1050	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：460 海外：400	日文研教員等の個人研究並びに共同研究成果をオリジナルな研究論文、貴重資料集成等の形で発表
JAPAN　REVIEW　NO.19	日文研教員：3名 外国人研究員、共同研究員等：4名	H19.7.31	2250	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：760 海外：1130	日文研教員等の日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した論文集で、査読のうえ掲載
第196回日文研フォーラム―お札が語る日本人の神仏信仰―	ヨセフ・キブルツ	H19.5.20	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：330 海外：170	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
第198回日文研フォーラム―日印関係とインドにおける日本研究―	プラット・アブラハム・ジョージ	H19.4.20	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：330 海外：170	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
第200回日文研フォーラム―楽しみの茶と嗜みの茶―	陸　留弟	H19.6.1	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：330 海外：170	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
第201回日文研フォーラム―国境を越えた日本の学校文化―	ｻﾙｶｰﾙ ｱﾗﾆ・ﾓﾊﾒｯﾄﾞ ﾚｻﾞ	H19.7.10	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：330 海外：170	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
第203回日文研フォーラム―「気」の思想・「こころ」の文化―	ﾁｬﾜｰﾘﾝ・ｻｳｪｯﾀﾅﾝ	H19.10.1	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：330 海外：170	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書

著書名	著者・編者	刊行年月日	部数	頒布方法（有償・無償）	配布先	共同研究課題名等
第204回日文研フォーラム―淡路島における災害と記憶の文化―	ｼﾝｼｱ・ﾈﾘ・ｻﾞﾔｽﾞ	H19.12.28	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：330 海外：170	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
第27回国際研究集会報告書 －日本の伝統工藝再考－	稲賀繁美、ﾊﾟﾄﾘｼｱ・ﾌｨｽﾀｰ編	H19.9.3	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：760 海外：1130	日文研が開催した国際シンポジウムの報告書
第30回国際研究集会報告書 －日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚－	松田利彦編	H20.1.31	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：760 海外：1130	日文研が開催した国際研究集会の報告書
海外シンポジウム報告書 2000 ハワイ －Writing Histories in Japan－	ｼﾞｪｰﾑｽﾞ・ﾊﾞｸｽﾀｰ、ｼﾞｮｼｭｱ・ﾌｫｰｹﾞﾙ編	H19.7.31	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：760 海外：1130	日文研が海外において開催したシンポジウムの報告書
海外シンポジウム報告書 2006 エジプト －Cairo Conference on Japanese Studies－	池内　恵編	H19.12.20	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：760 海外：1130	日文研が海外において開催したシンポジウムの報告書
世界の日本研究2007 －コミュニケーションを考える－	ｼﾞｪｰﾑｽﾞ・ﾊﾞｸｽﾀｰ、渡辺雅子編	H20.2.1	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館、公共図書館等	日本国内：760 海外：1130	在日外国人研究者のシンポジウム報告

2008（平成20）年度

著書名	著者・編者	刊行年月日	部数	頒布方法（有償・無償）	配付先	性格等
日本研究　第38集	日文研教員：2名 共同研究員等：11名	H20.9.30	2400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：1090 海外：1150	日文研教員等の研究成果を収録する原著論文集で、査読のうえ掲載
日本研究　第39集	日文研客員教員：2名 元外国人研究員：1名 その他：2名	H21.3.31	2400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：1090 海外：1150	日文研教員等の研究成果を収録する原著論文集で、査読のうえ掲載
日文研叢書　第42集 『古代東アジア交流の総合的研究』	王維坤、宇野隆夫編	H20.12.26	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：430 海外：410	日文研教員等の個人研究並びに共同研究成果をオリジナルな研究論文、貴重資料集成等の形で発表
日文研叢書　第43集 『旅と日本発見―移動と交通の文化形成力―』	白幡洋三郎編	H21.3.19	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：430 海外：410	日文研教員等の個人研究並びに共同研究成果をオリジナルな研究論文、貴重資料集成等の形で発表
JAPAN REVIEW No.20	ジェームズ・バクスター編	H20.9.30	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：810 海外：1150	日文研教員等の日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した論文集で、査読のうえ掲載
欧文モノグラフ　No.9 ″Shots in the Dark″［禅という名の日本丸］ （シカゴ大学出版局との共同出版）	山田奨治著、R.ハルトマン訳	H21.3.31	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：430 海外：410	日文研教員等の研究活動の優れた成果で、既刊の著作を再構成したオリジナルな学術論文の英文モノグラフシリーズ
第32回国際研究集会報告集 『日本文化研究の過去・現在・未来―新たな地平を開くために―』	白幡洋三郎、劉建輝編	H21.3.3	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：760 海外：1130	日文研が開催した国際研究集会の報告集
世界の日本研究 2008 『日本の仏教学者：21世紀の仏教学に向けて』	ｼﾞｪｰﾑｽﾞ・ﾊﾞｸｽﾀｰ、ｼﾞｪｰﾑｽﾞ・ﾊﾞｽｷﾝﾄﾞ編	H21.3.25	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館、公共図書館等	日本国内：760 海外：1130	在日外国人研究者のシンポジウム報告
第208回日文研フォーラム ―中国出土の文物からみた中日古代文化交流史―	王維坤	H20.7.1	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：330 海外：170	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
第212回日文研フォーラム 『渋沢栄一と張謇』	周　見	H20.7.15	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：330 海外：170	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
第216回日文研フォーラム 『韓国における日本研究が語るもの』	金弼東	H20.11.10	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：330 海外：170	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書

著書名	著者・編者	刊行年月日	部数	頒布方法（有償・無償）	配布先	共同研究課題名等
第218回日文研フォーラム 『日本における禅浄双修―黄檗宗を中心として』	ジェームズ・バスキンド	H20.7.1	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：330 海外：170	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
第215回日文研フォーラム 『万葉集と風土記に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布』	アレキサンダー・ヴォヴィン	H21.3.12	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：330 海外：170	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
共同研究成果出版物 『性欲の文化史①・②』（講談社）	研究代表者：井上章一	①H20.10.10 ②H20.11.10	各220	無償（郵送）：外国の主要な日本研究機関	海外：210	研究課題：性欲の文化史（期間：H15.4～19.3）
共同研究成果出版物 『幸田露伴の世界』（思文閣出版）	研究代表者：井波律子	H21.1.30	220	無償（郵送）：外国の主要な日本研究機関	海外：210	研究課題：幸田露伴の世界（期間：H18.4～20.3）
共同研究成果出版物 『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』（思文閣出版）	研究代表者：松田利彦	H21.4	115	無償（郵送）：外国の主要な日本研究機関	海外：105	研究課題：日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚（期間：H16.4～19.3）

2009（平成21）年度

著書名	著者・編者	刊行年月日	部数	頒布方法（有償・無償）	配付先	性格等
日本研究　第40集	日文研教員：3名 客員・共同研究員等：5名 総研大院生：1名 その他：3名	H21.11.30	2400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：1090 海外：1182	日文研教員等の研究成果を収録する原著論文集で、査読のうえ掲載
日本研究　第41集	共同研究員等：2名 元外国人研究員：1名 総研大院生：2名 その他：4名	H22.3.31	2400	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：1090 海外：1182	〃
JAPAN REVIEW No.21	ジェームズ・C・バクスター、ジョン・ブリーン編	H21.8.28	2100	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：703 海外：1182	日文研教員等の日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した論文集で、査読のうえ掲載
日文研叢書　第44集 『近世艶本資料集成Ⅴ　月岡雪鼎2「艶道日夜女宝記」』	A.ガーストル著、早川聞多編	H22.3.26	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：430 海外：410	日文研教員等の個人研究並びに共同研究成果をオリジナルな研究論文、貴重資料集成等の形で発表
日文研叢書　第45集 『石川淳と戦後日本』 （第34回国際研究集会報告書、ミネルヴァ書房から出版）	ウィリアム・タイラー、鈴木貞美編	H22.3.31	1600（日文研に1050部）	日文研納入分は無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等。550部はミネルヴァ書房から市販。	日本国内：430 海外：410	〃
欧文モノグラフ　No. 9 "Shots in the Dark" （シカゴ大学出版局との共同出版）	山田奨治著、E.ハルトマン訳	H21.5	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：430 海外：410	日文研教員等の研究活動の優れた成果で、既刊の著作を再構成したオリジナルな学術論文の英文モノグラフシリーズ
欧文モノグラフ　No. 10 "Japanese Mythology"（英国Equinox Publishing社から出版）	磯前順一著	H22.3	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：430 海外：410	〃
欧文モノグラフ　No. 11 Population and Family in Early-Modern Central Japan"	速水　融著	H22.3	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：430 海外：410	〃
世界の日本研究 2002 "Korea under Japanese Rule"	松田利彦編	H21.9.30	2200	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館、公共図書館等	日本国内：703 海外：1182	在日外国人研究者のシンポジウム報告。「世界の日本研究2002」の英訳版
ロシア・シンポジウム2007 "Interpretations of Japanese Culture: Views from Russia and Japan"	ジェームズ・C・バクスター編	H21.12.15	2100	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：703 海外：1182	海外シンポジウム報告集

著書名	著者・編者	刊行年月日	部数	頒布方法（有償・無償）	配布先	共同研究課題名等
ブラジル・シンポジウム2008 "Cultural Exchange between Brazil and Japan 日本・ブラジル文化交流"	ジェームズ・C・バクスター、細川周平、Junko Ota編	H21.11.30	2100	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：703 海外：1182	〃
アジア太平洋地域におけるグローバリゼイション、ローカリゼイションと日本文化　Vol. 1 シドニー・シンポジウム2003		H22.3.19	2100	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：703 海外：1182	〃
アジア太平洋地域におけるグローバリゼイション、ローカリゼイションと日本文化　Vol. 2 シンガポール・シンポジウム2004		H22.3.25	2100	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：703 海外：1182	〃
アジア太平洋地域におけるグローバリゼイション、ローカリゼイションと日本文化　Vol. 3 香港・シンポジウム2005		H22.3.30	2100	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：703 海外：1182	〃
第35回(2008)国際研究集会報告書『東アジア近代における概念と知の再編成』	鈴木貞美、劉建輝編	H22.3.29	2100	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：703 海外：1182	日文研が開催した国際シンポジウム（国際研究集会）報告集
第36回(2009)国際研究集会報告書『いま構築されるアジアのジェンダー：人間再生産のグローバルな再編成』	落合恵美子編	H22.3.31	2100	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：703 海外：1182	〃
第202回日文研フォーラム 『唐代文学における日本のイメージ』	張　哲俊	H21.8.14	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：253 海外：185	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員等がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
第226回日文研フォーラム 『日本の技術者とフランスの技術者―技術革新の担い手―』	野原博淳	H22.2.15	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：253 海外：185	〃
第228回日文研フォーラム 『世俗化から見た近代仏教―日本とベトナムとの比較―』	ファム　ティ トゥ　ザン	H22.2.22	600	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：253 海外：185	〃
『異邦人のまなざし』第6輯	白幡洋三郎監修	H21.8.12	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：430 海外：410	
『異邦人のまなざし』第7輯	白幡洋三郎監修	H21.8.31	1000	無償（郵送）：外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：430 海外：410	
共同研究成果出版物 『性的なことば』（講談社現代新書）	井上章一（研究代表者）編	H22.1.20	220	無償（郵送）：外国の主要な日本研究機関	海外：215	研究課題：性欲の社会史 （共同研究期間：H19.4～22.3）
共同研究成果出版物 『コモンズと文化―文化は誰のものか―』	山田奨治（研究代表者）編	H22.3	220	無償（郵送）：外国の主要な日本研究機関	海外：194	研究課題：文化の所有と拡散 （共同研究期間：H18.4～21.3）

2010（平成22）年度

誌名等	巻号等	著者・編者	刊行年月日	部数	配付先	配付数	性格等
日本研究	第42集	伊東貴之編	H22.9.30	2400	外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：960 海外：1140	日文研教員等の研究成果を収録する原著論文集で、査読のうえ掲載
	第43集	伊東貴之編	H23.3.31				
JAPAN REVIEW	No. 22	ジョン・ブリーン編	H22.7.30	2200	外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した英文学術雑誌で、査読のうえ掲載
日文研叢書	第46集 『明治期「新式貸本屋」目録の研究』（作品社刊）	浅岡邦雄、鈴木貞美編	H22.11.30	1000	外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：350 海外：400	日文研教員等の個人研究並びに共同研究成果をオリジナルな研究論文、貴重資料集成等の形で発表
	第47集 『「近代の超克」と京都学派』（以文社刊）	酒井直樹、磯前順一編	H22.11.30				
	第48集 『「Japan To-day」研究』（作品社刊）	鈴木貞美編	H23.3.30				
Nichibunken Monograph Series	No.12 "Governance and Policing of Colonial Korea: 1904-1919"	松田利彦著	H23.1.31	1000	外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：350 海外：400	日文研における研究活動の最良の成果で、単著のオリジナルな学術論文の英文モノグラフシリーズ
海外シンポジウム報告書	2009 インド『アジア新時代の南アジアにおける日本像―インド・SAARC諸国における日本研究の現状と必要性』	宇野隆夫編	H23.3.25	2100	外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日文研が海外において開催したシンポジウムの報告書
国際研究集会報告書	第29回『前近代における東アジア三国の文化交流と表象』	劉建輝編	H23.3.31	2100	外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日文研が開催した国際研究集会の報告書
	第38回 "Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Visions of 'Asia' under the Colonial Empires"	稲賀繁美編	H23.3.31				
世界の日本研究	2010『日本語で書く―文学創作の喜びと苦しみ』	郭南燕編	H23.3.25	2100	外国の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	世界の日本研究の動向や海外研究交流室主催の在住シンポジウム報告等の不定期出版物
日文研フォーラム	第232回『東アジアにおける雅楽の流れ』	趙　維平著	H22.6.21	600	外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：300 海外：185	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
	第214回『ヨーロッパ人の日本宗教へのアプローチ―エミール・ギメと日本の僧侶、神主との問答―』	フレデリック・ジラール著	H22.9.30				
	第235回『「訳する」とはどういうことか？―翻訳を歴史的現象として考える―』	ジェフリー・アングルス著	H22.10.8				
	第238回『海を渡った日本の教育―戦前期ブラジルにおける日本的教育文化の越境と再創―』	根川幸男著	H22.12.28				

誌名等	巻号等	著者・編者	刊行年月日	部数	配付先	配付数	性格等
日文研フォーラム	第240回『小田実の思想と文学―全体小説を短編で書くこと―』	ローマン・ローゼンバウム著	H23.3.31	600	外国の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：300 海外：185	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
	第241回『亡命ロシア人が見た近代日本』	アイーダ・スレイメノヴァ著	H23.3.31				
共同研究成果	『妖怪文化の伝統と創造』（せりか書房刊）	小松和彦編	H22.9.10	220	外国の主要な日本研究機関	海外：185	日文研共同研究の総括報告書
翻訳出版協力プロジェクト	第3回『十返舎一九作品選集』（韓国語訳）	康　志賢訳	H22.6.15				日本文化に関する基礎文献を各国語に翻訳し出版普及する事業に協力助成。出版物は各5～10部程度日文研に納品してもらう
	第4回和辻哲郎『風土』（フランス語訳）	オギュスタン・ベルク訳	H23.2.3				

2011（平成23）年度

誌名等	巻号等	著者・編者	刊行年月日	部数	配付先	配付数	性格等
日本研究	第44集	伊東貴之編	H23.10.31	2400	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：960 海外：1140	日文研教員等の研究成果を収録する原著論文集で、査読のうえ掲載
	第45集	伊東貴之編	H24.3.30				
JAPAN REVIEW	No. 23	ジョン・ブリーン編	H23.8.30	2200	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した英文学術雑誌で、査読のうえ掲載
日文研叢書	第49集『古丁研究―「満洲国」に生きた中国の文化人』	梅　定娥著	H24.3.30	220	海外の日本研究機関	海外：185	日文研における事業の成果、研究教育活動の成果、および貴重資料集成等
海外シンポジウム報告書	2010インドネシア『日本の文化と社会の潮流』	山田奨治、ジョン・ブリーン編	H23.11.30	2100	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日文研が海外において開催したシンポジウムの報告書
	2011上海『江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘』	山田奨治、郭　南燕編	H24.3.23				
国際研究集会報告書	第26回『東アジアにおける近代諸概念の成立』	鈴木貞美、劉　建輝編	H24.3.29	2100	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日文研が開催した国際研究集会の報告書
	第41回『近代と仏教』	末木文美士編	H24.3.16				
共同研究成果（商業出版）	『18世紀日本の文化状況と国際環境』（思文閣出版刊）	笠谷和比古編	H23.8.1	176	海外の日本研究機関	海外：155	日文研共同研究の総括報告書
	『都市歴史博覧―都市文化のなりたち・しくみ・たのしみ』（笠間書院刊）	白幡洋三郎、錦　仁、原田信男編	H23.12.15	220		海外：185	
	『アジア女性と親密性の労働』（京都大学学術出版会刊）	落合恵美子、赤枝香奈子編	H24.2.15	220		海外：185	
	『民謡からみた世界音楽―うたの地脈を探る』（ミネルヴァ書房刊）	細川周平編	H24.3.15	218		海外：176	

誌名等	巻号等	著者・編者	刊行年月日	部数	配付先	配付数	性格等
共同研究成果（商業出版）	『宮澤賢治の深層―宗教からの照射―』（法蔵館刊）	P.A.ジョージ、小松和彦編	H24.3.30	187	海外の日本研究機関	海外：128	日文研共同研究の総括報告書
	『東洋意識　夢想と現実とのあいだ 1894-1953』（ミネルヴァ書房刊）	稲賀繁美編	H24.3.30	163		海外：126	
翻訳出版協力プロジェクト	第3回 勝俣鎮夫『一揆』（フランス語版）	印出忠夫ほか訳	H23年9月		日文研図書館等、所内保存	所内：10	日本文化に関する基礎文献を各国語に翻訳し出版普及する事業に協力。出版物各10部を日文研に納品してもらう
	第2回 色川大吉『明治の文化』（アラビア語版）	エルナッハース・ヌール訳	H23年10月				
所長裁量等に係る研究経費	『いざなぎ流の研究』（角川学芸出版刊）	小松和彦著	H23.9.25	184	海外の日本研究機関および研究者、学会、大学図書館、関係先、所内等	国内：130 海外：30	平成23年度所長裁量等に係る研究経費による出版助成事業

2012（平成24）年度

誌名等	巻号等	著者・編者	刊行年月日	部数	配布先	配布数	性格等
日本研究	第46集	末木文美士編	H24.9.28	各2400	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：960 海外：1140	日文研教員等の研究成果を収録する原著論文集で、査読のうえ掲載
	第47集		H25.3.29				
JAPAN REVIEW	No. 24	ジョン・ブリーン編	H24.8.28	2200	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した英文学術雑誌で、査読のうえ掲載
日文研叢書	第50集『植民地朝鮮と宗教――帝国史・国家神道・固有信仰』（三元社刊）	磯前順一・尹海東編著	H25.1.20	220	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：50 海外：50	日文研における事業の成果、研究教育活動の成果、および貴重資料集成等の出版助成
Nichibunken Monograph Series	No.13 "'Pirate' Publishing: The Battle over Perpetual Copyright in Eighteenth-Century Britain"	山田奨治著	H24.12.27	1000	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：350 海外：400	日文研における研究活動の最良の成果で、単著のオリジナルな学術論文の英文モノグラフシリーズ
国際研究集会報告書	第31回『東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的発展のために』	鈴木貞美・劉建輝編	H25.3.15	各2100	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日文研が開催した国際研究集会の報告書
	第40回『植民地帝国日本における支配と地域社会』	松田利彦編	H25.3.18				
	第42回『帝国と高等教育――東アジアの文脈から』	酒井哲哉・松田利彦編	H25.3.29				
	第43回 "POUR UN VOCABULAIRE DE LA SPATIALITÉ JAPONAISE"（日仏の空間語彙：概念と仕掛け）	Philippe BONNIN・西田雅嗣・稲賀繁美編	H25.3.28				

誌名等	巻号等	著者・編者	刊行年月日	部数	配付先	配付数	性格等
日文研フォーラム冊子	第253回『天寿の域にいたる道―貝原益軒の『養生訓』を中心に―』	劉克申著	H24.5.14	各600	海外の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：300 海外：174	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
	第254回『帝誄しと帝諫めの物語―狩野重信筆「帝鑑図・咸陽宮図屏風」を読む―』	楊暁捷著	H24.5.16				
	第252回『ベトナムの習慣と信仰を古典文学に探る』	グエン・ティ・オワイン著	H24.8.20	各600	海外の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：300 海外：174	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
	第255回『東アジア近代史における「記憶と記念」』	都珍淳ほか著	H24.11.22				
	第256回『近代日中知識人の自他認識―思想交流史からのアプローチ―』	徐興慶著	H25.1.31				
	第259回『中国文化への誘い―漢字からのアプローチ』	金哲会著	H25.2.28				
共同研究成果（商業出版）	『日本の近代化とプロテスタンティズム』（教文館刊）	上村敏文・笠谷和比古編	H25.3.10	220	海外の日本研究機関	海外：173	日文研共同研究の総括報告書
	『地域社会から見る帝国日本と植民地―朝鮮・台湾・満洲』（思文閣出版刊）	松田利彦・陳姃湲編	H25.3.29	108		海外：40	

2013（平成25）年度

誌名等	巻号等	著者・編者	刊行年月日	部数	配布先	配布数	性格等
日本研究	第48集	末木文美士編	H25.9.30	各2400	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：960 海外：1140	日文研教員等の研究成果を収録する原著論文集で、査読のうえ掲載
	第49集		H26.3.31				
JAPAN REVIEW	No. 25	ジョン・ブリーン編	H25.8.30	各2200	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した英文学術雑誌で、査読のうえ掲載
	No. 26 Special Issue Shunga		H25.9.6				
日文研叢書	第51集『ブッダの変貌――交錯する近代仏教』（法蔵館刊）	末木文美士ほか編	H26.3.31	163	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	海外：80	日文研における事業の成果、研究教育活動の成果、および貴重資料集成等の出版助成
	第52集『帝国支配と朝鮮表象』	朴美貞著	H26.3.31	500		日本国内：300 海外：90	

誌名等	巻号等	著者・編者	刊行年月日	部数	配付先	配付数	性格等
Nichibunken Monographs	No. 14 *Shunga: Ten Questions and Answers*	早川聞多著	H25.12.26	各1000	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：350 海外：400	日文研における研究活動の最良の成果で、単著のオリジナルな学術論文の英文モノグラフシリーズ
	No. 15 *Refining Nature in Modern Japanese Literature: The Life and Art of Shiga Naoya*	郭南燕著	H26.1.23				
	No. 16 *Itō Hirobumi: Japan's First Prime Minister and Father of the Japanese Constitution*	瀧井一博著	H26.2.11				
国際研究集会報告書	第44回『東アジアにおける知的交流――キイ・コンセプトの再検討』	鈴木貞美/劉建輝編	H25.11.29	2100	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日文研が開催した国際研究集会の報告書
海外シンポジウム報告書	北欧シンポジウム『「日本研究」再考――北欧の実践から』	劉建輝／佐野真由子編	H26.3.31	2100	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日文研が海外において開催したシンポジウムの報告書
世界の日本研究	『世界の日本研究2013――日本研究の新しい動向』	郭南燕編	H25.10.18	2100	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	世界の日本研究の動向や海外研究交流室主催の在住シンポジウム報告等の不定期出版物
日文研フォーラム冊子	第257回『日本映画に於ける原型的な表現方法』	アンドリヤナ　ツヴェトコビッチ著	H25.5.31	各600	海外の日本研究機関、日本研究者等	日本国内：300 海外：174	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
	第263回『スリランカにおける演劇史と日本の伝統演劇からの影響について』	クラティラカ　クマーラシンハ著	H25.6.28				
	第268回『耳塚の「霊魂」をどう考えるか』	魯成煥著	H25.10.31				
共同研究成果（商業出版）	『デジタル人文学のすすめ』(勉誠出版刊)	楊暁捷/小松和彦/荒木浩編	H25.7.31	220	海外の日本研究機関	173	日文研共同研究の総括報告書
	『帝国日本と植民地大学』(ゆまに書房刊)	酒井哲哉/松田利彦編	H26.2.28	109		40	

誌名等	巻号等	著者・編者	刊行年月日	部数	配付先	配付数	性格等
共同研究成果（商業出版）	*Vocabulaire de la spatialité japonaise* 日本の生活空間（CNRS EDITIONS 刊）	Philippe Bonnin/西田雅嗣/稲賀繁美編	H26.3.13	185	海外の日本研究機関	90	日文研共同研究の総括報告書
	『日本の近現代とリーダーシップの諸相』（仮）（千倉書房刊）	戸部良一編	H26.3.24	220		160	
	『妙貞問答を読む――ハビアンの仏教批判』（法蔵館刊）	末木文美士編	H26.3.31	145		70	
	『東アジアにおける近代知の空間の形成』（仮）（東方書店刊）	孫江/劉建輝編	H26.3.31	220		170	
	『「作庭記」と日本の庭園』（思文閣出版刊）	白幡洋三郎編	H26.3.31	220		170	
海外日本像集成	第4冊（1881～1885年）	白幡洋三郎編	H26.1.10	各1000	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：460 海外：100	幕末から明治にかけて外国人が執筆した日本旅行記や研究書に掲載されている挿絵のみを集めた図版集
	第5冊（1885～1890年）	白幡洋三郎編	H26.3.28				
異邦人のまなざし	第9輯「もののふ」	白幡洋三郎 監修、戸部良一 文	H25.12.20	各1000	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：460 海外：100	『海外日本像集成』と同様に、1850年代から1900年頃までに出版された「外国語で書かれた日本研究書」（外書）の挿絵をテーマ別に抽出し、編集したカラー図版シリーズ
	第10輯「天然」	白幡洋三郎 監修・文	H26.3.10				
日文研翻訳出版協力プロジェクト	『宮澤賢治作品集』（アラビア語訳、カイロ・Sanabil Books刊）	マーヒル・エルシリビーニー訳	H26.3.31				日本文化に関する基礎文献を各国語に翻訳し出版普及する事業に協力助成。出版物は各10部日文研に納品してもらう

2014（平成26）年度

誌名等	巻号等	著者・編者	刊行年月日	部数	配布先	配布数	性格等
日本研究	第50集	坪井秀人編	H26.9.30	各2400	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：920 海外：1140	日文研教員等の研究成果を収録する原著論文集で、査読のうえ掲載
	第51集		H27.3.31				

誌名等	巻号等	著者・編者	刊行年月日	部数	配付先	配付数	性格等
JAPAN REVIEW	No. 27	ジョン・ブリーン編	H26.8.22	2200	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した英文学術雑誌で、査読のうえ掲載
Nichibunken Monograph Series	No. 17 *Religious Discourse in Modern Japan*（Brill 刊）	磯前順一著	H26.6.10	各1000	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：350 海外：400	日文研における研究活動の最良の成果で、単著のオリジナルな学術論文の英文モノグラフシリーズ
	No. 18 *The 1918–1920 Influenza Epidemic in Japan: The First World War between Humankind and a Virus*	速水融著	H27.3.31				
国際研究集会報告書	第45回『怪異・妖怪文化の伝統と創造―ウチとソトの視点から』	小松和彦編	H27.1.30	2100	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日文研が開催した国際研究集会の報告書
海外シンポジウム報告書	ベトナム・シンポジウム2013	劉建輝編	H27.3.31	2100	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	日文研が海外において開催したシンポジウムの報告書
世界の日本研究	『世界の日本研究2014』	郭南燕編	H27.3.6	2100	海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等	日本国内：700 海外：1140	世界の日本研究の動向や海外研究交流室主催の在住シンポジウム報告等の不定期出版物
日文研フォーラム冊子	第276回『めぐりめぐる日本文化』	高馬京子ほか著	H26.8.15	600	国内外の日本研究機関、日本研究者等	著者と相談のうえ決定	日文研を訪問した外国人研究員、外来研究員がフォーラムで自由なテーマで発表した報告書
	第275回『「吾妻鏡」の謎―清朝へ渡った明治の性科学―』	唐権著	H26.9.26	100			
共同研究成果（商業出版）	『近代日本の公と私、官と民』（NTT出版刊	猪木武徳／マルクス・リュッターマン編	H26.10.30	220	海外の日本研究機関	海外：128	日文研共同研究の総括報告書
	『異人論とはなにか』（ミネルヴァ書房刊）	山泰幸／小松和彦編	H27.3.15	212		海外：150（予定）	
	『日記・古記録の世界』（思文閣出版刊）	倉本一宏編	H27.3.31	116		海外：70（予定）	
	『ザ・タイガース研究論』（近代映画社刊）	磯前順一／黒崎浩行編	H27.3.15	220		海外：56	
	『徳川社会と日本の近代化』（思文閣出版刊）	笠谷和比古編	H27.3.25	148		海外：100（予定）	

(4) 研究成果の刊行物

②『日本研究』

第29巻　　平成16年12月発行

標題	執筆者
植民地時代下の詩の翻訳 ——金素雲訳『朝鮮詩集』の場合	林　容澤
詩歌のジャポニスムの開花 ——クーシューと『N・R・F』誌（一九二〇）「ハイカイ」アンソロジー掲載の経緯	柴田　依子
豊子愷とゴッホ ——ゴッホ作品を通しての伝統再発見	西槇　偉
近代日本における〈修養〉概念の成立	王　成
茶道と恋歌（二） ——近代の茶会において	岩井　茂樹
野口米次郎『日本少女の米國日記』 ——奨励される女子の渡米と移民社会の現実	堀　まどか
大雑書研究序説 ——『永代大雑書萬暦大成』の内容分析から	森田　登代子
戦前期花莚製造業をめぐる日本・中国間制度比較 ——日本の領事報告の分析を通じて	四方田　雅史
「聖なる性」の再検討	小谷野　敦
CM作家の場所 ——杉山登志の死と誕生	山田　奨治
〈研究ノート〉生成期における「たて花」 ——十五世紀中期の「花」と連歌の一様相	小林　善帆

第30巻　　平成17年3月発行

標題	執筆者
序	テモテ・カーン
十字架の喜びと苦難 —— 外国人宣教師が日本に与えた影響に関する三つの事例研究	H・A・アイオン
アメリカン・ボード日本ミッション宣教師の「越境」伝道 —— 一九世紀末期日布間の宣教師ネットワークとハワイ日本人移民	吉田　亮
宗教的植民地化の断章 —— 在日英米聖公会主教管轄権問題	大江　満
アメリカにおける海外伝道研究の文脈とその現在	小檜山 ルイ
植民地支配、キリスト教、そして異文化交流 —— 日本軍による台湾武力抑圧における事例より（一八九五年）	高井ヘラー 由紀
婦人言論の自由 —— 宣教師とWCTUと東京婦人矯風会	安武　留美
在華宣教師と「不平等条約」 —— 一八六〇年から七〇年代を中心に	渡辺　祐子
アメリカ女性医療宣教師の中国と日本伝道 —— メアリ・アナ・ホルブックの場合（一八八一年～一九〇七年）	石井　紀子
アメリカ北長老派による朝鮮宣教と日本の帝国支配 —— 二〇世紀初頭から「文化政治」期まで	李　省　展
ミッショナリーとしてのラジャ・ブルック	中島　俊郎
洋風住宅に投影されたプロテスタントの家庭光景	川崎　衿子
明治期盲人教育における宣教、宣教師と音楽	手代木 俊一
興行としての宣教 —— G・オルチンによる幻燈伝道をめぐって	山本　美紀
近代中国におけるプロテスタント宣教師の文化活動 —— 上海・黒海書館を中心に	劉　建輝
J・S・ゲール牧師の韓国での宣教活動について —— 韓英辞典の編纂作業も含めて	李　漢燮
西洋人宣教師の造った新漢語と造語の限界 —— 一九世紀中頃までの漢訳洋書を中心に	孫　建軍

(4) 研究成果の刊行物

第31巻　　平成17年10月発行

標題	執筆者
西洋舶来の書籍情報と徳川日本の視覚文化の変貌―一七三〇年代から一八三〇年代にかけて	稲賀　繁美
武家社会と幕末武士/構造と行為―武士的徳目と行為の理解への方法論策定にむけた試論	竹村　英二
「日本的」美的概念の成立―能はいつから「幽玄」になったのか？	岩井　茂樹
岩下壮一における権威性と民衆性	輪倉　一広
「未亡人」の家―日本語文学と漱石の『こころ』	李　　郁蕙
中国語、日本語、西洋語間の相互伝播と翻訳のプロセスにおける「経済」という概念の変遷	馮　　天瑜　[訳]呉咏梅
一八九六年中国人日本留学生派遣・受け入れ経緯とその留学生教育	酒井 順一郎
医薬・医療と「日中連帯」岸田吟香の諸活動を中心に	丁　　蕾
〈研究ノート〉映画研究の再検討―再発見された『武士道』の位置づけを例にして	小川　順子

第32巻　　平成18年3月発行

標題	執筆者
藤田嗣治の一九二〇年代末の壁画表現--パリ日本館＜欧人日本へ到来の図＞の制作プロセス	林　洋子
野口米次郎の英国講演における日本詩歌論俳句、芭蕉、象徴主義	堀　まどか
菅原道真詩文における「残菊」をめぐって日中比較の視角から	高　兵兵
「満州」幻想の成立過程　いわゆる「特殊感情」について	姜　克實
古丁と「大東亜戦争」大東亜文学者大会と三つの作品をめぐって	梅　定娥
加藤高明内閣成立の底流と幣原外交国際的自立と内外融和への挑戦	宮田　昌明
近世民衆、天皇即位式拝見遊楽としての即位儀礼見物	森田　登代子
＜共同研究報告＞　生きている劇としての能--謡曲の多角的研究	国際日本文化研究センター
舞台の彼方へ共同研究「生きている劇としての能　　謡曲の多角的研究」への導入	ジェイ・ルービン
能の機織り「呉服」と「錦木」を中心に	ロイヤル・タイラー
観世元雅の『弱法師』について	田代慶一郎
サンクト・ペテルブルグ(ロシア)における日本語学習と日本研究の三〇〇年のあゆみ	ヴィクター・ルィービン
オイゲン・ヘリゲル著「国家社会主義と哲学」「サムライのエトス」全訳と解題	翻訳・秋沢美枝子　解題・山田　奨治
森幸安の地図を追って函館市中央図書館と国立国会図書館における調査報告	辻垣　晃一
＜書評＞園田英弘編著「逆欠如の日本生活文化--日本にあるものは世界にあるか」	金子晋右

第33巻　　平成18年10月発行

標題	執筆者
徳川吉宗の享保改革と豊後節取締り問題をめぐる一考察	笠谷 和比古
「日本的」美的概念の成立（二）―茶道はいつから「わび」「さび」になったのか？	岩井 茂樹
響き合うテキスト―豊子愷と漱石、ハーン	西槇 偉

(4) 研究成果の刊行物

標題	執筆者
チャンバラ映画と大衆演劇の蜜月―美空ひばりが銀幕で果たした役割	小川 順子
パラドックス論理のニヒリズム―西田とハイデッガー	アグネシカ コズィラ
〈研究ノート〉戦前の在日朝鮮人社会の文化様相に関する研究	金 仁徳
〈資料研究〉17世紀オランダに普及した日本情報―デ・フリース『東西インド奇事詳解』における日本関係記述	フレデリック クレインス　宮田 昌明

第34巻　　平成19年3月発行

標題	執筆者
Figurality（形象性）と近代意識の発展	チャールズ　シロー　イノウエ
たて花――連歌会・七夕花合・立阿弥の「花」をめぐって	小林善帆
日本仏教における僧と稚児の男色	平松隆円
尾張藩戸山荘の眺望に関する研究	李偉
響き合うテキスト（二）――豊子愷の「帯点笑容（ちょっと笑ってください）」と漱石の『硝子戸の中』（二）	西槇偉
欧米における日本庭園像の形成と原田治郎のThe Gardens of Japan	片平幸
ジャズ喫茶の文化史戦前篇――複製技術時代の音楽鑑賞空間	細川周平
国芳の洋風版画と蘭書『東西海陸紀行』の図像	勝原良太
中国現代文学史における二回の翻訳ピークと芥川龍之介	劉春英

第35巻　　平成19年5月発行

標題	執筆者
多花性と共価性―日本人の異文化受容をめぐって	片倉もとこ
明治初年活版印刷史断章	合庭　惇
近代黎明期の通信―日本語「電信」「電話」の変遷をめぐって	新井菜穂子
〈書評〉洋の東西を自在に渉猟した、膨大にして繊細なる知の楕円軌道の集大成:Sukehiro Hirakawa,Japan’s Love-Hate Relationship with the West,Oriental,2004,557pp.	稲賀　繁美
陽夏の謝氏	井波　律子
池上曽根遺跡で発見された「大型建物」の復元に関する二、三の考察	井上　章一
Social Instrumentとしての日本企業―「公共性」の国際比較のための概念整理	猪木　武徳
欧米に於ける日本史研究の現状と動向	今谷　明
縄文の住まいの選び方―富山の山と里と海辺、GIS分析から	宇野　隆夫
武士道概念の史的展開	笠谷　和比古
十七世紀バタヴィアからの日本情報―スハウテン『東インド紀行』における日本関係記述	フレデリック・クレインス
近世土佐の槇出郷における天の神祭祀―「いざなぎ流」との関連のなかで	小松　和彦
島台考（一）―島台と婚礼	白幡　洋三郎
日本における「歴史」の歴史―ひとつのプロブレマティクとして	鈴木　貞美

(4) 研究成果の刊行物

標題	執筆者
「天皇」号成立推古朝説の系譜―もう一つの邪馬台国論争的状況	千田　稔
藤村の手紙（序論）	早川　聞多
実相院蔵馬郎婦観音像の名付けの変遷	パトリシア・フィスター
「日本的ジャズ」をめぐって	細川　周平
近代日本植民地における「憲兵警察制度」に見る「統治様式の遷移」―朝鮮から関東州・「満洲国」へ	松田　利彦
魚食の文明・肉食の文明	安田　喜憲
テレビ・コマーシャルと文化研究	山田　奨治
日本中近世の書簡文化における「面」と「行」の意味―非言語的な記号群による「礼」を中心に	マルクス・リュツターマン
日・米・仏の国語教育を読み解く―「読み書き」の歴史社会学的考察	渡辺　雅子

第36巻　　平成19年9月発行

標題	執筆者
二宮金次郎「負薪読書図」源流考「朱買臣図」からの展開	岩井　茂樹
響き合うテキスト（三）異国の師の面影豊子愷の「林先生」と漱石の「クレイグ先生」、魯迅の「藤野先生」	西槇　偉
宮沢賢治の作品に見られる「非暴力主義」「自己犠牲の精神」と「菜食主義」の一考察インド人の観点から	プラット・アブラハム・ジョージ
＜研究ノート＞核家族社会イギリスと直系家族社会日本の親族関係－比較研究への覚書	平井　晶子
井筒俊彦の主要著作に見る日本的イスラーム理解	池内　恵
東アジアのモザイック・ユニットグローバル時代の新しい視点	園田　英弘
連歌の「詠み方」と「読み方」宗祇一座『水無瀬三吟』『湯山三吟』を矩として	光田　和伸

第37巻　　平成20年3月発行

標題	執筆者
茶芸と茶道における諸要素―中国茶芸の歴史、文化、習慣、特徴と日本茶道の型・気・美・禅	陸　留弟
西安で発見された在唐日本留学生・井真成墓誌の最新研究―井真成墓誌に関する研究後篇	王　維坤
近世大坂の説教讃語芝居における演奏者	武内　恵美子
ラフカディオ・ハーンの仏教観―十九世紀科学思想との一致論を中心として	ジェームズ・バスキンド
＜研究ノート＞近世中後期における武士身分の売買について―『藤岡屋日記』を素材に	姜　鶯燕
＜研究ノート＞一柳満喜子の生涯に関する一考察	平松　隆円
＜共同研究報告＞共同研究「出版と学芸ジャンルの編成と再編成」報告（一）	鈴木　貞美
＜共同研究報告＞東アジアにおける学芸諸概念とその編成史―国際共同研究とその方法の提案	鈴木　貞美
＜共同研究報告＞十九世紀末における恋愛文学の編成―人情本から小説へ	リース・モートン
＜共同研究報告＞現実を投影?構成する演劇―明治一〇年代の演劇と文明論、社会改良論、自由民権論の交錯	吉岡　亮
＜共同研究報告＞明治「史談」、その読者	目野　由希
＜共同研究報告＞公衆衛生と「花苑都市」の形成―近代大阪における結核予防に関連して	竹村　民郎

(4) 研究成果の刊行物

第38巻　　平成20年3月発行

標題	執筆者
海女にからみつく蛸の系譜と寓意—北斎画「蛸と海女」からみる春画表現の「世界」と「趣向」	鈴木　堅弘
「東京銀座資生堂」の誕生—福原信三と銀座イメージの構築	戸矢　理衣奈
一九二五年近代中国東北部（旧満洲）で開催された大連勧業博覧会の歴史的考察—視聴化された満蒙	竹村　民郎
古丁における翻訳—その思想的変遷をさぐる	梅　定娥
野口米次郎のラジオと刊行書籍に見る「戦争詩」—『宣戦布告』と『八紘頌一百篇』を中心に	堀　まどか
異郷での彷徨—「上海」の一解法	中川　智寛
松村謙三グループ：自民党政権の対中パイプ—一九五九－一九七二	翟 新
〈研究資料〉オイゲン・ヘリゲル著「日本民族の生活と文化における伝統」全訳と解題	翻訳・秋沢　美枝子、解題・山田　奨治
〈共同研究報告〉共同研究「出版と学芸ジャンルの編成と再編成」報告（二）	鈴木　貞美
〈共同研究報告〉ドイツ・ハイクの生成と俳句再評価	依岡　隆児
〈共同研究報告〉歴史書の剽窃—田口卯吉『支那開化小史』偽版訴訟事件の考察	甘露　純規
〈共同研究報告〉岡田美知代と花袋「蒲団」について	小谷野　敦
〈共同研究報告〉和辻哲郎の哲学観、生命観、芸術観—『ニイチェ研究』をめぐって	鈴木　貞美

第39巻　　平成21年3月発行

標題	執筆者
琉球語、上代日本語と周辺の諸言語—再構と接点の諸問題	アレキサンダー・ヴォヴィン
幕臣筒井政憲における徳川の外交—米国総領事出府問題への対応を中心に	佐野　真由子
響き合うテキスト（四）幼時体験の光と影—豊子愷「憶児時（幼時の思い出）」と夏目漱石『硝子戸の中』	西槇　偉
日米安保体制と裕次郎映画—戦後日本映画における「植民地的主体」意識の臨界点をめぐって	千葉　慶
〈研究ノート〉海女の表象—『ナショナル　ジオグラフィック』に見るオリエンタリズムと観光海女の相互関係	小暮　修三

第40巻　　平成21年11月発行

標題	執筆者
藩政改革の伝播——熊本藩宝暦改革と水戸藩寛政改革	磯田　道史
徳川幕府の旗本の持参金養子に関する一考察——江戸時代前中期を中心に	姜　鶯燕
国民政府と満蒙問題	高　文勝
「百鬼夜行絵巻」編集の系譜——情報学からの解明	山田　奨治
歌舞伎衣裳にみられる歴史的・社会的事象の受容——「馬簾つき四天」「小忌衣」「蝦夷錦」「厚司」を事例として	森田　登代子
十二のペアを推理する——国芳「唐土廿四孝」の制作過程について	木佐　敬久
憶良の述作と敦煌願文	王　小林
広告としての資生堂パーラー——交際様式の変容と「パーラー（洋間）」	戸矢　理衣奈
〈研究資料〉ポンペの日本史観	フレデリック・クレインス

(4) 研究成果の刊行物

標題	執筆者
〈共同研究報告〉小特集「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」(一)	鈴木　貞美
〈共同研究報告〉劇評ジャンルの文化史——近代への転換	東　晴美
〈共同研究報告〉明治期日本の啓蒙思想における「自由・平等」——福沢諭吉、西周、加藤弘之をめぐって	鈴木　貞美
〈研究ノート〉「自衛隊協力映画」というジャンル——田母神論文との共通性とマス・メディアとの関係	須藤　遙子

第41巻　　平成22年3月発行

標題	執筆者
千宗旦の出自をめぐる「利休血脈論争」について——現代家元システムへの道程	廣田　吉崇
近世案内記における観光モデルコースの登場——貝原益軒著『京城勝覧』から見えるもの	金　廷恩
歌で習う「国語」——植民地期朝鮮における唱歌と言語教育	林　慶花
春画と衣装	鈴木　堅弘
映画『殉教血史　日本二十六聖人』と平山政十——一九三〇年代前半期日本カトリック教会の文化事業	山梨　淳
隠喩から流れ出るエクリチュール——老子の水の隠喩と漱石の書く行為	李　哲権
「絵画の約束」論争——「印象」から「象徴」に向かう時代のなかで	吉本　弥生
「家族団欒図」——父親の再婚と〝敗戦〟の終焉	アフマド・M・F・モスタファ
『医心方』所引『僧深方』輯佚——東アジアに伝播した仏教医学の諸相	多田　伊織

第42巻　　平成22年9月発行

標題	執筆者
布衣始について	近藤　好和
ジョルジュ・ビゴーと明治中期のカトリック教会——在日フランス人における反教権主義について	山梨　淳
蒋介石の人格形成と日本	黄　自進
〈研究ノート〉伊勢斎宮の選定に関する小考	板倉　則衣
〈共同研究報告〉小特集「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」(二)	鈴木　貞美
再布置される文体ヒエラルキー——正史と戯作の変体漢文	佐藤　一樹
江戸川乱歩、眼の戦慄——小説表現のヴィジュアリティーをめぐって	鈴木　貞美

第43巻　　平成23年3月発行

標題	執筆者
奈良、平安時代における中国音楽の受容と変容——踏歌の場合	趙　維平
嘉永・安政期の大坂城代——常陸国土浦藩・土屋寅直の大坂、兵庫開港問題への対応を中心に	菅　良樹
横光利一『上海』論——〈見る〉〈見られる〉の関係から読む	アブドゥエルマクスード・オラービ・ムハマド・ワーイル
〈研究ノート〉合巻『色男大安売』考、その翻字と解題Ⅲを通して	康　志賢
〝戦争と平和〟観形成に果たした戦争教材の役割	石川　肇
〈共同研究報告〉小特集「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」(三)	鈴木　貞美

(4) 研究成果の刊行物

標題	執筆者
明治期における感情移入美学の受容と展開――「新自然主義」から象徴主義まで	権藤　愛順
伊藤尚と阿部次郎の感情移入説――リップス受容をめぐって	吉本　弥生
日本モダニズム文藝史のために――新たな構想	鈴木　貞美

第44巻　　平成23年10月発行

標題	執筆者
春画と挿絵――浮世絵春画における借用表現について――	鈴木　堅弘
近代における茶の湯家元と天皇との距離――天皇・皇族への献茶にみる家元の社会的地位の向上――	廣田　吉崇
明治期工手学校卒業生の海外活動――台湾を中心として（一八九五～一九〇五）	蔡　龍保
中国の新劇と京都――任天知・進化団と静間小次郎一派の明治座興行	陳　凌虹
転倒された軍国美談――広津柳浪「七騎落」論――	全　美星
二十世紀初頭における転換期の日本カトリック教会――パリ外国宣教会と日本人カトリック者の関係を通して	山梨　淳
二代目市川左団次の訪欧と「鳴神」――一九〇七年のヨーロッパ演劇と一九一〇年の日本文壇の関わりから	東　晴美
〈共同研究報告〉「日記の総合的研究“The Synthetic Researches of Japanese Diaries”」に向けて	倉本　一宏
〈共同研究報告〉遣外使節と求法・巡礼僧の日記	森　公章
〈共同研究報告〉『政事要略』阿衡事所引の『宇多天皇御記』――その基礎的考察――	古藤　真平
〈共同研究報告〉年官ノート	磐下　徹
〈共同研究報告〉古記録における宗教習俗の記載――記載対象の選択の観点から――	上野　勝之
〈共同研究報告〉中世後期の日記の特色についての覚書	松薗　斉
〈共同研究報告〉「日記」および「日記文学」概念をめぐる覚書	鈴木　貞美
〈史料紹介〉『御堂関白記』自筆本の裏に写された『後深心院関白記』	倉本　一宏

第45巻　　平成24年3月発行

標題	執筆者
国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭　丹
惣領番入制度、その成立と意義	横山　輝樹
漱石『門』における能動的知性の回復	野網摩利子
″ニューヨークの亡命知識人パウル・ティリッヒと京都の神学者有賀鐵太郎― 有賀鐵太郎所蔵のパウル・ティリッヒ著『社会主義的決断』（一九三三年）をめぐって″	深井智明
戦後日本の社会科学とアメリカのフィランソロピー― 一九五〇-六〇年代における日米反共リベラルの交流とロックフェラー財団―	辛島　理人
<研究ノート>明治前期の「貴紳の茶の湯」―『幟仁親王日記』および『東久世通禧日記』にみる喫茶文化の状況―	廣田　吉崇
<研究資料>『外台秘要方』所引『僧深方』輯佚（一）―附、医籍五種（互照萃編）―	多田　伊織
<研究資料>合巻『雷神門再建御膳浅草法』の翻刻と図説	康　志賢
<研究資料>法然六五〇年の御忌―『華頂山大法會圖録全』『勅會御式略圖全』の翻刻―	姜　　鶯燕／平松　隆円

(4) 研究成果の刊行物

第46巻　　平成24年9月発行

標題	執筆者
絵巻の文法序説――『後三年合戦絵詞』を手掛かりに――	楊　暁捷
苔より桜――西芳寺における夢窓疎石と禅宗――	モリー・ヴァラー
惣領番入制度と五番方――吉宗期の事例を中心に――	横山　輝樹
江戸後期における儒学テクスト読解の作法――「練熟」「組織セル念慮」の醸成装置として――	竹村　英二
近代における一日本人キリスト者の越境ネットワーク形成――小林美登利の移動・遍歴を事例として――	根川　幸男
満洲の内在化と台北描写――林煇焜『争へぬ運命』における満洲の影と潜在的輿論――	柳　書琴
〈研究ノート〉黒髪の変遷史への覚書き	平松　隆円
〈共同研究報告〉日記の総合的研究 延喜二年三月の飛香舎藤花宴	古藤　真平
〈共同研究報告〉日記の総合的研究 日記に見える院宣について	下郡　剛
〈共同研究報告〉日記の総合的研究 儀礼にみる公家と武家――『建内記』応永二十四年八月十五日条から――	近藤　好和
〈共同研究報告〉日記の総合的研究 嘉永・安政期の大坂町奉行川村修就――ロシア軍艦ディアナ号来航問題と安政の南海地震に伴う大坂大津浪（津波）への対応――	菅　良樹

第47巻　　平成25年3月発行

標題	執筆者
僧侶と隠逸表現――受容と再構築――	田　云明
林羅山によるかみの名物――『多識編』をもとに――	木場　貴俊
『國華』にみる古渡の中国絵画――近代日本における「宋元画」と文人画評価の成立――	久世　夏奈子
大鹿卓の『野蛮人』――植民地時代における二元対立論への挑戦――	簡　中昊
宗教文化は誰のものか――『大本七十年史』編纂事業をめぐって――	永岡　崇
日本発ポップカルチャーを巡って交錯する／せめぎあう境界――ルポルタージュ「日本マニアの幾つかの肖像」へのコメント分析――	山本 冴里
植民地朝鮮の女学校・高等女学校といけ花・茶の湯・礼儀作法――植民地台湾との相互参照を加えて――	小林 善帆
〈研究資料〉国際日本文化研究センター所蔵静坐社資料――解説と目録――	栗田 英彦

第48巻　　平成25年9月発行

標題	執筆者
「政基公旅引付」の日記史料学――戦国期の公家日記と在地社会――	廣田　浩治
東藤次郎旧蔵本『吉利支丹抄物』とGuia de pecadores との関係について	ソブチェック　マウゴジャータ
江戸版長唄正本における株板化の動き――中村座を事例として――	漆﨑　まり
持続可能な外交をめざして――幕末期、欧米外交官の将軍拝謁儀礼をめぐる検討から――	佐野　真由子
近代中国女子教育における手芸科目と日本の影響	韓　華
教養の成立を再考する――谷川徹三の内面的成長史を中心に――	張　鈴
〈研究ノート〉閨怨詩の和様化――『新撰万葉集』の漢詩を中心に――	梁　青
〈研究ノート〉満洲国における北村謙次郎の創作――「春聯」を中心に――	韓　玲玲

(4) 研究成果の刊行物

標題	執筆者
〈研究ノート〉幸田露伴一家の戦争——幸田文・青木玉の記録と記憶——	多田　伊織
〈調査報告〉ソウル大学校蔵　伝宗碩筆『連歌老葉』	小林 善帆

第49巻　　平成25年9月発行

標題	執筆者
山崎闇斎の「中」概念	孫　傳玲
浄土真宗の「妻帯の宗風」はいかに確立したか ——江戸期における僧侶の妻帯に対する厳罰化と親鸞伝の言説をめぐって——	大澤　絢子
日本軍が中国に建設した十三基の忠霊塔	横山　篤夫
日本人が祀った論介という朝鮮女性	魯　成煥
「痴漢」の文化史 ——「痴漢」から「チカン」へ——	岩井茂樹

第50巻　　平成26年9月発行

標題	執筆者
古記録文化の形成と展開——平安貴族の日記に見る具注暦記・別記の書き分けと統合——	三橋　正
明石一族を取り巻く「夢」—— 〝夢実現の共同体〟の視座から——	笹生　美貴子
『江戸図屏風』から読み解く寛永期の江戸の庭園	小野　健吉
徳川吉宗の小金原鹿狩——勢子運用の観点から——	横山　輝樹
外務省記録にみる「唐宋元明名画展覧会」(一九二八年)	久世　夏奈子
映画のなかのテレビ・メディア——昭和三十年代の映像産業の攻防を通して——	北浦　寛之
〈研究ノート〉フランス領インドシナにおける『東洋の理想』『日本の覚醒』『茶の本』——ファム・クインの書評とその解題——	二村　淳子
〈研究ノート〉開戦前後におけるマニラ日本人学校にみる教育活動の変容——発行された副読本と児童文集を手がかりに——	小林　茂子
〈研究資料〉ワイキキでの同郷会記念写真——山口県沖家室島のハワイ移民関連資料——	安井　眞奈美

第51巻　　平成27年3月発行

標題	執筆者
税帳と税帳使——大祖数文と官稲混合を中心に——	本庄　総子
『華厳経』の宇宙論と東大寺大仏の意匠について	外村　中
一九六〇年代「和習研究」追考——コーパスに基づく再検討——	頼　衍宏
山形有朋とその館	佐藤　信
表現主義と気韻生動——北清事変から大正末年に至る橋本関雪の軌跡と京都支那学の周辺——	稲賀　繁美
〈研究ノート〉近代中国の思想と革命研究覚書——日本からの思想的な要因を中心に——	楊　際開
〈研究資料〉日本の地質学黎明期における歴史的地質資料——梅谷亨化石標本群(大阪大学適塾記念センター蔵)についての考察——	伊東　謙ほか
〈研究資料〉北村謙次郎の小説シリーズ『或る環境』とその社会的背景——一九一〇～二〇年代の大連——	韓　玲玲

(4) 研究成果の刊行物

③日文研叢書

発行年	編著	タイトル
2004年9月	早川聞多編 / 栗山茂久 / P フィスター訳	『日文研所蔵　近世艶本資料集成 III』 ・川嶋信清『好色三の里』 ・磯田湖龍斉『風流十二季の栄花』 ・北尾重政『笑本春の曙』
2005年3月	青木　淳編	『東寿院阿弥陀如来像像内納入品資料』
2005年3月	西村大志著	『小学校で椅子に座ること』＜もの＞と＜身体＞からみる日本の近代化
2005年9月	井波律子 / 井上章一編著	『表現における越境と混沌』
2006年3月	ジェイ ルービン / 田代慶一郎 / 西野春雄編著	『桂坂謡曲談義』高砂・定家・三井寺・弱法師・鞍馬天狗
2006年10月	山田奨治 / 岩井茂樹編著	『連歌の発想－連想語彙用例辞典と、そのネットワークの解析－』
2007年3月	岩井茂樹著	『恋歌の歴史－日本における恋歌観の変遷』
2007年6月	A・ガーストル著 早川聞多編	『近世艶本資料集成IV　月岡雪鼎・1『女令川おへし文』』
2007年8月	オギュスタン・ベルク編	『日本の住まいと風土性』
2008年12月	王維坤 / 宇野隆夫編	『古代東アジア交流の総合的研究』
2009年3月	白幡洋三郎編	『旅と日本発見 —移動と交通の文化形成力』
2010年3月	早川聞多 編集・翻刻 A・ガーストル 解説・英訳	『日文研所蔵　近世艶本資料集成V　月岡雪鼎・2『艶道日夜女宝記』』
2010年3月	ウィリアム・J・タイラー / 鈴木貞美編著	『石川淳と戦後日本』
2010年11月	浅岡邦雄 / 鈴木貞美編	『明治期「新式貸本屋」目録の研究』
2010年11月	酒井直樹 / 磯前順一編	『「近代の超克」と京都学派　近代性・帝国・普遍性』
2011年3月	鈴木貞美編	『「Japan To-day」研究 —戦時期「文藝春秋」の海外発信』
2012年3月	梅定娥著	『古丁研究 —「満洲国」に生きた文化人』
2013年3月	磯前順一 / 尹海東編著	『植民地朝鮮と宗教——帝国史・国家神道・固有信仰』
2014年3月	末木文美士 / 林淳 / 吉永進一 / 大谷栄一編	『ブッダの変貌——交錯する近代仏教——』
2014年3月	朴美貞著	『帝国支配と朝鮮表象——朝鮮写真絵葉書と帝展入選作にみる植民地イメージの伝播』

(4) 研究成果の刊行物

④JAPAN REVIEW

No. 17　　2005年1月発行

標題	執筆者
Lordly Pageantry: The Daimyo Procession and Political Authority	Constantine N. VAPORIS
Translation of Western Embryological Thought in the Edo Period: Tsuboi Shindō and Malpighi's Observations of Fertilized Eggs	Frederik CRYNS
Negotiating Language in the Opening of Japan: Luo Sen's Journal of Perry's 1854 Expedition	De-min TAO
No Place to Call Home: Negotiating the "Third Space" for Returned Japanese Americans in Tamura Toshiko's "Bubetsu" (Scorn)	Anne SOKOLSKY
The Colonial Eyeglasses of Nakajima Atsushi	Robert TIERNEY

No. 18　　2006年1月発行

標題	執筆者
Sagoromo and Hamamatsu on Genji: Eleventh-Century Tales as Commentary on Genji monogatari	Royall TYLER
Models of the Way in the Theory of Noh	Noel John PINNINGTON
"So That We Can Study Letter-Writing": The Concept of Epistolary Etiquette in Premodern Japan	Markus RÜTTERMANN
Tokugawa Population: The Archival Issues	Louis CULLEN
Lafcadio Hearn as Japanese Nationalist	Roy STARRS
Manfred Gurlitt and the Japanese Operatic Scene, 1939-1972	Luciana GALLIANO
Relationships between Jōmon Culture and the Cultures of the Yangtze, South China, and Continental Southeast Asian Areas	Sergey LAPTEFF

No. 19　　2007年1月発行

標題	執筆者
Birth-giving and Avoidance Taboo: Women's Body versus the Historiography of Ubuya	Hitomi TONOMURA
Out of Sunda? Provenance of the Jōmon Japanese	Edwina PALMER
A Natural Treasury: Plants and Animals in Izumo fudoki	Anders CARLQVIST
The Rise of a New Poetic Form: The Role of Shimamura Hōgetsu in the Creation of Modern Japanese Poetry	Massimiliano TOMASI
Les Traces d'une blessure créatrice: Yagi Kazuo entre la tradition japonaise et l'avant-garde occidentale	INAGA Shigemi
Japanese Private Sector Banks, 1931-1945: A Business Perspective	James C. BAXTER
Pal's "Dissentient Judgment" Reconsidered: Some Notes on Postwar Japan's Responses to the Opinion	USHIMURA Kei

(4) 研究成果の刊行物

No. 20　　2008年1月発行

標題	執筆者
The Making of the Japan Sea and the Japanese Mountains: Understanding Japan's Volcanism in Structural Context	Gina L. BARNES
Satoyama, Traditional Farming Landscape in Japan, Compared to Scandinavia	Björn E. BERGLUND
Nishida Kitarō's Logic of Absolutely Contradictory Self-Identity and the Problem of Orthodoxy in the Zen Tradition	Agnieszka KOZYRA
Beriberi, Military Medicine, and Medical Authority in Prewar Japan	Alexander R. BAY
Creating Modern Cityscapes and Modern Civilians: The Urban Planning Law and the 1927 Hikoso Fire Reconstruction in Kanazawa	Jeremy D. PHILLIPPS
Transition to Municipal Management: Cleaning Human Waste in Tokyo in the Modern Era	Takanori HOSHINO
Atarashikimura: The Intellectual and Literary Contexts of a Taishō Utopian Village	Angela YIU
Kurahara Korehito's Road to Proletarian Realism	Mats KARLSSON
Becoming Kami? Discourse on Postmortem Ritual Deification in the Ryukyus	Evgeny S. BAKSHEEV

No. 21　　2009年8月発行

標題	執筆者
Courtier and Confucian in Seventeenth-Century Japan: A Dialogue on the *Tale of Genji* between Nakanoin Michishige and Kumazawa Banzan	James McMULLEN
Paulownia Leaves Falling: The Kanshi Poetry of Inaga Nanpo (1865-1901)	Judith N. RABINOVITCH and Timothy R.
"International Contemporaneity" in the 1960s: Discoursing on Art in Japan and Beyond	Reiko TOMII
The Interaction of Bengali and Japanese Artistic Milieus in the First Half of the Twentieth Century (1901-1945): Rabindranath Tagore, Arai Kanpō, and Nandalal Bose	INAGA Shigemi
Statistics of Tokugawa Coastal Trade and Bakumatsu and Early Meiji Foreign Trade, Part 1: Coastal Trade in Tokugawa Times	Louis M. CULLEN
Revealing Linguistic Power: Discourse Practice toward "Youth" in Japanese and Thai Newspapers	Chavalin SVETANANT
Oscar Wilde and Honma Hisao, the First Translator of "De Profundis" into Japanese	Yoko HIRATA

No. 22　　2010年7月発行

標題	執筆者
The Sanjō bōmon Temple-Palace Complex: The First Locus of Ashikaga Authority in Medieval Kyoto	Matthew STAVROS
Kōetsumura: Of Rhythms and Reminiscence in Hon'ami Kōetsu's Commune	W. Puck BRECHER
Statistics of Tokugawa Coastal Trade and Bakumatsu and Early Meiji Foreign Trade, Part 2: Trade in Bakumatsu and Early Meiji Times	Louis M. CULLEN
Meiji shinkyoku: The Beginnings of Modern Music for the Koto	Philip FLAVIN
The Crypt in the City: Satō Haruo's Monument to E. A. Poe	Charles EXLEY
Nishida Kitarō and Chinese Philosophy: Debt and Distance	Michel DALISSIER
"Lesson Study" as Professional Culture in Japanese Schools: An Historical Perspective on Elementary Classroom Practices	Mohammad Reza SARKAR ARANI / FUKAYA Keisuke
Maeda Ai's Predicate Theory	ODAGIRI Takushi
RESEARCH NOTES A Mapping and Geographical Analysis of Japanese Gardens in the Kyoto Basin	OGATA Takayuki/LI Wei/YAMADA Shōji

(4) 研究成果の刊行物

No. 23　　2011年8月発行

標題	執筆者
Sanmi no Tsubone: Ashikaga Wife, Imperial Consort, Buddhist Devotee and Patron	Patricia FISTER
Visual Bilingualism and Mission Art: A Reconsideration of “Early Western-Style Painting” in Japan	Naoko Frances HIOKI
From Bodhidharma to Daruma: The Hidden Life of a Zen Patriarch	Bernard FAURE
Practical Frivolities: The Study of Shamisen among Girls of the Late Edo Townsman Class	TANIMURA Reiko
The “Masters of Sacred Dance” in Eastern Japan during the Edo Period	Gerald GROEMER
The Political Space of Meiji 22 (1889): The Promulgation of the Constitution and the Birth of the Nation	KOKAZE Hidemasa
The Making of a Mnemonic Space: Meiji Shrine Memorial Art Gallery 1912-1936	IMAIZUMI Yoshiko
Towards a Graphical Representation of Japanese Society in the Taishō Period: Jiji Manga in Shinseinen	Roman ROSENBAUM
Romancing the Role Model: Florence Nightingale, Shōjo Manga, and the Literature of Self-Improvement	KAWANA Sari
Smashing the Mirror of Yamato: Sakaguchi Ango, Decadence and a (Post-metaphysical) Buddhist Critique of Culture	James Mark SHIELDS

No. 24　　2012年8月発行

標題	執筆者
The English and the Control of Christianity in the Early Edo Period	Timon SCREECH
Conduits of Power:What the Origins of Japan’s Earthquake Catfish Reveal about Religious Geography	Gregory SMITS
Loving Couples for a Modern Nation:A New Family Model in Late Nineteenth Century Japan	Jean-Michel BUTEL
From “Literary Translation” to “Cultural Translation”:Mori Ogai and the Plays of Henrik Ibsen	Yōichi NAGASHIMA
Shinju fujin, Newspapers, and Celebrity in Taisho Japan	Michiko SUZUKI
“A Living Past as the Nation’s Personality”:Jinno shotoki, Early Showa Nationalism, and Das Dritte Reich	Michael WACHUTKA
History in the Making:The Negotiation of History and Fiction in Tanizaki Jun’ichiro’s Shunkinsho	Stephen DODD
The City and the Chain:Conceptualizing Globalization and Consumption in Japan	Helena GRINSHPUN
BOOK REVIEWS	–

(4) 研究成果の刊行物

No. 25　　2013年8月発行

標題	執筆者
Early Modern Secularism? Views on Religion in Seji kenbunroku (1816)	Mark TEEUWEN
The Buddhist Faith of the Japanese Imperial Family after the Meiji Restoration	TAKAGI Hiroshi
Japanese Archives: Sources for the Study of Tokugawa Administrative and Diplomatic History	Louis CULLEN
Rising Up and Saving the World: Ishii Juji and the Ethics of Social Relief during the Mid-Meiji Period (1880–1887)	Tanya MAUS
How "Religion" Came to Be Translated as Shukyo: Shimaji Mokurai and the Appropriation of Religion in Early Meiji Japan	Hans Martin KRAMER
Japanese Philosophers Go West: The Effect of Maritime Trips on Philosophy in Japan with Special Reference to the Case of Watsuji Tetsuro (1889–1960)	INAGA Shigemi
Diaries and Everyday Life in Colonial Taiwan	Hui-yu Caroline TS'AI
REVIEW ARTICLE Origins of Japan—the 'Big Picture' Revisited: A Review of New Plate Tectonics Research	Gina L. BARNES
BOOK REVIEWS	–

No. 26　　2013年9月発行

標題	執筆者
Introduction	C. Andrew GERSTLE and Timothy CLARK
Who Were the Audiences for Shunga?	HAYAKAWA Monta
The Reception of Shunga in the Modern Era: From Meiji to the Pre-WWII Years	ISHIGAMI Aki
Historiography of the "Phallic Contest" Handscroll in Japanese Art	Akiko YANO
Japanese Illustrated Erotic Books in the Context of Commercial Publishing, 1660–1868	Ellis TINIOS
Affirming the Life Erotic: Yoshida Hanbei's Koshoku kinmo zui (1686)	Alfred HAFT
Allegories of Love	Jennifer PRESTON
Nishikawa Sukenobu: One Hundred Women, Two Stories, and a Reconsideration	Amaury A. GARCIA RODRIGUEZ
Tsukioka Settei's Erotic Paintings	YAMAMOTO Yukari
Analyzing the Outrageous: Takehara Shunchosai's Shunga Book Makura doji nukisashi manben tamaguki (Pillow Book for the Young, 1776)	C. Andrew GERSTLE
Intertextual Divertissement, Sexual Education and Entertaining Humor: The World of Onna enshi kyokun kagami	Laura MORETTI
Kabuki Actors in Erotic Books (Shunpon)	MATSUBA Ryoko
No Laughing Matter: A Ghastly Shunga Illustration by Utagawa Toyokuni	HIGUCHI Kazutaka
Shunga in the Meiji Era: The End of a Tradition?	Rosina BUCKLAND

(4) 研究成果の刊行物

No. 27　　2014年8月発行

標題	執筆者
A Hypothesis for Early Kofun Rulership	Gina L. BARNES
Shomu Tenno and the Deity from Kyushu: Hachiman's Initial Rise to Prominence	Bernhard SCHEID
The Catholic Architecture of Early Modern Japan: Between Adaptation and Christian Identity	Rie ARIMURA
Japanese Art, Aesthetics, and a European Discourse: Unraveling Sharawadgi	Wybe KUITERT
Informal Imperialism and the 1879 Hesperia Incident: Containing Cholera and Challenging Extraterritoriality in Japan	Harald FUESS
Takahashi Tomio's Henkyo: Eastern Easts and Western Wests	Nathan HOPSON
Japanese Tourism to Mukden, Nanjing, and Qufu, 1938–1943	Kenneth RUOFF
Helen Keller's Civil Diplomacy in Japan in 1937 and 1948	Chizuru SAEKI
Floating Signifiers: The Plural Significance of the Grand Shrine of Ise and the Incessant Re-signification of Shinto	Fabio RAMBELLI
BOOK REVIEWS	–

(5) 所属研究者（含・名誉教授）の受章や受賞等

氏　名	職 名	(表彰)名称	受賞日
埴原　和郎	名誉教授	叙正四位、授瑞宝中綬章	平成16年
中西　進	名誉教授	奈良テレビ放送文化賞	平成16年
中西　進	名誉教授	文化功労者顕彰	平成16年
中西　進	名誉教授	瑞宝重光章	平成17年
猪木　武徳	教授	第8回桑原武夫学芸賞	平成17年7月11日
井波　律子	教授	平成17年度京都新聞文化学術賞	平成17年11月28日
芳賀　徹	名誉教授	授瑞宝中綬章	平成18年
井波　律子	教授	第10回桑原武夫学芸賞	平成19年7月3日
安田　喜憲	教授	紫綬褒章	平成19年11月3日
河合　隼雄	名誉教授	正四位瑞宝重光章	平成19年
宇野　隆夫	教授	2007年度日本情報考古学会学会賞	平成20年3月22日
牛村　圭	教授	第2回重光葵賞	平成20年12月18日
細川　周平	教授	第60回読売文学賞（研究・翻訳賞）	平成21年2月18日
速水　融	名誉教授	文化勲章	平成21年
伊東　俊太郎	名誉教授	授瑞宝中綬章（春）	平成21年
安田　喜憲	教授	平成22年度中山賞大賞	平成22年
山折　哲雄	名誉教授	第20回南方熊楠賞（人文の部）	平成22年
山折　哲雄	名誉教授	授瑞宝中綬章	平成22年
瀧井　一博	准教授	第32回サントリー学芸賞（政治・経済部門）	平成22年12月6日
村井　康彦	名誉教授	授瑞宝中綬章	平成22年
中西　進	名誉教授	第58回菊池寛賞	平成22年
石井　紫郎	名誉教授	瑞宝重光章	平成23年
芳賀　徹	名誉教授	蓮如賞	平成23年
堀　まどか	機関研究員	第34回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）	平成24年
小松　和彦	所長	第22回高知出版学術賞	平成24年3月23日
小松　和彦	所長	紫綬褒章	平成25年11月3日
中西　進	名誉教授	文化勲章	平成25年
稲賀　繁美	教授	建築アカデミー2014年度書籍賞受賞（フランス建築アカデミー）	平成26年11月12日
末木　文美士	教授	第68回毎日出版文化賞(企画部門)（毎日新聞社）	平成26年11月28日
安田　喜憲	名誉教授	東海テレビ文化賞	平成26年
久米　舞子	プロジェクト研究員	第4回角田文衛古代学奨励賞	平成26年10月4日
長門　洋平	機関研究員	第36回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）	平成26年11月12日
杉本　秀太郎	名誉教授	京都府文化賞・特別功労章	平成27年
瀧井　一博	教授	フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞	平成27年5月26日
石上　阿希	特任助教	国際浮世絵学会新人賞	平成27年5月26日

※職名は受賞当時のもの

3．研究資料等の収集と発信

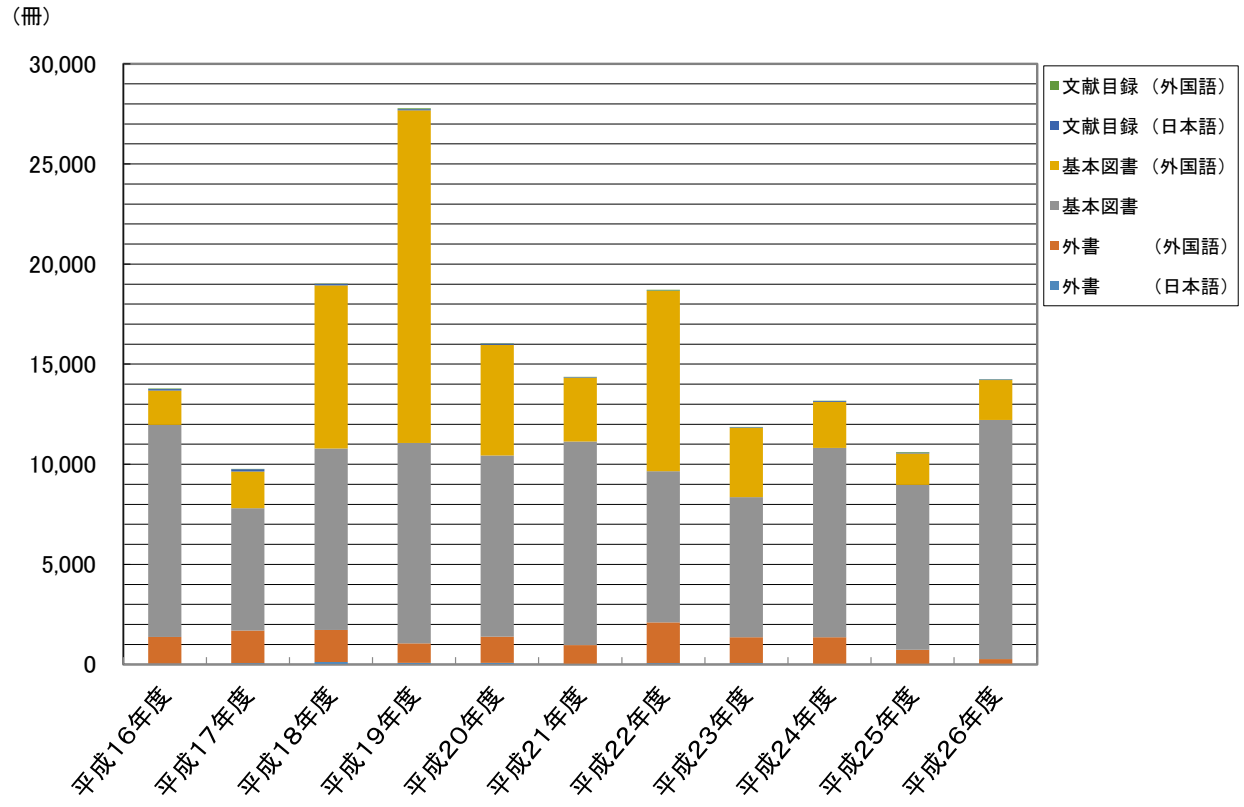
(1) 資料の収集状況

①図書収集状況

平成27年3月31日現在

区分 / 年度	外書（日本語）	外書（外国語）	基本図書（日本語）	基本図書（外国語）	文献目録（日本語）	文献目録（外国語）	合　計
平成１６年度（２００４）	58	1,323	10,588	1,709	83	27	13,788
平成１７年度（２００５）	68	1,631	6,107	1,839	107	10	9,762
平成１８年度（２００６）	123	1,594	9,078	8,138	70	9	19,012
平成１９年度（２００７）	81	967	10,019	16,616	52	45	27,780
平成２０年度（２００８）	86	1,299	9,047	5,529	59	12	16,032
平成２１年度（２００９）	39	934	10,159	3,196	21	5	14,354
平成２２年度（２０１０）	65	2,033	7,559	9,002	14	47	18,720
平成２３年度（２０１１）	62	1,303	6,995	3,465	32	3	11,860
平成２４年度（２０１２）	43	1,316	9,461	2,290	43	16	13,169
平成２５年度（２０１３）	39	692	8,238	1,574	38	38	10,619
平成２６年度（２０１４）	37	227	11,955	1,985	31	8	14,243

平成１６～２６年度受入冊数	701	13,319	99,206	55,343	550	220	169,339
蔵書冊数	3,348	59,596	344,089	104,839	5,347	2,243	519,462



注意）
基本図書には、研究書、製本雑誌、映像音響資料、個研等、外書と文献目録以外のものをすべて含む。

(1) 資料の収集状況

②高額資料の一覧

平成16年度

No.	名称	数量等
1	地獄草紙絵巻　紙本肉筆著色	一巻
2	近世風俗版本資料	6点
	奥村政信画『善悪占仕形道成寺』紅摺絵横本	全三冊揃
	歌川国芳『逢見八景』色摺大判組物	完本
	北尾雪抗斎『赤　賦』 墨摺折帖	全一帖
	菊川秀信『風流三代枕』 色摺半紙本	全五冊の内四冊
	勝川春章、北尾重政『姿名鏡』 墨摺半紙本	全一冊
3	昭和の読売新聞　戦後Ⅰ　読売新聞社	VDV-ROM
4	Oxford Dictionary of National Biography	全60巻
5	Burney, J.A.: Chronological history of the North-Eastern Voyages of Discovery	1冊
6	海外引揚関係資料集成 [国内篇]全16巻 [国外篇・補遺篇]全19巻	CD-ROM2
7	戦中期植民地行政史料　経済篇　マイクロフィルム 東洋拓殖会社1/別巻総目録1	33リール＋別巻1
8	DVD-ROM版　婦人画報　創刊号-482号	DVD8枚
9	精選近代文芸雑誌集　マイクロフィッシュ	既刊の10ユニット
10	対馬宗家文書第Ⅰ期朝鮮通信使記録第3回配本　マイクロフィルム	全40リール＋別冊下
11	狩野文庫マイクロ版集成補遺　マイクロフィルム	41リール
	第1門:総記・雑書	9リール
	第2門:哲学・宗教・教育	12リール
	第4門:語学・文学	20リール
12	Die Kunst	復刻版 32巻 (1899-1915)
13	宮武外骨編集　絵葉書類別大集成	CD-ROM23+解説目録
14	京城日報　韓国図書センター発行影印本	21－55巻 35冊

平成17年度

No.	名称	数量等
1	西洋から見た日本 1853-1941(Japan through Western Eyes : Manuscript Records of Traders, Travellers and Diplomats 1853-1941)	マイクロフィルム 34リール
	【Part 7】The Papers of Harold S Willliams (1898-1987) from the National Library of Australia-the Green Subject files (Folders 1-138)	
	【Part8】The Harold S Williams Collection : Additional Subject files (Series 2, Folders 1-82) from the National Library of Australia	
2	妖怪絵巻　北斎季親画　江戸末期写	1巻
3	近世風俗版本資料	計7点
	①宮川春水『百色初』	3冊
	②西川祐信『和楽色納戸』	3冊
	③西川祐尹『色長者』	3冊
	④奥村政信『伊勢物語・まめ男夢想頭巾』	3冊
	⑤北尾政美『枕文庫』	3冊
	⑥司馬江漢『床すず免』	3冊
	⑦喜多川歌麿『絵本手枕』	12図
4	復刻版　中央文学	全16冊
5	京城日報 第3次配本	全60冊
6	対馬宗家文書 第2期	CD-ROM2
7	新世界新聞	マイクロフィルム 118ロール
8	日本古武道ビデオ	76巻

平成18年度

No.	名称	数量等
1	東洋美術大観	全15冊
2	近世風俗資料	計5点
	①菱川師宣「艶本三部貼込画帖」	3冊
	②西川祐信「大開中心好色」	3冊
	③竹原春朝斎「於荘玉開」	4冊
	④奥村政信「志道軒恋の謎裸百貫」	1帖
	⑤北尾重政「吾嬬土産」	1冊
3	戦中期植民地行政史料　経済篇	マイクロフィルム 32リール

3．研究資料等の収集と発信

(1) 資料の収集状況

No.	名称	数量等
4	占領期新興新聞集成　九州・沖縄編	DVD12枚
5	会社四季報全70年DVD1936-2006	DVD10枚
6	源頼光大江山鬼神退治之図	1巻
7	高井鴻山筆「妖怪図」	1幅
8	国訳承政院日記(高宗篇)	全210冊
9	韓・日会談請求権関連文書	全94冊
10	"First Japanese Embassy to Europe ..."	1冊
11	Cardim, Antonio Francisco " Fascicvlvs e Iapponicis floribvs, svo adhvc madentibvs sangvine ..." カルディム「日本殉教精華」	1冊
12	Siebold, Philipp Franz von "Met oordkonden gestaafd vertoog van de pogingen door Nederland en ..."シーボルト「各国の通航と海商にむけて日本に開港させるためのオランダとロシアの交渉努力の確認書」	1冊
13	Maffei, Giovanni Pietro & Acosta, Emmanuel "RERUM A SOCIETATE IESU IN ORIENTE GESTARUM ..."マッフェイ「イエズス会士書簡集」	1冊
14	Froes, Luis "Nova relatio historica de statv rei christianae in Iaponia ..." フロイス「日本におけるキリスト教の現状」	1冊
15	Marini, Gio. Filippo de "DELLE MISSIONI DE PADRI DELLA COMAGNIA DI GIESV NELLA PROUINCIA DEL GIAPPONE ..." マリーニ「イエズス会日本教区布教記」	1冊
16	Guignes, Joseph de "Histoire generale des Huns, des Turcs, des Mogols, et des autres Tartares occidentaux ..." ギーニュ「モンゴル史」	全5冊
17	"De reis van Jan Cornelis. May naar de IJszee en de Amerikaanse kust, 1611-1612" etc. リンスホーテン学会17世紀オランダ旅行記集	全107冊
18	Lauts, Garard "Japan in zijne staatkundige en burgerlijke inrigtingen en het verkeer met Europese natien ..." ラウツ「日本:国家の機構と産業」	1冊
19	京城日報　第4次　116～163巻	全48冊
20	婦人公論DVD－ROM版　第1期	DVD2枚
21	対馬宗家文書　第3期 「倭館館守日記・裁判記録」	マイクロフィルム 120リール

平成19年度

No.	名称	数量等
1	解放空間新聞資料集成	全24冊
2	バタビア学芸協会紀要	全3巻
3	ゴットフリート「史的年代記」オランダ語版1698年	全1冊
4	占領期新興新聞集成　近畿編	DVD12枚
5	戦中期植民地行政史料　経済篇	マイクロフィルム36巻 ＋別巻1冊
6	水沢市立斎藤實記念館所蔵　斎藤實関係文書　第2期　逐次刊行物編	マイクロフィルム71巻
7	『宗教研究』日本宗教学会1～255号(大正5～昭和58)	1組
8	昭和の読売新聞 戦後Ⅱ　読売新聞社(昭36～昭45)DVD版	13枚
9	日本と西洋:オランダ所蔵資料集成　第3部　駐日オランダ公使館文書1870－1890年	1セット
10	百鬼夜行絵巻	1巻
11	土佐光起百鬼夜行絵巻	1巻
12	文芸倶楽部　明治篇	DVD版4枚＋総目次
13	婦人公論　第Ⅱ期	DVD版2枚＋検索用CD
14	ジャパンナレッジ	1ユーザ
15	「朝鮮公論」復刻版	全78巻
16	ラウエンホルスト・ムルデル『日本主要港工事報告』	1冊
17	East meets West Part Ⅰ　1セット	マイクロフィルム 22巻
18	憲政史編纂会収集文書　第一期	マイクロフィルム 55巻(目録付)

平成20年度

No.	名称	数量等
1	婦人参政関係史資料Ⅰ1918-1946	マイクロフィルム53巻
2	「朝鮮日報」	96～143巻
3	関東庁警務局資料	全80巻別巻1
4	西洋から見た近現代日本　Part9	マイクロフィルム55巻
5	田原藤太藤原秀郷　奈良絵巻	三軸
6	ダヴィティ『世界誌』オランダ語初版(1621年)	1冊
7	ファン・デル・ヘム氏蒐集「アトラス ブラウ」 図版・注釈付目録	全6巻および補冊付
8	『海外新聞別集』 洋書調所版(文久二年、明治二年)	全3冊

(1) 資料の収集状況

No.	名称	数量等
9	勝川春童『會本見男女沙目』 色摺　大本	1冊
10	『上海－政治・経済報告集1842～1943年』	1セット
11	クルムス『解剖図表』(蘭語初版)	1冊
12	歌川国芳 『吾妻文庫』	1冊
13	西洋から見た近現代日本　Part10	マイクロフィルム20巻
14	East meets West Part4、5	マイクロフィルム40巻
15	水沢市立斎藤實記念館所蔵　斎藤實関係文書　第1期逐次刊行物編	マイクロフィルム92巻

平成21年度

No.	名称	数量等
1	鯰絵コレクション	22点
2	『付喪神絵詞』	一巻
3	『澁井清コレクション』 西川祐信『好色一代能』、西川祐信『優競花の姿絵』、西川祐信『濡姿逢初川』、西川祐信『華靨』、西川祐信『新色閨の鳥貝』、月岡雪鼎『欠題艶本』、月岡雪鼎『婚禮秘事袋』、礫川亭栄里『図本婦美枕』、鳥居清長『好色末摘花』、吉田半兵衛『好色訓蒙図彙』、喜多川歌麿『艶本常陸帯』、西川祐尹『古今色角力』、北尾重政『閨花鳥襷』、歌川豊国『絵本開中鏡』、速水春暁斎『絵本見夜野潤』、川島信清『恋の媒』	１７点
4	名所図会コレクション 『京童』、『利根川図志』、『方言修行　金草鞋』、『奈良名所　八重桜　古版地誌』、『新編鎌倉志』	５点
5	コミンテルン機密文書 日本共産党ファイル1919-1941	マイクロフィルム132リール
6	内務省警保局発禁図書全932点1065巻	マイクロフィルム69リール
7	中外日報マイクロフィルム	マイクロフィルム92リール
8	張学良関係文書	マイクロフィルム55リール
9	上海工部局警務処機密資料集	マイクロフィルム67リール
10	東京日日新聞　大正編	マイクロフィルム102リール
11	東京日日新聞　昭和編	マイクロフィルム191リール
12	精選近代文芸雑誌集 Unit 22	マイクロフィルム　1セット
13	田中義一関係文書	マイクロフィルム28リール
14	三条実美関係文書	マイクロフィルム　4セット
15	阿蘭陀紀事(稿本)	1冊
16	シーボルト編「和漢音釈書言字考」初版	1冊
17	東京日日新聞　明治編　明治5年創刊～明治28年	マイクロフィルム116リール
18	東京日日新聞　明治編　明治29年～明治45年	マイクロフィルム102リール
19	Constitutions of the world : 1850 to the present (ヨーロッパ諸国の憲法)	マイクロフィッシュ7セット
20	大陸新報	マイクロフィルム23リール
21	離龍－中国古籍全文検索叢書シリーズ	CD 17枚
22	近世風俗稀覯艶本資料コレクション 古山師重『欠題組物』、葛飾北斎『つびの雛形』、礒田湖龍斎『欠題組物』、下河辺拾水『欠題組物』、西川祐尹『風流比女鑑』、勝川春章『葉名志那三話』	６点

平成22年度

No.	名称	数量等
1	稀覯艶本資料 歌川国貞『艶紫娯拾余帖』、北尾重政『閨裡艶談 恵本金衣鳥』	
2	『Travel in Japan』	３２冊
3	『福富長者物語』	一巻
4	Blaeu : Asia noviter (ca. 1630)	地図1枚
5	曹洞宗全書　正編　(復刻)	１８冊
6	『京雀』 寛文五年刊	7巻7冊
7	カロン『日本大王国志』 オランダ語初版　1648年刊	1冊
8	東京ローズ(アイヴァ・戸栗・ダキノ)FBIファイル	マイクロフィルム13リール
9	朝鮮全羅北道川崎農場関係　明治40年～大正8年間の写真一括	1セット
10	Nineteenth/Twentieth Century House of Commons Parliamentary Papers (HCPP)	データベース　1セット

3．研究資料等の収集と発信

(1) 資料の収集状況

平成23年度

No.	名称	数量等
1	稀覯艶本資料	
	西川祐尹『艶色吾妻鏡』	5冊
	奥村政信『女酒呑童子枕言葉』	3冊
	勝川春潮『笑本会図之賢水』	12図揃
	喜多川歌麿『葉男婦舞喜』	3冊
	渓斎英泉『春野薄雪』	12図揃
	暁鐘成『万交区新話総目』	3冊
	喜多川歌麿・勝川春潮『會本妃女始』	3冊
	石川豊信『色智嚢』	3冊
	奥村政信『笑本姿葉奈』	3冊
	奥村政信『艶本妹背鳥』	3冊
2	復刻版『大連新聞』	1セット
3	復刻版『工学叢誌・工学会誌』	1セット
4	Dagh-register gehouden int Casteel Batavia vant passerende daer ter plaetse als over geheel Nederlandts-India, 1624-1682(「バタヴィア城日記」)	26冊
5	Verhandelingen van het Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen. (バタヴィア学芸協会紀要)Vols. 1-4,10-14,16,25,26	12冊
6	Golownin, (Wasilij Michailowitsch). Begebenheiten des Capitains von der Russisch-Kaiserlichen Marine Golownin …1811, 1812 und 1813…. 1817-1818	2冊
7	米国戦略情報局(OSS)『国務省機密文書』	マイクロフィルム 1セット
8	『戦前・戦中期アジア研究資料 6.中国占領地の社会調査』	全34巻+別冊1
9	『中国近代各地小報滙刊』	1セット
10	『曹洞宗全書』	揃33冊
11	『智山全書』	揃22冊
12	Golownin, (Wasilij Michailowitsch). Sokrashchenniya Zapiski... dlya opisi Kuril'skikh ostrovov.(「千島列島調査」)	1冊
13	『大北日報』	マイクロフィルム 1セット

平成24年度

No.	名称	数量等
1	復刻版「朝鮮新報・朝鮮新聞」	1セット(1892.5.15～1921.3.31)
2	ビゴー画 ガネスコ著 「日本におけるショッキング」1895年刊 Bigot, G. / Ganesco, F.: Shocking au Japon	1冊
3	満洲関係絵葉書コレクション	1セット
4	復刻版「朝鮮高等法院判決録」	1セット
5	錦絵『奥州安達がはら一つ家の図』芳年画	1セット
6	『醍醐僧正日記』	1巻
7	Titsingh, Isaac: Ceremonies usitees au Japon.(ティチング「日本の儀式：婚姻と葬式」フランス語初版」) 1819年刊	2冊
8	Epistolae Iapanicae de multorum gentilium (『イエズス会士日本通信』ラテン語初版) 1569年刊	1冊
9	西洋古版世界地図	3枚
	①Munster, S.: Das erst general, inhaltend die beschreibung und den circtel des gantzen erdtreichs und moeres. ミュンスター『世界図』1553年頃刊	
	②De Witt, F.: Nova Orbis Tabula in Lucem Edita/ ド・ウィット『新世界地図』	
	③Homann, J.B.: Planiglobii Terrestris Cumutoq. ホーマン『世界図・天球図』1720年頃刊	
10	『INAKA』	第5, 7, 8,10-13,16-17巻
11	古写真アルバム	2点のうち1点
	日下部金兵衛 大型蒔絵象嵌アルバム	写真50枚

3．研究資料等の収集と発信

(1) 資料の収集状況

No.	名称	数量等
12	稀覯艶本資料 ①歌川国芳「花結色の陰吉」 ②鳥居清信「逸題組物」 ③喜多川歌麿「帆柱丸」 ④歌川国芳「当世水滸伝」 ⑤暁鐘成「偶言三歳智恵」 ⑥喜多川月麿「笑本柳巷始開花」 ⑦礒田湖龍斎「色情十二手くだ」 ⑧礒田湖龍斎「好色十二姿」	1セット
13	今出川蔵書(菊亭家)『西宮抄　宮中行事記録』	4冊
14	国芳画「主馬佐酒田公時 靭眉尉碓井貞光 瀧口内舎人源次綱」	1セット
15	井原西鶴「一目玉鉾」 元禄二年刊	4冊
16	近現代日本渉華密档　他　図書	2セット
	①近現代日本渉華密档　陸軍省巻(1872～1945)・海軍省巻(1872～1933)	223冊
	②北洋政府档案史料	196冊

平成25年度

No.	名称	数量等
1	ハワイ報知	PDF(HDD納品)(1912年12月創刊～1961年12月)
2	歌川国麿 「花相撲四十八手」	3冊
3	日本大蔵経(増補改訂)	全100巻(100冊)
4	柳澤健史料	1セット
5	日本関連絵葉書コレクション	1セット(833枚)
6	キネマ旬報　No.1～No.1048(1951～1991年)	1,048冊
	再建号No.1～No.79(1946～1950年)	79冊
7	松島詩子旧蔵　写真貼込帳	7冊
	演奏会プログラム貼込帳	2冊
8	Lettere dell'India orientale, scritte da'Reuerendi Padri della Compagnia de Gies ù... 『1553-1577年イエズス会東洋通信』(ヴェネツィア、1580年刊)	1冊
9	Histoire de l'église du Japon / par le R.P. Crasset de la Compagnie de Jesus クラセ『日本教会史』初版(パリ、1691年刊)	2冊
10	Christiandad del Japon, y dilatada persecucion que padecio… / su autor, el P.M. Fr. Joseph Sicardo... シカルド『日本布教史』(マドリード、1698年刊)	1冊
11	Die preussische expedition nach Ost-Asien. Ansichten aus Japan, China und Siam 『オイレンブルク遠征図録』(ベルリン、1864-1873年刊)	2冊
12	模本『袋法師絵詞』(一名太秦草紙)	1冊
13	『木版源氏物語絵巻』(複製)	全4巻
14	Description du penible voyage faict entour de l'univers ou globe terrestre... /Olivier van Noor ファン・ノールト『世界周航記』フランス語訳第2版(アムステルダム、1610年刊)	1冊
15	鳥居清長『袖の巻』	1冊

平成26年度

No.	名称	数量等
1	Eighteenth Century Collections Online (ECCO) (18世紀英語・英国刊行物データベース)	
2	Isaac Commelin, Begin ende voortgangh van de Vereenighde Nederlantsche Geoctroyeerde Oost-Indische Compagnie. Amsterdam : s.n., 1646. (コンメリン編『オランダ東印度会社の起源と発展第3版』)	2vols
3	妖怪かるた	1組
4	Web版　群書類従　正、続、続々 (データベース)	
5	慶長肉筆春画巻	各1点
	上方肉筆春画巻	
6	Pierre d'Avity, Description generale de l'Asie. Paris, 1660.(ダヴィティ『アジア誌』フランス語版(1660年))	

3．研究資料等の収集と発信

(2) データベースの構築と公開

平成27年3月31日現在

データベース名（公開年）	公開方法	蓄積情報の概要	H16蓄積量	H21蓄積量	H26蓄積量	単位	H17利用数	H21利用数	H26利用数
所蔵図書データベース（H9年）	一般公開	日文研が所蔵する世界各国の資料の書誌・所蔵情報（所蔵）	358,031	444,616	537,716	件	39,870	27,443	829
所蔵図書データベース（H10年）	一般公開	日文研が所蔵する世界各国の資料の書誌・所蔵情報（書誌）	217,424	268,235	306,739	件			
日本研究機関データベース（H9年）	一般公開	日本研究を行っている主として海外の日本研究機関の情報	0	1,654	1,155	機関	3,858	2,400	1,637
研究集会データベース（H9年）	一般公開	日文研で開催しているセミナー、フォーラム、講演会等の開催情報	794	983	1022	件	1,828	800	382
「日文研フォーラム」報告書（データベース）（H9年）	一般公開	外国人研究員によるフォーラム報告書の全文情報	102	124	137	件	418	3,244	882
専任教員執筆一覧データベース（H9年）	一般公開	日文研の教員が執筆した図書・論文等の書誌情報	0	13,680	15,182	件	1,927	620	763
在外日本美術データベース（H9年）	一般公開	海外に存在する各種日本美術品（絵画、版画、陶磁器等）の画像・書誌情報	5,883	5,883	5,883	件	959	2,302	1,829
Japan Review（H10年）	一般公開	日本研究に関するオリジナルな研究成果をまとめた学術論文集	0	204	265	件	4,050	6,814	1,836
日本研究データベース（H10 年）	一般公開	国際日本文化研究センター紀要として年2回出版する定期刊行物	0	437	542	件	5,146	7,812	2,103
日本関係欧文図書目録（外書データベース）（H10年）	一般公開	日文研所蔵の1900年以内に発行された欧文図書の内、日本関係記述のある全ての図書にする書誌・画像情報	1,057	1,057	1,057	冊	11,587	4,026	568
家族史・人口史文献データベース（H13年）	一般公開	日本家族史及び日本における人口史・歴史人口学分野の研究文献目録（家族史）	8,154	8,154	8,154	件	2,061	2,218	1,387
家族史・人口史文献データベース（H13年）	一般公開	日本家族史及び日本における人口史・歴史人口学分野の研究文献目録（人口史）	1,603	1,603	1,603	件			
錦絵観音霊験記の世界（H13年）	一般公開	今からおよそ160年前に登場した全国に散在する百観音霊場を題材にした浮世絵の画像・全文情報	100	100	100	件	3,801	6,024	615
図録　米欧回覧実記（H13年）	一般公開	久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』（1878）に掲載された図版ならびに図版に関する本文記事の画像・全文情報	317	317	317	件	2,412	3,517	622
平安人物志データベース（H13年）	一般公開	日文研所蔵の『平安人物志』（1768－1867）の画像・全文・索引情報	927	927	927	頁	3,297	3,205	1,179
平安人物志短冊帖データベース（H13年）	一般公開	日文研所蔵の『平安人物志』に掲載された諸家の短冊の画像・全文・書誌情報	947	947	947	件	1,389	1,692	493
於竹大日如来縁起絵巻（H14年）	一般公開	江戸末期に江戸で大ブームとなったお竹（大日如来の化身）伝説を絵巻化した『お竹大日如来縁起』全3巻及びその関連資料（山形県羽黒町正善院所蔵）の画像・全文情報	150	150	150	件	1,065	1,977	668
怪異・妖怪伝承データベース（H14年）	一般公開	民俗学の調査などで報告された怪異・妖怪の事例についての書誌情報	18,500	35,701	35,826	件	92,383	51,875	2,602
宗田文庫図版資料データベース（H14年）	一般公開	医史学者故宗田一氏収集の医学史・薬学史に関する書籍、図版資料などを中心とする日本医療文化史のコレクションのうちの主として図版資料に関する画像・書誌情報	1,104	1,104	1,104	件	1,483	1,758	1,340
貴重書（H14年）	一般公開	日文研所蔵の貴重書（日本文化研究にとって特に重要な図書：主として開国期以前に出版された外国語図書）の全文画像・書誌情報、目次、図版キャプション情報	17	66件	66	件	5,927	7,147	1,485
連歌データベース（H14年）	一般公開	永禄以前（連歌師宗養の没年まで）の連歌のすべて、及び永禄以後幕末までの主要な連歌の全文情報（データは奈良工業高等専門学校教授勢田勝郭氏の入力・蓄積されたもの）	197,228	197,228	197,228	件	3,262	4,899	1,001
和歌データベース（H14年）	一般公開	勅撰集21種すべて、万葉集をはじめ夫木和歌集などの私撰集及び主要な私家集の和歌の全文情報（データは奈良工業高等専門学校教授勢田勝郭氏の入力・蓄積されたもの）	190,423	190,423	190,423	件	18,153	16,167	4,810
俳諧データベース（H14年）	一般公開	芭蕉、蕪村をはじめ主要な俳諧の全文情報（データは奈良工業高等専門学校教授勢田勝郭氏の入力・蓄積されたもの）	25,652	25,652	25,652	件	4,862	3,675	1,892
季語検索（H14年）	一般公開	35,000以上の季語を収録しており、和歌、連歌、俳諧データベースの検索補助機能をもつ（データは奈良工業高等専門学校教授勢田勝郭氏の入力・蓄積されたもの）	0	35,811	35,811	件	124,110	18,583	659
近世畸人伝（正・続）（H14年）	一般公開	『近世畸人伝（正・続）』の画像・全文情報	97	97	97	件	1,471	2,422	862
所蔵地図データベース（H14年）	一般公開	近世の都市地図を中心に、地図資料の所在情報。日文研所蔵地図は画像を追加	2,112	846件	846	件	2,144	1,890	5,050
都年中行事画帖（H14年）	一般公開	『都年中行事画帖』（詞書：江馬務、画：中島荘陽）の画像・全文イメージ	103	103	103	件	1,481	2,128	699
平安京都名所図会（H16年）	一般公開	平安・京都を描いた「名所図会」の高精細画像	11	24	24	冊	3,667	5,476	1,786
怪異・妖怪絵姿（H16年）	一般公開	妖怪絵巻の高精細画像	2	16	24	巻	2,751	7,419	2,848
考古学GISデータベース（H16年）	一般公開	平安京・京都遺跡、地震痕跡遺跡、佐賀弥生遺跡のデータベース	1,754	4,701	4,701	件	2,273	1,968	1,015
浮世絵データベース（日文研・米国議会図書館共同事業成果）（H18年）	一般公開	米国議会図書館所蔵の約2,500点の浮世絵の画像及び解説文のデータベース	0	2,741	2,741	件	0	9,124	1,670
奈良絵本データベース（日文研・米国議会図書館共同事業成果）（H18年）	一般公開	米国議会図書館所蔵の奈良絵本の画像及び解説文のデータベース	0	4	4	冊	0	2,247	421
西洋医学史古典文献データベース（野間文庫データベース）（H18年）	一般公開	財団法人野間科学医学研究資料館（平成15年に閉館）から寄贈された蔵書のデータベース	0	64件	64	件	0	5,623	456
絵巻物データベース（H18年）	一般公開	日文研所蔵の絵巻物の高精度画像データベース	0	18	26	件	0	7,581	2,575
ちりめん本データベース（H18年）	一般公開	日文研所蔵のちりめん本の高精度画像データベース	0	77	77	冊	0	5,545	1,102
風俗図会データベース（H18年）	一般公開	日文研所蔵の絵双紙（絵草子・絵草紙）の高精度画像データベース	0	149	374	件	0	7,827	2,359

3．研究資料等の収集と発信

(2) データベースの構築と公開

データベース名	公開方法	蓄積情報の概要	H16蓄積量（データ件数等）	H18蓄積量（データ件数等）	H26蓄積量（データ件数等）	単位	H17利用数	H21利用数	H26利用数
平治物語絵巻「六波羅合戦の巻」デジタル復元図（H18年）	一般公開	「六波羅合戦の巻」デジタル復元図は、現存する武者絵の彩色と模本に書きこまれた色指定に基づきデジタル処理によって原画を復元したものである。	0	1	1	件	0	5,561	1,420
日中歴史研究センター旧蔵書目録（H19年）	一般公開	日中歴史研究センター旧蔵書を「欧文図書」「中文図書」「日文図書」「地図資料」に分類した目録情報	0	27,803	27,803	件	0	10,671	608
米国議会図書館所蔵「承応版源氏物語（全ページ）」データベース（H19年）	一般公開	米国議会図書館の所蔵する完本「承応版源氏物語」（本文54冊、注釈書6冊）全ページの画像のデータベース	0	60	60	件	0	1,748	485
ラージマップ　－高精細空中写真WebGIS－（H19年）	一般公開	ラージマップは、高精細空中写真（解像度約25cm）をベースマップとして用いたWeb GISである。現在、高精細空中写真は京都・奈良・滋賀県の一部、コンテンツは報告書抄録データベース、平安京条坊図を運用。	0	1	1	件	0	2,083	945
日本語語彙研究文献データベース（H20年）	一般公開	19世紀半ば以降日本で形成された新しい語彙、概念や意味について研究した文献を調査したもの。	0	7028	7,034	件	0	3,261	663
WebGIS　日本全図（H20年）	一般公開	Webから閲覧ができる都道府県地図	0	1	1	件	0	3,648	2,014
古事類苑全文データベース（H20年）	一般公開	国文学研究資料館等と共同して『古事類苑』の全文をテキストデータ化し、順次公開するものである。	0	3	10,704	頁	0	4,064	1,586
古事類苑ページ検索システム（H20年）	一般公開	『古事類苑』を国内外の日本研究者により広くかつ容易に利用してもらうことを目的として、大正版の洋装本(51巻)を基にして簡便な検索機能を付与したものである。	0	51	51	巻	0	3,820	857
浮世絵芸術データベース（H21）	一般公開	国際浮世絵学会がその前身である日本浮世絵協会から引き継いで発行してきた『浮世絵芸術』の既刊誌を、同学会の基本方針のひとつである「情報化社会の到来に即応して、世界に向けての浮世絵情報の発信源を目指す」事業の一環として、広く世界の浮世絵研究者およびその愛好者に向けて発信するためのものであると同時に「世界の日本研究者への研究協力」を目的とする国際日本文化研究センターの事業の一環として、国際浮世絵学会と国際日本文化研究センターの連携協力によって制作されたものである。	0	158	168	冊	0	1,588	2,547
怪異・妖怪画像データベース（H22年）	一般公開	絵画資料に描かれた怪異・妖怪に関する画像を集めたデータベース	0	0	3,077	件	0	1,826	2,789
鯰絵コレクション（H23年）	一般公開	日文研が所蔵する鯰絵のコレクション。 「鯰絵」とは、地底に住む大鯰が地震を起こすという伝説をテーマに書かれた錦絵である。	0	0	86	件	0	0	944
中世禅籍テクスト（H26年）	一般公開	中世禅宗関係文献を全文テクスト化して公開することを目的としたデータベース。現在は日文研所蔵の義堂周信（1325～88）の日記『空華老師日用工夫略集』の全文テクストを公開。今後は未翻刻の語録・詩文集を中心に、順次増補の予定	0	0	1,290	件	0	0	1,097
外像データベース（H9年）	登録者のみに公開	日文研が収集した外国語で書かれた日本研究図書から抽出した写真、挿し絵等の画像・書誌情報	51,805	56,911	56,913	件	2,047	3,109	1,853
古写真データベース（H9年）	登録者のみに公開	日文研が収集した江戸末期から明治中期の手彩色写真の画像・書誌情報	5,431	5,431	5,431	件	3,000	4,210	3,386
民事判決原本データベース（H12年）	登録者のみに公開	明治初期からの民事判決原本の画像・書誌情報	353,380	549,101	549,101	冊	9,199	8,376	3,187
長崎古地図データベース（H13年）	登録者のみに公開	長崎市立博物館所蔵の長崎古地図のうち221点の画像・書誌情報	141	141	141	点	1,482	2,084	1,267
艶本資料（H16年）	登録者のみに公開	近世の艶本の基本的な書誌データと全ページの高精細画像	142	524	786	件	5,784	9,054	4,673
摂関期古記録データベース（H24年）	登録者のみに公開	平安時代中期、摂関期の古記録の訓読文をデータベース化して公開し、ホームページ上で検索を行なうことができるようにしたもの	0	0	8,510	件	0	0	3,655

※利用者数：平成17年度から統計を実施

(1) 大学院教育

①総合研究大学院大学

1）概要

総合研究大学院大学は、自然科学、人文社会科学諸分野にわたる18の大学共同利用機関等を基盤機関として構成されており、それぞれの機関のもとで高度で専門的な大学院教育を行い、学術研究の新しい流れに先導的に対応できる、幅広い視野を持った国際的で独創性豊かな研究者の養成を目指しています。

日文研は、文化科学研究科国際日本研究専攻の基盤機関として、多様な研究者と優れた研究環境をもとに、国際的・学際的な視野で日本の文化と文明について教育研究を行い、高度で視野の広い国際性豊かな研究者育成を目的としています。

（ア） 在籍学生数

（単位：人）

年度	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
入学定員	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
D1（うち留学生）	5(3)	4(2)	2(1)	2(0)	4(1)	2(1)	4(2)	3(3)	2(1)	4(0)	5(2)	4(0)
D2（うち留学生）	5(2)	5(3)	4(2)	2(1)	2(0)	4(1)	2(1)	4(2)	3(3)	2(1)	4(0)	4(1)
D3（うち留学生）	5(1)	6(2)	9(4)	13(6)	13(6)	9(3)	7(1)	9(2)	11(3)	11(6)	10(7)	10(4)
計	15	15	15	17	19	15	13	16	16	17	19	18

※人数は各年度当初の数値

（イ） 入学者の状況（入学前の所属機関）

年度	所属機関名
平成16年	杏林大学大学院国際協力研究科1、早稲田大学大学院文学研究科1、高麗大学大学院日語日文研究科（韓国）1、岡山大学大学院文学研究科1、筑波大学大学院人文科学研究科1
平成17年	佛教大学大学院文学研究科1、京都府立大学文学研究科1、奈良女子大学大学院人間文化研究科1、パリ第4大学大学院人文研究科（フランス）1
平成18年	東京学芸大学大学院教育学研究科1、佐賀大学大学院教育学研究科1
平成19年	京都精華大学大学院人文学研究科1、横浜国立大学大学院教育学研究科1
平成20年	東大寺図書館東大寺史研究所1、カスヤの森現代美術館1、学習院女子大学国際文化交流研究科1、総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻研究生1
平成21年	明治大学大学院法学研究科1、総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻研究生1
平成22年	東海大学札幌校1、財団法人芸術経営支援センター1、富山大学大学院人文科学研究科1、総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻研究生1
平成23年	アテネオ・デ・マニラ大学（フィリピン）1、輔仁大学跨文化研究科比較文学コース（台湾）1、総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻研究生1
平成24年	立命館大学大学院文学研究科研修生1、総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻研究生1
平成25年	同志社大学大学院文化情報学研究科1、京都精華大学大学院人文学研究科1、学習院大学大学院人文科学研究科1、エリザベト大学大学院音楽研究科1
平成26年	大阪市立大学大学院文学研究科1、ビクトリア大学大学院太平洋・アジア研究科（カナダ）1、京都精華大学大学院人文学研究科1、デリー大学（インド）1、ルンド大学東・東南アジア地域研究センター（スウェーデン）1
平成27年	ロンドン大学大学院インターカルチュラル・スタディーズ研究科（イギリス）1、奈良女子大学大学院人間文化研究科1、同志社大学大学院神学研究科1、筑波大学大学院地域研究研究科1

（ウ） 学位取得状況

（単位：人）

種別	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
課程博士	6	0	0	3	1	3	1	2	3	2	3
論文博士	1	1	1	0	0	0	0	1	3	4	1
計	7	1	1	3	1	3	1	3	6	6	4

※学位名はすべて「学術」

④ 学生の進路

（単位：人）

種別	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
研究者	5	0	0	3	1	3	0	2	2	0	2
その他	1	0	0	0	0	0	1	0	1	2	1

2）総合研究大学院大学入学者一覧（H16～H27）

平成16年度

氏名	志望研究題目	平成16年度指導教員	
		主任指導教員	副主任指導教員
酒井　順一郎	戦時下に於ける日本の留学生政策－満州国留学生と南方特別留学生－	園田　英弘　教授	劉　建輝　助教授
澤田　晴美	現代日本文化としての古典：古典演劇の享受にみる「過去との連続性」の再考	早川　聞多　教授	笠谷　和比古　教授
金　炳辰	日朝初期社会主義者の連携－大杉栄を中心に	鈴木　貞美　教授	白幡　洋三郎　教授
姜　鶯燕	江戸幕府の家系と親族関係－中国の唐王朝との比較を中心に	笠谷　和比古　教授	園田　英弘　教授
黄　幼欣	佐藤春夫文学に見るフロンティア・スピリッツ－明清文学との交	鈴木　貞美　教授	井波　律子　教授

※志望研究題目及び指導教員は入学当時

平成17年度

氏名	志望研究題目	平成17年度指導教員	
		主任指導教員	副主任指導教員
中野　洋平	宗教者を中心とした民俗宗教の研究	小松　和彦　教授	今谷　明　教授
横山　輝樹	近世武術を基点とした日本文化の考察	笠谷和比古　教授	山田　奨治　助教授
Hayek　Matthias	中世から江戸時代までの安倍晴明のイメージ　日本における陰陽道の表象と受容	小松　和彦　教授	マルクス　リュッターマン　助教授
Korneeva Svetlana	自刃における主意と強制、公と私－切腹への社会的パースペクティブ－	園田　英弘　教授	笠谷和比古　教授

平成18年度

氏名	志望研究題目	平成18年度指導教員	
		主任指導教員	副主任指導教員
小山　周子	〈旅〉・〈観光〉をめぐる浮世絵の成立と受容	早川　聞多　教授	白幡　洋三郎　教授
梅　定娥	満州文学研究－古丁を中心に	鈴木　貞美　教授	劉　建輝　助教授

平成19年度

氏名	志望研究題目	平成19年度指導教員	
		主任指導教員	副主任指導教員
鈴木　堅弘	日本の図象表現における「笑い」と「怪異」の融合性に関する研究―近世期の図象表現を中心とした文化論の試みから―	早川　聞多　教授	小松　和彦　教授 磯前　順一　准教授
長門　洋平	日本映画音楽の現代性	細川　周平　教授	井上　章一　教授 山田　奨治　准教授

平成20年度

氏名	志望研究題目	平成20年度指導教員	
		主任指導教員	副主任指導教員
大塚　絢子	日本美術における龍モチーフの受容と変遷の再考、および、現代日本における龍イメージ	稲賀　繁美　教授	パトリシア　フィスター　教授
岡本　貴久子	「みどり」という思想 ―人はなぜ樹を植えるのか―（仮）	白幡　洋三郎 教授	瀧井　一博　准教授 光田　和伸　准教授
徳永　誓子	日本におけるシャーマニズムの展開と修験道	小松　和彦　教授	宇野　隆夫　教授 磯前　順一　准教授
陳　凌虹	文芸戯に潜まれる多様な可能性―20世紀初頭の日中演劇交流	劉　建輝　准教授	牛村　圭　教授 松田　利彦　准教授

平成21年度

氏名	志望研究題目	平成21年度指導教員	
		主任指導教員	副主任指導教員
門脇　朋裕	法制度からみた幕藩関係	笠谷　和比古 教授	末木　文未士　教授 戸部　良一　教授
楊　爽	谷崎文学の美学的研究	牛村　圭　教授	鈴木　貞美　教授 倉本　一宏　教授

平成22年度

氏名	志望研究題目	平成22年度指導教員	
		主任指導教員	副主任指導教員
漆﨑　まり	江戸歌舞伎における音曲正本の出版研究	笠谷　和比古 教授	パトリシア　フィスター　教授 安田　喜憲　教授
九里　文子	地方芸術団体におけるウィリアム・モリス受容―ユートピア運動と大正生命主義―	鈴木　貞美　教授	瀧井　一博　准教授 光田　和伸　准教授
韓　玲玲	北村謙次郎から見る「満州文学」	劉　建輝　准教授	宇野　隆夫　教授 磯前　順一　准教授
李　ユンヒ	近代日本人の朝鮮意識	稲賀　繁美　教授	牛村　圭　教授 松田　利彦　准教授

平成23年度

氏名	志望研究題目	平成23年度指導教員	
		主任指導教員	副主任指導教員
アントン　セビリア	「空の倫理学：近代日本の空哲学における悟り・修行・社会倫理の関係」	末木　文美士　教授	伊東　貴之　教授 荒木　浩　教授
簡　中昊	霧社事件に関する日中テキスト比較研究	劉　建輝　准教授	宇野　隆夫　教授 瀧井　一博　准教授
王　莞哈	明治・大正期における中国体験記研究	劉　建輝　准教授	山田　奨治　教授 ジョン　ブリーン　教授

平成24年度

氏名	志望研究題目	平成24年度指導教員	
		主任指導教員	副主任指導教員
西田　彰一	帝国日本における筧克彦の神道思想とその影響についての検討	磯前　順一　准教授	松田　利彦　准教授 瀧井　一博　准教授
栄　元	戦後日中民間交流における新聞社の役割―朝日新聞社と中国との関わりを中心に	劉　建輝　准教授	戸部　良一　教　授 井上　章一　教　授

平成25年度

氏名	志望研究題目	平成25年度指導教員	
		主任指導教員	副主任指導教員
宇佐美　智之	ユーラシア内陸環境および沿岸環境における文化の比較研究―中央アジアと日本列島周辺の人間行動に関する評価から―	井上　章一　教　授	小松　和彦　教　授 山田　奨治　教　授
小泉　友則	幼い子どもの性の歴史	井上　章一　教　授	早川　聞多　教　授 白幡　洋三郎　教　授
光平　有希	西洋音楽療法思想と近代日本における受容	フレデリック クレインス　准教授	細川　周平　教　授 牛村　圭　教　授
山村　奨	明治・大正期の陽明学の理解―井上哲次郎と石崎東国―	伊東　貴之　教　授	倉本　一宏　教　授 磯前　順一　准教授

平成26年度

氏名	志望研究題目	平成26年度指導教員	
		主任指導教員	副主任指導教員
大石　真澄	1970～80年代日本社会における科学言説のヴィジュアルイメージと受容の社会史ーテレビCMと学習図鑑を中心にー	山田　奨治　教　授	牛村　圭　教　授 井上　章一　教　授
坂　知尋	Exploring Datsueba shinko: Contributions of Itinerant Religious Practitioners and of the Perspective of Women	パトリシア フィスター　教　授	細川　周平　教　授 早川　聞多　教　授
春藤　献一	日本における動物保護法を求めた立法運動	稲賀　繁美　教　授	フレデリック クレインス　准教授 大塚　英志　教　授
PRADHAN, GOURANGA CHARAN	BUDDHIST CONCEPT OF IMPERMANENCE IN JAPANESE MEDIEVAL LITERATURE: A STORY OF HOJOKI AND TSUREZUREGUSA	荒木　浩　教　授	伊東　貴之　教　授 榎本　渉　准教授
WESTMAN, JOHAN FREDRIK	The discursive construction of contemporary Shinto–Buddhism syncretism: texts, ideology, actors and practice	ジョン ブリーン　教　授	小松 和彦　教　授 牛村　圭　教　授

平成27年度

氏名	志望研究題目	平成27年度指導教員	
		主任指導教員	副主任指導教員
片岡　真伊	Evolving Art of Translation: A Study on Edward. G. Seidensticker's Translation of Kawabata Yasunari's Literary Works	稲賀　繁美　教　授	パトリシア　フィスター　教　授 マルクス　リュッターマン　准教授
田村　美由紀	日本における手記体小説の史的展開とその方法的機構に関する研究	坪井　秀人　教　授	荒木　浩　教　授 楠　綾子　准教授
増田　斎	遠藤周作文学における身体論	坪井　秀人　教　授	磯前　順一　教　授 瀧井 一博　教　授
南　直子	Pacific Affaires にみる日本研究――太平洋問題調査会と日	牛村　圭　教　授	松田 利彦　教　授 榎本　渉　准教授

(1) 大学院教育

3)学位取得者一覧
課程博士

入学年度	氏　名	論文題目	学位授与日
平成 4年度	青木　淳	像内納入品資料に見る中世的「結衆」の特質 —快慶作例を中心とする結縁交名の総合的研究—	平成 7年 3月23日
平成 4年度	禹　鍾泰	異類婚譚にみる人格統合の象徴化—日本と韓国—	平成 8年 3月21日
平成 5年度	銭　国紅	世界像の形成—徳川日本と中国—	平成 8年 3月21日
平成 5年度	小林　博行	食の思想・安藤昌益	平成 8年 9月30日
平成 5年度	津田　順子	神歌の伝承と変成 —沖縄県宮古島狩俣集落の事例から—	平成 9年 3月24日
平成 6年度	小那覇 マリアセシリア	アルゼンチンの日本人移民の歴史 —自由移民と日系社会形成—	平成 9年 3月24日
平成 6年度	多田　伊織	日本靈異記の研究	平成 9年 3月24日
平成 6年度	嘉本伊都子	「国際結婚」の歴史社会学的研究-1636～1899-	平成 9年 9月30日
平成 6年度	鈴木　則子	日本近世社会と病—癩医学の展開をめぐって	平成 9年 9月30日
平成 7年度	加藤　善朗	当麻曼荼羅講讃と中世浄土教	平成11年 3月24日
平成 7年度	土居　浩	無縁墓地の系譜	平成11年 3月24日
平成 7年度	バルト ガーンス	The Organization of Merchant Houses in Tokugawa Japan -a Comparison with the Low Countries-	平成11年 3月24日
平成 8年度	申　昌浩	韓国的ナショナリズム形成における宗教と政治 —東学・親日仏教・改新教(プロテスタント)の分析を通じて—	平成12年 3月24日
平成 8年度	尾鍋　智子	絶対透明の探究：遠藤高環著『写法新術』の研究	平成13年 9月28日
平成 8年度	平井　晶子	家とライフコースの歴史社会学 —近世東北農村の歴史人口学的分析—	平成14年 3月22日
平成 9年度	戦　暁梅	富岡鉄斎の画風についての思想的、藝術的考察 —鉄斎画の賛文研究を通じて—	平成13年 3月23日
平成 9年度	武内恵美子	歌舞伎演奏者の楽師論的研究 —近世上方を中心として	平成16年 9月30日
平成10年度	唐　権	海を越えた艶事 —中国と日本の人的交流 1684-1894—	平成14年 3月22日
平成10年度	小川　順子	チャンバラ映画における「殺陣」	平成16年 3月24日
平成10年度	松村　薫子	糞掃衣の研究 —福田会の事例を中心に—	平成16年 3月24日
平成10年度	片平　幸	〈日本庭園〉像の形成と解釈の葛藤：英語圏の眼差しと日本側の応答（1868～1940）	平成16年 9月30日
平成11年度	森本　一彦	半檀家にみる「家」の歴史的展開 —宗門改帳の数量的分析	平成15年 3月24日
平成11年度	伊藤奈保子	インドネシア宗教史における鋳造像・法具の展開 —日本との比較—	平成16年 9月30日
平成12年度	永松　敦	日本における狩猟民俗の生成と変遷に関する歴史民俗学的研究	平成15年 3月24日
平成12年度	伊東　章子	科学・技術をめぐる言説の歴史的展開とナショナル・アイデンティティの変容—両大戦間期以降を概観して	平成15年 9月30日
平成12年度	ウリケル バハドゥルボアチ	Napoleon Wars and International Sysytem：with Special Reference to the Ottoman Empire and Japan	平成17年 3月24日
平成13年度	那須　浩郎	The origin and dispersal of agriculture in China and Japan - Archaeobotanical study of Chengtoushan site, Hunan, China -	平成16年 3月24日
平成13年度	岩井　茂樹	歌道と茶道における恋歌の諸問題 —その歴史的展開と社会的背景について	平成16年 9月30日
平成13年度	中谷　正和	物質文化からみた先史東アジアの調理技術 —農耕社会成立期における中国大陸沿岸部と日本列島の事例を中心として—	平成17年 3月24日
平成13年度	武藤　秀太郎	近代日本の社会科学と東アジア	平成20年 3月19日
平成15年度	李　偉	大名庭園の空間構成に関する研究 —江戸時代の庭園における「眺望」—	平成20年 3月19日
平成15年度	堀　まどか	野口米次郎 —「二重国籍」詩人の生涯と作品世界	平成21年 9月30日
平成15年度	戸矢　理衣奈	「東京銀座資生堂」：福原信三と企業イメージの構築	平成22年 9月30日

(1) 大学院教育

入学年度	氏　名	論文題目	学位授与日
平成16年度	酒井　順一郎	清国人日本留学生に於ける教育文化交流 —宏文学院を中心にして—	平成20年 3月19日
平成16年度	澤田　晴美	近代日本文化における伝統演劇と近松門左衛門 —アカデミズム・劇評・役者の身体—	平成21年 3月24日
平成17年度	中野　洋平	信濃巫女の研究 —近世日本における民間宗教者の存在形態とその形成	平成22年 3月24日
平成17年度	横山　輝樹	江戸幕府武芸奨励策の研究—画期としての徳川吉宗—	平成25年 3月22日
平成18年度	梅　定娥	「満洲国」文化人古丁の思想的変遷をさぐる —翻訳、創作、出版	平成22年 3月24日
平成18年度	小山　周子	大正新版画の研究－版元を中心とした美術の成立、構造と展開	平成26年 3月20日
平成19年度	長門　洋平	溝口健二映画にみる音響と映像の美学 —物語構造の視聴覚的分析	平成24年 3月23日
平成19年度	鈴木　堅弘	近世春画・春本の図像研究—その背景表現への考察—	平成24年 9月28日
平成20年度	陳　凌虹	中国近代演劇の成立と日本 —文明戯と新派を中心に	平成24年 3月23日
平成20年度	徳永　誓子	「融通念仏縁起」の研究—物語絵にみる日本中世の信仰世界—	平成25年 3月22日
平成20年度	岡本　貴久子	「記念植樹」と近代日本　－林学者本多静六の思想と事績を手掛かりに－	平成26年 3月20日
平成22年度	漆崎　まり	江戸長唄の基礎的研究	平成26年 9月29日
平成22年度	韓　玲玲	満州における北村謙次郎の文学活動	平成26年 3月24日
平成23年度	アントン・ルイス・カピストラノ・セビリア	Exporting the Ethics of Emptiness : Applications,Limitations,and Possibilities of Watsuji Tetsurō's Ethical System	平成27年 3月24日

(1) 大学院教育

論文博士

氏　名	論文題目	学位授与日
王　勇	聖徳太子と中国文化―歴史を動かした慧思後身説	平成 8年 9月30日
シワニ　ナンディ	Socio-Technological Issues of Technology Transfer A Specific Case Study of the Maruti-Suzuki Collaboration	平成 9年 3月24日
マノジ　L. シュレスタ	企業の多国籍化と技術移転―ポスト雁行形態の経営戦略	平成 9年 3月24日
鈴木　貞美	梶井基次郎研究	平成 9年 3月24日
伊藤　賢次	東アジアにおける日本企業の経営 ―経営のグローバル化と「日本的経営」の移転―	平成10年 3月24日
北川　勝彦	日本―南アフリカ通商関係史研究	平成11年 3月24日
胡口　靖夫	近江朝と渡来人―百済鬼室氏を中心として―	平成11年 3月24日
高田　康孝	生活文化と世相の変容にかんする研究 ―20世紀日本における高度経済成長期を中心に―	平成11年 3月24日
濱口　惠俊	日本研究原論 ―「関係体」としての日本人と日本社会	平成11年 9月30日
チャオ 埴原　三鈴	Japan Literacy in Australia – A Changing Demand over Eighty Years –	平成13年 9月28日
北川　淳子	The Nature and Development of Chestnut (Castanea crenata) and Horse Chestnut (Aesculus turbinata) Culture in Japan	平成16年 9月30日
岡村　敬二	日満文化協会の歴史―創設から解散まで―	平成18年 3月24日
香川　雅信	日本人の妖怪観の変遷に関する研究 ―近世後期の「妖怪娯楽」を中心に―	平成18年 9月29日
山口　欧志	古代社会の景観考古学的研究 ―遺跡のデジタルドキュメンテーションと景観分析―	平成23年 9月30日
姜　鶯燕	徳川幕臣の身分的変容に関する研究 ―いわゆる「御家人株の売買」の問題を中心に―	平成24年 9月28日
柴田　依子	ポール＝ルイ・クーシューと日本―その生涯とフランスにおける俳句受容	平成25年 3月22日
野呂田　純一	幕末・明治の美意識と美術政策	平成25年 3月22日
青野　正明	朝鮮総督府の神社政策と国家神道の論理一1930年代を中心に一	平成26年 3月20日
根川　幸男	戦前・戦中期ブラジルにおける日系移民子弟教育の史的研究	平成26年 3月20日
金　炳辰	革命的サンディカリスト大杉栄一「生の創造」に基づいた革命展望一	平成26年 3月20日
コルネーエヴァ　スヴェトラーナ	江戸時代前期の喧嘩口論事件の処理に関する歴史社会学的考察一盛岡藩と加賀藩の事例を中心に一	平成26年 3月20日
石川　肇	舟橋聖一論－「抵抗の文学」を問い直す	平成27年 3月24日

(1) 大学院教育

②特別共同利用研究員

1）概要

大学共同利用機関は、それぞれの機関が目的とする研究等を行うほか、国公私立大学の要請に応じ大学院における教育研究に協力しております。

日文研では、大学院学生のうち日本文化及びこれに関連する分野の専攻者を「特別共同利用研究員」として受入れ、必要な研究指導を行っています。

◯主なメリット

研究指導が受けられます
豊富な資料を利用できます
多様な研究会に参加できます
総合研究大学院大学の授業を聴講できます

◯受入対象

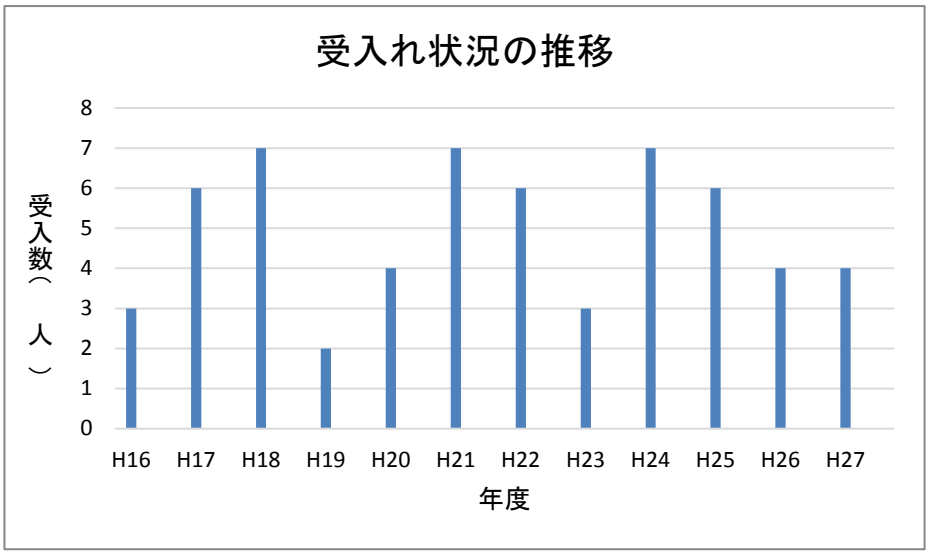
原則として、大学院博士課程（前期2年及び後期3年の課程に区分する博士課程にあっては、後期3年の課程）に在籍し、日本文化及びこれに関連する分野を専攻する者

◯受入期間

４月受入と10月受入になります。受入れの期間は、原則として1年以内とし、特別共同利用研究員の研究状況により、当該大学院の申出があった場合、所内審査のうえ、その期間を1年に限り延長することができます。

特別利用共同研究員の受入れ状況　（単位：人）

年度	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	合計
受入数	3	6	7	2	4	7	6	3	7	6	4	4	59



2）特別利用共同研究員一覧（H17～H27）

年度	氏名	受託希望研究内容	受入教員　職名	受入開始　受入終了	所属大学院研究科	備　考
平成17年度	松友　知香子	近代の造形芸術における「色彩と造型性」	稲賀　繁美　教授	平成17年4月1日　～　平成18年3月31日	大阪大学大学院文学研究科 後期課程	
	平松　隆円	「男性の化粧意識と化粧行動に関する文化的研究」	井上　章一　教授	平成17年4月1日　～　平成18年 3月31日	佛教大学大学院教育学研究科 博士後期課程	
	山口　欧志	歴史的空間情報の解析・解釈法の確立	宇野　隆夫　教授	平成17年4月1日　～　平成18年3月31日	中央大学大学院文学研究科 博士後期課程	
	小林　久高	日本における生活空間の民俗的な視点からの分析	小松　和彦　教授	平成17年10月1日　～　平成18年9月30日	筑波大学大学院人間総合科学研究科 博士課程	
	金　珉樍	これまで文字(ハングルとひらがな)の造形的な面を題材として制作や論文を進めてきた。文字や芸術文化につながる理論的背景をより深く理解・比較・研究することを希望している。	稲賀　繁美　教授	平成17年10月1日　～　平成18年9月30日	東京学芸大学大学院教育学研究科 修士課程	
	村田　和美	『解体新書』を中心とした日本語彙交流	劉　建輝　助教授	平成17年10月1日　～　平成18年9月30日	明海大学大学院応用言語学研究科 博士後期課程	
平成18年度	平松　隆円	従来の男性を対象とした化粧文化研究では、主に高度成長期以降が中心であり、中・近世の白粉・爪紅などの化粧はあまり注目されてこなかった。当大学院生は、平成17年度特別共同利用研究員として、男性化粧の研究をすすめ、特に院政期において男性が政治的に躍進するために権力者の男色の相手となり、そのために美しくなることが必要であり化粧を行ったことなどを明らかにした。本研究では引き続き、男色との関連における化粧の内容や歴史的展開について調査・研究を行ない、より具体的な男性化粧の研究を行なうことを目的とする。	井上　章一　教授	平成18年4月 1日　～　平成19年3月31日	佛教大学大学院教育学研究科博士後期課程 （平成17年4月入学）	平成17年4月1日より継続
	松友　知香子	色彩の造形性について	稲賀　繁美　教授	平成18年4月 1日　～　平成19年3月31日	大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 （平成15年4月入学）	平成17年4月1日より継続
	平井　芽阿里	社会・経済的要因や価値基準の変化によって、変容しつつある村落祭祀に着目し、それがいかに適応するのかという過程から民間信仰の諸相を捉える。	小松　和彦　教授	平成18年4月 1日　～　平成19年3月31日	立命館大学大学院文学研究科博士後期課程 （平成17年4月入学）	
平成18年度	鈴木　堅弘	大津絵を民芸という視点だけではなく、民俗学や宗教学を含めた多角度的な学問視野に立つことで、大津絵を江戸時代の文化史としてとらえる研究をすすめています。また、大津絵を生活文化や風土からも考え、ユーモラスな画風の発生と変遷の要因を研究しています。	早川　聞多　教授	平成18年4月 1日　～　平成19年3月31日	京都精華大学大学院人文学研究科修士課程 （平成17年4月入学）	
	曽我　とも子	日本の歴史（特に平安期）において風水地理学的な関わりはどのようなものであったのか	千田　稔　教授	平成18年10月1日　～　平成19年3月31日	兵庫教育大学大学院学校教育研究科 （平成17年4月修士課程入学）	

年度	氏名	受託希望研究内容	受入教員　職名	受入開始　受入終了	所属大学院研究科	備　考
平成18年度	溝渕　久美子	日本における「文芸映画」の変遷と「文学」の変遷との関係	鈴木　貞美　教授	平成18年10月1日　～　平成19年9月30日	名古屋大学大学院人間情報学研究科 （平成14年4月博士後期課程進学）	
	南　誠	第二次世界大戦後、満州移民や中国帰国者をめぐる日中間の交流を明らかにしつつ、満州をめぐる文化的記憶の変遷と両国での受容を比較分析すること	劉　建輝　助教授	平成18年10月1日　～　平成19年9月30日	京都大学大学院人間・環境学研究科 （平成15年4月博士後期課程編入学）	
平成19年度	平井　芽阿里	近年各地で衰退化する村落祭祀を護る担い手に着手し、何故彼らが村落祭祀を継続することに力を注ぐのか、その要因を導き出すこと。	小松　和彦　教授	平成19年4月1日　～　平成20年3月31日	立命館大学大学院文学研究科博士後期課程 （平成17年4月入学）	
	吉本　弥生	武者小路実篤の西洋・東洋美術を中心に作品に表現される芸術家を分析し、他の白樺派作家との比較検討を試みる。その際、表現形式としての小説・戯曲からのアプローチも視野に入れ、作品世界と生命観を総合的に探求する。	鈴木　貞美　教授	平成19年10月1日　～　平成20年9月30日	大手前大学大学院文学研究科博士後期課程 （平成14年4月1日入学）	
平成20年度	小泉　祐貴子	露地空間における「香り風景」及びその体験に関して、文化的意義についての考察を行う。	白幡　洋三郎　教授	平成20年4月1日　～　平成21年3月31日	京都造形芸術大学大学院芸術研究科博士後期課程	
	宮崎　康子	バタイユのユートピア論からみる日本の近代教育学と子ども文化	小松　和彦　教授	平成20年4月1日　～　平成20年7月31日	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 （平成15年4月1日進学） 2008年7月31日付け京都大学大学院教育学研究科退学	
	王　莞晗	明治時代における満州受容	劉　建輝　准教授	平成20年10月1日　～　平成21年9月30日	広島大学大学院文学研究科博士前期課程	
	陸　艶	日本近代文学を通した日中文化交流	鈴木　貞美　教授	平成20年10月1日　～　平成21年9月30日	佛教大学大学院文学研究科博士後期課程 （平成20年4月1日入学）	
平成21年度	郷堀　ヨゼフ	「あの世」とのスピリチュアリティの絆(spiritual bonds)が高齢者や若い世代への生き方観へ及ぼす影響や関連について研究・考察すること	小松　和彦　教授	平成21年4月1日　～　平成22年3月31日	兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 博士課程 (平成20年4月1日入学)	
	黄　海玉	日本の文化を「和」の文化とすることの所以を神仏儒習合の視点から体系的に究明すること	笠谷 和比古　教授	平成21年4月1日　～　平成22年3月31日	佛教大学大学院教育学研究科 博士後期課程 (平成18年4月1日入学)	
	山口　理沙	茶書にみる教育論の研究	山田　奨治　准教授	平成21年4月1日　～　平成22年3月31日	青山学院大学大学院文学研究科 博士後期課程 （平成18年4月入学）	

年度	氏名	受託希望研究内容	受入教員　職名	受入開始　受入終了	所属大学院研究科	備　考
平成21年度	須藤　遙子	戦後文化政策史を批判的に検証し、日本語・英語の論文としてまとめること	鈴木　貞美　教授	平成21年4月1日　～　平成22年3月31日	横浜市立大学大学院国際総合科学研究科 博士後期課程 （平成20年4月1日入学）	平成24年6月10日付辞退
	菅　良樹	幕末期における大坂城代の研究及び譜代小藩の研究	笠谷 和比古　教授	平成21年4月1日　～　平成22年3月31日	兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 博士課程 （平成19年4月1日入学）	
	神田　英昭	日本近代仏教における思想の展開、特に真言僧土宜法龍の役割について	磯前　順一　准教授	平成21年4月1日　～　平成22年3月31日	高野山大学大学院文学研究科 博士後期課程 （平成20年4月7日入学）	
	冨岡　直樹	備陽国学記録（池田家文庫）の判読、近世教育思想史、日本近世庶民史について	笠谷　和比古　教授	平成21年10月1日　～　平成22年9月30日	明星大学大学院人文学研究科 博士後期課程（通信課程） （平成20年4月1日入学）	
平成22年度	金　晶	谷崎潤一郎作品に関する比較文学的研究	劉　建輝　准教授	平成22年4月1日　～　平成23年3月31日	大阪大学大学院言語文化研究科 博士後期課程 （平成20年4月1日入学）	
	坂井　祐円	仏教思想にみる他者・死者の問題	末木 文美士　教授	平成22年4月1日　～　平成23年3月31日	京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 （平成21年4月1日編入学）	
平成22年度	小田島　建己	奉納物を通じた〈死者の結婚〉習俗の研究	井上章一　教授	平成22年4月1日　～　平成23年3月31日	東北大学大学院文学研究科 博士後期課程 （平成20年4月1日編入学）	
	郷堀　ヨゼフ	「あの世」とのスピリチュアリティの絆(spiritual bonds)が高齢者や若い世代への生き方観へ及ぼす影響や関連について研究・考察すること	小松和彦　教授	平成22年4月1日　～　平成23年3月31日	兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 博士課程 （平成20年4月1日入学）	平成21年4月1日より継続
	大和田　範子	美術史におけるオリエンタリズムとジャポニズムの影響と、茶の動きの関係について	稲賀繁美　教授	平成22年10月1日　～　平成23年9月30日	大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程 （平成21年4月1日入学）	
	滝本　シゲ子	日本における狂気をめぐる諸制度の歴史的研究	井上章一　教授	平成22年10月1日　～　平成23年3月31日	大阪大学大学院国際公共政策研究科 博士後期課程 （平成21年10月1日入学）	

年度	氏名	受託希望研究内容	受入教員	職名	受入開始	受入終了	所属大学院研究科	備　考
平成23年度	坂井　祐円	仏教思想にみる他者・死者の問題	末木 文美士	教授	平成23年4月1日	平成24年3月31日	京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 （平成21年4月1日編入学）	平成22年4月1日より継続
	水野　杏紀	関連文献の植物の記載に関する文化史的考察	白幡 洋三郎	教授	平成23年4月1日	平成24年3月31日	大阪府立大学大学院人間社会学研究科 博士後期課程 （平成19年4月1日入学）	
	玉田　沙織	説話作品の形成について，研究の国際的展開について	荒木　浩	教授	平成23年10月1日	平成24年9月30日	名古屋大学大学院文学研究科 博士後期課程 (平成18年4月1日入学)	平成24年3月末、博士課程修了のため辞退
平成24年度	太田　貴大	自然と人との関係で特徴付けられる文化財や遺跡に対する主観的価値を定量的に把握する手法の開発	宇野隆夫	教授	平成24年4月1日	平成24年9月30日	名古屋大学大学院工学研究科 博士後期課程	
	市川　寛也	現代の地域社会における妖怪文化の受容に関する研究 妖怪を対象とする博士論文に向けた研究方法の妥当性	小松和彦	所長	平成24年4月1日	平成25年3月31日	筑波大学大学院人間総合科学研究科 博士後期課程 （平成23年4月1日入学）	
平成24年度	田畑　理恵	前衛書と書道教育について	稲賀繁美	教授	平成24年4月1日	平成25年3月31日	東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 博士後期課程	
	野村　晋作	近世の国制と天皇、朝幕問題	笠谷和比古	教授	平成24年4月1日	平成25年3月31日	立正大学大学院文学研究科 博士後期課程	
	光平　有希	西洋のみならず、日本を含む東洋にも多大な影響を与えたと考えられる「機械論医学」の原典研究	フレデリック・クレインス	准教授	平成24年4月1日	平成25年3月31日	エリザベト音楽大学大学院音楽研究科 博士後期課程	
	山本　冴里	ポップカルチャーを巡って交錯する/せめぎあう境界―ルポルタージュ「日本マニアの幾つかの肖像」へのコメント分析―	山田奨治	教授	平成24年4月1日	平成25年3月31日	早稲田大学大学院日本語教育研究科 博士後期課程	
	横山　考之輔	文芸作品による言説史の方法	井上章一	教授	平成24年4月1日	平成25年3月31日	立正大学大学院文学研究科 博士後期課程	

年度	氏名	受託希望研究内容	受入教員　職名	受入開始　受入終了	所属大学院研究科	備　考
平成25年度	市川　寛也	現代の地域社会における妖怪文化の受容に関する研究 妖怪を対象とする博士論文に向けた研究方法の妥当性	小松和彦　所長	平成25年4月1日　～　平成26年3月31日	筑波大学大学院人間総合科学研究科 博士後期課程 （平成23年4月1日入学）	平成24年4月1日より継続
	深堀　彩香	キリシタン時代におけるイエズス会の宣教活動に関する音楽についての研究	細川周平　教授	平成25年4月1日　～　平成26年3月31日	愛知県立芸術大学大学院音楽研究科 博士後期課程 （平成25年4月1日入学予定）	
	星野　和幸	1.盲僧の宗教活動の儀礼としての形と、そこで用いられる音楽の形成や変容、儀礼における音楽の意味についての研究。 2.かつて民衆の娯楽を目的とした盲僧の芸能活動の内容とあり方についての、残されている録音資料を用いた音楽学的研究。	細川周平　教授	平成25年4月1日　～　平成26年3月31日	武蔵野音楽大学大学院音楽研究科 博士後期課程 （平成23年4月1日入学）	
	水内　勇太	近代日本における宗教言説・概念の研究	磯前順一　准教授	平成25年4月1日　～　平成26年3月31日	同志社大学大学院文学研究科 博士後期課程 （平成25年4月1日入学予定）	
平成25年度	川西　孝男	聖杯騎士伝説の日本伝播に関する調査研究	笠谷和比古　教授	平成25年4月1日　～　平成26年3月31日	関西学院大学大学院総合政策研究科 博士後期課程 （平成25年4月1日入学）	
	魏　晨	「満洲国」の児童文学についての歴史的考察――満鉄社員会機関誌「協和」を中心に	劉建輝　教授	平成25年10月1日　～　平成26年9月30日	名古屋大学大学院文学研究科 博士後期課程	
平成26年度	魏　晨	「満洲国」の児童文学についての歴史的考察――満鉄社員会機関誌「協和」を中心に	劉建輝　教授	平成25年10月1日　～　平成26年9月30日	名古屋大学大学院文学研究科 博士後期課程	平成25年10月1日に受入
	川西　孝男	聖杯騎士伝説の日本伝播に関する調査研究	笠谷和比古　教授	平成26年4月1日　～　平成27年3月31日	関西学院大学大学院総合政策研究科・博士後期課程	平成25年4月1日より継続
	池田　菜採子	Bernard　Blochが著した日本語テキスト*Spoken Japanese*の付属資料である音声テープの研究	ジョン　ブリーン　教授	平成26年4月1日　～　平成27年3月31日	金城学院大学大学院文学研究科・博士後期課程	
	田中　和夫	『教行信証』と冥衆の働き	末木文美士　教授	平成26年4月1日　～　平成27年3月31日	広島大学大学院総合科学研究科・博士後期課程	

年度	氏名	受託希望研究内容	受入教員　職名	受入開始　受入終了	所属大学院研究科	備　考
平成27年度	延田　リサ	インターネットメディアとツーリズムの関係性について旅行者はどのように情報を享受し、共有・伝達するのか	山田　奨治　教授	平成27年4月1日　～　平成28年3月31日	京都大学大学院 人間・環境学研究科・博士後期課程	
	瀧戸　彩花	音楽を取り巻く人々のコミュニケーションとアイデンティティの表出：カバー音楽を事例に	細川　周平　教授	平成27年4月1日　～　平成28年3月31日	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科・博士後期課程	
	李　有姫	近代日本の音楽文化	細川　周平　教授	平成27年4月1日　～　平成28年3月31日	大阪大学大学院 言語文化研究科・博士後期課程	
	小林　善帆	植民地期朝鮮における教育・文化	松田　利彦　教授	平成27年4月1日　～　平成28年3月31日	名古屋大学大学院 文学研究科・博士後期課程	

※一覧については資料のある平成17年度以降に限る

①若手研究者の割合

	H23			H24			H25			H26			H27		
	39歳以下	40歳以上	若手割合	39歳以下	40歳以上	若手割合	39歳以下	40歳以上	若手割合	39歳以下	40歳以上	若手割合	39歳以下	40歳以上	若手割合
機関研究員	5	1	83%	5	1	83%	4	2	67%	5	2	71%	1	5	17%
プロジェクト研究員	1	4	20%	0	4	0%	1	3	25%	1	3	25%	0	2	0%
外国人研究員	－	－	－	－	－	－	2	27	7%	1	27	4%	0	16	0%
外来研究員（学振特別研究員）	2	0	100%	3	0	100%	2	0	100%	3	0	100%	4	1	80%
外来研究員（学振外国人研究員）	－	－	－	1	3	25%	4	0	100%	2	0	100%	0	1	0%
外来研究員（AHRC）	1	0	100%	1	0	100%	2	1	67%	2	1	67%	2	0	100%
外来研究員（博報財団）	／	／	／	／	／	／	／	／	／	1	0	100%	3	0	100%
外来研究員（交流基金、来訪研究員）	－	－	－	2	16	11%	1	25	4%	4	25	14%	0	7	0%
計	9	5	64%	12	24	33%	16	58	22%	19	58	25%	10	32	24%

※　統計については資料のある平成23年度以降に限っている。
※　外来研究員（博報財団）は、平成26年度開始事業である。

(2) 若手研究者の受入れ

②一覧

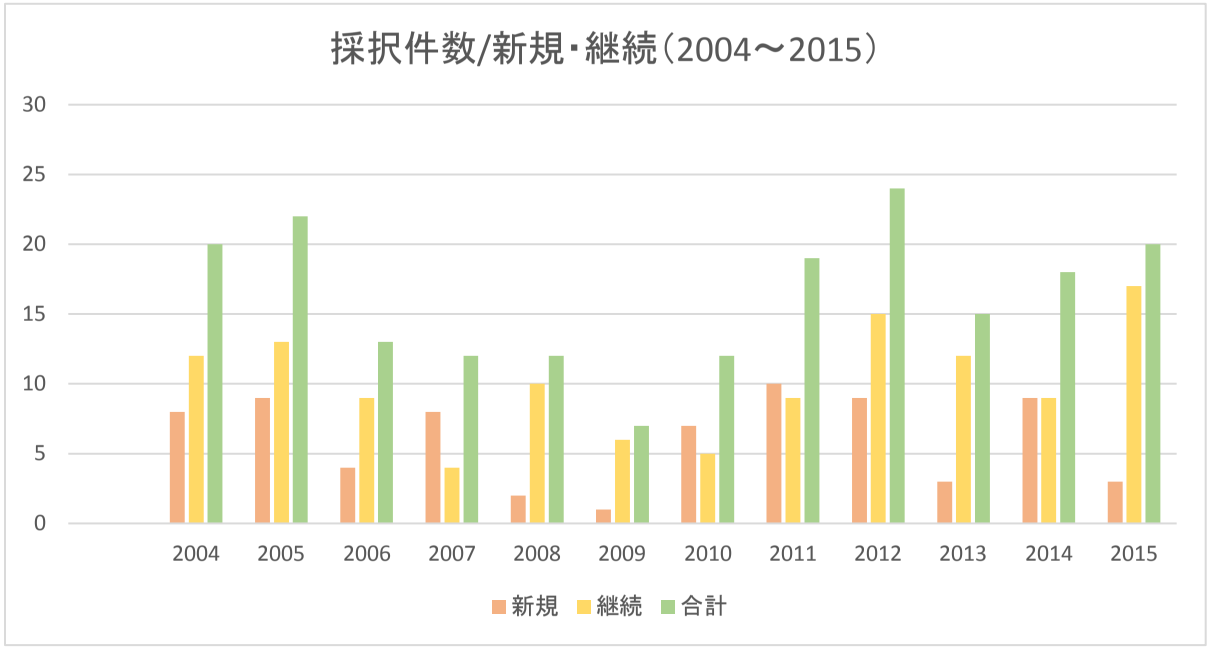
職　名	氏　名	在任期間		
研究機関研究員（講師）	那須　浩郎	2004/4/1	～	2006/3/31
	伊東　章子	2004/4/1	～	2005/10/7
	金子　晋右	2004/4/16	～	2006/3/31
	宮田　昌明	2004/10/13	～	2006/3/31
	小川　順子	2005/4/1	～	2006/3/31
	片平　幸	2005/4/1	～	2006/3/31
	松村　薫子	2005/4/1	～	2006/3/31
機関研究員	松村　薫子	2006/4/1	～	2007/3/31
	片平　幸	2006/4/1	～	2007/3/31
	中谷　正和	2006/4/1	～	2008/3/31
	井出　文紀	2007/4/1	～	2009/3/31
	永原　順子	2007/4/1	～	2009/3/31
	町田　香	2007/4/1	～	2010/3/31
	山口　欧志	2008/4/1	～	2011/3/31
	山田　和芳	2008/4/1	～	2009/2/15
	平松　隆円	2008/4/1	～	2011/3/31
	李　偉	2008/4/1	～	2009/3/31
	飯倉　義之	2009/4/1	～	2012/3/31
	松村　博行	2009/4/1	～	2011/3/31
	小都　晶子	2009/4/1	～	2011/3/31
	堀　まどか	2010/4/1	～	2013/2/28
	寺村　裕史	2011/4/1	～	2012/12/31
	田村　太一	2011/4/1	～	2012/3/31
	朴　美貞	2011/4/1	～	2014/3/31
	益満　まを	2011/4/1	～	2014/3/31
	長門　洋平	2012/4/1	～	2015/3/31
	中野　洋平	2012/4/1	～	2014/4/30
	徳永　誓子	2013/4/1	～	
	姜　鶯燕	2013/4/1	～	2015/3/31
	中町　美香子	2014/4/1	～	
	丹下　暖子	2014/4/1	～	2015/3/31
	陳　其松	2014/6/1	～	
	石川　肇	2015/4/1	～	
	杉田　智美	2015/4/1	～	
	漆崎　まり	2015/4/1	～	
プロジェクト研究員	井口　かおり	2006/7/1	～	2008/3/31
	BASKIND James	2006/8/1	～	2009/2/28
	名越　万里子	2008/9/1	～	2009/9/30
	中西　和子	2009/6/1	～	2011/3/31
	北川　淳子	2009/10/1	～	2014/3/31
	藤木　利之	2009/10/1	～	2012/3/31
	LI Xun	2009/10/1	～	2010/3/31
	野嶋　洋子	2009/11/1	～	2014/3/31
	梅　定娥	2010/4/1	～	2010/7/31
	朴　美貞	2010/5/1	～	2011/3/31
	石川　肇	2010/8/1	～	2015/3/31
	箕浦　尚美	2011/7/1	～	2013/3/31
	丹下　暖子	2013/8/1	～	2014/3/31
	久米　舞子	2014/4/1	～	2015/3/31
	陳　其松	2014/4/1	～	2014/5/31
	朴　美貞	2014/4/1	～	
	松村　薫子	2014/6/1	～	

①2004～2015年度　科学研究費採択件数（新規／継続）

種別	2004		2005		2006		2007		2008		2009		2010		2011		2012		2013		2014		2015	
	新規	継続	新規	継続	新規	継続	新規	継続	新規	継続	新規	継続	新規	継続	新規	継続	新規	継続	新規	継続	新規	継続	新規	継続
基盤S					1	0	0	1	0	1	0	1	0	1										
基盤A	2	3	0	5	0	3	2	0	0	2	0	2	1	2	0	2	0	1	1	0	0	1	0	1
基盤B	1	1	1	1	1	1	0	1	0	1					1	0	0	2			1	0		
基盤C	1	0	1	1	1	1	1	1	0	1			2	0	4	3	3	7	2	8	3	7	0	5
挑戦的萌芽													1	0	1	1	2	1	0	1	3	0	0	3
若手A									1	0	0	1												
若手B			3	0	1	1	1	0	1	1	1	1	0	2	1	1	3	1	0	1			0	5
研スタ							1	0	0	1			1	0	0	1								
奨励研究															1	0								
公開促進	1	2	1	2	0	1	0	1	0	0							1	0					1	0
特別研究員奨励費	3	6	3	4	0	2	3	0	0	3	0	1	2	0	2	1	0	3	0	2	2	1	2	3
小計	8	12	9	13	4	9	8	4	2	10	1	6	7	5	10	9	9	15	3	12	9	9	3	17
合計	20		22		13		12		12		7		12		19		24		15		18		20	

年度別の採択件数の抜粋（新規／継続）

年度	新規	継続	合計
2004	8	12	20
2005	9	13	22
2006	4	9	13
2007	8	4	12
2008	2	10	12
2009	1	6	7
2010	7	5	12
2011	10	9	19
2012	9	15	24
2013	3	12	15
2014	9	9	18
2015	3	17	20



②科学研究費一覧

平成16（2004）年度

研究種目		研究代表者	研究課題	課題番号	研究期間	配分額（千円）	
						直接経費	間接経費
基盤A（1）	一般	小松　教授	怪異・妖怪文化資料を素材とした計量民俗学の構築と分析手法の開発に関する研究	15202026	H15～H18	8,000	2,400
	一般	千田　教授	東アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過程	16202023	H16～H18	9,000	2,700
基盤A（2）	一般	園田　教授	グローバル時代における「文明」間の衝突・融合・共存に関する総合的研究	15201056	H15～H17	10,300	3,090
	一般	ﾊﾞｸｽﾀｰ 教授	アジア太平洋地域におけるグローバライゼイション、ローカライゼイションと日本文化：その研究の過去・現在・未来	15202016	H15～H17	6,200	1,860
	一般	山田　助教授	前近代日本の諸概念を対象にした知識発見のためのマイニング資源の開発	16200018	H16～H18	10,700	3,210
基盤B（1）	一般	宇野　教授	GISシステムを用いた考古空間情報の高度解析法の開発研究	14310193	H14～H16	5,000	
	一般	稲賀　教授	工芸における伝統と革新：京都を中心とした職人産業の歴史的変遷と現状分析	16320023	H16～H18	5,100	
基盤C（2）	一般	渡邊　助教授	コミュニケーションの2つのスタイル －新たな選択肢としてのフランス小学校の市民教育と国語教育－	16530558	H16～H18	1,400	
研究成果公開促進費（データベース）	一般	合庭　教授	民事判決原本データベース（民事判決原本データベース作成協議会）	168136	H16	34,900	
	一般	宇野　教授	平安京・京都遺跡GISデータベース（平安京・京都遺跡GISデータベース作成委員会）	168035	H16	4,300	
	一般	小松　教授	怪異・妖怪伝承データベース（怪異・妖怪伝承データベース作成委員会）	168013	H16	3,400	
計11件						98,300	13,260

特別研究員奨励費	宮武　実知子	近代日本における「世論」の歴史社会学－慰霊・顕彰施設を手がかりに－	1334	H15～H17	1,100	
	中山　和久	巡礼における創造と実践の相互交渉に関する実証的研究	1344	H15～H17	700	
	四方田　雅史	戦間期日本・東アジアの経済制度比較－雑貨製造業と商人ネットワークを中心に－	1345	H15～H17	700	
	輪島　裕介	音楽における「自文化」と「異文化」の境界とその再編成	3191	H15～H17	1,100	
	今田　健太郎	日本のトーキー映画の音楽－メディア、言説、視聴覚体験の相互作用	4252	H16～H18	800	
	眞嶋　亜有	近代日本における身体の「西洋化」と其の人種的側面を巡る社会・文化史研究	4781	H16～H18	1,200	
	RIGGS　David　E（小松）	徳川時代の禅宗における戒律と受戒の役割に関する研究	02951	H15～H16	800	
	戦　暁梅（劉）	日本近代美術の発展における「非西洋的」要素についての考察　－近代画家の旧「満州」体験を中心に－	03004	H15～H16	800	
	VESEY, A, M（Baxter）	僧職者たちの特異な社会的地位と僧職制度が近世村落社会の政治権威及び社会・文化的なシステムに及ぼした影響を探る。	04906	H16～H17	800	

平成17（2005）年度

研　究　種　目		研究代表者	研　　究　　課　　題	課題番号	研究期間	17年度	
						直接経費	間接経費
基盤研究(A)	一般	小松　　教授	怪異・妖怪文化資料を素材とした計量民俗学の構築と分析手法の開発に関する研究	15202026	H15～H18	9,200	2,760
	一般	千田　　教授	東アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過	16202023	H16～H18	8,400	2,520
	一般	園田　　教授	グローバル時代における「文明」間の衝突・融合・共存に関する総合的研究	15201056	H15～H17	11,800	3,540
	一般	ﾊﾞｸｽﾀｰ 教授	アジア太平洋地域におけるグローバライゼイション、ローカライゼイションと日本文化：その研究の過去・現在・未来	15202016	H15～H17	7,400	2,220
	一般	山田　　助教授	前近代日本の諸概念を対象にした知識発見のためのマイニング資源の開発	16200018	H16～H18	9,600	2,880
基盤研究(B)	一般	稲賀　　教授	工芸における伝統と革新：京都を中心とした職人産業の歴史的変遷と現状分析	16320023	H16～H18	2,800	
	海外	宇野　　教授	中国陝西省における先端技術を用いた漢代陵墓と都城の総合的調査研究	17401028	H17～H20	4,800	
基盤研究(C)	一般	渡邊　　助教授	コミュニケーションの2つのスタイル－新たな選択肢としてのフランス小学校の市民教育と国語教育－	16530558	H16～H18	900	
	一般	細川　　助教授	日本のジャズ研究序説－近代化と大衆文化－	17520102	H17～H20	1,100	

若手研究（B）		伊東　研究員	電気技術が近代大衆医療文化の形成に与えた影響に関する日・英・米の比較研究	17700634	H17～H18	900	
		クレインス　助手	1853年以前のオランダで出版された日本関係図書の文献学的研究	17720147	H17～H19	1,800	
		池内　助教授	アル＝ジャジーラを中心としたアラビア語国際衛星テレビ放送のコンテンツ分析	17730125	H17～H18	2,200	
研究成果公開促進費（データベース）	一般	合庭　教授	民事判決原本データベース（民事判決原本データベース作成協議会）	178108	H17	40,800	
		小松　教授	怪異・妖怪伝承データベース（怪異・妖怪伝承データベース作成委員会）	178013	H17	3,400	
		白幡　教授	外像データベース〔外像データベース作成グループ〕	178016	H17	1,900	
計　15　件						107,000	13,920
特別研究員奨励費		宮武　実知子	近代日本における「世論」の歴史社会学－慰霊・顕彰施設を手がかりに－	1334	H15～H17	1,100	
		中山　和久	巡礼における創造と実践の相互交渉に関する実証的研究	1344	H15～H17	700	
		四方田　雅史	戦間期日本・東アジアの経済制度比較－雑貨製造業と商人ネットワークを中心に－	1345	H15～H17	700	
		輪島　裕介	音楽における「自文化」と「異文化」の境界とその再編成	3191	H15～H17	1,100	
		今田　健太郎	日本のトーキー映画の音楽－メディア、言説、視聴覚体験の相互作用	4252	H16～H18	700	
		眞嶋　亜有	近代日本における身体の「西洋化」と其の人種的側面を巡る社会・文化史研究	4781	H16～H18	1,100	
		VESEY, A, M（Baxter）	僧職者たちの特異な社会的地位と僧職制度が近世村落社会の政治権威及び社会・文化的なシステムに及ぼした影響を探る。	04906	H16～H17	800	

平成18（2006）年度

研　究　種　目		研究代表者	研　　究　　課　　題	課題番号	研究期間	18年度 直接経費	18年度 間接経費
基盤研究（S）		安田　教授	年縞の分析による年単位の環境史復元と稲作漁労文明の興亡	18100007	H18～H22	35,000	10,500
基盤研究(A)	一般	小松　教授	怪異・妖怪文化資料を素材とした計量民俗学の構築と分析手法の開発に関する研究	15202026	H15～H18	8,600	2,580
	一般	千田　教授	東アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過	16202023	H16～H18	8,400	2,520
	一般	山田　助教授	前近代日本の諸概念を対象にした知識発見のためのマイニング資源の開発	16200018	H16～H18	10,300	3,090
基盤研究(B)	一般	稲賀　教授	工芸における伝統と革新：京都を中心とした職人産業の歴史的変遷と現状分析	16320023	H16～H18	3,400	0
	海外	宇野　教授	中国陝西省における先端技術を用いた漢代陵墓と都城の総合的調査研究	17401028	H17～H20	3,800	0

基盤研究(C)	一般	渡邊　助教授	コミュニケーションの2つのスタイル －新たな選択肢としてのフランス小学校の市民教育と国語教育－	16530558	H16～H18	1,100	0
	一般	細川　教授	日本のジャズ研究序説－近代化と大衆文	17520102	H17～H20	800	0
若手研究(B)		池内　助教授	アル＝ジャジーラを中心としたアラビア語国際衛星テレビ放送のコンテンツ分析	17730125	H17～H18	1,300	0
		片平　機関研究員	英米における日本庭園像の変遷:19世紀末～20世紀前半の雑誌と画像の分析を中心	18720093	H18～H20	1,300	0
研究成果公開促進費(データベース)	一般	合庭　教授	民事判決原本データベース(民事判決原本データベース作成協議会)	188127	H18	41,200	0
計　11　件						115,200	18,690
特別研究員奨励費		今田　健太郎	日本のトーキー映画の音楽－メディア、言説、視聴覚体験の相互作用	4252	H16～H18	700	0
		眞嶋　亜有	近代日本における身体の「西洋化」と其の人種的側面を巡る社会・文化史研究	4781	H16～H18	1,100	0

平成19(2007)年度

研　究　種　目		研究代表者	研　　究　　課　　題	課題番号	研究期間	19年度	
						直接経費	間接経費
基盤研究(S)		安田　教授	年縞の分析による年単位の環境史復元と稲作漁労文明の興亡	18100007	H18～H22	15,500	4,650
基盤研究(A)	一般	鈴木　教授	東アジアにおける文化交流と知的システムの近代的再編成	19202011	H19～H22	6,000	1,800
	一般	山田　准教授	近代日本の歴史的時空間データマイニングのための基盤整備	19200019	H19～H22	9,100	2,730
基盤研究(B)	海外	宇野　教授	中国陝西省における先端技術を用いた漢代陵墓と都城の総合的調査研究	17401028	H17～H20	3,800	1,140
基盤研究(C)	一般	千田　教授	「日本」の地理的イメージの形成に関する研	19520690	H19～H20	1,400	420
	一般	細川　教授	日本のジャズ研究序説－近代化と大衆文	17520102	H17～H20	800	240
若手研究(B)		クレインス　准教授	17世紀オランダに普及した日本情報の総合的研究	19720157	H19～H21	1,400	0
若手研究(スタートアップ)		バスキンド　研究員	小泉八雲と井上円了:宗教の言説を中心として	19820058	H19～H20	900	0
研究成果公開促進費(データベース)	一般	合庭　教授	民事判決原本データベース(民事判決原本データベース作成協議会)	198091	H19	4,700	0
計　9　件						43,600	10,980

特別研究員奨励費	松本　郁子	日露交流史の研究－太田覚眠をめぐる宗教と国家の相克	19・729	H19～H21	700	0
	松田　利彦（JIN,J.）	植民地帝国日本と東アジアの知識交流－台湾と朝鮮の植民地期メディアを対象に－	19-07305	H19～H20	300	0
	安田　喜憲（LI,X.）	南半球イースター島やニュージーランドと東南アジア熱帯地域の花粉分析的研究	19-07740	H19～H20	1,200	0

平成20（2008）年度

研　究　種　目		研究代表者	研　　究　　課　　題	課題番号	研究期間	20年度	
						直接経費	間接経費
基盤研究（S）		安田　　教授	年縞の分析による年単位の環境史復元と稲作漁労文明の興亡	18100007	H18～H22	13,000	3,900
基盤研究(A)	一般	鈴木　　教授	東アジアにおける文化交流と知的システムの近代的再編成	19202011	H19～H22	5,000	1,500
	一般	山田　　准教授	近代日本の歴史的時空間データマイニングのための基盤整備	19200019	H19～H22	8,500	2,550
基盤研究（B）	海外	宇野　　教授	中国陝西省における先端技術を用いた漢代陵墓と都城の総合的調査研究	17401028	H17～H20	2,900	870
基盤研究（C）	一般	細川　　教授	日本のジャズ研究序説−近代化と大衆文化−	17520102	H17～H20	500	150
	一般	千田　　教授	「日本」の地理的イメージの形成に関する研究	19520690	H19～H20	立命館大学へ	
若手研究（A）		ダリシエ　外国人研究員	日本哲学の根本概念について－西田哲学と京都学派の現在	20682002	H20～H22	956	287
若手研究（B）		クレインス　准教授	17世紀オランダに普及した日本情報の総合的研究	19720157	H19～H21	900	270
		池内　　准教授	移民ムスリム社会におけるイスラーム政治思想・運動の発展動態をめぐる資料収集	20730123	H20～H21	2,100	630
若手研究（スタートアップ）		バスキンド　研究員	小泉八雲と井上円了：宗教の言説を中心として	19820058	H19～H20	920	276
計　10　件						34,776	10,433
特別研究員奨励費		松本　郁子	日露交流史の研究－太田覚眠をめぐる宗教と国家の相克	19・729	H19～H21	700	0
特別研究員奨励費（外国人）		松田　利彦（JIN,J.）		19-07305	H19～H20	500	0
特別研究員奨励費（外国人）		安田　喜憲（LI,X.）		19-07740	H19～H20	1,100	0

平成21（2009）年度

研究種目		研究代表者	研究課題	課題番号	研究期間	21年度 直接経費	21年度 間接経費
基盤研究（S）		安田　教授	年縞の分析による年単位の環境史復元と稲作漁労文明の興亡	18100007	H18～H22	12,200	3,660
基盤研究(A)	一般	鈴木　教授	東アジアにおける文化交流と知的システムの近代的再編成	19202011	H19～H22	5,100	1,530
基盤研究(A)	一般	山田　准教授	近代日本の歴史的時空間データマイニングのための基盤整備	19200019	H19～H22	8,000	2,400
若手研究（A）		ダリシエ　外国人研究員	日本哲学の根本概念について－西田哲学と京都学派の現在	20682002	H20～H22	1,400	420
若手研究（B）		クレインス　准教授	17世紀オランダに普及した日本情報の総合的研究	19720157	H19～H21	500	150
若手研究（B）		小都　機関研究員	満洲移民をめぐる中国東北地域社会の変容	21710261	H21～H22	900	270
計　6　件						28,100	8,430
特別研究員奨励費		松本　郁子	日露交流史の研究－太田覚眠をめぐる宗教と国家の相克	19・729	H19～H21	700	0

平成22（2010）年度

研究種目		研究代表者	研究課題	課題番号	研究期間	22年度 直接経費	22年度 間接経費
基盤研究（S）		安田　教授	年縞の分析による年単位の環境史復元と稲作漁撈文明の興亡	18100007	H18～H22	9,200	2,760
基盤研究(A)	一般	鈴木　教授	東アジアにおける文化交流と知的システムの近代的再編成	19202011	H19～H22	5,500	1,650
基盤研究(A)	一般	稲賀　教授	「東洋」的価値観の許容臨界:「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶	22242008	H22～H24	10,900	3,270
基盤研究(A)	一般	山田　准教授	近代日本の歴史的時空間データマイニングのための基盤整備	19200019	H19～H22	7,500	2,250
基盤研究（C）	一般	荒木　教授	〈古典〉徒然草研究の再構築と定位	22520179	H22～H25	1,000	300
基盤研究（C）	一般	北川　プロジェクト研究員	花粉分析による高時間分解環境復元とその限界ー長野県深見池年縞堆積物による性能評価	22500992	H22～H24	1,400	420
若手研究（B）		佐野　准教授	徳川外交の連続性ー「近世」から「幕末」へ、幕臣筒井政憲に見る経験の蓄積に着目して	21730143	H21～H22	600	180
若手研究（B）		小都　研究員	満洲移民をめぐる中国東北地域社会の変容	21710261	H21～H22	600	180
挑戦的萌芽研究		町田　技術補佐員	17世紀公家の屋外活動に関する文化史的研究	22652067	H22～H24	500	0
研究活動スタート支援		堀　機関研究員	20世紀転換期における日本の芸術芸能の海外発信と受容ー野口米次郎を軸として	22820086	H22～H23	1,080	324
計　10　件						38,280	11,334
〈外国人〉特別研究員奨励費		李　偉　外国人特別研究員	満州における公園文化の受容－日本人の造園活動を中心に－	22・00005	H22～H23	800	0
〈外国人〉特別研究員奨励費		アワーバック　外国人特別研究員	近代日本におけるさまざまな仏伝	22・00729	H22	800	0

分担金

研究種目		研究分担者	研究課題	課題番号	研究期間	22年度 直接経費	22年度 間接経費	研究代表者
新学術領域研究	総括班（領域代表）	安田　教授	環太平洋の環境文明史	21101001	H21～H25	1,200	360	青山和夫（茨城大学）
	計画研究代表		年縞堆積物による環太平洋諸文明の高精度環境史復元	21101002	H21～H25	18,000	5,400	米延仁志（鳴門教育大学）
	総括班（領域代表）	森　准教授	ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究）	22101001	H22～H26	1,000	300	赤澤威（高知工科大学）
	計画研究代表		旧人・新人時空間分布と気候変動の関連性の分析	22101005	H22～H26	250	75	米田穣（東京大学）
基盤研究(A)	一般	松田　准教授	植民地大学の総合的研究－制度・機能・遺産－	21242020		720	216	酒井哲哉（東京大学）
		瀧井　准教授				720	216	
		末木　教授	中世宗教テクスト体系の綜合的研究ー寺院経蔵聖教と儀礼図像の統合	22242009		150	45	阿部泰郎（名古屋大学大学院）
		稲賀　教授	東西文化の磁場−日本近代建築・デザイン・工芸の脱一、超一領域的作用史の基盤研究	21242005		600	180	山野英嗣（京都国立近代美術館）
基盤研究（B）	一般	宇野　教授	遺跡構造に関する総合的基礎調査法の研究：ベトナムの大規模長期利用遺跡を事例として	22401035		350	105	西村昌也（関西大学）
	海外		先端技術を用いた中国内蒙古・新疆北部における漢魏都城・陵墓の総合的研究	20401037	H20～H23	100	30	黄暁芬（東亜大学）
	一般	伊東　教授	公共知の形成―東西比較による18世紀学の展開	22320025		200	60	高橋博巳（金城学院大学）
基盤研究(C)	一般	稲賀　教授	文久年間日本、言語・文化交流の総合的研究・・・翻訳語彙の概念史研究を中心として	21520388		50	15	上垣内憲一（大手前大学）
		劉　准教授				100	30	
		小都　機関研究員	台湾、満洲、中国における慣行調査研究	22520658		289.5	86.85	井村哲郎（新潟大学）
計　12件						23,729.5	7,118.85	

所外への分担金

研　究　種　目		研究代表者	研　　究　　課　　題	課題番号	研究期間	22年度 直接経費	22年度 間接経費	研究代表者（所属先）
基盤研究（S）		安田　　教授	年縞の分析による年単位の環境史復元と稲作漁撈文明の興亡	18100007	H18～H22	100	30	平尾　良光（別府大学）
基盤研究(A)	一般	稲賀　　教授	「東洋」的価値観の許容臨界：「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶	22242008	H22～H24	590	177	テレングト　アイトル
						590	177	藤原　貞朗
						590	177	橋本　順光（大阪大学）
						590	177	林　洋子
						590	177	戦　暁梅（東京工業大学）
						590	177	李　建志（県立広島大学）
計　　2件						3,640	1,092	

平成23（2011）年度

研　究　種　目		研究代表者	研　　究　　課　　題	課題番号	研究期間	配分額（千円） 直接経費	配分額（千円） 間接経費	
基盤研究（A）	一般	稲賀　教授	「東洋」的価値観の許容臨界：「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶	22242008	H22～H24	7,500	2,250	
	一般	山田　准教授	近代日本の歴史的時空間データマイニングのための基盤整備	19200019	H19～H22	60	18	
基盤研究（B）	海外	宇野　教授	先端技術を用いた中央アジアのシルクロード・シルクロード都市の総合的調査研究	23401035	H23～H27	3,000	900	
基盤研究（C）	一般	井村　特任教授	台湾、満洲、中国における慣行調査研究	22520658	H22～H24	900	270	
	一般	荒木　教授	〈古典〉徒然草研究の再構築と定位	22520179	H22～H25	500	150	
	一般	北川　プロジェクト研究員	花粉分析による高時間分解環境復元とその限界ー長野県深見池年縞堆積物による性能評価	22500992	H22～H24	1,100	330	
	一般	細川　教授	ブラジルの日本語文学史ー同人サークルの形成と民族意識の変容	23520273	H23～H25	1,200	360	
	一般	松田　准教授	日本の朝鮮植民地統治と軍	23520852	H23～H25	1,200	360	
	一般	佐野　准教授	徳川幕府の外交儀礼ーー近世アジア域内交流から幕末対欧米外交への連続性を中心に	23530209	H23～H25	1,300	390	
	一般	野島　プロジェクト研究員	北部ヴァヌアツにおける先史時代後期社会の考古学的研究：石組祭祀遺構を中心として	23520939	H23～H25	1,200	360	
若手研究（B）		寺村　機関研究員	古墳のデジタル測量と空間データ処理に関する研究	22720299	H22～H24	600	180	
		山口　特別研究員（PD）	考古資料の3次元デジタルドキュメンテーションとこれを活用した景観考古学の刷新	23720390	H23～H25			PD採用につき辞退

挑戦的萌芽研究	町田	技術補佐員	17世紀公家の屋外活動に関する文化史的研究	22652067	H22～H24	500	150
	朴	機関研究員	朝鮮博覧会と京城の空間形成	23652046	H23～H24	1,000	300
研究活動スタート支援	堀	機関研究員	20世紀転換期における日本の芸術芸能の海外発信と受容－野口米次郎を軸として	22820086	H22～H23	1,100	330
研究成果公開促進費（学術図書）	堀	機関研究員	「二重国籍」詩人　野口米次郎	235054	H23～H23	3,300	0
奨励研究	中野	技術補佐員	明治政府の神仏分離・神道国教化政策に対する近世的な民間宗教者の反応に関する研究	23904014	H23～H23	300	0
計　17 件						24,760	6,348
特別研究員奨励費	山口	特別研究員（PD）	考古資料の3次元デジタルドキュメンテーションとこれを活用した景観考古学の刷新	23・10639	H23～H25	800	0
	中川	特別研究員（RPD）	中世寺院および博士家における願文作品の基礎的研究	23・40076	H23～H25	600	0
	李　偉	外国人特別研究員	満州における公園文化の受容－日本人の造園活動を中心に－	22・00005	H22～H23	700	0

他機関からの分担金

研究種目		研究分担者	研究課題	課題番号	研究期間	配分額（千円）	
						直接経費	間接経費
新学術領域研究	総括班（領域代表）	安田　教授	環太平洋の環境文明史	21101001	H21～H25	700	210
	計画研究代表		年縞堆積物による環太平洋諸文明の高精度環境史復元	21101002	H21～H25	25,000	7,500
新学術領域研究	総括班（領域代表）	森　准教授	ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究）	22101001	H22～H26	1,000	300
	計画研究代表		旧人・新人時空間分布と気候変動の関連性の分析	22101005	H22～H26	250	75
基盤研究(A)	一般	松田　准教授	植民地大学の総合的研究－制度・機能・遺産－	21242020		400	120
		瀧井　准教授				400	120
	一般	末木　教授	中世宗教テクスト体系の綜合的研究－寺院経蔵聖教と儀礼図像の統合	22242009		120	36
	一般	稲賀　教授	東西文化の磁場-日本近代建築・デザイン・工芸の脱－、超－領域的作用史の基盤研	21242005		500	150
	一般	山田　教授	和漢古典学のオントロジモデルの高次・具現化	23240032		250	75
	海外	寺村　機関研究員	イラン国立博物館所蔵粘土板書の調査・研究	23251013		900	270

基盤研究（B）	一般	宇野　教授	遺跡構造に関する総合的基礎調査法の研究：ベトナムの大規模長期利用遺跡を事例	22401035		300	90
	海外		先端技術を用いた中国内蒙古・新疆北部における漢魏都城・陵墓の総合的研究	20401037	H20～H23	100	30
	一般	井村　特任教授	戦時期南満州鉄道沿線の社会変容に関する史料調査研究	20401025	H22～H24	200	60
	一般	荒木　教授	金剛寺所蔵典籍の集約的調査と研究－聖教の形成と伝播把握を基軸として	23320054	H23～H26	1,300	390
	一般	伊東　教授	公共知の形成―東西比較による18世紀学の展開	22320025		50	15
	一般	瀧井　准教授	第一次世界大戦後の世界秩序の変容と日本－新出「原敬関係文書」に基づく検討－	23320135		200	60
基盤研究(C)	一般	稲賀　教授	文久年間日本、言語・文化交流の総合的研究・・・翻訳語彙の概念史研究を中心として	21520388		15	4.5
		劉　准教授				15	4.5
計　16 件						31,700	9,510

所外分担金

研究種目		研究代表者	研究課題	課題番号	研究期間	配分額（千円）		研究分担者
						直接経費	間接経費	
基盤研究（A）	一般	稲賀　教授	「東洋」的価値観の許容臨界：「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶	22242008	H22～H24	416	124.8	平尾　良光（別府大学）
						416	124.8	藤原　貞朗（茨城大学）
						416	124.8	橋本　順光（大阪大学）
						416	124.8	林　洋子（京都造形芸術大学）
						416	124.8	戦　暁梅（東京工業大学）
						416	124.8	李　建志（県立広島大学）
基盤研究(B)	海外	宇野　教授	先端技術を用いた中央アジアのシルクロード・シルクロード都市の総合的調査研究	23401035	H23～H27	100	30	芳賀　満（東北大学）
						100	30	酒井　英男（富山大学）
						100	30	小方　登（京都大学）
						100	30	佐藤　洋一郎（総合地球環境学研究所）
						100	30	泉　拓良（京都大学）
						100	30	黄　暁芬（東亜大学）

基盤研究（C）	一般	井村　　教授	台湾、満洲、中国における慣行調査研究	22520658	H22～H24	210	63	東山　京子 （中京大学）
計　3 件						3,306	992	

平成24（2012）年度

研　究　種　目		研究代表者	研　　究　　課　　題	課題番号	研究期間	配分額（千円）	
						直接経費	間接経費
基盤研究（A）	一般	稲賀　教授	「東洋」的価値観の許容臨界：「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶	22242008	H22～H24	4,200	1,260
基盤研究（B）	海外	宇野　教授	先端技術を用いた中央アジアのシルクロード・シルクロード都市の総合的調査研究	23401035	H23～H27	3,000	900
基盤研究（C）	一般	井村　特任　教授	台湾、満洲、中国における慣行調査研究	22520658	H22～H24	1,000	300
	一般	荒木　教授	〈古典〉徒然草研究の再構築と定位	22520179	H22～H25	700	210
	一般	北川　プロジェクト研究員	花粉分析による高時間分解環境復元とその限界ー長野県深見池年縞堆積物による性能評価	22500992	H22～H24	500	150
	一般	細川　教授	ブラジルの日本語文学史ー同人サークルの形成と民族意識の変容	23520273	H23～H25	1,000	300
	一般	松田　准教授	日本の朝鮮植民地統治と軍	23520852	H23～H25	1,200	360
	一般	佐野　准教授	徳川幕府の外交儀礼ーー近世アジア域内交流から幕末対欧米外交への連続性を中心に	23530209	H23～H25	1,200	360
	一般	野島　プロジェクト研究員	北部ヴァヌアツにおける先史時代後期社会の考古学的研究：石組祭祀遺構を中心として	23520939	H23～H25	1,500	450
	一般	末木　教授	日本中世仏教の思惟方法の比較思想史的研究	24520096	H24～H26	1,300	390
	一般	ブリーン　教授	神都物語：伊勢の近現代史（1869年ー2013年）	24520791	H24～H26	1,000	300
	一般	多田　客員准教授	仏教東漸と東アジア仏教医学の展開	24520039	H24～H26	1,800	540

若手研究（B）	寺村	機関研究員	古墳のデジタル測量と空間データ処理に関する研究	22720299	H22～H24	400	120	
	山口	特別研究員（PD）	考古資料の3次元デジタルドキュメンテーションとこれを活用した景観考古学の刷新	23720390	H23～H25	700	210	PD採用につき辞退
	榎本	准教授	海域交流史料としての仏教文献の研究	24720312	H24～H27	700	210	
	堀	機関研究員	東西詩学の融合と発展：象徴主義詩人らの芸術表現と民族主義	24720168	H24～H27	900	270	
挑戦的萌芽研究	朴	機関研究員	朝鮮博覧会と京城の空間形成	23652046	H23～H24	800	240	
	石川	プロジェクト研究員	舟橋聖一全資料作成に基づく〈戦前期〉文学の総合的研究	24652055	H24～H25	1,100	330	
	町田	技術補佐員	17世紀公家の屋外活動に関する文化史的研究	22652067	H22～H24	500	150	
研究成果公開促	森	准教授	古地図地名座標データベース	248018	H24	11,200	0	
小計　20 件						34,700	7,050	
特別研究員奨励費	山口	特別研究員（PD）	考古資料の3次元デジタルドキュメンテーションとこれを活用した景観考古学の刷新	23・10639	H23～H25	800	0	
	中川	特別研究員（RPD）	中世寺院および博士家における願文作品の基礎的研究	23・40076	H23～H25	348	0	
	許	特別研究員（PD）	幕末明治期における旧唐通事の史的研究	23・1721	H23～H24	264.79	0	

他機関からの分担金

研究種目		研究分担者	研究課題	課題番号	研究期間	配分額（千円）		研究代表者
						直接経費	間接経費	
新学術領域研究	総括班（領域代表）	安田　教授	環太平洋の環境文明史	21101001	H21～H25	500	150	青山和夫（茨城大学）
	計画研究代表		年縞堆積物による環太平洋諸文明の高精度環境史復元	21101002	H21～H25	14,500	4,350	米延仁志（鳴門教育大学）
新学術領域研究	総括班（領域代表）	森　准教授	ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究）	22101001	H22～H26	1,000	300	赤澤威（高知工科大学）
	計画研究代表		旧人・新人時空間分布と気候変動の関連性の分析	22101005	H22～H26	250	75	米田穣（東京大学総合研究博物館）
新学術領域研究	総括班（領域代表）	丸川　准教授	ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究）	22101001	H22～H26	1,000	300	赤澤威（高知工科大学）
	計画研究代表		旧人・新人時空間分布と気候変動の関連性の分析	22101005	H22～H26	250	75	米田穣（東京大学総合研究博物館）

基盤研究(A)	一般	末木　教授	中世宗教テクスト体系の綜合的研究－寺院経蔵聖教と儀礼図像の統合	22242009		50	15	阿部泰郎 （名古屋大学大学院）
	一般	稲賀　教授	東西文化の磁場-日本近代建築・デザイン・工芸の脱－、超－領域的作用史の基盤研	21242005		100	30	山野英嗣 （京都国立近代美術館）
	海外	寺村　機関研究員	イラン国立博物館所蔵粘土板書の調査・研究	23251013		650	195	前川和也 （国士舘大学）
基盤研究（B）	一般	宇野　教授	遺跡構造に関する総合的基礎調査法の研究：ベトナムの大規模長期利用遺跡を事例	22401035		300	90	西村昌也 （金沢大学）
	一般	荒木　教授	金剛寺所蔵典籍の集約的調査と研究－聖教の形成と伝播把握を基軸として	23320054	H23～H26	1,600	480	後藤昭雄（成城大学）
	一般	伊東　教授	公共知の形成―東西比較による18世紀学の展開	22320025		300	90	高橋博巳（金城学院大学）
	一般	瀧井　准教授	第一次世界大戦後の世界秩序の変容と日本－新出「原敬関係文書」に基づく検討－	23320135		150	45	伊藤之雄（京都大学）
	一般	丸川　准教授	近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築－文化の変容に視点を据えて	24300099	H24～H26	1,640	492	高橋晴子 （大阪樟蔭女子大学）
基盤研究(C)	一般	伊東　教授	心・身体・環境をめぐる「仁」概念の再検討－『朱子語類』巻4～6を中心に	24520044		250	75	恩田裕正（東海大学）
	一般	飯倉　技術補佐員	昭和初期の民俗学・口承文芸研究と隣接諸科学との影響関係についての基礎的研究	24520927	H24～H26	160	48	高木史人 （名古屋経済大学）
計　16件						22,700	6,810	

他機関への配分

研究種目		研究代表者	研究課題	課題番号	研究期間	配分額（千円）		研究分担者
						直接経費	間接経費	
基盤研究(A)	一般	稲賀　教授	「東洋」的価値観の許容臨界：「異質」な思想・藝術造形の国際的受容と拒絶	22242008	H22～H24	200	60	平尾　良光 （別府大学）
						200	60	藤原　貞朗 （茨城大学）
						200	60	橋本　順光 （大阪大学）
						200	60	林　洋子 （京都造形芸術大学）
						200	60	戦　暁梅 （東京工業大学）
						200	60	李　建志 （県立広島大学）

基盤研究(B)	海外	宇野　　教授	先端技術を用いた中央アジアのシルクロード・シルクロード都市の総合的調査研究	23401035	H23～H27	150	45	芳賀　満 （東北大学）
						150	45	酒井　英男 （富山大学）
						150	45	小方　登 （京都大学）
						150	45	佐藤　洋一郎 （総合地球環境学研究所）
						150	45	泉　拓良 （京都大学）
						150	45	黄　暁芬 （東亜大学）
基盤研究(C)	一般	井村　　教授	台湾、満洲、中国における慣行調査研究	22520658	H22～H24	330	99	東山　京子 （中京大学）
計　3件						2,430	729	

平成25(2013)年度

研究種目		研究代表者	研究課題	課題番号	研究期間	配分額(千円) 直接経費	配分額(千円) 間接経費
基盤研究(A)	一般	稲賀　教授	海賊史観から交易を検討する：国際法と密貿易－海賊商品流通の学際的・文明史的研究	25244011	H25～H27	16,200	4,860
基盤研究(C)	一般	荒木　教授	〈古典〉徒然草研究の再構築と定位	22520179	H22～H25	800	240
	一般	細川　教授	ブラジルの日本語文学史－同人サークルの形成と民族意識の変容	23520273	H23～H25	1,000	300
	一般	松田　准教授	日本の朝鮮植民地統治と軍	23520852	H23～H25	700	210
	一般	佐野　准教授	徳川幕府の外交儀礼－－近世アジア域内交流から幕末対欧米外交への連続性を中	23530209	H23～H25	500	150
	一般	野島　プロジェクト研究員	北部ヴァヌアツにおける先史時代後期社会の考古学的研究：石組祭祀遺構を中心とし	23520939	H23～H25	700	210
	一般	大塚　教授	WEBコミックの国際標準規格の研究	23611049	H23～H26	500	150
	一般	末木　教授	日本中世仏教の思惟方法の比較思想史的研究	24520096	H24～H26	1400	420
	一般	ブリーン　教授	神都物語：伊勢の近現代史（1869年－2013年）	24520791	H24～H26	2100	630
	一般	磯前　准教授	昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的考察	25370199	H25～H27	1300	390
	一般	朴　機関研究員	朝鮮半島における植民地都市のハイブリッド(hybrid)性	25370200	H25～H27	2100	630
挑戦的萌芽研究		石川　プロジェクト研究員	舟橋聖一全資料作成に基づく〈戦前期〉文学の総合的研究	24652055	H24～H25	1100	330
若手研究(B)		榎本　准教授	海域交流史料としての仏教文献の研究	24720312	H24～H27	700	210
計　13件						29,100	8,730

特別研究員奨励費	中川	特別研究員（RPD）	中世寺院および博士家における願文作品の基礎的研究	23・40076	H23～H25（育児休業取得後の研究期間：H23～H27）	146	0
	陳	特別研究員（PD）	19世紀西洋図像新聞紙における東アジア図像印象について	24・331	H24～H25	500	0

他機関からの分担金

研究種目		研究分担者	研究課題	課題番号	研究期間	25年度 直接経費	25年度 間接経費	研究分担者
新学術領域研究	総括班 補助金分	安田　教授	環太平洋の環境文明史	21101001	H21～H25	500	150	青山和夫（茨城大学）
	計画研究代表補助金分		年縞堆積物による環太平洋諸文明の高精度環境史復元	21101002	H21～H25	16,500	4,950	米延仁志（鳴門教育大学）
新学術領域研究	総括班 補助金分	森　准教授	ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究）	22101001	H22～H26	100	30	赤澤威（高知工科大学）
	計画研究代表補助金分		旧人・新人時空分布と気候変動の関連性の分析	22101005	H22～H26	250	75	米田穣（東京大学総合研究博物館）
基盤研究(A)	一般 補助金分	末木　教授	中世宗教テクスト体系の綜合的研究－寺院経蔵聖教と儀礼図像の統合	22242009	H22～H26	100	30	阿部泰郎（名古屋大学大学院）
基盤研究(A)	海外 補助金分	寺村　特任准教授	イラン国立博物館所蔵粘土板文書の調査・研究	23251013	H23～H27	450	135	前川和也（国士舘大学）
基盤研究(A)	一般 補助金分	山田　教授	和漢古典学のオントロジモデルの高次・具現化	23240032	H23～H27	240	72	相田満（国文学研究資料館）
基盤研究(B)	一般 補助金分	荒木　教授	金剛寺所蔵典籍の集約的調査と研究－聖教の形成と伝播把握を基軸として	23320054	H23～H26	1,000	300	後藤昭雄（成城大学）
基盤研究(B)	一般 補助金分	伊東　教授	公共知の形成―東西比較による18世紀学の展開	22320025	H22～H25	100	30	高橋博巳（金城学院大学）
基盤研究(B)	海外調査 補助金分	寺村　特任准教授	先端技術を用いた中央アジアのシルクロード・シルクロード都市の総合的調査研究	23401035	H23～H27	200	60	宇野隆夫（帝塚山大学）
基盤研究(B)	一般 補助金分	瀧井　准教授	第一次世界大戦後の世界秩序の変容と日本－新出「原敬関係文書」に基づく検討－	23320135	H23～H25	400	120	伊藤之雄（京都大学）
基盤研究(B)	一般 補助金分	丸川　准教授	近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築－文化の変容に視点を据えて			740	222	高橋晴子（大阪樟蔭女子大学）
	一般 基金分			24300099	H24～H26	1,110	333	
基盤研究(B)	一般 一部基金	松田　教授	戦時期朝鮮の政治・社会史に関する一次資料の基礎的研究	25284122	H25～H27	330	99	水野直樹（京都大学人文科学研究所）
基盤研究(C)	一般 基金分	伊東　教授	心・身体・環境をめぐる「仁」概念の再検討－『朱子語類』巻4～6を中心に	24520044	H24～H26	300	90	恩田裕正（東海大学）
基盤研究(C)	一般 基金分	伊東　教授	考証学・言語の学、そして近代知性－近代的学問の「基体」として漢学の学問方法	25370093	H25～H27	100	30	竹村英二（国士舘大学）
計　15件						22,420	6,726	

他機関への分担金

研究種目		研究代表者	研究課題	課題番号	研究期間	25年度 直接経費	25年度 間接経費	研究分担者
基盤研究（A）	一般	稲賀　教授	海賊史観から交易を検討する：国際法と密貿易－海賊商品流通の学際的・文明史的研究	25244011	H25～H27	700	210	呉　孟晋（京都国立博物館）
						700	210	藤原　貞朗（茨城大学）
						700	210	橋本　順光（大阪大学）
						700	210	鞍田　崇（総合地球環境学研究所）
						700	210	大西　宏志（京都造形芸術大学）
計　1件						3,500	1,050	

平成26（2014）年度

研究種目		研究代表者	研究課題	課題番号	研究期間	配分額（千円） 直接経費	配分額（千円） 間接経費	
基盤研究（A）	一般	稲賀　教授	海賊史観から交易を検討する：国際法と密貿易－海賊商品流通の学際的・文明史的研究	25244011	H25～H27	12,500	3,750	
基盤研究（B）	海外	寺村　特任准教授	墳墓からみたインダス文明期の社会景観	26300029	H26～H28	5300	1590	
基盤研究（C）	一般	細川　教授	ブラジルの日本語文学史－同人サークルの形成と民族意識の変容	23520273	H23～H26	0	0	研究期間延長申請により、H23～H25から延長。
	一般	大塚　教授	WEBコミックの国際標準規格の研究	23611049	H23～H26	400	120	H26.10.1神戸芸術工科大学より転入。
	一般	末木　教授	日本中世仏教の思惟方法の比較思想史的研究	24520096	H24～H26	1000	300	
	一般	ブリーン　教授	神都物語：伊勢の近現代史（1869年－2013年）	24520791	H24～H26	200	60	
	一般	磯前　准教授	昭和四〇年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的考察	25370199	H25～H27	1300	390	
	一般	朴　プロジェクト研究員	朝鮮半島における植民地都市のハイブリッド(hybrid)性	25370200	H25～H27	1000	300	
	一般	松田　教授	日本統治期朝鮮の医療衛生政策と医学者	26350370	H26～H28	1100	330	
	一般	佐野　准教授	幕末外交儀礼の研究－－欧米外交官による登城・将軍拝謁儀礼を中心として	26380226	H26～H28	1100	330	
	一般	石川　プロジェクト研究員	戦後日本文学の再「転向」－舟橋家所蔵資料による大衆文学の新視点	26370264	H26～H28	1200	360	

挑戦的萌芽研究	荒木　教授	超越的文化バイアス論としての古典文学研究の可能性	26580049	H26～H27	1100	330	
	坪井　教授	1940－50年代の日本における民衆芸術運動に関する比較文化史的研究	26580034	H26～H28	800	240	
	瀧井　教授	知識国家の歴史的系譜に関する比較国制史的研究	26590003	H26～H28	900	270	このほかH27年度予定額より前倒し分あり（直接500千円、間接150千円）。
若手研究（B）	榎本　准教授	海域交流史料としての仏教文献の研究	24720312	H24～H27	700	210	
	北浦　助教	映画・テレビにおけるハンセン病患者の表象についての歴史的考察	26770077	H26～H28	1100	330	
	中川　特別研究員（RPD）	菅原為永に関する資料および作品についての基礎的研究	26770097	H26～H28	800	240	
計　17　件					30,500	9,150	
特別研究員奨励費	中川　特別研究員（RPD）	中世寺院および博士家における願文作品の基礎的研究	23・40076	H23～H25（育児休業取得後の研究期間：H23～H27）	600	180	
	林　特別研究員（PD）	ポストジャポニスム時代（20世紀初頭）の日仏文化交渉--芸術文化政策を中心に	26・2232	H26～H28	800	240	
	土田　特別研究員（PD）	リミックスされる〈記憶〉-中世連歌における過去再利用の意識の深化とその芸術学的意義	26・10267	H26～H28	800	240	

他機関からの分担金

研究種目		研究分担者	研究課題	課題番号	研究期間	26年度 直接経費	26年度 間接経費	研究代表者
新学術領域研究		森　准教授	ネアンデルタールとサピエンス交代劇の真相：学習能力の深化に基づく実証的研究	22101001	H22～H26	100	30	赤澤威（高知工科大学）
			旧人・新人時空分布と気候変動の関連性の分析	22101005	H22～H26	100	30	米田穣（東京大学総合研究博物館）
基盤研究(S)	一般	末木　教授	宗教テクスト遺産の探査と綜合的研究-人文学アーカイヴス・ネットワークの構築	26220401	H26～H30	500	150	阿部泰郎（名古屋大学大学院文学研究科）
基盤研究(A)	海外	寺村　特任准教授	イラン国立博物館所蔵粘土板文書の調査・研究	23251013	H23～H26	100	30	前川和也（国士舘大学）
基盤研究(A)	一般	山田　教授	和漢古典学のオントロジモデルの高次・具現化	23240032	H26～H28	210	63	相田満（国文学研究資料館）
基盤研究(B)	一般	荒木　教授	金剛寺所蔵典籍の集約的調査と研究－聖教の形成と伝播把握を基軸として	23320054	H23～H26	1,250	375	後藤昭雄（成城大学）
基盤研究(B)	海外調査	寺村　特任准教授	先端技術を用いた中央アジアのシルクロード・シルクロード都市の総合的調査研究	23401035	H23～H27	150	45	宇野隆夫（帝塚山大学）
基盤研究(B)	一般	坪井　教授	東アジアにおける前期冷戦文化の多角的考察	22320131	H22～H26	50	15	成田龍一（日本女子大学）
基盤研究(B)	一般	松田　教授	戦時期朝鮮の政治・社会史に関する一次資料の基礎的研究	25284122	H25～H27	300	90	水野直樹（京都大学人文科学研究所）
基盤研究(B)	一般	松田　教授	ソ連軍接収関東軍文書に関する日露共同研究	26284103	H26～H28	300	90	加藤聖文（国文学研究資料館）

基盤研究（B）	一般	稲賀　教授	神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究-東西融和と民主主義の相	26284054	H26～H29	50	15	安藤礼二（多摩美術大学）
基盤研究（B）	一般	伊東　教授	18世紀における知識とマナー、秩序、：公共知の東西比較	26284016	H26～H29	250	75	高橋博巳（金城学院大学）
基盤研究（B）	一般	坪井　教授	朝鮮近代文学における日本語創作に関する総合的研究	25284072	H25～H27	150	45	波田野節子（新潟県立大学）
基盤研究(C)	一般	伊東　教授	心・身体・環境をめぐる「仁」概念の再検討－『朱子語類』巻4～6を中心に	24520044	H24～H26	200	60	恩田裕正（東海大学）
基盤研究(C)	一般	伊東　教授	考証学・言語の学、そして近代知性－近代的学問の「基体」として漢学の学問方法	25370093	H25～H27	250	75	竹村英二（国士舘大学）
挑戦的萌芽研究		坪井　教授	国境未満の異文化接触/衝突/浸潤	26580125	H26～H27	150	45	池内敏（名古屋大学大学院文学研究科）
計　16件						4,110	1,233	

他機関への配分金

研究種目		研究分担者	研究課題	課題番号	研究期間	26年度 直接経費	26年度 間接経費	研究代表者
基盤研究（A）	一般	稲賀　教授	海賊史観から交易を検討する：国際法と密貿易－海賊商品流通の学際的・文明史的研究	25244011	H25～H27	300	90	呉　孟晋（京都国立博物館）
						300	90	藤原　貞朗（茨城大学）
						300	90	橋本　順光（大阪大学）
						300	90	鞍田　崇（京都造形芸術大学）
						300	90	大西　宏志（京都造形芸術大学）
基盤研究（B）	海外	寺村　特任准教授	墳墓からみたインダス文明期の社会景観	26300029	H26～H28	400	120	新納　泉（岡山大学）
						3,500	1,050	津村　宏臣（同志社大学）
						400	120	長田　俊樹（総合地球環境学研究所）
基盤研究（C）	一般	大塚　教授	WEBコミックの国際標準規格の研究	23611049	H23～H26	20	6	山本　忠宏（神戸芸術工科大学）
						20	6	尹　聖喆（神戸芸術工科大学）
計　3件						5,840	1,752	

平成16年度

（単位：円）

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	確定金額	契約期間	備考
1	支出負担行為担当官 文部科学省 科学技術・学術政策局長 有本　建男	教授　川勝 平太	我が国の国際的リーダーシップの確保 調和型文明への東アジアの基盤的政策研究	3,181,000	3,181,000	H16.7.1 ～ H17.3.31	経費は四半期毎の分納
2	経済産業大臣 中川 昭一	教授　安田 喜憲	平成16年度国際エネルギー使用合理化基盤整備事業 （21世紀の環境・経済・文明に関する調査）	17,540,316	14,264,949	H17.2.1 ～ H17.3.31	経費は確定検査後の 一括精算払
	合　　計			¥20,721,316	¥17,445,949		

平成17年度

（単位：円）

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	確定金額	契約期間	備考
1	支出負担行為担当官 文部科学省 科学技術・学術政策局長 有本　建男	教授　川勝 平太	我が国の国際的リーダーシップの確保 調和型文明への東アジアの基盤的政策研究	5,500,000	5,065,687	H17.4.1 ～ H18.3.31	経費は四半期毎の分納
2	経済産業大臣 中川 昭一	教授　安田 喜憲	平成17年度国際エネルギー使用合理化基盤整備事業 （21世紀の環境と経済と文明に関する調査）	24,994,833	22,786,037	H17.6.15 ～ H18.3.31	研究費分割納入 1回目：22,371,933円(H18.3) 2回目：残額一括(確定検査後)
	合　　計			¥30,494,833	¥27,851,724		

平成18年度

（単位：円）

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額（当初）	確定金額	契約期間	備考
1	支出負担行為担当官 文部科学省 科学技術・学術政策局長 小田　公彦	教授　川勝 平太	我が国の国際的リーダーシップの確保 調和型文明への東アジアの基盤的政策研究	5,554,000	4,601,765	H18.4.3 ～ H19.3.31	研究経費は四半期毎の分納 952,235円返還
2	独立行政法人 日本学術振興会 理事長　小野　元之	教授　今谷　明	日本史分野に関する国際的学術動向の調査・研究	2,500,000	2,500,000	H18.5.26 ～ H19.3.31	
3	財団法人 京都市芸術文化協会 理事長　村井　康彦	教授　笠谷 和比古	伝統文化芸術総合研究プロジェクト2006	4,700,000	562,122	H18.8.1 ～ H19.3.31	H19.1.18付け変更契約締結 （4,137,878円の減額）
4	財団法人 地球環境戦略研究機関 理事長　森嶌　昭夫	教授　安田 喜憲	平成18年度3Rを推進する循環型社会文明の あり方についての調査	8,000,000	8,000,000	H18.10.18 ～ H19.3.15	研究経費分割納入 1回目：6,000,000円(H18.12) 2回目：残額一括(確定検査後)
5	秋田県知事 寺田　典城	教授　安田 喜憲	「一の目潟」湖底堆積物分析・考察・研究・取りまとめ	19,519,500	19,519,500	H18.10.18 ～ H19.3.28	研究経費分割納入 1回目：10,000,000円(H18.11) 2回目：　9,519,500円(H19.2)
	合　　計			¥40,273,500	¥35,183,387		

平成19年度

（単位：円）

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額（当初）	確定金額	契約期間	備考
1	独立行政法人 日本学術振興会 理事長　小野　元之	教授　今谷　明	人文学分野に関する学術動向の調査・研究	2,500,000	2,500,000	H19.5.26 ～ H20.3.31	
2	秋田県知事 寺田　典城	教授　安田 喜憲	「一の目潟」湖底堆積物分析業務	4,354,350	4,354,350	契約締結日 ～ H20.3.10	契約締結日：H19.9.6
	合　　計			**¥6,854,350**	**¥6,854,350**		

平成20年度

（単位：円）

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額（当初）	確定金額	契約期間	備考
1	財団法人 京都市芸術文化協会 理事長　村井　康彦	教授　笠谷 和比古	伝統文化総合研究プロジェクト	4,100,000	4,100,000	H20.6.13 ～ H21.3.31	内訳： 直接経費　3,154,000 間接経費　946,000
	合　　計			**¥4,100,000**	**¥4,100,000**		

平成21年度

（単位：円）

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	確定金額	契約期間	備考
1	財団法人 京都市芸術文化協会 理事長　村井　康彦	教授　笠谷 和比古	伝統文化総合研究プロジェクト	3,800,000	3,800,000	H21.5.8 ～ H22.3.31	内訳： 直接経費　2,923,000 間接経費　877,000
2	総務省	准教授 森　洋久	地球温暖化対策ICTイノベーション推進事業	1,557,400	1,231,620	H21.8.10 ～ H22.3.31	内訳： 直接経費　947,400 間接経費　284,220
	合　　計			**¥5,357,400**	**¥5,031,620**		

平成22年度

（単位：円）

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	確定金額	契約期間	備考
1	財団法人 京都市芸術文化協会 理事長　村井　康彦	教授　笠谷 和比古	伝統文化芸術総合研究プロジェクト	3,500,000	3,500,000	H22.8.30 ～ H23.3.31	内訳： 直接経費　2,693,000 間接経費　807,000
	合　　計			**¥3,500,000**	**¥3,500,000**		

平成23年度

（単位：円）

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	確定金額	契約期間	備考
1	財団法人 京都市芸術文化協会 理事長　村井　康彦	教授　笠谷 和比古	伝統文化芸術総合研究プロジェクト	3,200,000		H23.6.27 ～ H24.3.31	内訳： 直接経費　2,462,000 間接経費　　738,000
	合　　計			¥3,200,000	¥0		

平成24年度

（単位：円）

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	確定金額	契約期間	備考
1	財団法人 京都市芸術文化協会 理事長　村井　康彦	教授　笠谷 和比古	伝統文化芸術総合研究プロジェクト	2,900,000	2,900,000	H24.6.29 ～ H25.3.31	内訳： 直接経費 2,231,000 間接経費　669,000
2	勝山市 勝山市長　山岸 正裕	教授　宇野　隆夫	白山平泉寺歴史景観復元のための3次元デジタル測量	500,000	500,000	H24.12.21 ～ H25.3.29	内訳： 直接経費 500,000
	合　　計			¥3,400,000	¥3,400,000		

平成25年度

（単位：円）

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	確定金額	契約期間	備考
1	財団法人 京都市芸術文化協会 理事長　建畠　晢	教授　笠谷 和比古	伝統文化芸術総合研究プロジェクト	2,600,000	2,600,000	H25.10.10 ～ H26.3.31	内訳： 直接経費 2,000,000 間接経費　600,000
	合　　計			¥2,600,000	¥2,600,000		

平成26年度

（単位：円）

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	確定金額	契約期間	備考
1	財団法人 京都市芸術文化協会 理事長　建畠　晢	教授　笠谷 和比古	伝統文化芸術総合研究プロジェクト	2,300,000		契約締結日 ～ H27.3.31	内訳： 直接経費 1,770,000 間接経費　530,000
	合　　計			¥2,300,000			

5．外部資金獲得状況

(3) 寄附金

平成19年度

番号	寄附者	寄附金額	寄附金名称	受入決定日	納入日
1	安田 喜憲	¥3,419,000	安田喜憲研究助成金(3)	H19.5.10	H19.5.17
2	梅原 猛	¥1,000,000	日文研運営助成金	H19.5.24	H19.5.31
3	東海旅客鉄道株式会社	¥1,000,000	川勝平太客員教授研究助成金	H19.5.24	H19.6.29
4	財団法人国際文化交換協会	¥3,000,000	日文研シンポジウム事業経費	H19.6.7	H19.6.18
5	川勝 平太	¥1,200,000	日文研運営助成金	H19.9.6	H19.9.25
6	梅原 猛	¥1,000,000	日文研運営助成金	H19.9.6	H19.9.14
7	松田 利彦	¥298,985	松田利彦准教授研究助成金	H19.10.18	H19.10.26
8	山田 奨治	¥2,548,000	山田奨治助教授研究助成金(2)	H19.12.6	H19.12.18
9	梅原 猛	¥1,000,000	日文研運営助成金	H20.2.7	H20.2.28
10	平松 隆円	¥1,000,000	伝統プロ研究助成金	H20.3.6	H20.3.11
	合　　計	**¥15,465,985**			

平成20年度

番号	寄附者	寄附金額	寄附金名称	受入決定日	納入日
1	安田 喜憲	¥3,663,000	安田喜憲研究助成金(3)	H20.4.17	H20.4.23
2	財団法人国際文化交換協会	¥2,500,000	日文研シンポジウム事業経費	H20.7.3	H20.7.22
3	梅原 猛	¥1,000,000	日文研運営助成金	H20.7.3	H20.7.18
4	瀧井 一博	¥100,000	瀧井一博准教授研究助成金	H20.9.11	H20.10.17
5	梅原 猛	¥1,000,000	日文研運営助成金	H20.11.26	H20.12.10
6	瀧井 一博	¥400,000	瀧井一博准教授研究助成金	H20.12.4	H21.3.12
7	梅原 猛	¥1,000,000	日文研運営助成金	H21.3.5	H21.3.16
	合　　計	**¥9,663,000**			

平成21年度

番号	寄附者	寄附金額	寄附金名称	受入決定日	納入日
1	瀧井 一博	¥100,000	瀧井一博准教授研究助成金(1)	H21.4.3	
2	瀧井 一博	¥400,000	瀧井一博准教授研究助成金(2)	H21.6.4	
3	梅原 猛	¥1,000,000	日文研運営助成金(1)	H21.10.20	
4	財団法人 放送文化協会	¥500,000	郭南燕准教授研究助成金	H22.2.18	H22.3.8
	合　　計	**¥2,000,000**			

5．外部資金獲得状況

(3) 寄附金

平成22年度

番号	寄附者	寄附金額	寄附金名称	受入決定日	納入日
1	梅原　猛	¥1,000,000	日文研運営交付金	H22.6.3	
2	財団法人国際文化交換協会	¥2,000,000	日文研シンポジウム助成金	H22.6.3	
3	財団法人放送文化基金	¥500,000	郭南燕准教授研究助成金（2）	H22.2.18	H22.8.31
4	梅原　猛	¥1,000,000	日文研運営交付金	H22.10.14	
5	梅原　猛	¥1,000,000	日文研運営交付金	H23.3.3	
	合　　計	¥5,500,000			

平成23年度

番号	寄附者	寄附金額	寄附金名称	受入決定日	納入日
1	財団法人国際文化交換協会	¥1,000,000	日文研シンポジウム助成金	H23.5.19	H23.5.27
2	梅原　猛	¥1,000,000	日文研運営助成金	H23.7.21	H23.8.8
3	村田学術振興財団	¥800,000	山口欧志特別研究員研究助成金	H23.9.8	H23.9.21
4	梅原　猛	¥1,000,000	日文研運営助成金	H24.3.8	H24.3.19
	合　　計	¥3,800,000			

平成24年度

番号	寄附者	寄附金額	寄附金名称	受入決定日	納入日
1	国際日本文化研究交流財団	¥25,000,000	国際日本文化研究交流財団助成金	H24.4.5	H24.4.27
2	瀧井　一博	¥1,000,000	瀧井一博准教授研究助成金（21世紀文化学術財団）	H24.4.5	H24.4.16
3	梅原　猛	¥1,000,000	日文研運営助成金	H25.3.7	H25.3.14
	合　　計	¥27,000,000			

平成25年度

番号	寄附者	寄附金額	寄附金名称	受入決定日	納入日
1	クレインス・フレデリック	¥710,000	2013年度平和中島財団国際学術研究助成	H25.2.21	H25.4.4
2	国際日本文化研究交流財団	¥25,000,000	国際日本文化研究交流財団助成金	H25.2.21	H25.4.30
3	公益財団法人武田科学振興財団	¥900,000	杏雨書屋研究奨励金（担当研究員：益満まを機関研究員）	H25.9.19	H25.10.4
4	（株）丸八製茶場　　代表取締役会長 丸谷誠一郎	¥500,000	小松和彦教授研究助成のため	H25.11.5	H25.11.19
	合　　計	¥27,110,000			

(3) 寄附金

平成26年度

番号	寄附者	寄附金額	寄附金名称	受入決定日	納入日
1	国際日本文化研究交流財団	¥25,000,000	国際日本文化研究交流財団助成金	H26.2.20	H26.7.9
2	公益財団法人　　高梨学術奨励基金	¥1,300,000	平成26年度 公益財団法人高梨学術奨励基金刊行助成（担当教員：寺村特任准教授）	H26.5.22	H26.6.16
3	公益財団法人 三島海雲記念財団	¥700,000	第52回（平成26年度）三島海雲学術研究奨励金(担当教員:寺村特任准教授）	H26.6.19	H26.6.30
4	公益財団法人 サントリー文化財団	¥1,000,000	2014年度 サントリー文化財団研究助成助成金 （担当教員：瀧井一博）	H26.7.17	H26.8.25
5	梅原　猛	¥1,000,000	日文研運営助成金	H26.9.4	
6	一般財団法人 前川財団	¥430,000	平成26年度 家庭教育研究助成 （担当教員：宮崎特任助教）	H26.9.4	
	合　　計	**¥29,430,000**			

平成21年度

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	契約期間	備考
1	東京瓦斯株式会社	准教授 森　洋久	エネルギーネットワークへのエージェント技術の適用と利用者へのインセンティブに関する研究	2,481,600	H21.9.29 ～ H22.3.31	内訳: 直接経費　2,256,000 間接経費　225,600
	合　　計			¥2,481,600		

平成22年度

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	契約期間	備考
1	東京瓦斯株式会社	准教授 森　洋久	エネルギーネットワークへの利用者インセンティブの導入に関する研究	2,500,000	H22.7.20 ～ H23.3.31	内訳: 直接経費　2,273,000 間接経費　227,000
	合　　計			¥2,500,000		

平成23年度

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	契約期間	備考
1	財団法人電力中央研究所	教授　安田喜憲	地球温暖化の環境考古学・歴史学に関する文献レビュー	5,000,000	H23.4.1 ～ H24.3.31	内訳: 直接経費　4,550,000 間接経費　450,000
2	東京瓦斯株式会社	准教授 森　洋久	需要家インセンティブを考慮したエネルギーマーケットロジックに関する研究	2,500,000	H23.8.1～ H24.3.31	内訳: 直接経費　2,273,000 間接経費　227,000
	合　　計			¥7,500,000		

平成24年度

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	契約期間	備考
1	東京瓦斯株式会社	准教授 森　洋久	OpenADR等のXMLを利用した機器制御用通信プロトコルの可能性に関する研究	500,000	契約締結日 ～ H25.2.28	内訳: 直接経費　455,000 間接経費　45,000
	合　　計			¥500,000		

平成25年度

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	契約期間	備考
1	東京瓦斯株式会社	准教授 森　洋久	1.電力メーターとのインフラ共用ネットワークのルーティングアルゴリズムの妥当性評価に関する研究 2.スマートグリッドにおける需要家設備管理CIMモデルに関する研究	1,000,000	契約締結日 ～ H26.2.28	内訳: 直接経費　910,000 間接経費　90,000
	合　　計			¥1,000,000		

平成26年度

番号	委託者名称	受入教員	研究題目	契約金額	契約期間	備考
1	東京瓦斯株式会社	准教授 森　洋久	電力メーターとのインフラ共用ネットワークのルーティングアルゴリズムの妥当性評価に関する研究	600,000	契約締結日 ～ H27.2.27	内訳: 直接経費　546,000 間接経費　54,000
	合　　計			¥600,000		

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

（1）所属研究者（含・名誉教授）の受章や受賞等

氏　名	職 名	（表彰）名称	受賞作品等	受章・受賞日
埴原　和郎	名誉教授	叙正四位、授瑞宝中綬章		平成16年
中西　進	名誉教授	奈良テレビ放送文化賞	「中西進の万葉こゝろ旅」の放送	平成16年
中西　進	名誉教授	文化功労者顕彰		平成16年
中西　進	名誉教授	瑞宝重光章		平成17年
猪木　武徳	教授	第8回桑原武夫学芸賞	『文芸にあらわれた日本の近代』（有斐閣刊）	平成17年7月11日
井波　律子	教授	平成17年度京都新聞文化学術賞		平成17年11月28日
芳賀　徹	名誉教授	授瑞宝中綬章		平成18年
井波　律子	教授	第10回桑原武夫学芸賞	『トリックスター群像　中国古典小説の世界』（筑摩書房刊）	平成19年7月3日
安田　喜憲	教授	紫綬褒章		平成19年11月3日
河合　隼雄	名誉教授	正四位瑞宝重光章		平成19年
中西　進	名誉教授	京都市特別功労顕彰		平成20年
宇野　隆夫	教授	2007年度日本情報考古学会学会賞		平成20年3月22日
牛村　圭	教授	第2回重光葵賞		平成20年12月18日
細川　周平	教授	第60回読売文学賞（研究・翻訳賞）	『遠きにありてつくるもの―日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』（みすず書房）	平成21年2月18日
速水　融	名誉教授	文化勲章		平成21年
伊東　俊太郎	名誉教授	授瑞宝中綬章（春）		平成21年
猪木　武徳	所長	新書大賞2010（第4位）	『戦後世界経済史―自由と平等の視点から』（中公新書）	平成22年2月25日
安田　喜憲	教授	第19回（平成22年度）中山賞大賞	森林の人間諸科学を統合する「文明の環境史観」	平成22年11月
山折　哲雄	名誉教授	第20回南方熊楠賞（人文の部）		平成22年
山折　哲雄	名誉教授	授瑞宝中綬章		平成22年
瀧井　一博	准教授	第32回サントリー学芸賞（政治・経済部門）	『伊藤博文―知の政治家』（中央公論新社）	平成22年12月6日
瀧井　一博	准教授	新書大賞2011（第5位）	『伊藤博文―知の政治家』（中央公論新社）	平成23年2月10日
村井　康彦	名誉教授	授瑞宝中綬章		平成22年
中西　進	名誉教授	第58回菊池寛賞	『中西進の万葉みらい塾』（朝日新聞社）	平成22年
石井　紫郎	名誉教授	瑞宝重光章		平成23年
芳賀　徹	名誉教授	第12回蓮如賞	『藝術の国　日本　画文交響』（角川学芸出版）	平成23年12月10日
堀　まどか	機関研究員	第34回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）	『「二重国籍」詩人　野口米次郎』（名古屋大学出版会）	平成24年12月11日
中西　進	名誉教授	アカデミア賞（文化部門）		平成24年2月17日
小松　和彦	所長	第22回高知出版学術賞	『いざなぎ流の研究』（角川学芸出版）	平成24年3月23日

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

（1）所属研究者（含・名誉教授）の受章や受賞等

氏　名	職 名	（表彰）名称	受賞作品等	受章・受賞日
小松 和彦	所長	紫綬褒章		平成25年11月3日
中西 進	名誉教授	文化勲章		平成25年
稲賀 繁美	教授	建築アカデミー2014年度書籍賞受賞（フランス建築アカデミー）	『Vocabulaire de la spatialité japonaise 日本の生活空間』（CNRS Editions）	平成26年11月12日
末木 文美士	教授	第68回毎日出版文化賞（企画部門）（毎日新聞社）	『仏教の事典』（朝倉書店）	平成26年11月28日
安田 喜憲	名誉教授	東海テレビ文化賞		平成26年
久米 舞子	プロジェクト研究員	第4回角田文衛古代学奨励賞	「平安京『西京』の形成」（『古代文化』第64巻第3号、2012年12月）	平成26年10月4日
長門 洋平	機関研究員	第36回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）	『映画音響論―溝口健二映画を聴く』（みすず書房）	平成26年12月11日
杉本 秀太郎	名誉教授	第33回京都府文化賞（特別功労賞）		平成27年2月6日
瀧井 一博	教授	2015年度フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞		平成27年5月26日
石上 阿希	特任助教	国際浮世絵学会新人賞		平成27年5月26日

※職名は受賞当時のもの

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

（2）書評一覧

通し番号	氏　名	職 名	書名	著作等	出版社	発行年月	掲載年月日	掲載紙	評者
1	小松　和彦	教授	評伝J･G･フレイザー―その生涯と業績	監修	法藏館	平成21年3月	平成21年3月22日	日本経済新聞	川田順造（人類学者）
2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成21年9月20日	毎日新聞	富山太佳夫（英文学者）
3	〃	〃	妖怪文化の伝統と創造―絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで（妖怪文化叢書）	編集	せりか書房	平成21年9月	平成22年10月3日	東京新聞／中日新聞	―
4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成22年10月24日	産経新聞	―
5	〃	〃	妖怪文化の伝統と創造―絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで（妖怪文化叢書）	編集	せりか書房	平成21年9月	平成22年12月20日	京都新聞	香川雅信（兵庫県立歴史博物館学芸員）
6	〃	〃	妖怪文化研究の最前線（妖怪文化叢書）	編集	せりか書房	平成21年10月	平成21年11月22日	日本経済新聞	―
7	〃	〃	いざなぎ流の研究―歴史のなかのいざなぎ流太夫	著	角川学芸出版	平成23年9月27日	平成23年11月13日	高知新聞	―
8	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成23年12月11日	毎日新聞	井波律子（中国文学者）
9	〃	所長	妖怪文化入門（角川ソフィア文庫）	著	角川学芸出版	平成24年6月22日	平成24年7月22日	産経新聞	―
10	〃	〃	「伝説」はなぜ生まれたか	著	角川学芸出版	平成25年3月23日	平成25年4月7日	日本経済新聞	―
11	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成25年6月2日	京都新聞	長山靖夫（文芸評論家）
12	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成25年7月28日	産経新聞	田所真（考古学者）
13	〃	〃	民俗的想像力の世界(岩波文庫)	共同翻訳	岩波書店	平成25年6月5日	平成25年8月4日	読売新聞	平松洋子（エッセイスト）
14	〃	〃	鯰絵―民俗的想像力の世界(岩波文庫)	共同翻訳	岩波書店	平成25年6月15日	平成25年6月24日	京都新聞	―
15	〃	〃	妖怪 YOKAI ジャパノロジー･コレクション（角川ソフィア文庫）	監修	KADOKAWA／角川学芸出版	平成27年1月24日	平成27年2月1日	産経新聞	―
16	猪木　武徳	所長	大学の反省（日本の〈現代〉11）	著	NTT出版	平成21年4月10日	平成21年5月24日	日本経済新聞	―
17	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成21年5月31日	読売新聞	渡辺靖（文化人類学者）
18	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成21年7月12日	朝日新聞	久保文明（東京大学教授･アメリカ政治）
19	〃	〃	戦後世界経済史―自由と平等の視点から（中公新書）	著	中央公論新社	平成21年5月	平成21年6月28日	日本経済新聞	堂目卓生（大阪大学教授）
20	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成21年7月5日	毎日新聞	中村達也（経済学者）
21	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成27年6月7日	日本経済新聞	清家篤(慶応義塾長)
22	磯前　順一	准教授	宗教概念あるいは宗教学の死	著	東京大学出版会	平成24年7月31日	平成24年11月16日	週刊読書人	西川長夫（立命館大学名誉教授･比較文化論専攻）
23	〃	〃	閾の思考―他者･外部性･故郷	著	法政大学出版局	平成25年7月24日	平成25年9月18日	京都新聞	―
24	〃	〃	ザ･タイガース 世界はボクらを待っていた（集英社新書）	著	集英社	平成25年11月15日	平成25年11月24日	朝日新聞	―
25	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成25年12月8日	毎日新聞	―
26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成26年1月19日	東京新聞／中日新聞	―
27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成26年1月19日	読売新聞	―
28	〃	〃	宗教と公共空間―見直される宗教の役割	共同編集	東京大学出版会	平成26年8月2日	平成26年12月28日	毎日新聞	―
29	〃	教授	死者のざわめき―被災地信仰論	著	河出書房新社	平成27年4月23日	平成27年6月21日	東京新聞／中日新聞	赤坂憲雄（学習院大学教授）
30	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成27年6月21日	産経新聞	畑中章宏（作家）

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

（2）書評一覧

通し番号	氏　名	職 名	書名	著作等	出版社	発行年月	掲載年月日	掲載紙	評者
31	井上 章一	教授	美人論（朝日文芸文庫）	著	朝日新聞社	平成7年12月	平成25年1月27日	東京新聞／中日新聞	山下悦子（女性史研究家）
32	〃	〃	名古屋と金シャチ（NTT出版ライブラリーレゾナント007）	著	NTT出版	平成17年2月	平成25年3月31日	日本経済新聞	五十嵐太郎（建築批評家）
33	〃	〃	伊勢神宮―魅惑の日本建築	著	講談社	平成21年5月15日	平成21年6月21日	日本経済新聞	藤森照信（建築史家）
34	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成21年6月28日	朝日新聞	柄谷行人（評論家）
35	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成22年7月4日	朝日新聞	―
36	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成25年9月29日	朝日新聞	―
37	〃	〃	性的なことば（講談社現代新書2034）	共同編集	講談社	平成22年1月19日	平成22年3月7日	朝日新聞	―
38	〃	〃	京都洋館ウォッチング（とんぼの本）	著	新潮社	平成23年11月	平成23年12月18日	読売新聞	―
39	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成24年3月25日	毎日新聞	―
40	〃	〃	増補新版　霊柩車の誕生（朝日文庫）	著	朝日新聞出版	平成25年1月4日	平成25年2月17日	東京新聞／中日新聞	―
41	〃	〃	伊勢神宮と日本美（講談社学術文庫）	著	講談社	平成25年4月11日	平成25年9月29日	産経新聞	原武史（明治学院大学教授・政治思想史）
42	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成27年5月10日	読売新聞	大村幸弘（中近東文化センター付属アナトリア考古学研究所所長）
43	〃	〃	性欲の研究―エロティック・アジア	編集	平凡社	平成25年5月27日	平成25年6月30日	朝日新聞	―
44	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成25年7月28日	毎日新聞	磯田道史（静岡文化芸術大学准教授・日本近世・近代史）
45	〃	〃	現代の建築家	著	ADAエディタトーキョー	平成26年11月26日	平成27年2月8日	毎日新聞	―
46	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成27年2月15日	朝日新聞	隈研吾（建築家、東京大学教授）
47	大塚 英志	教授	物語論で読む村上春樹と宮崎駿―構造しかない日本（角川oneテーマ21）	著	角川書店(角川グループパブリッシング)	平成21年7月10日	平成21年9月27日	日本経済新聞	―
48	〃	〃	ミッキーの書式 戦後まんがの戦時下起源（角川叢書）	著	角川学芸出版	平成25年3月23日	平成25年5月5日	産経新聞	森卓也（映画評論家）
49	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成25年5月26日	東京新聞／中日新聞	阿部嘉昭（北海道大学准教授）
50	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成25年12月29日	産経新聞	野上暁（評論家）
51	〃	〃	メディアミックス化する日本（イースト新書）	著	イースト・プレス	平成26年10月22日	平成26年11月30日	読売新聞	開沼博（社会学者、福島大学特任研究員）
52	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成26年11月30日	東京新聞／中日新聞	
53	笠谷 和比古	教授	武士道―侍社会の文化と倫理	著	NTT出版	平成26年2月12日	平成26年6月1日	読売新聞	田所昌幸（国際政治学者、慶應義塾大学教授）
54	倉本 一宏	教授	藤原行成「権記」全現代語訳（上）（講談社学術文庫）	翻訳	講談社	平成23年12月13日	平成24年2月5日	毎日新聞	荒川洋治（現代詩作家）
55	〃	〃	藤原道長の日常生活（講談社現代新書）	著	講談社	平成25年3月15日	平成25年5月12日	東京新聞／中日新聞	―
56	〃	〃	平安朝 皇位継承の闇（角川選書）	著	KADOKAWA／角川学芸出版	平成26年12月23日	平成27年1月25日	読売新聞	―
57	〃	〃	「旅」の誕生：平安―江戸時代の紀行文学を読む（河出ブックス）	著	河出書房新社	平成27年6月10日	平成27年6月21日	日本経済新聞	―
58	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成27年7月5日	東京新聞／中日新聞	―
59	白幡 洋三郎	教授	花見と桜―日本的なるもの再考（PHP新書）	著	PHP研究所	平成12年3月	平成27年4月12日	東京新聞／中日新聞	原田信男（国士舘大学教授）
60	末木 文美士	教授	日本仏教史―思想史としてのアプローチ（新潮文庫）	著	新潮社	平成8年9月2日	平成27年1月25日	日本経済新聞	―
61	〃	〃	仏典をよむ―死からはじまる仏教史	著	新潮社	平成21年4月	平成21年5月31日	読売新聞	本郷和人（日本中世史家）

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

（2）書評一覧

通し番号	氏　名	職 名	書名	著作等	出版社	発行年月	掲載年月日	掲載紙	評者
62	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成21年7月12日	日本経済新聞	藤森照信（建築史家）
63	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成21年6月28日	朝日新聞	石上英一 （東京大学教授・日本史）
64	〃	〃	近世の仏教―華ひらく思想と文化（歴史文化ライブラリー）	著	吉川弘文館	平成22年6月	平成22年7月18日	読売新聞	本郷和人 （日本中世史家）
65	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成22年9月19日	京都新聞	釈徹宗（相愛大学教授）
66	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成22年8月8日	毎日新聞	―
67	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成22年8月22日	朝日新聞	中島岳志 （北海道大学准教授・アジア政治）
68	〃	〃	現代仏教論（新潮新書）	著	新潮社	平成24年8月14日	平成24年9月16日	朝日新聞	―
69	〃	〃	浄土思想論	著	春秋社	平成25年7月22日	平成25年9月29日	毎日新聞	―
70	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成26年2月2日	京都新聞	上島亨（京都大学准教授）
71	〃	〃	日本仏教入門（角川選書）	著	KADOKAWA/角川学芸出版	平成26年3月21日	平成26年6月1日	読売新聞	若松英輔（批評家）
72	〃	〃	草木成仏の思想	著	サンガ	平成27年2月25日	平成27年5月17日	朝日新聞	本郷和人 （東京大学教授・日本中世史）
73	鈴木　貞美	教授	「日本文学」の成立	著	作品社	平成21年10月24日	平成22年1月24日	読売新聞	片山杜秀 （音楽評論家・日本思想史研究家）
74	〃	〃	『文藝春秋』とアジア太平洋戦争（東アジア叢書）	著	武田ランダムハウスジャパン	平成22年10月15日	平成22年11月28日	読売新聞	井上寿一 （日本近現代史家）
75	〃	〃	宮澤賢治イーハトヴ学事典	共同編集	弘文堂	平成22年11月30日	平成22年12月12日	読売新聞	―
76	〃	〃	「Japan To-day」研究―戦時期『文藝春秋』の海外発信（日文研叢書）	編集	作品社	平成23年3月31日	平成23年4月17日	日本経済新聞	―
77	〃	〃	日本語の「常識」を問う（平凡社新書）	著	平凡社	平成23年5月14日	平成23年7月3日	読売新聞	―
78	〃	〃	入門 日本近現代文芸史（平凡社新書）	著	平凡社	平成25年1月17日	平成25年3月3日	東京新聞／中日新聞	―
79	瀧井　一博	教授	伊藤博文―知の政治家（中公新書）	著	中央公論新社	平成22年4月	平成22年5月9日	読売新聞	井上寿一 （日本近現代史家）
80	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成22年5月23日	産経新聞	―
81	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成22年6月6日	東京新聞／中日新聞	―
82	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成22年6月13日	毎日新聞	―
83	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成22年8月1日	毎日新聞	五百旗頭真 （防衛大学校長・日本政治外交史）
84	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成23年1月23日	東京新聞／中日新聞	―
85	〃	〃	明治国家をつくった人びと（講談社現代新書）	著	講談社	平成25年6月18日	平成25年8月25日	読売新聞	宇野重規 （政治学者、東京大学教授）
86	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成25年9月8日	毎日新聞	―
87	戸部　良一	教授	失敗の本質―日本軍の組織論的研究	共著	ダイヤモンド社	昭和59年5月	平成24年6月24日	日本経済新聞	日比野隆司 （大和証券グループ本社社長）
88	〃	〃	失敗の本質―日本軍の組織論的研究（中公文庫）	共著	中央公論社	平成3年8月	平成21年11月22日	読売新聞	竹内一郎 （劇作家、演出家、宝塚造形芸術大学教授）
89	〃	〃	外務省革新派（中公新書）	著	中央公論新社	平成22年6月25日	平成22年7月25日	読売新聞	井上寿一 （日本近現代史家）
90	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成22年8月22日	日本経済新聞	庄司潤一郎 （防衛省防衛研究所戦史部上席研究官）
91	ジョン・ブリーン	教授	神都物語―伊勢神宮の近現代史（歴史文化ライブラリー）	著	吉川弘文館	平成27年6月22日	平成27年7月26日	読売新聞	―
92	細川　周平	教授	ニュージャズスタディーズ ―ジャズ研究の新たな領域へ （成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書）	共著	アルテスパブリッシング	平成22年7月24日	平成22年8月29日	日本経済新聞	―

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

（2）書評一覧

通し番号	氏　名	職　名	書名	著作等	出版社	発行年月	掲載年月日	掲載紙	評者
93	〃	〃	うつろ舟―ブラジル日本人作家・松井太郎小説選	編集	松籟社	平成22年8月13日	平成22年9月26日	読売新聞	―
94	〃	〃	遠い声―ブラジル日本人作家松井太郎小説選・続	編集	松籟社	平成24年7月20日	平成24年9月30日	読売新聞	湯本香樹実（作家）
95	〃	〃	日系ブラジル移民文学 2 ―日本語の長い旅［評論］	著	みすず書房	平成25年2月21日	平成25年12月29日	日本経済新聞	陣野俊史（批評家）
96	光田　和伸	准教授	神の木―いける・たずねる（とんぼの本）	共著	新潮社	平成22年3月	平成22年5月30日	読売新聞	―
97	安田　喜憲	教授	森と文明	共同翻訳	晶文社	平成6年9月25日	平成23年8月28日	東京新聞／中日新聞	石弘之（環境問題研究者）
98	〃	〃	山は市場原理主義と闘っている	共同翻訳	東洋経済新報社	平成21年12月18日	平成22年4月4日	京都新聞	町田宗鳳（広島大学環境平和学プロジェクト研究センター所長）
99	〃	〃	稲作漁撈文明―長江文明から弥生文化へ	著	雄山閣	平成21年3月	平成21年6月21日	毎日新聞	―
100	〃	〃	奪われる日本の森―外資が水資源を狙っている	共著	新潮社	平成22年3月	平成22年4月4日	毎日新聞	―
101	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成22年5月16日	京都新聞	木俣由美（京都産業大学教授）
102	山田　奨治	教授	日本の著作権はなぜこんなに厳しいのか	著	人文書院	平成23年9月15日	平成23年10月16日	東京新聞／中日新聞	福井健策（弁護士・日本大学客員教授）
103	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成23年10月30日	朝日新聞	福岡伸一（青山学院大学教授・生物学）
104	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成23年11月13日	読売新聞	椹木野衣（美術批評家、多摩美大学教授）
105	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成24年1月14日	図書新聞	白田秀彰（法政大学社会学部准教授・情報法）
106	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成24年2月	GALAC（No.177）	三原治（放送作家）
107	〃	〃	〃	〃	〃	〃	平成24年3月	専門図書館（252号）	時実象一（愛知大学文学部図書館情報学専攻教授）
108	〃	〃	東京ブギウギと鈴木大拙	〃	人文書院	平成27年4月7日	平成27年5月10日	朝日新聞	―

・専任教員の著作等について、スクラップデータのある2009（平成21年）度以降の書評を対象。
・職名は刊行当時のもの。
・五大紙（朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、東京新聞、日本経済新聞）については「書評ニュース」（有限会社スタジオ・ポットSDと版元ドットコム有限事業責任組合によって運営されているウェブサイト：http://www.shohyonews.jp/　2011年10月開設、2009年度以降を収録）による検索も参考。
・それ以外の新聞・雑誌については日文研が収集・蓄積している資料に基づく。

日文研リポジトリのダウンロード数について（平成25年3月～平成27年6月）

平成25年3月（総ダウンロード回数：5936回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	日・米・仏の国語教育を読み解く：「読み書き」の歴史社会学的考察	渡辺, 雅子	日本研究第35集	160
2	宗田文庫目録　図版篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	111
3	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第2巻: 1854-1886	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	106
4	The Palaeoenvironment of Prehistoric Man in the Near East : Some Aspects of Palynological Research	バーンズ, ジーナ	Japan Review No.15	100
5	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第3巻: 1887-1900	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	94
6	Origins of the Japanese Islands : The New “Big Picture”	バーンズ, ジーナ	Japan Review No.15	86
7	日中文庫総目録　Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	80
7	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第1巻: 1853年以前	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	80
9	宗田文庫目録　書籍篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	72
10	野間文庫目録	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	68

平成25年4月（総ダウンロード回数：6233回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第3巻: 1887-1900	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	231
2	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第2巻: 1854-1886	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	190
3	日本仏教における僧と稚児の男色	平松, 隆円	日本研究第34集	168
4	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	149
5	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第1巻: 1853年以前	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	144
6	日・米・仏の国語教育を読み解く：「読み書き」の歴史社会学的考察	渡辺, 雅子	日本研究第35集	139
7	宗田文庫目録　書籍篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	104
7	日中文庫総目録　Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	104
9	野間文庫目録	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	103
10	宗田文庫目録　図版篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	87

平成25年5月（総ダウンロード回数：24175回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	渋沢栄一の「論語算盤説」と日本的な資本主義精神	王, 家驊	第 72回日文研フォーラム報告書	15715
2	日本仏教における僧と稚児の男色	平松, 隆円	日本研究第34集	291
3	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第3巻: 1887-1900	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	245
4	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第2巻: 1854-1886	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	205
5	宗田文庫目録　図版篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	171
6	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第1巻: 1853年以前	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	149
7	宗田文庫目録　書籍篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	142
8	日・米・仏の国語教育を読み解く：「読み書き」の歴史社会学的考察	渡辺, 雅子	日本研究第35集	133
9	野間文庫目録	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	128
10	日中文庫総目録　Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	125

平成25年6月（総ダウンロード回数：23968回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	渋沢栄一の「論語算盤説」と日本的な資本主義精神	王, 家驊	第 72回日文研フォーラム報告書	15542
2	日・米・仏の国語教育を読み解く：「読み書き」の歴史社会学的考察	渡辺, 雅子	日本研究第35集	302
3	日本仏教における僧と稚児の男色	平松, 隆円	日本研究第34集	249
4	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	197
5	日中文庫総目録　Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	165
6	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第2巻: 1854-1886	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	158
7	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第1巻: 1853年以前	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	144
8	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第3巻: 1887-1900	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	142
9	宗田文庫目録　図版篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	136
10	古丁研究：「満洲国」に生きた文化人	梅, 定娥	日文研叢書第49集	125

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
（3）日文研リポジトリ

平成25年7月（総ダウンロード回数：13788回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	渋沢栄一の「論語算盤説」と日本的な資本主義精神	王, 家驊	第 72回日文研フォーラム報告書	4278
2	日本仏教における僧と稚児の男色	平松, 隆円	日本研究第34集	395
3	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	274
4	和算と韓算を通してみた日韓文化比較	金, 容雲	第 56回日文研フォーラム報告書	208
5	日・米・仏の国語教育を読み解く：「読み書き」の歴史社会学的考察	渡辺, 雅子	日本研究第35集	206
6	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第1巻: 1853年以前	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	188
7	宗田文庫目録　書籍篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	178
8	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第3巻: 1887-1900	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	168
9	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第2巻: 1854-1886	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	154
10	近代日本における〈修養〉概念の成立	王, 成	日本研究第29集	152

平成25年8月（総ダウンロード回数：9299回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	渋沢栄一の「論語算盤説」と日本的な資本主義精神	王, 家驊	第 72回日文研フォーラム報告書	2423
2	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	252
3	日本仏教における僧と稚児の男色	平松, 隆円	日本研究第34集	214
4	日・米・仏の国語教育を読み解く：「読み書き」の歴史社会学的考察	渡辺, 雅子	日本研究第35集	203
5	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第2巻: 1854-1886	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	179
6	宗田文庫目録　書籍篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	172
7	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第1巻: 1853年以前	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	157
8	宗田文庫目録　図版篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	125
9	日中文庫総目録　Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	109
10	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第3巻: 1887-1900	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	100

平成25年9月（総ダウンロード回数：8298回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	渋沢栄一の「論語算盤説」と日本的な資本主義精神	王, 家驊	第 72回日文研フォーラム報告書	2475
2	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	216
3	日・米・仏の国語教育を読み解く：「読み書き」の歴史社会学的考察	渡辺, 雅子	日本研究第35集	171
4	日本仏教における僧と稚児の男色	平松, 隆円	日本研究第34集	165
5	引喩と暗喩（四）：源氏物語における白氏文集、「長恨歌」（一）	中西, 進	日本研究第 4集	121
6	明治前期の「貴紳の茶の湯」：『幟仁親王日記』および『東久世通禧日記』に見る喫茶文化の状況	廣田, 吉崇	日本研究第45集	99
7	日中文庫総目録　Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	85
8	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第3巻: 1887-1900	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	82
9	古丁研究：「満洲国」に生きた文化人	梅, 定娥	日文研叢書第49集	80
10	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第1巻: 1853年以前	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	78

平成25年10月（総ダウンロード回数：9857回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	渋沢栄一の「論語算盤説」と日本的な資本主義精神	王, 家驊	第 72回日文研フォーラム報告書	2004
2	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	273
3	日中文庫総目録　Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	141
4	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	113
5	宗田文庫目録　図版篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	105
6	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	100
7	明治前期の「貴紳の茶の湯」：『幟仁親王日記』および『東久世通禧日記』に見る喫茶文化の状況	廣田, 吉崇	日本研究第45集	94
8	古丁研究：「満洲国」に生きた文化人	梅, 定娥	日文研叢書第49集	93
9	引喩と暗喩（四）：源氏物語における白氏文集、「長恨歌」（一）	中西, 進	日本研究第4集	87
10	日本および日本人：外からのまなざし	金, 禹昌	第101回日文研フォーラム報告書	85

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
（3）日文研リポジトリ

平成25年11月（総ダウンロード回数：24546回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	15806
2	渋沢栄一の「論語算盤説」と日本的な資本主義精神	王, 家驊	第 72回日文研フォーラム報告書	1951
3	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	659
4	「聖なる性」の再検討	小谷野, 敦	日本研究第29集	466
5	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	253
6	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	211
7	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第1巻: 1853年以前	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	103
8	日中文庫総目録 Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	100
9	野間文庫目録	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	92
10	古丁研究：「満洲国」に生きた文化人	梅, 定娥	日文研叢書第49集	88

平成25年12月（総ダウンロード回数：24943回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	10482
2	唐代文学における日本のイメージ	張, 哲俊	第202回日文研フォーラム報告書	5066
3	渋沢栄一の「論語算盤説」と日本的な資本主義精神	王, 家驊	第 72回日文研フォーラム報告書	2010
4	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	355
5	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	333
6	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	210
7	「聖なる性」の再検討	小谷野, 敦	日本研究第29集	137
8	〈茅〉について：その呪術的効用をめぐって	大形, 徹	日本研究第18集	125
8	古丁研究：「満洲国」に生きた文化人	梅, 定娥	日文研叢書第49集	125
10	日中文庫総目録 Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	109

平成26年1月（総ダウンロード回数：25215回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	唐代文学における日本のイメージ	張, 哲俊	第202回日文研フォーラム報告書	11293
2	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	4338
3	渋沢栄一の「論語算盤説」と日本的な資本主義精神	王, 家驊	第 72回日文研フォーラム報告書	2027
4	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	393
5	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	285
6	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	232
7	古丁研究：「満洲国」に生きた文化人	梅, 定娥	日文研叢書第49集	205
8	日本伝統音楽における語り物の系譜：旋律型を中心に	トキタ, アリソン	第 73回日文研フォーラム報告書	171
9	宗田文庫目録 書籍篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	111
10	日中文庫総目録 Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	108

平成26年2月（総ダウンロード回数：23133回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか：詩的イメージとしての典故	丘, 培培	第109回日文研フォーラム報告書	10470
2	唐代文学における日本のイメージ	張, 哲俊	第202回日文研フォーラム報告書	2044
3	渋沢栄一の「論語算盤説」と日本的な資本主義精神	王, 家驊	第 72回日文研フォーラム報告書	689
4	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	661
5	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	319
6	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	274
7	古丁研究：「満洲国」に生きた文化人	梅, 定娥	日文研叢書第49集	270
8	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第2巻: 1854-1886	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	173
9	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	172
10	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第1巻: 1853年以前	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	152

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
（3）日文研リポジトリ

平成26年3月（総ダウンロード回数：27718回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか：詩的イメージとしての典故	丘, 培培	第109回日文研フォーラム報告書	9081
2	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	6653
3	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	2700
4	唐代文学における日本のイメージ	張, 哲俊	第202回日文研フォーラム報告書	1600
5	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	300
6	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	262
7	日中文庫総目録　Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	163
8	古丁研究：「満洲国」に生きた文化人	梅, 定娥	日文研叢書第49集	141
9	宗田文庫目録　書籍篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	107
10	知られざる歌麿：「百千鳥狂歌合はせ」の詩的、文法的分析	リビン, ヴィクター ヴィクトロヴィッチ	第171回日文研フォーラム報告書	94

平成26年4月（総ダウンロード回数：30815回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	14738
2	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	4264
3	なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか：詩的イメージとしての典故	丘, 培培	第109回日文研フォーラム報告書	3930
4	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	297
5	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	251
6	唐代文学における日本のイメージ	張, 哲俊	第202回日文研フォーラム報告書	200
7	古丁研究：「満洲国」に生きた文化人	梅, 定娥	日文研叢書第49集	142
8	日中文庫総目録　Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	122
9	宗田文庫目録　書籍篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	71
10	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第1巻: 1853年以前	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	65

平成26年5月（総ダウンロード回数：27886回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	13148
2	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	4341
3	なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか：詩的イメージとしての典故	丘, 培培	第109回日文研フォーラム報告書	3451
4	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	405
5	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	404
6	東洋建築史学の成立に見るアカデミーとナショナリズム：関野貞と中国建築史研究	徐, 蘇斌	日本研究第26集	190
7	日中文庫総目録　Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	120
8	古丁研究：「満洲国」に生きた文化人	梅, 定娥	日文研叢書第49集	92
9	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第2巻: 1854-1886	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	81
10	宗田文庫目録　書籍篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	80

平成26年6月（総ダウンロード回数：32489回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	16185
2	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	3905
3	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	2868
4	なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか：詩的イメージとしての典故	丘, 培培	第109回日文研フォーラム報告書	2763
5	近代日本小説における女性像：現実と幻想	ネイピア, スーザン	第 7回日文研フォーラム報告書	776
6	弁当と日本文化	ロドリゲス デル アリサル, マリア	第 94回日文研フォーラム報告書	661
7	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	419
8	日本モダニズム文藝史のために：新たな構想	鈴木, 貞美	日本研究第43集	139
9	日中文庫総目録　Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	110
10	アジアの西の境	コルホネン, ペッカ	第128回日文研フォーラム報告書	102

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
（3）日文研リポジトリ

平成26年7月（総ダウンロード回数：31296回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	14865
2	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	3295
3	近代日本小説における女性像：現実と幻想	ネイピア, スーザン	第 7回日文研フォーラム報告書	1387
4	なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか：詩的イメージとしての典故	丘, 培培	第109回日文研フォーラム報告書	1380
5	弁当と日本文化	ロドリゲス デル アリサル, マリア	第 94回日文研フォーラム報告書	1282
6	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	1251
7	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	368
8	日本の国際化の展望と外国人労働者問題	セズレ, エリック	第 18回日文研フォーラム報告書	257
9	日中文庫総目録 Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	113
10	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第1巻: 1853年以前	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	104

平成26年8月（総ダウンロード回数：25162回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	12739
2	祇園会と渡来懸装染織品	吉田, 孝次郎	日本研究第9集	3735
3	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	2113
4	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	687
5	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	626
6	日中文庫総目録 Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	119
7	SHUNGA : Ten Questions and Answers	早川, 聞多 ガ-ストル, アンドリュ- C.	Nichibunken Monograph Series No.14	73
8	オイゲン・ヘリゲルの生涯とナチス：神話としての弓と禅（2）	山田, 奨治	日本研究第24集	60
9	明治前期の「貴紳の茶の湯」：『幟仁親王日記』および『東久世通禧日記』に見る喫茶文化の状況	廣田, 吉崇	日本研究第45集	58
10	古丁研究：「満洲国」に生きた文化人	梅, 定娥	日文研叢書第49集	52

平成26年9月（総ダウンロード回数：27327回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	11109
2	祇園会と渡来懸装染織品	吉田, 孝次郎	日本研究第9集	7673
3	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	1846
4	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	616
5	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	578
6	『國華』にみる古渡の中国絵画：近代日本における「宋元画」と文人画評価の成立	久世, 夏奈子	日本研究第47集	421
7	宗田文庫目録 書籍篇	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	97
8	日中文庫総目録 Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	85
9	SHUNGA : Ten Questions and Answers	早川, 聞多 ガ-ストル, アンドリュ- C.	Nichibunken Monograph Series No.14	81
9	徳川家康の源氏改姓問題	笠谷, 和比古	日本研究第16集	81

平成26年10月（総ダウンロード回数：29945回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	16497
2	祇園会と渡来懸装染織品	吉田, 孝次郎	日本研究第9集	4343
3	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	707
4	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	630
5	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	499
6	近代日本小説における女性像：現実と幻想	ネイピア, スーザン	第 7回日文研フォーラム報告書	364
7	方法としての「もどき」：折口信夫の場合	山折, 哲雄	日本研究第1集	158
8	日中文庫総目録 Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	124
9	SHUNGA : Ten Questions and Answers	早川, 聞多 ガ-ストル, アンドリュ- C.	Nichibunken Monograph Series No.14	118
10	アジアにおける日系企業の戦略転換：技術移転をめぐって	シュレスタ, マノジュ L.	第48回日文研フォーラム報告書	92

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
（3）日文研リポジトリ

平成26年11月（総ダウンロード回数：30877回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	9962
2	近代日本文学研究の問題点	キム, レーホ	第 14回日文研フォーラム報告書	5992
3	祇園会と渡来懸装染織品	吉田, 孝次郎	日本研究第9集	2003
4	『國華』にみる古渡の中国絵画：近代日本における「宋元画」と文人画評価の成立	久世, 夏奈子	日本研究第47集	872
5	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	665
6	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	497
7	帝国支配と朝鮮表象：朝鮮写真絵葉書と帝展入選作にみる植民地イメージの伝播	朴, 美貞	日文研叢書第52集	385
8	嘉永・安政期の大坂城代：常陸国土浦藩・土屋寅直の大坂、兵庫開港問題への対応を中心に	菅, 良樹	日本研究第43集	211
9	国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録：1900年以前刊行分. 第2巻: 1854-1886	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	162
10	日中文庫総目録 Web暫定版	国際日本文化研究センター	日文研所蔵図書目録	161

平成26年12月（総ダウンロード回数：37386回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	近代日本文学研究の問題点	キム, レーホ	第 14回日文研フォーラム報告書	11775
2	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	9832
3	祇園会と渡来懸装染織品	吉田, 孝次郎	日本研究第9集	1952
4	近代日本絵画のアジア表象	西原, 大輔	日本研究第26集	1478
5	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	620
6	帝国支配と朝鮮表象：朝鮮写真絵葉書と帝展入選作にみる植民地イメージの伝播	朴, 美貞	日文研叢書第52集	471
7	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	417
8	From nanshoku to homosexuality : A comparative study of Mishima Yukio's Confessions of a mask	佐伯, 順子	Japan Review No.8	241
9	日印関係とインドにおける日本研究：宮沢賢治の菜食主義の思想	ジョージ, プラット アブラハム	第198回日文研フォーラム報告書	185
10	鈴木春信の見立絵の構造：『今様妻鑑の』絵解き	早川, 聞多	日本研究第16集	173

平成27年1月（総ダウンロード回数：61795回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	近代日本絵画のアジア表象	西原, 大輔	日本研究第26集	12901
2	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	8974
3	近代日本文学研究の問題点	キム, レーホ	第 14回日文研フォーラム報告書	8129
4	「気」の思想・「こころ」の文化：言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方	サウェッタナン, チャワーリン	第203回日文研フォーラム報告書	5621
5	国民国家の形成と『太陽』：海外情報欄をとおして	中川, 成美	日本研究第15集	2653
6	帝国支配と朝鮮表象：朝鮮写真絵葉書と帝展入選作にみる植民地イメージの伝播	朴, 美貞	日文研叢書第52集	2620
7	響き合うテキスト（四）幼児体験の光と影：豊子愷「憶児時（幼時の思い出）」と夏目漱石『硝子戸の中』	西槇, 偉	日本研究第39集	1624
8	祇園会と渡来懸装染織品	吉田, 孝次郎	日本研究第9集	1506
9	黯と渡来人	張, 従軍	日本研究第20集	1482
10	神代文字と日本キリスト教：国学運動と国字改良	金, 文吉	第155回日文研フォーラム報告書	1455

平成27年2月（総ダウンロード回数：99676回）

順位	タイトル	著者	刊行物等	ダウンロード件数
1	「気」の思想・「こころ」の文化：言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方	サウェッタナン, チャワーリン	第203回日文研フォーラム報告書	54223
2	近代日本絵画のアジア表象	西原, 大輔	日本研究第26集	10541
3	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	5561
4	中日姓名の比較について：親族の血縁性と社会性	李, 卓	第138回日文研フォーラム報告書	4360
5	近代日本文学研究の問題点	キム, レーホ	第 14回日文研フォーラム報告書	4003
6	神代文字と日本キリスト教：国学運動と国字改良	金, 文吉	第155回日文研フォーラム報告書	1856
7	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	1721
8	国民国家の形成と『太陽』：海外情報欄をとおして	中川, 成美	日本研究第15集	1710
9	祇園会と渡来懸装染織品	吉田, 孝次郎	日本研究第9集	1166
10	弁当と日本文化	ロドリゲス デル アリサル, マリア	第 94回日文研フォーラム報告書	908

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
（3）日文研リポジトリ

平成27年3月（総ダウンロード回数：72866回）

順位	タ イ ト ル	著　者	刊行物等	ダウンロード件数
1	「気」の思想・「こころ」の文化：言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方	サウェッタナン, チャワーリン	第203回日文研フォーラム報告書	20208
2	中日姓名の比較について：親族の血縁性と社会性	李, 卓	第138回日文研フォーラム報告書	9432
3	大庭みな子「三匹の蟹」：ミニスカート文化の中の女と男	キムラ-スティーブン, チグサ	第145回日文研フォーラム報告書	8852
4	近代日本絵画のアジア表象	西原, 大輔	日本研究第26集	4995
5	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	4787
6	近代日本文学研究の問題点	キム, レーホ	第 14回日文研フォーラム報告書	2802
7	無常観の東西比較	ミルシンスキー, マヤ	第 58回日文研フォーラム報告書	1851
8	祇園会と渡来懸装染織品	吉田, 孝次郎	日本研究第9集	1429
9	帝国支配と朝鮮表象：朝鮮写真絵葉書と帝展入選作にみる植民地イメージの伝播	朴, 美貞	日文研叢書52	873
10	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	696

平成27年4月（総ダウンロード回数：57176回）

順位	タ イ ト ル	著　者	刊行物等	ダウンロード件数
1	大庭みな子「三匹の蟹」：ミニスカート文化の中の女と男	キムラ-スティーブン, チグサ	第145回日文研フォーラム報告書	12456
2	魯迅の悲劇と漱石の悲劇：文化伝統からの一考察	李, 国棟	第 24回日文研フォーラム報告書	6840
3	中日姓名の比較について：親族の血縁性と社会性	李, 卓	第138回日文研フォーラム報告書	5559
4	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	4628
5	「気」の思想・「こころ」の文化：言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方	サウェッタナン, チャワーリン	第203回日文研フォーラム報告書	4463
6	近代日本絵画のアジア表象	西原, 大輔	日本研究第26集	4438
7	近代日本文学研究の問題点	キム, レーホ	第 14回日文研フォーラム報告書	2206
8	祇園会と渡来懸装染織品	吉田, 孝次郎	日本研究第9集	1566
9	弁当と日本文化	ロドリゲス デル アリサル, マリア	第 94回日文研フォーラム報告書	829
10	国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克	彭, 丹	日本研究第45集	709

平成27年5月（総ダウンロード回数：99795回）

順位	タ イ ト ル	著　者	刊行物等	ダウンロード件数
1	魯迅の悲劇と漱石の悲劇：文化伝統からの一考察	李, 国棟	第 24回日文研フォーラム報告書	45616
2	弁当と日本文化	ロドリゲス デル アリサル, マリア	第 94回日文研フォーラム報告書	12569
3	大庭みな子「三匹の蟹」：ミニスカート文化の中の女と男	キムラ-スティーブン, チグサ	第145回日文研フォーラム報告書	9186
4	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	5334
5	中日姓名の比較について：親族の血縁性と社会性	李, 卓	第138回日文研フォーラム報告書	4325
6	「気」の思想・「こころ」の文化：言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方	サウェッタナン, チャワーリン	第203回日文研フォーラム報告書	2589
7	近代日本絵画のアジア表象	西原, 大輔	日本研究第26集	2556
8	近代日本文学研究の問題点	キム, レーホ	第 14回日文研フォーラム報告書	2241
9	祇園会と渡来懸装染織品	吉田, 孝次郎	日本研究第9集	2634
10	鈴木春信の見立絵の構造：『今様妻鑑の』絵解き	早川, 聞多	日本研究第16集	779

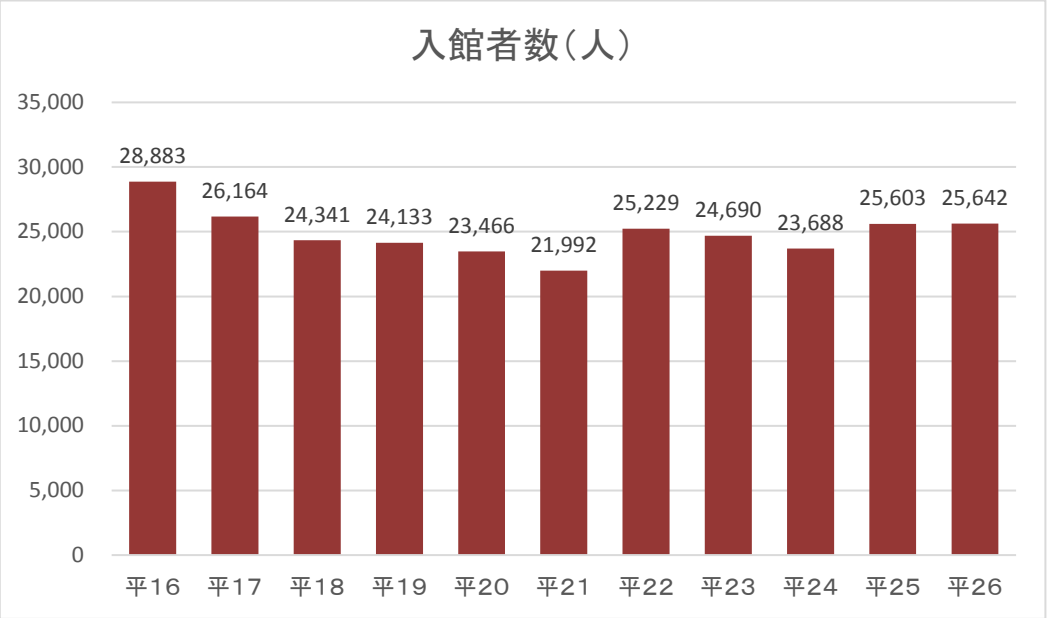
平成27年6月（総ダウンロード回数：72307回）

順位	タ イ ト ル	著　者	刊行物等	ダウンロード件数
1	魯迅の悲劇と漱石の悲劇：文化伝統からの一考察	李, 国棟	第 24回日文研フォーラム報告書	24284
2	弁当と日本文化	ロドリゲス デル アリサル, マリア	第 94回日文研フォーラム報告書	14825
3	近代日本文学研究の問題点	キム, レーホ	第 14回日文研フォーラム報告書	5819
4	中日比較食文化論：健康的飲食法の研究	賈, 蕙萱	第 68回日文研フォーラム報告書	4243
5	大庭みな子「三匹の蟹」：ミニスカート文化の中の女と男	キムラ-スティーブン, チグサ	第145回日文研フォーラム報告書	3180
6	「気」の思想・「こころ」の文化：言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方	サウェッタナン, チャワーリン	第203回日文研フォーラム報告書	2608
7	中日姓名の比較について：親族の血縁性と社会性	李, 卓	第138回日文研フォーラム報告書	2154
8	祇園会と渡来懸装染織品	吉田, 孝次郎	日本研究第9集	1032
9	再考・奥州藤原氏四代の遺体	埴原, 和郎	日本研究第13集	723
10	近代日本絵画のアジア表象	西原, 大輔	日本研究第26集	659

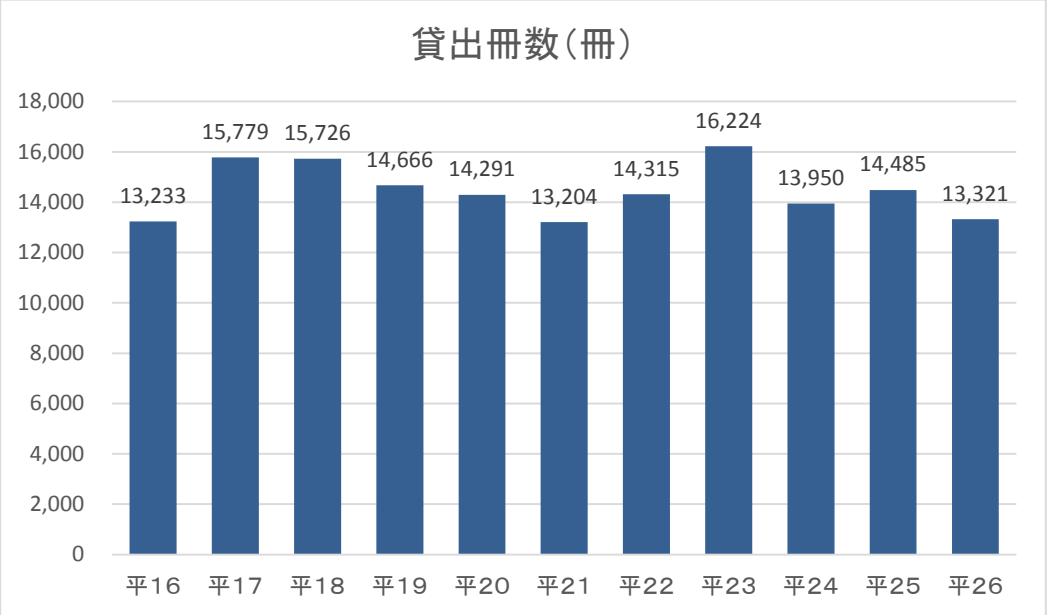
(4) 図書館の利用状況

図書館の利用状況
（平成16年度～平成26年度）

①入館者数

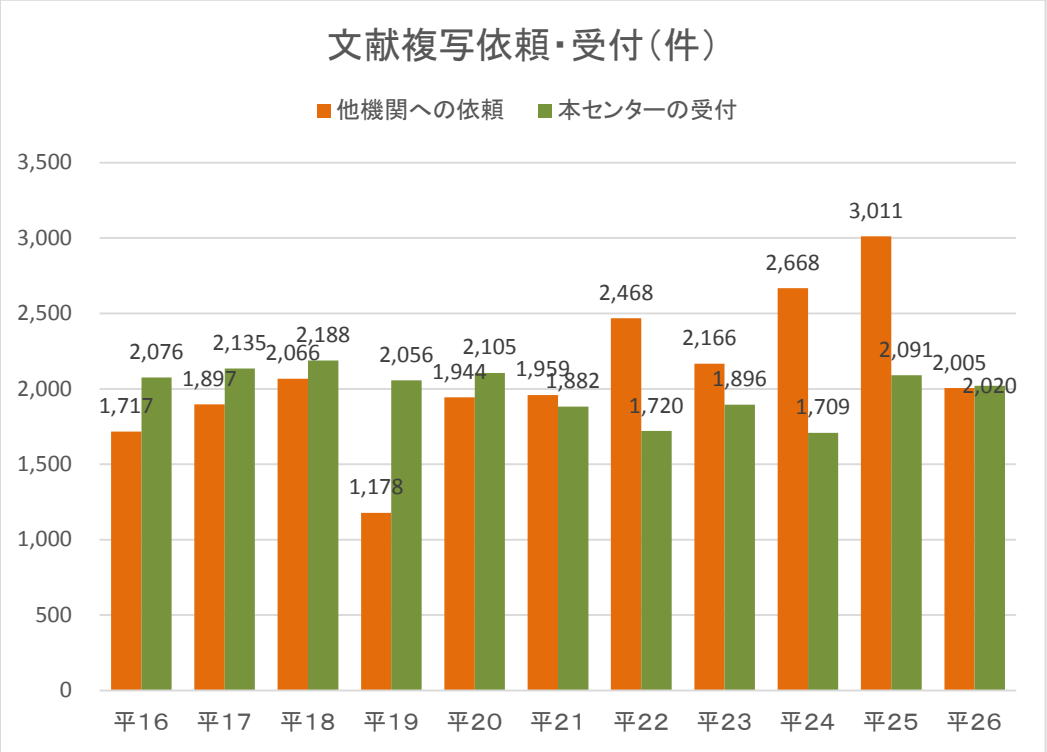


②貸出冊数

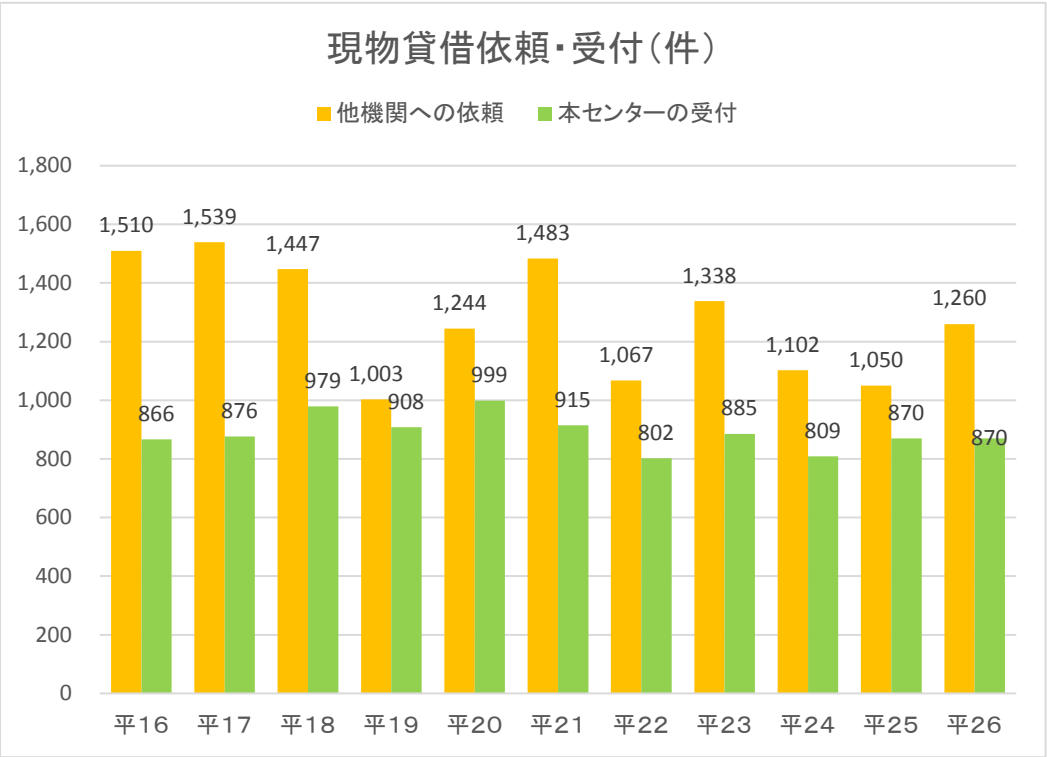


(4) 図書館の利用状況

③文献複写依頼・受付



④現物複写依頼・受付



⑤日文研図書館所蔵資料の展示用貸出（平成16年度～平成27年度（予定））

年度（平成）	相手機関・主催者	企画名	会期	資料	点数	会場
16-17	北区飛鳥山博物館	「江戸のリッチモンド あこがれの王子・飛鳥山展」	2005年.3月19日～5月8日	・La Chine et Japon　Ten weeks in Japan	2	北区飛鳥山博物館
17	京都国立近代美術館	「ポール・クローデルと京都画壇」	2005年10月25日～12月4日	・Sainte Genevieve, Tokyo, 1923 他　計6点	6	京都国立近代美術館
	国際交流基金	「YOKAÏ—日本の奇妙な精霊」	2005年10月26日～翌年1月28日	・百鬼夜行絵巻 ・化物婚礼絵巻	2	パリ日本文化会館
18	財団法人　広島市文化財団	「ひろしま近代医学のあけぼの」	2006年9月30日～11月5日	・本朝医考 他　計5点　7冊	7	広島市郷土資料館
20	南丹市立文化博物館	「妖怪大集合」	2008年7月19日～8月31日	・土佐光起　百鬼夜行之図　ほか計54点	54	南丹市立文化博物館
	岩手県立博物館	「『日本名山図会』と川村寿庵」	2008年10月11日～11月24日	・Nippon（シーボルト）2冊	2	岩手県立博物館
	読売新聞大阪本社	「japan　蒔絵」	2008年10月18日～12月7日　【京都】 2008年12月23日～2009年1月26日【東京】	・Treatise of Japaning and Varnishing 1688	1	京都国立博物館 サントリー美術館（六本木）
	国立国際美術館	「アジアとヨーロッパの肖像」	2008年9月30日～11月24日	Ambassades mémorables de la Compagnie des Indes orientales des Provinces Unies, vers les empereurs du Japon	1	国立国際美術館
	国立民族学博物館	「アジアとヨーロッパの肖像」	2008年9月11日～11月25日	・Engelbert Kämpfers Geschichte und Beschreibung von Japan （ケンペル『日本誌』）	1	国立民族学博物館
	赤穂市立歴史博物館	「まいど！ごひいきに　引き札に見る忠臣蔵の世界」	2008年11月1日～2009年1月12日	・引き札「かをよろす」	1	赤穂市立歴史博物館

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

(4) 図書館の利用状況

年度（平成）	相手機関・主催者	企画名	会期	資料	点数	会場
21	読売新聞大阪本社	「『白樺』誕生100年　白樺派の愛した美術」	2009年 6月　6日～ 7月20日【京都】 2009年 7月26日～ 9月　6日【宇都宮】 2009年 9月13日～10月25日【広島】 2009年11月 3日～12月20日【神奈川】	・「The toils of Yoshitomo: a tragedy of ancient Japan」	1	京都文化博物館 宇都宮美術館 ひろしま美術館 神奈川県立近代美術館
	国立歴史民俗博物館	人間文化研究機構連携展示「百鬼夜行の世界」	2009年7月18日～8月30日	・鬼夜行絵巻（百鬼ノ図）（資料番号：YR/1/Hy）	1	国立歴史民俗博物館
	京都大学図書館機構	「日本文化に見た夢　お雇い外国人建築家コンドル先生　−重要文化財「ジョサイア・コンドル建築図面」」	2009年12月2日～12月24日	・The flowers of Japan and the art of floral arrangement ・Paintings and studies by Kawanabé Kyōsai ・Landscape gardening in Japan	3	京都大学総合博物館
	立命館大学アートリサーチセンター	「近世期春本・春画のコンテクスト」	2009年11月24日～12月18日	・「好色図会十二候」 ・「笑本春の曙」 ・「今様妻鑑」 ・「風流色図法師」 ・「女貞訓下所文庫」 ・「女庭訓御所文庫」 ・「艶道日夜女宝記」	7	立命館大学アートリサーチセンター
	神奈川県立近代美術館	「画家の眼差し、レンズの眼」	2009年6月27日～8月23日	・YA023043　INSIDE ASAKUSA TEMPLE TOKYO（アルバムw） ・YA051040　MONKEY BRIDGE　（アルバムj） ・YA019023　KIGA（アルバムS） ・YA005025　[SACRED ISLAND, ENOSHIMA]（アルバムE） ・YA060041　[ポートレート　少女]（アルバムs）	5	神奈川県立近代美術館
	兵庫県立歴史博物館	「妖怪天国ニッポン－絵巻からマンガまで－」	2009年4月25日～6月14日【兵庫】 2009年7月11日～8月31日【京都】	・日本妖怪変化史 ・[藤原仲成霊と伊賀局] ・しん板化物尽し ・[化物尽絵巻] ・羅城門渡邉綱鬼腕斬之圖 ・[群妖図] ・狂歌百鬼夜興 ・繪畫に見えたる妖怪 [正], 續	9	兵庫県立歴史博物館ギャラリー 京都国際マンガミュージアム メインギャラリー

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

（4）図書館の利用状況

年度（平成）	相手機関・主催者	企画名	会期	資料	点数	会場
21	大阪社会運動協会	「働く人々の歴史展」	2009年4月24日～5月2日	・工場パムフレット 19冊 ・八時間労働問題 ・自分から進んで働かうと思ふ勞働心を發作せしめる方策及補助策	21	大阪府立労働センター
22	兵庫県立美術館	「水木しげる　妖怪図鑑」	2010年7月20日～10月10日	・土蜘蛛草紙絵巻 ・百鬼ノ図（土佐吉光）レプリカ	2	兵庫県立美術館
	アカデミーヒルズ　六本木ライブラリー	「よそおいの春―江戸の粧い」	2010年3月31日～5月6日	・Illustrations of Japanese life Japan　他	16	アカデミーヒルズ　六本木ライブラリー
23	鹿児島県歴史資料センター 黎明館	「大阪がやってきた！　古代から近代 鹿児島とのつながり」	2011年9月30日～11月3日	・日本鳥瞰九州大図絵 ・日本鳥瞰中国四国大図絵 ・近畿を中心とせる名勝交通大鳥瞰図 ・鹿児島県鳥瞰図	4	鹿児島県歴史資料センター 黎明館
	福知山市教育委員会	夏期特別展	2011年8月2日～8月31日	・百鬼夜行絵巻 ・化物婚礼絵巻（レプリカ）	2	日本の鬼の交流博物館
	茨城県立歴史館	「妖怪見聞」	2011年10月15日～11月27日	・百鬼夜行絵巻 ・土蜘蛛之草紙絵巻　下 ・群妖図	3	茨城県立歴史館
	亀岡市文化資料館	「災害から防災へ　祈り・学び・つながる心」	2011年7月30日～10月2日	・鯰絵１０点	10	亀岡市文化資料館
	神戸市立博物館	「日本絵画のひみつ」	2011年12月10日～2012年1月22日	・Valentijn, Francois「Oud en nieuw Oost-Indien」 ・Heister, Lorenz 「Heelkundige onderwyzingen」	2	神戸市立博物館
	日本経済新聞社	「KATAGAMI Styke展」	2012年4月　6日～5月27日【東京】 2012年7月　7日～8月19日【京都】 2012年8月28日～10月14日【三重】	・Motifs décoratifs tirés des pochoirs japonais ・Transactions and proceedings of the Japan Society, London　vol.1 ・Fifty Japanese stencils with descriptive letterpress	3	三菱一号館美術館 京都国立近代美術館 三重県立美術館

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

（4）図書館の利用状況

年度（平成）	相手機関・主催者	企画名	会期	資料	点数	会場
24	古川美術館	「女流画家伊藤小坡の世界」	2012年10月13日～12月16日	・歴史写真（昭和4年5月～昭和5年6月・昭和6年2月15冊）	15	古川美術館
	斎宮歴史博物館	「暦と怪異－不安な日々の平安貴族」	2012年10月6日～11月11日	・長谷雄草紙　1巻	1	斎宮歴史博物館
	亀岡市文化資料館	「ごみを捨てるべからず」	2012年8月4日～9月9日	・付喪神絵詞　1巻 ・百鬼夜行絵巻　1巻	2	亀岡市文化資料館
	福山市鞆の浦歴史民俗資料館	「パノラマ地図と旅」	2012年10月12日～11月25日	・宮島廣島名所交通図絵　1928　昭和3　広島県 ・萩を中心とせる附近名所図絵　1925　大正14　山口県 ・高松栗林公園1920　大正9　香川県 ・石崎汽船航路遊覧名所案内図絵　1927　昭和2　愛媛県 ・松山道後を中心とせる名所交通図絵　1927　昭和2　愛媛県 ・日本鳥瞰中国四国大図絵　1927　昭和2　　中国・四国 ・徳島市鳥瞰図　1935　　昭和10　　徳島県	7	福山市鞆の浦歴史民俗資料館
25	横須賀美術館	「日本の「妖怪」を追え！展」	2013年7月13日～9月1日	・百器夜行（月岡芳年） ・新板化物づくし（歌川芳幾） ・新板化物づくし（歌川貞秀）	3	横須賀美術館
	広島県立歴史民俗資料館	「真夏の妖怪大行進！」	2013年7月1日～9月1日	・土佐光起百鬼夜行之図　ほか計20点	20	広島県立歴史民俗資料館
	大英博物館（イギリス）	「Shunga: sex and pleasure in Japanese art」	2013年10月3日～翌年1月5日	・天野浮橋 ほか計25タイトル42点	42	大英博物館（イギリス）
	亀岡市文化資料館	「丹波亀岡・風景へのまなざし」	2013年7月20日～8月25日	・亀岡八景葉書	4	亀岡市文化資料館
	南方熊楠顕彰館	「熊楠と海」	2013年7月20日～9月16日	・「新和歌ノ浦を中心とせる名所図絵」	1	南方熊楠顕彰館
	龍谷大学	「今と昔の赤い糸」	2013年12月4日～12月7日	・「化物婚礼絵巻」（複製）	1	龍谷大学
	三井記念美術館	「大妖怪展-鬼と妖怪＆ゲゲゲ」	2013年7月6日～9月1日	・百鬼之図（吉光） ・付喪神絵詞 ・化物尽絵巻	3	三井記念美術館
	兵庫県立歴史博物館	「博物館はおばけやしき」	2013年7月13日～9月1日	・土蜘蛛草紙	1	兵庫県立歴史博物館

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

（4）図書館の利用状況

年度（平成）	相手機関・主催者	企画名	会期	資料	点数	会場
27	石川県輪島漆芸美術館	「漆器夜行−−妖怪画・幽霊画に描かれた漆」	2015年7月4日～9月7日	・百鬼夜行絵巻（レプリカ） ・化物婚礼絵巻（レプリカ） ・大新板化物飛巡双六 ・大江山鬼賊住家図	4	石川県輪島漆芸美術館
	宮崎県総合博物館	「今昔、日本の妖怪～百鬼夜行からゲゲゲまで」	2015年7月18日～8月31日	・百鬼ノ圖 ・付喪神絵詞 ・化物婚礼絵巻 ・酒天童子繪巻 3巻 ・道成寺縁起 ・化物尽絵巻 ・日本山海名物圖會 ・怪物画本 巻1 ・白澤図	9	宮崎県総合博物館
	龍谷大学龍谷ミュージアム	「三蔵法師玄奘　迷いつづけた人生の旅路」	2015年8月11日～9月27日	・河鍋暁斎「西遊記西天竺経文取之図」	1	龍谷大学龍谷ミュージアム
	福岡市美術館	「肉筆浮世絵の世界　美人画、風俗画、そして春画」	2015年8月8日～9月20日	・「風流艶色真似ゑもん」 ほか	15	福岡市美術館
	和歌山県立紀伊風土記の丘	「紀伊の地、大いに震う」	2015年9月19日～11月29日（予定）	・鯰絵11件12点	12	和歌山県立紀伊風土記の丘
	永青文庫	「春画展」	2015年9月19日～12月23日（予定）	・「風流艶色真似ゑもん」 ほか	36	永青文庫
	早稲田大学演劇博物館	「幻灯展　プロジェクション・メディアの考古学」	2015年4月1日～8月2日	・当盛水滸伝 中巻	1	早稲田大学演劇博物館

(4) 図書館の利用状況

⑥画像利用申請点数
（平成23年度～平成26年度）

資料の種類＼年	平成23	平成24	平成25	平成26	合計
絵葉書			11		11
絵巻物		27	5	12	44
艶本	357	722	555	787	2,421
外書	31	33	57	6	127
外像			2		2
古写真	132	99	145	42	418
古地図	154	164	152	187	657
宗田文庫	6	2	2	3	13
ちりめん本	9	4	14	9	36
鯰絵	17	1	27	14	59
錦絵			4	6	10
野間文庫			6		6
名所図会	81	56	69	101	307
妖怪	215	104	239	671	1,229
和装本	2	9	12	1	24
平安人物志				5	5
旅行案内				1	1
その他		5		1	6
合計	1,004	1,226	1,300	1,846	5,376

・平成23（2011）年度以降を対象。

平成○○年○○月○○日

センター専任教員各位

研究資料委員会

文献資料収集についてのお願い

本センターでは、国際的視野に立った学際的・総合的な日本研究を推進するため、「外書」を中心とした資料コレクションの形成に努めています。

先生方には、別紙の「基本的な収集分野」に照らして、本センターで購入が必要であると思われる資料を積極的にご推薦いただきたく、お願いいたします。

なお、価格が高額となる資料につきましても、予算が許す限り購入いたしますので、ご推薦をお願い申し上げます。

１．「基 本 的 な 収 集 分 野 」

A.　外書

日本語以外の言語で書かれた日本研究図書
日本語に翻訳された日本研究図書
外国語に翻訳された日本図書
外国語日本研究雑誌
特別外書　－　外国人（主に西洋人）が見た中国、韓国見聞記など

B.　日本研究「基本図書」

辞書・辞典・年鑑・年表・人名録
各種統計書・地方史誌
全集・史料集成
官公庁刊行物
伝記・日記
学術の発展に影響を及ぼした邦訳本の原典
日本文化に関する概説書（評価の定まったもの）
日本研究映像音響資料（写真・地図・ビデオ・録音テープ・CD・LD・DVD など）

C.　日本研究「学術専門書」

日本研究に関する学術専門書

D.　文献目録

所蔵及び所在目録
索引及び解題等

※「図書」にはマイクロフィルムも含みます。

２．そ の 他 の 推 薦 資 料

○大型コレクション

大型コレクションの募集については、別途ご案内します。

○雑誌

雑誌については、「推薦理由文」を付けてご推薦ください。研究資料委員会に諮ります。
外国雑誌の推薦は、別紙「外国雑誌の選定基準について」によります。

３．推 薦 の 要 領

○推薦の方法

書名・著者名・出版社等を明記したメモやカタログに、お名前と収集分野の区分（外書・基本・学術専門・目録）を記入の上、図書館までご提出ください。重複所蔵のないことを確認の上、購入決定いたします。

○高額資料

価格が５０万円以上の資料は、研究資料委員会に諮ります。「推薦理由文」を付けてご推薦ください。（推薦者は自身も含め 2 人以上必要です）

※ なお、図書館予算による資料の購入は、本センタースタッフへの情報サービスはもとより、国内外の研究者コミュニティーに提供する日本文化研究のコレクション作りであることをご理解ください。

※ 「基本的な収集分野」に該当しない、各教員の専門的な研究分野の図書については、「個人研究費」等での購入をお願いいたします。

外国雑誌の選定基準について

平成 12 年 12 月 7 日制定
平成 13 年 10 月 23 日改定
平成 15 年 7 月 7 日改定

研究資料委員会

１．外国雑誌の選定にあたっては、以下の２点に留意する。
（1）長期的視野からの良質な外国雑誌のコレクションを構築する。
（2）外国雑誌購入費の効率的な運用と、研究動向や出版状況の変化に適切に対応するために、毎年度見直しを行う。

２．外国雑誌は、（1）日文研全体として必須の雑誌、（2）教員推薦の雑誌、（3）個人研究用の雑誌の３種類に分けて扱い、選定基準及び購入の手続きは以下のとおりとする。

（1）日文研全体として必須の雑誌

日本関係の記事が多く掲載される雑誌、日本研究のために各研究分野において特に重要な雑誌。研究資料委員会で選定し、学術雑誌購入費で購入する。

（2）教員推薦の雑誌

- 新任の専任教員は、就任後２年以内に１人３誌まで（和雑誌を含めて）、その研究分野において必要な雑誌を推薦することができる。なお、推薦者の任期等の関係で短期間で購読終了となる可能性のある雑誌の推薦については、２人以上の副推薦者を必要とする。また、副推薦は１人３誌までとする。
- 推薦者は推薦理由書を添えて研究資料委員会に提出し、承認が得られた場合には、学術雑誌購入費で購入する。
- 選定した教員が異動した場合、次年１月～１２月までの外国雑誌の契約月である１１月の直前の研究資料委員会で見直しを行う。

（3）個人研究用の雑誌

- 各教員が選定し、本人の個人研究費を用いて購入する。研究資料委員会の承認は必要としない。
- 選定した教員の異動時に、原則として購入を中止する。

平成○○年○○月○○日

教　員　各　位

研究資料委員会委員長
○　○　○　○

センター教員著作物の寄贈について

平素より、図書館の運営にご協力いただきありがとうございます。

さて、図書館ではセンター発足時より、在籍教員の著作物については、網羅的な収集につとめてまいりました。

教員著作物につきましては、センター外からの問い合わせや文献複写依頼等利用要請が高く、より収集の充実が求められております。

つきましては、著作物の寄贈にご協力くださるよう改めてお願いする次第です。

ご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

記

１．教員の範囲

専任教員を対象とします。客員教員につきましては、できる限りご協力ください。

２．著作物の範囲

単独執筆、共著、編著等、単行本として刊行されたものを対象とします。

なお、共同研究の成果物は除きます。

３．著作物の取り扱いについて

刊行時に２部の寄贈をお願いいたします。１部は資産として登録し、他の図書と同じ扱いで図書館に配架して利用に供します。もう１部は図書館内の「日文研出版コーナー」に展示します。

また、寄贈いただきました著作物は、日文研ホームページ内「所員の新刊図書」に掲載、紹介させていただきます。

※　なお、これとは別に日文研の研究成果公表の一環として、コモンルームの教員著作物コーナーに配置するものにつきましても、１部寄贈していただければ幸いです。

本件連絡先：資料課資料管理係（内線２０６２）

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

(5) データベースの国内外からのアクセス数 ①

＼年月	201306（平成25年6月）			201307（平成25年7月）			201308（平成25年8月）			201309（平成25年9月）			201310（平成25年10月）			201311（平成25年11月）		
データベース名＼国内外の別	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外
WebGIS 日本全図	224	205	19	234	217	17	243	231	12	219	197	22	203	193	10	224	209	15
浮世絵芸術	217	193	24	263	228	35	194	174	20	186	162	24	216	161	55	242	212	30
絵巻物	350	285	65	281	238	43	220	184	36	226	195	31	204	158	46	299	258	41
艶本資料	296	260	36	295	261	34	266	235	31	351	305	46	355	294	61	331	292	39
於竹大日如来縁起絵巻	55	43	12	59	40	19	53	47	6	53	41	12	50	36	14	59	45	14
怪異・妖怪絵姿	315	253	62	346	293	53	306	257	49	237	198	39	232	185	47	264	217	47
怪異・妖怪画像	241	216	25	338	316	22	206	187	19	168	152	16	172	141	31	218	179	39
怪異・妖怪伝承	224	206	18	249	219	30	189	161	28	166	138	28	171	123	48	213	166	47
外像（※）	222	163	59	260	190	70	169	116	53	157	92	65	175	113	62	169	103	66
家族史・人口史文献	115	90	25	145	112	33	89	81	8	97	72	25	111	69	42	111	70	41
貴重書	153	136	17	159	134	25	130	112	18	118	100	18	108	80	28	123	97	26
近世畸人伝（正・続）	80	66	14	84	66	18	59	51	8	52	42	10	64	52	12	66	55	11
考古学GIS	93	82	11	102	86	16	82	74	8	62	48	14	94	80	14	94	80	14
古写真	337	263	74	314	237	77	261	194	67	286	204	82	279	204	75	282	208	74
古事類苑全文	131	119	12	140	114	26	100	92	8	107	92	15	93	80	13	151	126	25
古事類苑ページ検索システム	83	70	13	75	56	19	55	47	8	62	54	8	60	47	13	78	65	13
在外日本美術	180	108	72	163	86	77	164	84	80	158	76	82	148	73	75	156	69	87
所蔵地図	474	460	14	438	419	19	498	483	15	460	444	16	363	348	15	461	441	20
図録 米欧回覧実記	75	63	12	66	47	19	56	49	7	53	40	13	52	35	17	46	33	13
西洋医学史古典文献（野間文庫）	62	48	14	51	35	16	44	35	9	32	24	8	45	21	24	47	33	14
摂関期古記録	269	248	21	308	252	56	225	181	44	398	340	58	389	337	52	324	259	65
宗田文庫図版資料	183	134	49	128	73	55	129	66	63	102	52	50	103	44	59	95	47	48
ちりめん本	121	100	21	126	104	22	88	74	14	65	53	12	75	55	20	95	77	18
長崎古地図	129	111	18	129	102	27	112	97	15	130	98	32	124	107	17	135	110	25
鯰絵コレクション	164	119	45	183	127	56	118	87	31	149	117	32	132	97	35	140	88	52
錦絵観音霊験記の世界	51	41	10	61	42	19	54	46	8	35	26	9	38	28	10	57	43	14
日中歴史研究センター旧蔵書目録	44	31	13	58	36	22	47	31	16	36	20	16	35	15	20	56	40	16
日本関係欧文図書目録	55	38	17	60	37	23	42	29	13	48	28	20	37	19	18	47	21	26
日本語語彙研究文献	59	46	13	97	78	19	48	34	14	36	24	12	42	28	14	70	32	38

・データは2013（平成25）年6月以降。
・2014（平成26）年12月にサーバーの移行があった。
・（※）外像データベース：日文研が収集した、外国人により外国語で書かれ、近世・近代に世界各国で出版された日本研究図書のうち、挿し絵などのみに特化した画像データベース

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

(5) データベースの国内外からのアクセス数 ①

＼年月	201312（平成25年12月）			201401（平成26年1月）			201402（平成26年2月）			201403（平成26年3月）			201404（平成26年4月）			201405（平成26年5月）		
データベース名＼国内外の別	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外
WebGIS 日本全図	224	193	31	202	178	24	196	176	20	251	224	27	156	137	19	181	167	14
浮世絵芸術	252	227	25	240	204	36	214	184	30	266	198	68	216	167	49	243	215	28
絵巻物	293	236	57	298	217	81	224	192	32	247	170	77	208	176	32	220	188	32
艶本資料	547	502	45	338	277	61	423	342	81	508	411	97	337	295	42	461	394	67
於竹大日如来縁起絵巻	46	31	15	62	41	21	63	45	18	99	48	51	56	46	10	60	50	10
怪異・妖怪絵姿	264	217	47	243	187	56	211	136	75	218	143	75	211	162	49	224	192	32
怪異・妖怪画像	192	167	25	185	153	32	158	133	25	199	129	70	251	220	31	296	260	36
怪異・妖怪伝承	162	137	25	202	157	45	135	105	30	198	106	92	178	144	34	223	185	38
外像（※）	126	59	67	181	100	81	187	126	61	264	152	112	142	91	51	135	80	55
家族史・人口史文献	97	59	38	103	78	25	87	72	15	119	93	26	87	67	20	86	74	12
貴重書	137	119	18	118	97	21	148	122	26	187	122	65	113	96	17	136	117	19
近世畸人伝（正・続）	69	56	13	76	64	12	87	69	18	123	66	57	63	48	15	90	70	20
考古学GIS	94	79	15	86	68	18	99	77	22	104	85	19	87	76	11	87	73	14
古写真	265	186	79	332	218	114	288	215	73	372	264	108	229	161	68	269	194	75
古事類苑全文	93	80	13	129	107	22	121	106	15	172	120	52	148	125	23	149	135	14
古事類苑ページ検索システム	60	42	18	71	62	9	69	53	16	120	68	52	86	67	19	107	91	16
在外日本美術	166	82	84	156	77	79	116	61	55	208	91	117	132	71	61	160	91	69
所蔵地図	458	439	19	494	471	23	425	408	17	661	589	72	406	385	21	437	417	20
図録 米欧回覧実記	64	43	21	57	43	14	62	48	14	96	46	50	59	40	19	49	40	9
西洋医学史古典文献（野間文庫）	36	20	16	44	26	18	40	25	15	88	38	50	42	29	13	46	39	7
摂関期古記録	362	280	82	385	316	69	335	283	52	553	447	106	350	290	60	320	278	42
宗田文庫図版資料	101	40	61	108	55	53	95	44	51	208	62	146	114	64	50	116	61	55
ちりめん本	145	110	35	94	66	28	90	68	22	134	82	52	85	66	19	108	87	21
長崎古地図	109	88	21	121	100	21	119	98	21	158	104	54	97	77	20	117	101	16
鯰絵コレクション	124	81	43	96	74	22	77	66	11	121	67	54	77	62	15	103	90	13
錦絵観音霊験記の世界	47	30	17	40	31	9	49	34	15	86	38	48	51	42	9	59	42	17
日中歴史研究センター旧蔵書目録	47	25	22	52	32	20	49	35	14	102	41	61	63	46	17	47	35	12
日本関係欧文図書目録	54	25	29	57	28	29	38	23	15	97	35	62	47	34	13	61	45	16
日本語語彙研究文献	50	35	15	46	30	16	60	42	18	102	39	63	45	31	14	69	53	16

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

(5) データベースの国内外からのアクセス数 ①

＼年月	201406（平成26年6月）			201407（平成26年7月）			201408（平成26年8月）			201409（平成26年9月）			201410（平成26年10月）			201411（平成26年11月）		
データベース名＼国内外の別	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外
WebGIS 日本全図	159	152	7	145	138	7	161	149	12	157	145	12	172	159	13	147	123	24
浮世絵芸術	236	211	25	231	206	25	183	158	25	170	149	21	190	164	26	200	165	35
絵巻物	234	203	31	221	190	31	185	157	28	186	160	26	227	208	19	236	193	43
艶本資料	443	373	70	418	348	70	340	284	56	367	316	51	381	307	74	367	290	77
於竹大日如来縁起絵巻	63	55	8	58	50	8	42	33	9	41	27	14	52	40	12	66	35	31
怪異・妖怪絵姿	257	232	25	247	222	25	264	238	26	206	171	35	249	200	49	242	193	49
怪異・妖怪画像	319	292	27	305	278	27	290	265	25	169	145	24	230	192	38	232	187	45
怪異・妖怪伝承	259	235	24	254	230	24	171	144	27	155	120	35	218	178	40	267	204	63
外像（※）	123	67	56	116	60	56	98	40	58	94	37	57	122	64	58	135	66	69
家族史・人口史文献	111	89	22	106	84	22	90	70	20	69	50	19	139	115	24	112	74	38
貴重書	141	121	20	128	108	20	101	88	13	102	78	24	121	93	28	143	118	25
近世畸人伝（正・続）	68	60	8	67	59	8	55	39	16	52	41	11	83	64	19	69	47	22
考古学GIS	95	86	9	80	71	9	79	70	9	80	68	12	85	66	19	77	57	20
古写真	261	194	67	267	200	67	295	234	61	248	182	66	259	189	70	263	165	98
古事類苑全文	127	114	13	121	108	13	95	79	16	98	84	14	162	132	30	152	119	33
古事類苑ページ検索システム	74	65	9	69	60	9	56	44	12	50	40	10	76	57	19	87	64	23
在外日本美術	138	78	60	124	64	60	128	60	68	116	41	75	179	77	102	180	70	110
所蔵地図	417	398	19	428	409	19	425	409	16	372	359	13	439	407	32	440	412	28
図録 米欧回覧実記	63	54	9	61	52	9	48	36	12	49	33	16	49	36	13	53	32	21
西洋医学史古典文献（野間文庫）	44	36	8	38	30	8	36	28	8	26	17	9	44	26	18	40	22	18
摂関期古記録	279	228	51	282	231	51	206	173	33	326	235	91	309	251	58	368	286	82
宗田文庫図版資料	108	61	47	110	63	47	84	33	51	104	40	64	104	51	53	113	48	65
ちりめん本	95	88	7	92	85	7	79	66	13	57	43	14	97	82	15	97	63	34
長崎古地図	87	74	13	92	79	13	96	77	19	64	50	14	131	109	22	115	85	30
鯰絵コレクション	78	64	14	72	58	14	62	47	15	64	50	14	71	62	9	84	57	27
錦絵観音霊験記の世界	62	55	7	56	49	7	51	40	11	32	24	8	45	34	11	58	32	26
日中歴史研究センター旧蔵書目録	52	38	14	46	32	14	41	34	7	37	21	16	62	32	30	45	28	17
日本関係欧文図書目録	57	43	14	47	33	14	40	30	10	40	22	18	42	28	14	61	39	22
日本語語彙研究文献	71	52	19	62	43	19	42	29	13	42	26	16	60	38	22	57	35	22

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

（5）データベースの国内外からのアクセス数 ①

＼年月 データベース名＼国内外の別	201412（平成26年12月） 総アクセス	国内	国外	201412（サーバー移行後） 総アクセス	国内	国外	201501（平成27年1月） 総アクセス	国内	国外	201502（平成27年2月） 総アクセス	国内	国外	201503（平成27年3月） 総アクセス	国内	国外
WebGIS 日本全図	93	71	22	298	275	23	176	155	21	146	128	18	170	147	23
浮世絵芸術	168	146	22	388	343	45	216	188	28	200	164	36	224	179	45
絵巻物	150	120	30	373	329	44	191	161	30	181	138	43	235	191	44
艶本資料	288	229	59	751	666	85	393	335	58	345	274	71	477	392	85
於竹大日如来縁起絵巻	51	35	16	93	70	23	52	35	17	41	26	15	67	44	23
怪異・妖怪絵姿	186	153	33	439	379	60	210	181	29	199	161	38	278	218	60
怪異・妖怪画像	172	146	26	359	307	52	170	144	26	161	134	27	225	173	52
怪異・妖怪伝承	184	148	36	406	324	82	210	170	40	193	150	43	256	174	82
外像（※）	92	41	51	316	202	114	107	48	59	285	109	176	207	93	114
家族史・人口史文献	128	50	78	263	213	50	111	71	40	152	101	51	162	112	50
貴重書	78	57	21	220	186	34	132	111	21	114	86	28	134	100	34
近世畸人伝（正・続）	51	29	22	119	89	30	57	42	15	70	46	24	73	43	30
考古学GIS	55	41	14	118	100	18	76	60	16	69	53	16	65	47	18
古写真	136	88	48	580	484	96	258	187	71	297	231	66	349	253	96
古事類苑全文	89	69	20	231	188	43	127	101	26	99	78	21	153	110	43
古事類苑ページ検索システム	53	33	20	102	85	17	55	43	12	51	37	14	65	48	17
在外日本美術	111	50	61	223	111	112	155	71	84	138	58	80	165	53	112
所蔵地図	270	246	24	829	796	33	422	386	36	399	373	26	456	423	33
図録 米欧回覧実記	33	19	14	90	71	19	49	33	16	46	32	14	58	39	19
西洋医学史古典文献（野間文庫）	31	16	15	46	31	15	31	18	13	28	15	13	31	16	15
摂関期古記録	257	196	61	518	448	70	325	276	49	224	180	44	338	268	70
宗田文庫図版資料	83	39	44	144	77	67	111	40	71	125	43	82	101	34	67
ちりめん本	78	50	28	154	125	29	79	58	21	80	60	20	94	65	29
長崎古地図	73	46	27	181	150	31	108	85	23	93	68	25	113	82	31
鯰絵コレクション	48	38	10	144	122	22	75	57	18	80	62	18	82	60	22
錦絵観音霊験記の世界	42	23	19	77	58	19	49	34	15	43	27	16	50	31	19
日中歴史研究センター旧蔵書目録	40	24	16	95	62	33	44	22	22	41	29	12	66	33	33
日本関係欧文図書目録	38	21	17	67	42	25	41	23	18	32	19	13	48	23	25
日本語語彙研究文献	40	29	11	95	69	26	57	38	19	50	34	16	61	35	26

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
（5）データベースの国内外からのアクセス数　②

＼年月	201306（平成25年6月）			201307（平成25年7月）			201308（平成25年8月）			201309（平成25年9月）			201310（平成25年10月）			201311（平成25年11月）		
データベース名＼国内外の別	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外
俳諧	81	64	17	85	65	20	76	66	10	74	64	10	83	64	19	76	61	15
風俗図会	239	215	24	212	184	28	202	172	30	193	168	25	163	134	29	225	206	19
平安京都名所図会	236	224	12	181	161	20	145	137	8	152	137	15	155	140	15	177	157	20
平安人物志	105	91	14	100	77	23	98	82	16	96	88	8	101	84	17	100	82	18
平安人物志短冊帖	48	38	10	47	32	15	53	41	12	29	24	5	39	30	9	38	30	8
米国議会図書館所蔵浮世絵	199	142	57	179	117	62	131	75	56	148	96	52	138	75	63	170	108	62
米国議会図書館所蔵承応版源氏物語	47	30	17	48	26	22	36	26	10	18	11	7	28	13	15	27	16	11
米国議会図書館所蔵奈良絵本	35	24	11	48	27	21	36	29	7	22	16	6	34	16	18	35	22	13
平治物語絵巻「六波羅合戦の巻」デジタル復元図	80	66	14	96	80	16	83	78	5	83	70	13	68	50	18	116	88	28
家族史・人口史文献	88	72	16	64	48	16	44	36	8	62	52	10	66	49	17	51	41	10
民事判決原本	302	273	29	364	295	69	244	210	34	232	194	38	269	235	34	272	244	28
ラージマップ －高精細空中写真 WebGIS－	85	72	13	98	78	20	93	83	10	81	73	8	73	59	14	94	69	25
連歌	84	73	11	127	110	17	84	74	10	73	63	10	80	67	13	118	104	14
連歌連想語彙	48	36	12	71	55	16	41	36	5	31	21	10	39	28	11	58	42	16
和歌	343	309	34	380	344	36	259	241	18	376	323	53	292	271	21	343	314	29
季語検索	56	45	11	63	42	21	54	42	12	54	35	19	45	33	12	73	56	17
時代別検索	56	41	15	66	50	16	45	38	7	46	32	14	39	24	15	46	38	8
所蔵図書	44	32	12	71	54	17	62	56	6	53	39	14	53	36	17	81	69	12
日文研サイト横断検索	63	46	17	97	79	18	52	45	7	59	48	11	49	37	12	46	36	10
日本研究機関	165	63	102	164	48	116	139	52	87	129	34	95	152	48	104	151	57	94
Z39.50（書誌情報横断検索）	35	23	12	35	15	20	23	18	5	24	15	9	22	11	11	31	18	13
専任教員執筆一覧	84	67	17	79	53	26	78	63	15	75	56	19	42	27	15	78	59	19
研究集会	32	15	17	52	25	27	22	13	9	28	12	16	25	11	14	44	33	11
Japan Review	37	23	14	56	31	25	26	17	9	34	18	16	48	26	22	70	47	23
日文研フォーラム報告書データベース	58	32	26	97	35	62	102	30	72	70	37	33	68	30	38	103	45	58
日本研究	66	52	14	82	59	23	59	44	15	55	42	13	70	44	26	102	77	25
CD-ROMサーバシステム	12	6	6	319	284	35	8	7	1	6	5	1	4	3	1	372	324	48
高精細地図情報	22	14	8	48	47	1	12	11	1	13	12	1	12	8	4	6	4	2
在外日本美術	38	19	19	21	15	6	21	15	6	21	15	6	21	15	6	21	15	6
歴史法令	12	6	6	14	13	1	8	7	1	9	8	1	7	5	2	5	4	1
テレビコマーシャル	23	17	6	16	15	1	8	7	1	11	10	1	10	8	2	5	4	1
所蔵古写真カタログ	17	11	6	22	21	1	9	8	1	10	9	1	5	4	1	96	48	48
百鬼夜行図集成	22	15	7	17	16	1	10	9	1	11	10	1	9	7	2	8	7	1

・データは2013（平成25）年6月以降。
・2014（平成26）年12月にサーバーの移行があった。
・（※）外像データベース：日文研が収集した、外国人により外国語で書かれ、近世・近代に世界各国で出版された日本研究図書のうち、挿し絵などのみに特化した画像データベース

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

(5) データベースの国内外からのアクセス数 ②

＼年月	201312（平成25年12月）			201401（平成26年1月）			201402（平成26年2月）			201403（平成26年3月）			201404（平成26年4月）			201405（平成26年5月）		
データベース名＼国内外の別	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外
俳諧	103	70	33	114	92	22	72	53	19	122	66	56	98	86	12	132	110	22
風俗図会	213	190	23	208	172	36	187	156	31	264	192	72	221	184	37	190	160	30
平安京都名所図会	129	114	15	181	149	32	188	163	25	195	171	24	169	154	15	191	173	18
平安人物志	93	78	15	97	72	25	97	80	17	142	87	55	102	85	17	101	91	10
平安人物志短冊帖	41	30	11	45	34	11	34	23	11	51	38	13	38	28	10	40	35	5
米国議会図書館所蔵浮世絵	184	115	69	187	118	69	133	73	60	163	91	72	176	107	69	135	89	46
米国議会図書館所蔵承応版源氏物語	36	14	22	34	22	12	41	18	23	79	28	51	53	31	22	63	49	14
米国議会図書館所蔵奈良絵本	30	13	17	39	20	19	30	19	11	78	27	51	37	25	12	47	31	16
平治物語絵巻「六波羅合戦の巻」デジタル復元図	86	66	20	94	76	18	103	85	18	116	96	20	108	81	27	183	168	15
家族史・人口史文献	50	38	12	77	58	19	64	54	10	115	63	52	50	41	9	69	57	12
民事判決原本	234	176	58	325	252	73	250	230	20	310	245	65	390	333	57	316	279	37
ラージマップ －高精細空中写真 WebGIS－	83	61	22	95	59	36	90	70	20	145	94	51	76	61	15	89	78	11
連歌	121	103	18	94	82	12	71	62	9	132	77	55	76	68	8	109	100	9
連歌連想語彙	29	17	12	45	32	13	40	27	13	87	43	44	40	28	12	50	42	8
和歌	364	313	51	379	353	26	278	246	32	423	349	74	404	347	57	496	449	47
季語検索	66	46	20	72	51	21	54	33	21	61	44	17	67	47	20	64	52	12
時代別検索	49	36	13	67	52	15	51	34	17	66	46	20	56	42	14	53	45	8
所蔵図書	57	43	14	62	47	15	67	50	17	86	65	21	61	40	21	85	69	16
日文研サイト横断検索	55	43	12	55	38	17	70	53	17	58	45	13	64	52	12	63	53	10
日本研究機関	155	62	93	183	77	106	147	56	91	141	61	80	119	45	74	126	66	60
Z39.50（書誌情報横断検索）	30	13	17	32	19	13	30	15	15	39	23	16	27	14	13	34	25	9
専任教員執筆一覧	67	43	24	57	38	19	73	51	22	65	51	14	74	61	13	71	55	16
研究集会	33	18	15	34	19	15	33	20	13	45	29	16	37	22	15	37	27	10
Japan Review	59	38	21	65	36	29	59	33	26	65	45	20	71	29	42	74	51	23
日文研フォーラム報告書データベース	86	23	63	86	41	45	58	26	32	91	43	48	99	50	49	84	49	35
日本研究	70	37	33	82	63	19	63	41	22	87	60	27	125	85	40	166	136	30
CD-ROMサーバシステム	4	3	1	6	5	1	515	454	61	8	7	1	342	291	51	10	9	1
高精細地図情報	9	8	1	9	8	1	13	12	1	17	16	1	13	12	1	10	9	1
在外日本美術	21	15	6	21	15	6	21	15	6	21	15	6	35	24	11	35	24	11
歴史法令	8	7	1	8	7	1	7	6	1	16	15	1	15	13	2	12	11	1
テレビコマーシャル	3	2	1	10	9	1	7	6	1	11	10	1	23	22	1	18	16	2
所蔵古写真カタログ	7	6	1	9	8	1	97	46	51	19	17	2	109	59	50	10	9	1
百鬼夜行図集成	14	13	1	7	6	1	21	20	1	11	10	1	14	13	1	15	14	1

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
（5）データベースの国内外からのアクセス数　②

＼年月	201406（平成26年6月）			201407（平成26年7月）			201408（平成26年8月）			201409（平成26年9月）			201410（平成26年10月）			201411（平成26年11月）		
データベース名＼国内外の別	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外	総アクセス	国内	国外
俳諧	133	119	14	129	115	14	110	94	16	201	186	15	234	212	22	186	167	19
風俗図会	246	207	39	264	225	39	213	178	35	217	183	34	211	179	32	195	155	40
平安京都名所図会	145	134	11	138	127	11	122	111	11	137	118	19	158	140	18	135	108	27
平安人物志	109	100	9	98	89	9	84	71	13	95	80	15	106	87	19	95	73	22
平安人物志短冊帖	36	30	6	41	35	6	42	31	11	36	24	12	38	29	9	50	30	20
米国議会図書館所蔵浮世絵	146	88	58	137	79	58	115	74	41	108	59	49	163	96	67	155	102	53
米国議会図書館所蔵承応版源氏物語	71	41	30	61	31	30	43	20	23	30	20	10	31	15	16	30	11	19
米国議会図書館所蔵奈良絵本	42	30	12	37	25	12	27	19	8	26	17	9	40	29	11	45	25	20
平治物語絵巻「六波羅合戦の巻」デジタル復元図	138	126	12	133	121	12	96	85	11	112	93	19	119	99	20	126	95	31
家族史・人口史文献	60	50	10	55	45	10	47	36	11	47	34	13	60	48	12	69	43	26
民事判決原本	261	220	41	249	208	41	206	165	41	208	170	38	276	245	31	243	203	40
ラージマップ －高精細空中写真 WebGIS－	74	68	6	71	65	6	77	67	10	74	62	12	81	68	13	78	61	17
連歌	93	85	8	87	79	8	51	46	5	62	53	9	108	89	19	118	88	30
連歌連想語彙	65	60	5	56	51	5	25	18	7	39	28	11	42	29	13	58	38	20
和歌	399	372	27	393	366	27	296	274	22	314	290	24	444	399	45	447	384	63
季語検索	60	52	8	52	44	8	36	24	12	58	43	15	50	35	15	56	33	23
時代別検索	41	37	4	35	31	4	25	22	3	29	23	6	42	34	8	29	19	10
所蔵図書	72	60	12	73	61	12	47	40	7	45	40	5	56	43	13	130	84	46
日文研サイト横断検索	66	55	11	61	50	11	38	28	10	56	44	12	54	44	10	71	44	27
日本研究機関	143	63	80	134	54	80	112	48	64	101	32	69	125	45	80	119	37	82
Z39.50（書誌情報横断検索）	31	25	6	28	22	6	20	14	6	26	19	7	38	30	8	30	18	12
専任教員執筆一覧	64	53	11	59	48	11	39	33	6	54	43	11	59	44	15	76	53	23
研究集会	31	22	9	27	18	9	20	13	7	25	14	11	31	20	11	32	17	15
Japan Review	82	51	31	80	49	31	55	36	19	139	68	71	374	110	264	380	68	312
日文研フォーラム報告書データベース	64	41	23	64	41	23	80	62	18	46	25	21	92	63	29	87	44	43
日本研究	171	134	37	162	125	37	138	104	34	148	107	41	205	162	43	243	178	65
CD-ROMサーバシステム	11	10	1	16	15	1	12	9	3	23	10	13	20	10	10	15	4	11
高精細地図情報	16	15	1	13	12	1	26	25	1	63	52	11	60	52	8	35	21	14
在外日本美術	30	19	11	30	19	11	30	19	11	26	15	11	26	15	11	233	184	49
歴史法令	15	14	1	7	6	1	7	4	3	18	6	12	19	10	9	23	10	13
テレビコマーシャル	17	16	1	13	12	1	13	12	1	28	13	15	44	33	11	39	20	19
所蔵古写真カタログ	13	13	0	11	11	0	13	11	2	22	15	7	33	25	8	27	18	9
百鬼夜行図集成	20	19	1	8	7	1	24	18	6	50	28	22	50	35	15	25	12	13

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
（5）データベースの国内外からのアクセス数　②

＼年月 データベース名＼国内外の別	201412（平成26年12月） 総アクセス	国内	国外	201412（サーバー移行後） 総アクセス	国内	国外	201501（平成27年1月） 総アクセス	国内	国外	201502（平成27年2月） 総アクセス	国内	国外	201503（平成27年3月） 総アクセス	国内	国外
俳諧	137	111	26	246	224	22	257	236	21	134	117	17	129	107	22
風俗図会	114	85	29	303	273	30	156	132	24	172	137	35	166	136	30
平安京都名所図会	78	68	10	264	241	23	156	143	13	117	102	15	162	139	23
平安人物志	63	48	15	159	134	25	100	85	15	80	65	15	94	69	25
平安人物志短冊帖	27	18	9	65	51	14	37	27	10	39	27	12	38	24	14
米国議会図書館所蔵浮世絵	90	41	49	194	138	56	169	106	63	131	72	59	122	66	56
米国議会図書館所蔵承応版源氏物語	30	15	15	49	30	19	31	16	15	31	16	15	33	14	19
米国議会図書館所蔵奈良絵本	32	18	14	47	30	17	30	16	14	26	12	14	35	18	17
平治物語絵巻「六波羅合戦の巻」デジタル復元図	72	54	18	189	151	38	104	90	14	83	64	19	125	87	38
家族史・人口史文献	45	34	11	94	80	14	43	36	7	60	43	17	51	37	14
民事判決原本	188	135	53	405	357	48	250	219	31	209	173	36	232	184	48
ラージマップ －高精細空中写真 WebGIS－	52	36	16	135	115	20	80	65	15	64	54	10	81	61	20
連歌	61	48	13	124	95	29	65	57	8	49	38	11	86	57	29
連歌連想語彙	40	32	8	69	47	22	55	39	16	27	18	9	51	29	22
和歌	277	245	32	643	604	39	456	417	39	320	294	26	349	310	39
季語検索	50	38	12	80	57	23	53	42	11	44	30	14	50	27	23
時代別検索	30	20	10	57	44	13	30	27	3	25	18	7	39	26	13
所蔵図書	75	57	18	141	113	28	110	88	22	70	57	13	84	56	28
日文研サイト横断検索	69	44	25	92	67	25	52	39	13	49	33	16	59	34	25
日本研究機関	93	32	61	238	124	114	155	59	96	128	49	79	189	75	114
Z39.50（書誌情報横断検索）	43	19	24	46	27	19	31	24	7	20	14	6	32	13	19
専任教員執筆一覧	37	26	11	113	96	17	60	47	13	64	53	11	60	43	17
研究集会	22	13	9	64	49	15	21	17	4	43	30	13	34	19	15
Japan Review	237	61	176	194	139	55	90	43	47	128	83	45	111	56	55
日文研フォーラム報告書データベース	73	38	35	101	79	22	47	34	13	61	40	21	61	39	22
日本研究	164	118	46	286	229	57	166	123	43	158	127	31	159	102	57
CD-ROMサーバシステム	10	9	1	461	459	2	7	3	4	515	454	61	7	5	2
高精細地図情報	14	10	4	17	15	2	13	10	3	10	8	2	9	7	2
在外日本美術	174	141	33	21	10	11	12	2	10	9	4	5	17	6	11
歴史法令	13	7	6	9	6	3	5	1	4	6	3	3	6	3	3
テレビコマーシャル	18	13	5	31	24	7	18	15	3	17	17	0	14	7	7
所蔵古写真カタログ	12	10	2	14	10	4	6	2	4	5	4	1	10	6	4
百鬼夜行図集成	19	10	9	16	12	4	7	1	6	5	4	1	12	8	4

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

（6）翻訳出版協力プロジェクト

国際日本文化研究センターでは平成19（2007）年以来、日本文化の理解を助けるために、日本語による文献（古典および近代の古典、改訳を含む）を諸外国語で翻訳し、学術出版していただく活動に協力しています。企画を公募し、厳正なる審査のうえ毎年１～２件程度採択しており、現在までに世界各国で7冊の翻訳書が出版されています。

No.	（原）書名	著者	訳者	発行	刊行年月	言語
1	民間伝承論・郷土生活の研究法	柳田国男	王 暁葵、王 京、何 彬	学苑出版社	平成22年2月（2010）	中国語
2	十返舎一九作品選集 ※第2回板雨翻訳賞大賞受賞（2010年10月）	十返舎一九	康 志賢	ソミョン出版	平成22年5月15日（2010）	韓国語
3	明治の文化	色川大吉	NOUR El Nahas	Nawafez Society	平成23年11月（2011）	アラビア語
4	風土	和辻哲郎	オギュスタン・ベルク	CNRS ÉDITIONS	平成23年1月（2011）	フランス語
5	一揆	勝俣鎮夫	ピエール・フランソワ・スイリ、印出忠夫、中島圭一	CNRS ÉDITIONS	平成23年9月（2011）	フランス語
6	宮澤賢治作品集	宮澤賢治	マーヒル・エルシリビーニー	サナービル・ブックス	平成26年3月（2014）	アラビア語
7	漢訳与謝蕪村俳句集	与謝蕪村	王　岩	人民文学出版社	平成27年3月（2015）	中国語

※板雨翻訳賞：高麗大学日本研究センター日本翻訳院が平成20（2008）年3月に創設。韓国内の日本研究の基盤を整え、日韓翻訳を通じて日本文学の紹介および大衆化に尽力してきた同翻訳院長板雨金春美高麗大名誉教授の業績を記念するもの。

本書は江戸時代の大衆小説である原作の文学的、文化的価値をいかんなく伝える翻訳であり、学術的意義が大きいという評価を受けた。

（以上、同センター*Newsletter* Vol.3 2010.10.21 P.24より）

①大学院生の進路
1）課程博士

	入学年度	氏名	国籍	修了・退学年月日	学位取得年月日	学位取得年度	修了後の就職先	退学理由・その後の就職先等	現職[平成25年12月一部更新]
1	平成4年度	青木　淳	日本	平成7年3月23日	平成7年3月23日	H6	高知女子大学　助教授		多摩美術大学造形表現学部　准教授
2	平成4年度	禹　鍾泰	韓国	平成8年3月21日	平成8年3月21日	H7	京都文教大学　助教授		京都文教大学　教授
3	平成4年度（10月）	楊　薇	中国	平成7年9月30日	単位認定退学			一身上の理由のため退学	不明
4	平成4年度（10月）	Shivani Nandi	インド	平成8年5月9日	平成9年3月24日	H8	製薬会社勤務		アメリカ在住
5	平成5年度	銭　国紅	中国	平成8年3月21日	平成8年3月21日	H7	大妻女子大学　助教授		大妻女子大学比較文化学部教授
6	平成5年度	小林　博行	日本	平成8年9月30日	平成8年9月30日	H8	京都大学人文科学研究所　助手		中部大学人文学部地理学専攻　准教授
7	平成5年度	武田　玲子	日本	平成10年3月31日	単位認定退学				
8	平成5年度	津田（内田）順子	日本	平成9年3月24日	平成9年3月24日	H8	国際日本文化研究センター 中核的研究機関研究員		国立歴史民俗博物館　准教授(新姓　内田）
9	平成6年度	小那覇　M　セシリア	アルゼンチン	平成9年3月24日	平成9年3月24日	H8	同志社大学、京都外国語大学、 国際日本文化研究センター		アルゼンチンラプラタ国立大学国際関係研究所　准教授
10	平成6年度	嘉本　伊都子	日本	平成9年9月30日	平成9年9月30日	H9	京都女子大学現代社会学部現代社会学科　講師		京都女子大学現代社会学部現代社会学科　教授
11	平成6年度	江　林	中国	平成10年3月31日	単位認定退学				
12	平成6年度	多田　伊織	日本	平成9年3月24日	平成9年3月24日	H8	白鳳女子短期大学国際人間学科　非常勤講師		京都大学人文学研究所　教務補佐員
13	平成6年度	横田（鈴木）　則子	日本	平成9年9月30日	平成9年9月30日	H9	奈良女子大学　講師		奈良女子大学生活環境学部　教授
14	平成7年度	石津　達也	日本	平成10年9月30日	単位認定退学				
15	平成7年度	加藤　善朗	日本	平成11年3月24日	平成11年3月24日	H10	種智院大学・龍谷大学　非常勤講師		京都西山短期大学仏教学科　教授
16	平成7年度	土居　浩	日本	平成11年3月24日	平成11年3月24日	H10	ものつくり大学　講師		ものつくり大学技能工芸学部　准教授
17	平成7年度	Bart GAENS	ベルギー	平成11年3月24日	平成11年3月24日	H10			ヘルシンキ大学世界文化研究科日本語日本文化　教授
18	平成8年度	尾鍋　智子	日本	平成13年9月28日	平成13年9月28日	H13	同志社大学、京都産業大学　非常勤講師		大阪大学未来戦略機構　特任准教授（常勤）
19	平成8年度	申　昌浩	韓国	平成12年3月24日	平成12年3月24日	H11			京都精華大学人文学部　准教授
20	平成8年度	廣重　友子	日本	平成13年3月31日	単位認定退学			結婚	
21	平成8年度	平井　晶子	日本	平成11年5月31日	平成14年3月22日	H13	日本学術振興会　特別研究員		神戸大学大学院人文学研究科　准教授
22	平成9年度	戦　暁梅	中国	平成13年3月23日	平成13年3月23日	H12			東京工業大学外国語教育研究センター　准教授
23	平成9年度	今枝　久美子	日本	平成15年3月31日	単位認定退学				
24	平成9年度	橋本　裕子	日本	平成14年3月31日	単位認定退学			国立科学博物館　人類研究部	京都大学霊長類研究所　教務補佐員
25	平成9年度	半澤(武内）　恵美子	日本	平成15年9月30日	平成16年9月30日	H16	国際日本文化研究センター　教務補佐員		秋田大学教育文化学部　准教授
26	平成9年度	日比　勝敏	日本	平成13年9月30日	単位認定退学			文筆業	
27	平成10年度	小川　順子	日本	平成16年3月24日	平成16年3月24日	H15	中部大学人文学部コミュニケーション学科　講師		中部大学人文学部 コミュニケーション学科　准教授
28	平成10年度	片平　幸	日本	平成15年3月31日	平成15年3月31日	H14	国際日本文化研究センター　教務補佐員		桃山学院大学国際教養学部　准教授
29	平成10年度	唐　権	中国	平成14年3月22日	平成14年3月22日	H13			華東師範大学外語学院　准教授
30	平成10年度	松村　薫子	日本	平成15年3月31日	平成16年3月24日	H15	国際日本文化研究センター　機関研究員		大和ミュージアム　呉市産業部学芸課　学芸員（主事）
31	平成10年度	渡邊　綾香	日本	平成14年9月30日	単位認定退学			結婚	
32	平成11年度	伊藤　奈保子	日本	平成16年3月31日	平成16年9月30日	H16	国際日本文化研究センター　教務補佐員		広島大学大学院文学研究科　准教授

①大学院生の進路
1）課程博士

	入学年度	氏名	国籍	修了・退学年月日	学位取得年月日	学位取得年度	修了後の就職先	退学理由・その後の就職先等	現職[平成25年12月一部更新]
33	平成11年度	串崎　真志	日本	平成12年3月31日	大阪大学大学院平成11年3月（人間科学）修了本専攻　中途退学			同志社女子大学生活科学部　専任講師	関西大学文学部　教授
34	平成11年度	森本　一彦	日本	平成15年3月24日	平成15年3月24日	H14	京都大学　非常勤講師		京都大学GCOEプログラム「親密国と公共圏の再編成を目指すアジア拠点」 特任准教授
35	平成12年度	伊東　章子	日本	平成15年9月30日	平成15年9月30日	H15	ミツネタ大学研究機関　研究員		名古屋大学大学院国際言語文化研究科　特任講師
36	平成12年度	永松　敦	日本	平成15年3月24日	平成15年3月24日	H14	椎葉民俗芸能博物館　主任学芸員		宮崎公立大学人文学部　教授
37	平成12年度	ウリケル　バハドゥル　ボアチ	トルコ	平成17年3月24日	平成17年3月24日	H16			駐日トルコ共和国大使館　専門官
38	平成13年度	岩井　茂樹	日本	平成16年9月30日	平成16年9月30日	H16	国際日本文化研究センター　技術補佐員		大阪大学日本語日本文化研究センター　准教授
39	平成13年度	中谷　正和	日本	平成17年3月24日	平成17年3月24日	H16			
40	平成13年度	那須　浩郎	日本	平成16年3月24日	平成16年3月24日	H15			総合研究大学院大学学融合研究センター　特別研究員
41	平成13年度	武藤秀太郎	日本	平成17年3月31日	平成20年3月19日	H19			新潟大学大学院現代社会文化研究科　准教授
42	平成13年度	ミルザアフメドフ　ミルヴォヒド	ウズベキスタン	平成16年3月31日	単位認定退学			一身上の理由のため退学	
43	平成14年度	石川　肇	日本	平成18年9月30日	平成27年3月24日	H26		横浜隼人高等学校 非常勤講師	国際日本文化研究センター　機関研究員
44	平成15年度	佐治　靖	日本	平成21年3月31日	単位認定退学			福島県立博物館　学芸事務	福島県立博物館　学芸事務
45	平成15年度	戸矢　理衣奈	日本	平成22年3月31日	平成22年9月30日	H22	株式会社　IRIS　代表取締役		株式会社　IRIS　代表取締役
46	平成15年度	堀　まどか	日本	平成20年9月30日	平成21年9月30日	H21			韓国嶺南大学日本語日本文学科　講師
47	平成15年度	丁　蕾	中国	平成17年12月31日	単位認定退学			一身上の理由のため退学	通化師範学院
48	平成15年度	李　偉	中国	平成20年3月19日	平成20年3月19日	H19	国際日本文化研究センター　機関研究員		同済大学日本学研究所　研究員
49	平成16年度	酒井　順一郎	日本	平成20年3月19日	平成20年3月19日	H19	東北師範大学　副教授		長崎外国語大学外国語学部国際コミュニケーション学科　教授
50	平成16年度	澤田　晴美	日本	平成21年3月24日	平成21年3月24日	H20	群馬県立女子大学　非常勤講師		群馬県立女子大学　非常勤講師
51	平成16年度	金　炳辰	韓国	平成21年3月31日	平成26年3月20日	H25	京都精華大学　非常勤講師		京都女子大学　非常勤講師
52	平成16年度	黄　幼欣	台湾	平成21年3月31日	単位認定退学			南台科技大学　講師	南台科技大学　講師
53	平成16年度	姜　鶯燕	中国	平成21年3月31日	平成24年9月28日	H24	国際日本文化研究センター　事務補佐員（笠谷研）		国際日本文化研究センター　機関研究員
54	平成17年度	中野　洋平	日本	平成22年3月24日	平成22年3月24日	H21	国際日本文化研究センター　技術補佐員 京都学園大学　非常勤講師		国際日本文化研究センター　機関研究員 京都学園大学　非常勤講師
55	平成17年度	横山　輝樹	日本	平成22年3月31日	平成25年3月22日	H24	国際日本文化研究センター　事務補佐員（図書館）		伊賀市総務部総務課　調査員
56	平成17年度	コルネーエヴァ　スヴェトラーナ	ロシア	平成22年3月31日	平成26年3月20日	H25	帝京大学文学部日本文化学科　助教		帝京大学文学部日本文化学科　助教
57	平成17年度	ハイエク　マティアス	フランス	平成22年3月31日	単位認定退学			パリ第7大学　講師	パリ第7大学　准教授
58	平成18年度	小山　周子	日本	平成24年9月30日	平成26年3月20日	H25	東京都江戸東京博物館　　学芸員		東京都江戸東京博物館　　学芸員
59	平成18年度	梅　定娥	中国	平成22年3月24日	平成22年3月24日	H21	国際日本文化研究センター　プロジェクト研究員		南京郵電大学外国語学院日本語系　常勤講師
60	平成19年度	鈴木　堅弘	日本	平成24年9月28日	平成24年9月28日	H24	京都精華大学共通教育センター　助手		京都精華大学　非常勤講師
61	平成19年度	長門　洋平	日本	平成24年3月23日	平成24年3月23日	H23	国際日本文化研究センター　機関研究員 京都外国語大学　非常勤講師		国際日本文化研究センター　機関研究員 花園大学　非常勤講師
62	平成20年度	大塚　絢子	日本	平成25年9月30日	単位認定退学			クラシック音楽雑誌の編集	クラシック音楽雑誌の編集
63	平成20年度	岡本　貴久子	日本	平成26年3月20日	平成26年3月20日	H25	未定		未定

①大学院生の進路
1）課程博士

	入学年度	氏名	国籍	修了・退学年月日	学位取得年月日	学位取得年度	修了後の就職先	退学理由・その後の就職先等	現職[平成25年12月一部更新]
64	平成20年度	徳永　誓子	日本	平成25年3月22日	京都大学大学院 平成11年3月修了 本専攻 平成25年3月22日	H24	国際日本文化研究センター　機関研究員		国際日本文化研究センター　機関研究員
65	平成20年度	陳　凌虹	中国	平成24年3月23日	平成24年3月23日	H23	近畿大学　非常勤講師		華東師範大学　講師
66	平成21年度	門脇　朋裕	日本	平成26年3月31日	単位認定退学			帝京大学文学部日本文化学科 非常勤講師	
67	平成21年度	楊　爽	中国	平成26年9月30日	単位認定退学			退学	
68	平成22年度	漆崎　まり	日本	平成26年9月29日	平成26年9月29日	H26	東海大学札幌校教養教育センター　非常勤講師		国際日本文化研究センター　機関研究員
69	平成22年度	九里　文子	日本						
70	平成22年度	韓　玲玲	中国	平成27年3月24日	平成27年3月24日	H26	未定		
71	平成22年度	李　ユンヒ	韓国						
72	平成23年度	アントン　ルイス　カピストラノ　セビリア	フィリピン	平成27年3月24日	平成27年3月24日	H26	九州大学基幹教育院　講師		
73	平成23年度	簡　中昊	台湾						
74	平成23年度	王　莞晗	中国						
75	平成24年度	西田　彰一	日本						
76	平成24年度	栄　元	中国						
77	平成25年度	宇佐美　智之	日本						
78	平成25年度	小泉　友則	日本						
79	平成25年度	光平　有希	日本						
80	平成25年度	山村　奨	日本						
81	平成26年度	大石　真澄	日本						
82	平成26年度	坂　知尋	日本						
83	平成26年度	春藤　献一	日本						
84	平成26年度	ゴウランガ　チャラン　プラダーン	インド						
85	平成26年度	フレデリック　ウェストマン	スウェーデン	平成27年3月31日	中途退学			1年で退学・帰国	
86	平成27年度	片岡　真伊	日本						
87	平成27年度	田村　美由紀	日本						
88	平成27年度	増田　斎	日本						
89	平成27年度	南　直子	日本						

・セルが水色に色づけされているのは、それぞれ次の場合。
番号欄：退学
学位取得年月日欄：論文博士による学位取得
就職先・現職欄：外国機関

	氏名	国籍	学位授与日	学位論文題目	紹介教員	職業	現職[平成25年5月一部修正]
1	王　勇	中国	平成8年9月30日	聖徳太子と中国文化―歴史を動かした慧思後身説			
2	シワニ・ナンディ	インド	平成9年3月24日	Socio-Technological Issues of Technology Transfer A Specific Case Study of the Maruti-Suzuki Collaboration			
3	マノジ・Lシュレスタ	ネパール	平成9年3月24日	企業の多国籍化と技術移転―ポスト雁行形態の経営戦略			
4	鈴木　貞美	日本	平成9年3月24日	梶井基次郎研究		国際日本文化研究センター　教授	
5	伊藤　賢次	日本	平成10年3月24日	東アジアにおける日本企業の経営―経営のグローバル化と「日本的経営」の移転			
6	北川　勝彦	日本	平成11年3月24日	日本―南アフリカ通商関係史研究			
7	胡口　靖夫	日本	平成11年3月24日	近江朝と渡来人―百済鬼室氏を中心として			
8	高田　康考	日本	平成11年3月24日	生活文化と世相の変容に関する研究―20世紀日本における高度経済成長期を中心として			
9	濱口　惠俊	日本	平成11年9月30日	日本研究原論―「関係体」としての日本人と日本社会		国際日本文化研究センター　教授	
10	チャオ　埴原　美鈴	日本	平成13年9月28日	Japan Literacy in Australia – A Changing Demand over Eighty Years –			
11	北川　淳子	日本	平成16年9月30日	The Nature and Development of Chestnut (Castanea crenata) and Horse Chestnut (Aesculus turbinata) Culture in Japan			
12	岡村　敬二	日本	平成18年3月24日	日満文化協会の歴史―創設から解散まで		京都ノートルダム女子大学　教授	
13	香川　雅信	日本	平成18年9月29日	日本人の妖怪観の変遷に関する研究―近世後期の「妖怪娯楽」を中心に		兵庫県立歴史博物館	
14	山口　欧志	日本	平成23年9月30日	古代社会の景観考古学的研究―遺跡のデジタルドキュメンテーションと景観分析―	宇野　隆夫	日本学術振興会特別研究員PD （受入機関　国際日本文化研究センター）	日本学術振興会特別研究員PD （受入機関　帝塚山大学）
15	姜　鶯燕	中国	平成24年9月28日	徳川幕臣の身分的変容に関する研究 ―いわゆる「御家人株の売買」の問題を中心に―	笠谷　和比古	国際日本文化研究センター 事務補佐員（笠谷研）	国際日本文化研究センター 機関研究員
16	柴田　依子	日本	平成25年3月22日	ポール＝ルイ・クーシューと日本―その生涯とフランスにおける俳句受容	稲賀　繁美		
17	野呂田　純一	日本	平成25年3月22日	幕末・明治の美意識と美術政策	稲賀　繁美		
18	青野　正明	日本	平成26年3月20日	朝鮮総督府の神社政策と国家神道の論理―1930年代を中心に―	磯前　順一		
19	根川　幸男	日本	平成26年3月20日	戦前・戦中期ブラジルにおける日系移民子弟教育の史的研究	井上　章一		
20	金　炳辰	韓国	平成26年3月20日	革命的サンディカリスト大杉栄一「生の創造」に基づいた革命展望一	劉　建輝		
21	コルネーエヴァ スヴェトラーナ	ロシア	平成26年3月20日	江戸時代前期の喧嘩口論事件の処理に関する歴史社会学的考察 一盛岡藩と加賀藩の事例を中心に一	小松　和彦		
22	石川　肇	日本	平成27年3月24日	舟橋聖一論 ― 「抵抗の文学」を問い直す	劉　建輝	国際日本文化研究センター プロジェクト研究員	国際日本文化研究センター　機関研究員

平成26年度総研大経費（予算の執行報告）

2015/4/16専攻委員会

	予算額	執行額	残額
平成26年度国際日本研究専攻 専攻運営費（物件費）	16,884,000	17,781,816	△ 897,816
所管　研究協力課　総研大【標準教育研究経費】	5,484,000	7,416,057	△ 1,932,057
図書経費（ILL文献複写含む）	850,000	1,189,465	△ 339,465
大学院生研究プロジェクト経費（@¥150,000*17）	2,550,000	1,303,311	1,246,689
大学院生企画による研修	650,000	625,950	24,050
健康診断経費見込額（@￥8,500*17）	144,500	117,396	27,104
備品及び消耗品（購入見込額）	1,014,500	2,587,534	△ 1,573,034
国際日本研究専攻概要（平成26年度）　和文・英文	75,000	196,376	△ 121,376
専攻広報ポスター作製・発送	200,000	0	200,000
その他	0	1,396,025	△ 1,396,025
所管　各総研大担当教員　総研大【標準教育研究費】 ＝総研大担当教員研究費（別紙内訳あり）	4,600,000	3,680,314	919,686
所管　研究協力課　総研大【人件費（非常勤職員）】 ＝契約職員雇用経費（給与分）	4,000,000	4,265,661	△ 265,661
所管　研究協力課　総研大【人件費（総研大RA経費）】 ＝学生支援相談員1名、学生企画委員2名、教育研究支援員1名	2,400,000	2,244,606	155,394
所管　研究協力課　総研大【標準教育研究経費2】 ＝学生企画委員旅費@2名	300,000	80,690	219,310
所管　資料課　総研大【標準教育研究経費】 ＝学生の文献複写費（資料課配分）	100,000	94,488	5,512

	予算額	執行額	残額
大学院調整手当・管理職手当　総研大【人件費（教員）】	14,963,000	14,065,184	897,816
教員人件費	13,747,000	12,849,512	897,488
研究科長調整手当	1,216,000	1,215,672	328

配分総計	31,847,000	31,847,000	**0**

以下【特定教育研究経費】追加配分

総研大学生派遣事業	予算額	執行額	残額
特定教育研究経費3	205,650	205,650	0

新入生確保のための広報的事業経費（概要作成）	予算額	執行額	残額
特定教育研究経費	625,000	625,000	0

新入生確保のための広報的事業経費（海外渡航）	予算額	執行額	残額
特定教育研究経費2	400,000	400,000	0

人件費（研究科長裁量経費）	予算額	執行額	残額
特定教育研究経費4	1,000,000	1,000,000	0

新入生確保のための広報的事業経費（海外渡航）	予算額	執行額	残額
特定教育研究経費5	174,000	174,000	0

※当初配分以降、総研大より追加配分された予算については、「特定教育研究経費」として、随時配分する。

国際日本文化研究センターにおける所長裁量経費の配分基本方針

平成20年 7月 2日
所　長　裁　定

国際日本文化研究センターにおける所長裁量経費の配分については、研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るため、所長の裁量により、次の項目に対し必要な経費を措置することを基本方針とする。

1．研究活動等推進経費

独創的・萌芽的プロジェクト等の推進、国内外の研究機関・研究者との連携、若手研究者の育成、外部資金獲得に向けた研究助成等において支援する必要があると所長が判断したもの。

2．基盤設備充実費

研究等の高度化・活性化に必要な設備でかつ緊急性が高いと所長が判断したもの。

3．施設環境整備費

研究等の施設環境整備に必要な経費のうち、緊急性・重要性が高いと所長が判断したもの。

4．その他

上記以外で、運営上特に必要があると所長が判断したもの。

※上記のうち、公募するものについては、調整会議等の意見を聞いた上で、所長が可否を決定する。

事　務　連　絡
平成２１年　月　日

委員会委員長
専任教員　　各位
課　長

総務課長　仲井　章

平成２１年度所長裁量に係る研究経費等の公募について

標記のことについて、本センターにおける研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るため、所長のリーダーシップにより、下記項目について、予算の範囲内で必要な経費を措置することにしております。

つきましては、この研究経費等の配分を希望される場合は、別添「国際日本文化研究センターにおける所長裁量経費の配分基本方針」を参照し、これらの経費の趣旨をご理解のうえ、下記により総務課財務企画係までご提出願います。

記

１．申請条件（下記項目で平成２１年度内に完了する事業）
　１）研究活動等推進経費（１件につき　　１００万円以内）
　２）基盤設備充実費　　（１件につき　　２００万円以内）
　３）施設環境整備費　　（１件につき　　５００万円以内）
　４）その他（上記以外）

２．提出書類
　１）所長裁量に係る研究経費等執行計画調書（別紙様式）
　　（メールにて提出願います）
　　※様式はサイボウズにあります。
　　（ファイル管理―総務課―財務企画係―所長裁量経費関係）
　　※科学研究費補助金等の外部資金獲得の有無を必ず記載願います。

　２）積算資料
　　設備品、業務委託等：取扱業者が発行する見積書等
　　旅費：日程表、運賃見積書等
　　謝金：単価、時間数等を明記

３．提出期限　平成２１年６月１９日（金）　１７：００まで

■本件に関する連絡及び問い合わせ先
総務課財務企画係　内線 2022･2023
e-mail:soumu@nichibun.ac.jp

事　務　連　絡
平成２２年５月１３日

委員会委員長
専任教員　　各位
課　長

総務課長　仲井　章

平成２２年度所長裁量等に係る研究経費等の公募について

標記のことについて、本センターにおける研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るため、所長のリーダーシップにより、下記項目について、予算の範囲内で必要な経費を措置することにしております。

つきましては、この研究経費等の配分を希望される場合は、別添「国際日本文化研究センターにおける所長裁量経費の配分基本方針」を参照し、これらの経費の趣旨をご理解のうえ、下記により総務課財務企画係までご提出願います。

なお、経費の財源としては、所長裁量経費及び予備費を予定しております。

記

１．申請条件（下記項目で平成２２年度内に完了する事業）
　１）研究活動等推進経費（１件につき　５０万円以内）
　２）基盤設備充実費　（１件につき　５０万円以内）
　３）施設環境整備費　（１件につき　５０万円以内）
　４）その他（上記以外）

２．提出書類
　１）所長裁量等に係る研究経費等執行計画調書（別紙様式）
　　（メールにて提出願います）
　　※様式はサイボウズにあります。
　　（ファイル管理―総務課―財務企画係―所長裁量経費関係）
　　※科学研究費補助金等の外部資金獲得の有無を必ず記載願います。

　２）積算資料
　　設備品、業務委託等：取扱業者が発行する見積書等
　　旅費：日程表、運賃見積書等
　　謝金：単価、時間数等を明記

３．提出期限　平成２２年５月２４日（月）　１７：００まで

■本件に関する連絡及び問い合わせ先
総務課財務企画係　内線 6211･6212
e-mail:soumu@nichibun.ac.jp

事　務　連　絡
平成２３年 ４ 月２１ 日

委員会委員長
専 任 教 員　　各位
課　長

総　務　課　長

平成２３年度所長裁量等に係る研究経費等の公募について

標記のことについて、本センターにおける研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るため、所長のリーダーシップにより、下記項目について、予算の範囲内で必要な経費を措置することにしております。

つきましては、この経費等の配分を希望される場合は、別添「国際日本文化研究センターにおける所長裁量経費の配分基本方針」（以下「配分方針」という）を参照し、経費の趣旨をご理解のうえ、下記により総務課財務企画係までご提出願います。

記

１．申請条件

（１）配分方針の下記項目に該当する経費で平成２３年度内に完了する事業であること。（１件につき１００万円以内）

１）研究活動等推進経費
２）基盤設備充実費
３）施設環境整備費
４）その他

（２）事業完了後は、所長裁量経費実績報告書（別紙様式２）を提出すること。

２．提出書類

（１）所長裁量等に係る研究経費等執行計画調書（別紙様式１）
（メール又は持参によりご提出願います）
※様式はサイボウズにあります。
（ファイル管理―総務課―財務企画係―所長裁量経費関係）
※科学研究費補助金の申請及び外部資金獲得の有無を必ず記載願います。

（２）積算資料
設備品・業務委託等：取扱業者が発行する見積書等
旅　費：日程表、運賃見積書等
謝　金：単価、時間数等を明記

３．提出期限　平成２３年５月６日（金）　１７：００まで

■本件に関する連絡及び問い合わせ先
総務課財務企画係（松堂・山縣）内線 6211･6212
e-mail:soumu@nichibun.ac.jp

H23.5.18
調整会議

所長裁量経費（公募分）の査定(案)について

平成23年4月20日付調整会議による「査定の目安」にもとづき、配分割合の案を下記の（案1）から（案4）のとおり算出しました。
（15件の上位3割：4．5位、上位7割：10．5位）

（案1）4位までに100%、5位から10位までに80%、11位以下に60%とした場合。

応募順	応募者氏名 / 配点	①事業内容 1～3点	②科研費申請 有1点 無0点	③外部資金獲得 有1点 無0点	④共同研究会 代表者1点	⑤大学院主任指導 有1点 無0点	⑥若手研究者 44以下:2 45～49:1	⑦所内運営貢献度 執行部2点 委員(室)長1点	合計点数	順位	査定配分割合 %	要求額 (千円)	配分額(案) (千円)	備考（「①事業内容」配点時の意見）
1	松田准教授	2.0	1	1	0	0	1	1	6.0	4	100%	1,000	1,000	翻訳プロジェクトへの申請では？
2	笠谷教授	1.5	0	1	1	1	0	0	4.5	13	60%	1,000	600	別途の補助を受けている
3	宇野教授	2.5	1	1	0	0	0	1	5.5	8	80%	1,000	800	企画室のプロジェクトに組み込むべき
4	佐野准教授	1.8	1	1	0	0	2	0	5.8	6	80%	350	280	
5	倉本教授	2.5	1	0	1	0	0	1	5.5	8	80%	1,000	800	企画室のプロジェクトに組み込むべき
6	森准教授	2.3	1	1	0	0	2	0	6.3	3	100%	1,000	1,000	企画室のプロジェクトに組み込むべき
7	山田教授	2.3	1	0	0	1	1	0	5.3	10	80%	400	320	企画室のプロジェクトに組み込むべき
8	荒木教授	2.0	1	1	1	1	0	0	6.0	4	100%	1,000	1,000	交流室事業に組み込めないか
9	小松教授1	2.7	0	0	1	1	0	2	6.7	1	100%	1,000	1,000	企画室のプロジェクトに組み込みたい
10	小松教授2	2.7	0	0	1	1	0	2	6.7	1	100%	1,000	1,000	本来は「叢書」で刊行すべきもの
11	早川教授1	2.0	0	0	0	1	0	2	5.0	11	60%	251	151	企画室事業との切り分けを明確にしたい
12	早川教授2	2.7	0	0	0	1	0	2	5.7	7	80%	1,000	800	企画室事業に組み込むべき
13	白幡教授1	2.3	0	0	0	1	0	1	4.3	14	60%	700	420	
14	白幡教授2	2.8	0	0	0	1	0	1	4.8	12	60%	500	300	企画室事業に組み入れたい
15	安田教授	0.3	1	1	0	0	0	0	2.3		0%	1,000	0	どの予算をあてるか所として検討
	合計 15 名											12,201	9,471	

H23年度財源		
	裁量経費	14,273
	予備費	4,893
	財源計	19,166
配分残額		9,695

（案2）5位までに100%、6位から11位までに80%、12位以下に60%とした場合。

応募順	応募者氏名 / 配点	①事業内容 1～3点	②科研費申請 有1点 無0点	③外部資金獲得 有1点 無0点	④共同研究会 代表者1点	⑤大学院主任指導 有1点 無0点	⑥若手研究者 44以下:2 45～49:1	⑦所内運営貢献度 執行部2点 委員(室)長1点	合計点数	順位	査定配分割合 %	要求額 (千円)	配分額(案) (千円)	備考（「①事業内容」配点時の意見）
1	松田准教授	2.0	1	1	0	0	1	1	6.0	4	100%	1,000	1,000	翻訳プロジェクトへの申請では？
2	笠谷教授	1.5	0	1	1	1	0	0	4.5	13	60%	1,000	600	別途の補助を受けている
3	宇野教授	2.5	1	1	0	0	0	1	5.5	8	80%	1,000	800	企画室のプロジェクトに組み込むべき
4	佐野准教授	1.8	1	1	0	0	2	0	5.8	6	80%	350	280	
5	倉本教授	2.5	1	0	1	0	0	1	5.5	8	80%	1,000	800	企画室のプロジェクトに組み込むべき
6	森准教授	2.3	1	1	0	0	2	0	6.3	3	100%	1,000	1,000	企画室のプロジェクトに組み込むべき
7	山田教授	2.3	1	0	0	1	1	0	5.3	10	80%	400	320	企画室のプロジェクトに組み込むべき
8	荒木教授	2.0	1	1	1	1	0	0	6.0	4	100%	1,000	1,000	交流室事業に組み込めないか
9	小松教授1	2.7	0	0	1	1	0	2	6.7	1	100%	1,000	1,000	企画室のプロジェクトに組み込みたい
10	小松教授2	2.7	0	0	1	1	0	2	6.7	1	100%	1,000	1,000	本来は「叢書」で刊行すべきもの
11	早川教授1	2.0	0	0	0	1	0	2	5.0	11	80%	251	201	企画室事業との切り分けを明確にしたい
12	早川教授2	2.7	0	0	0	1	0	2	5.7	7	80%	1,000	800	企画室事業に組み込むべき
13	白幡教授1	2.3	0	0	0	1	0	1	4.3	14	60%	700	420	
14	白幡教授2	2.8	0	0	0	1	0	1	4.8	12	60%	500	300	企画室事業に組み入れたい
15	安田教授	0.3	1	1	0	0	0	0	2.3		0%	1,000	0	どの予算をあてるか所として検討
	合計 15 名											12,201	9,521	

H23年度財源		
	裁量経費	14,273
	予備費	4,893
	財源計	19,166
配分残額		9,645

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
（8）所長裁量経費について

（案3）4位までに100%、5位から10位までに70%、11位以下に50%とした場合。

応募順	応募者氏名 / 配点	①事業内容 1～3点	②科研費申請 有1点 無0点	③外部資金獲得 有1点 無0点	④共同研究会 代表者1点	⑤大学院主任指導 有1点 無0点	⑥若手研究者 44以下:2 45～49:1	⑦所内運営貢献度 執行部2点 委員(室)長1点	合計点数	順位	査定配分割合 %	要求額 (千円)	配分額（案） (千円)	備考（「①事業内容」配点時の意見）
1	松田准教授	2.0	1	1	0	0	1	1	6.0	4	100%	1,000	1,000	翻訳プロジェクトへの申請では？
2	笠谷教授	1.5	0	1	1	1	0	0	4.5	13	50%	1,000	500	別途の補助を受けている
3	宇野教授	2.5	1	1	0	0	0	1	5.5	8	70%	1,000	700	企画室のプロジェクトに組み込むべき
4	佐野准教授	1.8	1	1	0	0	2	0	5.8	6	70%	350	245	
5	倉本教授	2.5	1	0	1	0	0	1	5.5	8	70%	1,000	700	企画室のプロジェクトに組み込むべき
6	森准教授	2.3	1	1	0	0	2	0	6.3	3	100%	1,000	1,000	企画室のプロジェクトに組み込むべき
7	山田教授	2.3	1	0	0	1	1	0	5.3	10	70%	400	280	企画室のプロジェクトに組み込むべき
8	荒木教授	2.0	1	1	1	1	0	0	6.0	4	100%	1,000	1,000	交流室事業に組み込めないか
9	小松教授1	2.7	0	0	1	1	0	2	6.7	1	100%	1,000	1,000	企画室のプロジェクトに組み込みたい
10	小松教授2	2.7	0	0	1	1	0	2	6.7	1	100%	1,000	1,000	本来は「叢書」で刊行すべきもの
11	早川教授1	2.0	0	0	0	1	0	2	5.0	11	50%	251	126	企画室事業との切り分けを明確にしたい
12	早川教授2	2.7	0	0	0	1	0	2	5.7	7	70%	1,000	700	企画室事業に組み込むべき
13	白幡教授1	2.3	0	0	0	1	0	1	4.3	14	50%	700	350	
14	白幡教授2	2.8	0	0	0	1	0	1	4.8	12	50%	500	250	企画室事業に組み入れたい
15	安田教授	0.3	1	1	0	0	0	0	2.3		0%	1,000	0	どの予算をあてるか所として検討
	合計 15 名											12,201	8,851	

H23年度財源		
	裁量経費	14,273
	予備費	4,893
	財源計	19,166
配分残額		10,316

（案4）15件のうち5位までに100%、6位から11位までに70%、12位以下に50%とした場合。

応募順	応募者氏名 / 配点	①事業内容 1～3点	②科研費申請 有1点 無0点	③外部資金獲得 有1点 無0点	④共同研究会 代表者1点	⑤大学院主任指導 有1点 無0点	⑥若手研究者 44以下:2 45～49:1	⑦所内運営貢献度 執行部2点 委員(室)長1点	合計点数	順位	査定配分割合 %	要求額 (千円)	配分額（案） (千円)	備考（「①事業内容」配点時の意見）
1	松田准教授	2.0	1	1	0	0	1	1	6.0	4	100%	1,000	1,000	翻訳プロジェクトへの申請では？
2	笠谷教授	1.5	0	1	1	1	0	0	4.5	13	50%	1,000	500	別途の補助を受けている
3	宇野教授	2.5	1	1	0	0	0	1	5.5	8	70%	1,000	700	企画室のプロジェクトに組み込むべき
4	佐野准教授	1.8	1	1	0	0	2	0	5.8	6	70%	350	245	
5	倉本教授	2.5	1	0	1	0	0	1	5.5	8	70%	1,000	700	企画室のプロジェクトに組み込むべき
6	森准教授	2.3	1	1	0	0	2	0	6.3	3	100%	1,000	1,000	企画室のプロジェクトに組み込むべき
7	山田教授	2.3	1	0	0	1	1	0	5.3	10	70%	400	280	企画室のプロジェクトに組み込むべき
8	荒木教授	2.0	1	1	1	1	0	0	6.0	4	100%	1,000	1,000	交流室事業に組み込めないか
9	小松教授1	2.7	0	0	1	1	0	2	6.7	1	100%	1,000	1,000	企画室のプロジェクトに組み込みたい
10	小松教授2	2.7	0	0	1	1	0	2	6.7	1	100%	1,000	1,000	本来は「叢書」で刊行すべきもの
11	早川教授1	2.0	0	0	0	1	0	2	5.0	11	70%	251	176	企画室事業との切り分けを明確にしたい
12	早川教授2	2.7	0	0	0	1	0	2	5.7	7	70%	1,000	700	企画室事業に組み込むべき
13	白幡教授1	2.3	0	0	0	1	0	1	4.3	14	50%	700	350	
14	白幡教授2	2.8	0	0	0	1	0	1	4.8	12	50%	500	250	企画室事業に組み入れたい
15	安田教授	0.3	1	1	0	0	0	0	2.3		0%	1,000	0	どの予算をあてるか所として検討
	合計 15 名											12,201	8,901	

H23年度財源		
	裁量経費	14,273
	予備費	4,893
	財源計	19,166
配分残額		10,265

事　務　連　絡
平成２４年　９月　５日

委員会委員長
専任教員　　各位
課　長

総　務　課　長

平成２４年度所長裁量等に係る研究経費等の公募について

標記のことについて、本センターにおける研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るため、所長のリーダーシップにより、下記項目について、予算の範囲内で必要な経費を措置することにしております。

つきましては、この経費等の配分を希望される場合は、別添「国際日本文化研究センターにおける所長裁量経費の配分基本方針」（以下「配分方針」という）を参照し、経費の趣旨をご理解のうえ、下記により総務課財務企画係までご提出願います。

記

１．申請条件

（１）配分方針の下記項目に該当する経費で平成２４年度内に完了する事業であること。（１件につき１００万円以内）

１）研究活動等推進経費
２）基盤設備充実費
３）施設環境整備費
４）その他

（２）事業完了後は、所長裁量経費実績報告書（別紙様式２）を提出すること。

２．提出書類

（１）所長裁量等に係る研究経費等執行計画調書（別紙様式１）
（メール又は持参によりご提出願います）
※様式はサイボウズにあります。
（ファイル管理―総務課―財務企画係―所長裁量経費関係）
※科学研究費補助金の申請及び外部資金獲得の有無を必ず記載願います。

（２）積算資料
設備品・業務委託等：取扱業者が発行する見積書等
旅　費：日程表、運賃見積書等
謝　金：単価、時間数等を明記

３．提出期限　平成２４年９月１４日（金）　１７：００まで

■本件に関する連絡及び問い合わせ先
総務課財務企画係（松堂・吉守）内線 6211･6212
e-mail:soumu@nichibun.ac.jp

調整会議

所長裁量経費（公募分）の配分について

今年度の所長裁量経費（公募分）の配分にあたっては、配分基本方針の趣旨や昨今の予算状況等を考慮し、原則として、4．配点表の合計点数により、配分割合に一定の査定を加えることとする。

1．配点表①の事業内容については、調整会議メンバーの教員（所長除く）が、応募された事業内容（本人応募分除く）を審査のうえ採点し、その平均点を配点とする。

採点の目安　（優）3点　：　全体の3割
（良）2点　：　全体の4割
（可）1点　：　全体の3割

2．配点表②～⑦については事務的に配点し、①を含めた合計点で順位を付け、配分割合を査定する。

査定の目安　上位の　～　3割以内　：　要求額の　90～100%
4～　7割以内　：　要求額の　70～80%
8～10割以内　：　要求額の　50～60%

3．所長がその結果を調整し、最終決定する。

4．配点表（※合計点数が3点以下については、不採択対象とする）

番号	応募者氏名	①事業内容	②科研費申請	③外部資金獲得	④共同研究会	⑤大学院主任指導	⑥若手研究者	⑦所内運営貢献度	合計点数	順位	査定配分割合	要求額
	配点	1～3点	有1点 無0点	有1点 無0点	代表者1点	有1点 無0点	44以下:2 45～49:1	執行部2点 委員(室)長1点			%	（千円）
1	白幡洋三郎教授	2.00	0	0	1	1	0	2	6.00	7		980
2	白幡洋三郎教授	2.75	0	0	1	1	0	2	6.75	3		800
3	宇野隆夫教授	2.25	1	1	0	0	0	2	6.25	6		1,000
4	細川周平教授	2.60	1	0	1	0	0	0	4.60	12		1,000
5	鈴木貞美教授 劉建輝准教授	2.00	1	1	1	1	0	1	7.00	2		1,000
6	笠谷和比古教授	1.40	0	1	1	1	0	0	4.40	14		1,000
7	笠谷和比古教授	1.00	0	1	1	1	0	0	4.00	18		1,000
8	倉本一宏教授	2.25	1	1	1	0	0	2	7.25	1		1,000
9	早川聞多教授	2.40	0	0	0	1	0	1	4.40	14		1,000
10	ジョン・ブリーン教授	1.20	1	0	0	0	0	0	2.20	19		800
11	松田利彦准教授	2.00	1	1	0	0	1	1	6.00	7		1,000
12	佐野真由子准教授	1.40	1	1	1	0	2	0	6.40	5		1,000
13	磯前順一准教授	1.40	1	0	1	1	0	0	4.40	14		1,000
14	磯前順一准教授	2.40	1	0	1	1	0	0	5.40	10		500
15	瀧井一博准教授	2.60	0	1	0	0	1	1	5.60	9		800
16	榎本渉准教授	1.60	1	0	0	0	2	0	4.60	12		400
17	森洋久准教授	2.60	1	1	0	0	2	0	6.60	4		1,000
18	丸川雄三准教授	2.00	0	1	0	0	2	0	5.00	11		1,000
19	丸川雄三准教授	1.40	0	1	0	0	2	0	4.40	14		1,000
20	小松和彦所長	3.00	0	0	1	1	0	2	7.00			300
21	小松和彦所長	2.50	0	0	1	1	0	2	6.50			1,000
	合計　21　件											18,580

※上位3割(1～6位)：緑、4～7割(7～14位)：青、8割～(15位～19位)：黄
所長提案分の点数は参考値とする。

事　務　連　絡
平成２５年　４月　４日

委員会委員長
~~専任~~ 教 員　　各位
課　長

総　務　課　長

平成２５年度所長裁量等に係る研究経費等の公募について

標記のことについて、本センターにおける研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るため、所長のリーダーシップにより、下記項目について、予算の範囲内で必要な経費を措置することにしております。

つきましては、この経費等の配分を希望される場合は、別添「国際日本文化研究センターにおける所長裁量経費の配分基本方針」（以下「配分方針」という）を参照し、経費の趣旨をご理解のうえ、下記により総務課財務企画係までご提出願います。

記

１．申請条件
（１）配分方針の下記項目に該当する経費で平成２５年度内に完了する事業であること。（１件につき原則１００万円程度以内）
　１）研究活動等推進経費
　２）基盤設備充実費
　３）施設環境整備費
　４）その他
（２）事業完了後は、所長裁量経費実績報告書（別紙様式２）を提出すること。

２．提出書類
（１）所長裁量等に係る研究経費等執行計画調書（別紙様式１）
　（メール又は持参によりご提出願います）
　※様式はサイボウズにあります。
　（ファイル管理―総務課―財務企画係―所長裁量経費関係）
　※科学研究費補助金の申請及び外部資金獲得の有無を必ず記載願います。
（２）積算資料
　設備品・業務委託等：取扱業者が発行する見積書等
　旅　費：日程表、運賃見積書等
　謝　金：単価、時間数等を明記

３．提出期限　平成２５年４月１９日（金）　１７：００まで

■本件に関する連絡及び問い合わせ先
総務課財務企画係（松堂・吉守）内線 2022･6212
e-mail:soumu@nichibun.ac.jp

事　務　連　絡
平成２５年 １１月　７日

委員会委員長
専 任 教 員　　各位
特 任 教 員
課　長

総　務　課　長

平成２５年度所長裁量等に係る研究経費等の公募（第２回）について

標記のことについて、本センターにおける研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るため、所長のリーダーシップにより、下記項目について、予算の範囲内で必要な経費を措置することにしております。つきましては、この経費の配分を希望される場合は、下記により総務課財務企画係までご提出願います。

なお、今回の募集では、**緊急の事業、所長裁量経費等によってすでに進めている事業の補正、出版助成等に優先的に配分する予定です。**

記

１．申請条件
（１）下記項目に該当する経費で平成２５年度内に完了する事業であること。
１）国内外で開催する、小規模な研究集会の組織・開催（１件につき原則１００万円以内）
２）緊急を要する目的による外国人研究者の短期招へい（１件につき原則１００万円以内）
３）海外で開催される学会等での発表等のための渡航（１件につき原則５０万円以内）
４）各種の日文研プロジェクト予算の補正（１件につき原則５０万円以内）
５）高額となる出版物、特に単著への助成（共同研究成果報告書助成に準ずる）
（２）事業完了後は、所長裁量経費実績報告書（別紙様式２）を提出すること。

２．提出書類
（１）所長裁量等に係る研究経費等執行計画調書（別紙様式１）
（メール又は持参によりご提出願います）
※様式はサイボウズにあります。
（ファイル管理―総務課―財務企画係―所長裁量経費関係）
（２）積算資料
設備品・業務委託等：取扱業者が発行する見積書等
旅　費：日程表、運賃見積書等
謝　金：単価、時間数等を明記

３．提出期限　平成２５年１１月２８日（木）　１７：００まで

■本件に関する連絡及び問い合わせ先
総務課財務企画係（松堂・吉守）内線 2022･6212
e-mail:soumu@nichibun.ac.jp

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
(8) 所長裁量経費について「所長裁量経費」要求事項審査参考表

番号	応募者氏名 配点	①事業内容 1～3点	①のみ順位	②科研費申請 有1点 無0点	③外部資金獲得 有1点 無0点	④共同研究 代表者 1点	⑤大学院主任指導 有1点 無0点	⑥若手研究者 44以下:2 45～49:1	⑦所内運営貢献度 執行部:2 委員(室)長:1	②から⑦合計点数	順位	①から⑦合計点数	順位	要求額 （千円）	決定額 （千円）
1	稲賀繁美教授	2.50	3	1	1	1	1	0	0	4.00	2	6.50	2	1,200	
2	倉本一宏教授	2.50	3	1	0	1	0	0	2	4.00	2	6.50	2	1,000	
3	瀧井一博准教授	2.50	3	1	0	0	0	1	0	2.00	13	4.50	12	1,000	
4	磯前順一准教授	1.25	14	1	1	1	0	0	1	4.00	2	5.25	8	1,200	
5	郭南燕准教授	1.50	12	0	0	0	0	0	0	0.00	15	1.50	16	1,000	
6	早川聞多教授	1.50	12	1	0	0	0	0	0	1.00	14	2.50	14	1,000	
7	小松和彦所長	2.75	2	0	0	1	0	0	2	3.00	8	5.75	6	1,000	
8	細川周平教授	2.25	6	1	1	1	0	0	0	3.00	8	5.25	8	1,000	
9	榎本渉准教授	3.00	1	1	1	0	0	2	0	4.00	2	7.00	1	850	
10	佐野真由子准教授	1.25	14	1	1	1	0	2	0	5.00	1	6.25	4	850	
11	白幡洋三郎教授	2.00	9	0	0	1	1	0	2	4.00	2	6.00	5	900	
12	白幡洋三郎教授	1.67	11	0	0	1	1	0	2	4.00	2	5.67	7	1,000	
13	寺村裕史特任准教授	2.25	6	1	0	0	0	2	0	3.00	8	5.25	8	819	
14	劉建輝教授	2.25	6	1	0	0	1	0	1	3.00	8	5.25	8	1,500	
15	森洋久准教授	1.25	14	1	0	0	0	2	0	3.00	8	4.25	13	1,100	
16	井村哲郎特任教授	1.75	10	0	0	0	0	0	0	0.00	15	1.75	15	931	
別枠1	白幡洋三郎教授													5,000	
別枠2	磯前順一准教授													3,000	
	合計 18 件													24,350	0

※上位3割(1～5位)：緑、4～7割(6～12位)：青、8割～(13位～16位)：黄

事　務　連　絡
平成２６年　４月１７日

委員会委員長
専任教員　　各位
特任教員
課　長

総務課長　入木田　浩幸

平成２６年度所長裁量等に係る研究経費等の公募について

標記のことについて、本センターにおける研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るため、所長のリーダーシップにより、下記業務・研究活動について、予算の範囲内で必要な経費を措置することにしております。つきましては、この経費の配分を希望される場合は、下記により総務課財務企画係まで提出願います。

記

１．申請条件
下記項目に該当する経費で平成２６年度内に完了する事業であること。（各項目については、別紙配分基本方針を参照願います。）
（１）研究活動等推進経費
①国内外で開催する、小規模な研究集会の組織・開催（１件につき原則１００万円以内）
②緊急を要する目的による外国人研究者の短期招へい（１件につき原則１５０万円以内）
③海外で開催される学会等での発表等のための渡航（１件につき原則１００万円以内）
④高額となる出版物、特に単著への助成（共同研究成果報告書助成に準ずる）
⑤日文研プロジェクト業務の補助等（１件につき原則１５０万円以内）
⑥その他配分基本方針に該当する事業（１件につき原則１５０万円以内）

（２）研究環境向上のための設備費・環境整備費（１件につき原則１００万円以内）

（３）その他（１件につき原則１００万円以内）

２．提出書類
（１）所長裁量等に係る研究経費等執行計画調書（別紙様式１）
（メール又は持参により提出願います）
※様式はサイボウズに掲載しています。
（ファイル管理―総務課―財務企画係―所長裁量経費関係）
（２）積算資料
設備品・業務委託等：取扱業者が発行する見積書等
旅　費：日程表、運賃見積書等
謝　金：単価、時間数等を明記

３．事業完了後は、所長裁量経費実績報告書（別紙様式２）を提出すること。

４．提出期限　平成２６年４月３０日（水）　１７：００まで

■本件に関する連絡及び問い合わせ先
総務課財務企画係（和田・吉守）内線 2022･6212
e-mail:soumu@nichibun.ac.jp

事　務　連　絡
平成２６年 9月　２５日

専　任　教　員
特　任　教　員　　各位
各　　課　　長

総務課長　入木田　浩幸

平成２６年度所長裁量等に係る研究経費等の公募（第２回）について

標記のことについて、本センターにおける研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るため、所長のリーダーシップにより、下記業務・研究活動について、予算の範囲内で必要な経費を措置することにしております。

つきましては、本経費の配分を希望される場合は、下記により総務課財務企画係まで提出願います。

記

１．申請条件

下記項目に該当する経費で平成２６年度内に完了する事業であること。（各項目については、別紙配分基本方針を参照願います。）

（１）研究活動等推進経費
①国内外で開催する、小規模な研究集会の組織・開催（1件につき原則１００万円以内）
②緊急を要する目的による外国人研究者の短期招へい（1件につき原則１５０万円以内）
③海外で開催される学会等での発表等のための渡航（1件につき原則１００万円以内）
④高額となる出版物、特に単著への助成（共同研究成果報告書助成に準ずる）
⑤日文研プロジェクト業務の補助等（1件につき原則１００万円以内）
⑥その他配分基本方針に該当する事業（1件につき原則１００万円以内）

（２）研究環境向上のための設備費・環境整備費（1件につき原則１００万円以内）

（３）その他（1件につき原則１００万円以内）

２．提出書類

（１）所長裁量等に係る研究経費等執行計画調書（別紙様式１）
（メールにより提出願います。）
※様式はサイボウズに掲載しています。
（ファイル管理―総務課―財務企画係―所長裁量経費関係）

（２）積算資料
設備品・業務委託等：取扱業者が発行する見積書等
旅　費：日程表、運賃見積書等
謝　金：単価、時間数等を明記

３．留意事項

（１）事業完了後は、所長裁量経費実績報告書（別紙様式２）を提出すること。

（２）平成２６年度中に完了する事業であり、かつ経費を全額使用すること。

（３）データベース化を目的とする事業については、資料電子化提案の対象となる経費は本申請の対象外となります。

４．提出期限　平成２６年１０月６日（月）

■本件に関する連絡及び問い合わせ先
総務課財務企画係（和田）内線６２１１
e-mail:soumu@nichibun.ac.jp

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
(8) 所長裁量経費について

平成26年度所長裁量経費配分一覧表

（単位：千円）

所長裁量事業　　平成26年4月1日決定

番号	申請者	要求事項	要求金額	決定額	備考
1	小松和彦所長	怪異・妖怪データベースプロジェクト	2,000	2,000	
2	小松和彦所長	所長主宰研究談話会「人文学の未来を考える」	500	500	
計			2,500	2,500	

国際的研究事業（25年度採択継続分）　　平成26年4月1日決定

番号	申請者	要求事項	要求金額	決定額	備考
1	松田利彦教授	共同研究会「植民地帝国日本における知と権力」への韓国・台湾からの研究者招請	2,000	2,000	
2	劉建輝教授	画像資料（絵葉書・地図・旅行案内・写真等）による帝国域内文化の再検討	1,000	1,000	
計			3,000	3,000	

1次公募　　平成26年5月21日決定

番号	申請者	要求事項	要求金額	決定額	備考
1	ジョン・ブリーン教授	Breen、Teeuwen著,「A new history of Shinto, Wiley-Blackwell,(2010)の日本語訳	800	0	
2	稲賀繁美教授	パリ日本文化会館　展覧会企画にともなう学術講演会「うつしとうつわ」実施	1,800	1,800	
3	榎本渉准教授	中国浙江省台州・温州史跡踏査	638	638	
4	細川周平教授	セルビアにおける日本仏教研究の推進	520	520	
5	寺村裕史特任准教授	単著『景観考古学の方法と実践』の出版・印刷	1,000	0	公益財団法人による助成決定のため
6	倉本一宏教授	後一条朝初期『小右記』のデータベース化	1,500	0	情報課にて予算措置予定
7	瀧井一博教授	グローバル・ヒストリーのなかの「失われた20年」	1,500	500	
8	末木文美士教授	ギリシア・日本文化学術交流の発展	590	590	
計			8,348	4,048	

所長裁量事業　　平成26年5月21日決定

番号	申請者	要求事項	要求金額	決定額	備考
1	資料課	アナログレコード資料の目録登録等業務	5,000	5,000	
計			5,000	5,000	

1次公募（追加配分）　　平成26年6月19日決定

番号	申請者	要求事項	要求金額	決定額	備考
1	倉本一宏教授	後一条朝初期『小右記』訓読文作成	700	700	
計			700	700	

2次公募　　平成26年10月15日決定

番号	申請者	要求事項	要求金額	決定額	備考
1	松田利彦教授	韓国法院記録保存所所蔵「植民地期民事裁判判決原文記録」の研究	500	500	
2	倉本一宏教授	後一条朝初期『小右記』訓読文作成	1,000	1,000	
3	大塚英志教授	学生・教員参加による日本アニメーション・まんが研究及び教育法をテーマとする共同研究集会	984	984	
4	坪井秀人教授	ワークショップ「言葉の境界をこえる　詩とその翻訳をめぐって」	360	360	
計			2,844	2,844	

2次公募（追加配分）　　平成26年10月23日決定

番号	申請者	要求事項	要求金額	決定額	備考
1	磯前順一准教授	日文研所蔵井上哲次郎宛書簡の思想史的研究	300	300	
2	森洋久准教授	古窯跡アーカイブに関する調査・研究	990	0	
3	劉建輝教授	新村出関連文書・画像電子化事業	500	0	
計			1,790	300	

6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）
(8) 所長裁量経費について

2次公募（追加配分）　　平成26年12月18日決定

番号	申請者	要求事項	要求金額	決定額	備考
1	稲賀繁美教授	パリ日本文化会館　展覧会企画にともなう学術講演会「うつしとうつわ」実施	1,860	1,860	1次公募採択分の追加配分
2	大塚英志教授	学生・教員参加による日本アニメーション・まんが研究及び教育法をテーマとする共同研究集会	-984	-984	2次公募採択分の引き上げ
計			876	876	

2次公募（追加配分）　　平成27年1月26日決定

番号	申請者	要求事項	要求金額	決定額	備考
1	北浦寛之助教	日本映画関連資料の電子化に向けた準備作業	500	500	
2	資料課	アナログレコード資料の目録登録等業務	500	500	所長裁量事業の追加配分
計			1,000	1,000	

		（うち国際的研究事業予算）
26年度予算	25,000 千円	（5,000千円）
4月1日配分	5,500 千円	（3,000千円）
5月21日配分	4,048 千円	
6月2日配分	5,000 千円	
6月19日配分	700 千円	
10月15日配分	2,844 千円	
10月23日配分	300 千円	
12月18日配分	876 千円	
1月26日配分	1,000 千円	
配分済額計	20,268 千円	
未配分額	4,732 千円	（2,000千円）

※平成27年1月26日の配分をもって、平成26年度の所長裁量経費配分は終了（小松所長了承済）。
なお、未配分額4,732千円及び執行残額見込（照会中）は第二次補正予算の財源に充てる予定。

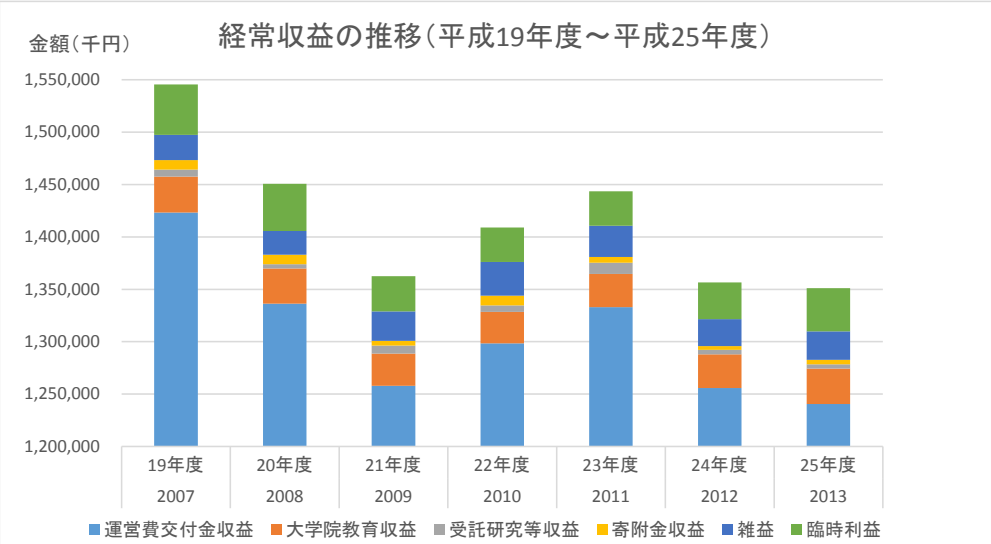
6．追加資料（外部評価委員会（第1回）終了後）

(9) 決算

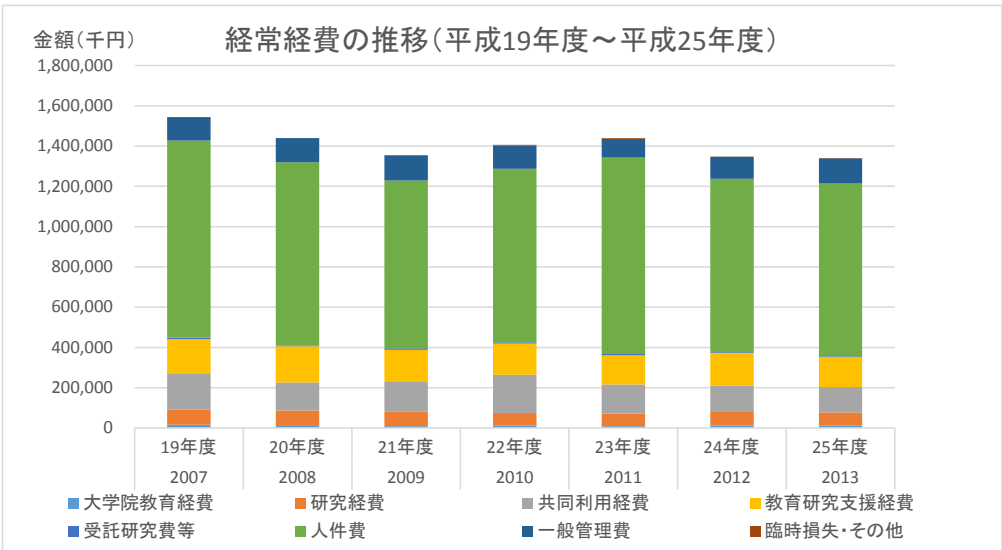
決算（平成19年度～平成25年度）

（単位：千円）

項目＼年度	2007 19年度	2008 20年度	2009 21年度	2010 22年度	2011 23年度	2012 24年度	2013 25年度
経常収益	1,545,425	1,450,596	1,362,604	1,408,936	1,443,498	1,356,606	1,351,094
運営費交付金収益	1,423,192	1,336,250	1,257,957	1,298,464	1,333,084	1,255,712	1,240,641
大学院教育収益	34,306	33,693	30,820	30,098	31,632	32,277	33,639
受託研究等収益	6,854	4,100	7,513	6,000	10,700	4,333	4,071
寄附金収益	8,841	8,881	4,445	9,430	5,483	3,368	4,379
雑益	24,074	22,716	28,244	31,989	29,659	25,959	27,192
臨時利益 資産見返負債戻入	48,158	44,956	33,625	32,955	32,940	34,957	41,172



項目＼年度	2007 19年度	2008 20年度	2009 21年度	2010 22年度	2011 23年度	2012 24年度	2013 25年度
経常経費	1,544,186	1,439,267	1,355,418	1,405,913	1,439,900	1,348,254	1,340,639
業務費	1,427,108	1,318,916	1,228,386	1,287,591	1,343,173	1,237,384	1,214,006
大学院教育経費	16,097	10,535	8,383	11,074	9,118	12,096	12,620
研究経費	74,371	75,966	74,192	63,188	62,718	67,470	64,358
共同利用経費	177,422	139,076	149,983	189,769	144,469	131,805	126,749
教育研究支援経費	173,733	179,948	156,196	155,551	144,106	162,194	148,964
受託研究費等	6,854	4,100	7,513	6,000	10,700	3,904	3,904
人件費	978,631	909,291	832,119	862,009	972,062	859,915	857,411
一般管理費	117,078	120,351	126,248	115,340	93,467	108,847	125,459
臨時損失・その他	0	0	784	2,982	3,260	2,023	1,174
当期総利益	1,239	11,329	7,186	3,023	3,598	8,352	10,455



・要覧記載のデータを基に作成（比較できる平成19年度以降。平成26年度は未確定）
・経常収益については収益の各項目を比較しやすいよう、グラフ縦軸の最小値を調整している

日文研　平成２２年度　自己点検報告書

Ⅰ．国際日本文化研究センターの研究目的と特徴

《研究目的》

国際日本文化研究センター（以下「日文研」という）は、大学共同利用機関として、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究、並びに世界の日本研究者に対する研究協力を目的としている。

《特徴》

① 研究目標

日本文化の理解促進のため、広く世界に開かれた研究および研究協力体制を整備し、既存の学問分野にとらわれない、国際的・学際的な研究の総合的視野からの発展を目指す。

また基盤となる資料・情報収集活動をも目標とする。

② 活動分野

次の３分野から成る。１）個人研究および共同研究を主体として行われる「研究活動」、２）世界の日本研究者に対する資料・情報提供を含む「研究協力活動」、３）上記活動の成果の刊行、研究成果の発表と日本文化研究の普及を目的とする学術講演会・シンポジウム等の「普及活動」。

③ 研究活動

高い見識を有する専門家を国内外から公募・招聘・採用し、構成・実施する「共同研究」が中心となる。変化・流動する国際社会へ柔軟に対応し得るよう、講座制や部門制などの固定的組織ではなく、研究域・研究軸という枠組みを中心に据える。日本文化の全体像把握のため「構造研究」「動態研究」「文化比較」「文化関係」「文化情報」の五つの研究域を設定、さらに、時系軸、地域枠、文化情報系等に分節し、三つの研究軸を設ける。研究軸はそれぞれの研究域の示す視座の中で、いくつかの方向性を特定する。

④ 研究協力活動

海外の関係機関や研究者との交流を強化するため「海外研究交流室」を設け、シンポジウム等を開催している。また、画像資料等を用いた従来にない日本文化研究の方法やシステムの開発研究を専門的・体系的に進める「文化資料研究企画室」を設置している。

［想定する関係者とその期待］

想定する関係者：国際的な視野に立ち、既存の学術専攻分野を横断した「国際日本文化研究」を志向する内外の日本研究者、研究成果の発信先となる社会一般。

主な期待：構造研究、動態研究、文化比較、文化関係および文化情報の観点からの、日本文化に関する国際的、学際的、総合的な共同研究の推進、研究協力および情報の集約と提供。

Ⅱ．平成 22 年度の取組状況

1．研究事業

（1）共同研究

日本文化に関する国際的及び学際的な総合研究を、国内外の研究機関、研究者と協力し、計画どおり実施した。具体的には、活動の基幹をなす共同研究として、上述の制度設計に従い、外国人研究員の参画も得て、以下のとおり 19 件実施した。なお、このうち、国内公募による共同研究を１件（「帝国と高等教育－東アジアの文脈」）及び国外公募による共同研究を３件（「日本における翻訳の文化史」「文学の中の宗教と民間伝承の融合：宮沢賢治の世界観の再検討」「『日本浪曼派』とアジア」）を実施した。

［平成 22 年度共同研究］

文明と身体（３年計画の２年目）

古今東西の身体へのまなざしを考えるのに相応しい事例を、文明という文脈のもとでまず考察を加え、そしてそのような歴史上の諸事例を参考にしつつ、最終的には近代日本の文明観を、身体を一つの切り口にして再検討するため、研究会を開催した。

仏教からみた前近代と近代（３年計画の３年目）

前近代の仏教と近代の仏教を対比させながら、その転換の意味を探ることを目的とし、また、仏教学だけでなく、広い視野から日本宗教を扱うことのできる宗教学の専門家にも加わってもらうことで、仏教だけに留まらず、日本の宗教史・思想史を総合的に考察するため、研究会を開催した。

怪異・妖怪文化の伝統と創造－研究のさらなる飛躍に向けて－（３年計画の１年目）

共同研究「怪異文化の伝統と創造―前近代から近現代まで―」（平成 18～21 年度）の成果を継承・発展させつつ、これまでの研究蓄積を整理のうえ、今後の研究をいっそう学際的・総合的に進展させることを目的とし、近年の妖怪文化研究の批判的評価等をはじめ、研究会を開催した。

生命文明の時代を創造する（２年計画の１年目）

共同研究「日本文明史の再建」（平成 16～21 年度）の研究成果を具体的な地域政策として展開する方策を探求のうえ、具体的政策立案や立法化の方策を実施し、日本人の暮らしと日本文化の未来のために資することを目的として、研究会を開催した。

性欲の社会史（１年計画）

社会と性欲の関係について、人々がたどってきたその道筋を探るため、日本を中心とした東アジアの近代を対象に調査、研究会を開催した。

日本の近代化とプロテスタンティズム（１年計画）

キリスト教側だけの視点ではなく、反対の立場、そして神学的考察というよりは、むしろ文化的、歴史的考察において、日本の近代化におけるキリスト教、特にプロテスタンティズムの果たした役割について再確認しつつ、社会構造としてプロテスタントがどのような位置にあるかを検証するため、研究会を開催した。

植民地帝国日本における支配と地域社会（３年計画の３年目）

共同研究「日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚」（平成 16～18 年度）を継承発展させつつ、その視座を各植民地の地域社会により密着した方向に展開することを目的とし、研究会を開催した。

近代日本の公と私、官と民－比較の視点から－（１年計画）

近代日本を主たる対象としながら、歴史的あるいは国際比較の視点から、「公」と「私」の問題を取り上げる。その際、理念としての公（共）と私と、現実の「官」と「民」を区別しつつ、歴史的側面や理論面など参加者の専門分野に応じてさまざまな角度から考察するため、研究会を開催した。

近代日本における指導者像と指導者論（３年計画の１年目）

幕末維新期から現代までを射程に収め、近代以降の日本人が、どのような指導者像を描き、いかなる指導者論を語ってきたかを考察するとともに、特定の指導者個人ないし指導者群を取り上げ、彼らの指導者として自己イメージを考察して、共同研究全体を通して、指導者のあり方について近代日本の全般に共通する特徴を導き出すことを追求するため、研究会を開催した。

東洋美学・東洋的思惟」を問う：自己認識の危機と将来への課題（３年計画の３年目）

狭義の美術史や美学、思想史に限定することなく、文学、宗教、政治など隣接領域からの参画も得て学際的な接近を試み、韓国･中国のみならず、イスラーム圏を含め、アジア意識の帰趨を国際的な視野のもとに考察するため、研究会を開催した。さらに、関連領域の研究に携わってきた国内外の研究者を招き、国際研究集会を開催した。

都市文化とは何か？－ユーラシア大陸における都市文化の比較史的研究－（１年計画）

従来の都市構造研究と地域文化研究とを連携させ、総合的な都市文化研究を行い、ユーラシア大陸における多様な都市のあり方と都市の発達、都市構造の特徴と地域文化との関連を明らかにすることにより「都市文化とは何か？」を検証するため、研究会を開催した。

帝国と高等教育－東アジアの文脈（２年計画の１年目・国内公募）

日本の植民地大学の制度・機能・遺産を、東アジア史の文脈を踏まえながら解明することを目的とし、「植民地大学の制度と理念」、「植民地大学の学知と機能」、「植民地大学の遺産」をテーマに、研究会を開催した。

文学の中の宗教と民間伝承の融合：宮沢賢治の世界観の再検討（１年計画・国外公募）

宮沢賢治の童話作品と詩を宗教（主に仏教）の教えと民間伝承の観点から再検討して、宮沢賢治作品に顕現されている「日本性と和心」及び「普遍性と平等精神」を穿ち出し確定することを主な目的とし、研究会を開催した。

「日本浪曼派」とアジア（１年計画・国外公募）

「日本浪曼派」に関する研究の歴史を踏まえたうえで、その未解決部分を問題として確定し、その解決を第一の目的とする。また、第二の目的は「日本浪曼派」研究の外延を拡げて、中国と韓国の近代文学における近代意識を「日本浪曼派」とのアナロジーのうえで研究する。これらの目的を達成するため、研究会を開催した。

日本における翻訳の文化史（１年計画・国外公募）

今までの翻訳の研究の大多数は、ある小説はいつ翻訳されたか、ある言葉あるいは概念はどのように翻訳されて日本語に入ったか、西洋の言語が日本語に翻訳されると日本語自体がどのように変わったかという程度である。また、フランス、ロシア、英語圏の文学が近現代の日本文学の発展に大きな影響を及ぼしたため、西洋の言語からの翻訳を強調する傾向があり、中国語などからの翻訳を見落としがちである。これらの問題を乗り越えるため、翻訳そのものを歴史的な現象として扱い、その文化史を探るため研究会を開催した。

東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に（３年計画の１年目）

知的システムの根幹をなす諸概念とその組織（編成）のあり方への関心は、中国、韓国で急速に高まってきている。日本国内の機運は、むしろ立ち遅れているため、これまでの共同研究、国際シンポジウム等の活動成果を集約し、今日ありうるべき知的システムの構築に資すること、その研究の機運を国内に拡げ、国際的に開かれた形で、第二次世界大戦後の検討を含めて展開することを目的とし、研究会を開催した。

「満州」学の整理と再編（１年計画）

共同研究「近代中国東北部（旧満州）文化に関する総合研究」（平成 13～16 年度）の成果を踏まえつつ、関内（中国）をはじめ、内地（日本）、朝鮮半島、ソ連などとの関連において、構造かつ多角的視点を通じて、「満州」全体像の構築を目指し、併せてその存在が中国や日本、また朝鮮半島において果たしてきた歴史的な役割とその意味を追求するため研究会を開催した。

民謡研究の新しい方向（１年計画）

民謡研究の現状を確認し合い、今後の有益な対話を引き出すことを目的に、テクノロジー、都会文化や高尚な知識界との媒介者、作曲とのつながり、都会や他文化への移動、産業化、都市生活や知識階層への媒介者を多面的に論じ、共通性と違いを比較するため研究会を開催した。

日記の総合的研究（３年計画の１年目）

文学者が何故膨大な日記（古記録）を記し続けたのか等、日本史学、日本文学、心理学それぞれの分野における研究者を一堂に集め、日記と日本人との関わりを総合的に究明するため、研究会を開催した。

（２）基礎領域研究

研究の実地訓練の機会として、フランス語、中国語、韓国語の外国語資料の解読や古文書研究等を含めた８つの基礎領域研究を設定し、セミナーを定期的に開催した。

２．研究協力活動

（１）海外における日本研究会及び海外シンポジウム

・日本研究会として、台湾中央研究院を会場に約 30 名の参加のもと、「東アジアにおける日本と台湾：日本研究の新視点を求めて」という全体テーマのもとで「歴史における日本の政体と外交」「現代日本社会

文化の変遷」「日本植民地主義と台湾１」「近代日本の文学と社会学」「日本植民地主義と台湾２」「日本の考古学、思想史および対外関係」「江戸時代の漢学と洋学」「歴史における日本の思想的潮流」の八つのセッションに分け、日本と台湾にかかわるさまざまな歴史的、今日的課題について発表、質疑、また総合討論を行った。

・海外シンポジウムはインドネシアにおいて、"Understanding Contemporary Japan"「日本の文化と社会の潮流」をテーマとしてインドネシア大学と共催で行った。シンポジウムは、井上・日文研教授とスラジャヤ・インドネシア大副学長の基調講演にはじまり、「経済・経営・国際関係」「開発政策と社会」「現代文化」「若手研究者と大学院生のセッション」「歴史・宗教・文学」の各セッションとふたつのラウンドテーブルが行われた。日本・インドネシア・タイ・オーストラリア・シンガポール・フィリピンから２３件の研究発表が行われた。ラウンドテーブルでは、日本研究に日本語が必要かどうかという議論に多くの時間が費やされた。インドネシア大学の院生を中心に約２００名が聴講し、シンポジウムは盛会裏に終了した。

・人間文化研究機構シンポジウム「東アジアにおける知的体系の再構築：日本と中国の視座」を南京大学にて開催した。中国における日本研究は、大学付置研が新たに三つ創設されるなど、ますますさかんになり、学術交流も北京中心から各主要都市に拡がっているが、他地域では「アジア研究のなかの日本研究」への傾きが強くなることも否めない。日本研究への関心を国際的に喚起する一方、国際アジア研究の主要なテーマとして日中関係史、文化交流史研究の強力な推進が要請されている。このような学術交流戦略に立って、これまで日文研が築いてきたネットワークを基礎に、上記の目標に向けた新たな波を起こすため、「歴史認識」の争点のひとつである事件の地、南京で日文研と南京大学の共催による日中国際シンポジウムとして開催した。人間文化研究機構の講演会に続き、日中双方の人文科学・社会科学の研究者が新たな観点と資料による研究報告と討議をくりひろげ、充実した内容のシンポジウムとなり、日本語、中国語の話せない研究者間の交流のひとつの基石となった。

（２）国内外関係諸機関との連携・協力

・人間文化研究機構の事業として、欧米・アジア諸国に所在する日本関連在外資料を対象に、文化人類学、民俗学、歴史学、国文学、国語学、美術史学、アジア学などの諸分野の専門的研究者の派遣・招請による国際共同研究を開始した。

日文研は、８つの研究チームの総括機関となって「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」を実施・推進するため、機構内外の研究機関との連携により、予備的な調査・研究を開始した。

《研究チーム》

①アメリカ大陸チーム（ａ）総括：原山浩介・国立歴史民俗博物館助教
「南北アメリカの移民関係資料ならびに移民社会に関する研究」

②アメリカ大陸チーム（ｂ）総括：細川周平・国際日本文化研究センター教授
「南米（ポルトガル語圏）における日本人移民の生活実態に関する資料の調査・研究」

③韓国チーム　総括：松田利彦・国際日本文化研究センター准教授
「朝鮮半島における植民地統治および日本人社会に関する資料の調査・研究」

④中国チーム（ａ）　総括：劉　建輝・国際日本文化研究センター准教授
「中国東北における日本人の植民地統治および社会実態に関する資料の調査・研究」

⑤中国チーム（ｂ）　総括：鈴木貞美・国際日本文化研究センター教授
「中国全土における日本人の活動に関する資料の調査・研究」

⑥音声資料チーム　総括：朝日祥之・国立国語研究所准教授
「ハワイと北米に渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究」

⑦台湾チーム　総括：籠谷直人・京都大学人文科学研究所教授
「植民地期台湾・「南洋」における日本人社会に関する資料の調査・研究」

⑧文化財保護関係チーム　総括：平勢隆郎・東京大学東洋文化研究所教授
「近代日本文化財保護政策関係在外資料の調査と研究」

このうち、③韓国チームにおいては、国際シンポジウム『日韓相互認識-移動と視線 1910-2010』を

開催し、古代史を巡る相互認識、儒学者の日本観・国際観、植民地期から戦後に至る時期の韓国人知識人・文学者の日本認識、植民地支配と近代性などに関連する報告 12 本、および、韓国所在の日本統治期関連資料についての調査報告 4 本を行った。

また、④中国チーム（a）においても、国際シンポジウム『中国東北部（旧満州）と日本－100 年関係史の整理と再編』を開催した。従来の「満洲」研究を整理し、その脆弱な分野とされた社会学的なアプローチを試み、「満洲」の全体像を捉える今後の指針を模索した。日中に限らず、台湾等の視点を加えたことによって、より多角的にこの間の歴史を認識し、その整理と再編を深化させることができた。

さらに、プロジェクトの一環として、『文藝春秋』欧文付録『Japan To-day』（1938 年 4 月～10 月）の全文を収録し、翻訳と解説を付した「『Japan To-day』研究　戦時期『文藝春秋』の海外発信」を出版し、海外の日本研究機関、日本の大学図書館・公共図書館等に配布した。

・日本文化に関する基礎文献の各国語への翻訳及び出版普及に協力するため、翻訳企画をホームページ上で募集し、採用された企画に助成を行った。平成 22 年度は、『十返舎一九作品選集』（韓国語訳）、和辻哲郎『風土』（フランス語訳）、色川大吉『明治の文化』（アラビア語訳）の出版に協力した。
・ヨーテボリ大学（スウェーデン）と共催で海外研究交流シンポジウム「文化の翻訳：北欧における日本文学研究を中心に」を開催し、北欧を中心とした日本研究者を日文研に招へいし、同地域の研究者とのネットワークを形成した。
・ＥＡＪＲＳ（日本資料専門家欧州協会）へ教員・事務職員を派遣し、日本研究の資料として貴重な画像資料の発表を行った。

（3）研究者等の受入・派遣

外国の研究機関との関係構築を図り、以下のとおり外国人研究者の招へい、国内研究者の海外派遣を進めるとともに国際研究集会・シンポジウムの開催や参加を積極的に支援した。

・外国人研究員 15 名、外来研究員（外国人）19 名（日本学術振興会特別研究員（外国人）３名、国際交流基金日本研究フェロー（外国人）３名を含む）を受け入れた。
・複数の共同研究会に配置された海外共同研究員（アメリカ、中国、韓国等）を本センターで行う共同研究会に招へいし、研究発表等を通じて、国際的な共同研究会を実施した。
・国際交流基金からの依頼に基づき、JENESYS 東アジア大学院生日本研究特別招へいプログラムで来日した東南アジア諸国等からの大学院生、ロシア若手研究者短期グループ招へい事業で来日したロシアの若手日本研究者を受け入れ、センターの諸活動を紹介した。
・専任教員を海外の日本研究機関等に派遣し、日本文化研究に関する国際的なネットワークの拡大と深化を図った。チュラロンコーン大学（タイ）における「タイ国日本研究国際シンポジウム」にパネリスト及び講師として参加するとともに、タイにおける日本研究の現状と将来についての情報収集と意見交換を行った。また、日本研究会（台湾）、人間文化研究機構シンポジウム（南京）、海外シンポジウム（インドネシア）においても、所内外の研究者を派遣し、シンポジウムでの発表、日本研究の現状についての情報収集等を行った。
・平成 22 年度は 2 回の国際研究集会を開催し、それぞれ国内研究者はもとより、第 38 回国際研究集会（Questioning Oriental Aesthetics and Thinking: Conflicting Vision of “Asia” under the Colonial Empires 東洋美学と東洋的思惟を問う：植民地帝国下の葛藤するアジア像）においては 8 カ国から 15 名、第 39 回国際研究集会（The Environment and Civilization: Past, Present and Future）においては 15 ヶ国から 36 名の国外研究者を招へいした。

（4）海外研究交流体制の充実

・海外シンポジウム等の実施運営を円滑に行うため、海外研究交流室長と研究調整主幹の併任を解除し、交流室長がその任により集中してあたることを可能にするとともに、海外研究交流室長をセンター会議構成員とし、センター全体の研究活動と交流室業務との連携を一層強化するよう措置した。また、研究協力課に次長を配置し海外研究交流室業務にあたらせ、交流室業務の充実を図った。
・海外研究交流室の事業として、海外研究交流シンポジウムを開催することで海外の日本研究者との連携・交流を強化するとともに、日本研究の情報収集・分析を進めた。

３．研究情報の収集・発信

（１）研究資料及び情報の収集・整理・保存

日本文化研究に関する学術文献・資料の収集、保存、活用及び加工編集並びに日本文化研究のための資料作成・ツール開発支援に有用な環境を整備・充実させ、収集資料等を高度化して世界に発信するため、以下の取組を実施した。

１）平成 22 年度に竣工した第二図書資料館（外書館）へ電動式集密書架を設置し、第二図書資料館（外書館）も含め図書館全体の配架計画を立て、資料の移動を行った。

２）日本研究基礎資料高度利用情報システム"KATSURA－Ⅱ"の開発の整備工程として、衛星画像や海図をはじめとする必要資料の収集やデータ化、研究支援ツールであるプロットシステムのソフト開発（実装作業）などを進めた。

３）調達日程に沿ってレンタルパソコンを更新するとともに、平成 22 年６月に竣工した第二図書資料館（外書館）に無線 LAN アクセスポイントを設置し通信ネットワークを拡充した。また、LAN スイッチボード交換や無線 LAN セキュリティ対策をはじめ、センターの情報基盤である「日文研情報システム」の維持に努めた。

４）絵画資料に描かれた怪異・妖怪に関する画像を集めたデータベースを１本公開し、国内外の研究者に提供した。また、既存のデータベースにデータを追加し、内容の充実を図った。

５）外書（外国語で書かれた日本の記録・研究文献）2,098 冊の収集を行った。

６）大型コレクション整備の一環として、「風俗画資料」を 36 点収集した。

（２）研究成果の公開・発信

・出版物の充実をはじめとして、多様な方法を用いて、研究成果を広く国内外に公開・発信し、研究の促進をはかるとともに社会への貢献に努めた。具体的には以下のとおり研究成果を出版し、国内外の日本研究関連研究機関等へ配布した。

１）『日本研究』（日文研の専任教員、客員教員、共同研究員、外国人日本研究者等の研究成果を収録する原著論文集で、査読のうえ掲載）２冊

２）*Japan Review*（日本文化の研究に関わっている者なら誰でも投稿できる日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した論文集で、査読のうえ掲載）１冊

３）『日文研叢書』（日文研の専任教員、客員教員、共同研究員等が、個人研究並びに共同研究成果をオリジナルな研究論文、貴重資料集成等のかたちで発表するモノグラフシリーズ）３冊

４）*Nichibunken Monograph*（日文研における研究活動のすぐれた成果で、既刊の著書を再構成したオリジナルな学術論文の欧文（英文）モノグラフシリーズ。執筆者は日文研の教員、外国人研究員等）１冊

５）国際研究集会報告書（日文研が主催した国際研究集会において発表・討議された内容を収録した報告書。執筆者は国際研究集会参加者）２冊

６）海外シンポジウム報告書（日文研が主催し、海外で行われた海外シンポジウムで発表・討議された内容を収録した報告書。執筆者は海外シンポジウム参加者）１冊

７）『日文研フォーラム報告書』（来日中の外国人研究者が日文研フォーラムにおいて日本に関連したテーマについて発表した研究成果を記録した報告書）６冊

８）『世界の日本研究』（世界における日本認識の形成過程とその現況に関する研究報告書。執筆者は日文研教員、在住外国人研究者、研究参加者）１冊

９）共同研究成果報告書（日文研が主催した共同研究、文明研究プロジェクトで発表・討議された内容を収録した報告書（商業出版を含む）。執筆者は研究発表者、代表者等）２冊

10）『日文研』（日文研の教員、共同研究員、外国人研究員等の活動状況を収録した報告書）２冊

11）*Nichibunken Newsletter*（日文研の教員、共同研究員等の活動状況を海外研究者むけに収録した報告書）４部

・センターの出版物のうち『日本研究』、*Japan Review*、『日文研フォーラム報告書』を引き続き電子化し、ウェブサイトに掲載し国内外に向けて発信した。また、日文研アーカイブズ関係タスクフォースにお

いて、創立以来のセンター発行のすべての出版物についてこれまでの研究活動の全成果をウェブサイトで広く国内外に発信するための準備を行った。
・ホームページにより、共同研究者に対して各種シンポジウム等の開催、共同研究に関する公募などの情報発信を行った。

４．大学院教育への協力・人材養成

（１）大学院教育への協力

・基盤機関として国際日本研究専攻の大学院生に対して教育研究の場を提供し、国際的・学際的な日本研究を進めるために、本専攻の特色である、全教員が指導する単一の分野「国際日本研究」において、研究人材の育成を図った。共通必修科目として、「日本研究基礎論」「学際研究論」「論文作成指導」を、また、選択科目として「シンポジウム等運営実習」を置き、国際的な立場から「日本研究」の理論的・方法論的な指導を行い、これらの研究と研究指導を推進することにより、創造的で高度な専門的視野と、幅広い学際性、複数の専攻を横断しうる総合性を備えた研究者の育成を図った。
・国立及び私立の大学院から７名の特別共同利用研究員を受け入れ、担当教員が個別に専門的研究指導を行った。
・英国芸術・人文リサーチ・カウンシル（ＡＨＲＣ）との研究交流協定に基づき、イギリス・オックスフォード大学から大学院生１名を受け入れ、人材の養成に寄与した。

（2）人材養成

・各共同研究会において、若手研究者が積極的に研究発表を行えるようプログラムを組み、発表後は指導・助言を含めた討論を通じて、今後の研究・成果等に役立てられるよう研究支援体制を整えた。
・１年間、私立大学の教員を私学研修員として受け入れ、研修課題を達成できるよう、専任教員による指導のほか、施設の利用及び専用の研究スペースの提供等を行った。また、機関研究員、プロジェクト研究員及びリサーチ・アシスタントを雇用し、専用の研究スペースを提供するとともに、研究プロジェクト等へ参画させて、若手研究者の育成を図った。
・インドネシア大学と共催した海外シンポジウムにおいて、インドネシア及び周辺国における若手研究者に対し研究発表の場を提供するとともに、討論などを通じて指導・助言等を行った。
・ハノイ大学にて大学院生及び学部生を対象として、日本文化に関する集中講義及び日文研教員が教育を担当している総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻の概要説明等を行った。

５．社会との連携

（１）研究成果の還元

１）次のとおり学術講演会等を開催し、研究活動情報の発信を行った。また、講演会をネット中継するとともに、過去の講演会をウェブサイト上にアーカイブ化し、常時閲覧可能にすることで、共同研究の成果を社会へ発信した。

《学術講演会》
・第 48 回学術講演会　（平成 23 年）３月 10 日

《公開講演会》
・公開講演会　（平成 22 年）５月 15 日
「環太平洋の環境文明史」
・第 38 回国際研究集会公開講演会　（平成 22 年）11 月 10 日
「東洋の自己イメージと西洋からの期待－落差と葛藤－」
・第 39 回国際研究集会公開講演会　（平成 22 年）12 月３日
「太陽と古代文明」

《特別講演会》
・日文研・地球研合同シンポジウム　（平成 22 年）５月 22 日
「京都の文化と環境 - 森や林」
・文化勲章受章記念講演会　（平成 22 年）６月 11 日

《公演会》

・伝統文化芸術総合研究プロジェクト　(平成 23 年) 2 月 23 日
『能楽と西洋管弦楽との協奏－能「小鍛冶」を題材に－』

《東京講演会》

・第 19 回東京講演会　(平成 22 年) 6 月 5 日
「日本文化を考える」

《日文研フォーラム》

・来日中の外国人研究員の日本語による研究発表及び一般市民との交流の場として、年間 11 回開催した。

2）大学共同利用機関協議会主催のシンポジウムにおいて、センターの共同研究及び活動を紹介する展示を行った。

3）「イノベーション・ジャパン 2010－大学見本市」に出展し、自律分散型地理情報システム及びこの技術を応用した"KATSURA－Ⅱ"の研究成果を産業界に広く発信することで、産学のマッチングを促し、研究成果の社会還元を図った。

（2）地域社会との連携

1）一般公開を(平成 22 年)10 月に実施し、次のとおり公開事業を行った。

・文化資料研究企画室セミナー「日本文化と妖怪」
・教員によるセンター施設案内
・シンポジウム「近代国家の文化と暴力」
・日文研木曜セミナー特別企画「私の日本研究」
・研究活動紹介「共同研究のパネル展示」
・日文研所蔵資料の展示「絵巻物・錦絵にみる日本の妖怪」
・カレンダープレゼントコーナー
・日文研教員の書籍販売コーナー

2）近隣の小学校に教員を派遣し、児童に対し、資料やスライドを利用して研究活動を分かりやすく紹介した。［出前授業］８講座実施。また、中学校の総合学習における、生徒による教員へのインタビュー並びに施設見学等に協力した。

3）報道関係者との懇談会を３回実施し、研究活動の紹介及び各種催し物の案内などの情報提供・意見交換を行った。

6. 業務運営・財務に係る取組

（1）業務運営の改善及び効率化

［運営体制・研究組織の改善・見直し］

・外部有識者が過半数を占める運営会議において、研究教育職員の人事、共同研究、研究協力等の事業計画及び組織運営全般について審議、意見交換を行い、研究者コミュニティの意見を反映させた。

・海外シンポジウム等の実施運営を円滑に行うため、海外研究交流室長と研究調整主幹の併任を解除し、交流室長がその任により集中してあたることを可能にするとともに、海外研究交流室長をセンター会議構成員とし、センター全体の研究活動と交流室業務との連携を一層強化するよう措置した。また、研究協力課に次長を配置し海外研究交流室業務にあたらせ、交流室業務の充実を図った。

・研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るために、所長裁量経費の配分について、「国際日本文化研究センターにおける所長裁量経費の配分基本方針」に基づき、所長のリーダーシップのもと重要性・緊急性を勘案して行った。

［人事の適正化］

・事務系職員の採用について、平成 22 年度国立大学法人等職員統一採用試験合格者から２名採用するとともに、事務職員・技術職員について、京都大学、大阪大学等との人事交流を実施した。

・業務に必要な知識、技能を高めるため、国立大学協会、人事院、交流大学等の主催する各種研修・セミナー等に積極的に職員を参加させ、事務職員等の資質の向上を図った。

・男女共同参画推進の観点から、有能な女性教職員の採用を進め、(平成 22 年) 4 月に女性教職員 3 名 (准教授 1 名、事務職員 2 名) を採用した。

［事務等の効率化・合理化］

・委員会資料及び所員の業績情報等をデジタル化して蓄積・共有し、必要な者が必要なときに迅速・確実にアクセスできる体制を整え、逐次蓄積されていく情報を有効活用することを目的とした日文研アーカイブズの構築に向けて取組を行った。また、各種文書及び資料のデジタル化を進め、アーカイブズの試用を行った。

・平成 21 年 12 月からメールシステムをホスティング化したが、平成 22 年度も継続してその維持管理を外部委託することにより、メールサーバの管理負担・維持経費の軽減と停電等によるメールサービス停止の防止に引き続き努めた。

・管理業務のうち警備業務、清掃業務、日文研ハウス管理業務について、入札により外部業者に委託し経費節減を図った。

・図書館資産実査にあたって平成 22 年度分 68,659 冊について外部委託し、2 日間の作業日程で実施した。

(2) 財務内容の改善

［外部研究資金その他の自己収入の増加］

・外部研究資金の募集状況を、電子掲示板へ掲載する等の措置により職員に周知させるとともに、科学研究費補助金の申請、使用方法等についての説明会を実施するなど、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金の積極的獲得に努めた。

［経費の抑制］

・適切な人員配置等により、平成 22 年度においても人件費の削減を図った。

・超過勤務縮減計画に基づく「ノー残業デー」や「ノー残業ウィーク」等の周知徹底により、超過勤務の縮減を図った。

・複写機の契約を見直して、賃貸借契約と保守契約を一本化し、包括役務契約として、3 年間の複数年契約による一般競争入札を行った。

・平成 21 年 12 月からメールシステムをホスティング化したが、22 年度も継続してその維持管理を外部委託することにより、メールサーバの管理負担・維持経費の軽減と停電等によるメールサービス停止の防止に引き続き努めた。

・管理業務のうち警備業務、清掃業務、日文研ハウス管理業務について、入札により外部業者に委託し経費節減を図った。

・財務分析、設備等使用実態調査を行い、経費抑制のため次の取組を実施した。予算管理を各所管に行わせることによる経費の抑制及び効率的使用についての責任体制の徹底、宅配（メール便）の利用、定期刊行物の購入数量の見直し、外国郵便における低廉な船便の使用、近距離移動の交通費実費額支給。

・省エネ対策として次の取組を実施した。リサイクル製品の使用及びグリーン調達物品の優先的購入、電子メールの利用によるペーパーレス化の促進及び両面印刷の徹底、クールビズ・ウォームビズの啓蒙活動及び冷暖房機器設定温度の管理徹底による空調のエネルギー量の削減。

・設備機器の定期点検を行い、適切な維持管理に努めた。また、施設設備の点検結果を元に、トラブルを未然に防ぎ修繕経費の抑制に努めた。

［資産の運用管理の改善］

施設の有効活用（スペースマネジメント）に関し、以下の取り組みを行った。

・施設利用委員会において利用実態調査を行い、施設の利用状況を点検し有効活用に努めた。

・共用スペースについては、規定に基づき申請・承認を行い、公平なスペースの提供を行った。

(3) 自己点検・評価及び情報提供

［評価の充実］

・各種委員会の所掌業務について、委員会ごとに自己点検を実施し、課題の改善状況等について進捗状況の評価を行った。その際、滞在中の外国人研究員にアンケートを実施するとともに自己点検作業への参画を求めることにより業務運営等について幅広く意見聴取を行い、自己点検・評価に反映させた。

また、平成 21 年度自己点検・評価結果は、センター会議に報告し、組織の運営改善に活用した。

・自己点検・評価及び国立大学法人評価委員会の評価結果の分析・検討を行い、23 年度計画の策定に反映させた。

［情報公開等の推進］

・平成 21 年度自己点検・評価に係る情報をウェブサイトに掲載した。

・国立大学法人評価委員会による評価結果の概要を作成し、センター会議及び運営会議で報告することにより、評価結果を効果的に教職員へ周知させた。

・『要覧』（和英併記）、広報誌『日文研』、*NICHIBUNKEN NEWSLETTER*（和英併記）の発行により内外への研究活動の情報公開に努めた。

・広報委員会において、『要覧』を一部リニューアルし、センターの活動を明確に伝えるよう内容の充実を図った。また、日文研アーカイブズ関係タスクフォースにおいてウェブサイトの全面リニューアルに向けて検討を進めた。

・「一般公開」では、講演会、シンポジウム、貴重所蔵資料の展示、図書館及び研究室等の施設案内を実施し、研究活動の普及と情報発信の強化を図った。

・報道関係者との懇談会を３回実施し、研究活動の紹介及び各種催し物の案内などの情報提供・意見交換を行った。

(4)その他の業務運営

［施設設備の整備・活用等］

・第二図書資料館（外書館）が完成したことより、既存図書資料館の書架再配置等図書館機能の向上に係る検討を進めた。

・館内照明器具について、人感センサ調光式照明器具への更新を計画的に進めた。

・施設利用委員会において利用実態調査を行い、施設の利用状況を点検し有効活用に努めた。

［安全管理］

・緊急時の連絡体制として、全職員の緊急時連絡先について、人事異動等による変更を随時行い、最新情報の維持に努めた。

・非常事態発生時における連絡網を随時更新し、事務手続マニュアルにおいて教職員への周知を行った。

・衛生管理者による巡視を実施し安全措置を講じた。

・西京消防署指導のもと普通救命（応急手当）講習会及び屋内消火栓訓練（平成 23 年）1 月 19 日を実施し、受講者に普通救命講習修了証が交付された。

・防災マニュアルを改訂し教職員に配布した。

・職員の勤務状況及び健康状態の把握に努め、「糖尿病について」の講演を企画するなど、産業医の協力を得て健康管理を行った。

・所内文書のアーカイブ試行ともあわせて、日文研情報セキュリティポリシーのセキュリティ対策基準に、その対象となる情報の格付け及び取り扱いの基準となる「情報格付け基準」の一項目を追加した。また、セキュリティ対策基準全般の見直しに着手した。さらに、内閣官房情報セキュリティセンターからの無線 LAN WPA(TKIP)の脆弱性に関する連絡（平成 21 年８月）を受け、WEP 方式からさらに高度な無線 LAN セキュリティ対策を実施した。

［適正な法人運営］

・国立大学法人法その他関係法令及び本機構の諸規定に基づき適正な業務運営を行うため、国立大学協会、人事院、交流大学等の主催する各種研修・セミナー等に積極的に職員を参加させた。

・研究活動における公的研究費の不正使用防止計画に基づき、教職員に対する説明会を実施するなど、外部資金の取り扱い等における不正行為の防止に努めた。

日文研　平成２３年度　自己点検報告書

Ⅰ．国際日本文化研究センターの研究目的と特徴

《研究目的》

国際日本文化研究センター（以下「日文研」という）は、大学共同利用機関として、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究、並びに世界の日本研究者に対する研究協力を目的としている。

《特徴》

① 研究目標

日本文化の理解促進のため、広く世界に開かれた研究および研究協力体制を整備し、既存の学問分野にとらわれない、国際的・学際的な研究の総合的視野からの発展を目指す。

また基盤となる資料・情報収集も目標とする。

② 活動分野

次の３分野から成る。１）個人研究および共同研究を主体として行われる「研究活動」、２）世界の日本研究者に対する資料・情報提供を含む「研究協力活動」、３）上記活動の成果の刊行、研究成果の発表と日本文化研究の普及を目的とする学術講演会・シンポジウム等の「普及活動」。

③ 研究活動

高い見識を有する専門家を国内外から公募・招聘・採用し、構成・実施する「共同研究」が中心となる。変化・流動する国際社会へ柔軟に対応し得るよう、講座制や部門制などの固定的組織ではなく、研究域・研究軸という枠組みを中心に据える。日本文化の全体像把握のため「動態研究」「構造研究」「文化比較」「文化関係」「文化情報」の五つの研究域を設定、さらに、時系軸、地域枠、文化情報系等に分節し、三つの研究軸を設ける。研究軸はそれぞれの研究域の示す視座の中で、いくつかの方向性を特定する。

④ 研究協力活動

海外の関係機関や研究者との交流を強化するため「海外研究交流室」を設け、シンポジウム等を開催している。また、画像資料等を用いた従来にない日本文化研究の方法やシステムの開発研究を専門的・体系的に進める「文化資料研究企画室」を設置している。

⑤ 普及活動

研究活動・研究協力活動を広く一般の方々に知っていただき、「社会に開かれた研究機関」であるよう努めている。さらに、活動によって得られた成果を広く社会へ還元している。

［想定する関係者とその期待］

想定する関係者：国際的な視野に立ち、既存の学術専攻分野を横断した「国際日本文化研究」を志向する内外の日本研究者、研究成果の発信先となる社会一般。

主な期待：動態研究、構造研究、文化比較、文化関係および文化情報の観点からの、日本文化に関する国際的、学際的、総合的な共同研究の推進、研究協力および情報の集約と提供。

Ⅱ．平成 23 年度の取組状況

1．研究事業

（1）共同研究

日本文化に関する国際的及び学際的な総合研究を、国内外の研究機関、研究者と協力し、計画どおり実施した。具体的には、活動の基幹をなす共同研究として、上述の制度設計に従い、外国人研究員の参画も得て、以下のとおり 16 件実施した。なお、このうち、国内公募による共同研究を１件（「帝国と高等教育－東アジアの文脈」）及び国外公募による共同研究を３件（「デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代」「仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論」「文学の中の宗教と民間伝承の融合：宮沢賢治の世界観の再検討」）を実施した。

［平成 23 年度共同研究］

文明と身体（３年計画の３年目）

古今東西の身体へのまなざしを考えるのに相応しい事例を、文明という文脈のもとでまず考察を加え、そしてそのような歴史上の諸事例を参考にしつつ、最終的には近代日本の文明観を、身体を一つの切り口にして再検討するため、研究会を開催した。

仏教からみた前近代と近代（取りまとめ）

前近代の仏教と近代の仏教を対比させながら、その転換の意味を探ることを目的とする。仏教学だけでなく、広い視野から日本宗教を扱うことのできる宗教学の専門家にも加わってもらうことで、仏教だけに留まらず、日本の宗教史・思想史を総合的に考察するため、研究会を開催した。また、国際研究集会を開催し、5 カ国から集まった宗教学、仏教学、歴史学などの専門領域にまたがる研究者らが、欧米・日本・アジア諸地域の近代仏教に関する最新の研究を報告し、近代における思想・宗教のあり方を議論した。

怪異・妖怪文化の伝統と創造－研究のさらなる飛躍に向けて－（３年計画の２年目）

現代日本における怪異・妖怪文化の展開、とりわけ近世の民俗文化、近代の大衆文化から現代のポピュラー・カルチャーにいたるまでの妖怪像・霊魂観の変遷をたどるため、怪異・妖怪の図像化やメディア研究に明るい研究者をゲスト・スピーカーとして招き、現代日本の怪異・妖怪文化の特徴を明らかにするため、研究会を開催した。

生命文明の時代を創造する（２年計画の２年目）

共同研究「日本文明史の再建」（平成 16～21 年度）の研究成果を具体的な地域政策として展開する方策を探求のうえ、具体的政策立案や立法化の方策を実施し、日本人の暮らしと日本文化の未来のために資することを目的として、研究会を開催した。

夢と表象―メディア・歴史・文化（３年計画の１年目）

研究員相互の問題意識の共有と研究交流を行い、その目的を軸に、それぞれ研究発表を行った。問題設定に必要と思われる関連分野より３名の研究者をゲスト・スピーカーとして招くなど、所外研究会（東京大学山上会館、「夢記の会」との合同研究会）を含め、研究会を開催した。

デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代（１年計画　国外公募）

目ざましく発展するデジタル環境において日本の古典、画像資料を対象とする諸研究が迎える新しい時代をめぐり、学者、デジタル技術の開発者、図書館、出版業界など異なる分野の人々が集まり、９月と１１月に合わせて計５人の研究メンバーが各自のテーマについてそれぞれ発表を行うなど、研究会を開催した。

仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論（１年計画　国外公募）

本研究は、日本とフランスとの比較に基軸をおき、空間を構成する仕掛けや道具立てに関する観念の分析を目的とする。研究計画は Japarachi（建築と空間人類学に関する日仏研究者のネットワーク）の活動の延長上に構想された。計画の最終目的である日本空間をフランスの視角から検討した「語彙集」の編纂に向けて研究会を開催した。

近代日本における指導者像と指導者論（３年計画の２年目）

幕末維新期から現代までを射程に収め、近代以降の日本人が、どのような指導者像を描き、いかなる指導者論を語ってきたかを考察するとともに、特定の指導者個人ないし指導者群を取り上げ、彼らの指導者として自己イメージを考察して、共同研究全体を通して、指導者のあり方について近代日本の全般に共通する特徴を導き出すことを追求するため、研究会を開催した。

徳川社会と日本の近代化―１７～１９世紀における日本の文化状況と国際環境―（３年計画の１年目）

19 世紀、日本が独立を堅持し資本主義的経済発展を遂げ、社会の近代化を達成しえたことの文明史的な意義は少なくない。それを可能としたのは欧米列強のアジア進出を予見し対策を講じ、力を蓄えていた徳川日本の文明史的力量であろう。各専門分野ごとに徳川時代を通観するような内容を求めるとともに、社会の近代化にとって有効と思われる因子を抽出することに努め、研究会を開催した。

「東洋美学・東洋的思惟」を問う：自己認識の危機と将来への課題（取りまとめ）

狭義の美術史や美学、思想史に限定することなく、文学、宗教、政治など隣接領域からの参画も得て学際的な接近を試み、韓国･中国のみならず、イスラーム圏を含め、アジア意識の帰趨を国際的な視野のもとに考察するため、研究会を開催した。

帝国と高等教育－東アジアの文脈（２年計画の２年目・国内公募）

日本の植民地大学の制度・機能・遺産を、東アジア史の文脈を踏まえながら解明することを目的とし、「植民地大学の制度と理念」、「植民地大学の学知と機能」、「植民地大学の遺産」をテーマに、研究会を開催した。また、国際研究集会を開催し、東アジアの諸地域で第一線の研究者を招請し、大学史、思想史、学説史などを相互に関連づけながら植民地大学の全体像に迫ろうと試みた。

文学の中の宗教と民間伝承の融合：宮沢賢治の世界観の再検討（１年計画・国外公募）

宮沢賢治の童話作品と詩を宗教（主に仏教）の教えと民間伝承の観点から再検討して、宮沢賢治作品に顕現されている「日本性と和心」及び「普遍性と平等精神」を穿ち出し確定することを主な目的とする。宮沢賢治の人生と作品を形成するのに宗教が果たした役割、彼の作品に見られる民間伝承の影響とそれに基づく彼の人生観などの課題について検討を行うため研究会を開催した。

「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―
（３年計画の１年目）

朱子学を中心とした伝統中国の哲学・思想史上の基礎的な諸概念について、精査を加え、比較・検討を行った。また、儒学思想のみならず、特に道教や中国イスラームなどとの異同や比較・検討などに主眼を置いて、時代的な変遷にも留意しつつ、検証を進めた。さらにその際、各思想における「心」や「身体」「自然」などのとらえ方について、比較の視点にもとづいた考察を加え、相互理解を深めるために研究会を開催した。

東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に（３年計画の２年目）

今日ありうるべき知的システムの構築に資すること、その研究の機運を国内に拡げ、国際的に開かれた形で、第二次世界大戦後の検討を含めて展開することを目的とする。前半期は、韓国や中国の概念史や文化史研究を行っている研究員に発表してもらい、後半期にはとくにドイツの概念史研究や哲学が近代社会に及ぼした影響について探るため、ドイツ関連の研究をおこなっているゲスト・スピーカーを招聘しながら、共同研究員の発表を企画した。また１月には、日本の民族概念が近代にどのように推移し展開したか、移民や植民の経験や体験を通していかに概念編成されたか議論するため研究会を開催した。

新大陸の日系移民の歴史と文化（１年計画）

南北アメリカ大陸に渡った日本移民とその子孫の歴史と文化に関し、多分野にわたる研究者の討論の場を提供することを目的とする。移民研究のさまざまな対象のなかで、歴史と文化に集中し、歴史に関しては 19 世紀後半から現在までとした。文化の生産者、媒介者、受容者としての移民集団を歴史的な流れ、受入国の歴史と文化、また日本の近代史と文化の中で、総合的に理解することを模索するため研究会を開催した。

日記の総合的研究（３年計画の２年目）

先人たちは何故膨大な日記（古記録）を記し続けたのか等、日記と日本人との関わりを総合的に究明することを目的とする。全員の研究をより幅広く確認し合うことによって、共同研究の全体像を定め共同研究の方向性や最終目標を決定し、多彩な分野の研究者による、幅広い学際的で総合的な日記研究の発表を行うため研究会を開催した。

（２）基礎領域研究

研究の実地訓練の機会として、フランス語、中国語、韓国語の外国語資料の解読や古文書研究等を含めた８つの基礎領域研究を設定し、セミナーを定期的に開催した。

（３）国際研究集会

日本研究の発展のための国際的な討論の場として国際研究集会を開催した。

・第 40 回国際研究集会「植民地帝国日本における支配と地域社会」

3 カ国から集まった歴史学、文化人類学、教育学、社会学などの専門領域にまたがる研究者らが、地域社会から見た植民地支配に関する最新の研究を報告し、朝鮮史研究と台湾史研究双方の成果を相互参照する機会として活用した。

開催期間：平成２３年７月１３日～１６日

開催場所：国際日本文化研究センター

参加者数：国内研究者６０名、国外研究者９名（２ヶ国）　計６９名

・第 41 回国際研究集会「近代と仏教」

5 カ国から集まった宗教学、仏教学、歴史学などの専門領域にまたがる研究者らが、欧米・日本・アジア諸地域の近代仏教に関する最新の研究を報告し、近代における思想・宗教のあり方を議論した。

開催期間：平成２３年１０月１２日～１５日

開催場所：国際日本文化研究センター

参加者数：国内研究者９０名、国外研究者８名（４ヶ国）　計９８名

・第 42 回国際研究集会「帝国と高等教育―東アジアの文脈から」

東アジアの諸地域で第一線の研究者を招請し、大学史、思想史、学説史などを相互に関係づけながら植民地大学の全体像に迫った。

開催期間：平成２４年２月１０日～１２日

開催場所：国際日本文化研究センター

参加者数：国内研究者４９名、国外研究者８名（２ヶ国）　計５７名

（４）その他の研究活動

シンポジウム（開催場所は全て日文研）

・「1950 年代日本映画における戦前・戦中との連続性・非連続性」

開催期間：平成２３年７月３０日～３１日

・「万国博覧会とアジア―上海から上海へ、そしてその先へ―」

開催期間：平成２３年９月３０日～１０月１日

・「生態、環境、資源から見る近代「満洲」：前近代からの連続・非連続を中心に」

開催期間：平成２３年１１月２５日

・「『外地』文学の言説的ネットワーク―台湾と『満州』の対話―」

開催期間：平成２４年１月２１日

・「植民地朝鮮と宗教―トランスナショナルな帝国史の叙述にむけて」

開催期間：平成２４年２月３日～４日

・「植民地裁判資料の活用―韓国大法院所蔵民事判決文を中心に」

開催期間：平成２４年２月１３日

２．研究協力活動

（１）海外における日本研究会及び海外シンポジウム

・**日本研究会**　第 13 回 EAJS(European Association for Japanese Studies/ヨーロッパ日本研究協会)国際会議の会場にて開催した。本会議に先立ち Nichibunken Workshop: Tradition and Creation of Yōkai (monstrous beings) Culture を開催し、研究発表を行った。つづいてフロアディスカッションを行った。質問・討論ともに活発に行われ、欧州におけるこの分野への関心の高まりが感じられた。ＥＡＪＳ本会議の場においても、北欧・バルト 3 国の多くの研究者らと接触することができ、有益な情報収集を行った。

開催期間：平成２３年８月２４日～２７日

開催場所：タリン大学（エストニア　タリン市）

参加者数：日本側研究者７名、現地参加者１０１名　計１０８名

・**海外シンポジウム**　第１８回海外シンポジウム「江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘―」を復旦大学と共催した。基調講演につづいて、「文人と文化」「宗教」「歴史」「建築」「貿易」「芸術」「文化交流」について研究発表と討論が行われた。江南と日本には長い交流の歴史があり、新資料の研究も進ん

でいることがわかった。なかでも、両国の文化交流に文人と禅僧が大きな役割を果たしてきたことと、文書だけでなく音楽や建築、石材なども研究資料として利用可能なことが確認できた。

開催期間：平成２３年５月２７日～２９日

開催場所：復旦大学（中国）

参加者数：日本側研究者１５名、現地参加者６５名　計８０名

・海外研究交流シンポジウム　日文研 JSA-ASEAN ワークショップ「私の研究アプローチ」を、第 3 回 JSA-ASEAN（Japanese Studies Association in Southeast Asia）国際会議に参加する形で開催した。日本研究を志す若手研究者を主な対象としたワークショップを開催し、日文研教員が個々の研究方法や経験を語りながら日文研研究活動の紹介を行った。ワークショップに引き続いての総合研究大学院大学の国際日本研究専攻の説明会では、受験希望者がさっそく現れるなどの成果があった。

開催期間：平成２４年２月２２日～２３日

開催場所：ホテル・アルマダ・ペタリンジャヤ（クアラルンプール市、マレーシア）

参加者数：日本側研究者６名、現地参加者３１名　計３７名

（２）国内外関係諸機関との連携・協力

・人間文化研究機構の事業として、欧米・アジア諸国に所在する日本関連在外資料を対象に、文化人類学、民俗学、歴史学、国文学、国語学、美術史学、アジア学など人間文化研究の諸分野の専門的研究者の派遣・招請による国際共同研究を推進した。

日文研は、８つの研究チームの総括機関となって「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」を実施・推進するため、機構内外の研究機関との連携により、調査・研究を進めた。

《研究チーム》

①アメリカ大陸チーム（ａ）総括：原山浩介・国立歴史民俗博物館助教
「南北アメリカの移民関係資料ならびに移民社会に関する研究」

②アメリカ大陸チーム（ｂ）総括：細川周平・国際日本文化研究センター教授
「南米（ポルトガル語圏）における日本人移民の生活実態に関する資料の調査・研究」

③韓国チーム　総括：松田利彦・国際日本文化研究センター准教授
「朝鮮半島における植民地統治および日本社会に関する資料の調査・研究」

④中国チーム（ａ）　総括：劉　建輝・国際日本文化研究センター准教授
「中国東北における日本人の植民地統治および社会実態に関する資料の調査・研究」

⑤中国チーム（ｂ）　総括：鈴木貞美・国際日本文化研究センター教授
「中国全土における日本人の活動に関する資料の調査・研究」

⑥音声資料チーム　総括：朝日祥之・国立国語研究所准教授
「ハワイと北米に渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究」

⑦台湾チーム　総括：籠谷直人・京都大学人文科学研究所教授
「植民地期台湾・「南洋」における日本人社会に関する資料の調査・研究」

⑧文化財保護関係チーム　総括：平勢隆郎・東京大学東洋文化研究所教授
「近代日本文化財保護政策関係資料の調査と研究」

②アメリカ大陸チーム（ｂ）においては、ブラジルの邦字新聞のデジタル化を実施し DVD 化し、日文研図書館で閲覧できる状態にした。

③韓国チームにおいてはワークショップ「植民地裁判資料の活用―韓国大法院所蔵民事判決文を中心に―」を開催し、未公開資料の朝鮮民事判決原本の公開・活用を今後どのように進めていくのかを話しあった。

開催期間：平成２４年２月１３日

開催場所：国際日本文化研究センター

参加者数：日本側研究者１４名、招聘者３名　計１７名

④⑤中国チームにおいては、シンポジウム「生態、環境、資源から見る近代『満州』：前近代からの連続・非連続を中心に」を開催し、中国における近代中国東北地域史研究の第一人者や日本の満州研

究を代表する研究者が参加し議論を行った結果、今後日本において、中国の研究者も含めた満州研究のネットワークを組織する見通しをたてることに成功した。

開催期間：平成２３年１１月２５日
開催場所：国際日本文化研究センター
参加者数：３９名

また、シンポジウム「『外地』文学の言説的ネットワーク―台湾と『満州』の対話―」を開催した。同じ「外地」である台湾と満州について、台湾研究の現状、満州との比較の可能性、有効性、さらにその作業の満州研究における意味等を確認したのみならず、今後の「対話」、協力体制の構築も模索することができた。

開催期間：平成２４年１月２１日
開催場所：国際日本文化研究センター
参加者数：２７名

・AAS（アジア研究協会）学会（平成 24 年３月 15 日～18 日、トロント・カナダ）にて日文研ブースを出展し、海外における日本文化研究者および日本文化研究資料に携わる専門家に対し、日文研の研究協力活動・出版物の紹介を行った。
・イギリスのニューカッスル大学で開催された EAJRS（日本資料専門家欧州会議）へ図書館職員を派遣し、22 年度に新築し、４月にサービスを開始した第二図書資料館（外書館）及びこれまでに収集した外書を紹介する発表を行った。

・海外研究交流ネットワーク形成を以下の通り行った。
①開催期間：平成２３年５月２３日～２７日
開催場所：ヘブライ大学（イスラエル）
②開催期間：平成２３年１０月２８日～１１月７日
開催場所：コペンハーゲン大学（デンマーク）
③開催期間：平成２４年３月１５日～１８日
開催場所：シェラトン・センターホテル（トロント市・カナダ）

(3)研究者等の受入・派遣

外国の研究機関との関係構築を図り、以下のとおり外国人研究者の招へい、国内研究者の海外派遣を進めるとともに国際研究集会・シンポジウムの開催や参加を積極的に支援した。
・外国人研究員 24 名、外来研究員 24 名（日本学術振興会特別研究員（外国人）４名を含む）を受け入れた。
・複数の共同研究会に配置された海外共同研究員 28 名（アメリカ、中国、韓国、フランス等）を本センターで行う共同研究会にのべ 10 名招へいし、研究発表等を通じて、国際的な共同研究会を実施した。
・専任教員を海外の日本研究機関等に派遣し、日本文化研究に関する国際的なネットワークの拡大と深化を図った。日本研究会（エストニア）、海外シンポジウム（中国）、海外研究交流シンポジウム(マレーシア)においても、所内外の研究者を派遣し、シンポジウムでの発表、日本研究の現状についての情報収集等を行った。
・3 回の国際研究集会を開催し、それぞれ国内研究者はもとより、第 40 回国際研究集会（植民地帝国日本における支配と地域社会）においては 2 カ国から 9 名、第 41 回国際研究集会（近代と仏教）においては 4 ヶ国から 8 名、第 42 回国際研究集会（帝国と高等教育―東アジアの文脈から）においては 2 ヶ国から 8 名の国外研究者を招へいした。

(4)海外研究交流体制の充実

・海外シンポジウム等の実施運営を円滑に行うため、海外研究交流室の教授に選考した教員を中心にして、海外シンポジウムに繋がる海外研究交流ネットワーク形成に係る取組の強化を図った。
・海外研究交流室の事業として、海外研究交流シンポジウムを開催することで海外の日本研究者との連携・交流を強化するとともに、日本研究の情報収集・分析を進めた。

３．研究情報の収集・発信

（１）研究資料及び情報の収集・整理・保存

日本文化研究に関する学術文献・資料の収集、保存、活用及び加工編集並びに日本文化研究のための資料作成・ツール開発支援に有用な環境を整備・充実させ、収集資料等を高度化して世界に発信するため、以下の取組を実施した。

１）22 年度に竣工し、書架等の整備及び資料の移動を実施した第二図書資料館（外書館）の利用を４月１日から開始した。また、図書資料館３階の改修工事を行い、貴重図書室、古典籍室、情報工房を設置することにより、資料の適切な配置場所を確保し保存環境を整えるとともに、所蔵資料のデジタル化をより一層推進するための環境整備を行った。

２）「KATSURA-Ⅱ」の開発・整備として資料（古地図や海図など）の収集、電子化やマッピングデータの作成を進めた。

３）ネットワーク関連では、ネットワーク監視サーバ及びセンタースイッチシャーシを更新し、ネットワークの安定的運用に努めた。また、更新時期を迎えたＤＢサーバ機・ネットワーク機器については、更新計画を策定し、ＤＢシステムの統合及び認証系の統合を含めた検討を進めた。さらに所外の研究者等が所内において事前申請なしに無線 LAN が利用できるよう来訪者用アクセスポイントを整備した。

４）当センターが所蔵する「鯰絵」をデジタル化したデータベースを公開し、国内外の研究者等に提供した。また、既存のデータベースにデータを追加し、内容の充実を図った。

５）外書 1,365 冊の収集を行った。

６）日本研究資料整備の一環として、「風俗画資料」を 54 点収集した。

７）日韓文化交流基金図書センターから寄贈された韓国語資料の 841 冊及び「海野文庫」の 370 冊について、整理を行った。

（２）研究成果の公開・発信

・出版物の充実をはじめとして、多様な方法を用いて、研究成果を広く国内外に公開・発信し、研究の促進をはかるとともに社会への貢献に努めた。具体的には以下のとおり研究成果を出版し、国内外の日本研究関連研究機関等へ配布した。

１）『日本研究』（日文研の専任教員、客員教員、共同研究員、外国人日本研究者等の研究成果を収録する日本語で書かれた原著論文集で、査読のうえ掲載）２冊

２）*Japan Review*（日本文化の研究に関わっている者なら誰でも投稿できる日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した外国語で書かれた論文集で、査読のうえ掲載）１冊

３）『日文研叢書』（日文研の専任教員、客員教員、共同研究員等が、個人研究並びに共同研究成果をオリジナルな研究論文、貴重資料集成等のかたちで発表するモノグラフシリーズ）１冊

４）国際研究集会報告書（日文研が主催した国際研究集会において発表・討議された内容を収録した報告書。執筆者は国際研究集会参加者）２冊

５）海外シンポジウム報告書（日文研が主催し、海外で行われた海外シンポジウムで発表・討議された内容を収録した報告書。執筆者は海外シンポジウム参加者）２冊

６）『日文研フォーラム報告書』（来日中の外国人研究者が日文研フォーラムにおいて日本に関連したテーマについて発表した研究成果を記録した報告書）１冊

７）共同研究成果報告書（日文研が主催した共同研究で発表・討議された内容を収録した報告書（商業出版を含む）。執筆者は研究発表者、代表者等）６冊

８）『日文研』（日文研の教員、共同研究員、外国人研究員等の活動状況を収録した広報誌）２冊

９）*NICHIBUNKEN NEWSLETTER*（日文研の教員、共同研究員等の活動状況を海外研究者むけに収録した英文和文併記の広報誌）２部

・24 年 3 月に施行した運用指針に基づき機関リポジトリとして「日文研リポジトリ」の試験公開を行った。

・センターの出版物のうち『日本研究』、*Japan Review*、『日文研フォーラム報告書』を引き続き電子化し、ウェブサイトに掲載し国内外に向けて発信した。また、その他のセンター発行の出版物について学術

研究成果物等をウェブサイトで広く国内外に発信するための準備を行った。
・ウェブサイトの利便性向上のため、全面リニューアルに向け検討及び改善作業を行った。また、研究活動、催し物案内などウェブサイトによる情報提供を随時行った。

４．大学院教育への協力・人材養成

（１）大学院教育への協力

・基盤機関として総合研究大学院大学文化科学研究科の国際日本研究専攻の大学院生に対して教育研究の場を提供し、国際的・学際的な日本研究を進めるために、本専攻の特色である、全教員が指導する単一の分野「国際日本研究」において、研究人材の育成を図った。共通必修科目として、「日本研究基礎論」「学際研究論」「論文作成指導」を、また、選択科目として「シンポジウム等運営実習」を置き、国際的な立場から「日本研究」の理論的・方法論的な指導を行い、これらの研究と研究指導を推進することにより、創造的で高度な専門的視野と、幅広い学際性、複数の専攻を横断しうる総合性を備えた研究者の育成を図った。
・23 年 12 月に開催された文化科学研究科主催の「学術交流フォーラム」に施設・設備等を提供し、その準備・実施に協力して研究科全体の教育の向上に寄与した。
・国公立の大学院から 3 名の特別共同利用研究員を受け入れ、担当教員が個別に専門的指導を行った。
・英国芸術・人文リサーチ・カウンシル（ＡＨＲＣ）との研究交流協定に基づき、イギリスの大学院生の短期受け入れのためのピア・レビュー等を実施し、大学院生１名を受け入れ、人材の養成に寄与した。

（２） 人材養成

・各共同研究会において、若手研究者が積極的に研究発表を行えるようプログラムを組み、発表後は指導・助言を含めた討論を通じて、今後の研究・成果等に役立てられるよう研究支援体制を整えた。
・機関研究員６名、プロジェクト研究員５名及びリサーチ・アシスタント７名を雇用し、専用の研究スペースを提供するとともに、研究プロジェクト等へ参画させて、若手研究者の育成を図った。また、ポスト・ドクター等５名を外来研究員として受け入れ研究指導を行った。
・海外研究交流シンポジウムとして第３回 JSA－ASEAN（東南アジア日本研究学会）国際会議に参加し、「私の研究アプローチ」と題したワークショップを開催し、日文研の教員が若手研究者向けに日本研究の方法や経験について発表を行うとともに、総研大の広報を行うなどして人材養成のサポートを図った。

５．社会との連携

（１）研究成果の還元

１）次のとおり学術講演会等を開催し、研究活動情報の発信を行った。また、講演会をインターネット中継するとともに、過去の講演会をウェブサイト上にアーカイブ化し、常時閲覧可能にすることで、共同研究の成果を社会へ発信した。

《学術講演会》

・第 49 回学術講演会　平成 23 年 9 月 29 日
「小笠原諸島の自然と文化 ―世界遺産から未来へ―」
「明清交替と東アジア」

・第 50 回学術講演会　安田喜憲教授退任記念講演会　平成 24 年 3 月 23 日
「『神都』物語り：明治期の伊勢について」
「環境考古学への道」

《公開講演会》

・第 41 回国際研究集会公開講演会　平成 23 年 10 月 15 日
「仏教と平和」

《特別講演会》

・日文研・地球研合同シンポジウム　平成 23 年５月 21 日
「環境問題はなぜ大事か―文化から見た環境と環境から見た文化―」

《公演会》

・伝統文化芸術総合研究プロジェクト　平成 24 年２月 17 日
『新作能『ルター』（試作）』

《日文研フォーラム》

・来日中の外国人研究員の日本語による研究発表及び一般市民との交流の場として、11 回開催した。

２）大学共同利用機関協議会主催のシンポジウム（平成 23 年 11 月、ベルサール秋葉原）において、センターの共同研究及び活動を紹介する展示を行った。

（２）地域社会との連携

１）一般公開を平成 23 年 10 月に実施し、次のとおり公開事業を行った。

・教員によるセンター施設案内
・セミナー「地震と生きる日本人」
・日文研の海外活動紹介
・日文研木曜セミナー特別企画「私の日本研究」
・研究活動紹介「共同研究のパネル展示」
・日文研所蔵資料の展示「江戸の大地震と鯰絵」
・カレンダープレゼントコーナー
・日文研教員の書籍販売コーナー

２）近隣の小学校に教員を派遣し、児童に対し、資料やスライドを利用して研究活動を分かりやすく紹介する出前授業を８講座実施した。また、中学校の総合学習への協力として施設見学を受け入れ、地域との連携を図った。

３）報道関係者との懇談会を３回実施し、研究活動の紹介及び各種催し物の案内などの情報提供・意見交換を行った。

６. 業務運営･財務に係る取組

（１） 業務運営の改善及び効率化

［運営体制・研究組織の改善・見直し］

・外部有識者が過半数を占める運営会議において、所長候補者選考、共同研究、研究協力等の事業計画及び組織運営全般について審議、意見交換を行い、研究者コミュニティの意見を反映させた。

・研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るために、「国際日本文化研究センターにおける所長裁量経費の配分基本方針」に基づき、所長のリーダーシップのもと重要性・緊急性等を勘案して所長裁量経費の配分を行った。

［人事の活性化］

・事務系職員の採用について、平成 23 年度国立大学法人等職員統一採用試験合格者から１名採用するとともに、事務職員・技術職員について、京都大学、大阪大学等との人事交流を実施した。

・業務に必要な知識、技能を高めるため、国立大学協会、人事院、交流大学等の主催する各種研修・セミナー等に積極的に職員を参加させ、事務職員等の資質の向上を図った。

・育児休業制度を利用しやすい環境を整備し、利用促進を図った。

［事務等の効率化・合理化］

・平成 21 年 12 月からメールシステムをホスティング化したが、平成 23 年度も継続してその維持管理を外部委託することにより、メールサーバの管理負担・維持経費の軽減と停電等によるメールサービス停止の防止に引き続き努めた。

・管理業務のうち警備業務、清掃業務、日文研ハウス管理業務について、外部業者に委託し経費節減を図った。

・出版物の制作について、電子化のために必要な PDF データのフォーマットを統一し、仕様に追加することにより業務の効率化を図った。

（２） 財務内容の改善

［外部研究資金その他の自己収入の増加］

・外部研究資金の募集状況を、電子掲示板へ掲載する等の措置により職員に周知させるとともに、科学研究費補助金の申請、使用方法等についての説明会を実施するなど、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金の積極的獲得に努めた。
・「人間文化研究機構資料特別利用規程」を踏まえてデジタル画像利用についての内容を新たに盛り込んだ「国際日本文化研究センター資料特別利用規則」を制定し、デジタル画像の利用について料金の徴収を開始し、自己収入の増加に努めた。

[経費の抑制]

・適切な人員配置等により、平成 23 年度においては概ね 1%の人件費の削減を図った。
・超過勤務縮減計画に基づく「ノー残業デー」や「ノー残業ウィーク」等の周知徹底により、超過勤務の縮減を図った。
・前年度に、複写機の契約について賃貸借契約と保守契約を一本化し、包括役務契約として一般競争入札を行い、23 年度は複数年契約３年の２年目を実施した。
・平成 21 年 12 月からメールシステムをホスティング化したが、平成 23 年度も継続してその維持管理を外部委託することにより、メールサーバの管理負担・維持経費の軽減と停電等によるメールサービス停止の防止に引き続き努めた。
・管理業務のうち警備業務、清掃業務、日文研ハウス管理業務について、外部委託し経費節減を図った。
・「日韓文化交流基金図書センター」から寄贈された韓国語資料の図書整理業務を外部委託し、業務の効率化に努めた。
・所内グループウェア（サイボウズ）に電力の使用状況を掲載することにより、省エネ意識の啓蒙に努めるとともに、電力消費量の少ない機器（冷蔵庫等）を率先して導入した。
・電力需要対策について、夏季及び冬季の節電実施計画を策定し、昨年夏季・冬季比で使用最大電力の 10%以上の抑制を実施した。（参考：使用電力量において夏季▲16.5%、冬期▲12.2%）
・中央監視による空調運転状況を確認し、適切な運転台数になるよう努めた。
・空調設備機器の長期更新計画を策定し、緊急修理にならないよう努め、修繕経費の抑制に努めた。

[資産の運用管理の改善]

・施設利用委員会において使用状況の点検評価を行い、有効活用に努めた。

（３） 自己点検・評価及び情報提供

[評価の充実]

・各種委員会の所掌業務について、委員会ごとに自己点検を実施し、課題の改善状況等について進捗状況の評価を行った。その際、滞在中の外国人研究員にアンケートを実施するとともに自己点検作業への参画を求め、業務運営等について幅広く意見聴取を行い、次のとおり自己点検に反映させた。
・雑誌収集方針の再検討が必要であるとの意見を受け、和雑誌について見直しに着手した。
・研究資料のデジタル化の要望に対応し、共通機器室にスキャナーを設置した。
・研究者の研究上の情報環境改善に関する意見に対し、対応策をまとめた。
また、自己点検・評価結果は、センター会議に報告し、組織の運営改善に活用した。

[情報公開等の推進]

・22 年度自己点検報告書をウェブサイトに掲載した。
・国立大学法人評価委員会による評価として大学共同利用機関法人人間文化研究機構の第１期中期目標期間（平成 16～21 事業年度）に係る業務の実績に関する評価結果、同機構の平成 22 年度に係る業務の実績に関する評価結果をウェブサイトにおいて公開した。
・『要覧』（和英併記）、広報誌『日文研』、*NICHIBUNKEN NEWSLETTER* の発行により内外への研究活動の情報公開に努めた。
・「一般公開」では、講演会、セミナー、貴重所蔵資料の展示、図書館及び研究室等の施設案内を実施し、研究活動の普及と情報発信の強化を図った。
・報道関係者との懇談会を３回実施し、研究活動の紹介及び各種催し物の案内などの情報提供・意見交換を行った。

（４）その他の業務運営

［施設設備の整備・活用等］

・22 年度に竣工し、書架等の整備及び資料の移動を実施した第二図書資料館（外書館）の利用を４月１日から開始した。

・省エネ型照明器具への更新を行うとともに、ＬＥＤ型電球への更新を率先して行った。

・施設利用委員会において使用状況の点検評価を行い、有効活用に努めた。

［安全管理］

・緊急時の連絡体制として、全職員の緊急時連絡先を人事異動時等に随時変更し、最新情報の維持に努めた。

・非常事態発生時における連絡網を随時更新し、事務手続マニュアルにおいて教職員への周知を行った。

・衛生管理者による巡視を定期的に行い、巡視状況について産業医へ報告し安全措置を講じた。

・西京消防署指導のもと大規模地震を想定した総合防災訓練を実施した。（平成 24 年２月 15 日）

・防災マニュアルを改訂し教職員に配布及び所内グループウェア（サイボウズ）への掲載を行った。

・定期健康診断を実施するとともに、職員の勤務状況及び健康状態の把握に努め、「不眠症について」の講演を企画するなど、産業医の協力を得て健康管理を行った。

・当センターのセキュリティポリシー対策基準について、機構のセキュリティポリシーの規定に基づき組織・体制等を見直すとともに、システム管理部会の役割を明確にするため情報セキュリティ委員会の規則改正を実施した。

［適正な法人運営］

・適正な業務運営を行うため、国立大学協会、人事院、交流大学等の主催する各種研修・セミナー等に関係職員を参加させた。

・研究活動における公的研究費の不正使用防止計画に基づき、教職員に対する説明会（平成 23 年９月 22 日）を実施した。また、全教職員を対象に、「公的研究費等の不適切な経理の有無に関する調査」（平成 23 年９月～12 月）及び、「モニタリング調査」（平成 23 年 12 月～平成 24 年１月）を実施するなど、外部資金の取り扱い等における不正行為の防止に継続的に努めた。

日文研　平成２４年度　自己点検報告書

Ⅰ．国際日本文化研究センターの研究目的と特徴

《研究目的》

国際日本文化研究センター（以下「日文研」という）は、大学共同利用機関として、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究、並びに世界の日本研究者に対する研究協力を目的としている。

《特徴》

① 研究目標

日本文化の理解促進のため、広く世界に開かれた研究および研究協力体制を整備し、既存の学問分野にとらわれない、国際的・学際的な研究の総合的視野からの発展を目指す。

また基盤となる資料・情報収集も目標とする。

② 活動分野

次の３分野から成る。１）個人研究および共同研究を主体として行われる「研究活動」、２）世界の日本研究者に対する資料・情報提供を含む「研究協力活動」、３）上記活動の成果の刊行、研究成果の発表と日本文化研究の普及を目的とする学術講演会・シンポジウム等の「普及活動」。

③ 研究活動

高い見識を有する専門家を国内外から公募・招聘・採用し、構成・実施する「共同研究」が中心となる。変化・流動する国際社会へ柔軟に対応し得るよう、講座制や部門制などの固定的組織ではなく、研究域・研究軸という枠組みを中心に据える。日本文化の全体像把握のため「動態研究」「構造研究」「文化比較」「文化関係」「文化情報」の五つの研究域を設定、さらに、時系軸、地域枠、文化情報系等に分節し、三つの研究軸を設ける。研究軸はそれぞれの研究域の示す視座の中で、いくつかの方向性を特定する。

④ 研究協力活動

海外の関係機関や研究者との交流を強化するため「海外研究交流室」を設け、シンポジウム等を開催している。また、画像資料等を用いた従来にない日本文化研究の方法やシステムの開発研究を専門的・体系的に進める「文化資料研究企画室」を設置している。

⑤ 普及活動

研究活動・研究協力活動を広く一般の方々に知っていただき、「社会に開かれた研究機関」であるよう努めている。さらに、活動によって得られた成果を広く社会へ還元している。

［想定する関係者とその期待］

想定する関係者：国際的な視野に立ち、既存の学術専攻分野を横断した「国際日本文化研究」を志向する内外の日本研究者、研究成果の発信先となる社会一般。

主な期待：動態研究、構造研究、文化比較、文化関係および文化情報の観点からの、日本文化に関する国際的、学際的、総合的な共同研究の推進、研究協力および情報の集約と提供。

Ⅱ．平成 24 年度の取組状況

1．研究事業

（1）共同研究

資料：研究協力課からの資料

日本文化に関する国際的及び学際的な総合研究を、国内外の研究機関、研究者と協力し、計画どおり実施した。具体的には、活動の基幹をなす共同研究として、上述の制度設計に従い、外国人研究員の参画も得て、以下のとおり 19 件実施した。なお、このうち、国内公募による共同研究を２件（「現代民俗研究方法論の学際的研究」「建築と権力の相関性とダイナミズムの研究」）及び国外公募による共同研究を３件（「デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代」「仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論」「日本文化形成と戦争の記憶」）を実施した。

［平成 24 年度共同研究］

文明と身体（取りまとめ）

古今東西の身体へのまなざしを考えるのに相応しい事例を、文明という文脈のもとでまず考察を加え、そしてそのような歴史上の諸事例を参考にしつつ、最終的には近代日本の文明観を、身体を一つの切り口にして再検討した。また、研究成果の出版へ向けて随時討議を重ねた。

人文諸学の科学史的研究（３年計画の１年目）

今までやや疎かにされてきた歴史学や文学研究などを、科学史的に振り返ることを志し、仏教史、美術史、経済史といったテーマに則して、学術の歴史を探った。また、当研究会の志と目論みは新聞にも取り上げられ、広く伝えられた。

日本庭園のあの世とこの世－自然、芸術、宗教（２年計画の１年目）

日本庭園のなかでも中世の日本庭園を対象に、中世の自然観（あの世）を考えた。具体的には中世の日本庭園の造形と思想を読み解くのに最適である『作庭記』を対象として研究を進めた。11 月には「作庭記と日本庭園」をテーマにシンポジウムを開催した。

怪異・妖怪文化の伝統と創造－研究のさらなる飛躍に向けて－（３年計画の３年目）

妖怪文化が日本文化に果たしてきた役割を多領域から照射し、立体的に分析する一方で、そうした日本の怪異・妖怪文化が国外から受けた影響や、現在国外にもたらしている影響についての研究を進展させた。さらに平成 25 年度に予定される国際研究集会の準備を行った。

現代民俗研究方法論の学際的研究（国内公募研究）

５つに分類した研究分野の研究者の発表と双方向的な議論により、国民や民族の均質性・同一性を創出する固定的・静態的な「民俗」概念を再検討し解体することで、異人、他者、移民、移動や流動性などを視野に入れた、新たな学術概念として再構成を行った。

夢と表象―メディア・歴史・文化（３年計画の２年目）

研究員相互の問題意識の共有と研究交流、及び、新たな問題意識からの研究の推進をめざし、それぞれ研究発表と関連討議を行った。問題設定に必要と思われる関連分野より３名の研究者をゲスト・スピーカーとして招き、所外にて「睡眠文化研究会」との合同研究会も行った。

デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代（１年計画　国外公募）

在来の中世文学や画像研究の研究者に、デジタル環境の開発や管理に携わる専門家も加わり、それぞれの立場からの問題提起と意見交換が行われた。また、「デジタル」と「古典画像」との交流、二つの分野に跨る知見を纏め、ミニシンポジウムを開催した。

建築と権力の相関性とダイナミズムの研究（１年計画　国内公募）

文献調査と現地調査を行い、研究会ではその研究成果を持ち寄って、４つの視点（１．「古都」の権力の研究、２．「民都」の権力の研究、３．関東と関西との比較考察、４．「建築と権力」の理論化）で研究を進め、建築と権力との関係の理論化を図るべく議論を進めた。

仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論（１年計画　国外公募）

建築用語、建築素材、とりわけ木造の建造物の特性、都市計画法など行政的な枠組み、さらには都市計画、都市景観にかんする美学、建築空間に関する哲学的な概念などにわたって、語彙集編纂のために選別された語彙について、参加者が論文をもちより、相互討議により批判的検討をすすめ、最終原稿をまとめる作業を行った。

近代日本における指導者像と指導者論（３年計画の３年目）

指導者のあり方について近代日本の全般に共通する特徴を導き出すことを追求するため、研究員が設定したテーマについて、各自その研究成果を踏まえた最終報告を行った。同時に、あらためて研究目的の共有を徹底し、概念や用語の統一を図って、成果報告書の作成に向けた準備に努めた。

徳川社会と日本の近代化―１７～１９世紀における日本の文化状況と国際環境―（３年計画の２年目）

18 世紀徳川社会に見られたものが、19 世紀のそれへ移行していく中で、どのような変容と発展をとげていくかを分析するため、アジア諸国および欧米諸国の動向にも目を配り、グローバルな観点から徳川社会の動態特性を探究した。

昭和 40 年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析－ザ・タイガースの研究（３年計画の１年目）

研究者同士の共通理解の形成、および各人の研究会における役割分担を明確にした。また、単行本や雑誌を始めとする関係資料の収集の基礎が定まり、日本歌謡史および欧米ロック史におけるグループサウンズの位置づけの研究の基本路線が定まった。

21 世紀 10 年代日本文化の軌道修正：過去の検証と将来への提言（準備会）

現在の研究体制にたいする問い直しを提唱するため、今後の共同利用機関としての共同研究の可能性を含めて、「産・官・学協同による学術研究の将来を考える」など、毎回、特定のトピックを選び、集中的な審議を試みた。

万国博覧会とアジア（１年計画）

万国博覧会をめぐるさまざまな論点を整理し、アジア諸国間の比較の文脈の中に置き直すことで、意識的に「日本」の位置を相対化する研究の可能性を追求した。また、新たな万博研究の意義をメンバー間で共有し、今後の研究会の計画立案につなぐことができた。

日本文化形成と戦争の記憶（１年計画　国外公募）

「歴史化」という広範な課題、生きている記憶を通した戦争の歴史的表象の問題、歴史的ナラティブの個人的かつ集団主義的な記憶がいつ日本に適合したのかを体系的に分析した。また、戦争の記憶との関連で文化を見直すことで、新しい認識や概念編成にむけての共通理解をさぐった。

「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―
（３年計画の２年目）

仏教学や韓国哲学（朝鮮儒教）など専門分野の研究者を迎え、主として朱子学の基本概念を中心としつつも、儒教のみならず、道教や中国イスラームを含む、中国思想史上の基礎的な諸概念について、日本思想史との比較や文化交渉史などの観点も加えて、分析や検討を行った。

東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に（３年計画の３年目）

各国でおこなわれている東アジア近現代の概念編成史の成果報告を行った。また、国際的、総合的な視野に立ち、今後の学術の再編成に向けての具体的な提言に結びつけるため、中国、韓国、台湾から研究者を招聘し、各国の合同の国際研究集会を開催した。

新大陸の日系移民の歴史と文化（３年計画の１年目）

教育、文学、芸能、言語が発表の主な分野であったが、討論の話題はそれよりも多岐にわたった。東北の村おこしとアマゾンの自然や先住民文化の展示という一見、かけ離れた組み合わせの理想と現実について、それを推進した人類学者から直接、話を聞く機会をもうけた。

日記の総合的研究（３年計画の３年目）

日本史学、日本文学、心理学、それぞれの分野から、独自の視点による本格的で個別具体的な研究発表を行い、それに対する討論を蓄積することによって、研究の深化をはかった。また、中国や韓国における日記の研究を行った実績のある海外共同研究員が参加した。

（２）基礎領域研究

日本文化の基礎領域の研究に資するため、「古文書研究」、「文化論の基礎概念と方法」、「宗教・文化の理論的研究」等８件を実施した。

（３）国際研究集会

日本研究の発展のための国際的な討論の場として国際研究集会を開催した。

・第 43 回国際研究集会「仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論」

日本の建築における空間語彙の特性をフランス語に照らして検討するとともに、①日本の庭園、②名所概念の成立と展開、③公共空間をめぐる思想史的検討、④空間構造における時間制に関する４つの講演を組み合わせることにより、従来組織的な考察がおろそかにされてきた分野に鍬を入れた。

開催期間：平成 24 年５月 11 日～13 日

開催場所：国際日本文化研究センター

参加者数：国内研究者 72 名、国外研究者 10 名（１ヶ国）　計 82 名

・第 44 回国際研究集会「東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に」

6 回の共同研究と 10 回の国際シンポジウムを含む、足掛け 10 年間の関連研究成果の総括となった。日文研公開講演会「東アジアにおける概念研究の現在」（11 月 13 日。入場者 198 名）においては、日本・中国・台湾・韓国の研究者による国ごとの最先端の概念研究の報告がなされ、概念編成史研究の東アジア圏における共通した意義と将来像が展望された。

開催期間：平成 24 年 11 月 13 日～17 日

開催場所：国際日本文化研究センター

参加者数：国内研究者 75 名、国外研究者 12 名（４ヶ国）　計 87 名

（４）その他の研究活動

シンポジウム（開催場所は全て日文研）

・「『妙貞問答』の訳注・英訳・研究」

開催期間：平成 24 年４月７日

・「ポスト世俗主義と公共性」

開催期間：平成 24 年７月 22 日

・「近代アジアをめぐる絵ハガキメディアー帝国・表象・ネットワーク」

開催期間：平成 24 年 11 月 10 日～11 日

・「近代仏教ートランスナショナルな視点から」

開催期間：平成 24 年 12 月８日

・「日蘭関係史をよみとくー蘭学を中心にー」

開催期間：平成 24 年 12 月８日～９日

・「近代日本と華北――文化交流からの再検証」

開催期間：平成 24 年３月 15 日

２．研究協力活動

（１）海外における海外シンポジウム

・海外シンポジウム　第 19 回海外シンポジウム「『日本研究』再考―北欧の実践から」をコペンハーゲン大学日本学科ならびにアジアン・ダイナミクス・イニシアティブと共催した。発表は「テキストと空間の新しい読みをめぐって―宗教からポピュラー・カルチャーまで」、「日本とヨーロッパ―グローバル化された『日本研究』に向けて」の二つのセッションで構成される。発表ののちに設けたフリーディスカッションには、もう一方のセッション参加者、基調講演者、一般ディスカッサントを含む全員が積極的に参加し、十分な討論を行うことができ、学際的交流の機会として成功裏に終わった。

開催期間：平成 24 年８月 22 日～24 日

開催場所：コペンハーゲン大学（デンマーク）

参加者数：日本側研究者 11 名、現地参加者 31 名　計 42 名

・海外研究交流シンポジウム　「中国の日本認識、日本の中国認識」のテーマで発表討論が行われた。共催研究機関である文史研究院側の周到な準備、専門の通訳者の配置により支障なく意思の疎通がはかられ、密度の高い議論が交わされた。とりわけ近代国民国家の前提を問い直すことが必要という点で、意見の一致を見た。その内容は、ただちに新聞『東方早報』3 月 2 日に報道され、高い評価を受けた。その発表・討論の全体は、復旦大学側で単行本(中国語)として出版予定である。

開催期間：平成 25 年２月 28 日～３月１日

開催場所：復旦大学

参加者数：日本側研究者５名、現地参加者７名　計 12 名

（２）国内外関係諸機関との連携・協力

日本関連在外資料調査「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」

人間文化研究機構では、欧米における日本文化研究の比重低下の打開と日本文化の世界史的意義を明らかにすることを目指し、平成 22(2010）年度より日本関連在外資料の国際共同研究を実施している（平成 24 年度は６年計画３年目）。

全体を前近代と近現代のふたつに区分し、日文研は後者の総括機関として、近現代に海外に移住した日本人の活動の軌跡を、その土地の自然、社会環境とともに示す在外資料を調査、発掘、整理し、今後の研究の発展に資することができる形で公開し、また、調査結果を生かした研究を進め、国際的な文化史研究全般への機運を高め、将来への指針を確定することを目的として、本国際共同研究を推進している。

【実施機関及び分担事業】

◎総括機関　国際日本文化研究センター　総括責任者：劉 建輝准教授（平成 25 年 4 月 1 日より教授）

▼実施機関：国際日本文化研究センター

①南米（ポルトガル語圏）における日本人移民の生活実態に関する資料の調査・研究

総括：細川周平・国際日本文化研究センター教授

②朝鮮半島における植民地統治および日本社会に関する資料の調査・研究

総括：松田利彦・国際日本文化研究センター准教授（平成 25 年 7 月 1 日より教授）

③中国全土における近代日本人の経済・社会・文化等の活動に関する資料の調査・研究

総括：劉　建輝・国際日本文化研究センター准教授（平成 25 年 4 月 1 日より教授）

▼実施機関：国際日本文化研究センター

④南北アメリカの移民関係資料ならびに移民社会に関する研究

総括：原山浩介・国立歴史民俗博物館准教授

▼実施機関：国立国語研究所

⑤ハワイと北米に渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究

総括：朝日祥之・国立国語研究所准教授

▼実施機関：東京大学東洋文化研究所

⑥近代日本文化財保護政策関係資料の調査と研究

総括：平勢隆郎・東京大学東洋文化研究所教授

▼実施機関：京都大学人文科学研究所

⑦植民地期台湾・「南洋」における日本人社会に関する資料の調査・研究

総括：籠谷直人・京都大学人文科学研究所教授

平成 24 年度は、ハワイのビショップミュージアムなどで海外資料調査を行うとともに国際シンポジウム「東アジア近代と張家口」（中国張家口職業技術学院と共催）等を開催した。

また、日本関連在外資料調査研究プロジェクト（近現代）のウェブサイトを公開し、研究成果を広く発信した。

各班において資料調査、戦前戦中期に発刊された日系新聞のデジタル化、在外資料の目録及びデータベース作成、研究会、国際シンポジウム等を実施している。24 年度は、アメリカ大陸邦字新聞など、23 年度ま

でに調査完了済みの資料のデジタル化及び公開を進めるとともに、ワークショップ「在台湾日本語歴史資料の保存と利用」（平成 24 年 11 月 30 日、於京都大学、参加者 59 名）、国際シンポジウム「東アジア近代と張家口」（平成 24 年７月 23 日～24 日、於張家口職業技術学院（中国））、「近代日本と華北―文化交流からの再検証」（平成 25 年３月 15 日、於日文研、参加者 21 名）等の開催等による研究成果の発信を行った。

・例年継続的に参加しているＥＡＪＲＳ（European Association of Japanese Resource Specialists;日本資料専門家欧州協会）の総会（９月、ドイツ、ベルリン国立図書館）に教員と資料課職員を派遣し、所蔵しているコレクションの柱である「外書」に関する発表を行った。

・海外研究交流ネットワーク形成を以下の通り行った。
①開催期間：平成 24 年５月 22 日～23 日
開催場所：テルアビブ大学（イスラエル）
②開催期間：平成 24 年８月 28 日～９月６日
開催場所：ベオグラード大学、他（旧ユーゴスラビア）
③開催期間：平成 25 年１月 14 日～18 日
開催場所：国家大学、他（ベトナム）

（3）研究者等の受入・派遣

外国の研究機関との関係構築を図り、以下のとおり外国人研究者の招へい、国内研究者の海外派遣を進めるとともに国際研究集会・シンポジウムの開催や参加を積極的に支援した。

・外国人研究員 26 名、外来研究員 23 名（日本学術振興会特別研究員（ＰＤ２名・ＲＰＤ１名・欧米短期１名）４名を含む）を受け入れた。
・複数の共同研究会に配置された海外共同研究員 30 名（アメリカ、中国、韓国、フランス等）を本センターで行う共同研究会にのべ９名招へいし、研究発表等を通じて、国際的な共同研究会を実施した。
・専任教員を海外の日本研究機関等に派遣し、日本文化研究に関する国際的なネットワークの拡大と深化を図った。海外シンポジウム（デンマーク）、海外研究交流シンポジウム(中国)においても、所内外の研究者を派遣し、シンポジウムでの発表、日本研究の現状についての情報収集等を行った。
・上記のうち、海外シンポジウム（デンマーク）において、日本研究者を対象に電子媒体を含めた日本研究資料の情報提供と利用方法についての案内を、初めての試みとして行った。
・国際研究集会を２回開催し、それぞれ国内研究者はもとより、第 43 回国際研究集会（日仏の空間語彙：概念と仕掛け）においては１ヶ国から 10 名、第 44 回国際研究集会（東アジアにおける知的交流―キイ・コンセプトの再検討）においては４ヶ国から 12 名の国外研究者を招へいした。

（4）海外研究交流体制の充実

・海外シンポジウム等の実施運営を円滑に行うため、海外研究交流室長を中心にして、海外シンポジウムに繋がる海外研究交流ネットワーク形成に係る取組の強化を図った。
・海外研究交流室の事業として、海外研究交流シンポジウムを開催することで海外の日本研究者との連携・交流を強化するとともに、日本研究の情報収集・分析を進めた。

３．研究情報の収集・発信

（１）研究資料及び情報の収集・整理・保存

日本文化研究に関する学術文献・資料の収集、保存、活用及び加工編集並びに日本文化研究のための資料作成・ツール開発支援に有用な環境を整備・充実させ、収集資料等を高度化して世界に発信するため、以下の取組を実施した。

１）24 年 1 月から 3 月にかけて実施した図書資料館３階の改修で、保存環境が整った貴重書室、古典籍室に約 16，500 冊の資料の配置を行った。また同じく整備した貴重書閲覧室の使用を開始し、所蔵資料の利用を推進するための環境を整えた。

２）図書資料館改修の整備に際し、電子資料の作成等を目的として整備した「情報工房」を活用し、「KATSURA-Ⅱ」開発・整備のための研究資料画像データ化作業の一環として、これまでに本センターで収集した古地図の電子画像化及び地名情報のデジタルテキスト化作業を促進した。

３）ＤＢサーバの更新計画に基づき、ＤＢシステムの構造を統一化・定型化する「日文研研究支援システム」の構築を進めるとともに、同システム上において認証系の統合に必要な機能の検討を行った。また、機構の研究資源共有化統合検索システムとの連携機能を構築し、本センターの研究資源、データベースとの共有を図った。

４）平安時代中期（摂関期）の古記録全文の訓読文を順次登録する「摂関期古記録データベース」を構築し、本年度は『御堂関白記』のデータを登録・公開して、国内外の研究者等に発信した。また、既存のデータベースにデータを追加し、内容の充実を図った。

５）外書（外国語で書かれた日本の記録・研究文献）の収集を体系的に行い、546 冊（24 年 12 月末）を収集した。

６）日本研究資料整備の一環として「風俗画資料」の収集を 48 点（24 年 12 月末）行った。

７）未整理資料（文庫、視聴覚資料を含む）の 1，364 冊の整理を行い、利用環境を整備した。

（２）研究成果の公開・発信

・出版物の充実をはじめとして、多様な方法を用いて、研究成果を広く国内外に公開・発信し、研究の促進をはかるとともに社会への貢献に努めた。具体的には以下のとおり研究成果を出版し、国内外の日本研究関連研究機関等へ配布した。

１）『日本研究』（日文研の専任教員、客員教員、共同研究員、外国人日本研究者等の研究成果を収録する日本語で書かれた原著論文集で、査読のうえ掲載）２冊

２）*Japan Review*（日本文化の研究に関わっている者なら誰でも投稿できる日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した外国語で書かれた論文集で、査読のうえ掲載）１冊

３）『日文研叢書』（日文研の専任教員、客員教員、共同研究員等が、個人研究並びに共同研究成果をオリジナルな研究論文、貴重資料集成等のかたちで発表するモノグラフシリーズ）１冊

４）*Nichibunken Monograph*（日文研における研究活動のすぐれた成果で、既刊の著作の改訂または書き下ろした学術論文の英文モノグラフシリーズ）１冊

５）国際研究集会報告書（日文研が主催した国際研究集会において発表・討議された内容を収録した報告書。執筆者は国際研究集会参加者）４冊

６）『日文研フォーラム報告書』（来日中の外国人研究者が日文研フォーラムにおいて日本に関連したテーマについて発表した研究成果を記録した報告書）６冊

７）共同研究成果報告書（日文研が主催した共同研究で発表・討議された内容を収録した報告書（商業出版を含む）。執筆者は研究発表者、代表者等）２冊

８）『日文研』（日文研の教員、共同研究員、外国人研究員等の活動状況を収録した広報誌）２冊

９）*NICHIBUNKEN NEWSLETTER*（日文研の教員、共同研究員等の活動状況を海外研究者むけに収録した英文和文併記の広報誌）２部

10）25 周年記念誌『新・日本学誕生　国際日本文化研究センターの 25 年』（平成 24 年５月に創設 25 周年を迎えた）　１冊

・出版物の電子化、ウェブ発信については、24 年度に著作物利用許諾の依頼作業を開始した。

・ウェブサイトの利便性向上のため、全面リニューアル作業を行った。また、研究活動、催し物案内などウェブサイトによる情報提供を随時行った。

４．大学院教育への協力・人材養成

（１）大学院教育への協力

・基盤機関として総合研究大学院大学文化科学研究科の国際日本研究専攻の大学院生に対して教育研究の場を提供し、国際的・学際的な日本研究を進めるために、本専攻の特色である、全教員が指導する単一の分野「国際日本研究」において、研究人材の育成を図った。共通必修科目として、「日本研究基礎論」「学際研究論」「論文作成指導」を置き、国際的な立場から「日本研究」の理論的・方法論的な指導を行い、これらの研究と研究指導を推進することにより、創造的で高度な専門的視野と、幅広い学際性、複数の専攻を横断しうる総合性を備えた研究者の育成を図った。
・上記専攻の大学院生を共同研究に共同研究員として参画させて、実践的な指導を行った。また、海外研究交流ネットワーク形成を目的とするイスラエルにおける学会に学生を参加させて、現地日本研究者との交流を行った。
・筑波大学をはじめ、６大学、７名の特別利用研究員を受入れて、専門的研究指導を行うことにより、大学院教育に協力した。

（２） 人材養成

・各共同研究会において、若手研究者が積極的に研究発表を行えるようプログラムを組み、発表後は指導・助言を含めた討論を通じて、今後の研究・成果等に役立てられるよう研究支援体制を整えた。
・機関研究員６名、プロジェクト研究員４名及びリサーチ・アシスタント４名を雇用し、専用の研究スペースを提供するとともに、研究プロジェクト等へ参画させて、若手研究者の育成を図った。また、外来研究員として日本学術振興会の特別研究員４名を受け入れ研究指導を行った。
・研究の実地訓練の機会として、フランス語、中国語、韓国語の外国語資料の解読や古文書研究等を含めた８つの基礎領域研究を設定し、セミナーを定期的に開催した。

５．社会との連携

（１）研究成果の還元

１）次のとおり学術講演会等を開催し、研究活動情報の発信を行った。また、講演会をインターネット中継するとともに、過去の講演会をウェブサイト上にアーカイブ化し、常時閲覧可能にすることで、共同研究の成果を社会へ発信した。

《学術講演会》

・第 51 回学術講演会　平成 24 年６月 29 日
「江戸時代の僧伝出版と清初仏教」
「四国の山村で日本文化を考えるーいざなぎ流研究 40 年ー」
・第 52 回学術講演会　平成 25 年３月８日
「私の未来的人文学ー考古学ＧＩＳから時空間情報科学へー」
「日文研の 25 年を振りかえって」

《公開講演会》

・公開講演会　平成 24 年 11 月 13 日
「東アジアにおける概念研究の現在」

《特別講演会》

・日文研・地球研合同シンポジウム　平成 24 年９月 14 日
「文化・環境は誰のもの？」

《公演会》

・伝統文化芸術総合研究プロジェクト　平成 25 年２月 28 日
「『忠臣蔵』の世界」

《日文研フォーラム》

・来日中の外国人研究員の日本語による研究発表及び一般市民との交流の場として、11 回開催した。

2）大学共同利用機関協議会主催のシンポジウム（平成 24 年 11 月 17 日、東京国際フォーラム）において、センターの共同研究及び活動を紹介する展示を行った。

（2）地域社会との連携

1）一般公開を平成 24 年 11 月に実施し、次のとおり公開事業を行った。

・セミナー「海の彼方から見た日本」
・シンポジウム「Spiritual Japan ―霊的な日本―」
・特別企画「私の江戸時代」
・教員によるセンター施設案内
・日文研所蔵資料の展示「海の彼方から見た日本 ―1 日だけの貴重書展示―」
・研究活動紹介「共同研究のパネル展示」
・日文研発行の出版物閲覧コーナー
・カレンダープレゼントコーナー
・日文研教員の書籍販売コーナー

2）近隣の小学校に教員を派遣し、児童に対し、資料やスライドを利用して研究活動を分かりやすく紹介する出前授業を８講座実施した。また、中学校の総合学習への協力として施設見学を受け入れ、地域との連携を図った。

3）報道関係者との懇談会を３回実施し、研究活動の紹介及び各種催し物の案内などの情報提供・意見交換を行った。

6. 業務運営･財務に係る取組

（1） 業務運営の改善及び効率化

［運営体制・研究組織の改善・見直し］

・外部有識者が過半数を占める運営会議において、所長候補者選考、共同研究、研究協力等の事業計画及び組織運営全般について審議、意見交換を行い、研究者コミュニティの意見を反映させた。

・教職員を対象に「人文学の未来を考える」のテーマのもと、招いた外部有識者等から提供された話題をもとに討論を行う所長主宰の研究談話会を４回開催した。同研究談話会において、研究費の多くが理系のプロジェクト型の研究へ回されやすい我が国の人文学を取り巻く厳しい現状が指摘され、それを受け、人文学の可能性や展望はもとより日文研が学界に果たすべき今後の役割についても、活発な意見交換が行われた。意見交換から得られた提言は、今後の共同研究計画の立案や実施の際に活用することとした。

・研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るために、「国際日本文化研究センターにおける所長裁量経費の配分基本方針」に基づき、所長のリーダーシップのもと重要性・緊急性等を勘案して所長裁量経費の配分を行った。

［人事の活性化］

・事務系職員の採用について、平成 23 年度国立大学法人等職員統一採用試験合格者から１名採用するとともに、事務職員・技術職員について、京都大学、大阪大学との人事交流を実施した。

・業務に必要な知識、技能を高めるため、国立大学協会及び総務省、他機構等の主催する各種研修・セミナー等に積極的に職員を参加させ、事務職員等の資質の向上を図った。

・多様な育児休業制度を掲示により周知させるとともに、職員からの相談を受け当人に最適な育児部分休業の取得方法を提案し、実施する等、職員の育児支援を行った。

［事務等の効率化・合理化］

・平成 21 年 12 月からメールシステムをホスティング化したが、平成 24 年度も継続してその維持管理を外部委託することにより、メールサーバの管理負担・維持経費の軽減と停電等によるメールサービス停止の防止に引き続き努めた。

・総研大専攻概要（英語版）の作成にあたり、校閲、翻訳等業務を外注することにより、教員の負担軽減及び事務の効率化を促進した。

・韓国語等の寄贈資料について外部委託により1,342冊の資料を整理し、迅速なサービス提供が可能となっ

た。

（２） 財務内容の改善

[外部研究資金その他の自己収入の増加]

・所内研究者を対象に「平成 25 年度科学研究費助成事業公募説明会」を開催するなど競争的研究資金の積極的獲得に努めた結果、若手研究者の申請割合が増加した。

・平成 23 年度に制定した「国際日本文化研究センター資料特別利用規則」を運用し、資料の複写等の料金を徴収することで自己収入の確保に努めた。

[経費の抑制]

・管理部（研究協力課）において、職務分担を見直すことにより、組織の改編を行い、３係長+１係員体制を２係長+２係員体制とすることにより、人件費の抑制を行った。

・平成 22 年度に、複写機の契約について賃貸借契約と保守契約を一本化し、包括役務契約として一般競争入札を行い、24 年度は複数年契約３年の３年目を実施した。その結果、契約締結前（21 年度）と比較して約 4,000 千円のコストを縮減した。

・電力需要対策について、夏季及び冬季の節電実行計画を策定し、省エネ意識の啓発に努めた結果、契約電力値の削減を実現し、約 550 千円の光熱費の抑制が見込まれている（25 年度推算）。電気使用量においては、22 年度比で年間通して約６％（夏季約 14%）の節約を達成した。

[資産の運用管理の改善]

・施設・防災委員会において、24 年度終了プロジェクトのスペースの有効利用について検討し、名誉教授や客員教授等が利用できる共用スペースを設ける等、研究部スペースの有効活用計画の策定を行った。

（３） 自己点検・評価及び情報提供

[評価の充実]

・各種委員会の所掌業務について、委員会ごとに自己点検を実施し、課題の改善状況等について進捗状況の評価を行った。その際、滞在中の外国人研究員にアンケートを実施し、その結果を活用するとともに、自己点検作業への参画を求め、業務運営等について幅広く意見聴取を行った。自己点検・評価結果は、センター会議に報告し、共同研究採択システムの見直しや近年増加傾向にある外国人研究員申請時の採用手続きの検証といった日文研のミッションである共同研究や研究協力の根幹に関わる部分から、日文研ハウスなどの諸施設の環境に及ぶ広い範囲において、機関の運営改善に活用した。

・資料配置について、利用し易さを考慮した検討が必要との意見を受け、図書資料館３階の改修により、保存環境の整った貴重書室及び古典籍室に資料を移動し、併せて貴重署閲覧室の使用を開始し、利用環境を整えた。

また、自己点検・評価結果は、センター会議に報告し、組織の運営改善に活用した。

[情報公開等の推進]

・平成 23 年度自己点検報告書をウェブサイトに掲載した。

・国立大学法人評価委員会による評価として大学共同利用機関法人人間文化研究機構の平成 23 年度に係る業務の実績に関する評価結果をウェブサイトにおいて公開した。

・『要覧』（和英併記）、広報誌『日文研』、*NICHIBUNKEN NEWSLETTER* の発行により内外への研究活動の情報公開に努めた。

・「一般公開」では、講演会、セミナー、貴重所蔵資料の展示、図書館及び研究室等の施設案内を実施し、研究活動の普及と情報発信の強化を図った。

・報道関係者との懇談会を３回実施し、研究活動の紹介及び各種催し物の案内などの情報提供・意見交換を行った。

（４）その他の業務運営

[施設設備の整備・活用等]

・図書資料館３階の改修整備された貴重書室、古典籍室に約 16,500 冊の資料を新たに配置するとともに、貴重書等を閲覧する貴重書閲覧室、情報工房の利用を平成 24 年４月から開始した。

・照明器具を LED 型に更新する等省エネに努めた結果、電気使用量においては、22 年度比で年間通して

約６％（夏季約 14%）の節約を達成した。

・施設利用委員会において施設の活用状況の点検を行い、実験室等について再配分を行いプロジェクト共用室として利用するなど有効活用に努めた。

［安全管理］

・緊急時の連絡体制として、全職員の緊急時連絡先を人事異動時等に随時変更し、最新情報の維持に努めた。

・非常事態発生時における連絡網を随時更新し、事務手続マニュアルにおいて教職員への周知を行った。

・西京消防署指導のもと煙体験訓練及び消火器訓練を実施（平成 25 年３月 22 日）し、防災意識を高めた。

・防災マニュアルを改訂し所内グループウェア（サイボウズ）へ掲載し、周知を図った。

・定期健康診断を実施するとともに、職員の勤務状況及び健康状態の把握に努め、「尿酸について」の講演（平成 25 年２月 20 日）を企画するなど、産業医の協力を得て健康管理を行った。

・衛生管理者による巡視を定期的に行い、巡視状況について産業医へ報告し安全措置を講じた。

・自然科学研究機構主催の労務管理研修、総務省主催の情報システム統一研修（第９回公文書管理・情報公開・個人情報保護）、関西電気保安協会主催の電気保安講習会にそれぞれ総務課職員を参加させ、危機管理に努めた。

・当センターのセキュリティポリシー対策基準について、実効性の評価を行った。

［適正な法人運営］

・適正な業務運営を行うため、国立大学協会及び総務省、他機構等の主催する各種研修・セミナー等に関係職員を参加させた。

・研究活動における公的研究費の不正使用防止計画に基づき、教職員に対する説明会（平成 24 年９月 20 日）を実施するとともに、会計ルールの再確認及び科研費を中心とした公的研究費の適正な使用等についての周知を図った。

・安全保障輸出管理の運用に係る説明会（平成 24 年 10 月 18 日）を実施するとともに、「安全保障輸出管理に関するガイドライン」及び「国際日本文化研究センターの安全保障輸出管理の運用に関する申合せ」について周知を図った。

日文研　平成２５年度　自己点検報告書

Ⅰ．国際日本文化研究センターの研究目的と特徴

《研究目的》

国際日本文化研究センター（以下「日文研」という）は、大学共同利用機関として、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究、並びに世界の日本研究者に対する研究協力を目的としている。

《特徴》

① 研究目標

日本文化の理解促進のため、広く世界に開かれた研究および研究協力体制を整備し、既存の学問分野にとらわれない、国際的・学際的な研究の総合的視野からの発展を目指す。

また基盤となる資料・情報収集も目標とする。

② 活動分野

次の３分野から成る。１）個人研究および共同研究を主体として行われる「研究活動」、２）世界の日本研究者に対する資料・情報提供を含む「研究協力活動」、３）上記活動の成果の刊行、研究成果の発表と日本文化研究の普及を目的とする学術講演会・シンポジウム等の「普及活動」。

③ 研究活動

高い見識を有する専門家を国内外から公募・招聘・採用し、構成・実施する「共同研究」が中心となる。変化・流動する国際社会へ柔軟に対応し得るよう、講座制や部門制などの固定的組織ではなく、研究域・研究軸という枠組みを中心に据える。日本文化の全体像把握のため「動態研究」「構造研究」「文化比較」「文化関係」「文化情報」の五つの研究域を設定、さらに、時系軸、地域枠、文化情報系等に分節し、三つの研究軸を設ける。研究軸はそれぞれの研究域の示す視座の中で、いくつかの方向性を特定する。

④ 研究協力活動

海外の関係機関や研究者との交流を強化するため「海外研究交流室」を設け、シンポジウム等を開催している。また、画像資料等を用いた従来にない日本文化研究の方法やシステムの開発研究を専門的・体系的に進める「文化資料研究企画室」を設置している。

⑤ 普及活動

研究活動・研究協力活動を広く一般の方々に知っていただき、「社会に開かれた研究機関」であるよう努めている。さらに、活動によって得られた成果を広く社会へ還元している。

［想定する関係者とその期待］

想定する関係者：国際的な視野に立ち、既存の学術専攻分野を横断した「国際日本文化研究」を志向する内外の日本研究者、研究成果の発信先となる社会一般。

主な期待：動態研究、構造研究、文化比較、文化関係および文化情報の観点からの、日本文化に関する国際的、学際的、総合的な共同研究の推進、研究協力および情報の集約と提供。

Ⅱ．平成 25 年度の取組状況

1．研究事業

（1）共同研究

日本文化に関する国際的及び学際的な総合研究を、国内外の研究機関、研究者と協力し、計画どおり実施した。具体的には、活動の基幹をなす共同研究として、上述の制度設計に従い、外国人研究員の参画も得て、以下のとおり 18 件実施した。なお、このうち、国内公募による共同研究を２件（「日本的時空観の形成」「建築と権力の相関性とダイナミズムの研究」）及び国外公募による共同研究を１件（「日本的教育文化の複数地域展開に関する比較研究－ブラジル・フィリピン・ハワイ・アメリカの日系教育史を中心に－」を実施した。

［平成 25 年度共同研究］

人文諸学の科学史的研究（３年計画の２年目）

今までやや疎かにされてきた歴史学や文学研究などを、科学史的に振り返ることを志し、仏教史、美術史、経済史といったテーマに則して、学術の歴史を探った。本年度は邪馬台国、戦後史学、鎌倉時代などをテーマに研究会を開催した。

日本庭園のあの世とこの世－自然、芸術、宗教（２年計画の２年目）

日本庭園のなかでも中世の日本庭園を対象に、中世の自然観（あの世）を考えた。具体的には中世の日本庭園の造形と思想を読み解くのに最適である『作庭記』を対象として研究を進めた。総括として「日本庭園と作庭記」と題した講演会を開催し、また『『作庭記』と日本の庭園』の出版によりその成果を社会に発信した。

怪異・妖怪文化の伝統と創造－研究のさらなる飛躍に向けて－（取りまとめ）

妖怪文化が日本文化に果たしてきた役割を多領域から照射し、立体的に分析する一方で、そうした日本の怪異・妖怪文化が国外から受けた影響や、現在国外にもたらしている影響についての研究を進展させた。また、研究会の総括として、国際研究集会とその一環である公開講演会を開催した。

日本的時空観の形成（1 年計画　国内公募）

日本の伝統的な世界観がいつ、どのように形成されたかを明らかにすることを目的とする。世界観は空間観念のみならず、時間観念を含み込んで構成されると考えられるので、この両面からの検討をあわせて実施する共同研究を行った。研究成果は論文集『日本的時空観の形成』として、商業出版されることが決定した。

夢と表象―メディア・歴史・文化（３年計画の３年目）

「夢」をキーワードに、日本の古代から現代まで、また、東アジアやヨーロッパまで視野を拡げて、文学、歴史、美術、宗教、時間論など、研究者それぞれが専門的に推進するディシプリンに立脚しつつ、同時に比較文化史的な、また領域横断的な視点を取り入れて研究交流を行い、その表現や認識の在処を考究した。その成果は『夢と表象』として刊行されることが予定されている。

建築と権力の相関性とダイナミズムの研究（２年計画の２年目　国内公募）

「権力と政治」の具体例を集め分析した成果を、関西にも広げて、若い研究者をさそいこむものである。その成果は２冊の刊行物の刊行により社会に発信された。また、平成 28 年度に放送大学の科目（印刷教材・放送教材）となること、平成 29 年度までに展覧会の企画が予定されている。

昭和 40 年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析－ザ・タイガースの研究（３年計画の２年目）

本研究の基礎作業をなすザ・タイガースの年譜および基本文献のリスト作成を完成させた。また、日本歌謡史および欧米ロック史におけるグループサウンズの位置づけの議論を深めた。それをもとに、関連成果として『ザ・タイガース　世界は僕らを待っていた』、映像未発表音源 DVD（ユニバーサル・レコード）が刊行された。

近代日本における指導者像と指導者論（取りまとめ）

共同研究の総仕上げとして台湾中央研究院アジア太平洋研究センターでシンポジウムが開催され研究発表が行われた。また成果報告の論文集『近代日本のリーダーシップ』が刊行された。

徳川社会と日本の近代化―１７～１９世紀における日本の文化状況と国際環境―（３年計画の３年目）

ロシアの南下や英仏のアジア世界への進出と植民地の形成という国際情勢や、幕藩体制の割拠型統治のあり方を克服し、日本国としての国家統合を推進していく国内の趨勢その他周辺的な諸問題に目配りしつつ、17～19 世紀における徳川社会の中で胚胎していた様々な動向を総合的に把握した。その成果は論集『徳川社会と日本の近代化』として商業出版される予定である。

日本仏教の比較思想的研究（２年計画の１年目）

人類が大きな危機的状況を迎えている今日、従来の哲学のあり方を根源から問いなおし、新しい哲学を確立することが不可欠である。本共同研究では、仏教思想に焦点を当て、他思想を含めて考える。中世日本仏教と現代哲学・比較哲学という異なる分野の専門家による相互の討論の中から、新しい現代日本思想の可能性を探るべく、研究会を開催した。

21 世紀 10 年代日本文化の軌道修正：過去の検証と将来への提言（３年計画の１年目）

情報、人文学の生態学的展開等の話題について集中審議を行ったほか、インドで小規模な研究会を実施した。

万国博覧会と人間の歴史－アジアを中心に（３年計画の１年目）

論集刊行を念頭に置いた準備過程としての研究会を開催したほか、初年度の所外研究会テーマとして日本初の 1970 年「日本万国博覧会」として、大阪の関連施設を訪問した。

植民地帝国日本における知と権力（準備会）

日本の台湾・朝鮮・「満洲国」などに対する支配において、学問的知識・政策構想・イデオロギー・スローガンなど多様な形をとって現れた「知」に着目しつつ、それが帝国の支配に果たした役割や、植民地支配のなかでの被支配者の「知」のあり方を考察することを試みる。

「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―
（３年計画の３年目）

西洋哲学や日本思想、インド哲学・仏教学、イスラームなどの専門家の知見をも活用しながら、近代的な思惟様式を再検証するとともに、安易な比較研究を廃しつつ、現代において、東アジアの伝統思想を普遍化する方途を探ることを、最終的な目標とした。

日本的教育文化の複数地域展開に関する比較研究
－ブラジル・フィリピン・ハワイ・アメリカの日系教育史を中心に－（１年計画　国外公募）

日本的教育文化の帝国日本の勢力圏のウチ・ソトにわたる複数地域間の展開に関して、共同研究者各専門分野の知見を結集し、活発な議論を行った。

マンガ・アニメで日本研究（３年計画の１年目）

近年話題になったマンガ・アニメ作品や、人気の度合いにかかわらず重要と思われる作品を取り上げ、事前調査や当日の映像のスクリーニングにもとづくディスカッションをつづけた。

新大陸の日系移民の歴史と文化（３年計画の２年目）

文学、メディア、宗教についての議論を行ったほか、高知県に点在する書物、建物、記念碑などの日本移民関連資料を見学し、地元研究者の講演を聞く所外研究会を開催した。また海外日本移民の教育に焦点を当てた根川幸男氏主催の共同研究班との共同開催による所外研究会を２度開催し、学際的な討論を行った。

日記の総合的研究の総括（取りまとめ）

「日記の総合的研究の総括」と題し、過去三年間にわたり行ってきた個別具体的な研究発表を踏まえ、それぞれが論文を執筆することにより、共同研究の成果としての論集（商業出版）を刊行することを目標とした。研究会では、それぞれが論文執筆の現状を確認し合うとともに、研究発表を行った。『日記・古記録の世界』と題した論集が出版される予定であるほか、日記・古記録をテーマとした叢書の刊行が依頼され、25 名の「一人一冊」による全 25 冊の叢書の刊行を目指している。

（２）基礎領域研究

日本文化の基礎領域の研究に資するため、「古文書研究」、「近世風俗未公刊資料解読」等５件を実施した。

（３）国際研究集会

日本研究の発展のための国際的な討論の場として国際研究集会を開催した。

・第 45 回国際研究集会「妖怪・妖怪文化の伝統と創造―ウチとソトの視点から」

代表者が平成９年から行った４件の共同研究の総括であり、公開講演会では国内外における怪異・妖怪文化研究の軌跡が確認され、研究・創作・海外からの日本妖怪研究といった異なる立場から今後の課題と展望が議論された。研究会では、怪異・妖怪文化の国際比較研究、中世における天狗と鬼、江戸文化における怪異・妖怪、幽霊、民俗文化と怪異・妖怪という５つのセッションにおいて、最先端の研究発表が行われ、新しい知見を得ることができた。

開催期間：平成 25 年 11 月 25 日～27 日

開催場所：国際日本文化研究センター

参加者数：国内研究者 97 名、国外研究者 10 名（７ヶ国）　計 107 名

（４）その他の研究活動

シンポジウム（開催場所は全て日文研）

・「近代日本の国家観－学際的考察－」

開催日：平成 25 年６月 16 日

・「宗教と公共性－神道と宗教復興から」

開催期間：平成 25 年７月 21 日～22 日

・「国際シンポジウム　転換期の伊勢」

開催期間：平成 25 年７月 26 日～27 日

・「「妙貞問答」の諸問題」

開催日：平成 25 年８月 26 日

・「「大名庭園」の新発見」

開催期間：平成 25 年 11 月８日～10 日

・「関西の映画興行史の基礎調査－『合同通信』を中心に」

開催日：平成 26 年３月５日

２．研究協力活動

（１）海外における海外シンポジウム

・海外シンポジウム　第 20 回海外シンポジウム「日越交流における歴史、社会、文化の諸課題」をベトナム社会科学院東北アジア研究所と共催した。上記の総合テーマのもとで、①「歴史：古代、中世、近世の歴史および歴史の中の日越交流」、②「社会：近代東アジアにおける各国の社会変化」、③「文化：若者のポップカルチャー、アニメ、庭園、茶道――日越文化の比較」、④「その他の日本研究」に分けられた４つのセッションにおいて、延べ 20 名にのぼる双方の研究者が発表し、またコメンテーターを交えながら、各セッションにて全員による総合討論を行った。一連の報告とそれをめぐる質疑応答を通して、古代から近代、そして今日に至るまでの両国の深い交流関係をあらためて確認したのみならず、また歴史的に中国や西洋という他者を相手に両国が見せてきた対応の異同や影響関係等も明らかにすることができた。日越国交樹立 40 周年という節目の年に、双方の学者が一堂に会し、両国の長き交流における歴史、社会、文化の諸課題について確認、議論し合ったことはきわめて重要かつ有意義な作業だと言える。

開催期間：平成 25 年 11 月 13 日～15 日

開催場所：ベトナム社会科学院（ベトナム　ハノイ市）

参加者数：日本側参加者 12 名、ベトナム側参加者 15 名　計 185 名

（２）国内外関係諸機関との連携・協力

・日本関連在外資料調査「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」

人間文化研究機構では、欧米における日本文化研究の比重低下の打開と日本文化の世界史的意義を明らかにすることを目指し、平成 22(2010) 年度より日本関連在外資料の国際共同研究を実施している（平成 25 年度は６年計画４年目）。

全体を前近代と近現代のふたつに区分し、日文研は後者の総括機関として、近現代に海外に移住した日本人の活動の軌跡を、その土地の自然、社会環境とともに示す在外資料を調査、発掘、整理し、今後の研究の発展に資することができる形で公開し、また、調査結果を生かした研究を進め、国際的な文化史研究全般への機運を高め、将来への指針を確定することを目的として、本国際共同研究を推進している。

【実施機関及び分担事業】

◎総括機関　国際日本文化研究センター　総括責任者：劉 建輝教授

▼実施機関：国際日本文化研究センター

①南米（ポルトガル語圏）における日本人移民の生活実態に関する資料の調査・研究

総括：細川周平・国際日本文化研究センター教授

②朝鮮半島における植民地統治および日本社会に関する資料の調査・研究

総括：松田利彦・国際日本文化研究センター教授

③中国全土における近代日本人の経済・社会・文化等の活動に関する資料の調査・研究

総括：劉　建輝・国際日本文化研究センター教授

▼実施機関：国際日本文化研究センター

④南北アメリカの移民関係資料ならびに移民社会に関する研究

総括：原山浩介・国立歴史民俗博物館准教授

▼実施機関：国立国語研究所

⑤ハワイと北米に渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究

総括：朝日祥之・国立国語研究所准教授

▼実施機関：東京大学東洋文化研究所

⑥近代日本文化財保護政策関係資料の調査と研究

総括：平勢隆郎・東京大学東洋文化研究所教授

▼実施機関：京都大学人文科学研究所

⑦植民地期台湾・「南洋」における日本人社会に関する資料の調査・研究

総括：籠谷直人・京都大学人文科学研究所教授

平成 25 年度は、引きつづき各現地調査を進めるとともに、第一回 EAJS 日本会議「日欧交流 500 年紀を前に―航路の形成と情報の拠点」（平成 25 年９月 27 日、於日文研、参加者 89 名）や、人間文化研究機構第 22 回公開講演会「画像資料による日本人移民への新視点―満洲・ブラジル・南洋」（平成 25 年 10 月 11 日、於日文研、参加者 364 名）といった関連の国際シンポジウムを開催した一方、『日華学会関連高橋君平文書資料Ⅱ』（劉建輝編、国際日本文化研究センター）『満洲学の整理と再編』（劉建輝編）『満洲小事典』（鈴木貞美・劉建輝他編）や日文研に寄贈された歴史研究家故岡部牧夫氏の蔵書『岡部文庫』などの研究書籍・資料の執筆・編集を進めた。また、これまでに蓄積してきた研究成果（データベース含む）を日本の地域社会のみならず、世界の研究者へ向けて公開、発信した。

・ＥＡＪＲＳへの派遣・発表

例年継続的に参加しているＥＡＪＲＳ（European Association of Japanese Resource Specialists;日本資料専門家欧州協会）の総会（９月、フランス、大学間共同言語文化図書館）に教員と資料課職員を派遣し、「摂関期古記録データベース」に関する発表を行った。

・海外研究交流ネットワーク形成

①第 20 回北欧日本学・韓国学記念大会

開催期間：平成 25 年８月 21 日～23 日

開催場所：ベルゲン大学（ノルウェー）

②EAJS 日本会議：日文研シンポジウム

開催日：平成 25 年９月 27 日

開催場所：国際日本文化研究センター

③国際会議「２１世紀のグローバル化時代における日本とベトナム文学研究」

開催期間：平成 25 年 12 月 20 日～24 日

開催場所：ホーチミン市人文社会科学大学（ベトナム）

④ベオグラード国際日本学研究会

開催期間：平成 26 年３月 12 日～14 日

開催場所：ベオグラード大学（セルビア共和国）

⑤日本スペイン交流 400 周年記念「第９回スペイン日本学会」ほか

開催期間：平成 26 年３月 24 日～４月３日

開催場所：セビリア大学（スペイン）ほか

⑥AAS Annual Conference 2014

開催期間：平成 26 年３月 27 日～30 日

開催場所：フィラデルフィア市（アメリカ）

(3)研究者等の受入・派遣

外国の研究機関との関係構築を図り、以下のとおり外国人研究者の招へい、国内研究者の海外派遣を進めるとともに国際研究集会・シンポジウムの開催や参加を積極的に支援した。

・外国人研究員 30 名、外来研究員 35 名（日本学術振興会特別研究員（ＰＤ１名・ＲＰＤ１名・欧米短期３名）５名を含む）を受け入れた。

・複数の共同研究会に配置された海外共同研究員 29 名（アメリカ、中国、韓国、フランス等）を本センターで行う共同研究会にのべ 18 名招へいし、研究発表等を通じて、国際的な共同研究会を実施した。

・専任教員を海外の日本研究機関等に派遣し、日本文化研究に関する国際的なネットワークの拡大と深化を図った。海外シンポジウム（ベトナム）においても、所内外の研究者を派遣し、シンポジウムでの発表、日本研究の現状についての情報収集等を行った。

・国際研究集会を開催し、第 45 国際研究集会（「妖怪・妖怪文化の伝統と創造―ウチとソトの視点から」）においては７ヶ国から 10 名の国外研究者を招へいした。

(4)海外研究交流体制の充実

・海外シンポジウム等の実施運営を円滑に行うため、海外研究交流室長を中心にして、海外シンポジウムに繋がる海外研究交流ネットワーク形成に係る取組の強化を図った。

・海外研究交流室の事業として、海外研究交流シンポジウムを開催することで海外の日本研究者との連携・交流を強化するとともに、日本研究の情報収集・分析を進め、その一環として『日本研究　外国人研究院名簿　1987-2013 年度』を編集・刊行した。

３．研究情報の収集・発信

（１）研究資料及び情報の収集・整理・保存

日本文化研究に関する学術文献・資料の収集、保存、活用及び加工編集並びに日本文化研究のための資料作成・ツール開発支援に有用な環境を整備・充実させ、収集資料等を高度化して世界に発信するため、以下の取組を実施した。

１） 所内に設置した「新館整備計画ワーキング」においてフロアープランを策定し、研究資料委員会、調整会議、所員会議での意見照会を経て、センター会議の承認を得た。その後、建設工事を開始した。

２） 電子資料の作成・保存環境の確保のため整備された「情報工房」において、「KATSURA-Ⅱ」開発・整備のための研究資料画像データ化として、絵はがき資料の画像データ化に着手するとともに、大型スキャナによる地図（外邦図）の電子画像化及び古地図（伊能図、森幸安地図）の地名情報のデジタルテキスト化を進めた。

３）24 年度構築を進めた、データベースシステムの構造を統一化・定型化する「日文研研究支援システム」上において、データベースシステムの移行を進めるとともに、認証系の統合に必要な機能の検討を行った。

４）南北朝時代の禅籍『空華日用工夫略集』をデジタルテキスト化して公開し、将来的には他の中世未翻刻禅籍の公開も視野に入れた「中世禅籍データベース」を構築した。

また、既存のデータベースの内容の充実を図るため、データを追加した。

５）外書の収集を体系的に行い、731 点を収集した。

６）日本研究資料整備の一環として、「風俗画資料」の収集を 36 点行った。

７）未整理資料（文庫、視聴覚資料を含む）の 7,388 点の整理を行い、利用環境を整備した。

（２）研究成果の公開・発信

・出版物の充実をはじめとして、多様な方法を用いて、研究成果を広く国内外に公開・発信し、研究の促進をはかるとともに社会への貢献に努めた。具体的には以下のとおり研究成果を出版し、国内外の日本研究関連研究機関等へ配布した。

１）『日本研究』（日文研の専任教員、客員教員、共同研究員、外国人日本研究者等の研究成果を収録する日本語で書かれた原著論文集で、査読のうえ掲載）２冊

２）*Japan Review*（日本文化の研究に関わっている者なら誰でも投稿できる日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した外国語で書かれた論文集で、査読のうえ掲載）２冊

３）『日文研叢書』（日文研の専任教員、客員教員、共同研究員等が、個人研究並びに共同研究成果をオリジナルな研究論文、貴重資料集成等のかたちで発表するモノグラフシリーズ）２冊

４）*Nichibunken Monograph*（日文研における研究活動のすぐれた成果で、既刊の著作の改訂または書き下ろした学術論文の英文モノグラフシリーズ）３冊

５）国際研究集会報告書（日文研が主催した国際研究集会において発表・討議された内容を収録した報告書。執筆者は国際研究集会参加者）１冊

６）海外シンポジウム報告書（日文研が海外において開催したシンポジウムの報告書）１冊

７）『世界の日本研究』（世界の日本研究の動向や海外研究交流室主催の在住シンポジウム報告等の不定期出版物）１冊

８）『日文研フォーラム報告書』（来日中の外国人研究者が日文研フォーラムにおいて日本に関連したテーマについて発表した研究成果を記録した報告書）３冊

９）共同研究成果報告書（日文研が主催した共同研究で発表・討議された内容を収録した報告書（商業出版を含む）。執筆者は研究発表者、代表者等）７冊

10）『海外日本像集成』（幕末から明治にかけて外国人が執筆した日本旅行記や研究書に掲載されている挿絵のみを集めた図版集）２冊

11）『異邦人のまなざし』（『海外日本像集成』と同様に、1850 年代から 1900 年頃までに出版された「外国語で書かれた日本研究書」（外書）の挿絵をテーマ別に抽出し、編集したカラー図版シリーズ）

２冊

12）『日文研』（日文研の教員、共同研究員、外国人研究員等の活動状況を収録した広報誌）２冊

13）*NICHIBUNKEN NEWSLETTER*（日文研の教員、共同研究員等の活動状況を海外研究者むけに収録した英文和文併記の広報誌）２部

・さらに日文研公式ウェブサイトのリニューアルに伴い出版物のウェブ発信にも努めた。

４．大学院教育への協力・人材養成

（１）大学院教育への協力

・総合研究大学院大学文化科学研究科の基盤機関として、国際日本研究専攻の大学院生に対して、教育研究の場を提供し、国際的・学際的な日本研究を進めるために、本専攻の特色である全教員が指導する単一の分野「国際日本研究」において、研究人材の育成に努めた。また、共通必修科目として「日本研究基礎論」、「学際研究論」、「論文作成指導」を置き、国際的な立場から「日本研究」の理論的・方法論的な指導を実施した。これらの研究と研究指導を推進することにより、創造的で高度な専門的視野と幅広い学際性、複数の専攻を横断し得る総合性を備えた研究者の育成を行った。

・筑波大学をはじめ、６大学、６名の特別利用研究員を受入れて、専門的研究指導を行うことにより、大学院教育に協力した。また、大学院生３名を共同研究に共同研究員として参画させて、実践的な指導を行った。

（２） 人材養成

・各共同研究会において、若手研究者が積極的に研究発表を行えるようにプログラムを組み、発表後は指導、助言を含めた討論を通じて、今後の研究等に役立てられるよう研究支援を行った。

・雇用した機関研究員６名、プロジェクト研究員４名及びリサーチ・アシスタント３名や各種制度で受け入れた研究者１名に対して、専用研究スペースの確保等の支援を行うとともに、研究プロジェクト等へ参画させて、育成等に取り組んだ。

・研究の実地訓練の機会として、フランス語、中国語、韓国語の外国語資料の解読や古文書研究等を含めた５つの基礎領域研究を設定し、セミナーを定期的に開催した。

５．社会との連携

（１）研究成果の還元

１）次のとおり学術講演会等を開催し、研究活動情報の発信を行った。また、講演会をインターネット中継するとともに、過去の講演会をウェブサイト上にアーカイブ化し、常時閲覧可能にすることで、共同研究の成果を社会へ発信した。

《学術講演会》

・第 53 回学術講演会　平成 25 年５月 22 日
「私の学問と芸術」

・第 54 回学術講演会　平成 25 年９月６日
「古地図とナビゲーション技術」
「知らず顔の桐壺院―〈圏外〉の源氏物語論」

・第 55 回学術講演会　平成 26 年３月 18 日
「山と島―日本庭園の源流と日本の自然観」
「太平洋戦争を考える」

《公開講演会》

・公開講演会　平成 25 年 11 月 25 日
「怪異・妖怪文化の伝統と創造」

《所外講演会》

・所外講演会　平成 25 年７月６日
「日本文化を考える」

《公演会》

・伝統文化芸術総合研究プロジェクト公演会　平成 26 年３月 26 日
「ルネサンスダンスと筑前琵琶による「安寿と厨子王」」

《日文研フォーラム》

・来日中の外国人研究員の日本語による研究発表及び一般市民との交流の場として、11 回開催した。

２）大学共同利用機関協議会主催のシンポジウム（平成 25 年 11 月 16 日、東京国際フォーラム）において、センターの共同研究及び活動を紹介する展示を行った。

（２）地域社会との連携

１）一般公開を平成 25 年 10 月に実施し、次のとおり公開事業を行った。

・セミナー「前近代の日常生活史」
・シンポジウム「「日本文化における折衷と習合」－文化はいかに交流と混合をしているかー」
・特別企画「私の研究の国際性および学際性」
・教員によるセンター施設案内
・日文研所蔵資料の展示「『くらしの歴史をふりかえる』 －日記および日常生活史史料－」
・日文研の映像とデータベースコーナー
・研究活動紹介「共同研究のパネル展示」
・日文研発行の出版物閲覧コーナー
・カレンダープレゼントコーナー
・日文研教員の書籍販売コーナー

２）近隣の小学校に教員を派遣し、児童に対し、資料やスライドを利用して研究活動を分かりやすく紹介する出前授業を８講座実施した。また、中学校の総合学習への協力として施設見学を受け入れ、地域との連携を図った。

３）報道関係者との懇談会を３回実施し、研究活動の紹介及び各種催し物の案内などの情報提供・意見交換を行った。

６. 業務運営･財務に係る取組

（１） 業務運営の改善及び効率化

［運営体制・研究組織の改善・見直し］

・組織運営に研究者コミュニティ等の意見を反映させるべく、外部有識者が過半数を占める運営会議やその他の委員会において、広報のあり方等について活発な審議・意見交換を行った。

・教職員及び報道関係者を対象に「人文学の未来を考える」のテーマのもと、外部から招いた有識者等から提供された話題をもとに討論を行う所長主宰の研究談話会を２回開催した。同研究談話会において、社会の価値を創造し、国の立ち位置を決める「文化の力」について紹介があり、地域や民間の文化の発信力の高さを見習うべきであるとの意見を受けた。これを踏まえ、地域や民間との交流を通じて一般社会への研究成果の発信力を一層高めるため、今後とるべき施策について検討を開始し、その端緒としてまず平成26年3月開催の日文研フォーラムにおいて、これまでの来場者の要望を勘案し、有職者や学生など来場者層を拡大する試みとして開催時間帯を夕刻に変更し、26年度においても実施することとした。

・研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るために、「国際日本文化研究センターにおける所長裁量経費の配分基本方針」に基づき、所長のリーダーシップのもと「画像の整理と研究資料課・外像編集」等の研究活動の推進 20 件に 17,819 千円を配分した。

［人事の活性化］

・京都大学（転出４名、転入４名）、大阪大学（転出２名、転入２名）との人事交流を継続して実施し、人事の活性化を図った。

［事務等の効率化・合理化］

・平成 21 年 12 月からホスティング化したメールシステムについて、25 年度も継続してその維持管理を外部委託することにより、メールサーバの管理負担・維持経費の軽減と停電等によるメールサービス停止の防止に引き続き努めた。

（２） 財務内容の改善

［外部研究資金その他の自己収入の増加］

・科研費の公募説明会時に、過去５年分の機関の応募件数等や機構内の他機関の応募状況等を示して、科研費の積極的な応募を促した。

［経費の抑制］

・紙類・書籍等の廃棄について古紙回収（無料）を利用するよう所内で啓発を行い、廃棄物収集に係る金額を 614 千円削減した。

・電話回線契約について ISDN 回線からひかり回線へ契約を変更し、年間 1,202 千円の経費削減を図った。

・日文研独自の節電実行計画を策定し、ウェブサイトに掲載するとともに、教職員に対しては、日文研内部用のグループウェアに節電状況を掲載することにより、節電意識の啓発に努めた。

・管理標準の見直しを行い、更なる節電対策の推進に繋がるよう変更した。また、サーバ室の送電回路に電力監視モニタを設置し、電力使用状況の測定範囲拡大を行った。

［資産の運用管理の改善］

・共同研究室内の設置機器の点検を行い、施設利用委員会において共同研究室の設備更新計画を検討し、策定した。

（３） 自己点検・評価及び情報提供

［評価の充実］

・各委員会の所掌業務について、各委員会において自己点検を実施し、課題の改善状況等について進捗状況の確認を行った。その際、外国人研究員へのアンケート結果を活用するとともに滞在中の外国人研究員に自己点検への参画を求め、業務運営等について幅広く意見聴取を行い、自己点検に反映させた。自己点検・評価結果は、センター会議への報告を経て、日文研ハウスの居住環境改善（世帯用２、３階部分への床暖房設備設置）の検討、研究環境の改善（北研究棟研究個室の空調設備改修）の実施等を 26 年度の機関の運営改善計画に組み入れた。また、自己点検・評価結果は、センター会議に報告し、組織の運営改善に活用した。

［情報公開等の推進］

・平成 24 年度自己点検報告書をウェブサイトに掲載した。

・国立大学法人評価委員会による評価として大学共同利用機関法人人間文化研究機構の平成 24 年度に係る業務の実績に関する評価結果をウェブサイトにおいて公開した。

・『要覧』（和英併記）、広報誌『日文研』、*NICHIBUNKEN NEWSLETTER* の発行により内外への研究活動の情報公開に努めた。

・「一般公開」では、講演会、セミナー、貴重所蔵資料の展示、図書館及び研究室等の施設案内を実施し、研究活動の普及と情報発信の強化を図った。

・報道関係者との懇談会を３回実施し、研究活動の紹介及び各種催し物の案内などの情報提供・意見交換を行った。

（４）その他の業務運営

［施設設備の整備・活用等］

・文献資料、映像・音響資料の保存、活用及び情報処理に係る環境の充実に資するため、「新館整備計画ワーキング」において検討を進め、共同研究棟（情報処理）新営工事に着手した。また、南研究棟研究室の空調機を更新し、研究設備環境の改善を行った。

・共同研究室内の設置機器の点検を行い、マイク設備、録音設備、同時通訳システムなどの更新を行ったほか、施設利用委員会において共同研究室の設備更新計画を検討し、策定した。

［安全管理］

・西京消防署指導のもと普通救命（応急手当）講習会及び危険物取扱に関する講演会を実施した。

・産業医による巡視を月１回実施し、安全衛生環境の改善・維持に努めた。

・定期健康診断を実施するとともに、裁量労働制適用者については、毎月、勤務時間、健康状態の報告書の提出を求め、適正な勤務状況の維持に努めた。また、産業医による講演会（動脈硬化について）を行い、職員の健康意識の向上に努めた。
・総務省主催の情報システム統一研修（第 14 回公文書管理・情報公開・個人情報保護）、国立公文書館主催の研修（公文書管理研修Ⅰ及びアーカイブス研修Ⅰ）、にそれぞれ職員を参加させ、危機管理に努めた。
・情報セキュリティ実施手順について 25 年度中に策定した。

［適正な法人運営］

・本部で開催されたコンプライアンス研修の配付資料を課内の職員へ配付することにより、意識啓発に努めた。
・教職員を対象に、情報セキュリティに関する e-learning 教材を受講させ、情報セキュリティの強化並びに意識向上を図った。
・科研費公募説明会時に、公的研究費等の不正防止計画等について周知し、不正行為の防止に努めた。その際に会計ルール及び研究活動に係る行動規範についても周知し、意識啓発に努めた。
・また、上記の説明会において寄附金の取扱いについても周知し、ウェブサイトにあらためて関係規定等を掲載することにより、不適切な取扱いの防止に努めた。

日文研　平成２６年度　自己点検報告書

Ⅰ．国際日本文化研究センターの研究目的と特徴

《研究目的》

国際日本文化研究センター（以下「日文研」という）は、大学共同利用機関として、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究、並びに世界の日本研究者に対する研究協力を目的としている。

《特徴》

① 研究目標

日本文化の理解促進のため、広く世界に開かれた研究および研究協力体制を整備し、既存の学問分野にとらわれない、国際的・学際的な研究の総合的視野からの発展を目指す。

また基盤となる資料・情報収集も目標とする。

② 活動分野

次の３分野から成る。１）個人研究および共同研究を主体として行われる「研究活動」、２）世界の日本研究者に対する資料・情報提供を含む「研究協力活動」、３）上記活動の成果の刊行、研究成果の発表と日本文化研究の普及を目的とする学術講演会・シンポジウム等の「普及活動」。

③ 研究活動

高い見識を有する専門家を国内外から公募・招聘・採用し、構成・実施する「共同研究」が中心となる。変化・流動する国際社会へ柔軟に対応し得るよう、講座制や部門制などの固定的組織ではなく、研究域・研究軸という枠組みを中心に据える。日本文化の全体像把握のため「動態研究」「構造研究」「文化比較」「文化関係」「文化情報」の五つの研究域を設定、さらに、時系軸、地域枠、文化情報系等に分節し、三つの研究軸を設ける。研究軸はそれぞれの研究域の示す視座の中で、いくつかの方向性を特定する。

④ 研究協力活動

海外の関係機関や研究者との交流を強化するため「海外研究交流室」を設け、シンポジウム等を開催している。また、画像資料等を用いた従来にない日本文化研究の方法やシステムの開発研究を専門的・体系的に進める「文化資料研究企画室」を設置している。

⑤ 普及活動

研究活動・研究協力活動を広く一般の方々に知っていただき、「社会に開かれた研究機関」であるよう努めている。さらに、活動によって得られた成果を広く社会へ還元している。

［想定する関係者とその期待］

想定する関係者：国際的な視野に立ち、既存の学術専攻分野を横断した「国際日本文化研究」を志向する内外の日本研究者、研究成果の発信先となる社会一般。

主な期待：動態研究、構造研究、文化比較、文化関係および文化情報の観点からの、日本文化に関する国際的、学際的、総合的な共同研究の推進、研究協力および情報の集約と提供。

Ⅱ．平成 26 年度の取組状況

1．研究事業

（1）共同研究

日本文化に関する国際的及び学際的な総合研究を、国内外の研究機関、研究者と協力し、計画どおり実施した。具体的には、活動の基幹をなす共同研究として、上述の制度設計に従い、外国人研究員の参画も得て、以下のとおり 16 件実施した。なお、このうち、国内公募による共同研究を１件（「昭和戦後期における日本映画史の再構築」）及び国外公募による共同研究を２件（「日本の軍事戦略と東アジア社会―日中戦争期を中心として―」「日本大衆文化とナショナリズム」）を実施した。

［平成 26 年度共同研究］

昭和戦後期における日本映画史の再構築（１年計画　国内公募）

日本映画研究動向の中で手薄感のある社会科学的なアプローチ、特に映画の産業としての側面、国家と映画産業界との関係性、オーディエンス研究などの側面を中心としたアプローチを集積した。興行成績のデータ、映画業界の動静、宣伝のテクニック、観客のニーズと映画会社側の方針との関係などに光を当てることで日本映画史の再定義を試み、日本の映画学発展に寄与した。

人文諸学の科学史的研究（３年計画の３年目）

今までやや疎かにされてきた歴史学や文学研究などを、科学史的に振り返ることを志し、仏教史、美術史、経済史といったテーマに則して、学術の歴史を探った。

戦争と鎮魂（３年計画の１年目）

日本の戦争、そして鎮魂の理解の深化にも寄与することを目的に、歴史学、宗教学、政治学、文化人類学、文学、社会学等々の、参加者の専攻分野を背景にした、古今東西にわたる重厚な学際的事例研究の報告と、それへの議論の積み重ねを行った。今年度は全体討論のほか、「鎮魂」の語彙と語義、戦没者遺族の戦後史についての研究発表が行われた。

画像資料（絵葉書・地図・旅行案内・写真等）による帝国域内文化の再検討（３年計画の１年目）

日文研は創設以来、多くの映像音響資料や内外地図を収集してきた。これらは、日本国内、旧外地（満洲、朝鮮、台湾、樺太、南洋）、世界各国と幅広い地域を網羅し大変貴重である。これら画像資料による独自の発見、知見を通じて、従来の文字資料による帝国域内文化研究に対し、補完的な視点、内容を提示する。今年度は、日文研所蔵の関連画像資料について、全体的に整理、分類し、分野ごとに考察すべき課題を策定した。

夢と表象―その総括と展望（取りまとめ）

研究の成果として、平成２７年３月に国際研究集会を開催し、脳科学、睡眠文化といった文理融合的な考察も含み、国内外における「夢と表象文化」研究を俯瞰し、今後の研究の可能性をも指し示した。また、同時期に公開講演会「夢を観る／夢を聴く―夢の文化と芸術世界」を開催し日本古典文学、西洋音楽、西洋美術という観点から、「夢の文化」と「芸術世界」の関わりについて成果を社会に発信した。

おたく文化と戦時下・戦後（２年計画の１年目）

所外のシンポジウム等を積極的に利用し、問題意識の共有を行う方針としたほか、参加者の基礎調査のため、講談社など出版社の資料室から協力を得る関係も構築した。平成 26 年６月に北京・日本学センター、北京電影大などで連続講義、ワークショップ、シンポジウムを行い、中・韓・日の研究者と共有するネットワークを共有した。平成 27 年３月には海外共同研究員と中・韓・カナダの院生・若手研究者が参加する共同研究会・シンポジウムを開催し、国際間のテーマの共有を行った。

昭和 40 年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析－ザ・タイガースの研究（３年計画の３年目）

ザ・タイガースの活動の歴史を研究することで、1960 年代後半の日本の大衆文化の動態をあきらかにした。ポピュラー音楽に着目することで人間の感情や情動といった身体実践の次元を基盤とする大衆文化論を展開する点で、新たな視点を提供した。今年度は京都・大阪関係史跡の調査、メディア戦略の調査について総括し、近代映画社の映像資料の把握が行われた。成果は『ザ・タイガース研究論―昭和 40 年代日本のポピュラー音楽の社会・文化史的分析―』（近代映画社、磯前順一・黒崎浩行編著）として刊行された。

日本の軍事戦略と東アジア社会　―日中戦争期を中心として―（２年計画の１年目）

東アジア全域にわたった日本の対外戦争が日本及び東アジア各地の政治・経済・社会・思想・文化に与えた影響を明らかにし、特に日本が展開した軍事戦略とその実行が中国社会に与えた衝撃を解明しようとするものである。日本と中国の対外行動、およびその背後にある国内要因を様々な角度から分析することによって、国際的な相互理解と異文化間の相互認識の深化に資することを目指している。研究会の開催のほか、論文集の刊行に向け編集を行った。

日本仏教の比較思想的研究（２年計画の２年目）

近世思想やキリスト教などにまで視野を広げるとともに、特集的な研究会を設けて、集中的な議論を行った。共同研究「「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化

の試み―」との合同研究会を開催し、議論を行った。国際研究集会「比較思想から見た日本仏教」を開催し、共同研究を総括しながら、国際的な視野に立った、さらに広い議論へと接続させた。国際研究集会の成果と合わせて、山喜房佛書林より市販の論文集を 27 年度中に刊行する予定である。

21 世紀 10 年代日本文化の軌道修正：過去の検証と将来への提言（３年計画の２年目）

研究会の開催とそこでの議論の結果、論題が「文化創造における海賊行為」へと収斂することとなった。

万国博覧会と人間の歴史－アジアを中心に（３年計画の２年目）

５回の研究会を実施し、最終回では 27 年度に予定している論集の刊行（思文閣出版より）に向け、各自が寄稿する論文について討論を行った。このほか、２年度目の所外研究会テーマである 2005 年「愛・地球博（愛知）」について、愛・地球博記念館を中心に見学を実施した。

植民地帝国日本における知と権力（３年計画の１年目）

各人の報告を基に、共同研究会の射程に入れうる問題について模索した。のべ 23 本の報告を通じて、班員の関心は植民地台湾・朝鮮で活動した日本人ジャーナリスト・医学者・官僚、朝鮮人・台湾人の知識人・宗教人・対日協力者、および彼らの思想が戦後にもたらした遺産といった問題群に緩やかに集束した。

「心身／身心」と「環境」の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み―（取りまとめ）

東アジアの伝統思想が有する現代的な意義や価値の探求、延いては、近代西洋的な思惟様式の一定の相対化とともに、「心」や「身体」「環境」などをめぐる、より普遍的な意味での哲学的・思想的な考究などに関して、研究や考察を深めていくことができた。成果報告を兼ねた論文集を、平成 27 年度内に公刊する予定である。

マンガ・アニメで日本研究（３年計画の２年目）

特定の作品についての事前調査や当日のスクリーニングに基づくディスカッションや特定のテーマについての討論、「聖地巡礼」やアニメによる地域振興活動の現場での所外研究会などを実施した。

新大陸の日系移民の歴史と文化（３年計画の３年目）

研究会における研究発表・討論のほか、沖縄県立公文書館の見学・移民研究者との意見交換会・名護市「ブラジル村」訪問・名護市史編纂室外見学などを行った。また研究報告書作成に向け、メンバーから寄稿題と要旨が提出された。

日本大衆文化とナショナリズム（１年計画　国外公募）

日本社会および大衆の価値観と生活相の変化を最も直接的に反映する分野が大衆文化であるという側面を考慮して、近代から現代までの日本の大衆文化を多様な視角から分析を行った。研究会では、伝統文化、外来文化、文学、表象、スポーツ、在日、アニメという７つのテーマについて研究発表が行われた。

（２）基礎領域研究

日本文化の基礎領域の研究に資するため、「古文書研究」、「近世風俗未公刊資料解読」等７件を実施した。

（３）国際研究集会

日本研究の発展のための国際的な討論の場として国際研究集会を開催した。

・第 46 回国際研究集会「比較思想から見た日本仏教」

代表者が平成 25・26 年度にわたって行われた共同研究「日本仏教の比較思想的研究」の総まとめとして開催したもので、日本仏教を多角的に検討することを目指し、５つの部会に分けて発表・議論が行われた。かつての定型化した日本仏教観に替って、時代情勢の変化の中で、日本仏教研究もまた、流動化しつつあることが明らかになった。

開催期間：平成 27 年２月 20 日～21 日

開催場所：国際日本文化研究センター

参加者数：国内研究者 74 名、国外研究者５名（４ヶ国）　計 79 名

・第 47 回国際研究集会「夢と表象―その国際的・学際的研究展開の可能性」

代表者が行った共同研究「夢と表象―メディア・歴史・文化」（平成 23～25 年度）、同「夢と表象―その統括と展望」の総括であるとともに、これまでの研究をより国際的・学際的に止揚するために行った。夢の歴史から近現代の夢表象まで、５セッション７パネルを行った。脳科学、睡眠文化といった文理融合的な考察も含み、国内外における「夢と表象文化」研究を俯瞰し、今後の研究の可能性をも指し示すことができた。

開催期間：平成 27 年３月１日～３日

開催場所：国際日本文化研究センター

参加者数：国内研究者 57 名、国外研究者９名（９ヶ国）　計 66 名

（４）その他の研究活動

シンポジウム（開催場所は全て日文研）

・「交錯する外交と貿易―明清交替期前後の東アジア三国関係」

開催日：平成 26 年 10 月 29 日

・「言葉の境界をこえる　詩とその翻訳をめぐって」

開催期間：平成 26 年 12 月５日

・「怪異・妖怪文化研究の現在」

開催期間：平成 27 年１月 10 日～11 日

・「日本古代の地域と交流」

開催日：平成 27 年２月７日～８日

・「学生・教員参加による日本アニメーション・まんが研究及び教育法」

開催期間：平成 27 年３月 13 日～15 日

・「記憶の改変―「私は貝になりたい」と記憶の政治学」

開催期間：平成 27 年３月 24 日

２．研究協力活動

（１）海外シンポジウム

・海外シンポジウム　第 21 回海外シンポジウム「新領域・次世代の日本研究」を開催した。海外の日本研究者からの日本開催の要望、世界主要地域での開催という目標を達成したことなどを考慮して、日文研で開催された。日本経済の失速や東アジア近隣諸国の台頭によって、日本研究は危機に瀕していると言われる。そのようななか、新しい日本研究の領域と次世代の研究者の開拓が急務である。その点を考慮に入れて組まれた三つのセッションによる一連の発表を経て、総合討論「今後の日本研究」には、今日の日本研究を取り巻く厳しい状況と実態について率直な問題提起がなされ、全員が積極的に議論に参加し、学際的交流の機会として大きな成果を収めた。

開催期間：平成 26 年 11 月 11 日～13 日

開催場所：国際日本文化研究センター

参加者数：日本側参加者 43 名、海外参加者 10 名　計 53 名

（２）国内外関係諸機関との連携・協力

・日本関連在外資料調査「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」

人間文化研究機構では、欧米における日本文化研究の比重低下の打開と日本文化の世界史的意義を明らかにすることを目指し、平成 22(2010）年度より日本関連在外資料の国際共同研究を実施している（平成 26 年度は６年計画５年目）。

全体を前近代と近現代のふたつに区分し、日文研は後者の総括機関として、近現代に海外に移住した日本人の活動の軌跡を、その土地の自然、社会環境とともに示す在外資料を調査、発掘、整理し、今後の研究の発展に資することができる形で公開し、また、調査結果を生かした研究を進め、国際的な文化史研究全般への機運を高め、将来への指針を確定することを目的として、本国際共同研究を推進している。

【実施機関及び分担事業】

◎総括機関　国際日本文化研究センター　総括責任者：劉 建輝教授

▼実施機関：国際日本文化研究センター

①南米（ポルトガル語圏）における日本人移民の生活実態に関する資料の調査・研究

総括：細川周平・国際日本文化研究センター教授

②朝鮮半島における植民地統治および日本社会に関する資料の調査・研究

総括：松田利彦・国際日本文化研究センター教授

③中国全土における近代日本人の経済・社会・文化等の活動に関する資料の調査・研究

総括：劉　建輝・国際日本文化研究センター教授

▼実施機関：国際日本文化研究センター

④南北アメリカの移民関係資料ならびに移民社会に関する研究

総括：原山浩介・国立歴史民俗博物館准教授

▼実施機関：国立国語研究所

⑤ハワイと北米に渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究

総括：朝日祥之・国立国語研究所准教授

▼実施機関：東京大学東洋文化研究所

⑥近代日本文化財保護政策関係資料の調査と研究

総括：平勢隆郎・東京大学東洋文化研究所教授

▼実施機関：京都大学人文科学研究所

⑦植民地期台湾・「南洋」における日本人社会に関する資料の調査・研究

総括：籠谷直人・京都大学人文科学研究所教授

平成 26 年度は、引きつづき各現地調査を進めるとともに、7 月 11 日～12 日に国際共同研究会第１回「画像資料（絵葉書・地図・旅行案内・写真等）による帝国域内文化の再検討」を開催した。また、『満洲小事典』や旧植民地研究家故岡部牧夫の蔵書『岡部文庫』、そして『広辞苑』の編者である新村出がヨーロッパ留学した際の絵葉書コレクションなどの研究書籍・資料の執筆・編集を進めた。このほか、これまでに蓄積してきた研究成果（データベース含む）を日本の地域社会のみならず、世界の研究者へ向けて公開、発信した。

・ＥＡＪＲＳへの派遣・発表

例年継続的に参加しているＥＡＪＲＳ（European Association of Japanese Resource Specialists;日本資料専門家欧州協会）の総会（９月、ルーヴェンカトリック大学（ベルギー））に教員と資料課職員を派遣し、「近世史料・外書に基づく研究成果」に関する発表を行った。

・海外研究交流ネットワーク形成

①漢陽大学校比較文化研究所主催　国際会議

Beyond Korean Studie：From the Areal to the Transnational

開催期間：平成 26 年 7 月 11 日～12 日

開催場所：漢陽大学校（韓国）

②韓国日本研究団体　第３回国際学術大会　日本文化の現在的価値と日本研究　等

開催日：平成 26 年８月 21 日～22 日

開催場所：誠信女子大学校（韓国）等

③ヨーロッパ日本学会（EAJS）

開催期間：平成 25 年 12 月 20 日～24 日

開催場所：スロヴェニア・リュブリャナ

④日本研究会

開催期間：平成 26 年 10 月 18 日

開催場所：ペンシルバニア大学（アメリカ）

⑤ブカレスト大学日本研究国際シンポジウム
開催期間：平成 27 年２月 28 日～３月２日
開催場所：ブカレスト大学日本研究所（ルーマニア）
⑥アジア研究学会（AAS）
開催期間：平成 27 年３月 26 日～29 日
開催場所：アメリカ・シカゴ市
⑦Philosophy of Education Society of Great Britain
開催期間：平成 27 年３月 26 日～29 日
開催場所：オックスフォード大学（イギリス）

・翻訳出版協力プロジェクト

日文研では、平成 19 年度から日本文化の理解を助けるために日本語による文献（古典および近代の古典、改訳を含む）を諸外国語で翻訳し、当該国の出版社から学術出版する活動に協力しており、今年度は『漢訳　与謝蕪村俳句集』(与謝蕪村　著／王岩　中国語訳、人民文学出版社（中国　北京）)が刊行（27 年３月）された。

(3)研究者等の受入･派遣

外国の研究機関との関係構築を図り、以下のとおり外国人研究者の招へい、国内研究者の海外派遣を進めるとともに国際研究集会・シンポジウムの開催や参加を積極的に支援した。

・外国人研究員 28 名、外来研究員 38 名（日本学術振興会特別研究員（ＰＤ２名、ＲＰＤ１名）３名を含む）を受け入れた。
・複数の共同研究会に配置された海外共同研究員 32 名（インドネシア、カナダ、韓国、中国等）を本センターで行う共同研究会にのべ 28 名招へいし、研究発表等を通じて、国際的な共同研究会を実施した。
・専任教員を海外の日本研究機関等に派遣し、日本文化研究に関する国際的なネットワークの拡大と深化を図った。
・国際研究集会を開催し、第 46 回・第 47 回国際研究集会においてはそれぞれ４ヶ国から５名、９ヶ国から９名、計 14 名の国外研究者を招へいした。

(4)海外研究交流体制の充実

・海外シンポジウム等の実施運営を円滑に行うため、海外研究交流室長を中心にして、海外シンポジウムに繋がる海外研究交流ネットワーク形成に係る取組の強化を図った。
・海外研究交流室の事業として、海外研究交流シンポジウムを開催することで海外の日本研究者との連携・交流を強化するとともに、日本研究の情報収集・分析を進めた。

３．研究情報の収集・発信

（１）研究資料及び情報の収集・整理・保存

日本文化研究に関する学術文献・資料の収集、保存、活用及び加工編集並びに日本文化研究のための資料作成・ツール開発支援に有用な環境を整備・充実させ、収集資料等を高度化して世界に発信するため、以下の取組を実施した。

１）配分予算および優先順位を考慮し、段階的に環境整備を行った。また資料館 2 階の和図書（約 14 千冊）、外書館 3 階洋図書（約 5 千冊）など約 244 千冊を第３図書資料館（映像音響館）へ移動した。

２）これまでコンテンツ化を進めてきた日本研究基礎資料のデータベースのうち外像、古写真等 14 件について、日本研究基礎資料高度利用情報システム「KATSURA-Ⅱ」への移行作業を開始した。これにより、①個々の資料画像に固有の URL を与えて検索エンジン（Google 等）からの検索を可能とし、世界中の公開された研究資源等データと将来的にはリンクできる（リンクト・オープン・データ）RDF モデルへの移行　②資料画像の検索結果から本センターOPAC の蔵書情報への参照　③機構研究資源共有化統合検索システムへのデータ自動反映等、日本研究基礎資料の高度利用を実現する

「KATSURA-Ⅱ」計画の節目を達成した。

3）本センターの情報システムの基幹を担う「日文研情報システム」について、新システムへの更新・移行を実施した。新システムでは、遠隔地のデータセンターに設置したシステムへのデータバックアップを行うことにより、大規模災害や事故の際のデータ消失リスクを低減した。また、学術講演会等の映像発信を行うインターネット放送システムについてはモバイル端末にも対応し、認証系については、本センター情報システムのアカウントで外部学術 Web サービスにログインできる認証連携基盤（学術認証フェデレーション）にも対応し得るものとした。

4）本センター所蔵資料（貴重書、野間文庫、絵葉書、絵巻物他）や東京大学総合博物館所蔵「外邦図（朝鮮半島）」、その他日本研究基礎資料（摂関期古記録、古事類苑全文等）のデジタル化を実施するとともに、デジタル化した資料を順次データベースに搭載し、国内外に発信した。また、昨年度構築した、日文研所蔵等の中世禅宗関係文献を全文テクスト化し提供する「中世禅籍テクストデータベース」の外部公開を開始するとともに、井上哲次郎宛書簡のデータベースを公開に向け構築した。

5）外書の収集を体系的に行い、264 点を収集した。

6）日本研究資料整備の一環として、「風俗画資料」70 点、及び視聴覚資料 6,457 点の収集を行った。

7）未整理資料（文庫、視聴覚資料を含む）の 5,659 点の整理を行い、利用環境を整備した。

（2）研究成果の公開・発信

・出版物の充実をはじめとして、多様な方法を用いて、研究成果を広く国内外に公開・発信し、研究の促進をはかるとともに社会への貢献に努めた。具体的には以下のとおり研究成果を出版し、国内外の日本研究関連研究機関等へ配布した。

1）『日本研究』（日文研の専任教員、客員教員、共同研究員、外国人日本研究者等の研究成果を収録する日本語で書かれた原著論文集で、査読のうえ掲載）２冊

2）*Japan Review*（日本文化の研究に関わっている者なら誰でも投稿できる日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した外国語で書かれた論文集で、査読のうえ掲載）１冊

3）*Nichibunken Monograph*（日文研における研究活動のすぐれた成果で、既刊の著作の改訂または書き下ろした学術論文の英文モノグラフシリーズ）２冊

4）国際研究集会報告書（日文研が主催した国際研究集会において発表・討議された内容を収録した報告書。執筆者は国際研究集会参加者）１冊

5）海外シンポジウム報告書（日文研が海外において開催したシンポジウムの報告書）１冊

7）『世界の日本研究』（世界の日本研究の動向や海外研究交流室主催の在住シンポジウム報告等の不定期出版物）１冊

8）『日文研フォーラム報告書』（来日中の外国人研究者が日文研フォーラムにおいて日本に関連したテーマについて発表した研究成果を記録した報告書）２冊

9）共同研究成果報告書（日文研が主催した共同研究で発表・討議された内容を収録した報告書（商業出版を含む）。執筆者は研究発表者、代表者等）５冊

10）『日文研』（日文研の教員、共同研究員、外国人研究員等の活動状況を収録した広報誌）２冊

11）*NICHIBUNKEN NEWSLETTER*（日文研の教員、共同研究員等の活動状況を海外研究者むけに収録した英文和文併記の広報誌）２部

4．大学院教育への協力・人材養成

（1）大学院教育への協力

・総合研究大学院大学文化科学研究科の基盤機関として、国際日本研究専攻の大学院生に対して、教育研究の場を提供し、国際的・学際的な日本研究を進めるために、本専攻の特色である全教員が指導する単一の分野「国際日本研究」において、研究人材の育成を行った。また、共通必修科目として「日本研究基礎論」、「学際研究論」、「論文作成指導」を置き、国際的な立場から「日本研究」の理論的・方法論的な指導を行った。これらの研究と研究指導を推進することにより、創造的で高度な専門的視野と幅広い学際性、複数の専門を横断しうる総合性を備えた研究人材の育成を行った。

・名古屋大学をはじめ、４大学、４名の特別利用研究員を受入れて、専門的研究指導を行うことにより、大学院教育に協力した。また、大学院生５名を共同研究に共同研究員として参画させて、実践的な指導を行った。

（２） 人材養成

・若手研究者の育成を図るため、外国語資料の解読や古文書研究、中世文学講読など７テーマの基礎領域研究を設定し、所内において定期的に研究会を開催した。
・雇用した機関研究員７名、プロジェクト研究員５名及びリサーチ・アシスタント８名に対して、専用研究スペースの確保等の支援を行うとともに、研究プロジェクト等へ参画させて、育成等に取り組んだ。

５．社会との連携

（１）研究成果の還元

１）次のとおり学術講演会等を開催し、研究活動情報の発信を行った。また、所内開催の講演会はインターネット中継するとともに、過去の講演会をウェブサイト上にアーカイブ化し、常時閲覧可能にすることで、共同研究の成果を社会へ発信した。

《学術講演会》

・第 56 回学術講演会　平成 26 年６月 25 日
「日本映画の黄金期と斜陽期―テレビ産業との攻防の中で」
「文化の法律はどう作られるべきか？―著作権法を例に考える」
・第 57 回学術講演会　平成 26 年９月 25 日
「徳川将軍の外交儀礼　1857-1867」
「和歌をうたう―モダニズムとジャポニスムをむすぶ和歌歌曲―」
・第 58 回学術講演会　平成 27 年３月 25 日
「笠谷教授・末木教授・早川教授退任記念講演会―江戸を語る―」
「江戸時代の新しい歴史像を求めて」
「思想史からみた近世」
「江戸絵画に見る表裏一体の表現」

《公開講演会》

・公開講演会　平成 26 年 11 月 11 日
「映画史のなかの太秦」
・公開講演会　平成 27 年３月２日
「夢を観る／夢を聴く―夢の文化と芸術世界―」

《所外講演会》

・所外講演会　平成 26 年６月７日
「世界の中の日本研究―京都から語る―」

《公演会》

・伝統文化芸術総合研究プロジェクト公演会　平成 27 年２月 17 日
「能楽と西洋オペラとの統合の試み―楽劇『保元物語』をめぐって―」

《日文研フォーラム》

・来日中の外国人研究員の日本語による研究発表及び一般市民との交流の場として、11 回開催した。

《日文研・アイハウス連携フォーラム》

・多角的に現代日本や日本人についての理解を深めるための場を作ることを目的として、日文研の教員等が講師となり、公益財団法人国際文化会館（東京都港区六本木）と共同で実施した。
・第１回　「妖怪と日本人の想像力」
平成 26 年９月 19 日
・第２回　「越境する『大衆文学』の力―なぜ中国で松本清張が流行るのか」
平成 26 年 12 月 11 日

・第３回　「江戸時代にみるユーモア、パロディ、タブー―浮世絵と春画の社会的意義」
平成 27 年２月 12 日

２）大学共同利用機関協議会主催のシンポジウム（平成 26 年 11 月 22 日、東京国際フォーラム）において、センターの共同研究及び活動を紹介する展示を行った。

（２）地域社会との連携

１）一般公開を平成 26 年 10 月に実施し、次のとおり公開事業を行った。
- 「日文研外国人研究員大集合！――それぞれの日本研究――」
- 「所員の新刊図書を斬る！」
- シンポジウム「再発見・京のみやこ」
- 教員によるセンター施設案内
- 日文研所蔵資料の展示「日本・世界の古地図と木版源氏物語絵巻」
- 日文研データベースの紹介コーナー
- 研究活動紹介「共同研究のパネル展示」
- 日文研発行の出版物閲覧コーナー
- カレンダープレゼントコーナー
- 日文研教員の書籍販売コーナー
- 懐かしの映画上映コーナー

２）近隣の小学校に教員を派遣し、児童に対し、資料やスライドを利用して研究活動を分かりやすく紹介する出前授業を８講座実施した。また、近隣小学校の総合学習への協力として施設見学を受け入れ、質疑応答を中心に、センターの概要説明及び施設案内を行い、地域との連携を図った。

３）報道関係者との懇談会を４回（うち１回は東京都内）実施し、研究活動の紹介及び各種催し物の案内などの情報提供・意見交換を行った。

６. 業務運営･財務に係る取組

（１） 業務運営の改善及び効率化

［運営体制・研究組織の改善・見直し］

- 組織運営に研究者コミュニティ等の意見を反映させるべく、外部有識者の参加を得て、運営会議及び各種委員会を開催し、研究教育職員の採用・昇任、事業計画等の審議において活発な審議・意見交換を行った。
- 来年度の実施に向け、センターの中期目標期間の事業について、第三者の立場から評価し、研究水準の向上および組織の活性化に資する提言を行う外部評価委員会を組織した。
- 所長のリーダーシップのもと、研究活動等の推進及び戦略的な運営を図るため、重点的に取り組むべき研究活動等の推進事業 12 件に 11,768 千円、国際的な共同研究会等の推進事業 2 件に 3,000 千円を配分した。また、戦略的な運営事業として、浪曲資料の整理・目録登録事業に 5,500 千円配分し、合計 15 件 20,268 千円を配分した。

［人事の活性化］

- 人事交流については以下のとおり実施した。
  - 機構内　地球研とプロパー職員について１名派遣、１名受入
  - 機構外　京都大学から２名受入、大阪大学から２名受入

［事務等の効率化・合理化］

- 共同研究遂行上の諸手続について、これまで共同研究委員会の決議事項を一部見直し、手続きの簡略化を行うことにより、教員及び事務職員の負担軽減を図った。また、共同研究の公募案内の発送等を可能な範囲で業者委託することにより、事務の合理化を図った。

・大量に受入れた寄贈資料並びに韓国語・中国語の未整理資料などを迅速かつ効率的に目録登録を行う為、当該業務の外部委託を行った。
・平成 21 年 12 月からホスティング化したメールシステムについて、26 年度の維持管理を引き続き外部委託することにより、メールサーバの管理負担・維持経費の軽減と停電等によるメールサービス停止の防止に努めた。
・25 年度の、会議等のペーパーレス化に関する調査・検討結果を踏まえ、本年度から一部の会議において、電子ファイル化した資料を事前に会議参加者に配布した上で、会議事務担当が用意したタブレット端末での資料閲覧等とすることで、事務の効率化・合理化を図った。

（２） 財務内容の改善

[外部研究資金その他の自己収入の増加]

・事務部門で得られた競争的資金等の募集情報は、教員等に対して、速やかにウェブサイトや電子メール等で周知した。また、所員会議（9 月 18 日）において、本年度の科学研究費助成事業応募に係る主な変更点や留意点を説明し、積極的な応募を促した。
・公益財団法人京都市芸術文化協会等からの外部資金による「伝統文化芸術総合研究プロジェクト」が終了し、2,300 千円（10 年間で計 27,000 千円余）を獲得した。

[経費の抑制]

・定期的な清掃業務以外の特別清掃について、仕様の見直し、事務部からの人的支援並びに使用者への協力要請を積極的に行った結果、清掃費に係る金額を 479 千円抑制した。
・情報ネットワーク監視保守業務において、作業工程の見直しを行い、監視保守業務の簡略化・集中化による日数の効率的な削減を行った結果、500 千円抑制した。
・節電実行計画を策定し、周知を行った。また、北研究棟研究室空調機更新機器導入時は、既存機器よりエネルギー効率のよい機器を導入した。
・26 年度分の節電実行計画を策定し、啓発活動を行った。管理標準に沿って、空調設備等の運転管理に注意を払い稼働を行った。
・紙類・書籍等の廃棄について古紙回収（無料）を利用するよう所内で啓発を行い、廃棄物収集に係る金額を 614 千円削減した。
・電話回線契約について ISDN 回線からひかり回線へ契約を変更し、年間 1,202 千円の経費削減を図った。
・日文研独自の節電実行計画を策定し、ウェブサイトに掲載するとともに、教職員に対しては、日文研内部用のグループウェアに節電状況を掲載することにより、節電意識の啓発に努めた。
・管理標準の見直しを行い、更なる節電対策の推進に繋がるよう変更した。また、サーバ室の送電回路に電力監視モニタを設置し、電力使用状況の測定範囲拡大を行った。

[資産の運用管理の改善]

・施設利用委員会において、共通スペースの利用申請を審議し、再配分を行った。

（３） 自己点検・評価及び情報提供

[評価の充実]

・研究水準の向上および組織の活性化に資する提言を受けるため、外部有識者による外部評価委員会を組織した。
・各委員会の所掌業務について、委員会ごとに自己点検を実施し、課題の改善状況等について進捗状況の確認を行った。その際、外国人研究員へのアンケート結果を活用するとともに滞在中の外国人研究員に自己点検への参画を求め、業務運営等について幅広く意見聴取を行った。自己点検・評価結果は、センター会議に報告し、次のとおり機関の運営改善に活用された。日文研ハウスの居住環境改善（世帯用２部屋への床暖房設備設置、１部屋の内装更新工事の実施、電話設備の利用環境の検討）、研究環境の改善（北研究棟研究個室 27 部屋の空調設備改修の実施）
また、自己点検・評価結果は、センター会議に報告し、組織の運営改善に活用した。

［情報公開等の推進］

・平成 25 年度自己点検報告書をウェブサイトに掲載した。
・国立大学法人評価委員会による評価として大学共同利用機関法人人間文化研究機構の平成 25 年度に係る業務の実績に関する評価結果をウェブサイトにおいて公開した。
・『要覧』（和英併記）、広報誌『日文研』、*NICHIBUNKEN NEWSLETTER* の発行により内外への研究活動の情報公開に努めた。
・「一般公開」では、講演会、セミナー、貴重所蔵資料の展示、図書館及び研究室等の施設案内を実施し、研究活動の普及と情報発信の強化を図った。
・報道関係者との懇談会を４回（うち１回は東京都内）実施し、研究活動の紹介及び各種催し物の案内などの情報提供・意見交換を行った。

（４）その他の業務運営

［施設設備の整備・活用等］

・第３図書資料館（映像音響館）が竣工し、新たな研究環境の整備を行った。
・北研究棟研究室空調機更新を行い、研究個室環境の改善を行った。
・施設利用委員会において、共通スペースの利用申請を審議し、再配分を行った（再掲）。

［安全管理］

・教職員の緊急連絡先について、最新情報の把握に努めた。
・産業医による巡視を月１回実施し、安全衛生環境の改善・維持に努めた。
・本センターの消防計画に基づく防災教育の一環として、京都市の一斉防災行動訓練に参加し、職場で身を守るための行動、緊急速報メールの受信確認、緊急避難セット等の確認等の防災訓練を行った。また、西京自衛消防隊訓練大会に職員を参加させ、消火訓練を行った。
・教職員及び来訪者の安全を図るため、防犯カメラを複数台設置した。
・雇入時健康診断、定期健康診断を実施するとともに、裁量労働制適用者については、特に勤務状況、健康状態の把握に努めた。また、産業医による講演「皆さんの疑問に答えます！」を開催し、職員の健康上の疑問・不安に対する解説を行い、職員の健康意識の向上に努めた。
・情報セキュリティ対策基準及び実施手順書について、センター内グループウェアに掲載し周知するとともに、新採用職員のガイダンス等で配布している「事務案内」に情報セキュリティ上特に注意すべき事項を掲載している。また、昨年度末から、所内各所に情報セキュリティに関する注意点等を記載した文書を定期的に掲示し、教育及び意識啓発を図っている。

［適正な法人運営］

・新規採用教職員に対して、ガイダンスを実施し、法令遵守や情報セキュリティ等、教職員行動規範について周知した。
・所員会議（９月 18 日）において、会計制度等および「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン（実施基準）」に関する説明を行うことにより、改めて不正行為防止意識の啓発を行った。
・情報課係員１名を、文部科学省と国立情報学研究所との共催により開催されている「情報セキュリティセミナー」に参加させ、情報セキュリティ等の知識習得とその資質向上を図った。